やれば出来る英雄伝

黒崎ろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
やれば出来る英雄伝

【Ｎコード】
Ｎ５５２４Ｋ

【作者名】
黒崎ろう

【あらすじ】
「やればなんでも出来る力」を武器に、一人の青年が１２０万人の軍隊を壊滅させるために奮闘します。そういうお話です。興味のある方はどうぞ！

［1］やれば出来るようになった日（前書き）

初投稿です。優しい目で読んでやって下さい。

［1］やれば出来るようになった日

『昔昔ではないけれども、あるところにファンタジーかつＳＦな帝国が存在しました。

その国はとても栄えた国でしたが、数年前、帝国を守るべき軍隊が武力にものをいわせて国の実権を無理矢理握ってしまいました。

平和だったその国は一変、軍の圧力に怯えながら暮らさなければならなくなってしまったのです。

それから数年、軍は筆舌につくし難き非道の数々を日常的に行いつづけました。

人々はひたすらに耐えました。逆らえば殺されるからです。

軍の非道がエスカレートしていく中、人々は待っていました。

この地獄ともいうべき状況を打破してくれる英雄の登場を……。

と、いうわけで……。

君がその英雄になるのです！』

「……はぁっ！？」

今、素っ頓狂な声をあげた、俺、桐原慎吾、１７歳。

自宅のベッドでぐっすり爆睡眠中だったはずの俺は、いつのまにやら雲の上にいた。

最初は、落ちる！死ぬ！とか思ったが、まったく落ちる気配もなく、そうだ、これは夢なんだと納得した。

『さぁ！この国を救えるのは君しかいない！ＹＯＵ！ＧＯ！』

「よっしゃ！任しとけ！」

……。

「って、行けるか！いきなりそんなん言われて救いに行けてたまるか！ていうかここどこだよ！どこの上空だよ！」

俺がジタバタと動けない空の上で暴れてると、

『えー…ノリツッコミって……ていうかうるさいし』

ぬぼっ。

雲の中から黒い塊が飛び出してきた。

いや、塊じゃない、あれ髪の毛だ。長い黒髪の、あれは女性だな、若い、俺と同じくらいの、なんか見たことある服装だ。

と、俺が考えていると、その女の子はフワフワと浮きながら俺の方に近寄ってくる。

「あっ、巫女さんだ」

『違う。巫女じゃない。私は夢人（ゆめじん）だ』

と、目の前でフワフワしながら巫女装束の子がぼそぼそと言う。

「ゆめじんって……何？」

『読んで字のごとく夢に住まう者の事だ。時折こうして人の夢に不法に侵入する』

淡々と、ひたすらに淡々と語るゆめじんさん。

「不法にって……いいのかよ？」

『問題ない。どうせ誰も私を捕まえられない』

さいですか、まぁ、夢の中なら当たり前か。

「変な夢を見たもんだ」

ハァ、と一つため息をつく。

見るならもっと健全な青少年に相応しい、人には言えない内容の夢が見たかった。

『で、英雄になる気はないの？』

話が振り出しに戻った。

「ごちゃごちゃ言ったところで所詮夢だしな。いいよ、『英雄』なったろうやないかい」

俺がそう言うと、ゆめじんさんは少し顔をほころばせ、

『本当ですか。じゃあ、早速行って来て下さい』

「行くのはいいけど、行って何をすればいいの？」

至極まっとうな質問。それに対し、ゆめじんさんは、笑顔のまま答える。

『簡単です。帝国軍を潰して頂ければいいのです』

「軍を？どうやって？」

『もちろん戦って潰してください。１２０万人の軍ですから潰しがいがありますよ』

……はい？１２０…万人？

「ちょ！無理無理！そんなのどうやって潰せっちゅーねん！」

駄々をこねる子供のようにじたばたする俺に、ゆめじんさんは、更にグレードアップした笑顔で言い放つ。

『大丈夫です。あなたの体はやればなんでも出来る体になりましたから』

「答えになってない！なにその運動会の前に教師が言いそうな台詞は！」

必死。この2文字に背中を押されるように俺は訴えを続けた。が、

『これ以上は私が面倒くさいんで、とりあえず行きましょうか？』

ポンポン。腹立つくらい馴れ馴れしく肩を叩かれる。

「どこに！？」

『帝国に』

「どうやって！？」

『落ちればすぐです』

「落ちる！？」

『真下ですから。大丈夫、どんなに悲惨な落ち方しても死にはしませんから』

と言って更に笑顔。可愛らしい笑顔だ。だがそれが今は憎たらしい。

可愛い笑顔が憎い。悲劇だ。

「いくら夢だからって横暴が過ぎるよ！もうちょっと順を追ってだねぇ……」

『はい！文句はそこまで！とにかく行ってみましょう！』

ゆめじんさんは見事に俺の話を遮り俺の頭をぽんと軽く叩く。その次の瞬間、

ブォンッ！

ゆめじんさんが視界から消えた。とてつもないスピードで上に行ったように見えた。

……ちっがう！あっちが上に行ったんじゃない。こっちが下に、つまり落ちてるんですよ！

「うおぉぉぉ！！」

俺の体は雲を突き抜け更に落ち続ける。

だが、不思議なことに、落ちているという感覚は確かにあったが、空気の抵抗や風の感覚などはあまり感じなかった。

『スカイダイビングの気分はいかがですか？』

頭に中に響き渡るあのゆめじんちゃんの声。

「死ぬ死ぬ！このまま地面に叩きつけられて見るも無残に死んでしまう！！」

パニックのあまりの決めつけである。

『だーいじょうぶですから。死なないようになってますから』

なおもゆめじんはかるーく言い放つ。

「んだと無責任に言い放ちやがって!!ていうかてめぇどこから喋ってやがる!!」

落ち行く中、俺は、辺りを見回すが、特に巫女装束の姿は見当たらない。

『あ、探しても無駄ですよ。これテレパシーだから』

なんかこいつだんだんキャラ軽くなってないか?

「死んだら絶対てめぇを恨む!そして怨む!」

『はいはい。騒いでないで黙って落ちる』

「出来るかーー!!」

そこで俺の意識は吹っ飛んだ。あまりの事に脳が気絶を選択したようだ。

……。

…。

「……」

果たして俺は本当に死ななかったらしい。それどころか体中どこに

も痛みの感覚が無い。

「助かったのか…？」

俺はゆっくりとまぶたを開く。すると背の高い木とその葉、そしてその先に、さっきまで俺がいた青空が見える。そこで初めて俺は自分が仰向けに倒れているのに気付いた。

「で、ここはどこだ？」

俺は体を起こしつつ辺りを見回す。

木。そして木。一面の木。なるほど、ここは森か。

『そう、「アルバレオ帝国」西の都市、「ウォルテス」の更に西に位置する「サギーヤの森」ですよ』

唐突にゆめじん乱入。

「なるほどね、っておい、勝手に人の脳内に介入するなよ」

『まあまあそう言わず。無事に着いた事ですし』

「死ぬかと思ったけどな」

『死んでないんだから結果オーライです。じゃ、早速行きましょう！』

「……どこに？」

ガクッ。

なんだか脳の向こうで安っぽい肩を落とす音が聞こえた気がした。

『どこって……。国を救いにです！』

「空気読んでよ」みたいなゆめじんの語調。いやいや、こちとら予備情報ほぼゼロですから。

『いいですか？あなたをこの世界に呼んだのはこの世界を救ってもらうため。そしてそれに必要な力はすでにあなたに授けました。その力を使って存分にこの世界を救ってください。以上』

ものすごい量の情報を端折られた気がするが、なんかいちいち質問するのも面倒になってきた。でもまあ、これだけは聞いておこう。

「俺に授けられた力って何？」

『落とす前に言った力です。「やればできる力」これをあなたに授けました』

予備校のスローガンみたいな力だな。なんというか、曖昧な感じ。

「つまり、なにが出来るの？」

『やろうと思ったことは大概出来ます』

「普通に考えてあり得ないことでも？」

『あなた自身がやろうと望めば』

ゆめじんは軽く言い切る。それってとんでもない力なんじゃないか？

『嘘だと思うなら何か試しにやってみたらいかがですか？今の内に慣れといた方がいいですし』

「試す…ねぇ。本当に何でも出来んの？」

俺はどうせなら面白い事をやってやろうと考えを巡らしながら尋ねる。

『ええ。ですが、一つだけ注意してください。出来る事はとことん出来ますが、出来ない事はひたすら出来ないですから』

なんか突然予防線張られた。まぁ、いいや、やってみるか。

「すーはー……」

俺は2、3回深呼吸をすると、

「はっ！！」

叫んだ。叫ぶと同時に全身の力を爆発させる事をイメージした。

ズォンッ！！！！

出た。俺の体から衝撃波的なものが。

周りの地面はえぐれ、木々は一瞬にして薙ぎ倒される。

「すっげぇ…」

本物だ。本物の力だ。

俺は自分が力を手にした事を喜ぶと同時に、あんな適当な展開の末に力を得てしまっていいのかと少し遠慮みたいなものも感じていた。

と、俺が喜びと戸惑いの狭間で思考を巡らしていたその時だった。

「あっちの方からだ！先程の爆音はあっちから聞こえたぞ！」

声が聞こえる。もうすでに結構近い。

「やっばっ……！」

これは隠れた方がいい展開のはず。俺はそう考えて美を隠す場所を探す。

が、そうそう都合のいい場所なんて無い。

そうこうしている内に複数の足音が段々近付いてくる。

「どうにか……あ、そうか！」

……。

…。

それからすぐに、顔から爪先まで全身真っ黒な鎧のようなものに身を包んだ奴らが数人で現れる。

「やはり、ここで何かが爆発したのは間違いないようだ」

「おい、計測盤を持って来い！原因を調べる」

鎧の連中は慌ただしく動き回る。原因を調べるって……。俺、もしかしなくても軽率な行動した？

『ええ、かなり』

うるさい！お前が試せって言ったんだろう！

俺がゆめじんとテレパシーしてる間にも、鎧の連中はてきぱきと何かを調べる様子を見せる。

「魔力は計測されないとなると、固形爆弾による爆発といったところか」

「いや、そうだとしても爆弾の欠片一つ見つからないのはどういうことだ。こんなにきれいに吹き飛ぶものでもあるまい」

「いや、銃騎兵の連中ならば、そういった爆弾を開発し、実戦投入している可能性は大いにある」

鎧の連中は、俺の作った爆発後のクレーターを囲んで、がしゃがしゃ議論を始めてしまった。

しかし、このままいけば、俺、つまり未知の第三者は可能性に上がらずに済みそうだな。

「しかし、なぜそもそもこんな所で爆発が起こったんだ？」

ギックぅ……！

あー、そこ突いちゃう。突いちゃうのね。

「「確かに」」

あー、同意しちゃう？そりゃしちゃうよねぇ。

「銃騎兵の連中が演習を行った際の不発弾が今になって……ということは考えられないか？」

「「あーあるかもな」」

よし！よく分かんないけどナイス！そしてどうでもいいけどこの人達若干おバカ要素入ってないか？

「どちらにしろこの事は戻って報告しよう。場合によっては銃騎兵団の奴らを問い詰めねばならないかもしれないからな」

リーダー格？みたいな奴がそう言うと、鎧の奴らはゾロゾロと引き上げていった。

「……もう、大丈夫かな？」

奴らが去った事を確認すると、俺は、自分自身に掛けていた力を解いた。

「透明になろうしてすぐに出来るって、なかなか都合のいい力だな」

そう、俺は自分の体を透明にして、今までのやり取りを一応木に隠れつつ見ていたのだ。

「にしても、さっきの奴らは何だったんだ？」

黒い鎧で魔力がどうのこうのって……まさか！

『そう、そのまさか。奴らは帝国軍の魔術兵団所属の連中で間違いないですね』

「魔術兵団？さっきの奴らもなんとか兵団って言ってたけど……一体なんなの？」

『帝国軍には大きく分けて二つの集団が存在します。

まず一つ。先程の連中が所属する「魔術兵団」。名前の通り己に備わる魔力を用いて、魔法や魔術を駆使して戦う集団です。その数はおよそ２０万人

二つ目の集団は、「銃騎兵団」。魔術兵団とは異なり魔術の類を一切用いず、剣や銃などの武器を用いて戦う集団です。その数はおよそ１００万人』

ゆめじんはざざっと説明する。

「銃騎兵団の方が数は圧倒的だな」

『魔術兵団へ入るには、高いレベルでの魔力を保有している事が条件になるから、必然的に入団者への絶対数が絞られてしまうんです』

「なるほど、誰も彼もがなれる訳じゃないわけだ」

『そうです。銃騎兵団ならば年齢、体力など最低限の条件を満たしていれば入団できてしまいますから』

「軍と一口に言っても色々あるわけだ」

俺はふむふむと感心した。

『はい、軍に関する情報はとりあえずここまで。行きましょう』

「行くったって……どこに向かえばいいんだよ」

辺りは一面の木。他には何もない。

『空を見てください。ぼんやりと月が見えるはずです。その方向に進めば小さな町がありますからとらあえずそこに向かいましょう』

俺は空を見渡す。月、月……あった。あっちだな。

『ええ。行きましょう』

よし、と俺は偉大なる一歩目を踏み出した、次の瞬間、

「ちょい待って」

『へ？どうしたんですか？』

面食らったようなゆめじんの声。

「まず着替えさせて」

そう、俺は上下白の服、俗に言うパジャマ姿なのだ。というかパジャマなのだ。

『……はい、ご自由に』

かくして俺の冒険はパジャマから私服へと着替えるとこれから始まるのであった！

［1］やれば出来るようになった日（後書き）

文章がひたすらハチャメチャです。精進します。

［2］熊退治と新たなる出会い（前書き）

ベタに、唐突に。なんか色々詰め込んだ感が否めません。

［2］熊退治と新たなる出会い

Tシャツ（白）、ジーパン、スニーカー。俺は力を使い、この格好に着替えた。

自分的には普段着慣れている服なので、違和感は感じなかった。が、

『世界観が……』

ゆめじんにはこの格好はイマイチ納得がいかないみたいだった。

……。

…。

歩き始めて３０分くらい。まだ森を抜ける気配はない。

「どのくらい歩けば着くんだ？」

『そうですね、このペースなら2時間もあれば』

サラっと、あくまでもサラっと言うゆめじん。

「2時間！？なかなか道のりは長いようだな」

と、俺はここである事に気付く。

「力使えばさっさと行けるんでないの？」

初歩ともいうべき事に気付いた。

『ええ。行こうと思えばぱっぱと行けちゃいますよ』

「じゃあ早速ちゃっちゃと……」

『でもあまりオススメは出来ないですけどね』

「え？なんで？」

瞬間移動か高速移動か。どんな力がいいか探ってたのに。

『使い過ぎるとあなたの体力が浪費されてしまうからです』

「体力が？浪費されるんだ」

今までそんな感覚あまり無かったけどな。

『ええ。ですからもしここで力を使い果たして挙げ句目的地に着きませんでした、となっては大変だから私はあまりオススメしません』

なるほど、力にも容量というか限度があるわけだ。

「力ってそう簡単に使いきっちゃうもんなの？」

だとしたら結構困る。

『いえ、そんなことはないです。が、あなたは力を得たばかりでまだまだ不安定です。力の使い方によっては一気に消耗する可能性もあります』

「ふーん。力って増やしたり出来ないの？」

『力のキャパシティーは使っていれば自然に増えます』

「おー。そりゃ便利」

言いつつも俺は森の中を進む。

「にしても静かな森だな。動物とかいないのか？」

さっきからとにかく生き物を見ていない気がする。森なのに。

『この森はたまに軍が演習に使用したりしてますから。その影響でしょうね』

なるほど。よくよく木を見てると弾痕のようなものが付いた木がそこかしこにある。

「ふーん。まぁ、静かな森ってのは雰囲気あっていいけど、静か過ぎる森ってのは考えもんだ……」

「キャーーー！！」

空間をつんざく様な甲高い悲鳴。

前言撤回。突如うるさくなる森も考えもんだ。

俺は反射的に悲鳴のした方へ走った。

……。

…。

「やめて、来ないでぇ！！」

現場はすぐ近くだった。若い女性がデカイ動物に追い詰められてる。分かりやすいくらいピンチな状況だ。

動物は、身の丈3メートル程、見た目はまんま熊。が、顔が若干狼？犬科な感じだった。

『ベアウルフ。狂暴な肉食獣よ』

「見たまんまだなこんちくしょう！」

女性の方を見ると、腰が抜けてしまったのか、しりもちを付いた態勢のまま、動けずにいる。

「やっば！なんとかせねば！」

俺はこの状況を打破する方法を脳内フル回転で考える。

「……」

結論はすぐに出た。

「あっちの熊さんにはご退場願うしかないみたいだな」

俺は、考えるより先に動いていた。

ザザァッ……！

「え？…だ、誰…？」

熊と女性との間に仁王立ち。よし、ここまでは良いだろう。

「下がってて下さい！こいつは俺が何とかします！」

教科書通りな台詞。正直、言ってちょっと気持ちいい。

「グゥォォォォン！！！！！」

だが、ベアウルフさんはそんな俺の晴舞台を待ってはくれなかった。

ベアウルフは大きく腕を振り上げる。

その手の先には、鋭く太い爪。

それが、今まさに俺に向かい、振り下ろされる。

「キャァッ！！」

女性の悲鳴。俺がやられたそういう悲鳴だろう。

だが、それには及ばない！

「ガ……ガゥ……」

ベアウルフが力ない泣き声を上げる。

奴の爪は俺の胸をえぐるどころか、なぜか俺の胸に当たるなりボロ

ボロに折れてしまったからである。

「ふっふっふっ……」

理由は簡単。俺が力を使い、自分の体の硬さを、鋼鉄にしたからである。

いくらなんでも鋼鉄はえぐれまい！

「隙有りだ！」

俺は戸惑うベアウルフの顔面に、鋼鉄の硬度そのままにストレート一閃、拳をぶつける！

ガキッ！

俺の拳は奴の鼻っ柱を捉えた。が、いかんせん俺自身の力が足りなかったらしい。ベアウルフは少しひるんだが、なおも俺に向かってこようとする。

「させるか！」

ならば、攻撃にも力を乗せるだけだ！

「いくぞ！衝撃波！」

俺は拳に力を溜める事をイメージし、その拳をベアウルフのボディーに思い切りぶちこんだ。

ズッドォォォン！！！！

「ガルゥウァァァ……！！」

予想以上の威力。俺の拳から放たれた衝撃波は、ベアウルフを軽々と吹き飛ばし、辺りの木々もついでに薙ぎ倒してしまった。

「すっげ……」

もはやベアウルフは吹き飛び過ぎて姿すら見えない。俺は改めて自分の力の大きさに驚かされた。

「……と、そうだ、あの女の人は……？」

俺は思い出して後ろを振り向く。そこには、しりもちを付いた姿勢は変わらず、真ん丸く見開いた目で俺を見ながら固まる女性の姿があった。

「大丈夫ですか？」

俺は女性に手を差し伸べつつ尋ねる。

「え？……ええ、大丈夫…です」

答えつつもまだ放心状態といった感じだった。

……ッ。

「う……ぁ……」

突然、目の前が霞み、尋常じゃないくらい脳がぼわんとする。

駄目……だ……。立っ……て……られ…。

ばたんっ。

俺は、崩れ落ちた瞬間、自分の意識が吹き飛ぶのを感じた。

……。

…。

あれからどれくらい経っただろうか。俺は、自分の意識がぼんやりと回復していく中で、今までの事を思い出す。

あの変な巫女装束のゆめじんに突然変な事言われて落っことされて。

落ちるなり帝国軍に発見されそうになり。

森を歩いてたら狼みたいな熊に襲われてる女性がいたから、助けるために戦って……。

！

俺、その後どうなった！？

俺は、暗闇の中をもがくように自分の意識を無理矢理取り戻し、やけに重たい目蓋をこじ開ける。

「……」

茶色い。目蓋を開けたはいいが、こうも一面茶色なのは考えものだな。

が、少しずつ視界がはっきりし、脳が覚醒していくにつれ、茶色いものはつまり木の天井で、俺はどこかに横たわっていることに気付く。

……ベッド？

ふかふかとした感触。これは間違いなくベッドの上だ。

……どこの？

俺は森で倒れた。つまり誰かが運んでくれた？

と、俺が回らない頭をむりくりかき回して考えていると、

「あ、目が覚めましたか？」

女性の声だ。どこかで聞いたような……。

俺はゆっくりと体を起こして、声のした方を見る。

「……あ」

そこには、ベアウルフに襲われかけていたあの女性がいた。

ん？するってーと、ここは彼女の家かなんかか？

と、俺がなおも考えていると、

「突然倒れたんでびっくりしました。気分はいかがですか？」

「……え？…あ、ああ、大丈夫。ちょっと貧血のようなものを起こしてね」

嘘は付いてないはず。おそらく『エネルギー切れ』で倒れたんだろう。

「そうでしたか。あっ、先程は危ないところを助けていただいてありがとうございました」

と、丁寧に９０度お辞儀。

「いやいや、たまたま通りかかってね……ともかく無事で良かった」

こうなると照れくさいものよのぅ。

「はい。あ、申し遅れました、私、シオンと申します」

と、シオンは再び深々とお辞儀をする。

「……あ！えーと、俺の名前は桐原慎吾。シンゴって呼んで」

「はい、シンゴさん」

きらりと輝くシオンの笑顔。

うーん、可愛い。文句なしに。

ベアウルフと戦った時は半ばパニック状態でろくに見れなかったが、こうして落ち着いて見てみると、

少し茶がかったショートヘアーに端正な顔立ち。白いワンピースを着ているのだが、これが幼過ぎず大人過ぎず、彼女の清純な感じを引き立てていて……。

いい！

年も俺と同じくらいかな？

と、俺が気持ち悪い分析を走らせていると、

「あの、シンゴさん？」

「え？…あ！はい！」

呼ばれている事に気付いてなかった俺。

「温かいお茶が用意できますけど、飲みますか」

あぁ、この笑顔。癒される。

「はい……」

……。

…。

お茶を飲んで一息ついた俺は、シオンに様々な事を尋ねた。

「ここは、サギーヤ湖畔の町、『サギルタ』です。主に森での林業と湖での漁業で成り立っている町です」

「へー。この町にも帝国軍っているの？」

「はい、この町の監督官とその部下、大体２００人程ですね。って、そんなこと聞いてどうするんですか？」

「いやいやー、なんとなくね」

２００人か。やってやれない人数じゃないだろうが。いかんせんまだ力の容量が足りない気がするし、どこかで練習を積みたいな。

「そういえばこの家って他に誰か住んでないの？」

この家、ざっと見ただけでも４、５部屋はある。一人暮らしにしちゃ広過ぎるだろう。

「以前は両親と暮らしておりましたが、色々と事情がありまして、今は私一人です」

どこか悲しげなシオンのトーン。

「……！、ごめん。嫌な事聞いちゃったかな？」

俺が両手を合わせて謝ろうとすると、

「いえ、なにも死んでしまったわけではないので、大丈夫です」

「あ……そうなんだ」

……。なにやら気まずい静寂が空間に広がっていく。

何か喋った方がいいかな？と、俺が当たり障りの無い話題を探し始めた時だった。

ガンガンガンッ！

シオンの家のドアが激しく叩かれる。

「シオンー！いるー！」

次いで女の声。

「はい。今開けます」

シオンはすぐにドアを開ける。すると、そこにはシオンと同い年くらいの女の子が、走ってきたのだろうか、息を切らしながら立っていた。

「どうしたの？クルク」

クルクというその女の子は、息を切らしながらも、赤い髪のポニーテールをぶんぶん揺らしながらシオンの両手を必死の形相で掴む。

「あのっ……子供が…う、うま……腰が…！」

言葉が断片的過ぎてよく分からない。それはシオンも感じ取ったんだろう。

「落ち着いてクルク。一体どうしたの？」

シオンに言われて、クルクという少女は、２回程大きめに深呼吸すると、なんともでかい声で話しだした。

「リュナさんがさっき突然産気付いちゃって、で、カントの婆さんに取り上げてもらおうって事になったんだけど、婆さんが腰痛めて動けないらしくてね。で！代わりにシオンを呼んでこいって、だから来て！」

一息に状況を説明した。

「え…えぇ！？なんで私なの！？」

明らかに戸惑うシオン。

「だって、あんた医者の免許持ってるんでしょ？」

「だけど私が持ってるのは外科手術の免許よ！出産は専門外よ！」

「同じようなもんだよ！とにかく来て！」

と、クルクはシオンの手を強引に引っ張り連れていこうとする。

「え！ちょっ、ちょっと待ってよ……！」

シオンはちらりとこちらを見る。それに合わせてクルクも（初めて）こちらを見た。

「あ……」

動きが止まる。そして、シオンと俺とを交互に見る。

「あら、お邪魔しちゃったかしら？」

「いやいやいや！」

「違うの！そういうことじゃなくてね！」

二人揃って必死の否定。

「え、えーと、すいません！シンゴさん！私ちょっと行ってきます！」

「あ、う、うん！行ってらっしゃい！頑張って！」

なんかもうよく分からないが、とにかくシオンは先程とは逆に、クルクを押し出すように家を出ていった。

途端に静まり返る空間。

「……俺、何やってんだろう？」

『……が……きこ…ここ……』

ビクッ！何だ！変な声が聞こえてくるぞ。

『へん……と……失礼…ね』

ん？だが、この声どこかで聞き覚えが……。

『……私ですよ』

この声。ゆめじんか！

「おお！あんたか！長い事聞いて無かったから忘れてたよ。」

存在とか。

『いきなり失礼極まりないですね』

「てか、お前今までどうしてたの？」

『カッチーン！それはこっちの台詞ですよ！こちらはあなた探すのにどれだけ苦労したと思ってるんですか！！』

ゆめじんの語気が一気に強まる。

「探す？どういう事？」

探すも何も、これはテレパシーじゃなかったのか。

『はぁ……。いいですか、私のこのテレパシー能力は、あなたの力を媒介して行ってるんです』

ほうほう。

『なので、あなたが力を使い切ってしまうと、そこでテレパシーは事実上不可能になってしまうんです』

へー。

『へーって。私のテレパシーは一度対象を失うと再び対象を定めるのに結構な手間が掛かるんですよ！』

そうなんだ。

『しかも、失ってる間はあなたの位置も分からないので、今回みたいに豪快に移動されてると、もはや一からやり直しっていうか……とにかく面倒で大変なんです！！！！』

怒った。いつも割と淡々と喋るゆめじんが激しい口調になってる。

「す、すいませんでした」

謝ろう。とりあえず謝ろう。なんだか知らないけど大変だったみたいだから。

『はぁはぁ……。とまぁ、ここまでが私個人の愚痴です。本題はここからです』

ゆめじんが一瞬でいつもの冷静さを取り戻す。なかなかタフな奴だ。

『これからの事についてです』

「これから？」

『そうです。あなたにはなるべく一般市民には危害が加わらないように慎重に行動していただく必要があります』

「言われなくともそのつもりだよ。軍だけ倒せばいいんでしょ？」

『あなたの為すべき事はそれで間違いありません。が、やり方を間違えれば、被害は市民に及んでしまうのを覚えておいて下さい』

「え？なんで？」

『例えばこの町の軍をあなたが潰したとしましょう。すると、それを知った軍は援軍をこの町に寄越すでしょう』

「ふんふん」

『軍は犯人を捜すために手段を選びなどしないでしょう。過去に、別の町で、軍の将校が狙撃された事件があり、その町は、見せしめとして町ごと破壊され、地図から消えた…という事がありました』

「ひっど…」

『なので、この町に同じ運命を歩ませないためにも、慎重を期するべきなんです』

「な、なるほどね…。ていうか軍は町一つ潰して大丈夫なの？さすがに非道が過ぎるんじゃ…」

『「反乱分子の根拠地」として軍はその町を処分しました』

「うわぁ……教科書通りにもみ消したわけね」

『なので、力に任せて無謀な行動に出たりしないでくださいね』

「りょーかい。しかし、じゃあ、目下のところ動きようが無いな」

『町に駐屯する軍を叩くより、独立した軍の基地を叩くべきだと、私は思います』

「なるほど。ま、慌てずのんびり行こうか」

『そうですね。そうだ、今の内に力のコントロールを練習したらいかがです？』

「そうだな。そうするか」

俺は立ち上がり、適当な力をイメージする。

「……ふんっ」

フワッ。

俺の体が２０センチ程中に浮いた。

「おー、出来た！半重力」

プカプカと、確かに俺の体は浮いている。

「全人類の夢をいち早く叶えてしまったよ……」

『はい。色んな力を使った方が効果的ですから、次いってみましょう』

「ドライだねぇ、君は」

『私元々浮いてますし』

「……あっそ」

……。

…。

その後も色んな力を試した。

手から電撃出したり口から火を吹いたり、両目を意味なく光らせてみたり。

とにかく簡単に思い付く力を片っ端から試した。

「うーん、楽しいねぇ」

こんなにも簡単に色々出来てしまうと、なんだか自分が超人になった気さえする。

『いや、なってますから』

「あっ、そうか」

『……。まぁ、今みたいに日常的に力を使っていれば、力は自然と増大していきます。なので、少しずつ力を使っていく事に慣れましょう』

「うむ。そうしよう」

と、俺が未来の大超人への一歩を踏み出した次の瞬間だった。

ドォンッ！

突如響き渡る衝撃音。

この音、銃声！？

「一体何が…！？」

俺は外に様子を見に行こうとする。

『シンゴさん！』

ゆめじんに今までにない鋭い口調で呼ばれる。

「なに？」

『分かってますね。もし、トラブルがあったとしても…』

「分かってる。変に手を出したりはしない」

俺は言うなり家を飛び出した。

外に出ると、すぐに騒ぎの中心は見つかった。軒先に魚を並べた店から、黒煙が上がっている。店の前には店主とおぼしき男と、黒い軍服に身を包んだ3人の男。

その帝国軍であろう軍服の男達は、なにやら店の主人に因縁を付けている様子だった。

「おい、てめぇ！今俺の事見て笑ったよな…」

チンピラか！安い喧嘩の売り方だな。

「俺の右手のバズーカを見て笑ったよな！」

チンピラじゃねえ！なんだあれ！

軍服のリーダー格と見られる男は、自分の右手を掲げながら言った。
その右手は筒上になっており、その先からは黒煙がでている。

「俺を“大砲のガヤク”中尉と知っての大爆笑なんだろうな」

俺が遠巻きに様子を見ていると、

「いい加減にしてくれ！俺はあんたらの事見てもいないしバズーカを笑ってもいない！これ以上うちの店をメチャクチャにするのはやめてくれ！」

店主は一気にまくしたてて反論する。

「あ？反論とはいい度胸だ」

軍服は口元に笑みを浮かべると、右手を店主に向けて構える。

「その勇気を讃えてもう一発派手に大爆発起こしてやるよ！」

ヤバイッ！俺は駆け出そうとする。

『ダメです！堪えて下さい！』

「人が殺されそうなんだぞ！耐えるもくそもあるか！」

『もっと先を、大局を見て行動して下さい！』

俺もゆめじんも一歩も引かない。が、その間にも事態は進む。

「ぶっ飛べやぁ！！」

もう駄目か！俺がそう思った時、

「やめて！！」

辺りに響き渡る甲高い声。

見れば、店主とバズーカ男の間に、女が立っている。

「シオン…！」

シオンは両手を広げ、その場に立っていた。

「あ？おい女。何のつもりだ？」

「軍がこんな非道な振る舞いをして、許されると思ってるんですか？」

「……それだけ？」

「え……？」

予想外の言葉が返ってきた。明らかに困惑する様子のシオン。

「言いたいことはそれだけかって言ってんだよ！」

バズーカ男は突然バズーカを横に凪ぎ払い、シオンを突き飛ばした。

「！！」

後で思えば、俺の中の「何か」が無くなったのはこの瞬間だろう。

『ちょっ！待ってください！シンゴさん！』

ゆめじんの言葉など耳に入ってなかった。

「いちいちうるせーんだよ。何も出来ねぇ脆弱な連中が、口だけは一丁前に聞きやがる。てめぇらの口先だけのご立派な正義感を聞いてるとよぅ…」

バズーカ男は照準をシオンに合わせる。

「虫酸が走るんだよ！」

ドォンッ！

衝撃音。

だが、今度は銃声ではない。では何の音か？

答えは簡単。俺がバズーカ男を渾身の力で殴った音である。

吹っ飛ぶバズーカ男を見つつ、俺は意外に冷静に、自分自身にこう言い放った。

「もう、後には引けない」と。

［2］熊退治と新たなる出会い（後書き）

次回より、本格的に戦闘に突入！したいです。

［3］バズーカ男ｖｓやれば出来る男

バズーカ男が吹っ飛び、弧を描いて数メートル先の地面に着くまで、実際は1秒位だろうが、俺自身には数十分の長き時間が過ぎたように感じた。

そして、その時間の中で、周りの空気が、人々の俺を見る目が、変わっていくのを感じた。

ドフゥッ…！

バズーカ男が地面に倒れ落ちる。

俺は殴り飛ばした拳を見ながら、自分の中の熱さのボルテージが上がるのを感じた。

『知りませんよ…どうなっても』

さじを投げた様子のゆめじんなんか気にしない。

「どうなろうと俺がきっちり責任とる。そのための力なんでしょ？」

『……』

「それに、国を救うって言ってる奴が目の前の人間救えなくちゃダメだろ」

『……はぁ。もう、好きにしたら』

「言われ無くとも！」

俺は、バズーカ男の後ろにずっと控えてた2人の軍服を睨み付ける。

「き、貴様……！帝国軍銃騎兵団に対するこのような振る舞い！ただではすまさぬぞ」

軍服の一人が腰の拳銃を引き抜きつつ強い語調で言う。

もう一人もそれに倣うように、拳銃を俺に向ける。

「うるせーな。えいっ！」

俺は2人の拳銃に念のようなものを送り、

グニャッ。

銃口を９０度くらいひん曲げてやった。

「なっ……！」

イッツァイリュージョン！チップはポケットにお願いします。

「き、貴様っ！何者だ！？」

完全に声が上ずってる。そしてその拳銃向けられても怖くないってば。

「名乗る程の者ではないはず！」

自信はない。

「じゃあ墓には名前は彫らないでいいんだな……！！」

怒気に満ちた声。バズーカ男だ。いつのまにか立ち上がり、怒りすぎて笑いが止まらない、みたいな愉快な顔でこちらを見ている。

「てめぇ、俺たちに楯突いた奴がどんな末路を迎えるか知らねぇようだな……」

ゆらりっ。バズーカ男は不敵な笑みを浮かべる。

「さぁ？どうなるの？」

「へっへ……。こうなるんだよ」

ドォンッ！

バズーカが発射され、真っすぐにこちらに飛んでくる！

「死ねやぁぁ！！」

俺、万事休すか！？

なんちゃって。

「ストップ！」

キキィッ。

俺のすぐ手前まで来ていた砲弾くんは、ピタリと空中で停止する。

「へ？」

バズーカ男他、その場の全員が、何が起こってるのか分からないという顔。

「回れ右！」

クルッ。

砲弾くんは１８０度向きを変える。

なおもぽかんとしているバズーカ男。すぐに俺が何をする気かに気付くが、時すでに遅し。

「Ｇｏ！！」

従順なる砲弾君は、元の主人に向かって全速力で飛んでいった。

「エェェェェ！！？？」

バズーカ男の悲鳴がこだました次の瞬間、

ドゴォンッ！

着弾。バズーカ男は爆風に包まれる。

「よーし、やれば出来るもんだ」

俺、ガッツポーズ。

さて、残りの軍服は、今撃ったら確実に暴発するであろう拳銃をこちらに向けつつも、ジリジリと少しずつ後退していた。

「き、貴様んっ！魔術師か！？」

「いいえ」

当方ただの一小市民です。ていうか貴様んって。

「ならば今の奇怪な術はなんだ！」

「超能力……だな」

間違ってはいないはず。

『あってもいないですけどね』

うるさい。

「で、お前らもやる？今なら優しくこてんぱんにしちゃうけど」

ちょっと格好つけ。だが、軍服達は今にも逃げ出しそうになっている。

そんなに怖いか？俺。

「出来るもんならしてみろやぁぁぁぁ！！」

「！？」

背後からの不意の攻撃。

「ぐぁっ……」

反射的に避けようとしたが、避け切れず肩に痛みが走る。

「はっはぁ！！どうだ！痛いか！そお痛み、存分に味わいやがれ！」

バズーカ男の攻撃。右手のバズーカの砲塔部分に、ナイフを仕込んでいたらしい。肩が切られ、血があふれ出る。

「軍人でもなんでもないてめぇらみたいなゴミ共はおとなしく俺たちに従って生きてりゃいいんだよ！」

カチンッ。

「お前、それ、俺に言ってんのか？それともここの町の人たちにも言ってんのか？」

「は？この町の生意気なゴミ共に言ってるのに決まってるだろうが……！」

「……そうか」

なるほど、だから平気で町の人達を脅したり傷つけられるってわけだ……。

……って、

「何調子に乗ってんだよ変態バズーカ野郎」

俺の怒りを素直に言葉に乗っけてみました。

「何だと……！ぶっ殺すぞこの野郎！」

バズーカ男は、仕込みナイフを俺に突き刺した！

ガキッ…！

「え？」

カラン。ナイフは根元から折れ、地面に落ちる。

「残念だったな。怒りのあまり俺の体は鋼鉄になっちまったらしい」

「ば、バケモンがぁ……！」

バズーカ男はそれこそ化け物を見るような目で俺を見る。

「化け物結構。てめぇみたいな人をゴミ扱いする変態よりは随分マシだ」

俺はバズーカ男のバズーカを掴むと、渾身の力で砕き割った。

「のぉぉ！！？？俺のバズーカが！？」

「うるせぇ！！帝国軍がどれだけ偉いかは知らねぇが、武力を、いや！暴力を以て人々をゴミ扱いするお前らは……！！」

俺は、両手をバズーカ男、いや、最後くらい名前で呼んでやろう。ガヤク中尉殿の両肩に置いた。

「ゴミ以下だ！！」

ズゴォォォンッ！！！！

重力の一撃。ガヤクの体に、通常の何倍もの重力をかけた。

結果、ガヤクの体は一瞬で地中に沈んだ。頭を残して。

死んではいない。が、気絶していた。俺はそれを確かめると、さっきから腰だけ引けた変な態勢で突っ立っている2人の軍服の方を向き、

「まだやる？」

口元に笑みを。目には殺気を。多分すごい顔になってるはず。

「お、覚えておくがよい！」

だから声震えてるし上ずってるよ。

指摘するよりも早く2人の軍服はその場から走り去った。

ガヤク中尉殿を置き去りにして。

仕方ないので中尉殿は俺が引っ込抜いて邪魔にならない隅の方に置いといた。

「ふぅ……」

終わった。やり方には大いに問題はあったろうが、自分の力でこの事態をどうにか出来たというのは事実だ。

本当に人間やれば出来るもんだ。

「あっ、そうだ…」

俺はクルリと後ろを向く。そこには、ガヤクに突き飛ばされたままの格好でポカンとこちらを見るシオンの姿。

「大丈夫？」

「……え？」

「怪我とかしてない？」

「……あ！大丈夫です！元気です！」

元気なら良かった。

俺はシオンに手を貸して立たせようとするが、その途中、辺りが妙な空気に包まれている事に気付く。

人が、離れていく。というか各々家に戻るなり散っていく。店主のおっさんもいつの間にかいなくなってる。

「やっぱり俺、やばいことしちゃったのかなぁ……」

『しました。どうやばいのか説明するのも面倒なくらいしました』

ゆめじんも声だけでも不機嫌だと分かる。無理もないか。ゆめじんは必死に俺を止めたわけだし。

「……まっ！やっちまったことをぐだぐだと言っても始まるまい。これからどうするかを考えようや」

『……どの口がそんな事を、と言いたいところですが、確かに早急にこれからの事を考える必要がありますので、しばらく私は1人で考えたいと思います』

おれの楽天的な口調が気に入らなかったのか、ゆめじんは一方的にそう言うと、そこから本当に喋らなくなってしまった。

「あらら、怒らせてしまったかな」

「あの……」

「まぁ、でもあっちはあっちで考えるって言ってんだしこっちもこっちで動いてみるか」

「あの……！」

「……え？」

見れば、俺の顔を不審そうに見つめるシオンの姿。

やばっ。俺、完全に怪しい奴だったんでないか？

「なにやらブツブツと喋っていましたが、どうかしたんですか？」

予想どおりの質問。

「独り言です」

ベタ。ＴＨＥ・ベタ。

……。

…。

「あたたた……」

「大丈夫ですか？」

「あー、ちょっと痛むだけ。だいじょぶだいじょぶ」

俺はシオンと共に家に戻り、シオンから肩の怪我の処置をしてもらっていた。

「にしても手際がいいもんだ。さすが外科医師」

傷の消毒から包帯を巻くまで、一切の無駄が無かった。それでいて、途中で「大丈夫ですか？」とか、「きつかったら言ってくださいね」とか小まめに俺を気遣ってくれる。流石だ。

「書類上の話です。それにこの程度でしたら一般常識のレベルです」

苦笑い。シオンは謙遜というより本心でそう言っているのだろう。

「でも、実際医者の免許なんて簡単に取れるものじゃないし、今日だって子供取り上げに行ってたじゃん。……そういえば、どうだったの？」

色々ありすぎてすっかり忘れてた。

「無事に生まれました。男の子でした」

にこりと笑顔。

「おぉ！そいつはめでたい。これはシオンの功績だね」

「いえ、リュナさんの頑張りのお陰です。私はそれを少し手伝ったに過ぎません」

うーん。遠慮深いねぇ。でも、それがシオンのいい所なのかもしれないな。

「はい、これで大丈夫です」

シオンは包帯の端を縛ると、医療道具を片付け始めた。

「いや、そのリュナさんって人も勿論凄いけど、シオンだってかなり凄いって」

俺はきれいに巻かれた包帯を触って確かめながら言った。

「ありがとうございます」

シオンは少しだけ、誇らしげな笑みを浮かべた。

ドンドンッ。

家のドアが叩かれる。

「はい」

シオンがドアを開けると、そこには、あの襲撃を受けた店の店主が立っていた。

「ガモンさん！お店は大丈夫ですか？」

店主のガモンさんとやらは、ニッカリと笑顔を浮かべると、

「棚を一個やられただけだから全然大丈夫。それより、あんたらに詫びと礼がしたくて来たんだよ」

「え？」

「いやぁ、さっきはさっさと店の中引っ込んじまって悪かった。と、さっきは助けてくれてありがとう」

そういってガモンさんは深々と一礼。この町の人はお辞儀が丁寧だな。

「いえ、私は何も……。救ったのは彼ですから」

シオンの視線に促され、ガモンさんもこちらを見る。

「おお！お前さんのお陰で助かったよ。ありがとう」

「い、いやぁ、私はただあいつがムカついてやっちゃっただけですから」

「いや！やろうと思ってなかなか出来る事じゃない！それにあんためちゃくちゃ強いみたいだしな」

「ど、どうも……」

なんかここまで言われると照れ臭いな。

「シオン！お前いつの間にこんなに頼りになる旦那見つけて来たんだよ？」

……ピキッ。

俺とシオンは明らかに“その”単語に反応する。

「いえいえ、私はそういう者ではないんです！」

「シンゴさんとは知り合ったばかりでそういった関係では……！」

同時にまくし立てる。なんだろう、ちょっとしたデジャブだ。

平和な一時。こうして俺の初めて尽くしな一日は幕を閉じる。

はずだった。

［4］人間は他人の言葉に影響されやすいという事（前書き）

なかなか話がまとまらずなんだかなぁな感じになっちゃいましたが。

とりあえず元気よく行きましょう！

４話です！

［4］人間は他人の言葉に影響されやすいという事

―サギルタ・帝国軍駐屯所―

「だぁっ！！くそっ！！面白くねぇ！！」

ガヤクは駐屯所に戻るなりその辺に置いてある木箱やら花瓶やら手当たり次第に蹴っては壊し殴っては割っていた。

ガヤクは、シンゴとの戦いの後、意識を取り戻してから自力で戻ってきたのだった。

「あの野郎……。ただじゃ済まさねぇ」

ガヤクの頭の中には世にもおぞましい復讐のシミュレーションが何度と無く再生されていることだろう。

が、右手のバズーカが破壊されてる今の状態では、すぐに打って出ることは出来ない。その事が更にガヤクを焦らせる。

「また派手に暴れたそうだな」

暴れるガヤクの元に、スキンヘッドに白い口髭を生やした貫禄十分の男が現れる。

「デイク……か」

「おいこら、上司にタメ口聞くなって何度も言ってるだろうが、それに『デイク大尉』と尊敬の念を込めて呼べと言うとろうに。まっ

たくお前は普段から帝国軍銃騎兵団中尉としての自覚が足りないと、いつも口を酸っぱく、これでもかと言うほど酸っぱく言っている……」

「説教はもううんざりであります。デイク『大尉』」

これ以上ないという程嫌味たっぷりなガヤクの言葉。わざとらしく敬礼も付け加える。

「……まったく。よいか！お前の地位と普段の振る舞いが許されているのは貴様が軍の計画に必要な人間だからだ！その事を忘れるなよ」

デイクの厳しい口調。しかし、ガヤクは聞こうともせず、部屋を出ていこうとする。

「その台詞は聞き飽きた。じゃあな」

ガヤクは部屋の扉を開け、外へ出ていく。

デイクはそれを背中で感じつつ、目はじっと前を見ていた。

「奇怪な術を使う男か……。なんとかしておいた方がいいかもしれんな。明日にはあの方がこの町に入られる……」

デイクの目は、じっと部屋の窓、そして窓から見えるサギルタの町並を見つめていた。

……。

…。

―サギルタ・シオンの家―

「ごちそうさま！いやー、おいしかったよ！」

さてさて、私桐原慎吾は、シオンが作った夕食に舌鼓を打っていた。

「ありがとうございます」

シオンは空いた食器を片付けつつ笑顔で応えてくれる。

「おっと、俺もやるよ」

「いえ、シンゴさんは休んでて下さい」

「いや、でも……」

立ち上がろうとする俺を制するシオン。

「今日は危ない所を2度も助けていただきました。このようなおもてなしがお返しと言えるかは分かりませんが、ここは私にやらせてください」

「そ、そう……」

「それに、いつもやっていることですから」

シオンは再びにこりと笑顔を見せると慣れた手つきで食器を片付けていく。

その様子をぼーっと眺める俺。

……。

いい！

なんだこの幸福感。可愛い女の子に手料理作ってもらったりしちゃったりして。

大丈夫かな、俺？後で一気に不幸が襲ってきたりはしないよね？

「そういえばシンゴさん」

「はえ？」

人間、不純な事を考えている時に話し掛けられると、返事は間抜けになります。

「シンゴさんってどちらから来たんですか？」

俺の変な返事をスルーしたシオンが、割と根本的な事を聞いてきた。

「えーとね……なんて言えばいいのかな…。とにかく、すごい遠い

国から来た」

当たりともはずれとも言いがたい答えだな、と我ながら思う。

「遠い国……。なんという国ですか？」

「うーんと、分からないと思うけど、日本って言う島国から来たの」

「ニホン……。では、日本の方は皆さんそのような格好をしているのですか？」

間髪入れずに質問。確かに、俺の服装は周りの人から見たら変わってるかもな。特にジーパンとスニーカーなんてこの世界には存在しないみたいだし。

「若者はこういう格好の人が確かに多いね。でも皆が皆これ着てる訳じゃないよ」

「そうなんですか。なんだか面白そうな国ですね」

おもしろそう。俺がこの国を珍しく思うみたいに、この国の人達も俺達を珍しく思うみたいだな。全くの異文化なんだから当然と言えば当然だが。

「でも、そんな遠い国から、そのような軽装でよくここまで辿り着けましたね？」

「あ……」

確かに。名も知らない程遠い国から来た人間が手ぶら。普通に考え

なくてもあり得ない。

「えーとね、これは修業の旅だから、必要最低限の荷物で旅をしてこそなんだよ」

訂正、今の俺は最低限の物も持ってません。

「へー…。大変なんですね」

通じてしまった。あぁ、シオンの俺を見る心配そうな目が痛い。

「では、今は旅の途中というわけですか」

「…うん。そういうこと」

こうして俺の肩書きは、『異国からの修行野郎』になった。

……。

…。

話もそこそこに、夜も遅くなってきたので、今日のところは寝ることにした。

俺は泊まるのはさすがに少し躊躇したが、シオンが是非にというので、泊まっていくことにした。

別の部屋とはいえ、知り合ったばかりの女の子と一つ屋根の下で一夜を明かす。

…うーん、健全なる青年男子には刺激が強すぎやしないかね？

とかなんとか悶々と考えつつ、俺はシオンのお父さんの部屋に案内された。

「どうぞ、この部屋を自由に使ってください。何かあれば私は自分の部屋にいますので」

そう言ってシオンは部屋を出ていく。

「……」

俺はぐるりと部屋を見渡す。

難しそうな本がずらりと並んだ本棚。かなり年季の入った机。質素なベッド。

どこも綺麗に整理されていて、真面目な感じをビンビンに感じる。

「…よいしょっと」

俺はベッドに腰掛けると今日の事を自分なりに振り返った。

「結局、これは夢じゃなくて現実なのね」

夢だから夢だからと開き直ってはみたが、こうして現実なんだと再認識すると、なんか自分の肩に懸かる荷の重さに少し気分が重たくなる。

『嫌になっちゃいましたか？』

唐突にゆめじんの声。

「いや、こうなった以上やることやってみせるさ。って、お前さっき怒ってた割には普通に話し掛けてきたな」

『なんだか一人で考えてるのも馬鹿馬鹿しくなってきちゃいまして……。で、これからどうするべきかあなたなりに考えましたか？』

「うん？えーとね……」

『まさかあのシオンって子と一緒にいたら考えるの忘れちゃったー、とか言いませんよね？』

「はっはっは。よく分かったじゃないか」

『……弾き倒しますよ？』

「ごめんなさい。嘘です」

『はぁ。で、真面目な話、考えましたか？』

考えはある。が、少しだけ言いたくない案でもあった。

「……騒ぎがでかくなり過ぎない内にこの町を出る。俺はまずそう考えた」

『……ま、それが賢明でしょうね。これ以上この町で戦い続けるのは即ちこの町全体を戦いに巻き込む事に繋がりますからね』

「シオン達が傷ついたりするのは見たくないしな……」

俺はベッドに横になる。

天井が見える。木の天井。木目までよぅく見える。

最初にここで目覚めた時に見たのもこの家の天井だった。

……当たり前といえば当たり前だが。

『では、早急にこの町をスムーズに脱出する手立てを考えましょう』

「早急に……ねぇ。とりあえず寝かして。今日は疲れた」

と言って俺が就寝態勢に入ろうとすると、

『あなた、バカですか?』

いきなりのバカ呼ばわり。

「理由を聞こうかこの野郎」

うむ、人間安易に怒ってはいけない。

『あなたは軍の人間ぶっ飛ばしてるんですよ?本当なら今すぐにでも兵が差し向けられてもおかしくないこの状況で、あなたは呑気に寝ると、こう仰るわけですか?』

一気に言われた。だが確かに、ゆめじんの言う事は正論だ。

「すぐにでも出ろってか?」

『そうです。本当なら夕食の時点で止めるべきだったとも思いますが』

夕食？あの幸せタイムに何の問題があったというんだ！

『もしあなたの食べた料理に毒等が混入していたら、今こうして話すことすら出来なかったでしょう』

「！？…おい、それってシオンを疑ってるって事か？」

『はい。彼女が軍の人間で、あなたの力を見て脅威を感じ、あなたをこの町に釘付けにしたがっている……』

「待てよ！！それはお前の推測だろ！」

『その通りです。彼女が敵だという証は無い。逆に言えば味方である証も、無いと言う事です』

ゆめじんの考えは可能性としては有り得るかもしれないが、俺には、ネガティブに結論を急ぎ過ぎている気もした。

コンコン。

これから更に議論を、と思ったら、突然部屋のドアがノックされる。

「は、はい…」

「シオンです。入っていいですか？」

シオン！今この家には俺とシオンしかいないんだから来るとしたらシオンしか居ないんだが、ああいう話の後なだけに、少し緊張する。

「ど、どうぞ……」

俺が答えると、ドアがゆっくりと開き、シオンが入ってきた。

「すいません、もうお休みでしたか？」

ベッドに横たわりかけた俺の格好を見てシオンは少し申し訳なさそうに聞いてくる。

「いや、まだ起きてるつもりだったから大丈夫だよ。それより、どうしたの？」

俺が聞くと、シオンは少しだけ目線を反らし、何か喋りづらそうな事を抱えてそうな顔をした。

「……どうしたの？」

ちょっと心配になった俺はベッドを下りて少しだけ、シオンの方に寄る。

「あっ、えと……」

シオンは何か躊躇している様子だったが、やがて、何かを決意するように俺の顔をしっかりと見つめてくる。

うむ。照れる。

状況に反して不純な事を考える俺に対し、シオンは、完全に俺の予想範囲外の事を言い放つ。

「私の父を捜して下さい！！」

「え？……シオンのお父さん」

……。

…。

俺はシオンから、シオンを取り巻く状況やお父さんの事などを聞いた。

「じゃあ、シオンのお父さんは、３ヶ月前に軍に拘束されて……」

「はい、それ以来連絡が取れないんです」

シオンと俺はベッドに並んで腰掛けて話をした。

シオン曰く、シオンのお父さんは、この町で林業を営んでいて、町でも有数の名士として知られていた。

しかし、２年前に、町に帝国軍が駐屯し始めてからは、町の運営の中心たる林業が軍に掌握されてしまい、その事を巡り、シオンのお父さん達は軍と何度も話し合いを重ねた。

しかし、軍は町側の要求を不当な物として却下し、挙げ句の果てに

町の有力者達を反逆者として捕まえだしたのである。その中には、シオンのお父さんも……。

「捕まった人達はどこへ連れてかれるの？」

「正確なところは分かりません。恐らくは中央の【ラグーナ監獄】に連れてかれたのではないかと」

「らぐーな……監獄？」

久々に聞き慣れない単語だ。

「全国の犯罪者達を一手に引き受ける大型の犯罪者収容所です」

「全国の……」

この国の全体が想像つかない。どのくらいの規模なんだ？

「……。ごめんなさい、知り合ったばかりのシンゴさんにこんなことお話してもどうしようもないですよね。今夜の私はどうかしてました。本当にごめんなさい」

この一気に並べ立てられた言葉、もしかしたらシオンの駆け引きか、とも思った。俺は言葉をためらった。

ドンドンッ！

俺のためらいを悟ったかのように、タイミング良くシオンの家のドアが叩かれる。

「……はい」

シオンはパタパタと応対に向かう。

「……ふぅ」

シオンを疑ってしまった。駄目だなぁ、俺。ゆめじんに一言言われただけで揺らいだ自分に少し嫌になる。

と、俺が自己嫌悪に陥っていると、

「あの、あなた方は……」

シオンの戸惑ったような声。続いて来訪者の声が…。

「帝国軍銃騎兵団だ」

俺の中に、緊張が走る。

［4］人間は他人の言葉に影響されやすいという事（後書き）

さてさてこの先どうなることやら。

……私が一番知りたいです。

［5］真実を知る者と知った者とついでに追う者も（前書き）

今回、喋ってばっかな感がします。

まっ、いいか。

5話です。

［5］真実を知る者と知った者とついでに追う者も

「帝国軍銃騎兵団だ。シオン・アルファだな」

「は、はい。そうですが……」

シオンが答えると同時くらいに、三人いた銃騎兵団の軍服の一人が突然、

ガチャッ。

「えっ……！？」

シオンの手に手錠をかけた。

「シオン・アルファ。お前を国家反逆罪の容疑で逮捕する」

軍服は淡々と告げると、シオンに一枚の紙を突き付ける。

「お前が帝国軍銃騎兵団、ガヤク・バルナブル中尉に対し、暴行を働いたのはもはや隠し立て出来ぬ事実。おとなしく駐屯所まで来てもらおうか」

喋り終えた軍服は後方に控えていた二人のややこしいが同じ軍服に、シオンを力ずくにでも連れていくよう指示する。

……ちょっと待て。中尉への暴行って、俺の事じゃねえか！なんでシオンが捕まんなきゃいけないんだよ！シオンはむしろ被害者じゃねぇか！

『軍は今までもこうやって一般人に罪を着せてきたんです』

おい！シオンがあのバズーカ野郎に対して暴行なんてしてないしそんなこと出来るわけ無いって軍の連中だっていくらなんでも分かるだろう！？

『軍にとっては、真実はどうでもいいんです。そんなことよりも、軍人が倒されて犯人が見つかりませんでした。っていう事を恐れるんです。プライドってやつですね』

腐りきってやがる。そんな横暴に付き合ってられるか。

俺は軍の奴らをぶっ飛ばそうと一歩を踏み出した。

ガクッ！

「うぁ……」

が、突然、膝から力が抜けて立っていられなくなる。

「な、んなん……だよ」

めまいがして意識が遠退いていく。この感覚、まさか……！

『戦闘でのエネルギーの急激な使用の負荷が今になってきたようです。だいじょ…す…か』

ゆめじんの声も段々聞こえなくなる。

くそっ……！！この大事な時に……。

何がやれば出来る力だ。やりたい時に使えねぇじゃねぇか……バカ野郎……。

そこで俺の意識は途絶えた。

……。

…。

「……っが……」

『き……ま……か…』

あぁ、なんか耳に雑音が響く。どんな夢を見てるんだ俺は。

『おき……く…さ…』

おき、くさ……。

沖草？

『起きてください！！』

「どぅわぁ！！」

俺は脳に響く強烈な目覚ましによって目を覚ます。

「はぁ、はぁ、あー、びっくりした！」

俺はうつぶせに倒れてた体を起こし、こうなる直前の状況を思い出す。

「……っておい！シオンは！？」

俺はまだふらつく体を無理やり動かして意識が途絶える前にシオンが立っていた場所を……！

「……だよな」

家の入り口には誰もいない。

『あなたが気絶した直後にシオンさんは帝国軍に連れていかれました』

ゆめじんの淡々たる説明。

「くそっ！なんでシオンが俺の罪を被らなきゃいけないんだよ！」

『ついでに言えば、シオンさんは連れていかれる時、なんの抵抗もしませんでした。素直過ぎるほどにあっさりと軍に連れていかれました』

ゆめじんの淡々とした口調に段々苛立ちすら覚えてくる。

「それがどうしたっていうんだよ……！」

『分かりませんか？彼女は言われなき罪など背負う必要は無かった

んです。あなたがここにいる限りは』

「何をいっ……！…そうか……！」

『真犯人であるあなたを突き出してしまえば彼女は捕まるどころか暴行の容疑丸ごとパーです。偶然とはいえあなたはここに倒れていたわけですし』

そうだ、なぜシオンは黙って行ってしまった？

適当な理由付けて俺を突き出せばシオンは被害を被らずに済んだ。

俺に命を救われたから？

いや、だからってそうまでして俺を守る理由にはならないはず！

「……ぬー！分からん！」

こうなれば俺が取るべき選択肢は一つ。

「ちょっと行って来る」

『…はい？』

「ちょっと行って聞いてくる」

『…い、一応聞きますね。どこの誰に何を聞きに行くんですか？』

「軍の駐屯所にいるシオンに俺を庇った理由を聞きに」

もはやこれしかない。ていうか、これ以外に選択肢ってあるか？

『がふっ……。分かりました。この際存分にどうぞ』

「あれ？止めないの？」

前とパターンが違う。

『止めたら止まってくれます？』

「うんにゃ」

『じゃあ、存分にどうぞ』

「言われなくてもね。まっ、なるべく暴れないようにするから」

自信はないがな。

俺は勢い良く家を飛び出すと、そこでピタリと止まった。

「……」

『……どうしました？』

ゆめじんの問いに、俺は今の素直な気持ちをぶつける。

「駐屯所って、どっち？」

『……』

夜の風はちょっぴり冷たかった。

……。

…。

―サギルタ・帝国軍駐屯所―

シオンは、所内の独房の一室にいた。

「お前が一言、自分がやった、そう言えばこんな不毛な時間は終わるんだ。ん？分かるだろう？」

口調だけは優しい軍服。シオンは椅子に座りながら、黙って地面を見ていた。

「おい、聞いてるのか？貴様がこの事件の犯人なんだろう？」

シオンは尚も無言を貫く。

「貴様……。これ以上軍を冒涜するとどうなるか、その体に教える必要がありそうだな……！」

軍服は手に持った警棒をわざと見せ付けるように振り上げる。

「まぁ待て」

独房に一人の男が入ってくる。たくさんの勲章が輝く軍服に、特徴

的なスキンヘッドと白い口髭。デイク大尉である。

「はっ！デイク大尉！」

軍服は警棒を下ろし、敬礼の姿勢を取る。

「お前は下がっていてよいぞ」

デイクは軍服に独房を離れさせると、ゆっくりとシオンに正面に立った。

「一般人であるお前がこうも頑なになるとは……正直、意図を図りかねるな」

場に似合わぬゆったりとした口調でデイクは喋り続ける。

「……あぁ、なるほど。我々の提示した条件が気に入らぬか？」

「……」

シオンはただ黙って俯いている。

「言われなき罪を背負いたくなくば、あの男について知ってる事を洗いざらい喋れ。でなければ罪を認めろ……そうだな、これは完全なる脅しだな」

うんうん。デイクはわざとらしく数回頷く。

あの男とはシンゴの事であろう。

「我々も同胞が襲われて黙っているわけにはいかないのだよ。軍の威信に関わってくる問題だからね」

「……一つだけ、よろしいでしょうか？」

シオンは、デイクの顔に視線を移し、そう尋ねる。

「お？……はっはっ！初めて口を聞いてくれたね。一言も喋らないもんだから私はてっきり人形に話し掛けてるような気分だったよ。そうそう、人形といえばこの間私の娘が何のお守りか知らないがへんてこりんな人形を買ってきてね。なにやら南の地域の……」

「あの！私の質問に答えてください！」

尚も話し続けようとするデイクを、シオンが無理矢理止める。

「お？…そうだった。えーと、男の処遇について、だったね。そんな事を聞いてどうする？と、思わない事もないが、よかろう、お答えしよう」

デイクはわざとらしい間を空け、視線をシオンの顔の高さに合わせると、はっきり告げた。

「見つけ次第、即拘束。その後、奴の使う術について情報を吐かせたのち……必要が無くなれば、その場で銃殺刑、といったところかな」

デイクは事も無げに答える。

「……」

シオンには予想の範囲の答えだったのだろうか。大きな驚きの表情は見せず、ただじっとデイクを睨み付ける。

「はっはっはっ！そう怖い顔をしないでくれ。綺麗な娘さんにそんな顔をされていい気分はしないのでな」

デイクはそう言ってひとしきり笑い飛ばすと、今までにない真面目な表情を浮かべ、

「しかしまぁ、その害虫を見つめるような目は、父親そっくりだな」

「！……父さんを、知っているの！？」

シオンの顔に動揺の色が浮かぶ。

「お？いい反応だ。お前の父、ウッド・アルファの事はよぅく知っているよ。何せ、奴を監獄送りにしたのは私だからな。いや、懐かしい話だ」

「お前が……父さんを…」

シオンの目に憎しみの色が広がる。

「おっと、若い娘さんがお前なんて言葉使うもんじゃないよ。しかし、君のお父さんは非常に厄介な存在だった。この町の林業は町の人間が運営すると言って聞かなくてね。仕方ないから監獄送りさ。いやぁ、可哀想な事をしたよ」

「自分でやったくせに何を……！」

「今頃は牢に押し込まれてるか、強制労働に駆り出されてるか……。いやいや、軍には逆らうものではないね」

デイクは懐から煙草を取り出し、火を点け吸い始める。

「それにしても私も苦労したよ。君のお父さんが王宮に納める木材を最高級の物から腐りかけた物に交換するのは骨が折れたよ。まっ、お陰でスムーズにお父さんを監獄に送り込めたがね」

「えっ……？」

「お？知らなかったかね。君のお父さんは腐った木材を上納し、不敬罪に問われて監獄に行ったのだよ」

驚きを隠せないシオンを気にすることなく、何食わぬ顔で煙草をふかすデイク。

「何、それ……じゃあ！父さんはあんたらの罠に掛かって、犯してもいない罪を背負ったって言うの！」

シオンにとっては衝撃の事実なのだろう。目は見開かれ、口元は震えている。

「そういえば君も無実の罪だったね？親子とは似るものだね」

「ふざけないで！！そんな……そうだと知っていたら……」

シオンは拳を握りしめ、わなわなと震わせる。

「だが残念なことに君は父親とは違う結末を歩んでいただくよ」

「……」

もはや怒りで言葉も出ないのか。シオンの目には涙が溢れている。

「若い娘さんの涙というのはクルものがあるね。だが、長くは見ていられない。残念だ」

デイクは懐から、今度は拳銃を取り出し、シオンに向ける。

「こんな非道が許される訳はない。いつかあなたは報いを受ける……」

「忠告ありがとう。せいぜい気を付けるよ」

デイクは、銃口をシオンの頭に合わせる。

「さて、刑を執行しようか……」

ドドォォォォン……！！

突然、轟音と共に独房が、建物全体が揺れる。

「な、何事だ！？」

デイクは、独房の外にいるであろう兵士に大声で尋ねる。

「て、敵襲です！正門が何者かに破壊されました！」

「なんだと！」

デイクはシオンをそのままに、独房を出る。

……。

…。

―サギルタ・帝国軍駐屯所正門―

入り口を守る鉄製の頑強な門は消え去り、十数メートル先にぐしゃぐしゃになって吹っ飛んでいた。

「俺、すげぇ！」

『自分で自分に感心してないで！来ますよ！』

ゆめじんの言葉に合わせるように、各所からわらわらと軍服達が現れる。

「よーし、かかってこいやぁ……」

この駐屯所を潰し、シオンを助けだす。そして、聞きたいことを全部聞く。

「まずは助けなきゃな……。待ってろよ！シオン！」

軍隊に対して丸腰で挑むという前代未聞の戦いが、今、始まった。

［5］真実を知る者と知った者とついでに追う者も（後書き）

次回から戦って戦って戦います。

思い描いた結末に文章を導けるのか！？

多分無理ですな。

［6］初めての殴り込みは鉄の味（前書き）

戦闘の描写って難しいですね。

辺りに漂う緊張感みたいな物を出すのが……。

からの6話です。戦ってます。

［6］初めての殴り込みは鉄の味

～駐屯所の門が派手にぶっ飛ぶ数分前～

俺は駐屯所の前の茂みに隠れ、様子を窺っていた。

「……さて、これからどうしたものか」

『まずは潜入して情報を集めましょう。力を使えば難しくは無いはずです』

だろうね。それがポピュラーかつ安全な方法だろう。

「だが、断る」

俺はあっさりとゆめじんの提案を却下する。

『は？もっといい案があるんですか？』

「正面突破」

『どの口がそんな戯言ほざきやがってるんですか？』

ゆめじん、言葉悪いよ。

「正面でまず派手に騒ぎを起こす。そして、その混乱に乗じてシオンを助けだす……」

『……意外にまともですね』

「の後、駐屯所潰す」

『前言撤回を要求します』

俺は、間髪入れないゆめじんの言葉に苦笑しつつ、自分の考えを続ける。

「どのみち俺は軍全体を倒さなきゃならないんだろ？だったらこの町の軍隊潰しといて損はしないだろ」

『仮にそれが出来たとしてその後の事考えてますか』

「考えてるよ」

『え……！？』

意外、といった感じのゆめじんの声。俺もなめられたもんだ。

「強いはずの軍隊を、たった一人の名も無き男がどんどん倒していく。そして、その噂をどんどん世界中に流す。するとどうなる？……軍の権威はおもしろい位に右肩下がり。どう？こういうの」

『少々短絡的で粗さが目立ちますが……』

「ていうか多分ね、俺は潜入とかそういうの向いてない」

『なぜですか？』

「昔からかくれんぼとか缶蹴りとか隠れるの苦手だったのよ」

『……さいですか』

俺は自分を透明にして、駐屯所の正門前に立つ。

「じゃあ、いっちょご挨拶と参りますか！」

俺は透明を解くと、右足に力を集中させる。

「はぁー……。セイヤァッ！！！！」

ズドォォォン……！！

鉄製であろう頑丈そうな門は、俺の前蹴りを受けると、轟音と共に吹っ飛んだ。

「俺、すげぇ！」

俺はこの時確信した。イケると。

……。

…。

そこからは、ひたすらわいて出てくる帝国軍との戦いとなった。

すぐに自分の体を周りに見えなくして内部へ、という作戦だったようにもうっすらと記憶があったが、そんなもの忘れていた。

「デリャァァ！！」

俺は拳に衝撃波を乗せて放つ。範囲を調節すればこれだけでも複数の軍服を倒す事が出来る。

「はぁ！しかし、次から次に出てくるな！」

３０人を倒した辺りで少しだけ疲れてきた。

『２００人の兵が駐屯していますからね。恐らくまだまだ出て来ますよ』

「やんなっちゃうね！……あ」

『どうかしましたか？』

「変な事思い付いた。ちょっと試してみる」

俺は自分の体を鋼鉄にするようイメージし、そこに更にあるイメージを加える。

すると…、

ガチャ……。

「ん？何だ、銃が…」

一人の兵士が異変に気付く。が、時既に遅し。

ガチャガチャガチャガチャ……！

兵士達の銃は持ち主の手を離れ、ある１点に集結する。

それは、他でもなく俺の体。

程なくして俺の体には何十丁もの銃がくっついた。

「おぉ！やっぱり鉄が使われていたか。磁石ってのはすげぇな」

強力な磁力が体に宿るイメージをしてみたら見事に見事に皆さんの武器を取り上げる結果になった。

「やればできるもんだ」

まぁ、その他の鉄製の物もくっついたのはご愛敬だな。あの巨大な門も付いてるし。

「では、続きましては……」

俺は磁力を解き、従って大量の銃も下に落ちる。

武器を取り上げられた皆さんは、もはや訳が分からないといった顔でこちらを見ている。

「プレスターイム！」

俺は自分のいる位置から半径5メートル位の範囲に、強烈な重力の一撃を加える。

バキバキャバキバキ…！

するとどうだろう。立派なフォルムのライフルや拳銃は、見るも無

残に折れたり潰れたり思い思いの形に変貌した。

「……ゴミの日にでもまとめて捨てといて下さいな」

なんか陳腐な決め台詞。

だが、兵士さん達にはかなり効き目があったようだ。

「う……うわぁぁぁぁ！！」

それまで直立不動で静止画だった兵士達は、堰を切ったように叫び声をあげたり泣きだしたり、挙げ句の果てには逃げ出す奴まで現れだした。

「まったく！この程度で逃げ出すとは訓練が足らん、訓練が！」

『あんなの見せられたら誰だって逃げたくなりますよ』

「……それもそうか？」

と、戦いの終わりを確信した瞬間、

ドンッ！

鈍い音が響き、俺の足元に穴が開く。

「あんな腰抜け共に勝ったからっていい気になってんじゃねぇぞ……！」

聞き覚えのある声。

俺は声の方向に視線を向ける。

そこに、奴はいた。

「よぅ、奇術野郎。てめぇから来てくれるとはありがたい。昼間の借りはきっちり返させてもらうぜ」

ガヤク中尉。悪そうな顔した金髪の男。なにより右手が特徴的。

「……って、あれ？右手は俺が壊したはず」

奴の右腕はバズーカだったが、それは俺がぶっ壊したはずだった。

今の銃撃は……？

「大変だったぜぇ。てめぇに一撃をぶち込みたくてつい急いで代用品探してよぉ…。なんとか間に合ったぜ」

ガヤクは自分の右腕を見ながらブツブツ呟く。

「だが、この3連砲をもってすればてめぇを倒せる！」

3連砲。奴の右腕は、細い3本の砲塔によるガトリングガンのようになっていた。

「威力は前のより落ちるが、速さは格段に上がった。もはや昼間みたいな事にはならねぇぜ」

そう言い切ると、ガヤクは3連砲を俺に向け、次々に撃ち込んでくる。

「うぉっ！」

俺は大きく横に飛びそれを避ける。

なるほど、言うだけのことはありかなり速い。言葉で止めるのは不可能だろう。

「だからって……ねぇ？」

『誰に向かって喋ってるんですか？』

「心の中の俺だ」

『……気持ち悪い事言ってないでさっさと決着付けてください』

「はいはい」

俺は奴に向けて衝撃波を放つ。出来るだけ範囲を狭めて、威力を圧縮したものを。

「うぉっほぅ！こんなとろいのに当たるかよ！」

ガヤクは俺の放つ衝撃波を次々と避ける。

「そうなんだよ、この衝撃波、まだまだ速さが足りないんだよ。でも大丈夫、その代わり……」

俺は足にグッと力を込める。

「俺自身が早く動けばいいだけだから」

俺は全力で地面を蹴ると、ガヤクに向け、まさしく電光石火で接近する。

「なっ……！」

突然俺が目の前に現れて驚きで硬直するガヤク。

「こんにちは…からの」

俺は拳に力を込める。そして、

「さようなら」

ガヤクのボディにぶち込んだ。

「ぐおぁぁ！！」

ガヤクは綺麗に放物線を描き、夜の闇の中に消えていく。

「……こうなってくると奴が俺に勝てると思った根拠を知りたくなるね」

……。

…。

というわけで、さらば、ガヤク。

俺は、大半の兵士が逃げ出し、唯一好戦的であったガヤクも倒し、かなり静かになった駐屯所内をシオンを探して歩き回っていた。

「あれかなぁ。いるとしたら牢屋とかかねぇ」

『恐らくは。まずは地下への階段を探しましょう』

「うぃ。にしてもこうもあっさりいくとは思わなかった」

『武器を取り上げられた上に、取り上げた相手が意味不明な位強かったら逃げ出したくもなりますよ』

「そうか。俺、そんなに強いのか……」

『ええ、かなり。自覚ありませんか?』

「……かなりあるね」

と、雑談を挟みながらも探索を続ける。

「ん?あれ階段じゃないか?」

俺は通路の隅の方に下に下りる階段を見つけた。

「行ってみるか」

『気を付けて下さい。まだ敵がいるかもしれません』

「あいよ」

俺は階段を下へ下へと下りていく。

下に着く頃にはもう周りは真っ暗だった。俺は力を使い、自分の目をライト代わりに光らして、更に進む。

「一体何段下りれば……って、着いたかな？」

ようやく階段が終わり、俺はその先にあった縦横幅2メートル位の扉を開き、なかに入る。

「……なんだ？なんだえらく広い場所に出たぞ」

少なくとも牢屋ではない。ただただ面積も高さも十分すぎる空間だった。

『訓練場……でしょうか？しかし、地下にわざわざこんなに大きなものを造るとは……』

ゆめじんの話の途中だった。突然天井の照明が点き、全体が明るくなる。

「うぉ、眩しっ！」

俺は目を通常に戻す。そして、明るくなった全体を見渡す。

なんだろうか。床には目印らしき線がいくつも引かれていて、傷なども多く見受けられる。

壁には車のガレージのような物がいくつも設置されていて、まるで……、

「格納庫？」

と、俺が呟いた次の瞬間だった。

“貴様か。我が基地にたった1人で襲撃を掛けてきたというのは！”

広い空間の隅に設置されたスピーカーから低いトーンの声が響いてくる。

「うぉっ！びっくりしたぁ！ていうか音でか！」

“目的は分からぬが貴様をこれ以上放置しておいても良い事はなさそうなのでな、ここで死んでもらおう”

なんだか安っちい台詞で死を宣告してされてしまった。ていうか一体誰がどこで喋ってんだ？

“ははは。そう周りを見渡さずともすぐに姿を見せてやる”

カチン。ちょっとむかついた。ていうか、あっちからは見えてるんだ。

“よし、第三ハッチ、オープン！”

低いトーンが力強くそう叫ぶと、俺の正面のシャッターのようなものが唸るように音を出しながら徐々に上へとせり上がっていく。

そして、段々とその奥にいる“そいつ”の姿が見えてきた。

「何だこりゃ……」

もし、“そいつ”を最も簡単に表現するならば、

【人型の鉄の塊】

人間のでかさを優に越えるそいつがいた。

「おいおい、ここに来てＳＦロボットの登場かよ」

と、俺がこの世界のジャンルについて一抹の不安を抱いていると、

プシュー！

ウィーン……。

鉄の塊の顔の部分に当たる場所が蓋を開けるように、パカリと開き、中から更に丸い何かが……あ、人の頭だ。

「ふはは！驚かせてしまったかな？私の開発したこの【アイアンダイン】の威容で」

ある意味驚いた。あんたの頭と鉄の塊の頭のツルピカ具合が似すぎてて。

「おっと、自己紹介が遅れたな。私はこの基地の司令官、デイク・マクドゥーン大尉だ」

「司令官……。つまりあんたがここのボスか」

「その通り。その前にお前、私が名乗ったんだからお前も名乗りなさい」

注意されてしまった。

「俺は桐原慎吾。悪いがあんたの庭は俺が潰させてもらうぜ」

シャキーン。決まった……。

『……寒ッ！』

ゆめじんの評判は相変わらず悪いようだが。

「ほほぅ。よほど己に自信があるようだな。だが、このアイアンダインは兵士達が束になっても比較にならない兵器だ。その青臭い鼻っ柱、へし折ってやるとしよう」

デイクは鉄の塊の頭を再び装着させる。

ヴィィィィィン……！

エンジン音のようなものが響き、アイアンダインの体が小刻みに揺れる。

“アイアンダイン、戦闘準備完了、これより侵入者の排除を開始する”

アイアンダインの細い目が赤く光る。

「……男なら興奮せざるを得ないシチュエーションだな」

『浸ってないで、来ますよ』

「分かってる。よぅし、掛かってこいや！鉄人野郎！」

［6］初めての殴り込みは鉄の味（後書き）

次回、とりあえず謎が解決するかもしれない！

ていうかさせたい！

そして早く春が来てほしい！寒い！

［7］目には目を、歯には歯を、鉄人には6倍を（前書き）

今回は部分で筆が進んだり進まなかったり。

戦いって難しい！

7話ですよ。

［7］目には目を、歯には歯を、鉄人には6倍を

アイアンダインは、先手必勝とばかりにその重そうな足を忙しそうに動かし、俺との距離を縮めてくる。

「よし、鉄には鉄だ！」

俺は自分の体を鉄に変えると、アイアンダインに先んじて先制のストレートパンチ。

“遅い！”

が、俺の拳は、アイアンダインの腕の凪ぎ払いによって弾かれる。

「しまっ……！」

拳を弾かれ、俺はアイアンダインに対し無防備に体をさらす結果となった。

“ぬぉお！！”

デイクの唸り声と共にアイアンダインのパンチが俺のボディーを捉える。

「どぅわぁ！！」

凄まじいパワー。俺は数メートル後ろの壁まで吹っ飛ばされる。

「っがは……っ！ハァハァ……」

腹部に鈍い痛みが響く。

「鉄の硬さにしてもこの威力……。確かに他の連中とはレベルが違うようだな」

俺はじわじわ襲ってくる痛みを気にしつつ、立ち上がり態勢を整える。

“ほう、今のを食らって立ち上がるか。面白い！”

アイアンダインは巨体に似合わぬ俊敏な動きで俺との間合いを再び詰める。

“さぁ、どこまで耐え抜ける！”

デイクの楽しそうな声。

アイアンダインはその両腕を俺に向かい振り下ろす。

ズガンッ！！

その一撃は、俺どころかその下の床まで砕いてしまった。

“おっとっと。やりすぎてしまったようだな。さて、奴は……”

アイアンダインは両腕をどかす。

“ん？どういう事だ？”

アイアンダインの腕の下には砕けた床があるのみ。俺の姿は無かっ

た。

“どこに消えた……!?”

辺りを見回すアイアンダイン。しかし、どこにも俺の姿は無いわけで……。

「ここだよ鉄人」

アイアンダインの背中。そこに俺はいた。

“なっ!?貴様、いつの間に!?”

「あんたが腕振り下ろす瞬間だよ。自分に当たる直前にこちらへテレポートさせていただきました」

テレポート。つまり瞬間移動である。

「俺はな鉄人。痛いと分かってるパンチを受け続けるほど……」

俺はアイアンダインの背中に両手を当てる。

「お人好しじゃねえんだよ!!」

瞬間、俺は両手から全力の衝撃波を打ち出す。零距離からの衝撃波、名付けて【インパクト・零】!

アイアンダインの体は衝撃波を余す事なく全身で受け止め、今度は

自分自身の体で床を粉砕した。

“ぐぁぁ……！”

デイクの苦しそうな呻き声。ダメージは間違いない。しかし、

“この程度、今までくぐってきた死線に比べれば、どうという事はない！”

デイクの言葉に呼応するように、アイアンダインは勢い良く立ち上がり、俺に向け拳を振るう。

「うぉっと……！」

俺はそれを素早くバックステップで避け、牽制の意味も込めて、衝撃波をもう一発放つ。

“効かぬ！”

アイアンダインは腕を凪ぎ払い、衝撃波をかき消す。

“貴様、何者なのだ！？なぜ我が基地を侵す！？なぜそのような無謀に打って出る！？”

デイクの叫び。恐らくアイアンダインの中ですごい顔をしていることだろう。

「無謀かどうか、現に俺はここを制圧しかけてるけど」

“仮に！この基地を制圧しようとも、帝国軍１２０万の軍勢が黙っ

てはおらぬぞ!!貴様はそれを承知の上でこのような愚挙を……!”

「帝国軍１２０万、上等だ!!こちとらその為にここにいるんだ。あんたらを潰すためにな」

俺は力強く言い切る。まぁ、具体的に１２０万という数がピンと来ていないというのは内緒だ。

「それと、俺の罪を被らされた女の子助けだすためだ」

隠れた最優先事項。シオンを無事に助けだす。

“女の子、だと?……ははぁ、そういう事か。貴様がシオン・アルファとガヤクの間に割って入ったという……”

さっきのぶちギレ口調から一転して余裕すら感じるゆったりとした喋り方に変わる。

「シオンはここにいるんだろ?」

“いるさ。だが、あれを助けてどうする?あれは既に反逆罪で起訴され刑罰に服す事が半ば決定してる身。今から助けたところでさらに脱獄の罪が加わるだけだぞ”

デイクは更に続ける。

“それにな、あの女見た目は純粋無垢で綺麗な女を演じているが、中身は相当なものだぞ”

「……どういう事だ」

“奴は父親が投獄されてからというもの、己の色香を使い男を騙し、父親の情報を探らせるために使っていたのだよ。しかも、軍に目を付けられるとすぐに男に罪をなすりつけ、捨ててしまう。いやはやひどい女だ”

「……」

俺はただ黙り、俯く。

“だから貴様もその一人に過ぎ無いのだよ。あれは貴様の力のみを当てにしている。使えなくなれば捨てられてしまうだけだ”

デイクは得意げに喋り続ける。

“そのような女の為に危険を冒して命懸けで助けだす。馬鹿馬鹿しいとは思わないか？”

デイクは喋りながら、アイアンダインを徐々に俺に近付ける。

“お前は騙されているのだよ”

アイアンダインは更に距離を縮めてくる。

“しかし安心したまえ。私には良い解決策がある”

アイアンダインは俺の目の前に立つ。

“貴様がここで死に、あの女も死ぬことだ！！”

瞬間、アイアンダインの拳が俺に向かって放たれる。

ガキッ……！

“なっ！？”

アイアンダインの拳は、俺に当たった。いや、もっと正確に言うならば、俺の右手で、止められた。

“き、貴様にはアイアンダインを止める事などできないはず……！”

それまで下を向いていた俺。ぐりんと上を向き、

「決め付けはよくないですよ。大尉殿」

簡単なメカニズムである。

俺は今まで全身に均等に力を振り分けて身体能力を上げたりした。つまり、全身、両手両足、胴体、頭。少なくとも6ヶ所に振り分けていた。単純に考えて1ヶ所6分の1である。

ならば、その振り分けていた力を1ヶ所に集中させればどうなるか。

「今、俺のこの右手の力は、さっきまでの力の……」

俺は右手をアイアンダインの拳から離し、大きく後ろに振りかぶる。

「6倍だ」

俺はその6倍の拳をアイアンダインのボディにぶち込む。

アイアンダインの体は大きく後ろに吹っ飛び、床に崩れ落ちる。

「そういう安い心理戦は、もっと心が純粋な奴にやるんだな」

俺は右の拳に再度力を集中させる。

「てめぇの話は本当かもしれない。俺はシオンに騙されてるのかもしれない。だからこそ…」

力を集中させた拳が青白く光りだす。

「てめぇを倒してシオンを助けだし、本人に確かめるまでだ!!」

“まっ、待てっ……!!”

「ドゥアリャアアアア!!!!」

青白き光の束が俺の拳から放たれ、アイアンダインの胸を直撃し、更に大きな光を放つ。

最大まで圧縮した衝撃波のエネルギーを拳に乗せて撃ちだす。

【青の衝撃砲（6倍バージョン）】

もっと格好良く言うと、

【ＢＬＵＥ　ＩＭＰＡＣＴ　ＣＡＮＯＮ（×６　ｖｅｒｓｉｏｎ）】

……話が若干逸れた。アイアンダインはというと、衝撃砲を食らった胸の部分が大きくへこみ、その他の部分も黒く焼け焦げ、関節の部分からは煙が噴き出していた。

動く気配は、無い。
俺の勝ちである。

俺は格納庫を出て、再びシオンを探す。

その途中、デイクの言葉が何度か頭をよぎる。

『奴の言葉が気になりますか？』

それは見た目の様子にも現れていたらしい。ゆめじんに指摘される。

「……シオンを見つける。全てはそれからだ」

俺は半ば自分に言い聞かせるように言う。

デイクに対しては力強く言い切ったが、戦いが終わり気持ちが落ち着くにつれて、少しずつ不安な気持ちが募っていく。

あー、ダメだ。このままじゃシオンを見つけてもどういう顔して会えばいいか分からない。

『あっ、あれは地下への階段ですね』

ゆめじんが地下への階段を見つける。

もしこれがシオンのいる場所に通じる階段ならば……。

ある意味戦いよりも緊張する瞬間が迫っていた。

［7］目には目を、歯には歯を、鉄人には6倍を（後書き）

次回、サギルタ編が完結するといいね。

あくまで希望です。

どうなるかは分かりません。

［8］自称、巻き込まれたい型の男と魔術兵団の男（前書き）

戦いは難しいと言ったばかりですが……。

頭がいいであろう方々の会話も難しいですな。

8話です。

［8］自称、巻き込まれたい型の男と魔術兵団の男

格納庫へ続く階段に比べたらかなり少なめの階段を下りきると、そこはまさしく独房が並ぶエリアであった。

「なんだか静かだな……」

あれだけの騒ぎがあったってのに。まぁ、元凶俺だけど。

『収容されている罪人の数がただでさえ少ないからでしょう。今は兵士もいないですし』

「罪人の数が少ない。なるほど、原因は単純だな」

『まぁ、大半の罪人はここを素通りして中央の監獄行きという事もあるのでしょうが』

監獄……。シオンのお父さんがいるっていう場所か。

「……にしても静かすぎるな。シオンはいるのか？」

と、俺がいくつかの独房の前を通り過ぎた時、

「シンゴ……さん……？」

間違いなく聞き覚えのある声。

「シオン？どこの部屋だ？」

俺は辺りを見回す。すると、ある独房の扉の小窓からのぞく顔。

「シオン！良かった、無事か？」

会ったらどうしよう、などと心配していたのが嘘のようである。無事を確認したらそんなの吹っ飛んでしまった。

「どうして……どうしてここに……！先程の騒ぎはまさか……！？」

「はは。ちょっと暴れちゃったよ」

「そんな……なぜ……」

シオンは俺がここに来たのが信じられない、といった感じである。

「詳しい話はここ開けてから。ちょっと離れてて」

俺はシオンが扉から距離を取ったのを確認すると、扉の鍵の部分に手を当て、

「せぃっ！！」

縮小版衝撃波。見事に鍵だけ壊す事に成功する。

「シオン！」

俺は扉を開けシオンの無事を確認する。

「シンゴさん……っ……」

シオンは俺の姿を見るなり崩れ落ちるように倒れた。

「おっと……！」

俺は地面にぶつかる寸前のところでシオンを受けとめる。

「シオン、大丈夫か？」

「大丈夫です……。ただ、ちょっと疲れてしまっただけです……」

シオンはそう言って目を閉じた。緊張状態から解放されて一気に疲れが出たのだろう。

「よし、テレポート！」

俺は、便利な瞬間移動でシオンの家へと移動した。

……。

…。

―サギルタ・シオンの家―

俺はシオンをベッドに寝かせ、ベッドの横の椅子に腰掛けた。

「ふぅ……」

戦っている間は感じなかったが、俺にも結構な疲れがきていた。

俺は眠りゆく意識と必死に戦ったが、

健闘虚しく１０分で落ちた。

……。

…。

「……」

目を覚ました時、俺は何故かちゃんとベッドで寝ていた。外はまだ暗い。もうすぐ夜明けだろうか？少し白んでるのが分かる。

「目が、覚めましたか？」

いつ聞いても癒される、優しさに溢れた声、

「シオンが俺を運んだのか？」

「ええ。椅子の上でずり落ちながら寝ている様子があまりにも滑稽だったので」

シオンは少し笑いながら様子を語る。

「マジかぁ……。すまん、重かったでしょ？」

「いえ、私だって多少は力あるんですよ」

そう言ってシオンは力こぶを作る、ような動きをする。

「はは。そいつは頼もしい」

なんだろう?さっきまであんなに殺伐とした場所にいたはずなのに、今、普通に笑える。不思議だ。

と、俺が己の置かれた状況を不思議がっていると、

「……シンゴさん」

シオンは突然改まったように俺の方を向く。

「……ごめんなさい」

深々と頭を下げる。最初は意味が分からなかった。

「私はあなたを利用しようとしてました」

俺の中を思い出したくない言葉がよぎる。

「利用……ってどういうこと?」

俺は平静を装いつつ聞く。

「私は、シンゴさんを、父を捜すために利用しようとしたのです」

シオンはそこから全てを語りだした。

「私はこれまでも何人もの旅の方に協力をお願いしてきました。父を捜すための情報が欲しいと……」

シオンは堰を切ったように尚も語り続ける。

「でも、協力してくれた方々は、ことごとく軍に捕らえられ、監獄送りにされ、それ以上の消息は分かりません」

俺はただ黙ってシオンの話を聞いていた。

「シンゴさんに出会った時、この人なら父を捜し出してくれるんじゃないかと思いました。私はあなたを利用しようとしたんです！」

シオンの中ではきっと父親を捜したいという思いと、俺のように本来無関係な者を巻き込みたくはないという思いとがごっちゃになっているのであろう。

「だったら……」

俺はずっと気になっている事を口にする事にした。

「なんで俺の罪を代わりに被るような真似をしたの？俺を突き出そうと思えば出来たはずだ」

俺の問いに、シオンは少し動揺する様子をみせる。が、すぐに毅然とした表情に変わり、

「自分の手で……終わらせようと思ったんです」

「終わらせる？」

「そうです。私が父を見付け、叶うならば助けたい。この気持ちは、父を助けるか父の死を確認するか、このどちらかをもってしか終わらないでしょう。私がどれだけやめようとしても、無意識の内に私は皆さんを巻き込む形を取ろうとしてしまう。だったら私自身が軍

に捕まり罪を償って、監獄に行って父を捜せばいいだけの話です。
そうすればもう誰も傷付かずに済むんです」

シオンは一息に話す。
シオンは元来人を平気で騙したり唆したり出来ない真面目で優しい人間なのだろう。

しかし、それ故に父親を見つけたいという切実なる目的に対し何度も自分の中で善悪のせめぎあいが続き、そんな自分に嫌気が差したのだろう。

俺にはシオンの抱える苦しみなど欠片も分かってないかもしれない。
でも、愛する者に対する気持ちだけは分かってあげる事が出来る。

「……分かった。終わらせよう」

「え……？」

シオンは俺の言葉に驚きの表情を見せる。

「シオンのお父さんを見つけだす。その手伝い、俺にさせてくれ」

「え……」

俺の言葉の意味が分からない。シオンの顔はそんな顔だった。

「俺はどうやら巻き込まれたい型の人間らしい。そして人の情というやつに弱い」

ついでに可愛い女の子にも弱い。

「でも……。私はシンゴさんを騙しているのかもしれないのですよ！都合よく言葉で着飾っただけの悪人かもしれないんですよ！」

シオンの目には涙が溢れていた。

俺はそんなシオンの目を真っ直ぐに見つめつつ、場に不似合いな笑顔をきめてみる。

「シオンみたいな可愛い子に騙されるならそれはそれでありかもね」

我ながら歯が空中に浮いて爆発四散しそうなセリフである。

言われた側のシオンも、突然そんな事言われたもんだから、顔を真っ赤にして口をパクパクさせている。

……可愛い。

「それに……一緒にいたいはずの家族が離ればなれになっているって、悲しすぎるじゃん。」

「シンゴ……さん……」

シオンはボロボロと声を出して泣き出した。今まで溜め込んでいた物が溢れだしたのだろう。

俺は、ただ黙ってシオンが泣き止むのを待つことにした。

たまには思い切り泣いて、古い涙を出すくらいが人間ちょうどいい。

俺は、母の言っていた教えを思い出していた。

……。

…。

―サギルタ・帝国軍駐屯所（半壊）―

門は吹き飛び、壁は所々崩れ、兵士の大半は怪我をしているか逃げ出したか……。

平たく言うとボロボロの状態である。

そんな状況で、なんとか無事を保っていた司令官室に、数人の人影が。

1人は先程シンゴにやられたデイク大尉。腕や頭に包帯が巻かれている。

そしてデイクの側近と思われる軍服の男。

その二人に対峙するように立つ三人の男。

二人は黒い鎧に身を包み、その間にもう一人、黒いマントにデイクらよりも気品に溢れたスタイリッシュな軍服に身を包んだ男がいた。

「魔術兵団第一師団長、ジェド・ナイアン様の来訪は前々より決まっていた事。この状況、言い訳は用意出来ているのであろうな」

鎧の一人が高圧的な口調でデイクに対し問う。

「……申し訳ございません」

デイクは儀礼的に頭を下げ、詫びの言葉を述べる。

「そのような上っ面の謝罪が聞きたいのではない！なぜこのような状況なのかを聞いている！」

鎧の一人は語気を強める。

「やめろ。お前が熱くなっても状況は変わらぬ」

真ん中に立っていた男が鎧を制する。

「はっ……。ジェド様」

どうやら真ん中の男が魔術兵団の師団長、ジェドという男のようだ。

１９０はあろうかという高い身長に、シュッとした端正な顔立ち、目はサングラスの様なものを付けているため黒さで確認できないが、青い髪わさらりとなびかせたいい男である。

「デイク・マクドゥーン大尉。基地がこのようになった経緯、簡潔に述べて頂きたい」

ジェドは、デイクに無感情な声で尋ねる。

「……」

だが、デイクは何かを我慢するかのようにただ黙っている。

「話さぬか。ならば貴様の心をえぐり、記憶をあぶりだすのみだ」

そう言うと、ジェドは腰に差さった長尺の刀に手を掛ける。

それを見たデイクは慌てて喋りだした。

「お、男にやらました……」

「男？どのような者達だ？規模は？武器は？」

「……一人です。見たこともないような服に身を包み、武器は使わずに戦っていました」

デイクの言葉に、ジェドと鎧の二人は明らかに驚きの表情を浮かべる。

「なんだと！？たった一人に、しかも武器を持たない者に基地をここまでやられたというのか！？」

鎧の一人が叫ぶ。

「不思議な術を使い、高い戦闘能力を有していました」

「不思議な術？魔術ではないのか？」

「魔術ではなかった。現に計測器にはなんの反応もありませんでした」

デイクは数枚の紙を示す。計測器の結果を示す物であろう。

「……貴様の話を信じたとして、なぜその男はこの基地を襲撃してきたのだ？」

デイクの示す書類に目を通しつつ、ジェドは淡々と聞く。

「……女です。奴は、この基地に収容されていた女を助けに来たのです」

「女……？」

「反逆罪で収容されていた女です」

ジェドは書涙類から目を離し、デイクに顔を向ける。

「……罪なきものを捕らえ、その報いを受けたか」

ジェドは冷たく言い放つ。

「な、何をおっしゃいます！罪なきものを捕らえたり等は……」

「貴様の隙だらけの心中を探るは容易だ」

「心を……まさか、読心術……！？」

デイクははっとするが、心を読まれたとあっては為す術が無い。

「し、しかし……あの女に反逆の意志があったのは間違いありませんし、現に基地に拘留中に逃げたのです！これは罪にあたりましょう！」

デイクの必死な反論。しかし、ジェドは冷たい表情を崩さずに告げる。

「女の罪は不問とせよ」

「は……！？」

意味が分からない。デイクは頬を引きつらせる。

「聞こえなかったか？女の罪は不問に付すと言ったのだ」

「仰る意味がいまいち分かりかねますが……」

「そうか。ならば貴様が女の罪を語る前に私がお前の罪を語らねばならないな」

ジェドはそう言うと、機械のような冷たい口調で語りだした。

「幻想暦２６２年、婦女暴行、及び監禁。２６４年、一般人に対する正当事由なき発砲、及び傷害致死。２６６年、公金の横領。２６７年……」

「お待ちを！突然何を……」

デイクは青ざめた顔でジェドを止める。

「覚えていないか？己の犯した所業の数々を」

デイクがどんな顔をしようとも、ジェドの顔は変わらない。

「何を証拠にそのような事を……。魔術兵団の師団長殿といえども根拠もなく……」

「貴様が罪を認めずとも、既に軍上層部は貴様を見限っている」

「なっ……んですと……！」

ジェドは右側にいる鎧に顔を向け合図のようなものを出す。

「はっ」

鎧は巻物のようなものを取り出し、それを縦に広げ、その内容を読み上げる。

「サギルタ帝国軍駐屯所司令官、デイク・マクドゥーン大尉。その者司令官の任を解き、直ちに中央都国立裁判所にて罪を裁かれたし」

その書面の最後には帝国軍総帥の印が押されている。それはつまり絶対の命令であることを示す。

「そん、な……」

デイクは力なくその場に崩れ落ちる。

今まで自分が築いてきた様々な物が、今、音をたてて崩れていった

のだから。

デイクは程なくして兵士に体を支えられるようにして部屋を出ていった。

「権力に溺れた軍人の末路だな」

鎧の一人が呟く。

「いやはや、これだから銃騎兵団の奴らは信用なりませんな。ジェド様」

「軽い口を叩いている場合ではない。これよりここサギルタを魔術兵団の統治下とする。速やかに駐屯所の再建と司令官の選出を急げ」

ジェドは鎧達にそう告げると、自らは部屋を出ていった。

窓から差し込む朝日がジェドの頬をオレンジに染める。

「……この基地を潰したという男。放っておくわけにはいかぬな」

ジェドは名前すら知らない謎の強者に思いを馳せるのであった。

［8］自称、巻き込まれたい型の男と魔術兵団の男（後書き）

予想通り、サギルタ編の完結は次回に持ち越しです。

有言実行出来なくてごめんなさい。

［9］秘密の会議と旅立ちの朝とお守りと（前書き）

今回色んな新顔さんが出てきます。

書いてて分からなくならないようにしよう。

9話です。

［9］秘密の会議と旅立ちの朝とお守りと

―アルバレオ帝国・魔術兵団本部、連絡会議室―

全体的に黒い装飾が目立つ円形の空間。その壁に沿うように１０箇所、それぞれ色が異なる魔方陣が描かれており、そのうち５箇所の魔方陣が光り、そのすぐ上空に魔方陣の色に対応した色の光の玉が浮かんでいた。

ギギィッ……。

会議室の扉が開き、黒いローブに横幅ばかりが長い平たい帽子を被った白髪白髭の老人が入ってくる。

「ふむ……５人か。まっ、緊急にしては集まったほうじゃな」

老人は会議室の中で上座に設置された椅子に座る。

「ほほっ。では、これより帝国軍魔術兵団師団長緊急連絡会議を始める。皆の者、起立」

老人は立ち上がり、

「礼……着席」

丁寧に礼をして座る。

「……というか皆の姿は見えないわけだからちゃんとやっとるかわからんのう！こりゃ失敬！ほっほっほ」

老人の笑い声が静かに会議室に響き渡る。

「……さて、本題に入っていこうかのぅ」

「その前に、よろしいでしょうか……総帥」

青い玉が明滅しながら音声を発する。

「なんじゃ？第一師団長、ジェド・ナイアン」

「その……会議に入る前に総帥が必ず行う、それはなんとかならないでしょうか？」

「なんじゃ？皆の緊張を解こうとしてやっやっとったんじゃが、不評じゃったかな？」

総帥らしさが微塵も感じない総帥は、不安な表情で他の光の玉を見る。

「あら、私は好きですわ。マクス様のつかみの話。無愛想にされているよりもよっぽど好感が持てますわ」

黄緑の玉が明滅する。

「おぉ！第八師団長、ジュディ・オールラブ！お主には分かってもらえたか！そういうことなら今度食事にでも行かないかの？」

「おほほ。お断わり致しますわ。それにマクス様、部下に手を出してはいけないに決まってやがりますでしょう？」

「ほ？そうじゃったそうじゃった。さて、何の話じゃったかのう？」

「総帥！……我々が緊急に呼ばれた理由をお聞かせ下さい……！」

明らかにイライラしているジェドの青玉の声。

「……お主からふってきた話ではないか」

「うぐっ……とにかく！我々を呼び出した理由をお聞かせ下さい！」

ジェドは冷静な感じとはかけ離れた感じで怒鳴るように言った。

「せっかちな男はもてんぞ～」

総帥のからかうような声。

「いいから早く！」

ジェドのイライラが更に増していく中、今まで黙っていたピンク色の玉が明滅し始める。

「キャッハハ～。ジェドが怒ってる～♪ちゃんと牛乳飲まないとダメだぞー」

幼さを感じる女の子の声。

「第九師団長リン・ローフェン！変な口を挟むな！」

「うひょ～。私も怒られた～。とばっちり♪とばっちり～♪」

ジェドの怒声もリンには届かないようである。

「……さて、これ以上は時間が勿体ないから始めるかの」

総帥はフゥとため息をつきつつ、部屋の円の中心に向け手を広げてかざす。

すると、部屋の中心にほろぐラムのように様々な映像が浮かび上がってくる。

字がひたすら羅列されている物から、銃騎兵団の兵が映ったものまで多数あった。

「諸君等を急に呼び出したのは他でもない。奴らの計画が動き出しおった」

‘計画’そのフレーズで場に一気に緊張が訪れる。

「計画……もしや、改造に踏み切ったと…」

ジェドの光が明滅する。

「いや、その1歩手前、改造の為の材料を集めにかかりよった」

総帥は、ほろぐラムの中から数枚の映像をピックアップし、拡大する。

その映像には、銃騎兵団の兵士が山の中を歩く様子や、遺跡の壁画と思われる映像などがあった。

「ドートボン遺跡……ウォルター山……」

今まで黙っていた白い玉が明滅する。

「第三師団長クロスザード・バラム。主の言う通りじゃ……っていうかお主いたんだ」

「ひどい……我、最初に来た……」

心なしか白い光が薄くなっている気がする。

「クロス、相も変わらず、影が、薄い、男だ」

言いつつも初めて光る黒い玉。ハスキーな女性の声だった。

「そんな本当の事をいってはダメよ、第五師団長ミラ・ガゼル。そしてあなたの言葉は聞き辛いわね」

黄緑の玉、ジュディがおほほと笑いながら言う。

「話をすすめるぞい。このドートボン遺跡に記された壁画、ここにおる者ならこれが何だかはわかるであろう？」

「２０００年の昔、地上に現れた恐ろしき魔獣を封印した事が記された壁画、ギャラスの咆哮」。歴史遺産ですな」

ジェドの声。いつもの冷静さはちゃんと取り戻したようだ。

「そう。この壁画は近年まで古代の民が創りだした空想のものど思

われていた。じゃが……」

「3年前、世界の各地から壁画に記された魔獣が封印されたと思われる場所が発見された。そうでしたわね？」

ジュディの声。

「正確には、三ヶ所。北方の、山奥。東方の、砂漠。そして、西方の、山中」

やはり聞き辛いガゼルの声。

「そうじゃ、そしてその中の一つ、ドートボン遺跡のギャラスに関して、動きがあったのじゃ」

「動き……良い予感……しない……」

クロスの声が暗く響く。

「その予感は恐らく的中じゃ。銃騎兵団の奴らがいわゆる‘封印宮’に手を出したのじゃ」

「封印宮に！？それは本当ですか？」

ジェドの声に動揺が混じる。

「確かな情報じゃ。このままでは最悪のシナリオも考えられるじゃろうな」

「魔獣解放……。我々にとって未知の脅威ですわね」

「オールラブ殿の言う通り、どんな危険を持っているか分からない物の封印を解こうなど、奴らは正気を失ったのですか！」

ジェドは再び感情的に言葉を発する。

「待て待て。わしとて奴らのよく分からん企みを見逃す程アホではない。ジェド、ドートボンよりもっとも近きは主とその部隊じゃ。至急調査を始めてくれ。上との交渉はわしがやる」

「分かりました、総帥殿。至急調査に向かいます」

「それからリン、お主には銃騎兵団側の情報を集めてもらいたい」

「了解でーす♪集めちゃいまーす♪」

「クロスは北方、ガゼルは東方の銃騎兵団に対し目を光らせ、動きが有りしだい報告せよ」

「了解、です」

「承知……」

二人の返事を聞くと、総帥は大きく一回頷き、ホログラムの映像を消す。

「では、連絡会議は以上！解散！」

「「はっ」」

すると五つの光の玉は次々に消えていった。

「ふぅ……」

総帥は深くため息をつくと、天井を見つめる。

「同じ軍隊の中で探り合いなど……嫌な時代じゃ」

帝国軍魔術兵団総帥、マクス・ウェルデン、その心の声であった。

……。

…。

―サギルタ・シオンの家―

「お咎め無し!?」

俺ことシンゴは驚いていた。何故か?

さっき軍からお達しがあり、シオンの反逆罪に関しては不問とする。

というのを聞いたからである。

「でもまぁ無罪になるならよかった……んだよね。シオンは逃げ回らなくて済むわけだし」

俺は素直に喜ぶが、シオンの表情はどこか浮かない感じ。

「えぇ……。ですが、シンゴさんが……」

「俺の事は気にしないで、元より逃げ回るのは覚悟の上だから」

言いつつ、俺は靴ひもを結び直す。

「俺にはやらなきゃいけない事がたくさんある。この国をどげんかせんといかんし、シオンのお父さんも捜さないとだし」

「もう、行ってしまうんですか？」

シオンのどこか名残惜しさすら感じさせる表情。

「これ以上ここにいたらシオンに迷惑を掛けちゃうからね」

「私……シンゴさんに助けていただいてばかりでした」

シオンは近くにあった机の引き出しから、何かを取り出す。

親指位の大きさの真っ青な水晶が付いた、綺麗なペンダントだった。

「これを。お礼といってはなんですが、不思議な加護の力を持った石なんです。きっとシンゴさんの事も守ってくれます」

シオンはペンダントを俺に差し出す。

「……ありがとう。存分に守ってもらうことにするよ」

俺はペンダントを受け取る。

「あ、じゃあお返しに……」

俺はポケットの中からあるものを取り出す。

「これ、俺の国のお守り。持ってるだけでシオンの事守っちゃうから」

赤い布の袋に家内安全の文字。完全な日本のお守りだ。

シオンは俺からお守りを受け取ると、大事そうに握り締めた。

……なんだか照れ臭いな。

『お取り込み中失礼しまーす。よろしいですか？』

よろしくない。よろしくないのが分からなかったのかねゆめじん君。

『と言われましても、そろそろ軍が動きだしたからこちらも動かないと面倒な事になっちゃいますよ？』

軍が？俺の捜索か？

『いえ、どこかに出掛けるみたいな感じでしたが、とにかく長居は無用です』

そうだな。

「というわけで、俺はそろそろ行くよ」

俺はシオンから貰ったペンダントをポケットにしまう。

「あの、また会えますよね」

「もちろん。シオンのお父さんと一緒に帰ってくるよ」

俺は渾身の笑顔で答えると、全身に力を集中させる。

「じゃあ、またね！」

フッ。

俺は一瞬にしてシオンの家から懐かしき森の中へと移動した。まぁ、瞬間移動を使ったのである。

「さて、これからどうしようか」

『ここから真っ直ぐ東、首都へ向かいましょう』

「あいあいさー」

俺は振り返る事無く歩きだした。東へ。東……へ…。

「ねぇ、東ってどっち？」

『……はぁ』

もしかしなくても前途は多難かもしれない。

……。

…。

―サギルタ・シオンの家―

シオンは一瞬で消えたシンゴに一瞬驚いたが、なぜだかすぐに心の中で納得していた。

「待っています。シンゴさん」

シンゴのくれたお守りをじっと見つめつつ、シオンは優しい声で、今しがた旅立った恩人に向けて言ったのであった。

……。

ドンドンドン！

「シオーン！起きてるー！」

シオンの家のドアが壊れるんじゃないかというぐらいに叩かれる。

「クルク？どうしたの？」

やってきたのは昨日もやってきた少女クルクであった。

「おはよー！リュナさんとこの赤ちゃんの様子、見に来ないかって。行こうよ！」

言いつつもクルクはシオンの腕を引っ張り強引に連れていく。

「ちょ！クルク！行くから！行くからぁ！」

シオンはクルクに引っ張られるがまま、家を出た。

その顔は、満面の笑顔だった。

［9］秘密の会議と旅立ちの朝とお守りと（後書き）

次回から新しいお話です。

新しい方々がまたまた出るとか出ないとか。

どっちかです！

→当たり前です。

［１０］静かな村での一件（前書き）

久しぶり過ぎる投稿です。

と言っても反応してくれる方がいるかどうか……。

とにかく１０話です。二桁です。

［10］静かな村での一件

森の中をひたすらに、ひたすらに東へと進む。

木漏れ日が差し込むうららかな午後。洒落てるねぇ。だが、今の自分はそんなもの毛ほども感じる余裕はない。

「おぅい。次の町か村はまだ着かないのか？」

『えーとですね。もうすぐ小さな村に着くはずです』

「村か……。まったく、早く着いて休みたいもんだ……」

『着きましたよ』

「はっや！」

長かった森の木陰ルートがようやく終わり、その先に、まさに村があった。

「まさにファンタジーの世界の光景だな」

１００％木製の家々が立ち並び、地面はほとんど整備されていない。

『こちらではこれが一般的なんですよ』

「まっ、そりゃそうだな」

俺は村に入っていく。

……なんだろう。不気味なくらい静かだ。

今は午後の3時くらいだろう。なんだ、村人全員神隠しにでもあったのか？

と、俺が不気味な村について考えを巡らしていると、

「ウオォォ！！」

背後から野太い唸り声。

振り向こうとした瞬間、頭に衝撃が走る。

「っ！……いって！何しやがんだ！？」

攻撃の主を見ると、上半身黒いタンクトップみたいなの、下は灰色の麻っぽい生地のズボン。そしてモヒカン。しかも赤い。

俺は若干ジンジンと痛みが残る頭を気遣いつつ、立ち上がる。

「え！？何でお前立てる！？」

信じられない、みたいな顔で俺を見てくるモヒカン。

「そりゃ人間だもの」

立って当然。

だが、モヒカンは尚も手に持った棍棒と俺とを見比べる。

……棍棒？

そう、奴はどう軽く見積もっても重量５キロはありそうな木を削って作ったのであろう棍棒を持っていたのだ。

しかもよく見れば一部が少しへこんでいる。もしかしなくても俺の頭はあそこに当たったのか？

『まぁ、普通の人間だったら死んでますね』

「普通だったらって……俺は普通じゃ……ないね、どう考えても」

思い当たる節がありすぎる。

と、恐らく渾身の一撃を当てたであろうモヒカン君は、俺がほぼ無傷で立ち上がったのが余程ショックだったらしい。

「う、うわぁぁぁぁぁ！！」

叫びながら走って逃げてしまった。

「……ていうか何者？この村は皆あのくらいファンキーな見た目で、よそ者はとりあえず頭ぶん殴って殺そうとしちゃう村なのかい？」

だとしたら嫌だ。

『いえ、この村は林業と農業で成り立つまともな村なはずですが』

「実際まともじゃなかったんだけど……、ていうか俺なんで死ななかったの。ていうかほぼ無傷だし」

殴られた箇所にはもうほぼ痛み無いし。

『あなたが無自覚に体に流せる力の量が増えたからですね』

「ほうほう。それは俺が強くなってるって事？」

『ええ、やはり実戦という極度の緊張状態を経験した事により、大幅に力が増したと考えられます。それにより、あなたの基本的なポテンシャルも上がったというわけです』

「だから普通なら死ぬところがほぼ無傷なわけだね。俺すげぇ」

『正確には私のあげた力がですが』

「はいはいそうですね。じゃまともな人探しに行きますか」

『……不当だ』

ゆめじんのボソッとした一言は置いといて、俺は村の探索を始めた。

「見事に人の気配がしないねぇ。皆で慰安旅行でも行っちゃったんでないかい？」

通行人はおろか建物の中も人のいる気配がない。

『こちらにはそういうの無いですから』

「いないならいないでますますさっきのモヒカンが気になる」

俺の中のモヒカンに対する思いが高まる中、村の集会所と思われる場所を発見する。

そして、集会所の建物は、他の建物とは様子が違った。

「人だ……！よく見りゃさっきのモヒカンと同じ格好で……何やってんだ？」

俺は何となく不穏な空気を感じ取り、透明になりながら様子を伺う。

すると、そこへ先程のモヒカンが走ってくる。

「お、おい！大変だ！侵入者だ！」

「侵入者だぁ？てめぇ入り口の見張りだろうが、何やってんだよ！」

集会所の前にいたオールバックの男がモヒカンに怒声を飛ばす。

「それが……こいつで殴っても死なねぇどころかビクともしねぇ奴だったんだよ！」

モヒカンは棍棒を示しつつ言う。

「はぁ！？んなやついるわけねぇだろうが！てめぇ寝言は大概にしやがれ！」

「本当なんだよ！見慣れねぇ服着た奴でよ。とにかくやべぇ奴なんだよ！」

モヒカンは涙ちょちょぎれ状態でオールバックにすがる。

俺、そんなヤバかったんだ……。

「分かったよ！とりあえず頭に伝えて来い！」

オールバックは集会所の扉を開け、モヒカンを中に入れる。

頭？侵入者？……。

「この村、そこそこヤバい事になってんじゃないの」

俺はこの村に起こったある事態を推測する。

『ですね。私も同じ事を考えていました』

となれば、後は事実確認あるのみ。

俺は集会所の壁に手を付くと、新しい技を実践する。

「えい……」

ぬるん。

忍法、壁抜け。

俺の透明の体はぬるぬると気持ち悪い感触の中、集会所の中へと入っていく。

ていうか壁抜けってぬるぬるするんだ……。

中に入ると、そこは広い体育館みたいな空間になっていた。区切りも何もなく、入り口からストレートにこの広間に通じているらしい。

広間には、まぁ悪そうな人相と服装のコンボがお似合いの方々が鎮座し、酒を飲みかわしていた。

恐らくこいつらがこの村の異変の原因の幹部といったところだろう。

と、モヒカン君が入ってくる。

「頭！大変ですぜ！」

「うるせぇ！でけぇ声出しながら入ってくんじゃねえ！！」

と、モヒカン君の5倍くらいの声で怒鳴る入り口付近にいた髭と髪の毛と眉毛がつながった太ったおっさん。顔面の黒が多いな。

「す、すいやせん！」

モヒカン君は乱暴に頭を下げる。

「でも、頭！本当に大変なんです！俺の棍棒より硬い奴が現れたんです」

……なんか俺の形容の仕方が段々雑になってる気がする。

「どういう事だ。言ってみろよい」

広間の上座に座っていた貫禄溢れる白髪のおっさんがモヒカンを促す。こいつが頭か？

「へ、へい……」

モヒカンは俺をぶん殴った事、そして俺が死なないどころかダメージを感じてる様子がなく今も村の中にいるかもしれないということを伝えた。

「村の奴らが戻ってきたのかもしれやせんぜ」

「いや、棍棒でぶん殴られて無事な奴なんて、軍の連中じゃねぇか？」

「いや、こいつの話じゃ見た事ねぇ服を着ていたらしいじゃねえか！」

さながら小田原評定の様相を呈した男達の会議は、

「落ち着け！騒ぐな。騒げば理性を失う。引き出せる答えも引き出せなくなっちまうぞ」

頭らしき男の一喝。周りの奴らはピタッと黙る。

すげぇ。並大抵のおっさんじゃねぇな。

「まずはその得体の知れねぇ奴の居所を突き止めろ。見つけたら騒がずすぐに俺に報告しろ。分かったな」

「「おう！」」

ザ・男の返事。

ていうか頭の統率力すげぇな。

とか俺が考えていると、モヒカンをはじめ頭を除いた連中はぞろぞろと外へ出ていった。

集会所には頭一人。

チャーンス。だと思う。

俺は透明のままそろりそろりと出入口の扉に近付くと、内側から鍵をかける。

「なんだ？」

カチャリと鍵のかかる音に、頭が反応する。

何の音かと立ち上がりかけたその時、

「動くな」

透明状態のまま声を出す。

「誰だ？」

頭は多少驚きつつも、冷静に辺りを見回す。

「無駄だ。我は実体なき存在。貴様らの目では捉えられん」

キャラモードスイッチオン。

「目では見えねえ……ね。で、そんな透明野郎が俺になんの用だ」

ギクッ！適当だよね？適当に言ったんだよね？

「貴様、この村の人間をどうした？」

「は？知らねぇよ。ていうかてめぇ何者だ。姿見えねぇなら見えねぇなりに教えてもらいたいね」

言いながら煙草に火を点ける頭。

むぅ、その余裕と渋さがムカつく。

「えいっ」

ボンッ！

「ぬわぁ！？」

タバコの先っぽを小さく爆破させてみた。頭の顔が一気に驚きに染まる。

「我を軽んずるならば、いずれはその煙草と同じ運命を辿るだろう」

やばい、楽しくなってきた。

「くそっ。変な脅しかけてきやがって……。だが生憎と、いくら脅しをかけてきてもな、俺はこの村についちゃ何にも知らねぇからどちらにしろ無駄だぜ」

頭は不敵な笑みを浮かべる。

知らない？そんな馬鹿な。

「貴様等が村人を監禁するなり追い出すなりしたのではないのか？」

「残念ながら違うな。俺達がここに着いた時にはすでに村にゃ誰もいなかった」

誰もいなかった？

どういう事だ。奴らがこの村の人間を拉致監禁してたんじゃないのか。

「誰もいなかった……。それを証明する術はあるのか？」

「これだっていう証拠はねぇな。だが、周りの家に入れば俺の言ってる事も少しは分かるはずだぜ」

頭は新しい煙草に火を点けながら言う。

「家に？どういう事だ？」

「ここ数日の生活の跡が見られねぇんだよ。俺たちも偶然最初の一軒だけだと思ったがよ、調べてみたら村中そんな状態だった」

思い出すように上を向きながら話す。

嘘をついている様には見えない。

「そうか……」

俺は考えていたのと事態が違うので少し考える。

ドンドンドンッ！

集会所の入り口のドアが勢い良く叩かれる。

「頭ぁ！！えらい事なりやした！！」

ただ事とはとても思えない慌てようだ。

「なんだ！なにがあった！」

頭はその場で応える。

「お嬢が、シェリア嬢がどっか行っちまいました！！」

「なんだと！？」

ガタン。と頭は明らかに動揺した様子を見せ、辺りの食器やらをひっくり返すのを構わず、立ち上がる。

何、誰？誰がいなくなったって？

俺は変な板挟みにあいつつ会話に耳を傾ける。

「いなくなったとはどういうことだ！？見張ってたんじゃねえのか！！」

頭はなおも動揺した様子を隠さずに声高に続ける。

「へ、へい。見張ってはいたんですが、一瞬目を離したすきに……」

部下は、姿は見えないが、心底申し訳なさそうに話す。

「他の場所は探したのか！？」

「へい。でも、今のところどこにも……」

俺は、なんだか扉ごしに話しているのはどうかと思い、扉の鍵を開けてやることにした。

「頭……。どうしやしょ、あ、鍵開いた」

部下は扉を開けて中に入ってくる。
その姿は汗だくでぼろぼろだった。

「どこにもいないって……。お前、こりゃまさか……」

頭は顔面蒼白になりつつわなわなと口を震わせる。

「頭、なにか思い当たる節が……！」

「あいつ……山に戻ったんじゃねぇだろうな」

頭がその言葉を口にすると、部下も強い衝撃を受けたような顔になる。

「え、でもそんなことしたら……」

二人はこの世の終わりみたいな顔をして、固まった。

ので、

「……あのぉ」

空気を読まない感じで口を開いてみた。

「あ？あんたまだいたのか。悪いが今あんたに関わってる場合じゃねぇんだよ」

頭は未だ謎の存在たる俺をずばっと切り捨てる。

「いやいやいや。なんか事情がさっぱり……」

「あんたには関係のない話だ。おい！すぐに探しに行くぞ。軍に見つかったらえらいことになる」

ピクッ。

『軍』というワードに俺の体は無意識に反応する。

「軍？軍が関わってるのか？」

「ああ、そうだよ。もういいだろう、行かせてくれ！娘の命が懸かってるんだ」

娘？頭のって事か？

ぽくぽくぽく……。

ちーん。

よし、なんとなく事情が飲み込めたぞ。

「探しに行く前に詳しく話を聞きたいね、主に軍寄りの」

俺は透明化を解く。もう謎の存在ごっこは終わりでいいでしょう。

「うぉ！あんた、いつからそこにいたんだ！？」

突然視界に現れた俺を見て分かりやすく驚く頭。

「極めて最初から」

俺はニカっと場に不似合いな笑顔を見せた。

……。

……。

「俺たちは元々この辺りの山で木の伐採や狩りなんかをして暮らしてたんだ」

俺は村から山へ向かう道中頭から今日に至るまでの事情を聞いていた。

「だが、ある日突然軍の奴らがやってきて俺たちを山から締め出しやがったんだ」

「なんで?軍は理由を言わなかったのか?」

俺の質問に頭は首を振る。

「俺らが何を聞いても、『軍の管理地域に指定されたから』の一点張りでよ。取り付く島もなかった」

頭は苦々しい表情を崩さずに言葉を続ける。

「挙げ句の果てには軍の奴ら銃を持ち出してきやがってよ。『これ以上は反逆罪とみなす』とか脅しかけてきやがったんだ」

「それで、この村に?」

「ああ、悔しいが軍とまともにやり合える訳はないからな。それに……」

頭は自分の肩にかかってる猟銃をしっかりと背負い直す。

「俺たちにとってこいつは殺すための道具じゃねえ。こいつは生きるための道具なんだよ」

「……なるほど」

俺は頭の誇りのようなものを少し、見たような気がした。

「で、その娘さんってのは何歳くらいの子なんだ?」

山道に入ろうかという頃合いで俺は頭に聞いた。

「ああ、今年7つになる娘でな。名前はシェリアっていうんだ」

「シェリアちゃんね。どんな感じの子？」

何気なく聞いたつもりだっが、頭はぐいと身を俺に半歩寄せてきた。

「そりゃお前俺の娘だからな。めちゃくちゃ美人だぞ」

「へ、へぇ……」

頭のたっぷりと蓄えられたお髭が備わった顔面を見るかぎり説得力ゼロなのは内緒だ。

「に、にしても山に入ったらまずいってのは、猛獣なんかがいるからか」

それ以外になにがある、と思いつつ俺は話題を逸らそうと聞く。

「もちろんそれもある。だが、それ以上に軍の縄張りに入っちまうのが怖い」

「軍の縄張り？さっき言ってた管理地域ってやつか」

「ああ、もし不用意に入ろうものなら下手すりゃ銃殺、下手しなくても拘束はさけられないだろう……。さっさと行くぞ！！」

言ってて自分で不安になったのだろうか。頭は歩調を早める。

「親だな」

俺は当たり前の事を呟きつつ、頭の後に続く。

さぁ、山狩りの始まりだ。

［10］静かな村での一件（後書き）

次回から物語は段々と大事に発展いたします。

させてやりますとも。

【11】帝国軍銃騎兵団第一師団所属第五特務小隊。通称『銀蝿部隊』（前書き

タイトルが漢字でしかない！

たまにはそんなのもありってことで。

11話でございます。

【11】帝国軍銃騎兵団第一師団所属第五特務小隊。通称『銀蝿部隊』

陽がもう少しで傾こうかという頃である。

俺は村で出会った……という表現にしておこう、狩人の頭の娘を探す手伝いをすることになった。

「陽が落ちる前に探さないと、えらいことになるぞ！」

頭は大きな声で周りの部下達に檄を飛ばす。

「へい！」

部下達もそれを受けて力強い足取りで山に入っていく。さすがに慣れた足取りだ。

「あんたは奇妙な術が使えるようだが、その術で娘を探すことは出来ないか？」

頭は隣にいた俺に聞いてくる。その顔には焦りの色が滲んでいた。

「人探しの術か……。分かった、やってみるよ」

俺は頭と別れると、自分に透明化を掛けた上で、半重力で山肌がギリギリ見渡せるくらいの場所まで浮かぶ。

ちなみに透明になったのは軍の奴らに見つかったら厄介だと思ったからである。

『なにをする気ですか？』

久々のゆめじん。

「いや、うまく出来るかどうか分からないけど現代技術の応用をしようと思って」

『どういうことですか？』

「いわゆる熱源探知ってやつさ。それもかなり広域なやつ」

俺は俺の目をサーモグラフィーにしてみる。

「おお！」

出来た。木々が低温で青。頭の部下と思われる集団が赤やオレンジになってる。

「これで上空からしらみつぶしに探す」

『なるほど、面白い使い方をしますね』

「はっはっは！まぁ、発想力の勝利だわな」

『そこまで誉めてないです』

スパッ。っと切れ味鋭いゆめじんのお言葉。

「……ゆめじんって俺の事嫌い？」

『さぁ～～～……？』

もうやだ、こいつ。

俺は気を取り直して探索を始める。

たまに鹿や山猫なんかを見付けはしたが、人影とおぼしきものは見付からない。

「こりゃ根気がいりそうだ」

俺はさらに探索を続ける。

そして、探索を初めてから1時間が経過した頃、一旦頭達の元に戻ろうかと考えはじめた頃の事。

「ん？んん？ありゃなんだ？」

俺は一直線に山道を駆け抜けていく2つの熱源を見つけた。

「よし、サーモグラフィー解除、と」

俺は降下しつつ目を通常の状態に戻す。

すると、そこにいたのは7歳の女の子ではなく、若い1組の男女であった。

……。

……。

男は女の手を引っ張りひたすらに先へと進む。

女の方は既に息が上がっていたが、無理矢理にでも足を動かしている感じで、男に付いていこうとしていた。

彼らは追われていた。恐ろしい奴らに。

捕まれば殺されるだろう。だからころ全力で逃げねばならない。

だが、次の瞬間女が足をぬかるみにとられ前のめりに倒れる。

「大丈夫か！？」

男は女を立たせようとその手をとる。

しかし、女が足を動かそうとすると、女はその整った顔を苦悶の表情に染めた。

足を捻ったのか。足首にあざのようなものが見える。

「っ……ダメ、動けない」

「頑張れ、もうすぐ村に着く。そこまで行ければ逃げ切れる」

男は女を抱え上げ、なおも道を進もうとする。

……ブゥゥンッ。

虫の羽音にも似た振動音。最初は一つだったその音は、折り重なるようにその数を増やしていった。

奴らが来たのだ。

音は前からも後ろからも聞こえる。二人は囲まれていた。

「……くそっ！！」

「もう……だめ……」

男は悔しさから憤り、女は恐怖からガタガタと身を震わしていた。

その次の瞬間である。

「どっせぇぇい！！」

空から人間が降ってきた。

……。

……。

俺はたまたま見かけた男女の様子がおかしいことに気付き、とにかく降りてみることにした。

「どっせぇぇい！！」

そしたら結構勢い良く降りちゃった。てへり♪

と、ふざけてる場合じゃないな。

「どうなすったお二人さん」

俺は怒ってる男と震えてる女に声を掛ける。

「……」

二人は固まっていた。俺の方をじっと見ながら。

「ん？なにか？」

そんなに見つめられては恥ずかしいではないか。

「あ、あんた……」

男の方が口を開く。

「い、今空から降ってきた……」

「うん、その通り。でも安心して、怪しい者ではないから」

『無理言わないで下さいって感じですね』

それはどうもすいませんでした。

「あ、あんた帝国軍か……？」

男がじりじりと俺から距離を取りつつ聞いてくる。

「いやいや。その逆。むしろ軍の敵だから」

「で、でも、見たことない格好で空から降ってきたし……」

「少なくとも君らに危害を加えるつもりはないよ。むしろ助けに来たくらいの気持ちだから」

俺は両手を軽く上げて攻撃の意志が無いことを伝える。

「だ、だとしても……」

「ん？」

男はガタガタと震えだす。

「もうだめだ！！あいつらに囲まれたら助かりっこねえよ！」

「あいつら……って誰？」

と、俺が聞いた次の瞬間。

ブゥゥン……。

蚊か蝿が飛ぶようなあの耳障りな音が四方から響く。

「うわっ……何、この音？」

嫌悪感すら覚えるサウンドの第合唱は正直こたえる。

「銀蝿だ……。奴らに囲まれたんだよ！」

男は嘆きながらべたりと膝をつく。

「銀蝿？こんなにでかい音したって？」

「違うよ！帝国軍の銀蝿って呼ばれる特殊部隊の事だよ！」

帝国軍の特殊部隊。

そのワードが俺の中でピピーンとひっかかる。

「じゃあ、この音はその特殊部隊の連中が出してんだな？」

俺は確認する。

「そうだよ。あいつらはあの音で互いにコミュニケーションを取りつつ獲物を追い詰め殺すんだよ……」

男はのんきに構えている俺が気に食わないのか涙のたまった目で睨んでくる。

「……分かった。俺がなんとかしてやるよ」

俺は男に背を向けると、自分の耳の裏に手のひらをあてる。

よく音を聞こうとかそんな単細胞な事をしようとしてる訳ではない。

『何しようとしてるんですか？』

訝しげに聞いてくるゆめじん。

「人類初の人間ソナーの誕生だ」

『は？』

理解が追い付いてないであろうゆめじんは置いといて、俺は聴覚に全ての力を注ぎ込む。

敵さんが音を出してるというのであればそれを逆に利用しようという算段である。

目を閉じ、耳の感覚を研ぎ澄ます。

敵の出す振動音が俺の耳に届くと、瞬時に物理的な情報として頭で処理される。

そしてそれが処理されきった時、奴らの位置情報は俺の脳内レーダーに「点」として表示される。

こうなればこちらのものだ。

俺は一番近くの点に向かい、圧縮した衝撃波を放つ。

「ゴファッ……！！」

命中。茂みの中から全身黒ずくめの格好をした奴が吹っ飛んでいく。

「本当にやれば何でもできるもんだなぁ」

俺は自分の力の凄さを再認識しつつ、次の獲物に狙いを定める。

「どりゃぁ！！」

まさか反撃を受けるとは思いもしなかったのだろうか、銀蝿部隊の連中は慌ただしく動きだす。

動かれると厄介だ。この急造ソナーでは静止している物なら問題なく捉えられるが、動いている物、しかも複数となると「点」で捉えてたものも途端にボンヤリした物に変わってしまう。

「くそ。面倒くせぇな」

俺はぼんやりとした感覚を追う。

さすが蝿というべきか不規則な動きで俺を囲みに来てる。

うざったい動きだ。

「……ぬぉぉ」

うーん、なんかイライラしてきた。

「ちゃっちゃと出てくるなら出てきやがれ！」

俺が声を張り上げた次の瞬間、さっきまでの振動音が嘘のようにピタリと消えた。

どういう事だ？と口にする間もなく、辺りの茂みから黒い何かが一斉に飛び出してくる。

「うぉ！！」

奴らだ。銀蝿部隊は手に短剣のようなものを持ち、絶妙な時間差で斬り掛かってくる。

「ぐぁ！！なんだこれ、すげぇ痛ぇ！！」

体は例によって鉄の硬さに固めたが、それでも数ヶ所に切り傷を付けられた。

「なんだよアレ！なんで鉄切れちゃってんだよ！」

俺は予想外にダメージを受けた事で多少動揺していた。

『高周波ブレード、ですね』

「高周波……って何？超音波みたいな感じ」

『う～ん……。似てますが違いますね。詳しい説明は省きますが、要は強いエネルギーであの剣の殺傷能力を大幅に向上させてるんです』

「へぇ～。どうりで痛いわけだ」

『普通は痛いでは済まされませんけどね』

「そうなの？」

『ええ、骨ごと切り落とされてもおかしくない武器ですからね』

「へ、へぇ……」

よかった、体堅くて。

俺がゆめじんからの説明を受けている間、茂みからは絶えず振動音が響き続ける。

「にしてもこうもヒット&アウェイな奴らだとなかなか厄介極まりないな」

こっちには謎の男女を守るっていう任務があるっちゅうのに。

なんとか一網打尽にする方法はないものか……。

考えながらも俺は衝撃波を撃ち続ける。相手に態勢を整わせないための牽制だ。倒せりゃそれはそれで御の字だが。

「っと、うぉっぷ……！！」

衝撃波の一つが俺の足元に当たり、軽く土埃が上がる。

「うぇっ……！口の中に入った……」

ああ、なんと緊張感の無いことか……。

と、俺は地面を見る。

「……」

ピピーン。

はい、きました。作戦降りてきました。

「だが、こいつは結構運次第だな」

俺は再びソナーモードをオンにして奴らの位置を探る。

今度は正確な位置は探らなくていい。大体の位置分かればいい。

「……ん？」

俺の耳があることを感知した次の瞬間、

「ぬぉ！！」

再度奴らの一斉攻撃。

俺は鉄の体で耐え切る。

そして奴らは再び茂みへと戻る。

俺は腕などいくつもの傷を付けられたが、今はその痛みよりも、ある事の方が頭に強く残る。

「なるほど、そういうことか！」

俺はある事を確信すると、自分の中で作戦を整理して、じっと次のタイミングを待つ。

「さぁ来い、ハエ共が……」

俺はソナーに力を集中して奴らの動きに細心の注意を払う。

そして、

――――……。

「きた……！」

俺が言ったタイミングと同期するくらいのタイミングで銀蝿部隊は再び茂みから飛び出してくる。

ドスッ！ドスドスドスッ！！！！

銀蝿部隊の高周波ブレードは連続して俺の胴体や腕を捉え、その刀身で俺の体を貫いてゆく。

訪れる静寂。

パニくっていた男は、その光景を見て、これ以上開けられないと言う程に口と目を開いている。

誰もが俺の死を確信した。

という光景を、俺ははるか上空から眺めていた。

「はっはー！上手くはまりよったな！」

下手な悪役よろしく高笑いをあげる俺。

地上でも、刺したのが自分達のターゲットではないと認識し始めた銀蝿部隊の面々が慌てだす。

「それでは仕上げと参りましょう！必殺！」

俺は両手を広げたまま真っ直ぐ下に、銀蝿部隊に向ける。

「ハエ叩きぃっ！！！！」

俺の手から放たれた衝撃波は、地上の銀蝿部隊を地面ごと押し潰す。

ちなみに俺の身代わりとなった泥人形（彩色済み）に関してはもう跡形もなくなっていた。ちと複雑。

俺はゆっくりと地上に降りる。

「え！？あ、あんた死んだはずじゃ……」

男はあんぐりと開いた口をあんぐりとさせたまま俺に震えた指を向けてくる。

「この通りピピンピンだよ」

ピが一個多いのは、そう、オリジナリティーだ。

「でも、じゃあ、刺されてたのは……」

「土１００％のエコな身代わりマッド君だ」

適当に言ってみる。

「俺に奴らが向かってきた瞬間、俺は色付きのマッド君を自分の態勢、位置寸分違わぬ位置に召喚して、己は空中に逃げたっちゅうわけさ」

「……は、はぁ？そんなこと本当に出来んのかよ！？」

「出来るから今生きて立ってるんだが」

俺はムンと胸を張る。

「……あんた、何者だ……？」

「通りすがりのやれば出来る男だ」

俺はさらに胸を張ってみる。

「危ない！」

突如響き渡る甲高い声。

俺が振り返るとそこには、

「うぉ！」

銀蝿部隊の生き残りであろう一人が俺に高周波ブレードを突き刺そうとして、

「どぅえい！！」

俺が間一髪それを避け、逆に懐がら空きになった奴の腹に向けて、

「ストマーック！！」

強烈なボディブローをかましてやった。

そのまま数メートル先の茂みへとふっ飛ぶ銀蝿。

「まだ動けるのが残ってやがったか……」

俺は少し出た冷や汗を拭う。

「それにしても、さっきのは……誰？」

俺が声が聞こえた方を見ると、そこには、

「……ん？」

茶色いワンピースに身を包んだ7歳くらいの少女が立っていた。

ん？7歳？

俺は少し引っ掛かるものがあったが、特に気に掛けずに少女に声を掛けてみる。

「今のは、君かい？」

俺が努めて優しく聞くと、少女はコクりと頷く。

「ありがとう、助かったよ」

俺がそう言うと、少女は少し照れたように笑顔を見せる。

うーむ、可愛らしい笑顔だ。癒される。

と、俺が和んでいると、

ガサガサガサガサッ!!

茂みから何かが現れる音。俺は一瞬身構える。が、

「おうい!なんか凄い音が、って何だ、あんたか」

頭登場。相変わらず声がデカイ。

「なんだか派手に……ん?」

頭は辺りを見回しつつ、少女に視線が向いた瞬間視線が頭ごと固定される。

「?」

俺は引っ掛かった何かを今こそ解き放つべきだと思ったが、肝心の何かを忘れていた。

「し、」

し？

頭はゆっくりと少女に近づいて行く。

そして、

「シェリアー！！」

そう叫んで少女に抱きつく。

「……あ」

そうだった。頭の娘探してたんだった。うん、すっかり忘れてた。

頭が娘の無事を喜んでいるそのすぐ側で俺は、

「……」

黙っていよう。

ただその一言を胸に刻んだ。

ごめんよ頭。

【11】帝国軍銃騎兵団第一師団所属第五特務小隊。通称『銀蝿部隊』（後書き

オチがふわっとしてしまった。

銀蝿部隊……。

なんだか一昔前の暴走族の名前みたいだな。

パラリラパラリラ♪

［12］頭、語りにけり（前書き）

今回は割と短め。

喋ってばっかいます。

皆よく喋るね。

12話ですな。

［12］頭、語りにけり

無事頭の娘も見つかった我々捜索隊一同は、あの銀蝿部隊に追われていた男女と一緒に村へと帰ってきたのであーる。

……。

……。

「じゃああんたらはもともとこの村の住人なのか？」

見張りを若い衆に任せ、俺と頭、あと一部の幹部と思われるたくましくオッサン達は、男女から話を聞いていた。

と言っても女の方は疲れ果ててる様子だったので主に男の方から話を聞くことに。

「はい、私はこの村で農夫をしていました」

男はハキハキとした口調で喋る。真面目な性格なのだろうか。

「じゃあ女の方は？」

頭が聞く。幹部の目も一斉に女の方に向く。

「私の婚約者です。名前はソラといいます」

そこまで言って男ははっとしたような顔をする。

「申し遅れました。私はカイと申します」

（あー、そういえば聞いてなかったな）

これ、多分皆の心の声。

というのはおいといて。

「カイさんとやら、あんたはこの村がどうしてこうなっちまったのか知ってるのか？」

幹部の一人がカイに聞く。

「はい、これは今から1週間前の事なんですが……」

……。

……。

カイの語ってくれた話は、やはりというか、軍が絡んでいた。

「突然帝国軍の奴らが現れ、村人全員を連れていこうとしたのです」

「なんでまた？」

俺の質問に、カイは首を横に振る。

「分かりません。軍は理由など一切説明せず、武器で我々を脅し、無理矢理に連れていこうとしたのです」

「相変わらず訳分かんねぇなぁこの国の軍隊は」

俺は思わず口走る。

「全くです。で、私はソラを連れて隙を見て逃げ出したのです」

「どこから？」

「軍の……恐らく研究施設のような場所だったと思います。山中の建物で、少し急造したような感じには見えましたが」

「で、逃げ出したら追い掛けられたと」

カイは頷く。

「銀蝿部隊です。奴らに追われてはもう助からないと思ってました」

カイはそこで俺を見る。

「最初は疑ったりして悪かった。感謝している」

「い、いやぁ、何事も無くて良かった」

なんだか照れる。うむ。

「銀蝿部隊、っちゅうのか。そいつらはそんなに強いのか？」

頭が聞いてくる。

「銀蝿部隊は通称で、本当はもっと長い名前らしいんですが……。とにかく追い詰めた獲物を一斉攻撃でバラバラにするのを得意とす

る部隊だと聞いています」

「あー、バラバラに、ねぇ」

俺は腕の傷を見る。

「あの虫の羽音のような音が四方から聞こえたらお終いだと言われています」

サバンナのライオンみたいな奴らだな。

「そういえば……」

カイは俺を見る。

「シンゴさんはあの時銀蝿部隊の攻撃を見切っていたようですが、あれはどうやって……」

皆の視線が一斉に俺に集まる。

おおう、おっさん方の視線が熱いぜ。

「あー、あれはですなぁ、まさに奴らの出す音をヒントにしたんだよ」

「音を？」

「いえす。あいつらいつも不規則な音を出してこっちを撹乱するけど、襲撃の直前だけ全員同じ音を出すんだよ」

俺があの時聞き取ったのはそのわずかに奴らがユニゾンするその甲

高い一音である。

「で、それを合図に俺も反撃に転じた、とそういうわけさね」

「……」

ん？カイが俺の事を何かどえらい物を見るかのような目で見てくるよ。

「……す、すごい」

カイは絞りだすように声を出す。

「あの銀蝿部隊の音を聞き分けたっていうんですか……」

なるほどそういうことか。常人じゃあの音の違いに気付くなんて芸当はまず不可能。音波計レベルで音を聞き分けたお前何者だ、と。

「あなたなら……」

俺が面倒な思考に陥りそうになった時、カイはすがるような目で俺の目をしっかと見つめてくる。

「な、何……？」

俺が戸惑うのにも気付かぬ様子でカイは勢い良く口を開く。

「お願いです、シンゴさん！村の皆を救って下さい！」

そう言ってカイは頭を床に擦り付ける。

「村のって、この村だよね？」

「もちろんです！」

カイは頭を擦り付けたまま言う。

そうかそうか……。

……。

そういうパターンか！

俺は頼まれ属性でも付いているのか？

まぁ２回目で属性もくそも無いけども。

「無理を言っているのは承知の上です！でも、皆をこのまま見捨てる事は出来ない……」

俺が黙ってるのを、回答を渋ってるのかと思ったのかカイの口調が更に熱を帯びる。

「いや、なんというかだね……」

「ちょいといいかい兄ちゃん」

俺が即答を避けようとした時、口を開いたのは意外にも頭だった。

「おめえさんはどうして2人で逃げたんだ?」

少し鋭い口調の頭からの質問。

「え……それはどういう……」

カイは質問の真意を図りかねているのか言葉に詰まる。

「てめえとてめえの嫁になる女だけ連れて逃げ出して、残った他の連中の事は考えなかったのかい?」

頭は鋭い口調と眼光をカイに向ける。

「それは……」

「気違い揃いの軍の奴らの事だ。逃亡の落とし前はてめえらの首で、と残った連中に銃口を向ける可能性は考えなかったのかい?」

「……」

カイは青ざめた顔を俯かせ、動かない。

「そしてたまたま出会った強そうな男に、生きてる『かもしれない』村の連中を助けて欲しいと懇願する」

頭は厳しい表情をカイに向ける。

「そいつはちっとばっかし都合が良すぎやしねえか?」

場に静寂が訪れる。

しかしその静寂は、再び頭の言葉が破る。

「お前らが外に軍の横暴を訴えようと、助けを求めようと必死に逃げてきたってのは大体のところ察しがつくし理解も出来る。だが、それにしても無謀が過ぎるだろ」

先程よりは優しい頭の口調。

「……ってことだ。俺の言いたい事は以上だ。あとはてめえの胸の内で考えるんだな」

と、そこまで言って頭は俺の方を見る。

「で、あんたはこいつの頼み、聞いてやんのかい？」

俺は一瞬、考えた。だが、答えなんて考える前からあったんじゃなかろうか。

「行くよ。はなから俺は軍隊潰すのが目的だからな」

そう、俺は巻き込まれたい型。これがベストな答えだ。

「そうか、じゃあ俺らも俺らで動くか」

頭は両手をパンと合わせる。

「へ？頭も来るの？」

だとしたら大変なことに。

「いやいや、行きゃしねえよ。ただよ、俺らもこの村タダで使わせてもらってる身だしよ、ちったあ恩を返さねぇとよ。なぁ、お前ら！」

頭が言うと、周りのむさ苦しくも逞しい幹部達は、

「「おう！」」

と低音バリバリで一斉に応える。

その様子を一部始終見ていたカイは、ただただ頭を下げていた。

……。

……。

帝国軍の基地があるのはこの村から真っ直ぐ東、だそうだ。

俺は特に準備するようなものもないにで、早速出発することにした。

「しかし、本当にあんた1人で大丈夫か？」

頭が心配そうに聞いてくる。なにせ相手は帝国軍、単身向かってく奴の方がどうにかしてる。

「大丈夫。なんとかなるさ」

俺はグッと親指を立てて応える。

「そうか……」

頭はまだ心配そうだったが、俺の自身有りげな表情とこれまでの超人じみた行いの数々が脳裏をよぎったのか、これ以上引き止めるような発言はしなかった。

と、そんな頭の横から、ちょこちょこと、シェリアちゃんが俺の方に寄ってくる。

「ん？」

俺は腰を落とし、シェリアちゃんに目線を合わせる。

すると、シェリアちゃんは幾秒かもじもじとしていたが、やがてそれを握った手を差し出してきた。

「え？何、これを俺に？」

シェリアちゃんの手には、花で作った小さな輪っかが握られていた。

シェリアちゃんはこくりと小さく頷き、俺の手にそれを渡してくる。

「……ありがとう。大事にするよ」

俺は花の輪っかを受け取る。

「……気をつけてね」

シェリアちゃんはそう言うと、またちょこちょこと頭の後ろに戻ってしまった。

それを見ていた頭はというと、

「なんてこった、シェリアはあんたを気に入っちまったようだ」

なんとも言えない複雑な表情をしていた。

う〜む、父親の苦悩……でいいのかな？

俺はシェリアちゃんが一生懸命作ってくれたであろう小さな輪っかを、そっとポケットにしまった。

「よし！行きますか！」

俺は一声気合いを入れると、もう日が暮れかけてきた山道へと一歩踏み込んだ。

あえてのこの時間の出発だ。夜なら敵の目も欺きやすい。

『あなたって意外に運を持ってるのかもしれませんね』

ゆめじん登場。

「ん？どういうこと？」

『この山中に帝国軍の基地があるというのは私の情報にはありませんでした。つまり、つい最近出来た基地ということになります』

「そりゃそうだな」

『しかもこんな辺境の地に急造の基地。怪しすぎるんである程度重要な目的を持っていると考えるべきでしょうね』

「重要な目的？……例えば」

『新兵器の研究、開発。ベタなところだとこの辺りですかね』

なるほど、と思いつつ、俺にはいくつかの疑問が浮かぶ。

「だとしてもここを選ぶ理由ってなんだよ？そしてなぜ村の人達をさらう？」

「この場所が選ばれた理由については私も図りかねます。しかし、村の方々については残念ながら思い当たる節があります」

「残念？一体何を思い当たっちゃったんだよ？」

俺が聞くと、ゆめじんは一拍間を空けて、

『人体実験。薬物などによる能力強化の実験台にするつもりではないかと』

「！！おいおい、そいつはどうにも穏やかじゃないぞ！村の人達をモルモットにしようってのか？」

『まだ私の推測でしかありませんが、そうとでも考えなければわざわざ村の人達を連れてはいかないでしょう』

ゆめじん個人の推測。確かにそうだが、カイ達が逃げようとする際に銀蝿部隊が追い掛けてきた事を考えると、あながち間違いではないのではないかと考えてしまう。

「よし、急ごう！」

俺は歩調を早めた。

ちなみに靴を光らせているので足元は案外危なくないぞ。

［12］頭、語りにけり（後書き）

次回、帝国軍に動きあり。

どう動くかは分からないが。

とにかく動く。

では。

［13］研究者バルドー・ヴィルスラム（前書き）

よく喋るなぁ。

13話でごわす。

［13］研究者バルドー・ヴィルスラム

―帝国軍銃騎兵団第１２中継基地―

サギルタからやや北東の方向にその基地は位置していた。

その名が表すとおりここより西方に向かう部隊に対し、食料や武器などを含めた物資の支援などを目的としている。

その基地の司令官室に、ある訪問者が訪れていた。

「アリド大尉はこの基地の司令でもある。その大尉が不在、しかもその理由が言えぬとはどういう事だ」

少し声を荒げる黒ずくめの鎧。魔術兵団の男だ。

黒の鎧の男が並ぶように立ち、その間には、魔術兵団第一師団長のジェド・ナイアンが立っていた。

「アリド大尉は視察に出ていると私は何度も申しているのですが……」

対するまだ若いであろう銃騎兵団の兵士は、淡々と喋る。

「だからどこへ視察に言ったのだと我々は聞いているのだ」

苛立ち隠せぬ黒鎧だが、管轄の異なるこの場所では、強く出る事が出来ないため、歯痒そうな顔をしている。

「もうよい、行くぞ」

ジェドはそう言うと、１８０度方向転換し、出口へと向かう。

「え？……あ、はっ！」

一瞬戸惑った黒鎧達も、慌ててジェドに続く。

ジェドは、出口の扉の前に立つと、そこで顔を少し銃騎兵団の兵の方に向ける。

「そういえば、最近この基地では大規模な建築資材の発注があったそうだな？」

ジェドはただ事実を確認するといった淡々とした口調で言う。

「はい。前々から予定されていた基地の改築を着工に移す目処が立ちましたので」

若い兵は、少しも考えると様子もなく、まるでただ挨拶を返しているかのような口調で説明する。

「……そうか」

ジェドはそう短く返すと、部屋を出た。

「よろしかったのですか？」

黒鎧の一人が苛立ちを隠さない口調をジェドに向ける。

「あの兵とはいくら話しても無駄だ。『鍵』を掛けられてしまっている」

「な！？『鍵』を、ですか……そんな馬鹿な」

「それもかなり高レベルの鍵だ。あのままでは恐らく火で炙っても本当の事は言うまい」

「『口止め』ですか……しかし、計測板にはわずかな反応すら残ってもいませんでが……」

黒鎧の一人が黒く丸い器に入った金色の丸い板を示す。

「だから高レベルだと言ったのだ。外部に魔力の反応を漏らさない上にその効果は最高水準と言ってもいいものだ……」

ジェドは足早に基地を出つつ、その難解な表情に更に影を集める。

「銃騎兵団内でそんな術が使える者がいるとは到底考えにくい」

「ということは……」

ジェドの言わんとするところを察したのだろう。黒鎧達は辺りを気にしつつ声を潜める。

「こちらから通じている者がいると見て間違いはあるまいな。しかも、術のレベルからしてかなり高い地位にある者がな」

内通。裏切り。ジェドの言葉は二人の側近に重く響いたように見えた。

同じ帝国軍という肩書きの中にありながら、銃騎兵団と魔術兵団という2つの組織はその結成の当初から互いにライバル意識を持っていた。

一方は実戦と努力で力を培い、一方は才能と努力で力を培った。

才能は次第に選ばれた有能集団という誇りへと変わり、そして一部の者の歪んだ誇りは、才能の無い者への軽蔑へと繋がっていく。

逆に才能無き者達は、才能ある者達を、才能が無ければ何も出来ない脆き者達と罵倒した。

この争いは歴史を追う毎に激化し、今ではまるで敵国に対するかのような関係が出来上がったのである。

ジェドの言葉はその歴史の最たる悪い例とも言えるのである。

「……行くぞ」

ジェドは足早に基地の出口へと向かう。

「ど、どこへ？」

黒鎧達は慌てて追い掛ける。

「『ギャラス』の洞窟の周辺をあたる。今一番怪しいとしたらあそこしかない」

ジェドの目は、日が傾きかけた山へと向けられた。

……。
……

木々が天を塞ぐ森の中では、沈みかけた日の光などほとんど届かず、夜の暗さ一歩手前といった感じであった。

「この山には軍の基地以外には何かないのか？」

俺は森の中であろうとしっかり俺をマークしているであろうゆめじんに向けて喋る。

『ええと、この山にはドートボンという遺跡はありますが、それ以外は目立って何もないですね』

「遺跡？へぇ、ちょっと興味あるな」

『歴史遺産にもなっている貴重な壁画が残っている事で有名です』

「壁画か。なんかある種ロマンを感じるな」

『感じるのは結構ですが目的を忘れないで下さいね』

「分かってるよ。まずは真相究明、村民救出が先だ」

俺は力強く一歩を踏み出し……！

『中途半端な韻』

ガクッ。

ずっこけた。

「こらこら。若者のやる気を削いじゃあいけないよ」

俺はやれやれといった感じで改めて一歩を踏み出していく。

『で、今回の作戦についてなんですが……』

「ん？突然何？」

『今回こそは慎重を期して潜入調査から始めるべきだと思います』

至って真面目なゆめじんの声。

「うむ。それは俺も思った」

『……』

若干の間。

「な、なんだよ……」

『いえ、前回理屈並べて強行突入した人が、と思いまして……』

驚きの混じるゆめじんの声。

「こらこら。俺が突撃しか脳のない闘牛野郎だとでも思ったか」

『ええ』

ズッドーン！（派手にこけた音）

「あたた……。あのねえ、俺だって考える時は考えるのよ！前回だってそうだったでしょう？」

『前回もなんだか取って付けたような理屈だった気もしないでもないですが……。まぁ、慎重に行くというのならそれでいきましょう』

ゆめじんは奥歯に物が挟まったような微妙な言い方をしたが、今は気にしない事にした。

「今回は敵の規模も助けなきゃならない村人の数なんかもまったく分からないからな。さすがに慎重にならざるを得ないだろう」

『そうですね。軍の目的も気になりますし』

「さて、じゃあ急ぎますか！」

俺は速度を上げて、軍の基地を目指した。

それは、傍から見たら異様な建物に見えた。

山の中腹には岩肌の見える切り立った崖。

そして、その崖に沿うように、真っ白い建物が立っていた。

四角かったり丸かったり形は不規則で、ところどころ窓のような四角い穴が開いてたりしているが、その姿は軍隊の基地というよりは趣味の悪い牢獄のように見えた。

「いかにも怪しい研究やってますみたいな建物だな」

俺は目の前の個性の強すぎる建物を見つつ呟く。

『実際にやってるかどうかはこれから分かりますけどね』

「だーな。行きますか」

俺は毎度の透明化を施すと、悠々と建物に近づく。

「……さて、入り口は、っと」

俺は壁添いに進み、建物の入り口を探す。

が、

「……明らかな設計ミスだよな？」

『いえ、多分そういう事では無いと思います』

俺がいきなりこんな事を言いだした理由は単純明快。入り口が見つからないからだ。

「なぜ入り口が分かるところにない！」

『恐らくはこの基地の者にしか分からないように入り口に仕掛けを施したようですね』

「そこまでして隠したい物があるってか。上等だ、そっちがその気ならこっちにも考えがある！」

俺は適当な壁の前に立つ。

そして、両手を胸の前で組み、両手の人差し指と薬指を立てる。

『何する気ですか？』

「忍術」

『……は？』

毎度のゆめじんのリアクションは置いといて、俺は目の前の壁に向かって歩き始める。

「忍法、壁抜け」

ぬるっと。これ以上無いほどにぬるっとした感じで体を壁に通していく。

う～む。あまりいい感触ではないな。

とか考えながら俺は建物の内部に侵入することに成功する。

そして内部は暗かった。

「ここは……なんだ？」

暗さに目を慣らしつつ、俺は辺りを見渡す。

真っすぐに伸びた通路のような場所。通路の脇には等間隔くらいで鉄格子が……。

「って、ここもしかしなくても牢屋か」

『の、ようですね。それか実験動物の檻か……』

「怖い事言うなよ」

脳裏を一瞬人外の化け物みたいなイメージが駆け抜ける。

漫画の読み過ぎだな。うむ。

「とにかくここを出よう。なんか気味悪くなってきた」

と、俺が一歩踏み出そうとした時だった。

「さぁ、さっさと歩け！！」

怒号のような声。誰か来たらしい。

「やっば……！」

俺は慌てて身を隠す。

そのまま様子をうかがってると、この牢屋のストリートに3人の人影が現れたのが見えた。

前と後ろを歩くのが帝国軍というのはすぐに分かったが、間を歩く男はなんなのかすぐには分からなかった。

ボロボロの白衣に身を包み、足元は若干ふらついていた。

『あの格好。恐らく研究者かなんかでしょう』

研究者？ってことはやっぱりここはそういった類の施設ってことなのか。

『しかし、その要たる研究者が連行されているこの状況は解せないですね』

まぁ、確かに。また帝国軍のアホが無理難題でも押しつけたんでないの？

『ですが、軍にとって研究者は貴重な存在なはず。それなりの経緯があるて考えるべきでしょう』

ふむ。ではもう少し様子を見ましょうか。

研究者と思われる男は軍服が開けた牢屋に乱暴に押しこめられる。

「まったく。てめぇがアレの研究部門じゃなかったら即銃殺刑なんだがな」

軍服の一人が苛立ちも吐き捨てるように言う。

「人質逃がして正義の味方気取ったつもりかもしれないが、今頃奴らは血祭りにあげられてるな。銀蝿の手でな」

もう一人の軍服も牢屋の鍵を閉めながら言う。

その間牢に押し込められた男はただ黙っているようだった。

「じゃ、ここでおとなしく心に響く土下座の仕方でも考えてな」

軍服はそう言い残し牢屋のエリアから去っていく。

「行ったか……」

俺は恐る恐る透明化を解く。

「監視とかされてねぇよな。大丈夫だよな」

俺はキョロキョロと辺りを見渡す。

『ああ、大丈夫ですよ。その心配はいりません』

ゆめじんはあっさりと俺の不安要素を消し飛ばす。

「そ、そう……？分かるの？」

『ええ、なので安心して姿現して声出して大丈夫ですよ』

なんかやけに自身有りげなゆめじん。まぁ反論する理由もないので今は素直に頷く。

「誰か……いるんですか？」

低く弱々しい声。さっきの牢から聞こえてくる。

俺は慎重に足を運び牢の前に立つ。

中には壁にもたれかかって座るさっきの研究者がいた。

「……見たことの無い格好だな。軍の人間ではなさそうだ。……だとしたらどうやってここに入ったんだ？」

なんだか辛そうな口調で一気に話されるとなんか悪いことをしたみたいな気分になる。

「えっと……軍の人間ではないね。そしてここへはイリュージョンを使って入った」

そう言って俺は両手で壁抜けの時の『どろん』の手を作る。

「はは……。いきなりおかしなことを言う人だ。でも、現実にここにいる以上タダ者ではなさそうだ」

研究者の男は少し体勢を整え、俺の目を真っすぐに見つめてくる。

「まさか、君か？サギルタの基地を単身で潰した男とは」

それはつい先日の事。やっぱり伝わってるところには伝わってるんだね。

「そうだと言ったら？」

俺はわざとぼかして答える。

「だとしたら、君に頼みがある」

またか。また頼まれるのか俺は。

「この場所で行われる実験を、軍の暴走を止めてほしい」

男の目は真剣そのものだった。

「実験？暴走？軍はここで何しようとしてるの？」

「古代の魔獣を用いて最強の生物兵器を作ろうとしているんだ」

男は苦々しく言い放つ。

「ま、魔獣？なんかいきなりぶっ飛んだなぁ……」

「君はドートボンの壁画を見たことあるか？」

「いや、ないけど……」

「『ギャラスの咆哮』あれには古代の都市で巨大な魔獣が暴れ民が逃げ惑う様子が描かれている」

男は尚も続ける。

「近年までそれは空想の産物だと言われていた。しかし、つい数年

前、この壁画は古代に実際に起こった歴史を描いたものだというのが分かった」

「なんで分かったの？」

「実物が見つかったからだよ。魔獣ギャラスの、卵がね」

「卵？」

「そうだ。そして、軍は、私は、その時最悪の選択肢を選んでしまった……」

「最悪の選択肢って……まさか」

「そのまさかだよ。我々はそれをなんとかして孵化させられないかと考えてしまった。そして、それは実行に移された」

「け、結果は……？」

俺は半ば予想がつく質問をした。

「……成功だ。魔獣ギャラスは数万年ぶりに地上に姿を現した。……しかも2頭もな」

「2頭！？双子だったの？」

「そうだ。……もし君が噂通り人を超越した力を持っているというのであれば……アレを殺してほしい」

男の目は鬼気迫るものさえ感じさせた。

「1頭は実験用に液体漬けにされてるから我々でも殺すのは造作ない。だがもう1頭は軍の作った飼育エリアにいて今も元気に飛び回ってることだろう。君にはこの1頭を殺してほしい」

男は息を休ませる間もなく続ける。

「奴らは雌雄同体。たった1頭でもいれば子孫を残せてしまうのだ。だから、奴らは1頭も残してはいけないのだ」

男はそこまで言い切ると気付いたかのように激しく呼吸を始めた。

「はぁっ……！奴らの繁殖力は凄まじい。奴がもし外界に放たれれば、1ヶ月も経たぬ内に世界は奴らに押しつぶされる……」

男はくしゃくしゃと髪をかきむしる。

俺は気迫に押されただその様子を見ていた。が、これだけは聞かねばなるまいと口を開く。

「な、なぁ……ひとついいか？」

俺が恐る恐る聞くと、男はギョロリとこちらに目を向ける。

「なんだ……？疑問は今のうちに消化しといた方がいい」

「じゃ、じゃあ聞くけど、まずあんたは誰？研究者、でいいの？」

「帝国軍銃騎兵団付きの生物兵器の研究者だ。名は、名乗っても仕方がないが、バルドー・ヴィルスラムという者だ」

「じゃ、じゃあバルドーさんとやら、あんたなんで牢屋に入れられたの？」

「頭が堅くて腐ってる軍人共を怒らせたから……では答えにならないな。実験用の人質をな、逃がしてしまったんだよ」

バルドーは口の端に小さく笑みを浮かべる。

「人質？しかも実験用って何？」

「ギャラスはね、それ自体が兵器って訳じゃないんだよ。どんなに強くても言うことを聞かないんじゃ野性の猛獣と変わらないからね。だから、ギャラスの力を言うことを聞く人間にくっつけて強くしよう。奴らはそう考えた」

「人間にって……まさか！」

「恐らくそのまさかは限りなく正解だろうね。そう、奴らは近くの村から連れてきた人間にギャラスの力を与え、その反応と結果を調べる実験をしようとしているんだ」

「それって……村の人達はどうなるんだよ！」

「実験の成否に関わらず、最終的には口封じで極刑だろうね」

バルドーの口調は重い。

「っふざけんな！！んな馬鹿な事させてたまるかよ！！」

人の命が下らない実験の為に無下にされようとしている。それは俺の中の怒りに火を点けて余りあった。

「だから私はあの男女を逃がしてしまった。正確には逃亡の手助けをした、というのが正しいのだろうがね」

バルドーの言う男女。それは俺の脳裏に浮かぶ男女とおそらく同一だろう。

「その男女って、若い恋人同士みたいな2人か？」

念のためにと俺が聞くと、バルドーは少し驚いた感じでこちらを見てくる。

「そうだが……知っているのか？」

「知っているも何もその2人に会ったからね、数時間前に」

ガタッとバルドーは身を乗り出してくる。

「2人は無事か？銀蝿からは逃れられたのか？」

「落ち着きなさいな。2人は無事だよ。麓の村で保護されてる。あと銀蝿は追っ掛けてきた連中に関してはハエ叩きの刑に処したから大丈夫」

俺はグッと親指を立てる。

「ハエ叩き？……ま、まぁいい、2人は無事なんだな。良かった……」

バルドーは心底安堵したように目を細める。

「だがまだ安心は出来ない。村の人間はまだ大多数が囚われ、それを守る銀蝿もまだ数が残っている」

「え？銀蝿ってまだいるの？」

「無論だ。逃げ出した一般人相手に全力を傾けるような真似を奴らはしない。隊長以下精鋭がこの基地には残っている」

「そうなんだぁ……」

少し憂鬱になる。あいつらの音嫌いなんだよなぁ。

「急いでくれ。この軍の計画は成否に関わらず多大な被害をもたらすだろう。そうなる前に止めなくては」

バルドーは俺の目を真っすぐに見てくる。

「分かった。でも、最後に一つだけ聞かせてくれ」

「なんだ？」

「バルドーさん、あんたなんで軍を裏切った？」

これだけは、聞かずに行く訳にはいかなかった。

「……」

一瞬の沈黙。その後、バルドーは穏やかともとれる顔になり、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「……命に、償いがしたくなってね」

「え？」

「人の命を奪うための研究に嫌気がさしたんだ。と言ってはきれいごとになってしまうかな？」

バルドーの哀しみすら漂う笑顔に、俺はゆっくりと首を振る。

「いや、きれいごと結構。分かった、じゃあ俺も命を守りに行ってくるよ」

俺は立ち上がると、真っすぐに牢屋の出口に向かった。

残されたバルドーは、壁に背を預けて座る。

「……いいや、所詮きれいごとなんだよ」

次の瞬間バルドーは激しく咳き込む。

「……ハァ、ハァッ。彼がいるうちに出なくて良かった」

口元を押さえていた手をゆっくりと外す。その手は、鮮やかな赤に染まっていた。

「自ら命を絶とうという人間に、命を語る資格は無し……」

バルドーの目からは光るものが溢れていた。

「……そうだ、彼の、名前を、聞いておくべきだったな……」

バルドーはその場に横たわるように倒れる。

バルドーはその薄れゆく意識の中で、うっすらと過去を見た。

命を奪うたびに悪夢にうなされた研究者になりたての頃。

命を奪っても悪夢を見なくなった数年後。

命が道具と同程度の存在になった数年前。

己の罪に気付いた数時間前。

己の命を絶つ決意をした数十分前。

そして、濁り無き眼に出会った数分前。

そして、バルドーの意識は消えた。

その胸に秘めた願いを、『無責任』な願いを一人の少年に託して。

［13］研究者バルドー・ヴィルスラム（後書き）

夏休みが終わると世の中ガラリと変わる。

次回はどうなることやら。

「１４」改造の女軍人（前書き）

タイトルが締まらないなぁ。

と、毎話悩む。

１４話だそうです。

［14］改造の女軍人

「……平衡感覚がおかしくなりそうだな」

俺は口をへの字に結び、目を細めながら呟く。

そしてそんな俺の歩く通路の天井を兵士が逆さまに歩いていく。

逆だ。

俺が本来天井たる場所にいるんだ。

要は体透明にして、重力を逆転させて『誰も歩かない』通路を一人悠々と歩いているのだ。

『声出すとばれますよ？』

ゆめじんがあまり危機感を感じさせない口調で言う。

「大丈夫。誰もいないタイミング見計らって喋ってるから。ていうかこれはどこに向かってるんだ？」

『……』

「ん？ゆめじんさん？」

反応がない。どういうこっちゃ。

『……え、えーと』

なぜだか言葉を濁すゆめじん。

と、その時目の前の角から数人の軍服が現れる。

武骨な男2人とそれに挟まれるようにして、軍服姿がコスプレにしか見えない女性が1人。

この3人の軍服はなにやら話をしていた。

「アリド大尉。銀蝿がやられたとなれば相応の処置を取らねばなりますまい」

武骨な男Aが中央の女性に言う。

「魔術兵団の奴らもここを嗅ぎ付け出したとの報告も。急いだ方が良いかもしれませんな」

武骨な男Bも中央の女性に話している。

「はぁ……。厄介ねぇ。私死んじゃいそう」

大尉と呼ばれていた女性は大きく長いため息を漏らしながらトボトボと力ない足取りで進んでいく。

「中央で銀蝿の隊長が限りなく苛立った様子で待っているとの事ですので少し急ぎましょう」

男Bは大尉の背中を押す。

「あー……。なんで偉くなっちゃったんだろう、あたし。死んじゃえばいいのに」

2人の男に押されながら華奢な大尉殿は渋々といった感じで進んでいく。

ていうかあれは本当に軍人か？ありえないくらいやる気を感じなかったぞ。

『よし、あの人達に付いていきましょう』

「ん？うん」

さっきとは打って変わってはっきりとした口調のゆめじん。

「……」

『？さぁ、早く行きましょう』

なぜか立ち止まってる俺を不審に思っている様子のゆめじん。

「……なぁ、ゆめじんさん」

『はい？』

「さっきまでどこに進んでいいか分かってなかっただろ？」

『（ギックゥ）そ、そんなことないですわよ……』

おほほ、と笑って誤魔化そうとするゆめじん。

どんどんキャラがフランクになっていくな。変な方向に。

……。

……。

大尉殿達が向かったのは、ちょっと広めの部屋の中央に円卓が置かれた会議室のような場所だった。

そこには大尉殿達以外に、あの銀蝿部隊の格好をした3人の男達が立っていた。

そして相変わらず天井に張りついている俺。

うーむ、変な感じ。

「我が部隊の精鋭を倒したのがたった1人の素性の知れぬ男というのは事実なのか？」

銀蝿の中の髭が渋いおっさんがアリド大尉に少し苛立った感じで尋ねる。

「確証はないですが状況から見て恐らくそうでしょう。……あなた方の精鋭さん達が早く目を覚ましてくれればすぐに分かるんですが」

アリド大尉はハァと大きなため息をつきながら言う。

「貴様、ふざけるなよっ。たかが民間人2人、我々に追撃を命じたのは貴様だろうが！」

銀蝿の渋いおっさんは円卓をドンと叩きながら力強く吠える。

「この計画に関わったものはその程度に関わらず抹消するようにとの上からの命令です。だからあなた方を信用して出撃していただいたというのに……ハァ」

もはや嫌味にしか聞こえないアリド大尉のため息。

「！っ……だ、大体何なんだ、その謎の力を使う男とは！」

「私達もそれが分からずに困っているのです。なにせ奴が近づくと監視装置が一切使い物にならなくなるそうなので……」

え？俺ってそういう存在なの？監視カメラ写んないの？

『ええ、だから大丈夫だって言ったじゃないですか』

マジかー、悪いことし放題だなこりゃ。

『しないで下さいよ？』

しないよ。さすがにね。

「ではその者がどんな奴なのかも分からぬと」

「ええ、でも直に分かると思いますよ」

え？直に分かる？どういうこっちゃ。

アリド大尉は口元に柔らかい笑みを浮かべながら言葉を繋ぐ。

「とにかく、実験に関しては計画通り行います。あなた方には基地の厳重なる警戒をよろしくお願いいたします」

「う、うむ……」

銀蝿のおっさんは気圧されたように頷く。アリド大尉って実は怖い人？

「では、話し合いはここまでですね。皆さん持ち場に戻って下さい」

そう言うと、アリド大尉はくるりと振り返り、真っ直ぐ俺の方を見つめてくる。

え？俺の方？

「で、いつまでそこにいるつもりですか？泥棒鼠さん」

アリド大尉は俺に向かって右手を向けてくる。

「見えなくすれば見えなくなると思ったんですか？」

アリド大尉の右手はみるみる白い光をためていく。

「やばい！」

俺は瞬時に重力を反転させ、今まで天井だった場所に降り立つ。

次の瞬間、

ズォンッ！！

俺が立っていた場所はアリド大尉の放ったであろう光の一撃により黒く焼け焦げていた。

「手加減はしましたが、炙り出すには丁度よかったようですね」

アリド大尉の目はなおも俺を見ている。

これは完全にばれてると見て間違いない……ってか。

俺は即座に出入口に方向転換し、力任せに扉をぶち破る。

「ど、どういうことだ！？」

アリド大尉以外の面々は何が起こっているのかまったく分からないといった様子で呆然としていた。

俺はそんなのには構わずダッシュで部屋を出て通路を駆け抜ける。

「ちっくしょう！なんでばれた！」

俺はとにかく距離を取ろうと闇雲に通路を進む。

『あの女がなにかしらの特殊な能力を持っていたということでしょう。それよりも問題はこれからです』

ゆめじんは早口で話す。

「これから？」

『ええ。奴らに存在がばれてしまった以上ここからは迅速な行動が必要です』

「例えば？」

俺は速度を緩めずに聞く。途中何人か軍服を弾き飛ばした気がするが恐らく気のせいだ。

『開き直って更に敵の混乱を誘うか又はこれ以上ばれないように慎重にいくか。大きくはこの２択です！』

「よし！開き直ろう！」

『早っ！！ちゃんと考えました？』

「うんにゃ！だが、俺は俺の直感を信じる！」

そう言って拳を握り締めた瞬間だった。

俺は自分の前方不注意をえらく後悔することになる。

「よぉぉし！当たって砕けろだぁぁぁ！！！！……って、え！？」

俺が角を曲がって更に加速した瞬間に見た光景。

行き止まり。

「なぁぁぁぁぁぁ！！？？」

俺は急ブレーキをかけるが、時既に遅し。

俺の体は勢い良く真っ白な壁にめり込み、その絹ごし豆腐みたいに白い壁を絹ごし豆腐を砕くみたいに貫通していきましたとさ。

しかし、実際は豆腐の数百倍硬い訳で。

痛い物は痛い訳で。

そして、貫通した先は建物１０階位の高さだったわけで。

俺はそのまま墜落しましたとさ。

「ぬぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

バキャバキャッ！ズドォンッ！

俺は生い茂る植物の枝からの洗礼を受け、そして地面に激突した。

「がっ……！」

いくら体強くなったって言ったってこれはきつい。一瞬息が出来なかった。

「……半重力使えばよかった」

人間パニくると色々忘れるものである。

「あー、いっつぅ……。ってかここどこだ？」

俺は体を起こし、辺りを見回す。

森、というよりもパッと見ジャングルだな。熱帯雨林な植物が多く生えている。

「ここも基地なのか？」

俺は上を見上げて初めてこの基地の様子が分かった。

ここは地下だ。このエリアは人工的に造られたか元々あったものを利用したのかは知らないが、上空に切り取ったようにぽっかりと巨大な丸い穴が空いている。あれが地表のラインだろう。

「……見れば見るほど嫌な予感しかしないな、おい」

よく見ればその巨大な穴には格子のようなものが張られている。しかしその格子は目が大きく、普通の鳥など平気でくぐれてしまうような大きさだった。

では、なんの為の格子だ？

俺はつい数十分前に聞いた言葉を思い出していた。

ガサッ……！

「！」

背後からの音。俺は素早く振り返り確認する。

俺の中に緊張が走る。

そしてその緊張は、俺の予想とは別の形で最高点を迎えることになる。

「あー……っつい。死んじゃいそう」

ついさっき聞いたばかりの声。草木の間から姿を現したのは、ある意味俺をここに追い込んだ張本人だった。

「あー。やっと見つけましたよ。透明人間さん」

アリド大尉。その目は真っすぐに俺を見ていた。

俺は覚悟を決め、ゆっくりと透明化を解く。

「あら、若い。男性だったんですねぇ」

アリド大尉の表情は町中で親しい友人に偶然出会ったような、柔らかな笑みが浮かべられていた。

正直、ぞっとした。アリド大尉の笑顔に、底知れぬ闇を感じたから。

「……わざわざお偉いさんが出迎えてくれるとはな」

俺は恐怖を押し殺して言う。

「だってあなたの事は私にしか感じる事は出来ませんでしたし……それにここ、すごく危険な場所だから入っちゃダメだって、皆から言われてるんですよ」

「どうしてあんたには俺が分かった」

俺が語気を強めても、アリド大尉の表情はまるで張りついているかのように一切変わらない。

「それは軍事的に秘密ですね。言ったら私死んじゃうかもしれないんで」

「じゃあ、ここが危険ってのはどういう事だ」

アリド大尉のゆったりとしたしゃべり口に少し苛々したが、自分を落ち着けて聞く。

「秘密です。もし知りたければ自分で調べてください……もっとも」

アリド大尉の手にあの光が収束を始める。

「私に殺されないように気を付けながら、ね」

アリド大尉は両手を真っ直ぐにこちらに向けてくる。

「くそっ！」

俺は瞬間的に大きく横に飛ぶ。

そして、俺が飛んだそのわずかに横を巨大な光の束が通り抜けてい

く。

さっきのとは段違いの威力だ。

ていうかそもそもなんなんだあの技は？

なんで手からビームみたいなの出せるんだよ、あの野郎！

俺は大尉の不可解な攻撃とその理不尽な威力に少々焦りを感じていた。

大尉はというと、そんな俺の様子を微笑みを浮かべながら見ていた。

「そうそう。すぐに死なないでくださいね。もし簡単に死なれたら私罪悪感で死にたくなっちゃいますから」

言いつつ大尉は再び手に光を貯めだす。

「くそっ！」

俺はとにかく大尉の光線の射線上から外れるために、大尉を中心に円を描くように動きながら防戦に徹する形になる。

相手が若い女性っていうのがよくないな。まともに攻撃するには拳が鈍る。

「なんとかならんもんかね……」

俺が甘っちょろい事を気にせずに戦えばいいというだけの話かもしれないが、人間そんな簡単には変われないってな。

「おい！こういう時こそアドバイスしろよ！」

俺は天に居るはずのアドバイザーに怒鳴りかける。

『戦闘の時に私を頼るとは珍しいですね』

「かもな！とりあえず手っ取り早く打開策ちょうだい。工夫の効いた奴ね！」

俺の動きからも正攻法がやりずらいという事は伝わってて欲しいところではある。

『そうですね……。まずあの女の情報を得ましたのでお教えします』

「はい！？あいつのプロフィールなんてどうでもいいよ！」

俺は今度こそ怒鳴るが、ゆめじんは真面目な口調で続ける。

『いえ、重要な事です。彼女の名はリリアス・アリド。帝国軍銃騎兵団第３師団所属。階級は大尉……』

「だーかーらー！それを知って俺にどうしろと！」

ビームを避けながらは疲れて仕方ない。

「大事なのはここからです。彼女は軍に入隊直後、ある実験に参加しています」

「なに！？実験？」

『詳しい内容までは分かりませんでしたが、それが人体を改造する目的である事だけは分かりました』

「そ、それってつまり……？」

『彼女はなんらかの肉体改造により今の能力を得ていると考えて間違いないでしょう。シンゴさんの存在がばれたのもその為かと』

「改造で得た能力、ねぇ。戦ってあまりいい気分ではないな」

『そして、それを踏まえた上で私にいい案があるのですが、聞いていただけますか？』

「待ってました！存分に聞くぞい！」

俺は大尉から逃げ回りつつ、ゆめじんの提案を聞く。

「……なーる。そいつは面白そうだ」

『少し面倒ですが、私の推測が当たっていれば奴は必ず隙を見せるはずです』

「オッケー！案ずるより産むが易し！やってみましょう」

俺は奴の視界から逃れるように茂みに飛び込む。

「無駄ですよ。そんなことで私から逃れられる……と……」

大尉の顔から笑顔が消える。

そして、その顔はみるみる困惑の色に染まっていく。

「え!?何!?どういうこと!?」

大尉はぐるりと周囲を見渡す。何が起こっているのか分からない、といったところだろうか。

「ゆめじん!お前の読みは外れじゃなかったみたいだな!」

俺達は動きを止めず大尉を撹乱する。

俺、達。とはどういうことか。

ゆめじんが言うには奴はコウモリやイルカのように音波やそれに似た類の物を発信し、その反射などで物の位置や形を把握する、一種のレーダーのような機能を有しているのではないか、と言う。

なので俺はそれをわざと撹乱する為に、いわゆる『分身の術』を使い、最低限の質量を持った分身達を何体も放ったのである。

「こうまで分かりやすく混乱するとはな」

『さぁ、シンゴさん!今ですよ!』

「オーケィ!終幕だ!」

俺は、分身達を残したまま、大尉の背後へとテレポートする。

「痛みは一瞬、我慢してくれよ」

俺は大尉の背に手を当てる。

「なっ……！？いつの間に……」

バチンッ！！

次の瞬間、アリド大尉の体はビクンと震え、そのまま力なく地面に倒れる。

電気ショック。スタンガンレベルの電撃を手のひらから直接アリド大尉の背中に流したのである。

これなら直接傷は残らない。俺は倒れたアリド大尉を見て、不思議な胸のモヤモヤを感じていた。

己の甘さ、か。

俺はそんなモヤモヤを振り払おうと、村人達を探すために、その場を後にする。

ジャッ。

地面の小石や枝が擦れるような音。俺はまさかと思い、後ろを振り返る。

そのまさかだった。

アリド大尉は立ち上がり、射るような鋭い目でこちらを睨み付けていた。

「結構な電撃、流したぜ……」

俺は再び構える。

アリド大尉はそんな俺を見ることなく、真っ直ぐに首を上げ、天を仰ぐ。そして、

「ウゥウゥアアアアッッッ！！！！」

猛る野獣を彷彿とさせる、地を裂かんばかりの叫び。

「ハァッ……ハァッ……」

アリド大尉は肩で息をしながら、ゆっくりと首ごと視線をこちらに向ける。

「どいつもこいつも私を殺そうとする」

独り言のように小さく呟く。

「なんで？邪魔だから？嫌いだから？汚いから？女だから？なんで？なんでなんでなんでなんでなんで……」

壊れたからくり人形のようにカタカタと同じ言葉を繰り返す。

「な、なんなんだよ……」

恐怖。俺にはアリド大尉がそれそのものに見えた。

『おそらく改造による副作用のようなものが出たのでしょう。過去にも似た症例があるようです』

「だからって、どうすりゃいいんだよ！」

動揺する俺に向かって、アリド大尉は左の腕を真っ直ぐに向けてくる。

「でも、わたし、まだ、しねない、だから、あなた、しね」

抑揚もなにも無い無機質な声。

光の蓄積された腕。

俺は一瞬、避ける動作が遅れてしまう。

「くそっ！！」

防御の態勢をとった俺の目に、信じがたい光景が飛び込んできた。

一瞬の発光の後、血飛沫をあげて吹き飛ぶアリド大尉の左腕だったのである。

［14］改造の女軍人（後書き）

アリド大尉は私の書きたいタイプのキャラです。

でも、性格上扱いづらいのも確かで……。

うーむ。悩ましい。

∞リリアス・アリド（前書き）

リリアス・アリド大尉の独白。

それ以上でもそれ以下でも無し。

∞リリアス・アリド

リリアス。幸福を司る神様から取ったという名前の通り、私の幼少期は幸せに満ち溢れたものだった。

母は私が物心付く前に亡くなってしまったが、その母の分まで父は私に精一杯の愛情を注いでくれた。

父は軍人だった。

帝国軍銃騎兵団所属の帝都警備隊の副隊長。帝都での犯罪を取締り、時には自ら最前線で犯罪者と戦っていた。

私は毎晩のように父が語ってくれる武勇伝が大好きだった。もちろん父も大好きだったし、誇りだった。

その父が無言で帰ってきたあの日から、私の全てが変わった。

冷たく生気を失った父の顔。あの、白い歯をむき出しにした笑顔は二度と見ることが出来ない。それが私の心に染み込み、その意味を受け入れた瞬間、私の目からは涙が溢れていた。

一体どのくらい泣いたのか。私は泣き疲れ眠っていた体を起こすと、自分の心の変化に驚きすら覚えた。

凪の海のように静まり返ったその心に少しずつ染みだしていく黒い黒い気持ち。

父は、同僚の方の話によれば、以前より対立の関係が顕著だった銃

騎兵団と魔術兵団との小競り合いを止めに入ったのだという。

その時、誤って放たれた魔術兵団の攻撃をまともに受け、死んだ。

魔術兵団の誰が、というのは分かっていないという。

……そうか、この黒い気持ちは、『復讐』だ。

なんの罪も無い父を殺した殺人者が、今ものうのうと生きている。

私と同じ空気を吸える、どこかで……。

気付けば私は軍に入隊を志願し、秘密裏に行われるという実験計画に参加していた。

『力』それだけを求めて。

父の事を思うと今でも死にたくなる。父のいない世界に価値などはない。しかし、私はまだ死ねない。父から未来を奪った者の未来を奪うまでは。

死にたい。けど、私はまだ、死ねない。

∞リリアス・アリド（後書き）

次回は本編に戻ります。

［15］光の刃（前書き）

私は車酔いしやすい人なので、喉の下の辺りまでキテるあの感覚。

だいっ嫌いです。

5×3＝15話とのこと。

［15］光の刃

それはたった一瞬の出来事だった。

そして、俺の心には『衝撃』この2文字が大きく浮かんでいた。

吹き飛んだアリド大尉の腕は、ぐるぐると回転し血を撒き散らしながら、ボトリと鈍い音を立てて地面に落下した。

「な、何が起こったっていうんだよ……」

俺は無意識にそう呟いていた。

『暴走ですね』

ゆめじんは冷静な口調で言う。

「ぼ、暴走？」

『はい。人体改造における副作用、その最高にして最悪の症状ですね。おそらく奴が放つエネルギーに対し奴自身の体が耐えきれなかったんでしょう。メカニズムとしては単純です』

ゆめじんの淡々とした説明を俺がなんとか理解した頃だった。

「あ……あ……うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

それまで左肩の先から血が吹き出していても気にも止めない様子で

呆然としていたアリド大尉が突然耳を裂かんばかりの叫びをあげた。

「っ！……まるで超音波だな、おい！」

俺は耳を押さえる。そうでもしなきゃ本当に鼓膜が破られそうだ。

『能力が更に暴走しているようです。このままだと大変危険です！』

ゆめじんにもこの音は響いているのだろうか。その声に少し苦しさが見えた気がした。

「くっそ！どうにかしねぇとこのまま超音波に押しつぶされるのはごめんだってなもんだ！」

俺は奴に再び眠ってもらうために、テレポートと電撃の準備をする。

あと、止血くらいはしてやらないと危ないかもな。

「うお！」

身構えた俺の後ろから突風が吹き抜けていく。

なんというタイミングの悪さ。空気読めよ風。

俺再び身構える。が、そこで、ある疑問が生まれた。

「風……吹くのか、ここ？」

そう、周りを崖や壁に囲まれたこの場所に、突風など吹くはずがない。

もし吹くとしたら、考えられるのは……。

「まさかこのタイミングで、か……」

俺の思考が答えを導き出そうとしたその瞬間、前方のアリド大尉の周囲が突如影になる。

「危なっ……！」

俺の言葉は、上空から襲い来るそれにより、一瞬の内に地に押し潰されたアリド大尉の姿を見た瞬間、消えた。

人間の体が粘土細工のように潰される姿は、今の俺に更なる衝撃を与えて余りあった。

『ついに現れましたね……』

ゆめじんの言葉で辛うじて意識は現実に引き戻される。

目の前に立ちはだかるそれ。

フォルムは鳥。しかし、実体は狂暴な爬虫類やあるいは恐竜を思わせる体であった。

牙が並び鋭く尖ったくちばし。

コウモリの様な翼に鋼の甲冑を並べたような皮膚。

大きく開かれた眼球は正常な生物のそれとは明らかに何かが違って

いた。

まさしく怪物。それ以外に形容のしようがなかった。

『魔獣ギャラス。現代に復活せし最悪の獣ですね』

ゆめじんの言葉に俺は苦笑してしまった。獣じゃ表現が生易し過ぎるだろ。

俺が状況に反した下らない事を考えていると、その魔獣は真っ直ぐに自分の足元に顔を……。

「やばっ……！」

俺は反射的に凝縮した衝撃波を魔獣に向かって放っていた。

ズゥンッ！

衝撃波は魔獣の頭部に命中。魔獣の体が少しだけ後ろに仰け反る。

「よし！」

俺はすかさずテレポートし、魔獣に踏まれていたアリド大尉を魔獣から離れた場所に移動させる。

さっきの衝撃波も、奴が大尉を獲物として食べようとしたと思っての一撃である。

『先程まであなたを殺そうとしていた敵を助ける……。これはあなたらしいと言うべきでしょうか？』

ゆめじんはやれやれといった口調。

「俺のエゴだ。気にするな！」

『はい、言われなくても気にしませんよ』

「分かってきたじゃん、俺の事」

『分かった、というより慣れた、という表現の方が相応しい気がしますね』

なるほどな。俺は再び苦笑する。

「さぁ！常識はずれの化け物相手だ！余計な事考えるのはやめ！」

俺はとっくに態勢を立て直している魔獣に目を向ける。

怖くないと言えば全くの嘘になるが、それでも戦わねばならない。

俺って頼まれると断れない人だから。

俺は気合いを入れると、ひとまずアリド大尉から離れた位置へと移動する。

魔獣は首と目の動きで俺を追ってくる。

「不気味。なんかあいつに関する情報はないのか？」

俺は慎重に距離を取りつつゆめじんに尋ねる。

『正確な情報は残念ながら。しかし、過去の伝承によると、ギャラスは光の刃を放つ魔獣だったと記述があります』

「光の刃!?なんて物騒な響き。でもどういう事だ?」

足の爪か?それとも翼になんか仕込まれてんのか?

と、俺が考えを巡らしている時だった。魔獣の深く裂けた口が大きく開かれる。

「ん?なんだ?」

そこで一瞬動きを止めた俺を魔獣は逃さなかった。

キィィィィ……ッ!!

「うわ!」

耳に届くは鉄をナイフで削ったような不快な音。

直後、魔獣の口元に光が集まりだし……。

「ぬぁ!そういうことか!」

俺は地を蹴り横に大きく飛ぶ。

すると、数瞬前まで俺が居たであろうその場所に、魔獣の光の一撃が見舞われる。

「……な、なるほどね」

なぜ刃か。それはその場所を見れば一目瞭然だった。

俺の背後に生えていた立派な巨木。その木が中心から真っ直ぐ半分に切れていたからである。

その切り口には一切の無駄はなく、もし俺が食らっていたら間違いなく無事では済まなかっただろう。

「一発アウトの攻撃かよ。ちっと分が悪いな」

俺は嫌な汗の感覚を全身に覚えつつ、魔獣に向き直る。

魔獣は狙いをこちらに向け再度光を溜め始める。

「ちくしょう！連射オッケーかよ！」

俺は右の拳に力を溜めると、同時にテレポートで魔獣の懐に一気に飛び込む。

「やられる前にやったらぁ！！」

魔獣のボディにストレートパンチ一閃。ズドンという重い音と共に俺の手に確かな手応えが返ってくる。

「……？」

が、様子がおかしい。魔獣はぴくりとも動かない。俺が上を向いて魔獣の顔を確かめようとする。

その瞬間、

「キァァァァァ！！」

天を割らんばかりの甲高い魔獣の鳴き声。その声に俺が一瞬怯んだのを魔獣は見逃さなかった。

俺の胸部を強烈な衝撃と痛みが襲う。

「がっ……！？」

魔獣の足の一撃。敵ながら見事な前蹴りである。

俺は衝撃を受け切れず後方に吹っ飛び背中から着地する。

「ぐっは……！って、え！？」

起きる間もなく俺の視界に飛び込んできたのは、魔獣の姿と、その立派な足であった。

俺の体はその巨大な鉤爪にがっちり挟まれ、そのまま空へと運ばれる。

「ひょぇぇぇぇぇ！！！！」

怖いと定評のある絶叫マシンより断然怖い。しかも魔獣の挟む力が強い。痛い、痛いよ。

ていうか俺どこに運ばれるの？

『シンゴさん！今すぐ脱出してください！』

焦りを大いに含んだゆめじんの声。

「脱出ったって、どうやって！？」

『先程のリリアス・アリドとの戦いを思い出して下さい！』

「さっきの……ああ！そういうことか！」

俺は全身に力を集中させる。

「ドゥアリャアアアアア！！！！」

青白い光が俺から放たれ、更に魔獣の体へと伝染していく。

「キュアアアアアア！！？？」

魔獣の体が大きくバランスを崩し、俺を挟む爪の力も弱まったので俺はその隙に脱出する。

「自家発電の威力思い知ったか！！」

そう、電撃である。しかも、前回の大尉の時とは威力は段違いである。

遠慮無し。力任せの全力である。

俺は半重力を使い空中でバランスを整える。

魔獣はというと、未だバランスを取り戻せず、フラフラと高度を落としている。

今だ！

他でもない俺の心がそう叫ぶ。

俺は両足に全力を注ぎ込み、更に空中での瞬間加速の準備をする。

「いくぜ！！」

瞬間加速。俺の体は弾丸の如く魔獣に向かい撃ちだされる。

両足を真っ直ぐ魔獣に向け、そのままぐるぐると身体ごと回転しながら突撃する。

その名も！

【スパイラル弾丸キック】

俺の両足は見事魔獣の背中を直撃し、その勢いのまま凄まじい速度で地面へ急落下する。

ズッドォォォォォォォンッ！！！！

大地震のような轟音を響かせ、俺と魔獣は地面を深くえぐるように着地する。

俺は回転を止め、目が回って仕方ない身体でふらふらと近くの木まで歩き、もたれかかるように座り込む。

「ぶはぁっ……！気持ち悪っ」

気を抜けば吐いてしまいそうだ。

『絶対に吐かないでくださいね』

「大丈夫。こう見えて三半規管は強いん……うぇっぷ」

『……マジでしないでくださいね？』

念を押されてしまった。

「……ていうか、あいつもう動かない……のか？」

魔獣はうつ伏せに地面にめりこんだままぴくりとも動かない。

「本気で殴ったのに反撃された時にはマジで焦ったね……」

おまけに快適な（嘘）空の旅までさせていただいたし。

「しかし電撃が効いたあたりこいつ飛行タイプの魔獣かもな」

『飛行タイプ？なんですかそれ』

「その罠には掛からない」

『は？』

忘れよう。今の一連の件は忘れよう。

「さて、目的の達成率がしっちゃかめっちゃかになってしまっているが、改めて当初の目的に戻るか」

『そうですね。これ以上騒ぎと被害が大きくなる前に行動しましょう』

ゆめじんの言葉にウムと一つ頷いて、俺は基地側の壁へ歩きだす。

油断。

つまりはそういうことなんだと思う。

この直後、俺の体は光の刃で貫かれた。

［15］光の刃（後書き）

この話は書いている途中でコロコロ話の展開が変わりました。

なんか色々書きたい事が生まれては消えていくことの連続で。

でもそれが楽しくて書いていたりする。

だからどうした、な独り言でした。

［16］決戦（前書き）

詰め込みました。

ぎゅぎゅっと。

16話だったりする。

［16］決戦

『シンゴさん！！！！』

悲痛。衝撃。ゆめじんの叫びが俺の脳内に響き渡る。

うるせぇよ。ていうかそんな風に叫び声上げたの初めて聞いたかも……な……。

俺は意志とは無関係に全身の力が抜け、不恰好に倒れこむ。

光の刃が貫通した腹部からはとめどなく血が溢れだしていた。

痛い、熱い。その二つに支配されていた俺に、追い打ちをかけるように、あるものがジワジワと広がっていく。

無。

痛い、熱いという感じは消え去り、それどころか全身が強力な麻酔を打ったかのように感覚そのものが失われていく。

やばい、まぶたが重い。だめだ、このままじゃ死んでしまう。

……え？死？って、何？

俺という存在が消える？

そんなのはだめだ。まだ死ねない。死にたくない。

俺の視界の隅に、動くものが映る。

魔獣だ。やはり死んではいなかったのか。それどころか、立ち上がろうとすらしている。

そうか、俺はあいつと『殺し合い』をしていたのか。

今更気付くなって話だな。

死と隣り合わせの世界。俺の人生も一気にハードになったもんだ。

魔獣が近づいてくる。ゆっくりと、しかし確実に俺の方へと。

殺される。だが体は俺の言うことをピクリとも聞こうとしてくれない。

絵に書いたようなピンチ。

魔獣が俺のすぐ横に立つ。

死んだな。

――――ッ。

……ん？今、何かが脳裏をよぎった。大切な、何かが……。

魔獣の足が大きく持ち上げられ、その鋭い鉤爪が真っ直ぐに俺を捉える。

なんだ、俺は何を思い出そうてしたんだ俺は……！！

俺は……。

魔獣の鉤爪が真っ直ぐに振り落とされる。

『シンゴさん！！！！！！！』

ゆめじんのその叫びは、俺がその短い生涯で最後に聞いた言葉に……。

ならなかった。

「……？」

……あれ？痛くない？ていうか意識がある……な……。

俺はゆっくりと閉じかけたまぶたを開く。

ぼんやりと紗の掛かった視界いっぱい青に染まっている。

……青？

と、体中がポカポカと温泉に浸かったように暖かくなっていく。

えらく気持ちのいいその感覚の中で、俺はある事に気付く。

「……動くな」

胴体にくっついているという感覚すら失いかけていた四肢が、俺の指示通りに動くのだ。

……そうか、分かったぞ。

……ここは天国だ。

そう悟った俺は思わず体を転がし仰向けになる。

すると魔獣がなんともいえない顔でこちらを見ていた。

……なぜ？

昨今の天国にはこんな殺伐てしたのがいるのか？

……生きてるのか？俺生きてるのか？

俺は起こせるはずのなかった体を起こして、辺りを見回す。

青い。何か青い膜のような物がドーム状に俺を覆っている。

俺はこれに守られたのか？

俺は血の排水溝と化していた腹部に手をやる。

「塞がってる……ってえぇ！」

俺は立ち上がり混乱する。

ほんの数分前まで死にかけていたはずの俺の体は、何不自由なく立ち上がれるまでに回復していた。

果てしなく困惑する俺に、文字通り光明が見えた。

光明というかなんというか、俺のズボンのポケットから青い光が漏れていた。

「な、なんだ……？」

俺は恐る恐るポケットに手を入れてみると、すぐに暖かい光を放つ『それ』に辿り着いた。

そしてそれは俺の脳裏をよぎった何かを、はっきりと思い出させてお釣りがくるものだった。

青い石が付いたネックレス。光はそこから放たれていた。

「はは……奇跡……ってか」

奇跡。この場合は、俺があの人、シオンに出会いこの石を貰ったことが奇跡だろう。

俺が恥ずかしい勘違いをしていない限りは、俺はこの石に命を救われたのだろう。

「ありがとう……シオン」

俺がそうはっきりと口にした瞬間、石の光は一段と強まり、その光は俺を包み込んでいった。

力が溢れてくる。とても優しい力が。

「デュアッ!!!!」

気合い一発。俺は青いバリアを突き破り、一気に上空へ躍り出る。

「熱いぜ……熱いぜこの展開はぁ!!」

俺はシオンへの感謝と、もう一度シオンに会ってあの癒し度満点の笑顔を見たいとか色々と純粋なのから不純なのまで入り混じってすごいテンションをあげていた。

『展開熱くしたいなら不純なのとか言っちゃダメでしょう！』

ゆめじん登場。心なしか声が少し……。

「ゆめじん、鼻声になってない？」

『！？……そ、そんなわけないですよ……』

と、言いつつ小さく鼻をすする音。

「……花粉症？」

『ぶっ飛ばしますよ……』

苦笑。やはり俺とゆめじんの関係はこうでなくては。

……でもさっきのはちょっと男のツボを突かれたかも。

……ちょっとね。

とかなんとかしていると、地上から翼をはためかせる音が。

「ラウンド2の開幕だな……！」

俺は宙に浮いたままファイティングポーズを取る。

すると、下から迫ってくる魔獣の口が光を放ち始める。

「2度も3度も……！」

俺は瞬時に自分の分身君を5体ほど魔獣に向け放つ。

突然目標が増えて混乱したであろう魔獣だが、光の刃で分身君数体を貫く。

まぁ分身といっても風船人形みたいなもんだから弾けてすぐに消えちゃうんだけどね。

俺は瞬間加速で一気に魔獣の懐に迫る。

光の刃は連射できない。もしこの予測が間違っていたら危うかったかもしれないが、果たして魔獣は光の刃を撃てずに俺の接近を許した。

「打ぅつべし！！」

俺は電撃を込めた左フックを魔獣の顎に叩き込む。

すると、魔獣は空中で少しバランスを崩す。

「よし！」

電撃によるダメージと、フックによる顎から脳を揺らす脳震盪のダメージを狙った。

この組み合わせ、いいかも。

俺は間髪入れずに魔獣にしがみつき、最高出力の電撃を見舞う。

「ウラァァァァァ！！！！」

どんどん高度は落ちていく。しかし俺は放電をやめない。

地面が眼前に迫る。

俺は魔獣から離れ、地面に不時着する。

「おっとっとぉ」

電気の流し過ぎだろうか。若干手足が痺れてる。

しかし今はそんなことを言っている場合ではない。

「まだまだ終わりじゃ、ねぇんだよなぁ……」

地面に真っ直ぐに落ちた魔獣だが、もうすでに立ち上がりこちらに目を向けている。

「大したタフ野郎だぜ……」

俺も魔獣に対し再度構えを取る。

魔獣の口元が再び光りだす。

「お前のタフネスさの源はその装甲みたいな外皮にあるようだ」

俺は全身に力を込める。

「だったら……」

魔獣の口が光を極限まで溜める。

「外を攻撃するの、やめ！」

光の刃が放たれる。が、その先に俺はいない。

テレポート。俺は奴の懐に再び飛び込んでいた。

「ここだぁ！！」

俺は握り締めた両の拳を全力で魔獣の腹に同時にぶち込む。

「ここからだ！！」

俺は更に拳に力を込める。

「いくぜ！！」

俺は両の拳から超強力な震動を魔獣にぶち込む。

名付けて！

【衝撃の超震動双拳】

双拳と書いてダブルナックルと読む！

俺はぶつけた拳の先から大地震を凝縮したような震動の塊を奴の内

側に送り込む。

「ギャォゥ！？」

魔獣の体がドゥンと重い音を立てて大きく揺れる。

「まだまだぁ！！」

俺は次から次へと震動を送り込む。内側にダイレクトに響く攻撃ならばかなりのダメージが期待できる、はず。

それにここで奴を倒さねばもうこれ以上の策は今の俺には無い。

そして、２０発目の震動を打ち込んだところで、俺の拳が限界を迎える。

俺は拳を引き、魔獣から距離を取る。

「ハァ……ハァ……」

震動の打ち過ぎかビリビリと痺れている手をかばいつつ、魔獣の動きからは目を離さない。

「ギャ……ァゥ……」

魔獣の目が俺を真っ直ぐに捉える。まだ来るのかと思ったが、それは一瞬だった。

魔獣の体はゆっくりと後ろに倒れていく。

口からは泡を吹き、体もピクピクと痙攣している。

か、勝ったのか……？

『さぁ、しかし少なくとも奴は生きてます。確実を期すなら止めを』

「止め……」

そうだ、殺すというのはそういうことだ。

「よ、よし……」

俺はゆっくりと魔獣に近づいていく。

魔獣は未だまともに動きそうな気配はない。

俺は奴の横に立つと、拳を振り上げる。

やらなきゃやられる。さっきの俺の様に。

「……！！」

俺は意を決した。拳に更に力を込める。

が、

「ぬうううりゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

頭上から響くうなり声。俺は半ば無意識にテレポートを発動し、『それ』をよける。

「外したか……」

テレポート後の俺が見たもの、それは、黒ずくめの男が俺がさっきまでいた場所に刃を突き立てているという光景。

「あんたは……」

会議室みたいな所で大尉達と話していた男。

「アリド大尉と互角以上に戦い、更には魔獣を倒すという離れ業をやってのける男……奇襲以外に倒す手無しと思ったが」

男はゆっくりと態勢をこちらに向ける。

「我が名はギオ・サング。……銀蝿の隊長、といえば理解も早いか？」

その男、ギオは俺にとって痛い思い出しかない高周波の剣の鋭い切っ先をこちらに向ける。

俺の中を嫌な予感が突っ走る。

「貴様が軍に働いた所業の数々は私の耳にも届いている。……私の部下も世話になったようだしな」

ギオさんの目がえらく恐い。

「敵討ちというのはあまりに私的な動機で私自身好きではない」

ギオさんは俺に向けた切っ先を下に下ろす。

「だが、軍の利害という公的な目的ならば、貴様を討つには十分な名分だ」

ギオは剣を振り上げる。その途端四方から鳴りだすあの不協和音。

「我らの流儀にのっとり、貴様には死んでいただくとしよう」

本日2度目の死の宣告。この基地は殺したがりが多くて困る。

だが……、

「……死ねねぇんだよ、俺は」

ついさっきやり残してる事リストが列をなして増えたからな。

「全員蝿叩きの刑にしてやる!!かかってこいや!!」

俺は構えを取る。

「魔獣を倒したからと調子に乗るなよ。ここに集いしは部隊の精鋭中の精鋭!貴様が倒した奴らとは格が違うぞ!」

ギオは茂みに引っ込みつつ高らかと宣言する。

「うるせぇ!やれるもんならやってみろ!」

俺は挑発的に叫ぶ。

『ちょっとシンゴさん！強きに挑発するのは結構ですが……』

「分かってる」

『え？』

俺は小声でゆめじんの言葉を制する。

「敵さんは軍の為とか言いつつ部下の敵討ちで熱くなってる……はず。絶対最初の一撃で本気の一撃が来るはず」

『……シンゴさんの言ってる通りになったとしてどうするかは考えてあるんですか？』

「ある。が、これは賭けだ」

『賭け？』

「俺とあいつらのどちらが上かってな」

『とか言っといてここに来て負けないでくださいね』

「そうだな。もうゆめじんの鼻声は聞きたくないかもな」

『……いっぺん死んだほうがいいかもしれませんね』

「厳しいねー」

と、談笑はこのへんにして、奴らの動きを探らねば。

２度目の人間ソナー。

２０……３０……と結構な数の銀蝿ちゃんが潜んでるな。

俺は精神を集中し、その瞬間を待つ。

「さぁ……来い！」

その瞬間は突然訪れた。

前触れも無しに茂みから躍り出る銀蝿の前戦力。その速さは以前の連中の倍に値する程だった。

「殺った！！」

隊長ギオの声が俺の背後から迫る。

刹那の中での勝利の確信。だが、奴らには大変残念なお知らせがある。

それは、

俺が奴らの速さを遥かに凌ぐ速さを身につけていたということである。

「だっしゃぁ！！」

俺の拳はその瞬間、３６０度全方位に向け超高速で撃ちだされた。

いうなれば、

【衝撃の超高速連弾】

おまけに衝撃波も付けたので、離れた相手もばっちり射程内。

凄まじい速さで俺に迫った銀蝿部隊。

だが、絶対的なはずのその速さを超えた俺の攻撃。

銀蝿は隊長を含め一人残らず高速の拳の餌食となり、吹っ飛んでいく。

「ばか……な……」

ギオ隊長の飛んでいく際の台詞。

ばかとは失礼な。少なくとも俺は有言実行した。

「全員ハエ叩きにするってな」

俺の完全なる勝利だ。

［16］決戦（後書き）

ようやくギャラス騒動の終わりが見えてきた……かな？

まぁ、多分すぐに見えなくなります。

［17］残酷という名の忌まわしき真実（前書き）

透明人間。

皆さん一度はあこがれませんでした？

私は憧れてます。

現在進行形。１７話なり。

［17］残酷という名の忌まわしき真実

シンゴが銀蝿を叩きつぶしていた頃、基地の司令室は混乱を極めていた。

「アリド大尉の消息はまだ分からんのか！」

基地の副司令ダミアス中尉は肝心の報告が入ってこない事に苛立ち、部下を怒鳴り付けていた。

「はっ……！ただ今部下が“広場”に入り状況を確認しておりますので今しばらくお待ちを……」

部下は早口でそう言うとそそくさと一礼して部屋を出ていった。

「……くそ！あの女の巻き添えを食らってたまるか……！」

ダミアス中尉の下には、アリド大尉が重傷を負ったかもしれないという情報と、魔獣ギャラスが倒されたかもしれないという不確定な情報だけが伝えられていた。

ダミアス中尉は最悪の場合、つまり2つの情報が真実である場合の事を考えていた。

「どう転んでも私の今まで積み上げてきた地位は……くそっ！」

ダミアス中尉の苛立ちが頂点に達しようかという時、部屋に部下が一人、慌てた様子で入ってきた。

「中尉！大変です！」

「今度はなんだ！」

中尉の怒鳴りに少し怯んだ部下だが、すぐに居住まいを直し、報告を始める。

「アリド大尉の負傷と魔獣ギャラスの敗北。さらに銀蝿の全滅が確認されました！」

その報告は中尉を絶望の淵に追い込むのに十分過ぎる報告だった。

「さらに……これは別件ですが……」

「ま、まだあるのか……」

中尉の声には先ほどまでの力は全く感じられなかった。

「牢に入っていたバルドー・ヴィルスラムの姿が……消えました」

「は、はぁ！？奴は自害して果てたのではなかったのか？」

「そ、それが、死体を確認し、報告を終えた部下が牢に戻ったところ、いなくなっていた、と……」

「な、なんじゃそりゃぁ……」

ダミアス中尉はその瞬間、考えるという行為の放棄を選択したという。

……。

……。

「はぁ……はぁ……」

銀蝿は倒した。あのスピードは俺の体に多少なりとも負担を掛けたらしい。結構な疲れがここに来て出た。

『緊張と緩和。でもすぐに気絶しなくなったのは成長と言えるかもしれませんね』

「なるほど、ものは考えようってか……。だが、休んでる暇は無い」

俺はフラフラと出口を目指す。

「村の人達はどこにいるんだ？ていうかまだ無事なんだろうな……」

ちょいと不安がよぎる。

『シンゴさんの侵入の目的が村民の解放だということがばれてなければ、といったところですね』

「なーんか俺の足跡を省みるにばれていないのではないだろうか」

『だといいですが。さ、急ぎましょう』

「おーし、あと一踏ん張りじゃい」

俺は基地内に戻り、透明化プラス重力反転のコンボで基地内の捜索に向かう。

「が、こうも入り組んでちゃ闇雲に捜すのはベターとは言えないな」

俺はアリド大尉に発見された会議室っぽいところに向かった。

会議室に着くと中はなんか変な空気になっていた。

アリド大尉の側近ぽかったおっさんが生気すら感じない顔でだらしなく座っていた。一人きりで。

うーむ。

タイトル「絶望」

なんちて。

なにがあったのかは俺の知るところではないが、これは好都合だ。

俺は重力反転を解き、本来の地面に降り立つと、部屋に鍵を掛ける。

「……ん？」

おっさんは少しだけ顔を動かして扉を見る。

「誰かいるのか？」

なんという力なき言霊。本当に何があったんだこのおっさん。

「……誰も、いない？」

正確にはいる。ただ、見えていないだけ。

「……もしや！」

何に気付いたのか突然はっとした表情になり、椅子から立ち上がる。

「い、いるのか！侵入者め！」

おっさんは腰のホルダーから拳銃を引き抜き構える。

どうやら俺の存在という可能性には気付いているらしい。

この展開、逆に利用させていただくとしよう。

「ど、どうなのだ！いるのだろう！？」

おっさんは壁に背をつけなおも銃による構えを続ける。

俺はゆっくりとおっさんに近づくと、極小の衝撃波で銃を叩き落とす。

「なっ！？」

俺は間髪入れずにおっさんの喉に……その辺に落ちていたスプ

ーンを軽く当てる。もちろんスプーンも透明化。

「動くなよ。もし妙な気を起こしたら……分かるよな？」

俺はどこの悪役だ？

とも思ったが、おっさんには効果抜群の様子。スプーンを刃物に勘違いさせる作戦成功だ、

「くっ……貴様、何が目的だ」

おっさんは見えぬ敵に脅され困惑と苦渋を等分に混ぜた顔で言葉を発する。

「いきなりそこを聞いてくれるとは話が早い。麓の村の住人達はどこにいる？」

俺はストレートに尋ねる。

「麓の……？なるほどそういうことか。それを知ってどうする？助けだそうとでも言うのか？」

おっさんはゆっくりとした口調で俺に逆質問。

「下手な時間稼ぎは寿命を縮めるぞ……物理的に」

俺はスプーンを更に強く押しあてる。

「あとさっきから少しずつ動かしてる右足も元の位置に戻してもらおうか」

「なっ……！」

おっさんは明らかに驚いた表情へと顔の色を変化させる。

「下に緊急時のスイッチかなんかあるか知らないが……これは妙な気起こしたって事でいいのかな？」

俺はトントンとおっさんの喉を叩く。スプーンで。

「ま、待て！……第3保管室だ。そこに村の人間は全員いる！」

「本当に？」

「本当だ！だから……命は……」

「そうね。命は取らないよ」

俺はスプーンをおっさんの喉から離す。

「命はね」

俺はおっさんの額に手を当てる。

「ぎゃふぅ！」

震動の一撃。悪いが眠っていてもらおう。

俺は部屋を出て、第3保管室へと向かう。が、場所など分かるはずもない。

「ゆめじん！」

『はいはーい。調べてますよ。まず右に進み二つ目の角を左へ行って下さい』

まるでこちらが聞くのを待っていたかのようなゆめじんの反応。

「仕事が早いな」

『侵入してからこれだけ時間があれば基地内の地理を把握するには十分です。それに……』

「それに？」

『シンゴさん絶対聞いてくるだろうなと思ったので』

すっごくにこやかな声。

「はっはっは！ほっとけ！」

『ええ。さぁ、急ぎましょう』

「言われなくとも！」

俺はゆめじんのナビに従い目的地を目指した。

途中遭遇するであろう軍服共に関しては後々逃げるために倒していこうと考えていた。

のだが……。

「一体どういう事だ？」

俺の進むルート上には、予想通り軍服は何人もいた。

が、死んでいた。一人残らず。ある者は首があらぬ方向にへし折れていたり、ある者は腹部に大きな穴が空き臓物が引っ張りだされていた。

地獄絵図のような光景。そしてその地獄から放たれる異臭に、俺は尋常じゃない嫌悪感を覚え、吐き気をもよおした。

死体が当たり前のように転がっているその場所を、俺はなるべく早く抜けようとした。

が、この赤に染まった惨劇は、まるで俺を導くかのように保管室へと続いていた。

嫌な予感。気持ちの悪い胸騒ぎがする。

保管室へと向かう最後の角。

村の人間が無事であってほしい。それだけを思い、俺は、最後の角を、曲がった。

「はぁ……はぁ……」

保管室、その扉は、２メートル程の高さに、大人５人が並んで入れるぐらいの横幅があった。

扉は閉まっていた。

そして、その扉の前に、一人、見覚えのあるボロボロの白衣に身を包んだその人は立っていた。

「バルドー……さん？」

俺の記憶が確かならばバルドーさんは牢屋に入れられてはず。

俺の声に応えるように白衣の人物はこちらを振り向いた。

俺はその顔を見て、安堵すると同時に氷水をぶちまけられたかのような恐怖に襲われた。

「やぁ……君か……」

振り向いたその人物は間違いなくバルドー・ヴィルスラムその人であった。

穏やかに笑みすら浮かべるバルドーさん。

しかし、

彼の両手と白衣は、鮮やかな程に赤に染まっていた。

「君が辿り着いてくれて良かった。もうすぐで手遅れになるところだったよ」

バルドーさんは落ち着いた口調で喋る。

「バルドーさん……それは……」

俺は真っ赤な白衣に目を向ける。バルドーさんもそれに気付いたようだ。

「ああ……恐らく君が今考えてる事は限りなく正解だろう。兵士達を手に掛けたのは私だ」

バルドーさんの目が鋭くなる。

「なんで……ていうかどうやって、牢屋に入れられてたんじゃ……」

「君のその情報は正しい。私は牢にいた」

バルドーさんの口調は淡々としていた。

「そして私は牢の中で死んだ」

「は？……はぁ！？」

言ってる事が突飛すぎる。

「私は軍に拘束される直前に自らに毒を盛って自殺を図った。君に会ったのはその効き目が出る直前の事だ」

バルドーさんの説明も今の俺には理解が追い付かない。じゃあ俺は今誰と喋ってんの？

「そこまでは私の考えた通りだった。だが、直後に誤算が生じた」

バルドーさんの口調に熱がこもりはじめる。

「私の中には悪魔の種が眠っていた。私はそれが目覚めないうちに依り代である私自身を葬る事で悪魔の種も葬ろうとした」

「バルドーさん……なにを」

「だがダメだった。悪魔には死すら通じない。私の体は致死量の毒薬すら効かぬ体にされていた」

バルドーさんは両手で自分の顔を覆う。

「どういう……ことだよ……」

バルドーさんはゆっくりと顔から手を離す。血まみれの手から移った血が、涙のようにも見えた。

「結論はこうだ。私も人体改造の被検者で、私の中にはあの忌まわしき魔獣の血が流れている」

魔獣……あいつの血が、バルドーさんの中に？

「村の人間を実験に使うことに消極的だった私は自ら実験の対象に名乗りを上げた。おかげで人質を逃がした際殺されずに済んだ」

「バルドーさん！なんで兵士を殺した！」

バルドーさんが生き返った経緯。それはこの際どうでもいい。

「止められないんだよ。沸き上がる憎しみと怒りが。もはや私の意識は奴に乗っ取られつつある」

「俺とは……話せてるじゃないか……」

「君には根本から憎しみを感じる要素が無いからだ。だから辛うじて意識を抑えられる。だが……っ……うぁっ！」

バルドーさんは突然苦しみだすと、その場に膝をついた。

「はぁっ……はぁっ……。だがそれも限界だ……少しでも気を許せば君を殺そうとしてしまう」

「な……なんだよそれ！なんでこんな展開なんだよ！あんた命の尊さに気付けたんだろ！なのに……」

魔獣の血。それが、俺とバルドーさんの間に『死』という関係をもたらそうとしている。俺はそれが悔しくてならなかった。

「そうだな……っ……だが、その想いはまだ失せてはいない……だから、君に頼みがある」

バルドーさんは血走ったその目を、真っすぐに俺に向ける。

「私を……殺してくれ……」

［17］残酷という名の忌まわしき真実（後書き）

佳境です。

一気に駆け抜けたいです。

では。

∞バルドー・ヴィルスラム［前］（前書き）

バルドー・ヴィルスラム。

この男の『現在』に至までの『過去』が少し書かれた話。

少々お付き合い願います。

∞バルドー・ヴィルスラム［前］

私を産んでまもなく母は病でこの世を去った。

父は帝国でも指折りの生物学の研究者だったが、研究旅行の最中野盗に襲われあっさりと命を落とした。

私は父の兄の元に身を寄せる事になった。

私は、家庭を、息子を全く顧みようとしなかった父は嫌いだったが、研究者であるウェルダー・ヴィルスラムは尊敬に値する人物だと思っていた。

そんな私が生物学を己の学問と定め、研究者の道を志したのは、至極当然の事と言えるだろう。

父を超えたい。超えた時初めて父の墓を見舞い己の研究成果と……花の一本でも供えてやろう。そう考えていた。

私はがむしゃらに励んだ。同輩達が遊びに走り、家庭を作り、『ある程度のレベル』で満足し上を見ることを諦めていく中で、私は上だけを見続けた。

そんな私を天は見捨てなかった。

帝国専属の研究者になって5年が過ぎた頃だった。

……。

……。

「私を、軍の最先端研究の責任者に、ですか？」

私が驚きの声を上げる。軍の最先端研究、それは研究者からすれば最高位の名誉の一つだ。

「ソウ。君の研究に対する熱意×君の実力＝君の素晴らしい実績、を上層部の人間はいたく気に入っている。一つ、引き受けてはもらえないカネ」

この喋り方は少し奇妙な人物は、私の直属の上司にして名実共に帝国の全研究者の頂点に立つ男。

ルター・サイエン、その人である。

研究者になりたての頃から私に研究者としての技術と心構えを教えてくれたルター博士からのこの辞令は格別の想いであった。

研究の内容は極秘。この研究に携わってる事を口外する事すら禁じられた。

私はさっそく極秘研究の拠点へと向かう事になった。

ドートボン遺跡。その洞窟に隣接する形で造られた研究所を兼ねた軍の基地。私はそこで、この研究がなぜ極秘にされているのかの訳を知った。

軍から派遣されてきた基地の責任者、リリアス・アリド大尉と共に私はそれを見た。

「これは……卵……ですか？」

私の前にあるのは、鶏の卵１００個分に相当しそうな、巨大な卵であった。

「そうです。正確には『魔獣』の眠る卵ですが」

私よりも幾歳か若いであろう女性大尉は、さらりとその単語を口にする。

「魔獣？では、この中には……」

ドートボン遺跡に近いこの場所で、卵と言われれば可能性は一つしかない。

「『魔獣ギャラス』その正真正銘本物の卵です」

「まだ中は生きているのですか？」

私は興奮気味に尋ねる。

「仮死状態……だそうです。生きても死んでもいない中途半端な命」

大尉は色の薄い目を更に薄くして呟くように喋る。

「では、復活の可能性もあると？」

「あなた方に依頼したい一つ目はそれです。魔獣ギャラスをこの世界に復活させて下さい」

私の心は躍った。生物史上最も未知数とされている魔獣。その一体を私の手で……。研究者の血が騒ぐことこの上なかった。

∞バルドー・ヴィルスラム［前］（後書き）

まさかの前後編。

後編に続く。

∞バルドー・ヴィルスラム［後］（前書き）

ある科学者の話。後編にして完結編。

どうぞ。

∞バルドー・ヴィルスラム［後］

魔獣ギャラスは、我々の努力により無事に誕生した。しかも、それが双子だと分かった時には一同で手を取り合い喜んだ。

だが、それこそが悪夢への序曲だった。

……。

……。

「放し飼い!?軍は何を考えてるんだ!」

軍はウォルター山にぽっかりと空いた通称“神の穴”に細工を施し、そこでギャラスを放し飼いにしようと言いだしたのだ。

「もし!もしも魔獣が脱走するなどという事態に陥ったら奴らはどうする気なのだ……!」

私は憤りを露にし、軍に対する悪態をつく。

軍の行動はまず己の威信や名誉、金といった者にしがみつき他人を蹴落とし上に上り詰めようという集団だ。

「奴らの考えには思慮というものが足りない。そもそもなぜ放し飼いなどという暴挙を……」

もしこれが国や民間に知れ渡れば奴らとてただでは済むまい。

「それが……」

一人の若い研究員がおずおずと口を開く。

「軍上層部、特に最高軍部の将軍達へのアピールの為と聞いています」

最高軍部の将軍といえば銃騎兵団を直轄し、皇帝と公に顔を会わせられる権利を持った１０人にも満たないエリート中のエリートだ。

「……なるほど。しかし、この基地のアリド大尉は自分の手柄に固執するような人物には見えなかったが……もっと上か」

私が呟くと、若い研究員は控えめな態度を崩さずに更に言葉を続ける。

「はい。どうやら銃騎兵団第三師団長ブレス・ガクラーノの企みと言われています」

「……今すぐに魔獣の『弱点』を見つける段階に入るぞ」

私は軍に逆らわず、かつ自分に泥の掛からない方法を考えた。

魔獣ギャラスは視力が弱い。が、それを補うためか頭部から音波を発してその反射で物の位置や大きさを把握できる能力を持っていた。

私達はそれを逆に利用することにした。

「音波を相殺する？」

「そうだ。穴の上部に張られる格子からその奴の出す音波を打ち消

す音波を流す。そうすれば奴は本能から危険を察知し外界には飛び出さないはずだ」

私のこの提案は軍の奴らに受け入れられた。

軍の無謀な提案を現実にする。それもまた我々研究者の仕事になっていた。

ギャラスの研究、養育は比較的順調なものだった。

だが、その順調に飽き足りなくなるのが人というものだった。

ギャラスの力を人体に移植する実験がいよいよ実行段階に移ろうという時だった。

「民間人を乱暴な手段で連行し人体実験のモルモットに……あまりいい気分ではありませんね」

いつかの若い研究員がため息混じりに呟く。

「では、お前が被験者になるか？」

私は至極真面目な口調でそう言った。

「い、いえ……それは……」

若い研究員は口籠もる。当たり前だ。人間誰しも我が身が可愛いに決まっている。

「我々の研究はいつも何かしらの犠牲の上に成り立っている」

私はそうまとめたが、内心では軍の方策に疑問を抱いていた。

いたずらに民間人ばかりを実験に駆り出す今のやり方ではいずれ遠くない未来に内外いずれかからの崩壊を招くだろう。

かと言って、では実験に使用する被検体はどこから持ち込む？

私は軍用の投影用監視鏡に映る第三保管室の様子を見ていた。

怯える者。憤る者。中には乳飲み子を抱えた女性もいた。

私に欠片でも心というものがあれば彼らに同情の一つもしてやれただろうが、あいにくと今の私にそんなものは無い。

命は種族の繁栄に用いられる『物資』である。

彼らもまた物資なのだ。そして、私も。

母が健在で、父も家庭に目を向けられる市井の人間であったならば、私は人並みの幸せを得ていただろう。

私はほんの一瞬、そんなことを考えた。そして、その一瞬が私の全てを変えた。

その数時間後、私は基地の司令室にいた。

向き合う先には司令官であるリリアス・アリド大尉。

「あなたは自分が何を言っているのかはもちろん分かっていますね

？」

アリド大尉は俺のある提案に少し驚いた表情を見せた。

「自らが被験体になる。その意味は研究員である私がもっとも理解しているつもりです」

私はギャラスと人間の強化実験、正確にはギャラスから抽出した強化薬の効果をはかる実験、に志願した。

当初は一蹴されておしまいだろう、と考えていたが、意外にも私の提案はアリド大尉を通してあっさりと認可された。

薬の効果はその投薬後3日1週間程度でその効果が現れる。

私の研究が正しければ、その効能は、

一時的な興奮状態。

身体能力の強化。

が主な効果で、後は個人で異なる副作用が出ると考えられていた。

だが、それが紛れもなく『悪魔の種』であったことに気付くのはまだ先の事である。

投薬されてから2日後、私はある副作用に苦しめられる事になった。

それは、夢。

悪夢ではない。ただただ私の記憶に埋まっていた映像がフラッシュ

バックし、目を覚ましてからもその映像が脳裏にしっかりと焼き付けられている。

その中には父と過ごした数少ない記憶もあった。

仕事ばかりで息子の存在などとうに記憶の彼方に置いてきたかと思っていた父。

その父が一度だけ、私を連れて観劇に連れていってくれた事があった。

劇の内容は大衆向けな英雄伝記を基にしたもので、あまり記憶に残っていない。

ただ、黙って真面目な顔で劇を観る父の横顔は今でもはっきりと記憶に残っている。

その日から数日経ったある日、父が死亡した旨の通知が届いた。

私は科学者である。父が私を珍しく連れ出した事を父の死と結び付けるのは馬鹿げた考え方だと思っていた。

だが、『夢』を見た日から、その想いは大きく揺らいだ。

夢の中で、私は知らない女性に抱かれていた。

いや、知らないわけではない。記憶に鮮明に記録されていなかっただけだ。

この人は、私の母、アイカ・ヴィルスラムだ。

隣に寄り添う笑顔の男は、父だ。

生まれたばかりの我が子を愛でる仲の良い夫婦。

その夢から目覚めた時、私の目からは涙が溢れていた。

だが、翌日からの夢は悪夢と呼んで差し支えないものへと変化した。

私がこれまで『必要な犠牲』としてきた人間、動物、その全てが私を見てくる。

ただ、見てくる夢。

私は発狂しかけた。

駆け付けた研究員が鎮静剤を打ってくれなければ私は喉を切り裂き死を選んだだろう。

「私は……命を軽んじたのか？」

夜が明け、基地内を目的もなくフラフラと歩き回る。

その時、けたたましく警報が鳴り響く。

私は驚いたが、すぐに警報の意味を理解した。

目の前に若い男女が一組。

麓の村から連行されたのだろう。しかし、今ここにいるということ

は……。

男の方が私に気付く。男は持っていたナイフを私に向ける。

「そこをどけ！」

男は興奮していた。

後ろの女はビクビクと震えながらこちらを見てくる。

脱走し、兵に追われているのだろう。

私は黙って壁に手をやり、埋め込まれたスイッチを押す。

この二人は軍に連行されなければ幸せになれた二人であろう。そして、我々にそんな幸せを汚す権利は、無いはずだ。

スイッチを押したすぐ横の壁が開く。

「逃げろ」

「……は！？」

「ここをまっすぐに進み森に入れ。上手くすれば逃げ切れる」

「あ、あんた……」

「君達にはすまないことをした。……さぁ、早く行け！」

兵達の足音は間近に迫っている。

「……分かった」

男は女の手を取り私の開けた通路に入っていく。

それを確認した私は再びスイッチを操作し、通路を閉じる。

そして、白衣のポケットに忍ばせていたある物を取り出す。

「生きてくれ……」

ある物、小瓶に入ったそれを一息にあおった私は、目を閉じ、その場に立ち尽くす。

墓参りに行かないままそっちに行く息子の不孝、どうか許してほしい。

父さん。

∞バルドー・ヴィルスラム［後］（後書き）

次回は本編に戻ります。

［１８］絶望への最終段階（前書き）

最近は暑いんだか寒いんだか分かりません。

気候の話をしてみました。

全国的に１８話でしょう。

［18］絶望への最終段階

「殺せって……なんだよそれ」

「言った通りの意味だ。今私一人殺さねば後に数十人の罪無き犠牲が出る」

罪無き犠牲。それはつまりバルドーさんの背後、保管室にいる村人達の事だろう。

「どうにか出来ないのかよ……あんた科学者だろ！まさにそれについて研究してたんじゃなかったのか！」

体中からジワジワ沸き上がる憤りを言葉にしてぶつける。

「無理だ。こうなってはいかなる薬も通用しない。現に毒薬が効かなかったのだからね」

フッとバルドーさんは嘲笑的な笑みを浮かべる。

「しょせん我々は人間。魔獣の力は抱えるには重く大き過ぎる力だったってことだ」

それはあまりにも皮肉な言葉だった。

「さぁ、いつ私の中の悪魔が目覚めるか分からない……。私を殺せ」

バルドーさんは両腕を目一杯広げ、俺に対し無防備に体をさらす。

その体は小刻みに震えており、何かに耐えているように見えた。

時間は、ない。

そうは分かっていても、俺はバルドーさんを攻撃する事を躊躇していた。

どこかで、心のどこかで、皆が皆助かる方法は無いものかと探っていた。

だが、それは無駄な思考であったと直後に思い知らされる。

ドクン……ッ！

バルドーさんの体が大きく振動する。

その直後、バルドーさんの体は力なく上半身を折るような形になる。

「バルドー……さん……」

一体何が起きたのか。今の俺にそれが分かるはずはなかった。

いや、正確には分かろうとしなかった。

バルドー・ヴィルスラムという人間のタイムリミットがきたことを。

バルドーさんの体がゆっくりと起こされる。

その表情が俺の視界に入った時、俺は先程のタイムリミットという言葉の意味を自分自身に落とした。

顔面は鬱血したような赤紫の色に染まり、目は瞳孔が真紅に、白目であった部分は色を返したように黒に染まっていた。

口からは獣のような鋭い牙を覗かせたその姿は、もはや、

人というにはあまりに多くの物を失っているように見えた。

俺はただそのバルドーさんであったはずの生物を呆然と見ていた。

そして、俺が見ていたその赤い目が俺の姿をはっきりと捉える。

「ヴァァァァ！！！！」

唸るように声を上げたそいつは、姿勢を低くし、凄まじい速さで俺へと迫る。

「くっそ！」

俺はとっさに防ごうとするが、奴は俺の動きの上を行く速さで俺の首に両手をかける。

「がっ……！！」

そのまま壁に叩きつけられ、首はさらに締め上げられる。

苦しいなんてレベルじゃ追い付かない。意識すら遠退いてきた。

「や……らせ……るか……よ！」

俺は絞りだすように言葉を紡ぐと、今回何度も世話になってるあの力を奴にも流し込んだ。

「ヴァッ!?」

電撃。奴の手から力が抜け、俺はその隙を逃さず奴を衝撃波で突き放し距離をとる。

「げほっ……えほっ……本気で死ぬかと思った」

俺は若干めまいがする脳を無理やり叩き起こすように奴に目の焦点を合わさせる。

奴は電撃と衝撃波のダメージなどものともしない様子で、再びこちらへの突撃態勢を整えていた。

「もう、あんたはいないのか……バルドーさん」

俺の言葉にも一切反応しない。

「……分かったよ」

俺の中に先程とは別の、なんかごちゃごちゃした感情が沸き上がってくる。

「これ以上他人の体で好き勝手やってんじゃないぞこの怪物野郎が!!」

怒りなのか、哀しみなのか、それすら定かではない不確かな気持ち。

「かかってこい！！」

奴は、先程と同じく凄まじい速さで迫ってくる。

俺はそれを正面から受ける。

「うぉおおおおおお！！！！」

だが、奴の勢いは凄まじく俺は壁に押し込まれる。

しかし、今の俺はさっきまでとは違う。違うはずだ！

「ぬぁりゃぁぁぁぁぁ！！！！」

「ヴァァァァァァ！？」

俺はがっぷり四つに奴と組み合うと、そのまま奴の体を持ち上げ壁に叩きつけるように投げる。

奴の体は壁を貫通し、あの広い熱帯雨林へと落下していく。

「はぁ……はぁ……」

俺は後を追うように下へと降りていく。今回は半重力を使って。

生い茂る植物は立派な遮蔽物になる。下に降り立ったはいいが、奴の姿を見失ってしまった。

「っと、こういう時は……」

ソナー開通。

「……」

あれ?近くにはいないんだろうか。反応を感じる事が出来ない。

俺は感覚を研ぎ澄まし更に調べるがやはり反応はない。

「どこに行きやがった……っとぅぁぁ！」

心底驚いた。

ソナーを解き辺りを見回した俺の背後に奴がいたからだ。

驚く俺の顔面に奴の拳が正面から炸裂する。

「がふっ！」

後ろに派手に吹っ飛ぶ俺。

なんで!?ソナーやった時には全く反応無かったのに!

俺は鼻からくるビリビリとした痛みと、そこから滴ってくる血を拭いながら、不可思議な敵の姿を見る。

「俺の能力が不完全なのか?」

俺は困惑を隠しきれなかったが、しかし現実に奴は俺に気付かれずに背後に回ってきた。

……とにかく奴が視界に入っている間に倒そう。それが一番手っ取り早い。

「いくぜ！」

俺は自分の正面に向かい、かなり範囲の広い衝撃波を放つ。

周りの木々が薙ぎ倒される中奴も一瞬怯んだ様に防御の態勢を取る。

今だ！

俺は一気に距離を縮め、奴の懐に最高速で飛び込む。

「うらぁぁ！！」

そして、その勢いのまま奴のボディにダイレクト体当たりの一撃を見舞う。

「ヴォァァ！？」

今度は奴の体が大きく後ろに吹っ飛んでいく。

「うっし！」

俺は間髪入れずに吹っ飛んだ奴の体を追う。

ここで一気に畳み掛ける。そのつもりだった。

だが、奴の次の行動は、そんな俺の勢いを大いに削いだ。

空中で態勢を建て直し俺の方を向いた奴の口元が光りだした。

「マジかよ！？」

俺はとっさに大きく横に避けた。

その直後、奴の口からあの忌まわしき『光の刃』が放たれ俺のいたはずの地面を大きくえぐる。

「それ使えちゃうのかよ！」

威力は魔獣のそれに比べたら多少劣るが、それでも俺の意識に影響を及ぼすには十分だった。

「人のトラウマつつきやがって……！」

奴は着地し、態勢を整えていた。

「長引かせるのは不利だな」

俺は、奴がこちらに狙いを定めた瞬間、テレポートを使用し、奴の背後にまわる。

「うらぁ！！」

正拳突き。なんの小細工も無しのシンプルな一撃。

「ヴァ！？」

突然俺の姿が消えた事に困惑しているところへの一撃。ダメージはダイレクトに伝わっただろう。

ゴロゴロと地面を転がり、ダメージの証か少し肩で息をし始めた奴に対し、俺は再び突撃の態勢をとる。

俺だって体力には余裕が無い。ここで決定的な一撃をぶち込まなくては勝機すら薄らいでくる。

俺の足に瞬間加速の為の力が込められる。

が次の瞬間、奴は予想外の行動に出た。

口に光を集めだしたかと思った瞬間、何百ものフラッシュを一度にたいたかのような凄まじい光を放ったのだ。

「眩しっ！」

俺は加速をやめ、目を押さえた。

「くそっ！」

マズい！今攻撃されたら防御のしようがない！

俺は奴からの一撃を覚悟した。

が、いつまで待っても奴からの一撃は来ない。

「……？」

俺は恐る恐る目を開けてみる。

「あれ？いない？」

奴の姿は消えていた。辺りを見回してもらしき姿は見当たらない。

「……逃げた？」

そんなバカな、と思いつつ、俺は奴の奇襲を警戒しながら辺りを捜す。

敗色濃厚になったから逃げたって言うならそれはそれで納得はいく。

だが、逃がすわけにはいかない。

あの人自身の覚悟をあの人に汚させる訳にはいかない。

と、俺が見回しながら歩いていると、見た事のある光景に出くわした。

「これは……」

樹齢数百年はありそうな巨木が真ん中からきれいに割れている。

いや、切られたんだ。あの、『光の刃』で。

「ってことはこの辺は……」

俺と魔獣が戦った場所だ。

最終的にはここから少し離れた場所で決着したが。

「……なーんか」

嫌な予感がしてきた。外れて欲しいと切に願いたい予感が。

俺は似たような景色が続く中で、わずかに残る記憶を頼りにその場所へと向かった。

その場所とは、魔獣ギャラスが倒れたあの場所である。

「……」

俺の考えていた以上にその場所は近かった。だが、そこに広がる光景は俺が知るものとは少し違っていた。

「マジかよ……」

ギャラス、そのもう死んでいるであろう体の上に、奴はいた。

仰向けに倒れているギャラスの首にまたがると、喉元にズブリと両手を突き刺した。

「なっ……」

言葉が出なかった。

余りにも衝撃的過ぎて。

奴の腕を通じて、ギャラスの体から何かを吸収しているように見え

た。

「エネルギーを、吸ってるのか……？」

俺の推測はあながち間違いじゃなかったらしい。ギャラスの体が少しずつやつれていくというか、しぼんでいるように見えた。

そして、エネルギーを吸い切ったのか、奴は腕を引き抜き、ゆっくりと立ち上がる。

今仕掛けるしかない！

俺は、奴が何かしら次の段階に移る前に倒そうと考え、最大威力の衝撃波を奴に向かって放つ。

だが、

衝撃波は確かに直撃した。だが、奴の様子は放つ前と変化が無かった。

「な……に……！？」

効いてないって……嘘だろ！？

俺は大いに動揺した。そして、奴は更に俺を精神的に畳み掛けに来る。

「ヴァアアアアアアアアア！！！！」

凄まじき咆哮。そして、奴の体が膨らみ始める。

服を破り、どんどん巨大に変貌していく奴の体は、もはやその原形を留めていなかった。

「なん、なんだよ……！！」

俺の目の前に出現したそれは、人と魔獣、その二つの相容れてはならないはずの種が交じりあった物。

人型でありながら異常に発達した長く逞しい腕を持ち、胴体と足も常人のそれを遥かに凌ぐまさに魔獣の装甲へと変貌した。

顔にはもはや面影はない。長い2本の角を携え、血に飢えた猛禽類の如き表情をもつその巨大なるものは。

俺には、悪魔そのものに見えた。

足がすくむ。さっきですら攻撃が通じなかったってのに、更にパワーアップですか？

……今日はよく死を意識する日だ。

一介の高校生であったはずの俺がたった数日でこんな修羅場連続のぶっ飛んだ世界にトリップしちまうとは。

……でも、やるしかないんだろうな。

俺は構える。戦うために。

奴はまだ変化のでかさに体が追い付いていないのかまだ動かない。

今しかないってな！

不意討ち上等。俺は瞬間加速でやつの顔めがけて突っ込むと、電撃と衝撃波をフルパワーで込めた拳を奴の顔面に直にぶち込む。

「だっしゃぁ！！」

さっきのは遠距離からの衝撃波だった。今回は電撃も付けてしかもゼロ距離。倒せずとも有効なダメージは期待できるはず。

だった。

奴は俺の一撃にもまるで反応を示さなかった。不審に思った俺が一旦距離を取ろうかとした瞬間だった。

突然強烈な衝撃が俺の頭部を襲い、そのまま俺の体は地面に叩きつけられた。

「がっ……はっ……」

あまりに突然すぎて言葉も出ない。

ダメージが強烈過ぎる。目の前がドロドロに崩れたように見える。

奴は動けなかったんじゃない。動かなかっただけなんだ。

俺はそう気付いたが、もう遅かった。

奴は俺が考えてる以上に俊敏に動ける。今も奴の拳に叩きつけられたのだろうが、拳の動きが全く分からなかった。

「ぐぁっ……！！」

ようやく仰向けになった俺の体を、奴の巨大な足は容赦なく踏み付けてくる。

「……ぁ……ぐぁぁぁぁ……！！」

ギリギリと骨がきしみ内蔵が圧迫される。

俺は口の中に血の味を感じる。

ちくしょう。なんでここにきてこんな強えの出てくんだよ……！

俺は抵抗しようとするが、腕も足も思うように動かない。

限界、なのか……？

諦めたくはなかった。ここで諦めてはきっと多くの命が失われるから。

約束を違える事になってしまうから。

やり残した事、会いたい人がいるから。

俺は気力で意識を保ち、奴の憎しみに満ちた顔を睨み付ける。

すると、そんな俺の様子を見てなのか、奴は口に光を溜めだした。

光の刃。今食らえば間違いなく死ぬだろう。

ここで、終わりなのか……！！

だが、俺の覚悟をあっさり裏切るように、奴の首はぐるりと全く別の方向を向く。

何をしようっていうんだ？

不審に思った俺が無理やり首を動かして奴の刃が向けられた先を見る。

衝撃。絶望。

そこは、さっき俺が奴を投げた際に出来た穴が空いた場所。そして、そのすぐ隣は……。

第三……保管室……。

「や、や……め……ろぉぉぉ！！！！」

俺の絞りだすような叫びは、放たれた光の刃にかき消された。

［18］絶望への最終段階（後書き）

強いのは嫌いじゃない。

でもそれだけじゃダメ。

どっかのヒーロー物の台詞みたいだな。

ではまた次回。

［１９］希望への第１から第３段階くらいまで（前書き）

どうせ見るならいい夢見たい。

でも結局良くも悪くも内容をほとんど覚えてないという現実。

１９話と参りましょう。

［19］希望への第1から第3段階くらいまで

凄まじき光と共に放たれたその刃は、第三保管室とその周辺をなぎ払った。

もしあそこに人が居るというのならば、もはや生きているとは到底言い難い程の威力。

「……ちくしょおおおおおおおお！！！！！」

削がれた希望の量はあまりに甚大であった。

俺の中から死に抵抗する力が無くなっていく。

終わりだ……。

……。

……――っ！

――っ！

何かが聞こえる。遠くの方から、何かが。

「怪我した奴はいねぇか！全員無事か！」

「大丈夫です！ギリギリセーフでしたよ！頭！」

俺は無意識の内にそれを聞こうと耳に意識を集中させていたらしい。

ていうか頭って……。

「うぉぉ！頭！なんかデカイ化け物があいつ踏み潰そうとしてますよ！」

「なんだと！おーい！あんた、大丈夫か！」

この声、間違いない。村で一緒になった狩人一味の頭だ。なんでここにいるんだ？

そして俺の状態はどう見ても大丈夫ではないだろう。

「村の人間は一人残らず助けだした！だからあんたもそいつどうにかして早く逃げるが勝ちだ！」

頭。それは無責任過ぎるぜ。

でも……、

ありがとう！

「でぃあ！！」

俺は力を絞りだし、目から光線を繰り出す。

「ヴァァ！？」

俺の光線が目に直撃した奴の足の力が一瞬緩む。

「ぐぉぉぉ！！」

俺はその隙を逃さずなんとか体を転がして脱出する。

「はぁ……はぁ……」

体中が痛ぇ。骨何本かいったんじゃないか、これ。

俺は残った力を振り絞り立ち上がる。

「おい、あんた大丈夫か！」

だからダメなんだってば。頭。

「なんとか生きてるよ！村の人たちは無事なのか！」

「ああ！今の一撃は危なかったけどよ、全員無事だから安心してくれ！」

「よし！じゃあ頭はそのまま村の人達連れて脱出してくれ！」

「お前さんはどうすんだよ！」

野暮な事聞きなさんな。

「こいつどうにかする。約束しちまったからな……必ず追い付くから先に行ってくれ！」

俺は語気を強めて頭に言う。

「……分かった！だが無茶だけはしてくれるなよ！」

頭の言葉に俺は苦笑する。今まさに無茶してるんだがな。

「よし！行くぞ野郎共！」

頭達は村の人達を連れて行く。

「……さーて、と」

どうしたもんだかな、これから。

俺は眼前にそびえ立つ巨大な敵を見上げ、ため息混じりに呟く。

最悪の自体はなんとか脱した。しかし、それは一時的なものに過ぎない。

俺の体は変わらずボロボロだし奴に対する決定的な攻撃も見出だせていない。

「こっから逆転出来たら格好いいんだろうが……」

俺はじりじりと距離を詰めてくる奴に対し苦笑すら浮かぶ。

光線の直撃を受けたはずの奴の右目も潰すには至らず少し見えずらくなった程度かな、のように見える。

眼球まで丈夫とは恐れ入った。

「ん？でも待てよ……」

俺はある事を思い付く。

「だが、奴が魔獣の特性をそのまま受け継いでるとしたらアウトだな」

一矢報いる一撃への閃き。それは大いなるリスクを伴うだろう。

「だが、やるっきゃない！」

俺は残り少ないであろう力を集中させる。

「いくぜ！」

テレポート。俺は奴の右側へと移動する。

「う、らぁぁぁぁぁ！！！！」

渾身の一撃を右頬にぶち込む。しかも衝撃波と電撃と震動のトリプルコンボだ。

「がぁっ！」

手応えはあった。だが、同時に俺の体にも激痛が走る。

もはや自分の攻撃の衝撃すらまともに受けきれない。

しかし、そんなリスクを冒した甲斐ありか、奴の体がぐらりと揺れる。

「う、うっし……！」

奴は揺れる体を立て直し、ぐるりと顔をこちらに向けようとする。

「させるか！！」

俺は間髪入れずにトリプルコンボの一撃をもう一発ぶち込む。

「ど、どうだぁ！！」

体に引き裂かれんばかりの痛みが走る。

「くっ！」

だが、ここしかない。ここで決めなくてはいけない。

俺はテレポートで奴との距離を取り直すと、瞬間加速を準備する。

「いくぜ！！」

瞬間加速と共に俺は全身に力を込める。

「うらぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

加速の勢い一切殺さぬまま、俺は奴の懐に盛大にタックルをかます。

電撃と震動のおまけ付きで。

「ヴァァァァァ！？」

「がぁぁぁぁぁぁぁ！！」

確実な手応え。しかし、それは同時に俺自身へのダメージも凄まじい事も意味していた。

「が……はっ……！」

口の中が鉄の味に染まる。

意識も吹っ飛びそうになる。

耐えろ！ここで意識失えばイコール死だ。

俺は奴の足元から少し離れた所に着地する。が、足に力が入らず、その場にべたんとしりもちを付いてしまう。

ダメージも三週くらいしてもはや痛みを感じる力も残ってないらしい。

だが、そんな捨て身の甲斐あってか奴も態勢を崩しその場に片膝をつく。

「ど、どんなもんじゃぁぁい……！」

俺は力なくそう口にする。

だが、ダメージの差は歴然である。こちらは既に動くことすらままならず、一方奴はやっと膝をついた、という状況。

「やりゃあ出来ると……思ったんだがなぁ……」

このまま奴に反撃を許せば俺は一撃でこの世界とバイバイさよならだ。

「なんとか……」

俺はやれば出来る力にもの言わせて体を動かそうとするが、これば かりは限界らしい。体は言うことを聞く気配すら見せない。

そんな俺を見てかは分からないが、奴は膝を起こし立ち上がる。

来るか……！

俺は表情を強ばらせる。

だが、奴の次の一手は俺の予想外のものだった。

「ヴァァァァァァァァ！！！！」ズォンッ！！風を切るような音が大気を揺らした次の瞬間だった。

奴の背中に巨大な翼が姿を現したのだ。

「な、なんだと！？」

俺が驚くのをよそに、奴はその生えたての巨大な翼をはばたかせるように動かしだす。

「と、飛ぶ気か……！」

なんでだ。なぜ今翼を出した。

俺との戦い、特に今の状況において翼を出現させ、しかも飛ぼうとしているその状況は、理解に苦しんであまりあった。

俺は身動きすら満足に出来ねぇ……って！

「そういう事かよこの野郎！」

目の前の敵、つまり俺は動けない程のダメージを負っている。ならばトドメを差す労力よりも、てことか。

「なんとも合理的な野郎だな！」

奴の翼は既に辺りの木々を大きく揺らす程に激しくはばたいている。

飛び立つのは時間の問題……か。

しかし、こいつが仮に俺を放って飛び立ったとして、どこへ行こうってんだ。

「……まさか！」

俺は天に空く巨大な穴を見上げる。その穴には脱出防止であろう格子が付いているが、今の奴ならば破るのは造作もあるまい。

そして、もし外に行かれたら……。

「……」

考えるのも恐ろしい光景が俺の脳内に広がる。

「ヴァァァ！！」

奴の咆哮。そして、その巨大な体が上空へと浮かびはじめた。

「くそ！行かせてたまるか！」

俺は焦った。しかし、俺がいくら焦ろうが俺の体は一切言うことを聞いてくれない。

「動けよ！ここで奴を逃がしたらどんだけの人が死ぬか分かんないんだぞ！分かってんのかよ！」

俺は叫んだ。しかし、手足は重い枷を付けられたかのようにまったく動かない。

「俺はやれば出来るんだろ！こういうどうにもならない状況どうにかしてなんぼだろうが！」

誰に向かってでもない、自分自身への叫び。

「今俺がやらなきゃ誰がやるんだよ！！！！」

――……ッ。

「くっ……！」

強烈なめまい。俺は耐え切れず倒れてしまう。

途端に視界が黒く染まっていく。

「く……そ……がっ」

俺は、意識を失った。

……。

フワッ。

ん？なんだ、この感覚。

とても心地の良い、暖かい感覚。

あれか？お迎えか？お迎えが来たのか？

……じゃないんだろうな。もうやめとこうこのネタは。

でもどっかで覚えのある感覚だ。

どこかまだ記憶に新しい辺りに……。

と、暗闇の意識の中で考える俺の額にすっと何かが触れる。

ん？なんだ？

俺は額に手を回し、正体を突き止めようとする。

そこにあったのは……、

んー？人の手かな、これは。

俺がペタペタと触って感触を確かめたそれは、間違いなく人の手であった。

って、一体誰の……？

“生きてください……”

優しく、労るようにその声は俺の耳に響いた。女性の声だ。

生きて……って、あんた誰だよ？

“絶対に死んではいけません……”

俺の問いは届かない。

しかし、その女性の声は俺の体に安らぎの様なものを与えてくれた。

そして、体の底から力が沸いてくるような感覚が……。

……そうだ、あの石だ。俺は一度あの石に命を救われている。

それを認識した瞬間、俺の視界に光が差してきた。

俺にはその光が、生きるための希望の光に見えた。

「ん……っ」

ゆっくりとまぶたを開く。

ぼやけたような視界が段々とはっきりしてくるような感覚。

それは同時に俺に今までの状況を思い出させる時間にもなった。

俺が意識を失っていたのは一瞬だったのだろうか。羽を伸ばした奴の姿はまだ俺の視界にはっきりと映っている。

「もう一度……」

奴を逃がしてはならない。

「あと少しだけ……」

俺には守らなければならないものがある。

「力を……貸してくれ！！」

俺は叫んだ。精一杯の声で。

こんな精神論でどうにかできるかなんて分からなかった。

だが、あの意識の中で聞こえた声は、単なる夢ではないと、俺は考えたかった。

「……お、おお！？」

はたして俺の根性を込めた叫びは通じたらしい。あの青い石から放たれた光は、俺の胸の真ん中の辺りに光を集める。

「う……うぅおおおおお！！！！」

俺の胸から放たれる光は、俺の体に力を、守るための力を与えてくれた。

「頭どんだけ下げても礼が出来ねぇなぁ、おい」

俺は勢い良く立ち上がり、真っ直ぐ上空に目を向ける。

奴の体は巨大で重量もかなりのものだろう。上がっていくスピードはかなり遅々としているように見える。

「今しかないってかぁ！！」

俺は地面を蹴り、上空へ奴を追う。

第二ラウンド、リベンジの開幕だ。

［19］希望への第1から第3段階くらいまで（後書き）

私はどちらかと言わずとも王道が好きな人ですね。

という突然の告白。

ではまた次回。

［２０］光と約束（前書き）

最近友人からこの小説の歯に衣着せぬ生の感想をいただける機会がありました。

とてもありがたいんですが……。

どことなくこちょばゆいのは私だけ？かなぁ……。

［20］光と約束

飛び上がってからある事に気付く。

俺がこれまでの戦闘で受けたダメージや疲れは確実に残っている。

それをこの胸に輝く石の力で一時的に誤魔化しているのだ。

だが、それもいつまで続くか……、スピード勝負だなこりゃ。

俺は決意も新たに奴に追い付く為にフルスロットルで上がり続ける。

奴が射程範囲内に収まるまで接近する。

奴はまだ俺に気付かずに上を向いている。

「そんなに上見たいなら……！」

俺は拳に力を溜める。狙いは、

「アーッパーカットトーー！」

顎にぶち込む強烈な一撃。震動と電撃は言うまでもなくセットです。

「ヴァグッ！？」

突如顎に衝撃を受けた奴の体が一瞬ふらつく。

「もう一発いっとこか！」

俺は奴の顔面に両手をがっちりセットすると、ありったけの震動と電撃をぶち込む。

「ヴォガァァァァァ！！」

イケるか！

そう思った俺の隙を突くようにふらつく体で払う様に繰り出された奴の巨大な手が俺の側面を襲う。

「うぉぉぅ！！」

ただ払いのけるような動きも奴のパワーからしたら立派な攻撃だ。

俺は大きく吹っ飛ばされ、奴から結構離れた所で態勢を立て直す。

「パワフルな上にスピードもあって空も飛べる……尋常じゃねえポテンシャルだなぁ、おい」

無意識に口をついて出た軽口に自分自身で苦笑する。

意外に余裕だな、俺。

その余裕が無くなる前に決着だな。

俺は瞬間加速で一気に奴との距離を縮める。

既に態勢を整えている奴は、口に光を溜めて迎撃の姿勢だ。

「くるか！」

何度も辛酸を舐めさせられた光の刃。俺は全身に力を込める。

刃が放たれる瞬間のテレポート。

奴の背後に回る。

「こっちだよ！」

奴の背中に強烈にドロップキックを見舞う。

「どんなに強力な攻撃だろうがな……」

俺は奴から少し距離を取る。

「当たらなければどうということはない！」

一度言ってみたかった。

「さぁて……」

少しふらつく奴の様子を見つつ、俺は次の手を考える。

「決定打……だな」

ちまちまとした攻撃なら今のようにヒット&アウェイでいける。

しかし、倒すとなったら何か一発限りでもなんでも強力な攻撃が欲しい。

「……」

頭に浮かんでるものはあった。

もう一回、『体当たり』をぶちかます。

前回は体力の限界の中での一撃だった。が、今ならほぼフルパワーの一撃が見舞える。

リスクは高い。しかし、今の俺には賭けるしかなかった。

「当たって砕けろとはよく言ったもんだぜ」

俺は瞬間加速、震動、電撃と今回お世話になりっぱなしのトリプルコンボを準備する。

奴はというと、態勢を整えこちらに向かってきている。

よし、それでいい。

俺は意識を集中させる。

今出来る精一杯の力を奴に当てる。

それで全てを終わらせる。

「いくぜぇ！」

叫んだ。そして空を蹴り弾丸の如き勢いで奴に突撃する。

「うらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

直撃。ノーガードだった。奴の体に、力を纏った俺の体が突き刺さる。

体が触れた瞬間、俺は抑え込んでいた震動を一気に体外に、奴に放つ。

「ヴォゥッ！」

奴の体が大きくバランスを崩す。

いけたか……！

そう思った次の瞬間、俺の体は強烈な力に挟み込まれた。

「がっ……！」

奴の両腕が破壊的な力で俺の体を挟む。

「ぐ……ぐおぉっ！」

俺の体からミシミシと嫌な音が鳴り始める。

「もう……」

俺は手も唯一自由に動く顔を奴のばかでかい翼に向ける。

「こういうピンチは懲り懲りじゃい！」

本日2度目の目から光線。

真っ直ぐ伸びていくその一撃は奴の翼を正確に捉え、貫き巨大な穴を開ける。

「ヴォガ！？」

今度ばかりはバランスを崩すどころでは済まされない。

「さぁ、地面に帰ろうかこんちくしょう」

ただでさえ重量のある奴の体を支えていた翼。片側を失えば、支え切れず落ちるのみである。

「ヴォガァァァァァ！」

「って、俺は離していけよ！」

唯一の誤算。奴が私を離さなかったこと。

「だぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

俺と奴はそのまま地面に叩きつけられるようにして落下着陸した。

「ぬ、おぉぅ！？」

問題はその後の位置。俺は運悪く奴の下になる形で落下してしまった。

「ヴォァ！」

奴は両腕で俺を押さえ込む。

「がふっ！」

またしても腕を抑えられた。こうなったらもう一発目から……。

しかし、そう思考する俺の先をいくように、奴の口に光が収束していく。

「く、くっそがぁぁぁ！！」

ここまでなのか？2度の復活もパーにしちまうのか、俺！？

「……？」

様子がおかしい。明らかに今までよりも溜めの時間が長い。

というか光が少しずつ減っているようにすら見える。

「な、なんなんだ……」

俺が呟いた瞬間、俺の胸に輝く光から一筋の光が漏れて、奴の頭部に繋がる。

「何が起こって……」

“今だ……”

「え……？」

どこからか響く、聞き覚えのある声。

“私が奴を抑えている今の内に奴を倒すんだ！”

それは忘れようも無いあの人の声。

「バルドー、さん……なのか？」

“そうだ。君の不思議な力が私に最後の『抵抗』を与えてくれた”

「抵抗……？」

“今の私には奴の意識に介入し行動を阻止する事が出来る。やるならその時しかない！”

「で、でも……」

“私の事は案じるな。私は既に死んだ身だ。しかし、その私の体が殺戮の道具になってしまった今、それを止められるのは君しかいないんだ！”

「バルドーさん……」

“私との約束を、今、果たしてくれ！”

バルドーさんの叫びは、俺の体に、心に響いた。

「……分かったよ、バルドーさん。約束、死んでも守ってやるよ！！」

次の瞬間、奴の腕から破壊的な力が抜ける。

俺はその隙を逃さず、奴の腕を払い、両腕に力を込める。

胸に輝く光の力。今こそ存分に使わせてもらう！

俺は両腕で十字を作ると、その腕のクロスした部分を胸の光に当てる。

「ただの十字架だと思うなよ！」

クロスした腕に光の力が流れ込んでいく。

「これは、悪魔を滅する光の十字架だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

瞬間、真っ直ぐに放たれた十字の光が奴の体に命中し、そのまま次々と撃ちだされていく光の力で上空へと打ち上げられていく。

「らぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

俺はとにかく全力をこの十字架に注ぎ込んだ。

やがて奴の体は勢い良く上空の格子を突き破り、さらに上空へと向かっていく。

「終わりだぁぁぁあ！！！！！！！！！！」

奴の体は光に包まれていく。

そして、

凄まじい轟音と共に奴の体は十字の光を残し、消滅した。

「はぁっはぁっはぁっ……」

体に力が入らない。胸の光も限りなく弱くなっている。

だが、勝った。俺は奴に、自らに課した約束に勝ったのだ。

「しかし、体が動かなくてはこれからどうしたものか……」

『極端な力の使用とそれに伴う驚異的としか言い様の無い成長。むしろその程度の反動で済んでいる方が驚きです』

「お、ゆめじん。結構な間黙ってたけど何してたの？」

しかもなんか説明しながらの登場だし。

『テレパシーを使おうにもシンゴさんが力の限界をとうに超えていたので使えなかったんですよ』

「そうだったのか？でも今回はなかなか気絶までいかなかったけど……？」

『それこそが驚異的な成長と言える点です。シンゴさんは私の与えた力に己の気力を合わせる技を身に付けたようですね』

「気力を合わせる技？」

『仮に力を限界まで使いきっても己の気力を削って意識を保つことが出来るようになったんです』

「へー。そいつはえらい成長だな」

『ええ。今回の連戦が逆にシンゴさんの力に大きく持久力と応用力をプラスしてくれる結果になったようです』

「ほう。……それはいいんだが」

『どうしました？』

「とりあえず今これから動けないと話にならないんだけど」

『そうですね。軍の応援が来たらまずいどころか命の危機ですね』

「さらっと怖い事言いよった。ますますどうするべきなんだこれ」

と、俺が体を動かせず頭ばかりキョロキョロ動かしていると、見知った顔がこちらに走ってくるのが見えた。

「……頭？」

あの毛むくじゃらの顔は間違いない。

しかし、頭達は村の人達を連れ出しているはずだが。

「おーい！あんた、大丈夫か？」

頭は俺の両肩を掴みぐわんぐわん揺らしてくる。

「だ……だいじょうぶ！……だから、揺らさないで……！」

「おお！すまんすまん！」

俺が軽くグロッキー状態になったあたりで頭は慌てて俺を離す。

「にしてもあの化け物はどうしたんだよ？逃げたのか？」

頭は辺りをキョロキョロと見回す。

「安心してくれ。あいつは俺が倒した。もう恐がる事はねえよ」

俺は少しだけ誇らしげに言う。

「た、倒した！？じゃあ、もしかしてさっきの光は……？」

「ああ、俺が倒した瞬間だろうか」

「こいつは驚いた。あんなのに勝っちまうって、あんた何者なんだよ！」

「俺はさすらいのやれば出来る男だよ。……今回は色んな人に助けてもらっちまったがな」

後半は小声で呟く。

「たいした男だよあんたは。よっしゃ、そうとなりゃ早いとここん

な場所は出るぞ。立てるか？」

「立てないんだよね、これが。体に力が入らないんだよ」

俺はハハハと渇いた笑いを繰り出す。

「仕方ねえな、俺が背負ってやるよ」

いうなり頭は力にもの言わせて俺をおんぶしてくれた。

「おお、ありがとう頭」

「いいってことよ。外に連中待たせてるからさっさと行くぞ」

「お～」

俺は頭に身を委ねてその場を後にした。

……。

……。

外に出ると、頭の言うとおり頭の仲間や村の人間達がいた。

だが、なにか様子がおかしい。

「おい！お前ら、どうした？」

俺と同じく不審な雰囲気を感じたのか頭が仲間に声をかける。

「か、頭……と、とんでもねえのが……！」

仲間の1人が若干震えながら口を開く。

なんだ？何があったんだ？

俺がなんとか頭の背中越しに顔を出すと、そこに奴らはいた。

「頭……貴様がこの者達の長か」

そいつらの先頭に立っていた青い髪の男が口を開く。

「そうだ。お前さん達は……軍の人間だな」

頭の声が重くなる。

ていうか、軍の奴らがまだいたのかよ！

「アルバレオ帝国軍魔術兵団第一師団長、ジェド・ナイアンだ」

青い髪の男、ジェドはそう告げると、更に続けた。

「お前達に聞きたい事がある。全員の身柄をこちらに預けてもらおうか」

それは、俺に緊張をもたらす言葉だった。

［２０］光と約束（後書き）

今回シンゴが放った光の十字の技。

他の技とは違い明確なモデルが存在します。

多分そのうち明らかになることでしょう。

……変な引っ張り方だな。また次回。

［２１］動かす者動かされる者（前書き）

前回は２０話と区切りでしたね。

それだけです。２１話です。

［21］動かす者動かされる者

「俺達の身柄を拘束だと……」

「そうだ。この場所は本来帝国軍の指定管理区域だ。民間人の立ち入りはいかなる事情があろうとも禁じられている」

ジェドはあくまでも淡々とした口調でそう述べる。

「俺達はここに監禁されていた村の人間を助けただけだ。お前ら軍が勝手に連れてきた人間達をな」

頭は敵意を露にジェドを睨み付ける。

「民間人がここに？……なるほどそういう事か。ならば尚の事お前達を解放するわけにはいかないな」

ジェドは脇に控えている部下に命じて俺達を取り囲む。

「な、なんだってんだ！？」

頭達は突然の行動に困惑する。

「安心しろ。お前達が逃げないようにするだけだ。危害は加えない。やれ」

ジェドの号令と共に、部下達は頭達や村の人達に手錠のようなものをかけていこうとする。

「お待ちいただきたい」

瞬間、ジェドの前に黒い装束を着た忍者のような奴が現れる。

「……離貞か。何用だ？」

ジェドが聞くと、離貞と呼ばれた奴は、堅苦しい口調で喋りだす。

「はっ。すぐに中央へ帰投せよとの中央軍部からの命令です」

「な……！中央軍部だと……なぜ今」

ジェドは困惑した様子を見せる。

「フィアナ様南方視察に際しての警護の任に就いて頂きたく、と言伝かっております」

「フィアナ様の……しかしそれは既にアーガイルとジェミニの二人が任に就いているはず」

「最高軍部からの急を要する件と聞いております。急ぎ撤退を」

離貞はジェドの言葉に耳を貸す気配も無く堅く言葉を続けた。

「しかし、民間人の収容がある。まずは近辺の基地に収容を……」

「そのような些少な用件は捨て置けとも最高軍部は申しておりました」

「……知っている、というわけか。よかろう、即時撤退し中央に向

かう。そう伝えてくれ」

「はっ」

離貞は現れた時と逆で今度は消えるように姿を消した。

「……ということだ。全員即時撤退だ！」

「はっ！」

ジェドの号令で手錠を掛けようとした部下達は一斉にジェドの元へ戻っていく。

「よし、中央へ帰還する。途中の基地への連絡と補給を至急要請しろ」

「はっ」

部下に一通り指示を終えたジェドは、未だ凍り付いたように固まっている俺達の方を見ると、

「この場所で見たもの聞いたもの、決して口外するなよ」

とだけ言い残してその場を去っていった。

取り残される形になった俺と頭達。

「なんだかよく分かんないけど……俺達助かった、んだよね？」

俺はボソリと頭に尋ねる。

「あ、ああ。少なくとも今すぐどうこうということはないらしい」

頭の声にも少し安堵の色が見える。

もしあのまま奴らの手が俺まで及んでいたら危なかっただろう。ばれたら下手しなくても殺されてる気がする。

「よし、ここで突っ立っていても仕方がねぇ。麓の村に戻るぞ」

頭の号令が響くと、全員で村へと移動を始める。

その途中、俺は頭に聞こうと思っていたある事を聞くことにした。

「なぁ頭。よく基地の中入ってこれたな」

「ん？いやぁ、来てみたらたまたま入り口がぽっかり開いてたからよ、見張りもいなかったからすんなり入れたんだよ」

「ふぅん」

なんか全体的にゴタゴタしていたみたいだからな。その影響かな？

「お陰ですんなり全員無事で帰れてるからな。ま、結果オーライってやつだな」

「はは。上出来な結末だよ」

俺達はこうして村へと戻っていった。

……。

……。

その頃、ドートボンの遺跡内、ギャラスが飼育されていた“広場”内では、多数の影が動いていた。

「ギャラスの細胞と血液の採取、完了いたしました」

全身を白いローブに身を包み、フードで頭部も隠したその集団は、ギャラスの死体から皮や血液を容器に収めていた。

「よし、そっちはどうだ」

リーダー格らしき男はギャラスの方とはまた別の者達に声を掛ける。

「爆薬の設置、まもなく完了致します」

「そうか。……まさかギャラスすら倒すとは、想像以上の実力だな」

リーダー格の男は戦場となった場所を踏みしめつつ呟く。

「報告致します！」

一人のローブの男が駆け寄ってくる。

「どうした？」

「はっ、あちらの茂みにてリリアス・アリド大尉を発見いたしました。まだ息はございますが、いかが致しましょう？」

「……殺さぬように処置を施し連れていけ。あの女はまだ使える」

「はっ！……ですが、止血や消毒などの処置は既に行われているようでした」

「……そうか、とにかく運んでおけ」

「はっ！」

ローブの男は走ってその現場へと戻っていく。

「……処置を、か……まさかな」

この数十分後、ドートボン遺跡は大規模な地震により完全に崩壊した。

と、歴史には記されることになる。

……。

……。

更に場所は移り、ここはアルバレオ帝国の中枢といえる中央宮。その地下の円卓の置かれた会議室へと移る。

薄明かりに照らされるその議場には、軍服に身を包んだ見るからに

堅苦しそうな風貌をした年配の男達が円卓を囲むように座っていた。

「収穫は上々。後はドートボンを跡形もなく消し去るのみだな」

「多少計画にずれは生じたが成体のギャラスの細胞が手に入れば後の計画にはなんの問題もない」

「それにしても問題はギャラスと生身で倒したという男だ。これ以上野放しにしておくのは危険ではあるまいか」

男達はそれぞれに意見を口にしていく。

「魔術兵団の奴らを引っ掻き回す役割……だが、ここまでの強さは目に余るな」

「一度奴を封じる策を練った方が良いのではないか」

様々な意見が飛び交う。

「それには及びません」

ざわついた議場にすっと響く凛とした声。

「お前か……何をしに来た」

男達の視線は一斉に割り込んできた声の主、白のローブに身を包んだ男に向く。

「あなた方の議論はいつも目先の事にばかり向いている。もっと大局を見て議論を交わしていただきましょうか」

挑発的ともとれるその口調に男達の中の一人が勢い良く円卓を叩く。

「貴様！我々を侮辱しに来たのか！」

「滅相もございません。ただ、私はあの男はまだ泳がせていていいと言ったのです」

ローブの男は穏やかな口調で喋る。

「何か考えがあるのか？」

男達の一人が尋ねる。

「はい。奴にはまだやってもらいたい事がありますので。今しばらく見守っていただければ幸いです」

「またそれか。大事な部分をぼかされてはいまいち信用に欠けるというものだ」

「楽しみは後に取っておくものです。ブレス師団長」

ローブの男はそのブレス師団長の方を向く。

「あなたも散々自分のわがままを私に押しつけてきた身でしょう。特にアリド大尉の件などは」

「待て！それは関係あるまい……」

ブレス師団長は慌てる様子を見せる。

「大尉という地位はまことにもって都合が良い。そう言って本来中佐クラスの実力を持つアリド大尉を大尉に収めるよう魔術兵団側への根回しをさせたのはあなたでしたね」

「……」

ブレス師団長は黙っていた。

「ま、これでお互い様ですね」

ローブの男は再び全体に体を向ける。

「あなた方とはたまたま利害が一致したに過ぎない。そのことをお忘れなくいただきたい」

議論はシンと静まり返る。

「……まぁ、あまりにあなた方に情報を渡さないのは不公平だ。そこで、次の段階で得られる成果を一つだけお教えしましょう」

そう言って男はすっと腕を伸ばし指を二本立てる。

「2人の魔術兵団師団長を亡き者にします」

議論を囲む男達はそれを聞いて一斉に驚きの声をあげる。

「手はず万端整っております。良い報告が出来るように努力いたしましょう。では」

ローブの男はそれだけ言って議場を後にした。
銃騎兵団幹部の極秘会議の、その議場を。
「単純な輩には単純な餌を与えるに限る」
ローブの男は小さくそう呟いた。
「そしていずれ知る。その餌こそがやがて己の体を滅ぼす毒であるということを、な」
男はその場を後にした。
……。
……。
同じく中央のここは魔術兵団の宮。
ここでは魔術兵団の兵達が慌ただしく動き回っていた。
その様子を一人ぼんやりと眺める赤い髪に黒いローブに身を包んだ男がいた。
「ここでしたか、兄様」
赤い髪の男の元に、こちらも赤い髪でロングスカートのメイド服を着込み、その上から肩と胸に軽装甲冑を身に付けたポニーテールの

女が現れる。

「部下を手伝えとは申しませんが作業の監督くらいはしていただけませんでしょうか？」

女は諭す様な口調で喋る。

「大丈夫。うちの部下は優秀だから。僕が居なくてもキチンと仕事はこなしてくれるさ」

「その優秀な部下を統べる長にも仕事をしていただければ幸いです。魔術兵団第二師団長アーガイル・ランドガルト兄様」

「我が妹は仕事熱心だねぇ。魔術兵団第十師団長ジェミニ・ランドガルト様」

兄、アーガイルは少しからかうような口調で言う。

「はぁ……。フィアナ様の出立は明朝です。私は作業に戻りますので兄様も少しは仕事をしていただけるときっと優秀な部下の皆様も助かると思います」

ジェミニはそう言って戻っていく。

「……この時期に急な視察。しかも行き先は南の都『モンフェルト』。革命の都、か……」

［２１］動かす者動かされる者（後書き）

次回は、あの人がでずっぱりです。

無駄に引っ張ってみました。

［２２］ゆめじん大報告会（前書き）

今回は喋りすぎです。

タイトルの人が。

２２話ですわ。

［22］ゆめじん大報告会

頭達と共に無事に村に戻る事が出来た俺は、あてがわれた部屋でベッドに横になり、

3秒で落ちた。そう、眠りに。

それだけ疲れがたまっていたという事なのだろう。夢を見る暇も無い程俺はぐっすりと……。

眠っているはずだった。

「……おーぃ」

意識の遠くの方からなにやら声が聞こえた……様な気がした。

「……シンゴさーん」

今度は名前を呼ばれた……様な気がした。

「……てぃ！」

バチンッ！額に衝撃が走る。

「いって！なんだ？誰だ？」

俺は重たいまぶたを無理矢理開く。

すると、そこにはある意味懐かしい光景が広がっていた。

真っ青な、空。そして、眼下に広がる白い雲。

「……」

人生2度目の俺ＩＮ空。だが、前回程は慌てないし驚かない。今の俺なら飛ぼうと思えば飛べるしね。

「やっと起きてくれましたね」

俺の眼前に姿を現した黒髪巫女装束。

「ゆめじんか……」

なんか姿を見たのはえらく久しぶりな気がする。

「ていうかシンゴさんおでこ堅すぎます。指の骨折れるかと思いましたよ」

そう言ってゆめじんは見せ付けるように指をプラプラと振ってみせる。

「知るか。ていうかデコピンしやがったのか貴様」

俺は額をさする。たいして痛くはなかったがびっくりしたのは事実。

「またこんな場所に連れて来やがって。また俺の夢に不法侵入とか抜かすんじゃねぇんだろうな」

「それが私の仕事みたいなものですから」

「やめちまえそんな仕事。そしてもっとまっとうな仕事始めなさい」

「そうもいかないんですよ。今回の戦いの総決算というか、色々お伝えしなきゃならない事もあるので」

そう言うと、ゆめじんは懐から数枚の紙切れを取り出した。

ていうかどこにしまってんだよお前。

「まずは、軍の人体改造についてです」

「人体、改造……」

俺の脳裏にいくつかのイメージがフラッシュバックする。

「今回シンゴさんが戦ったリリアス・アリド、そしてバルドー・ヴィルスラムは軍の目指す改造の分かりやすい例と言えます」

「どういう事だ」

「リリアス・アリドは改造手術を受け、ギャラスの持つ光の刃とレーダーの能力を有していました」

「そうだな。だから透明化もあいつには通じなかったんだな」

「ええ。しかし、この改造手術というものは、時間、手間、コストの問題から一度に多くの兵に施す事が出来ずにいます」

「ふむ」

「そしてその問題を解決すべく開発されたのが、薬による能力強化です」

「バルドーさんが使ったっていうやつか」

ゆめじんは頷く。

「さすがに手術による強化より効果は劣りますが、短時間で大量の兵の能力を強化できるとして期待されていました」

ゆめじんは持っていた紙切れの一枚を俺に渡す。そこにはなにやらグラフの様なものが書かれていた。

「これは？」

「投薬による身体能力の強化の推移を表したものです」

ゆめじんは俺の紙の一部分を指し示す。

「投薬から1週間後。ここで劇的な変化が起きたようです」

「1週間……何があったっていうんだ？」

「分かりません。ただ、その変化によりどんな凡人も通常の4～5倍の身体能力を得ると記されています」

「とんでもねえドーピングだな。でもちょっと待てよ」

「どうしました？」

「軍がそうまでして自分達の兵を強くしようとしている理由ってなんだ？戦争でもしようってのか？」

俺に浮かんだ疑問をストレートにゆめじんにぶつける。

「……軍が、特に銃騎兵団がこんなにも熱心に兵の強化に取り組む理由。それはまだはっきりとは分かりません」

ゆめじんは真っ直ぐに俺の目を見る。

「ですが、これ以上奴らを放置すればいずれ必ず多くの人が傷つき悲しむのは明白です。私は、止めたいんです」

ゆめじんの真剣な言葉。

そりゃそうだ。俺だってそんなのは見たくない。

「シンゴさんに多くの負担を掛けてしまっている事は重々承知の上ですが、もう少しだけ私の願いを聞いていただきたいのです」

ゆめじんは深々と頭を下げる。

「……乗り掛かった船。いや、もうがっつり乗ってるかな？ここで引き下がる気は全く無いよ。俺は」

おかしなスタートラインから始まったこの旅だが、今ではこの国を、この国の人達をどうにかしたいという思いがあるのは確かだ。

「ありがとうございます」

ゆめじんは笑顔でまた礼を言う。

「あ、それでシンゴさんの持っていたあの石なんですが」

コロリと切り替えて別の紙を取り出す。

「あれは“守護精霊石”と呼ばれる物ですね」

「守護……精霊石？」

「はい。女神マリアの魂が込められていると言われている石です」

「女神の魂？それってすごい物なんじゃないの？」

「ええ、物凄く価値あるものです。ただし、それが本物であるならば、ですが」

ゆめじんは後半を特に強調して言う。

「本物だったら？じゃあ偽物もあるってこと？」

「ええ、こちらではよくあるんですよ。女神マリア縁の地のお土産、みたいな形で似たような色や形の石を売っている事が」

「ははーん。なるほどね。でも、偽物と本物の区別はどこで付けるの？」

そう聞くと、突然ゆめじんは俺の胸の辺りを指差してくる。

「本物には魔力が込められていて、名前の通り持ち主を守護します。まさにシンゴさんの勝利の女神ですね」

と言ってニコっと笑顔。

「まぁあれが無かったら死んでたよな。思い出すだけでも変な寒気がする」

「シンゴさんは本物の石を持っていたから助かった。それは大いに結果オーライです。しかし、私が気になるのはその入手経路です」

「ん？入手経路……って、シオンに貰ったんだよ。ゆめじんも知ってるだろ」

「そうです。ですが、本物の守護精霊石は世界に２００個あるかないかといわれている限りなく稀少な石です。それを一般人の女性が所持していたというのはどうにも腑に落ちません」

ゆめじんは熱く語る。

「たまたまじゃないか？どんなに稀少だろうが持ってる人はいるだろうよ」

「もしその価値が一個３０億Ｇでもですか？」

「Ｇ……その単位の価値がどれだけか分からんのだが」

「とにかくすごい大金です。これだけあれば一生働かなくていいでしょう」

「マジか！そう聞くと一気に大金な気がしてくる！」

「……と、とにかく私にはいまいち納得いかないのです」

「ふーむ。じゃあ今度会ったら聞いてみるか」

いつ会えるか分からないけどな。

「そうしていただけると助かります。私個人が気になって仕方ないので」

「そか……」

ここで、ゆめじんは気分を変えるかのように別の紙を取り出してきた。

「で、これからの進路なんですが」

「ふむ。どこに向かうんだい？」

ゆめじんは手に持った地図を見せると、ある一点を指した。

「南に向かいます」

「南に？中央に行くんじゃないのか？」

「私もそのつもりでしたが、ギャラスと戦ったあの基地で気になるものを見つけてしまったので」

「気になるもの？」

「はい。これなんですが」

言ってゆめじんはまた一枚の紙を渡してくる。

「ふむ……視察の計画？なにこれ」

視察予定という表題は真っ先に理解できたが、その下はひたすら細かい字が羅列されていて一気に理解するにはあまりに面倒な量だった。

「アルバレオ帝国皇帝が息女、フィアナ・ロー・アルバレオが南の都に視察旅行に行くという内容です」

「皇帝の娘？なに、そいつに会いにいこうってか？」

「そういうわけではございません。ただ、気になる点がいくつか見つかったので……」

「気になる点？」

「はい。今回の視察の警護は銃騎兵団ではなく魔術兵団が全面的に行っております」

「それがどうした？」

「これまでの慣例からすれば皇族の警護に銃騎兵団が関わらないのは今回が初めて、異例と言わざるを得ません」

「なんか事情があんじゃないの。あちらさんにも」

「今回の行き先、南の都『モンフェルト』もどうにも気になるのです」

「どういうこっちゃ？」

「モンフェルトは元々アルバレオ帝国とは別の国家でした」

ゆめじんは地図の南、下の方を示す。

「それが十数年前、革命が起きてアルバレオ帝国の一都市となったのです」

「へぇ」

「故に『革命の都』などと呼ばれ、未だに反帝国組織の根城と言われています」

「なんだか危なげな所だな」

「近年全体的に治安が良くなってきているのも事実ですが」

「ていうか何？皇族の娘がそんな危ないところに行こうとしてるのが気になるの？」

だとしたら心配のし過ぎだと思うが。

「これだけならいいでしょう。ですが、もしこの視察を取りまとめたのが銃騎兵団だったとしたら……話は全く変わってくると思いませんか？」

「……つまり、どういう事？」

「ですから、警護を全てライバルともいうべき魔術兵団に任せつつも、視察の内容は銃騎兵団が決めている。何かが起こるにはある程度のシナリオが組みあがっている気がしますが」

「行く価値ありってことか」

どうやら俺の次の目的地は決まったようだ。

「だと思います。……私からお伝えしたい事は以上です。では」

言ってゆめじんは紙を再び懐にしまうと、ふわふわと俺に近づいてくる。

「な、何……？」

ちょっとドキッとしちゃう青少年な俺。

「では、夢の続きにお返しします」

ゆめじんはぽんと俺の頭に手を乗せる。

「あ、あと守護精霊石の事、忘れないでくださいね」

念を押されてしまった。そんなに大事なのか。

「では、ご機嫌よう」

ずおんっ。

俺の視界は一瞬にしてブラックアウトした。

それからどれだけ寝たかは分からない。

俺が目を覚ますと、窓から既に空の真上まで昇ってきてた太陽の光が見えた。

「ぐあっ……」

眩しかった。開きたての目にこれはきつい。

「あー、体が重いな」

俺はゆっくり上半身を起こす。体中からポキポキと音がした。

「ふぅ……誰かいないかな。腹が減った」

俺は食物を欲する腹をさすりながら部屋のドアを開こうとした。

ガチャッ。

すると、俺が開けるよりも前に、部屋に誰かが入ってきた。

「……」

それは、とてつもなく意外な人物でした。

「シンゴさん。目が覚めたんですね。気分はいかがですか？」

そう言って、シオンは微笑んだ。

［２２］ゆめじん大報告会（後書き）

時々忘れかける。

シンゴ君が１７才だということを。

……また次回。

［２３］シオン（前書き）

寒い日には暖かい物が食べたくなる。

そう、鍋とかね。

言ってみただけ。２３話だわさ。

［23］シオン

ドアを開けたその格好のままポカンと立ち尽くす俺。

「あの……シンゴさん？具合がまだ良くないんですか？」

シオンは心配そうな目で聞いてきてくれる。

「……は！なぜシオンがここに？」

俺はまだ寝ているのか？
ここは頬をつねってみる場面なのか？

「ええと……私、定期的にこの村には診察に訪れていたんです。で、今回は怪我してる人がいるからと知らせを受けて」

「な、なるほど」

そういえばシオンは医師の免許持っているって言ってたな。

「ん？でもこのサギルタからこの村まで結構距離なかったっけ？」

「ええ、半日かかります」

シオンはさらりと答える。

「だ、だよねぇ」

それを定期的にって……。シオン、強すぎる。

「って、ちょっと待てよ」

俺は頭の中である計算を始める。

「半日掛かるはずのシオンがいるってことは……俺どれだけ寝てたんだ？」

「丸2日、だそうですよ」

これまたシオンがさらりと答える。

「がふっ。そりゃ腹も減るはずだな」

その瞬間俺の腹から地鳴りが響く。地鳴りは言い過ぎか？

「ふふっ」

シオンがくすりと笑う。

「は、ははっ」

俺もつられて渇いた笑い。

「何か食べる物を持ってきますね。シンゴさんはここで待ってて下さい」

「えっと……はい」

俺は素直にシオンの言葉に従いベッドに腰掛けて待つ事にした。

シオンはすぐに部屋を出て行く。

「……あー、びっくりしたぁ」

まさかのシオン。もうまさか過ぎて動悸が早い早い。

『いやー、ガチガチでしたね？』

ゆめじん登場。絶対ニヤニヤしてる。声しか聞こえないけど、絶対してる。

「うるせー。ていうかゆめじん、シオンが来てた事知ってたのか？」

『ん？なぜですか？』

「あんなに石の事ごり押ししてたのもこの状況なら納得だ」

『なるほど、そう考えますか。ええ、知ってましたけど？』

しれーっと言いやがる夢の住人。

「言ってくれても良かったんとちゃいまっか？」

変な弁が入った。だが気にしない。

『いやぁ、シンゴさんそろそろこういうサプライズ欲しがる頃じゃないのかなぁ、と』

「いらないから、そういうのいらないから」

そして俺の何を以てそんな判断を下したのだお前は。

『ま、ここはあれですかね。“ごゆっくりー”とか言っとけばいい場面ですかね？』

「今度会ったらぶん殴るという決断を大々的に宣言しておくよ」

『それは怖いですね。でも、私からコンタクト取らないと顔を合わせる事ないですけどね』

腹が立つとかそういう事以前にこいつの俺に対する距離感が分からなくなりそうだ。

と、俺がゆめじんとの会話で大きなため息をついた。

のと同時くらいに部屋のドアがノックされる。

「シンゴさん。入ってもよろしいですか？」

シオンの声。

「ああ、どうぞ」

ドアが開くと、シオンともう一人、どっかで見た覚えのある女性の二人が食事の乗っているであろうトレーを持ってきた。

「お待たせしました。こちらのソラさんが料理を作っておいて下さったのでそれをお持ちしました」

シオンがそう言うと、ソラさんというらしいもう一人の女性が小さく会釈した。

「有り合わせの物で恐縮ですが、もしよかったら」

「いやいや、ありがたや。ぜひいただきます！」

俺は手を合わせて二人の女性に頭を下げる。

二人が持ってきてくれたのは、村で収穫した穀物を何種類かブレンドして、魚のだし汁で煮詰めたお粥のようなものだった。あと、オレンジジュースっぽい飲み物。

「ん～～～まい！胃に優しく且つ美味い！もう言うことないね」

俺は素直に感じた通りに褒めた。ソラさんは照れ臭そうに笑みを浮かべる。

「命の恩人の方のお口に合うかと心配でしたが、良かったです」

「ん？命の……？」

そのワードに、俺は食べる手が止まる。

「はい。山の中で軍の追っ手に殺されそうになった私達を助けていただいたのは忘れるはずがありません」

ソラさんの真っすぐな視線の受け止め方に困りつつ、俺は記憶を探る。

「……おお！あの時の！」

銀蝿に追われてた二人。男の方は喋ったりもしたから覚えてたが、女の方はあれっきりだったからな。

「いやー、まぁ、放っておく訳にもいかなかったからね」

「私もカイも、いえ、村の皆もあなたに感謝しています。軍の横暴から救ってくれたと」

「横暴……ね」

もし、俺がこの村に辿り着かずに軍の実験が実行されていたら、と思うとぞっとする。

と、俺が考えを巡らしていると、

コンコン……。

部屋のドアがノックされる。

「ソラ。カイの奴が呼んでたぞ。家に来てくれって」

知らぬ男の声。村の人間かな？

「あ、はーい。では、シンゴさん、ゆっくりと休んで下さい」

「あ、うん。ありがとう」

ソラさんは俺とシオンに一礼すると部屋を出ていった。

そして部屋には俺とシオンの二人に。

「ソラさんってすごいですよね」

「ん？何が？」

シオンのしみじみとした呟きに疑問符を一つ。

「綺麗で気立てが良くて料理が出来て、カイさんは果報者ですね」

「うむ。でもシオンも負けてないと思うけどな」

「え？」

「ん？……あ」

シオンの驚きの視線を受けて、俺は俺が何気なく口走った言葉の意味と捉え方に気付く。

「あ、いや、えーと……」

何か言おうとするが、こういう時ほどいい台詞が降りてこない。

「……ふふっ」

そんな俺の様子を見ていたシオンが小さく笑う。

「ありがとう、シンゴさん。嬉しいです」

ニコ。っとしたシオンの笑顔に俺の鼓動はまた一気に跳ね上がった

のであった。

我ながら、単純で、ある。

「……あ、そういえば」

と、俺は唐突にシオンに聞いておかなきゃならないことを思い出す。

「シオン。この石のことなんだけど……」

俺は、今ではただの石となってしまった守護精霊石を見せる。

「これは……持っていてくださったんですね」

シオンは嬉しそうに石と俺を交互に見る。

「もちろん。今回はこの石に救われたようなものだしね」

「私も、シンゴさんからいただいたお守り、大事に持ってますよ」

そう言ってシオンは服のポケットから俺が渡した家内安全のお守りを取り出した。

「私もこのお守りに守っていただいてます」

シオンは大事そうにお守りをぎゅっと抱き締める。

「はは、なんか照れるな……」

俺はなんとなく頭をぽりぽりと掻きながら視線を外す。

『シンゴさーん。忘れないでくださいねー』

うるさい今いいところだろうが空気読めゆめじん。

俺は念仏を唱えるようにゆめじんに文句を言う。

「？……どうかしました、シンゴさん」

「いや、なんでもない。なんでもないんだよ」

俺はハハハと渇いた笑いを繰り出す。

「そ、そういえばさ」

そして不自然に話題を切り替える。

「この石ってどこで手に入れたの？」

「その石ですか？……ええと、確か母がどなたからか譲り受けた物だと聞いておりますが……」

「そ、そうなんだー」

だそうだ、ゆめじん。直接シオンがもらったんじゃないらしい。

『……そう、ですか』

明らかに納得していない様子だったが、気にしない。

「これが、何か？」

「いや、ちょっと気になっただけだから、他意はない」

俺は言いながら石をしまう。この話題はここまでにしとこう。

「そうですか」

俺に倣ってかシオンもお守りをしまう。

その後は、シオンと他愛のない話をした。

そして、もう日が暮れようかという頃、カイさんとソラさんが俺達を迎えに来た。

なんでも皆の無事を祝して宴を開くらしい。で、村の救世主たる俺にもぜひ！ってことらしい。

俺の位置付けがいささか恥ずかしいが、せっかくの厚意を無下には出来ない。俺はカイさんとソラさん、そしてシオンと一緒に村の集会所へと向かった。

集会所には、すでに村の老若男女と、頭率いる一味の連中が仲良く入り交じった状態になっていた。

「お、救世主様が来たぞ！」

ただでさえ声のでかい頭の大声で、場の視線が一気に俺に集中する。

ううう、恥ずかしい。

「がはは！おいおい、んな所突っ立ってねぇでこっち来て座れや救世主様！ってか！」

えらくご機嫌な頭がばんばんと自分の隣の空いてる席を叩く。

頭出来上がんの早すぎだろ！

俺は苦笑しつつも呼ばれてしまったので頭の隣に向かう。

シオンはソラさんと一緒に女子が固まっているエリアに落ち着いた。

カイさんはカイさんで村の若い人達の輪の中に入っていく。

俺が頭の隣に腰を下ろすと、頭がぐいと俺に陶器っぽいグラスをを渡してきた。

「ほれ、お前さんも飲みな」

「は、はぁ……」

俺がグラスを受け取ると、頭は近くにあったどう見ても酒瓶にしか見えないボトルから俺のグラスになみなみと注いできた。

「いや、頭、これって……」

「あん？酒盛りなんだ。酒を飲まなきゃ始まらねぇだろ」

やっぱり酒かよ。

「いやいや、俺まだ17だし、酒は飲めないよ」

日本の法律が通じるかどうかは分からなかったがとりあえず言ってみた。

「んん？あんた酒飲めないのか？」

「まぁ、飲めないというか飲んだことが無いというか……」

俺が言葉を選びながら話すと、頭はドンと酒瓶を床に置く。

「そいつぁ駄目だ！男として生まれといて酒を飲んだことが無いなんて人生の損ってなもんだ！よし！いい機会だから飲め！」

ええ～……。どうしてそうなる？

「いや、だから飲んじゃいけないんだってば！」

両手を振ってＮＯの意志を示す俺に対し、頭はぐいぐいとグラスを持って迫ってくる。怖いよ！

「いいから飲め！男が酒を酌み交わすぶはぁ！！」

頭の顔面に木の実ががつんと当たる。

飛んできた方を見ると、頭の愛娘シェリアちゃんがご機嫌ななめな顔で頭を睨んでいた。

「な、なにすんだよシェリア～」

思わぬ人物からの突然の攻撃に一気に怯む頭。

「お兄さん、困らせたら……ダメ」

シェリアちゃんはそう言うと、俺の腕をぐいと引っ張ってくる。

「ん？どうしたのシェリアちゃん？」

俺はシェリアちゃんに引っ張られるがまま集会所の端の方に行く。

そこは、村の子供達が集まっているエリアだった。

「ふむ。親は親、子は子、だな」

日本にいた頃も親戚が集まった飲み会とかこんな感じだったなとか思いながら俺はシェリアちゃんに引っ張られそのエリアに入る。

で、１時間後。

「あー、疲れたぁ」

俺はごろんと横になる。

このエリアに入ってから、子供達にせがまれるまま折り紙を教えたり手品やったり動物の鳴き真似したり、なんか色々させられた。

そして、夜も更けてきたと、子供達は親に連れられて家へと帰っていった。

「お疲れ様です」

カイさんだ。ちょっと頬が赤いところを見るとこやつも少し飲んだな。

「飲み物や食べ物まだ残っているから一緒にいかがです？」

「おー。とりあえず腹減ったね」

俺は起き上がると大人達の宴席に混じっていった。

もちろん飲み物はノンアルコールで。

「ふぅ……ちょっとお手洗いに……」

俺は席を立つと、集会所の外にあるトイレに向かった。

と、その途中。

「ん？あれは……シオン？」

俺は、集会所の外の木箱に一人腰掛けるシオンを見つけ、近寄っていく。

「シオン、こんなところでどうしたの？」

俺が話し掛けると、ワンテンポ遅れてシオンはゆっくりとこちらに顔を向ける。

「あっ、シンゴさぁん。こんばんは」

「え？あ、ああ……こんばんは？」

とりあえず返してみた。ていうかシオンの様子が少し変？じゃないか。

なんか目がとろんとしてるし顔が赤みがかってるし……。

「……シオン、酔ってる？」

俺がそれしかないだろうなぁと思いながら聞いてみると、シオンはなぜか満面の笑みを浮かべ、

「私ですかぁ？全っ然酔ってまへんよぉ？」

えへへ、と可愛らしく笑うシオン。

はい、酔ってますなこりゃ。

俺も17だからあまり酔っぱらいに遭遇するなんて経験はあまりないが、それでも言える。

「ん～？どうしましたぁ？シンゴさ～ん」

酔ってるよこの人。

「あー、シオン？とりあえず中戻ろうか？」

俺はシオンを立たせようと促す。が、酔いが足元まで来ているのかシオンはうまく立ち上がれない。

「うお！危ないって！」

俺は不安定なシオンの体をなんとかバランスをとらせようとして、

「……」

なんか抱き締めてるみたいな格好になってしまった。

「シンゴさぁん？」

シオンがとろんとした声で俺への上目遣い。

「う、いや、あの……ご、ごめん」

俺は咄嗟に身を離そうとする。

ギュッ。

「え……」

が、そんな俺の行動は、俺の背に回されたシオンの両腕により阻止される。

「シ、シオン……？」

「だめです……」

シオンは俺の胸に顔を埋めながら言う。

「な、何が……？」

もはやどうしたらいいのか分からない俺に対し、シオンは顔を俺に向け、続ける。

「離れちゃだめです！離れたらシンゴさんまた誰かの為に無理しちゃうから！」

よく見れば、シオンの目は少し涙目になっていた。

「シンゴさんが怪我をしたと聞いてすごい心配しました。命に関わるような怪我だったらどうしようって……私、ずっと……」

シオンは静かに泣きだす。

俺はと言えば、離しかけた両腕を静かにシオンの背に回し、そっとぎゅっと抱き締めた。

そうすべきだと思ったしそれしか出来ないだろうと思ったから。

「心配かけてごめん」

俺の為に一人の女の子が涙を流してくれている。この事実は重く受けとめるべきだろう。

「シンゴさん……」

「ん、何？」

「私、シンゴさんと……」

バキッ。

何かが折れたであろう音。シオンの言葉も止まる。

俺が恐る恐る振り向くと、そこには……。

「……お邪魔、ですよね？」

ソラさんが心底申し訳なさそうな顔をして立っていた。

足元には折れた木の枝が。

「どうなんだろうね？」

俺は恥ずかしさと気まずさから疑問符で返してしまった。

「ごめんなさい、シオンさんがなかなか帰ってこないから心配になって……」

ソラさんは月明かりだけでも分かるくらい顔を真っ赤にさせてなんだか両腕をバタバタさせている。

「で、様子を見に来てみたら、その、シンゴさんと、えと、シオンさんが、あの、抱き合って、いたから……」

「そ、そう……」

俺はなんとかシオンの体をはがそうとするが、シオンは離れる気配すらない。

「あ、あの、皆には馬に蹴られたくなければトイレ行くなって言っときますから。ど、どうぞごゆっくり！」

そう言ってソラさんは小走りに戻っていく。

「え！？ちょっ！待ってソラさん！」

俺はなんとかソラさんを止めようとしたが、シオンが離れないため動けない。

かといってむりやり引き剥がすなんて鬼畜な芸当できるはずもなく。

……幸福と不幸が一度に来るってこういう気分なのか？

俺は、諦めにも似た気持ちでシオンを見る。

「……え？」

シオンは……寝ていた。

俺の体に腕をがちりと固定したまま、静かに寝息をたてていた。

「……はは」

平和だなぁ……。

俺はシオンをお姫さまだっこ式で抱え、集会所の中に戻った。

案の定、皆に冷やかされた。

でも、そんなのどうでも良かった。

それ以上に、幸せな気持ちで満たされていたから。

こうして、夜は更けていく。

［２３］シオン（後書き）

桐原慎吾。１７歳。お年頃。

まっ、そういう事です。

［２４］決意の夜。そして旅立ち（前書き）

最近ドキドキが足りない。

動悸だとなんか違うんです。

欲しいのはドキドキなんです。

なんのこっちゃ。

［２４］決意の夜。そして旅立ち

「それじゃあ、嫁さん大事にしろよ！」

とは宴もお開きになりいざ解散という時に頭が俺にかけてきた言葉。

嫁って……。

俺は満面の苦笑いを浮かべつつ、シオンを背負ってソラさんと共にソラさんの家へと向かう。

「まさかシオンがこんなに酔う人だったとは」

背中で静かに寝息をたてているシオンを気遣いつつ、俺は呟く。

ま、そのお陰で素面じゃ絶対聞けないような事を聞けたがな。

「いつもはこんなになるまで飲まないはずなんですけど、なんだか今日はすごい機嫌良く飲んでましたね」

隣を歩くソラさんがシオンの方を見ながら言う。

「ふぅん。何かいいことあったのかな？」

「あったんだと思いますよ。ね、シンゴさん」

ソラさんはあたかもシンゴさんなら全部知ってますよね的な笑顔を見せる。

「な、なに……？ソラさんは分かるの？」

「分かる……というか女の勘というか……ですね」

ソラさんはあえて核心は伏せましたみたいな言い方をする。

「女の勘、ねぇ」

俺は今一つ腑に落ちなかったが、ソラさんの家に着いたので、一旦考えるのはやめにした。

2階の一室がシオンの滞在している部屋だということで、俺はそこまでシオンを運んだ。ソラさんはなぜか1階から上がってこようとはしなかった。

「よいせっと」

慎重にベッドに寝かせる。

「……」

穏やかな寝顔のシオンを見つつ、思う。

可愛いな、と。

さっきはシオンの酒の勢いとはいえ抱き合ったりなんかしちゃったりして……。

「う……」

思い出しただけでも鼓動が早くなる。そして変なテンションになり

そうだ。

「行こう……」

俺は理性を奮い立たせてさっとその場を去ろうとした。

ギュッ。

「え？」

でも出来なかった。

俺の指を、シオンの指が申し訳程度に掴んでいた。

驚く俺がシオンの顔を見ると、目がきちんと開かれ、こちらをじっと見ていた。

「あ、ごめん。起こしちゃった？」

「いえ、あの……少し前から起きてました」

シオンはなぜだか俺から目を逸らす。恥ずかしそうに。

「そ、そう」

それ以上言葉が続かない。というか思い付かない。口に出来ない感情が先立ってしまって。

「今日は、飲み過ぎました……ごめんなさい」

「な、なんで謝るの？」

「だって、シンゴさんに色々迷惑を……」

「迷惑だなんて思ってないよ。ここまで運ぶのだって訳ないし」

「いえ！……それもなんですが、その……」

シオンは言いづらそうに口籠もる。

「え、ええと……」

分かってる。シオンが何を言いたいか、そんなもの考えなくても分かる。

「シオン、今日は飲み過ぎだよ！今度からは考えながら飲まないとね！」

ははは、と乾き切った笑い。

しかし、シオンの表情は真剣なまま崩れない。

シオンは体を起こし、俺の方を向く。

「確かに今夜の私は飲み過ぎて、酔っ払ってました。……でも、覚えてます。私が何をしたか何を言ったか」

もう酔いは冷めたのだろうか、シオンの表情は普段のそれに戻っていた。

「シ、シオン……」

俺は少しシオンの迫力に圧された。しかし、ここは男としてきちんと聞かなきゃならない場面だと直感で判断し、真剣にシオンの目を見て話に耳を傾ける。

「シンゴさんが怪我をしたと聞いた時、本当に自分でも信じられない程の不安に襲われました。ただ心配というにはあまりにも重い気持ちに……」

シオンは一言一言大事に言葉を紡いでいく。

「目を覚ましたシンゴさんを見たときも、無事に起きてくれて良かったと心の底から思いました」

嬉しかった。シオンからそう言ってもらえて。ただ嬉しかった。

「お酒の力を借りて、なんていうのは本当は良くないと思いましたが、でも……あれが私の……素直な気持ちです」

シオンは少し躊躇いつつも、俺の目を見て最後まで言葉にしてくれた。

「……ごめんなさい。突然こんなこと言われても困っちゃいますよね」

シオンは話を終わらせようとするかの様にそう言うと、ベッドに再び横になろうとする。

「まだ酔いが冷めていないのかもしれないです。私もう寝ようと思

います。シンゴさんも……」

俺を促す為に差し出されたシオンの手。俺はそれを何も言わずに自分の手で包み込む。

「シンゴ、さん……？」

呆然と驚きの表情を浮かべる。

「ごめん、シオン」

「え？」

今度は突然謝られて、更に困惑の表情を浮かべるシオン。

「俺は、これからも命懸けの……死と隣り合わせの戦いをしていかなくちゃいけないと思う」

俺はシオンの手を力強く握る。

「でも、絶対に生きて……シオンの元に帰ってきたい、そう思っている」

「シンゴさん……」

ともすれば俺の一方的な想い。しかし、これが俺の偽らざる気持ち。

「今回の戦いだって、シオンの事考えたらすげぇ力が湧いてきて、とんでもなく強い敵に勝てた。……はは、分かりやすいのかも。俺って」

苦笑い。というか何言ってんだろう俺。

「……絶対に」

「ん？」

シオンはうっすらと涙を浮かべた顔で、言葉を紡ぐ。

「絶対に、帰ってきて下さい……。怪我をしたなら私が治します。だから……」

シオンは俺の手に両手を添える。

「生きて、帰ってきてください……」

「……ああ、約束する」

俺は誓った。シオンの為に死んでも死なないと。

……なんかおかしい気もするが、大丈夫やれば出来る。

こうして、俺の密度の濃い一夜は終わりを告げた。

その翌朝。

俺の体はたいしたものでもう怪我など体のあらゆる問題がほぼ解決していた。

靴ひもを結び直すと、俺は部屋を出た。

「まずは南に向かうんだよな」

『ええ、ひたすら南です』

「よっしゃ、いざ行きますか！」

俺が勢い良く外へ出る。

「……あら」

そこには、シオンや頭を始め村の皆が大集合していた。

「こりゃまた皆さんお揃いで……」

俺が皆の元に歩み寄ると、ソラさんに背中を押される様な形でシオンが俺の前に出てきた。

「シオン……」

「シンゴさん……」

昨夜の事を思い出すとうまく目が合わせられない。言うまでもなく恥ずかしくて。

そして俺たちをニヤニヤしながら見ているギャラリー。分かっててシオンだけ前に出したなこんちくしょう！

「えっと……お気を付けて……あと、これを」

シオンはそう言いながら紙包みを渡してきた。

「う、うん……これは？」

「お弁当です。道中で食べてください」

「……ありがとう」

俺はしっかりと紙包みを受け取ると、無意識にシオンの頭を撫でていた。

「え……？シンゴさん？何を……」

困惑するシオン。

「いや、今の内に元気を貰っておこうと思って」

「い、意味が分からないです……」

恥ずかしがるシオン。

総じて可愛かったのは言うまでもなし。

「じゃ、充電も完了したし、俺行くね」

俺は最後に撫でた頭をぽんと叩くと、村の皆の方を向く。

「じゃ、俺行きますわ！皆さん元気で！」

俺は大きく手を振る。

「おう！達者でな！」

と頭。

「今回は本当にありがとうございました！この恩は絶対に忘れません！」

とカイ。隣で深々と礼をするソラさんも。

あと、村の皆も俺への礼を口にする。

俺は照れ臭かったが、だが同時にとても気分良く村を出た。

出会いと旅立ちか。

『なんだかいい結末、ですね』

ゆめじんの声もなんだか穏やか。

「毎回こうであることを切に願うな」

『では、新たな出会いを求めて参りましょうか』

「おう！いざ、南へ」

俺は力強く歩を進める。

この場所で手に入れたたくさんの大事な物を胸に秘めて。

「……あ」

そして俺は思い出す。

この村に入ったときに俺を殴ってきたモヒカン君から、まだ謝罪の言葉を聞いてないことを。

「ま、いいか」

生きてりゃまた会える。

生きてりゃ、な。

俺は南へ向かうのであった。

［２４］決意の夜。そして旅立ち（後書き）

南といえば沖縄。

それだけです。

……そんなもんです。

［２５］とある村の災厄（前書き）

人間、寄り道も大切です。

でも、寄り道のし過ぎはいけません。

２５話じゃん。

［25］とある村の災厄

村を出てから数時間、俺はひたすら山道を南方面に進んでいた。
といっても、力を少し使って早めに動いているのでかなりの距離はいっているはず。

「にしても、普通の道を行くという選択肢は無かったのかね？」

既に道中猛獣に襲われる事3回、野盗に襲われる事1回。快適な旅とは言い難い数字だ。

『近道ですから。それに今のシンゴさんならあんなの敵にすらならないって感じじゃないですか。このまま行きましょう』

ゆめじんはそう言うが、相手にする方は何だかんだで結構疲れる。

「近道、ねぇ」

ぐぎゅる～。

盛大に鳴り響く我が腹時計。

「うむ、ここらで飯にしようと俺は決断した」

決意を胸に俺は手近な巨木を登り、見晴らしのいい辺りの枝に腰掛ける。

『まぁ、村から歩き通しですからね』

「そういうこと。飯ぐらいはしっかり食べねぇとな」

俺はシオンから貰った紙包みを開く。

「おお！」

中にはサンドイッチ、ぽいものがどどんと入っていた。

「いただきます！」

俺は手を合わせてシオンに感謝の意を表すると、さっそくかぶりついた。

「んふ～、うめぇ～」

ただでさえの空腹。そこにきてシオンの手料理。おいしくないはずが無い！

俺はあっという間に完食してしまった。

「はー、美味かった」

俺は幹の方に体を預け、食休みの体勢に入る。

『……にしても、真面目な子でしたね』

「ん？誰が？」

『シオンのことですよ。告げようと思えば告げられたのに……』

「なんのこっちゃ？」

『分からないとは言わせませんよ。昨夜の事、シオンの気持ちには気付いて、ましたよね？』

「気持ち……。まぁ、ちょっとは好意を持ってもらってるよな」

『ちょっと？かなりの間違いですよ』

「かなり、なのか？俺自身いっぱいいっぱいだったからな」

そんなに鮮明に思い出せないし。

『はぁ……まぁ、でも、あなたがああ言ったって事は、シオンに対して、そうなんですよね？』

女子高生の如き雰囲気でゆめじんは聞いてくる。

「……何が聞きたいんだよ？」

『だーかーらー……。シオンの事、好きなんですよね』

ひそひそ話っぽく言ってもどうせこの会話俺にしか聞こえて無いんちゃうか？

「……ああ、好きだな」

今更隠すものでもあるまい。だが、口にすると恥ずかしいな。

『おー。認めましたねぇ』

ゆめじん、楽しそうだな。

「……さ、行くか」

俺は木を降りていく。

『え？もうちょっと話を聞かせて下さいよ』

「なんか……やだ」

『やだって……拒絶の仕方が子供……』

「うっさいなぁ、恥ずかしいんだよ！こういう事ばっかり話してると」

で、言う間に俺は地面に下り立った。

「ふげ」

ばずだった。

なんか足元から変な声が聞こえた気がしたが、気のせいか。

俺は念の為、足元を確認する。

「……」

俺の下に誰かがうつ伏せに倒れていた。

「……どわぁ！」

俺は慌てて誰かの上からどく。

「すいません！わざとじゃないんです！だから怒らないで……」

俺が必死に謝っていると、俺の下敷きになっていた何やら緑色のローブの様な物に身を包んだ人物が俺に手を伸ばしてくる。

「怒っちゃぁ、いねぇよぉ。ただよぉ、兄ちゃん」

顔もローブの延長のような物をまとったその人は、少ししわがれた声で続ける。声的に多分男だ。

「おれぁ、腰いわしちまって動けなかったんだよぉ。ってことで一つもの頼んでもいいかねぇ」

「な、なんでしょう」

「この山道の途中にある村におれぁ用があるんだけどよぉ、一つおれをそこまで運んではもらえんだろうかねぇ」

「は、はぁ……いいっすよ」

「悪いねぇ、頼むよぉ」

と、そんな感じで俺は腰をいわしたおっさんを背負ってある山村に向かう事になった。

「悪いねぇ。にしても兄ちゃんここらじゃ見ない格好してるが、どこから来たんだい？」

山村に向かう道中おっさんは俺の服をぽんぽんと叩きながら聞いてくる。

「ええと……、旅の途中で、すごい遠い国から来たんですよ」

「遠い国ねぇ。こんな物騒な国に来ちまうなんて兄ちゃんも奇特な男だねぇ」

「物騒？」

「この国は今軍事政権と言ってもいいくらい軍隊が力を握っているんだよぉ」

おっさんは得意げな口調で続ける。

「おまけに軍隊も銃騎なんちゃらと魔術なんちゃらが対立してるからよぉ、物騒だよぉ、この国はぁ」

「なるほど。にしてもおじさん詳しいっすね」

「カッカッカ。この程度はこの国で暮らす人間なら誰でも知ってるよぉ。国の恥ずべき部分だってなぁ」

おっさんはそう言って笑い飛ばす。

「恥ずべき……部分」

「ただよぉ、そんな軍隊の中にも真面目に国守ろうとしてる善玉もたくさんいるんだよぉ。兄ちゃん旅の人ならその辺勘違いせずにしといてくれやぁ」

「あー、うん。おじさん軍隊に知り合いでもいるの？」

「何人かなぁ。どいつもこいつも根は良い奴だったなぁ」

「だった？」

過去形。そこが少し引っ掛かった。

「そう。軍に入る時ぁ全員が全員国を守るっちゅう理想をもって入ってくるんだよぉ」

おっさんは少し真面目な口調になる。

「軍隊はまずその理想を歪ませる。理想の為なら人の命を平気で奪える人間にしちまうんだよ。言うなれば洗脳だなぁ」

「洗脳？」

「そう。人間が長い時間かけて心に刷り込ませてきた『命の尊さ』って奴を『正義』って大義で上塗りするんだよぉ」

おっさんはまたカカカと小さく笑う。

「それはつまり、正義の為なら人の命を奪う事もやむを得ない……そういう事なのか？」

俺は自分なりに理解したことを改めて疑問にしてぶつける。

「そうだ。正義の為の犠牲。犠牲無くして正義は成り立たない。そんな方程式を作り出すわけだぁ」

「目茶苦茶だな……」

俺は素直にそう口にする。

「そう、周りの人間は皆そう思う。だがな、軍の、特に若い奴らはその感覚を、その感覚だけをマヒさせられてんだよぉ。なんたって戦争で最前線でドンパチする奴らが人を殺すの怖いじゃ話にならねぇからなぁ」

「……」

確かに。おっさんの言う事は軍隊という物の在り方としては正しく合理的な考え方だろう。

だが、俺はどうにも納得がいかなかった。

「なんだか腑に落ちないって感じだなぁ、兄ちゃん」

俺の心中を見透かしたかのようにおっさんが言う。

「カッカッカ。若い内はそれでいいんだよぉ」

おっさんは俺の肩をパンパン叩く。

「おっと、そんなこと言ってる間に村ぁ見えてきたかねぇ？」

前を見ると、確かに木造の家屋のようなものが見えてきた。

「兄ちゃん、本当に助かったよぉ。運んでくれた上に俺の与太話に付き合ってくれてよぉ」

「いやいや、貴重な話を聞けたよ。ありがとう」

「カッカッカ。あんな話で良けりゃあいくらでも話したらぁよ」

村の入り口をくぐると、近くにいた初老の男が駆け寄ってきた。

「キバさん！どうしたんですか突然。ていうかなんで背負われてんですか？」

初老の男性は俺とキバという名前らしいおっさんとを交互に見ながら困惑気味に言う。

「なぁに、山道でちょいと腰をいわしちまってよぉ、通り掛かりの親切な旅の兄ちゃんに運んでもらったって訳だよ」

おっさんはまたしてもパンパンと肩を叩く。

「そうでしたか。いやぁ、旅の方、どうもありがとうございます」

事情を理解した初老の男性は俺に向かって頭を下げる。

「で、村長はいるかい？」

キバ、おっさんはそういったやり取りもそこそこに男性に聞く。

「ええ。広場で祈祷に立ち会ってます」

「祈祷？はて、今はそんな時期だったか？」

「旅の祈祷師様に不作の原因を占ってもらってるんです」

「ほうほう……。よし、兄ちゃん」

おっさんは今度はぽんと一発肩を叩いてくる。

「悪ぃがもうちっと足になってくれ。村の広場に行ってくれや」

「あ、ああ。分かった」

祈祷師がどうたら言ってたが、あまりいい予感はしないな。

俺は初老の男性に案内されるまま村から少し外れた場所にある広場に向かった。

広場に入ると、そこは異様な雰囲気に包まれていた。

周りは木々が生い茂っているため広場は少し暗く、かがり火が焚かれていた。

その中で、赤いローブと被り物に身を包み、木を削りだして作ったであろう杖を振りかざす、あれが祈祷師であろう男がいた。

そして、その前で正座し祈祷師に真っすぐに視線を向ける村の人間達の姿があった。

「……おい。不作の原因を占うっつったな。一体どういうことだ」

おっさんは案内してくれた男に聞く。

「はい。実は、先日収穫を間近に控えた畑の作物が、突然なんの前触れも無しに枯れちまったんですよ」

「ほう……」

「こんなこと初めてだからどうしていいか分からないで皆途方に暮れていたら、あの祈祷師様が現れて」

“この村の周囲には悪しき気が充満している。作物が枯れたのもその悪しき気のせいだ”

と言って、原因を詳しく調べると言って占いを買って出たという。

「見返りは何もいらないって言うから俺達はわらにもすがる気持ちでお願いしたんです」

男の話とこの状況。俺にはなんだかえらく時代錯誤の話に思えた。

「なるほどねぇ。よし、兄ちゃん、祈祷師様とやらの近くまで行ってくれ、何を言いだすのか聞きたい」

「あ、ああ、分かった」

俺は邪魔をしないようにそろそろと近づき、腰を下ろす。おっさんも座れりゃ大丈夫と俺の背を降りる。

それと同時くらいに杖を振りかざす動きをやめた祈祷師が、村の人間の方を向く。

「この村を覆う悪しき気の正体が分かりましたぞ」

両手を広げ、これでもかと言うほど身振り手振りを交えつつ祈祷師は言う。

「で、その正体とは？」

村の人間が聞くと、祈祷師はなぜか悩むような動きを見せた後、口を開いた。

「人の魂を食らうを生業とする悪魔の仕業です。今回の災厄はその悪魔が仕掛けたもので間違いないでしょう」

「な、なんと！悪魔に……。な、なんとかならないのですか！」

村の人間が懇願すると、祈祷師は再び悩むような動きを見せた後、重々しく口を開く。

「生け贄を捧げよ。それ以外に助かる道は有り得ぬ」

生け贄という言葉に広場はどよめく。

「静粛に！生け贄は女。麗しく若い者であればその者一人の魂で村は救われましょうぞ！」

祈祷師は声高らかに言い放つ。

「生け贄って……」

俺の感覚からすれば祈祷師の言ってる事は目茶苦茶な事に聞こえた。

しかしこちらは魔術が普通に存在する世界。悪魔だっているんじゃないかという思いが俺の中に湧いてきたのも事実。

『様子を見ましょう。動くのはまだ遅くても大丈夫です』

俺の心情を察したのだろうか。ゆめじんが言う。

「ああ……」

俺はあくまで正座したまま祈祷師を観察する。

祈祷師は並んでいる村の人間を物色するかのように広場内を歩く。

「……あなただ！あなたこそ生け贄にふさわしい！」

「きゃっ！」

祈祷師はある女性の腕を掴み立ち上がらせる。

その女性は確かに綺麗な人だった。年も多分俺と大して変わらないだろう。

「この者を生け贄に捧げよ！さすればこの村は救われん！」

祈祷師はそう言いながら女性を引っ張って皆の前に出る。

「待ってくれ！」

すると、一人の若い男が祈祷師の元に駆け寄る。

「ん？どうしたというのだ？」

「こいつの兄貴だ！俺の妹を生け贄だなんて冗談じゃねぇぞ！」

女性の兄だという男はえらい剣幕で祈祷師に迫る。

「しかし、このままでは村自体が破滅の道を歩むは明白！この者を生け贄に捧げねば救いは訪れぬぞ」

祈祷師は杖で男を牽制しつつ毅然と言い放つ。

「し、しかし……」

男は祈祷師の言葉に怯んだ様な様子を見せる。

「に、兄さん……」

女性の方も、混乱しつつも兄に対し助けを求めるような目を向ける。

「いつ……いつ生け贄を捧げるんだ」

兄が怒りをぐっとこらえるように聞く。

「今夜だ」

「今夜！いくらなんでも早過ぎるだろう！」

「いたずらに時を置けばそれだけ事態は悪化する。さぁ、早々に支度をしていただこうか」

祈祷師は毅然とした態度を崩さずにそう言うと、他の村の人間にも儀式の流れを伝えていく。

村の人間達も困惑していたが、祈祷師の迫力に圧されたのか口を挟む者はいなかった。

「行こうか……兄ちゃん」

キバさんは俺の肩をぽんと叩いてそう告げる。

「あ、ああ……」

俺は再びキバさんを背負って広場を出た。

「いやぁ、どえらい場面に出くわしちまったなぁ、兄ちゃん」

「どうにかならないのかな?悪魔を鎮めるための生け贄なんて目茶苦茶過ぎる」

俺は溜まってた苛立ちをはき捨てる言う。

「おー。その気があるなら一つ畑の方に向かってくれないか」

「え?畑?」

というわけで俺はキバさんを背負って枯れてしまったという村の畑

に向かった。

畑に着くと、そこは想像以上の惨状だった。

どの作物も一本残らず枯れ、実っていたであろう野菜などもボロボロになっていた。

「ひど過ぎだろ……」

素人目にもそうだと分かる畑の現状を、キバさんは村の人から杖をもらってよたよたと歩きながら確認していた。

「なるほどねぇ……」

キバさんは土を何ヶ所もすくっては戻すを畑中で繰り返していた。

「これが悪魔の仕業……」

「ん？兄ちゃんはそう思うかい？」

キバさんはひょこりと顔を上げて聞いてくる。

「にわかには信じがたいけど、でも突然こうなったんだとしたらそれぐらいの理由があるんじゃないかな」

たった一日でこうなるなんて余程強い刺激を受けなければ無理だ。

「そう思うならよぉ兄ちゃん。ひとつ俺の話を聞いてみないかい」

「え？」

「もちろん兄ちゃんにその気があれば、だがな……」

そう言って、キバさんはにっかと笑う。

それは、『生け贄』が捧げられる3時間前の話。

［25］とある村の災厄（後書き）

まさかの続きます。

続きますからね。

［２６］とある村の災厄その２（前書き）

先に言っておきましょう。

よく喋ります！

誰かが！

そんな２６話だじぇ。

［26］とある村の災厄その2

村では、祈祷師の指示に従い儀式の準備が粛々と行われていた。

この村では一昔前まで生け贄を捧げるという文化が存在していたという。

作物の不作など村に凶事が起こった時はそれを神の怒りと解釈し、生け贄を捧げその怒りを鎮める。

しかし、その生け贄も必ず死ぬ訳ではない。

3日3晩祭壇に捧げられ、もし無事であったなら、神が人間の誠意を理解し許したと認識し、神に感謝し儀式は終わる。

しかし、ここは山の中、しかも生け贄の祭壇には火を灯してはいけないという決まりまである。

その為、生け贄の大半が獣に食い殺されてしまい、無事に村に帰れる者は一握りもいないのだという。

俺はキバさんからその話を聞き、更にある事も聞いた。

「それ……本当だったらとんでもない事に」

「だから、そうだと困るから兄ちゃんに協力してもらってどうにかしようって訳だよぉ」

キバさんは杖の先が真っすぐに俺に向く。

「でも、だったら今止めれば……」

「それじゃ駄目なんだよぉ。それじゃぁなぁ」

「は、はぁ……」

俺はキバさんの迫力に圧される。

ザッザッザッ。

そんな俺達の横を、走っていく人影が一つ。

「ん？あれは……」

確か、生け贄にされた女性の、お兄さん？

なんだかえらく張り詰めた顔で走っていったな。

「あらら。ありゃあ早まるな」

キバさんがあきれ気味に言う。

「は、早まるって？」

「決まってんだろう。てめぇの妹助けようって話だよ」

「そ、それってまずくない？」

「まずいな。ってことで兄ちゃん！止めてきてくれ！」

キバさんはそう言って俺を促す。

「あ、ああ……」

俺は急いで追い掛けた。

男は、自分の家だろうか、に入っていった。

俺はお構いなしに家の入り口に張り付き様子を見る。

「よ、よし……」

見ると、男はナイフのようなものを懐にしまおうとしていた。

その用途は容易に察しがつく。俺は静かに家に入り、扉を閉める。

「だ、誰だ！」

扉を閉めたわずかな音に反応し、男はナイフを構える。

「落ち着け。話をしにきただけだ」

俺は両手を上げて攻撃の意志が無い事を告げる。

が、男は息荒く興奮状態だった。

「だ、誰だお前は！」

「旅の者、だね。人助けしてその人運んでこの村に来たんだ」

俺はなるべく男を刺激しないよう穏やかな口調で言う。

「お、俺に何の用だ！」

「あんたがずいぶん気が立った感じで走ってたから、何かあったのかと思ってね」

男は俺の話を聞きつつも、ナイフを下ろそうとはしない。

「とりあえず、さ。それ危ないから下ろそうよ」

俺は視線をナイフに向ける。

「……もう、これしかないんだよ……！」

男の言葉は震えていた。

「こうでもしなきゃリナは救えないんだよ！」

「リナ？」

「自分の妹が生け贄に捧げられようとしてんのに……呑気にしてられる訳無いだろぅが！」

やはりこの男は、生け贄の、リナさんという人の兄だ。

「村のじじい共は村の為だ仕方ないの一点張りだ！口じゃあリナを哀れんでるが、内心じゃあ自分の肉親じゃなかった事を心の底から安心してんだよ！」

男の目には涙が溜まっている。

「都合が良かったんだよ。あいつの肉親は俺しかいない……。心底から悲しむ人間も俺しかいない。そういう考え方しやがったんだよ！」

男はぼろぼろ溜まったものをこぼすように吐露していく。

「そう思うなら、妹さんを大事に思うなら、俺の話を聞いてくれ」

「やだよ！お前だってどこの誰だか分かんねぇ他人だろうが！俺を止めにきやがったんだろうがぁ！」

男がナイフを構え突進してくる。

「うぉ！」

俺はとっさに男の腕を掴むと、二人もつれるように扉を破り家の外に投げ出される。

「っはぁはぁはぁ……」

男は弾かれたようにナイフを拾い走っていく。

「ま、待て……！」

俺は男を追い掛けようとする。

「追わなくていいよぉ。兄ちゃん」

いつのまに追い付いたのだろうか。キバさんが俺の肩を杖でこつんと叩く。

「え？いいのか？このままじゃ……」

あいつは間違いなく暴走する。そう言い掛けた俺をキバさんはまぁまぁと言葉を遮る。

「ああ興奮されてちゃあやれる事もやれなくなっちまう」

「じゃあ、あいつどうすんの？」

「ぶっつけ本番で止めるよぉ。もうそれしかないねぇ」

キバさんはやれやれと言った感じで言う。

「そんでもって兄ちゃん。あんたはそこそこ強ぇだろうと睨んで一つ教えておきてぇ事があるんだぁ」

キバさんはにっかと笑い、俺にある事を教えてくれた。

そして、俺達がそうこうしている間にも村では儀式の準備が進められていた。

突然の生け贄儀式にも関わらずその準備が問題なく行われてしまっている辺りは俺の目には異常な光景にも見えた。

「……」

『なにをそんな難しい顔してるんですか？』

顔に出ていたらしい。ゆめじんが訝しげに聞いてくる。

「いや、俺には理解出来ない風習だなと思って」

『この世界でも、このような生け贄の風習が残っている集落などは数多く存在します。その多くはこの村のように山奥などの辺境の集落ですね』

「……これって要は神様の怒りを鎮めるって意味での生け贄なんだよな？」

『ええ。少なくともこの村はそのようですね』

「ふむ……」

『あ、シンゴさん。儀式が始まるようですよ』

「お。よし、行くか」

俺は、儀式の一行を確認すると、キバさんの指示通りに移動を開始した。

……。

……。

俺は祭壇の近くの茂みに身を潜めていた。そして、生け贄にされた妹、リナが現れる。

儀式といっても淡々としたものである。

装飾品を身にまとった生け贄を村の人間が囲んだ形の行列が祭壇まで連れていく。

祭壇に着くと、生け贄が祭壇に乗り、村長が神に対し言葉を述べる。

儀式自体はそれでおしまい。

村の連中は退散し、生け贄のみがその場に残される。

俺は、村の連中が完全に姿が見えなくなったのを確認すると、祭壇に向かい走る。

「リナ！」

俺の声に祭壇のリナは驚いたような顔でこちらを見る。

「に、兄さん！なんでここに！」

「お前を助けに来たんだ。さ、逃げよう」

俺はリナの手を引っ張り祭壇から下ろそうとする。

「だ、だめよ。儀式を終えた生け贄は3日3晩祭壇を下りてはいけない。兄さんも知っているでしょう？」

リナは困惑しきった顔で俺の手を拒む。

「それに、その間無事に過ごせれば帰れるのだから……」

「馬鹿を言え！獣の餌になりたいのか！さ、今すぐ逃げよう。今なら村の人間も気付いてない」

俺はリナの手を両手で掴み、必死に頼み込む。

「兄さん……」

村の為か、妹の命か。天秤にかけるにはどちらもあまりに重かった。しかし、実際リナが生け贄にと聞いた時、俺は妹の命を選択していた。

ガサッ……。

茂みが揺れる音。なんだ、獣か。

俺は慌てて持ってきた松明に火を点ける。

獣ならば火を使い追い払うしかない。

そう考えていた俺の視界に飛び込んできたのは、意外な姿だった。

……。

……。

その頃、村の集会所では、祈祷師やキバも含めた小さな酒席が設け

られていた。

「この度は、我が村の為に尽力いただきましてまことにありがとうございました」

村長が祈祷師に向かって深く頭を下げる。

その様子を少し離れた所から見ているキバ。

「ささ、キバさんもお飲みになってください」

シンゴ達が村に入った時に案内してくれた初老の男が、キバの杯に酒を注ごうとする。

「お、すまんねぇ……。ところでよぉ一つ聞きたいんだが」

キバは酒を一気に飲み干すと、男を引き寄せる。

「な、なんでしょうか？」

「村長はなんであんな流れの祈祷師に祈祷をやらせたんだ？」

「はぁ、それがいつもの祈祷師様は遠方に行っておいでだそうで、たまたま通りかかったあの方に……」

「それにしても流れの奴にそんな簡単にやらせちまってよかったのかよ？」

キバは声をひそめつつ聞く。

「祈祷師様が、我々に特別な力をご披露してくださったからです」

「特別な、力ぁ？」

キバは思い切り胡散臭そうな声を出す。

「ええ、それはもう見事なものでした」

男はとにかくすごいものを見たと力説する。

「ほぉ……よし、あいつは分かった」

「はぁ」

「カッカ。さて、祈祷師殿に挨拶でもしてくるかねぇ」

言いながらキバは酒瓶を持って祈祷師に近づく。

「いやぁ、祈祷師殿。ま、一杯」

キバが酒瓶を祈祷師に向ける。

「いただきましょう」

祈祷師は自分の杯を持つと、キバは酒を注ぐ。

祈祷師は注がれた酒を一気に飲むと、再びキバに目を向ける。

「ところであなたは？村の人間ではないようだが」

「ああ、おれぁこの村に何度も世話になってる旅好きの商人でさぁ。ま、もう隠居の身だがな」

「ほぅ。そうでしたか」

「祈祷師殿は普段は何をやられてるんで？」

キバは自分の自分の杯に手酌した酒をちびちび飲みながら聞く。

「私ですか？私は諸国を旅しながら修業をしている身です」

「ほぅ、そいつは殊勝なこった。だが、修業の身じゃあどうやって食ってるんだい？」

「行く先々の村や町で恵んでもらうか、山で食べられる物を収穫しながらなんとか……」

「へぇ。で、合間に人売って大金稼ぐわけか」

「は？」

キバの一言に、集会所全体が一瞬シンと静まり返る。

「人を……あなたは何を仰っているのですか？」

「まんまの意味だよ。あんたは用意周到にこの村に近付き生け贄を用意させ、そいつを人身売買して大金を得る……違うかい？」

「ちょっ、キバさん！あんたいきなり何を！」

村の男が止めに入るが、キバの杖の一振りに止められる。

「実に不愉快です。確かに生け贄を捧げよと言ったのは私です。しかし、それだけで私を犯罪者に断じようとは……」

「ニトルカブト」

「っ！？」

キバが口にしたその言葉に、祈祷師の顔は驚きの色に変わる。

「知らねぇとは言わせねぇ。ニトルカブトは雑草駆除を目的とした薬剤だ。しかし、あまりに効果が強すぎて土壌そのものをダメにしちまうってんで、限定された場所だけでの売り物になった」

キバは今までの態度が嘘のように整然と話す。

「だから中央でも知ってる人間は一握りだ。こんな山奥の村なら知ってる人間はいるはずがない」

「な、なにを……」

「さて、お前さんがこの村で祈祷をする発端となった出来事をここで思い出してもらおうか」

キバがそう言うと、集まっていた村の人間たちも何かに気付いたように声を上げる。

その様子を満足気に確認し、キバは言葉を続ける。

「お前。いや、お前ら、だろうな……何日か前の夜にでも村に忍び込み、ニトルカブトを畑にまいた」

キバはゆっくりと祈祷師の周りを歩きながら続ける。

「ちょっと待っていただこう。その薬剤がまかれたという証拠はあるのか？証拠は！」

明らかに苛立った様子の祈祷師がキバに怒鳴るように言う。

「あるよ」

「んな……！」

「ニトルカブトってのは狼やら動物にしか感知出来ないレベルの異臭を放つんだよ。実り多きこの時期の畑に動物の足跡１つ残ってなかったのはそのせいだな」

「そ、そんなのたまたまだろう！」

「かもしれねぇな。でもそれだけじゃねぇんだなこれが」

キバは懐から小さな袋を取り出した。

「なんだ……それは」

「畑の土だよ。こいつでいっちょ実験といこうか」

キバは空いてる器に袋に入った土を盛ると、更に懐から火打ち石を取り出す。

「ニトルカブトは可燃性のある薬剤だ。もしこの土にそれが含まれていたならぁ……」

キバは火打ち石を何度か打ち付ける。

すると、火花が散り、それが土に移り……。

「……」

祈祷師は、真っ青な炎をあげるそれを恨めしげに睨む。

「な？ただの土ならこんな見事に燃えやしねぇやなぁ」

キバは燃える土に水をかけ、火を消す。

「そろそろ終幕かねぇ。おれとお前さんのやりとりも」

「何を、言っている……。私がやったと言う証拠はどうした！それが無い限りは貴様の言う事はでたらめだ！」

祈祷師は髪を振り乱しながら、怒鳴り付ける。

「証拠……ねぇ……」

キバは杖でコンコンと自分の肩を叩く。

「もうそろそろだと思うんだがなぁ……」

と、キバが口にした次の瞬間だった。

ドンッ。と勢い良く集会所の扉が開け放たれる。

「来たねぇ……」

集会所に現れた人物の姿を見て、キバはニヤリと笑みを浮かべたのであった。

待ってましたと言わんばかりの笑みを。

［26］とある村の災厄その2（後書き）

つづく。

と言ったら続くのです。

［27］とある村の災厄その3にして完結編（前書き）

人間、酒を飲み過ぎると二日酔いになります。

だからどうした。

27話のお通りです。

「27」とある村の災厄その3にして完結編

『シンゴさん、急いで下さい』

「分かってるよ」

俺はキバさんの指示に従い祭壇に向かっていた。

のだが……。

「ここどこだ!?」

迷っていた。

『だからさっきの道左って言ったじゃないですか!』

「なにぃ!俺はきちんと左に……行ったよな?」

『もぅ~。力でも何でも使って向かって下さい!』

「お、おうよ!」

俺は祭壇に急いだ。

……。

……。

松明に火を点けた俺の視界に入ってきたのは、粗暴な格好をし、武器を持った複数の男達。

いかにもゴロツキといった風の男達は俺とリナに目を向けて言う。

「おい、話が違うじゃねぇか。なんで男がいるんだよ」

「女が一人だからそいつをさらえって話しだったが……ま、構やしねぇよ。おい、てめぇ！」

ゴロツキの一人が俺に向かい怒鳴るような大声を出す。

「今すぐ女置いて立ち去りゃぁその大事な体に穴ぼこ空けるのは勘弁してやるよ。だからとっと消えな！」

ゴロツキは手に持った拳銃を俺に向ける。

「な、なんなんだお前らは！」

俺はリナを背後に隠しながら聞いた。

「てめぇにゃ関係ねぇっていってんだろうがよ！さっさとどけ！」

「い、いやだ！リナは……妹には指一本触れさせない！」

俺がそう言うと、ゴロツキ共は汚らしい声で笑い出した。

「ぎゃははは！震えた声で何言ってんだよ！」

「てめぇの話なんざ聞いてる暇はねぇんだよ！おい、指示には無かったが、こいつやっちまった方が早ぇんじゃねぇか？」

「よし、だが殺さねえようにしろよ。後が面倒だからな」

ゴロツキ共はそう言うと拳銃の先を改めて俺に向ける。

「……っ」

俺はとっさに松明を奴らに向けて投げる。

「うわ！何しやがる！」

ゴロツキ共が怯む。

「リナ、走れ！逃げるぞ！」

俺はその隙を逃さずリナの背中を押してここから逃げようとする。

「させるかよ！」

瞬間、衝撃音が響き渡り、俺の足に鋭い痛みが走る。

「ぐぁぁ！！」

俺は痛みに耐えられず転げるようにもんどりうって倒れる。

「兄さん！」

リナは俺の元に駆け寄る。

「だめだ……！逃げろ……」

「でも……兄さん……」

リナの顔がはっきり見えない。くそ、意識が。

「手間掛けさせんじゃねえぞクソ野郎が」

ゴロツキ共だ。追い付かれた。

「うら！」

「がはぁっ！」

ゴロツキの一人が放った蹴りが俺の腹部をえぐる。

「兄さん！や、やめて……」

「おおっと、妹さんはこっちだぜぇ」

ゴロツキ共は強引にリナを俺から引き剥がす。

「や……めろ……」

俺は必死に体を動かそうとするが、体に力が入らない。

「へっへ。おい、よく見りゃ超いい女じゃねぇかよ」

「くれぐれも傷物にするなって話だがよぅ……。ちょっとくらい手

ぇ出しても分かんねぇんじゃねぇか」

「へへ、俺達で傷物じゃねぇって確認するか」

ゴロツキ共の下卑た笑いが響き渡る。

「な、なにをする気だ……」

「おぅ、妹さんの身体検査だ。てめぇはそこで黙って見てな」

ゴロツキはそう言うと、リナの首に掛かってる装飾品を乱暴に外していく。

「い、いや……！」

リナは涙を一杯に溜めた目で俺に助けを求める。

「り、リナ……」

体が、動かない。くそ、このままじゃ……。

「さて、お体を拝見といきますかってか」

ゴロツキがリナの服に手を掛ける。

掛けた瞬間、ゴロツキは大きく後ろに吹っ飛んだ。

……。

……。

道に迷い掛けていた俺こと桐原慎吾の耳に、その衝撃音は届いた。

「今銃声聞こえたろ！どっちからだ！」

『それこそ力使ってください。その方が早いでしょう』

「あ、そうか」

といってもどんな力を……。

「あ！あれがいいかも！」

俺は大きく息を吐き、そして、思い切り鼻から息を吸う。

「ザ、犬並の嗅覚」

つまりは通常の数万倍まで引き上げた嗅覚で硝煙の匂いを拾おうというわけである。

「くんくん……あっちだ！」

俺はかすかに火薬の匂いのする方向へと向かう。

「あ、いた！」

その現場は案外近かった。生け贄の女の子とその兄、そしてそれを囲む粗暴な輩が見えた。

「何しようとしてんだあいつら！」

奴らの一人が妹さんに手を出そうとしているのが見えた俺は、とっさに凝縮衝撃波の一撃を放つ。

「はぼふっ！」

見事命中。奴らの1人が吹っ飛ぶ。

「な、なんだぁ……！」

奴らが混乱したその一瞬の隙を俺は逃さない。

「せいやぁ！」

乱入ついでの一発で一人を殴り飛ばし、更に体を反転してもう一人に裏拳をぶち込む。

「はぐほ！」

よし、あと一人だな。

と、そのもう一人の方を向こうとした俺のこめかみに、弾丸が命中する。

「がぁぁ！」

鋭い痛みが走る。俺はその場に倒れる。

「や、やったか……！」

拳銃を構えたままの格好で最後の一人が言う。

「……いってぇな畜生！」

痛かった。でも、それだけ。

軽くあざになったこめかみをさすりながら、俺は立ち上がる。

「え……えーーーー！？？」

「うるせぇ！」

ズドン。と俺は最後の一人の顔面に正拳を叩き込む。

四人いた人さらい共は起き上がる気配すらない。

「ふぅ……」

俺は改めて妹さんと兄貴に目を向けた。

妹さんは涙まじりの茫然自失。兄貴は足から大量の出血。

「……よし」

俺は人さらいの一人の着ていた服を問答無用で破くと、それを兄貴の傷口にあてる。

「あが……」

兄貴は痛みからか顔を歪める。

「よし、すぐに医者に連れていってやるからな」

「あ、あんたは……さっきの……」

「あら、覚えててくれた……」

「リナは……妹は無事か……？」

「大丈夫。奴らの悪戯も未遂だったから」

「よ、良かった」

兄貴は心底安心したように目を閉じる。

「さて」

俺は妹さんと兄貴を丁寧に手の届く位置に置き、人さらい共も蹴り転がすように手の届く位置に置く。

『なんか嫌なことでもありました？』

「人って道に迷うとフラストレーションが溜まるのよね」

『そうですか……』

俺はテレポートで村へと戻った。

村に戻ると、まず村唯一の診療所に兄妹を預け、人さらい共は抱え

て、キバさんたちがいるであろう集会所へと向かう。

「頼もーう！」

俺は勢い良く扉を開け放つ。

すると、そこには、村の連中と、奥の方にキバさんと祈祷師がいた。

「そっちは終わったのかい？」

キバさんがなんだかニヤニヤしながら聞いてくる。

「この通り、大漁だったよ」

俺はどさりと人さらい共をまとめて置く。

「カッカ。上等だ。さて、祈祷師殿」

「……」

祈祷師の目は見開かれ、口はわなわなと震えている。

「あいつらが一体何をしてこの場に連れてこられたのか、あんた分かるよな？」

「な……に、を……」

「分からねぇとは言わせねぇぞこのペテン野郎が。あいつらちょっと絞りゃぁあんたに不利な証言がいくらでも出てくるんじゃないのか！」

キバさんは語気を強めて祈祷師に詰め寄る。

どうやらキバさんから聞いた通りの展開で事は運んでいるらしい。

「う、うぁぁぁぁぁぁ！！！」

突然祈祷師は叫び声をあげる。

「くそがぁ！なんなんだてめぇらは！俺の計画の邪魔しやがってぇ！」

髪を振り乱し口調も荒くなる。あれが奴の正体なのだろう。

「こんなクソ田舎の人間一人二人売り払ったって誰が困るっつぅんだよ！あぁ！」

祈祷師は言いながら何やら懐から拳くらいの大きさの水晶を取り出す。

「てめぇらなんざ一人残らず消し炭にしてやんよぉ！」

祈祷師が水晶を掲げると、そこに炎が発生し膨れ上がるように大きくなっていく。

「魔法石だねぇ……」

キバさんが呟くように言う？

「なにそれ？」

「言葉の通り魔力が込められた石だよ。魔力の無い人間でもある程度魔術が使えるようになるって代物だ」

「そいつは便利だな」

「こいつぁそれ使って村の連中騙したんだろうな。手口ぁ見え見えだ」

キバさんはやれやれと祈祷師に杖を向ける。

「おい！今更誰か殺しても罪が重くなっちまうだけだぞぉ！んな馬鹿な真似はやめとけ！」

「うるせぇんだよてめぇよぉ！てめぇから焼いてやるよ！」

祈祷師はキバさんに向かい火の塊を放つ。

「あぶ……っ！」

俺が反応する間もなく、炎はキバさんに命中し、凄まじい勢いで包んでゆく。

「ふ……ふはははは！！！！どうだ！熱いか！悶え苦しみながら死ね！」

祈祷師が狂気じみた笑い声をあげる。

「く、くそ！」

俺はキバさんを助けようと火の中に飛び込もうとして、

「……え？」

ある物を見て止まった。

燃え盛る炎の中、ゆらりと動く影が一つ。

「あー……ぬりぃな」

炎の中から響く場に不似合いすぎる間延びした声。

「おいペテン野郎！こんな火遊びみたいな炎じゃよぉ……」

影かまたゆらりと動き、手に持った杖を大きく振るう。

ブォンッ。

すると一瞬にして炎は消え、中からローブが少し焦げたのかなー、程度のキバさんが悠々と姿を現す。

「火傷も出来やしねぇじゃねぇか」

そういうキバさんの体は確かに火傷の気配すら感じさせなかった。

なんなんだこの人。

「う……ぁ……っ。な、なんなんだ貴様！」

キバさんの有り得ない生還に、祈祷師は完全に意味が分からないといった顔で立ち尽くす。

「先攻後攻逆転だな。今度はこっちの番だ」

キバさんはそう言うと、杖を祈祷師に向ける。

「ほい」

杖の先を軽く下げる動き。

ズドォォン！

「がぐはぁっ！」

途端、轟音と共に祈祷師の体が何かに強烈に押さえ付けられるかのように床に叩きつけられる。

「はい、一丁上がり」

キバさんは俺に向かって得意気にVサイン。

本当になんなんだこのおっさんは……。

と、とにもかくにもこれにて一件落着……でいいんだよな？

捕まえた人さらい一派はキバさん曰く古い風習が残る近隣の村でも同様の犯行を繰り返していたそうな。

で、奴らの犯行の足跡から次の狙いはこの村だと睨み、まさに大当たりで捕まえられたそうな。

俺は、再び出発の準備を進めつつその話を聞き、一つの疑問にカチ当たった。

「キバさんって……何者？」

そのシンプルな質問に、キバさんは、にっと口の端に笑みを浮かべ、一言。

「しがねぇ腰痛持ちさ」

なんの答えにもなってなかった。

……。

……。

村を後にして再び南に進路を向ける俺。

「生け贄、か」

ぽつりと呟く。

『どうしました？』

「いや、俺には理解できない風習だけど、村の人間にとっては大事な風習なんだろうな」

『そうですね。客観的に見れば前時代的な風習でしょうが、それが深く根付いている歴史というのは、無視できませんからね』

「歴史、ね。……あれは別に歴史に泥は塗っちゃいねぇよな……」

ぼそりと呟く。

『……ああ、シンゴさんらしいことしたなって思いましたよ』

「……なのかね？」

俺は曖昧に首を傾げる。

俺が何をしたか。

いや、大したことはしていない。

生け贄の祭壇に人間以外が近付けないように『桐原式結界』を張ったのだ。

なんか、やれば出来るって本当すごいよな。

これで生け贄が猛獣に食われるって心配はない。生存者はぐっと増えるはず。

「……よし、行くか！南！」

俺は勢い良く地を蹴った。

……。

……。

シンゴの去った村では、人さらい事件の混乱もキバのお陰でなんとか収まり、平静を取り戻そうとしていた。

そんな中、キバが滞在する部屋。キバが一人手紙を書いていた。

「……よしっと」

最後に自分の名前を書き入れ、キバはその手紙を封筒に収める。

「いるんだろう？出てきな」

キバが言うと、どこにいたのか部屋の隅から全身黒装束の人間が現れる。

「お気付きでしたか」

「おれを誰だと思ってんだい。ほい、こいつをマクスに届けてくれ」

キバは封筒を投げ渡す。黒装束は受け取り懐にしまった。

「しかと承りました。キバ・ホーメイ師団長殿」

「かー。その呼び方はむず痒いからやめてくれ。そして離貞内におれの声として広めてくれ」

「分かりました。では」

黒装束はそれだけ言って再び姿を消した。

「まったく……本当に分かったのかねぇ」

キバは黒装束の消えた部屋の隅を見る。

「……あいつは南に向かうって言ってたが……。こりゃ一悶着あるかな？」

キバの目は真剣そのものであった。

「……で、あいつの名前聞き忘れたな」

キバの目は、あくまで真剣であった。

［27］とある村の災厄その3にして完結編（後書き）

南は暖かいです。

でも行きすぎると寒いです。

特に意図はございません。

［２８］南の都モンフェルト（前書き）

鼻水のひどい風邪をひくとなんだかアホの子みたいなみたいな見た目になります。

一昔前のコントみたいです。

２８話はそんな話とは無関係な話です。

［28］南の都モンフェルト

南へひたすら移動すること丸一日。

「おお！」

俺の眼前には、今まで見てきた村や町とは比べ物にならないレベルの街という光景が広がっていた。

『南の都モンフェルト。意外に早く着きましたね』

「そりゃまぁ力使って常人の7、8倍くらいのスピードで移動したからな」

俺は活気溢れる光景にテンションが上がりつつ足早に街に入っていこうとする。

『ちょっと待ってください』

ゆめじんストップが掛かってしまった。

「な、なに？」

人の出鼻をくじくような真似を……と思った次の瞬間、俺の視界が真っ暗になる。

「ぶわっ！なんだこりゃ！？」

布。なんだか大きめサイズの布が俺の上にかぶさってきていた。

「なに、これ？」

『シンゴさんはもうある程度軍にマークされている可能性が高いです。そうでなくても服装が目立つのでそれをマントにして羽織ってから街に入って下さい』

「なるほど。……ていうかゆめじん物送ってきたり出来るんだ？」

『ええ。この程度の物なら、ですが』

「へぇ」

俺は明らかになったゆめじんの能力の片鱗にほんの少し驚きつつ、既にマントとして羽織れるような形になっている布を羽織った。

「さて、参りますか」

気を取り直し、俺は街に足を踏み入れた。

入ってすぐ、俺は活気の溢れる市場を発見した。

「すごいな」

威勢のいい声。むせるような熱気。う～ん、なんかテンション上がるわ。

『モンフェルトは港と直結した街ですからね。海産物や他国からの輸入品で市場の盛り上がりは国随一ですね』

「いいねー。なんか買いたくなってしまう空気があるな」

『でもシンゴさんお金持ってないですけどね』

……そういえばだよ。そういえば俺一文無しだよ。

「よくここまで旅続いたな」

『出会った皆さんの親切に感謝ですね』

「全くだ」

ありがとう……みんな。

ひとしきり感謝し終えた俺は、市場の活気を眺めながら……眺めながら……。

「どこ行くんだっけ？」

『……え？』

なんで今更それを私に聞くんですか感たっぷりなゆめじんの『え？』であったと俺は思う。

『はぁ……シンゴさん。力はぐいぐい成長しているのにいつまでもそんなこと言ってたら……』

バカ

『……だと思われますよ』

なんだろう。すごい斬新な演出、というかその単語だけエコーが掛かったように聞こえた。

「……え、ええと、皇帝の娘さんが来てる、んだっけ？」

『覚えてるじゃないですか。なのでとりあえず宮殿に向かいましょう』

「宮殿……。もしかしてあの一際でかいあの建物か？」

俺は少し離れた所に建っている西洋建築の城のような場所を指差す。

『やれば出来るじゃないですか。そうです、あそこを目指しましょう！』

「お、おう……」

……なんだろう。俺出来の悪い子が頑張ったみたいになってる？

まぁ、とにもかくにも行き先ははっきりした。とりあえずそっちに向かうか。

俺は意気込んで一歩を踏み出した。

ドンッ。

「おっと！」

「わわっ！」

人とぶつかってしまった。路地から飛び出してきた子供に。

「悪い、大丈夫か？」

俺が声を掛けると、１０歳くらいだろうか、その男の子は俺の方をくるりと向いた。

「こちらこそごめんなさい！では！」

と言ってペコリ。深々と一礼をしてくるりと進行方向に向き直し、たたたっと走り去っていった。

「……うん。謝らないよりは全然いい」

自然と口から出た一言。誰に向けてだったかは我ながら不明。

「ん？」

と、その少年とぶつかった辺りになにやら鈍い光を放つ物が落ちていた。

「……万年筆？」

拾ってみるとそれは確かに万年筆だった。こちらで万年筆と呼ばれているかは定かではないが。

「今の少年が落としたのかな？」

だとしたら落としたのは俺のせいでもある。

「……ゆめじん、ちょい寄り道するから」

『仕方ないですね。返しに行くだけですよ？』

「……本当に俺の事分かってきたね」

嬉しいような先が恐いというか、複雑な気持ち。

ともかく俺は万年筆を持って少年を追い掛けた。

「えーと……こっちに行ったのかな？」

市場の路地の中を道なりに進んでいく。

「あ、いたいた。……って、なんだありゃ？」

少年はあっさり見つかった。そして、少年はなぜか柄の悪そうなお兄さん方に囲まれていた。

「おいガキ。こっちはぶつかった詫びを入れろっつってんだよ。分かってんのか？」

俺よりも少々年上な感じのお兄さんが必要以上にドスをきかせた声で脅す。少年を。

「金だよ！少しは盛ってんだろ？」

もう一人のやはり俺と同じくらいのお兄さんが金銭を要求する。少

年に。

……かっこ悪。

俺はハァとため息をつきつつ少年の方に近づく。

「僕は謝りました。怪我だってしていないはずです。通してください」

少年は自分を遥かに見下ろすでかさのお兄さん方に対し、一歩も引かない態度をとる。

周りの市場の人間は見て見ぬ振り。……まぁ、自分は巻き込まれたかないよな。

「ガキのくせにごちゃごちゃ抜かしやがって。出すもん出しゃいいっつってんだよ！」

いよいよ今まで黙っていたもう一人のお兄さんが少年の胸ぐらを掴もうとしたその腕を俺はひょいと掴む。

「あん？なんだてめ、っててて！痛ぇよ！」

「はいはい、生きてる証拠生きてる証拠」

俺は乱暴にひねりあげた手を離す。

「っつぅ……。な、なんなんだよてめぇ！」

「ただの通りすがりだ。気にしない方が身の為だぞ」

「はぁ？てめぇもしかしてこのガキの兄弟か何かか……！？」

「はずれ。見知らぬ他人もいいところだ」

「じゃあ……！」

「大の男が三人でよってたかって子供一人を脅す光景があまりに滑稽でね。思わず参加したくなっちゃったんだよ」

はい、ここでキメの笑顔。

『いや、いらないです』

却下されてしまった。

「なんだか知らねぇがてめぇも一緒にぶっ飛ばしてやるよ！」

三人の拳やら蹴りやらが俺に向かって飛んでくる。

1分後。

「ほ、ほぼえへやがへぇ～！」

逃げゆく三人の捨て台詞。多分覚えてやがれって言いたかったんだと思う。

俺はその自信は無いなと思いつつ彼らに哀れみすら感じながら小さく手を振る。

「さて、大丈夫か？少年」

俺が少年の方を向くと、自分の事だと気付いた少年が、慌ててペコリと頭を下げる。

「あ、ありがとう、ございました」

心なしか声が少し震えている。何だかんだで怖かったのかな？って当たり前か。

「ああいう連中にゃまともな話は通じない。かなわないと思ったら逃げるのが一番だ」

俺はそう言って少年の頭をポンポンと叩く。

「お、お兄さん……すごく強いんだね」

少年の瞳が少しきらきらしている。頬も少し紅潮しているのは気のせいか？

「すっごくかっこ良かった」

尊敬の念すら感じさせる瞳で見つめられつつそう言われると……すごく照れる。

「あっはは……。まぁ、これから気を付けろよ」

俺はくしゃくしゃっと少年の頭を撫でた。

「あ、そうだ」

俺は忘れない内にと万年筆を取り出す。

「これ、君の？」

俺が差し出した万年筆を見つめること3秒あまり。

「……！」

少年は弾かれたようにコクコクと頷く。

「は、はい。僕のです」

「よっしゃ、やっぱりそうだったか。さっきぶつかった時に落としたみたいでな。いや、悪かった」

俺は万年筆を少年に渡す。

少年は万年筆をぎゅっと大事そうに握り締める。

「ありがとう、お兄さん！」

「大事な物なのか？」

俺が何気なくたずねると、少年は目をキラキラさせて答えた。

「お父さんからもらった大事な物なんだ……一人前の証なんだよ！」

「一人前の……証？」

少年曰く、父親から息子へその万年筆のような、法筆（ほうひつ）という名前の物を渡すのは、一人前と認められた証なのだという。

「なるほど、だから大事なのか」

少年の自信に満ち溢れた笑顔を見てると届けて本当に良かったと思う。

「僕のお父さんは凄いんだよ。モンフェルトでも5本の指に入るってお母さんが言ってた」

「へー。……ってすごいなそりゃ」

こんなでかい街で五指に入るって、相当だよ。

「でも忙しいからなかなか会えないんだ……」

少年がちょっとしゅんとする。

「まぁ、それだけ偉ければな」

「せっかくお手紙も書いたのに渡してもらえないよ」

少年は真っ白い封筒をこれまた大事そうに見つめていた。

「ん？手紙か？」

「うん、お姫さまにって初めてこれで書いたんだけど……お父さんにも会えなくて」

父親からもらった大事な贈り物。それで書いた手紙。でも忙しいから父親に頼むことすらかなわない。

「なんでお姫さまに手紙を書いたんだ」

「お父さん達すごい頑張ってるから応援してあげてって。あとお姫さまも頑張ってねって」

少年は一生懸命に手紙の中身を語ってくれる。

純粋だなぁ。ただただ自分の気持ちを伝えたいと思う気持ち。

俺の中に少年のささやかな願いを……という気持ちが芽生えたのを誰が止められよう。

「なぁ、少年」

「なに？お兄さん」

「その手紙、兄ちゃんが届けてやろうか？」

俺がそう言うと、少年の表情がみるみる変わる。

「ほ、本当？」

「うむ。俺は嘘はつかないぞ」

脳内で『え゛!?』みたいな声が響いたが気にしたら負けだ。

「お兄さん届けられるの？」

「ああ、お兄さんお姫さまのいる所に用があってな。渡してきてやるよ」

「ほんっとうに？嘘ついてない？」

「こういう時の男は嘘は絶対につかない。どうだ？」

少年は少し考えるような表情を見せる。

が、何かを決意したかのように手紙をぐっと俺に突き出してくる。

「お願いします！お姫さまに渡してきて下さい」

「おう！確かに預かった」

俺はしっかりとその手紙を受け取る。

「エイジ・マグノス。これがお前の名前か？」

「うん！」

「よし分かった。じゃ、しっかり届けて来るから吉報を待ってろよ」

俺はエイジの頭をもう一回くしゃりと撫でると、宮殿に向かった。

少年の純粋な思いを届けるために。

『こちらの目的も忘れないで下さいよ』

「……もちろんさ」

とにかく俺は宮殿に向かった。

［２８］南の都モンフェルト（後書き）

そしてティッシュを持っていないと悲惨な事になります。

皆さんも気を付けましょう。

そういう事です。

［２９］潜入！モンフェルト宮殿（前書き）

今日は仕事だと思って朝起きる

でも実は勘違いで休みでほっとした時のあの安堵感。

なんとも言えぬものがあります。

逆はいやです。

ただただ、落ち込みます。

２９話いってみよー。

［29］潜入！モンフェルト宮殿

―モンフェルト・中央宮殿―

宮殿内の一室。窓からはモンフェルトの街と海が一望出来る広々とした部屋。

その部屋にポツンと置かれた白いテーブルと椅子。椅子には一人の女性が腰掛けていた。

「……」

腰まであろうかという長く手入れの行き届いたさらりとした髪、青のドレスに身を包んだ若く美しいその女性は、憂いを含んだようにすら見える目で外を見つめていた。

「どうかなさいましたか？フィアナ様」

メイド服に赤い軽装甲冑。魔術兵団第十師団長、ジェミニ・ランドガルトがフィアナというその女性に近づく。

「ジェミニ……私が今思ってる事を素直に口に出してもいい？」

フィアナの声は雛鳥のような弱々しさすら感じさせる。

「ダメです」

しかしジェミニはその弱々しさを一刀両断で処理した。

「なんで!?っていう私が何を言おうとしてたのか分かるの?」

フィアナはテーブルをバンと叩き、ジェミニに抗議する。

「疲れた、帰りたい。このどちらかです。違いますか?」

ジェミニはフィアナの勢いなど微塵も感じてない様子でサラっと答える。

「……」

フィアナ、絶句。端から見ても一発で分かる程、絶句。

「……はぁ」

そんなフィアナの様子を見たジェミニはひとつ呆れたようなため息をつく。

「長時間の移動、連日のご公務。フィアナ様がお疲れであろう事は我々も承知しております」

「だったら……」

「ですが、フィアナ様は現皇帝陛下のご息女。そして、今回の視察の意味する所を加味した上で、もう一頑張り……お願いします」

ジェミニはそう言って頭を下げる。

「……分かってるわ。父様にも何回も言われたし。私だってこの土地の事を知らないわけじゃない」

フィアナはばつが悪そうにジェミニから顔を背ける。

「さすがはフィアナ様です。ご公務の日程も残りわずかです。私も頑張りますので、フィアナ様も一緒に頑張りましょう」

「……はーい」

フィアナが間が延びそうな返事をしたところで、部屋のドアが数回ノックされる。

「どうぞ」

ジェミニが返事をすると、ジェミニとおなじくメイド服を着た女性が入ってきた。

「ジェミニ様。アーガイル様がお呼びでございます」

「分かった。では、フィアナ様、私は一旦失礼致します」

ジェミニはフィアナに一礼すると、部屋の出入口に向かう。

「では、ハラキア。私のいない間、フィアナ様の事を頼みます」

知らせに来たメイドにそう告げ、ジェミニは部屋を出ていった。

「……」

部屋に静寂が訪れる。

「ねぇ、ハラキア」

フィアナがその静寂を破る。

「なんでございましょう？」

ハラキアという亜麻色のロングヘアーのメイドは、無表情ともとれる顔でフィアナの方を向く。

「ジェドは来ないの？」

「ジェド・ナイアン様ですか？先程南方の補給基地を出られたと連絡がありましたから、もう着く頃かと」

その言葉を聞いてフィアナの顔がぱあっと明るくなる。

「本当！ジェドがもうすぐ来るのね！」

フィアナは若干頬を紅潮させながらテンション高く言う。

「ああ、どうしよう……。すごく久しぶりだからなんて声を掛けたらいいんだろう。ううん、そんなことよりジェドに会ったら緊張して話せなくなったりして……どうしよう、ハラキア？」

テーブルの周りをくるくる回っていたフィアナは哀願する子犬のような瞳でハラキアに助けを求める。

「……まずは、落ち着いて下さい」

ハラキアは冷静だった。

……。

……。

おっすおらシンゴ。

とりあえず宮殿のてっぺんまで登ってみた。

「さてここからが問題だ」

どうやって侵入しようか。

「……ていうかすげえいい景色」

広がる街並み。その先に広がる大海原。

「あっ、絶景かな絶景かな！」

『なにやりたいのかいまいち分かりませんけど早くしないと見つかりますよ』

辛辣。今日のゆめじんは辛辣や。

「侵入しないとなんだが、まずどこから入るかだな」

見つかって騒ぎにでも発展したら手紙を渡すどころではないからな。

『……何も考えずにここまで来たんですか？』

「うむ。高い所からならなんとかなると思ってな」

『……あー、あれですね。なんとかと煙は高い所がお好きって……』

「はっきりいったらどうかね、ゆめじんくん？」

『……バカ？』

「切り替え早いなおい」

と、いういつものやりとりもありつつ、俺は真剣に侵入方法を考えた。

「……よし、正攻法でいこう」

『正攻法？具体的には？』

「体透明にしてこの真下の部屋から侵入する」

『なるほど。あなたにしか出来ない正攻法ですね』

「うむ。ってことで案ずるより産むが易し。さっそく行こか」

俺は透明化を施し、ずぶずぶと足元から侵入していく。

「相変わらず気持ち悪い感覚だなぁ……」

『文句言ってると聞かれますよ？』

「はいはい」

俺は半重力をかけて体がいきなり落ちないように慎重に侵入する。

「……誰もいない」

俺はゆっくりと降りていく中でその部屋を見渡すが、人影は見当たらない。

「よし、ラッキーだな」

スタッと床に降りたと同時に俺は透明化を解く。

と、同時くらいのタイミングだった。

ガチャッ。

「！？」

ドアが開き誰かが入ってくる。

のと同時くらいに俺は再び透明化。

せ、セーフだよ、な？

俺はドキドキしながらも入ってきた二つの人影を見る。

一人は赤い髪に黒いローブをまとった男。

もう一人は白いスーツっぽい服を着た茶髪でオールバックの男。
俺は二人を注視しつつそーっと物陰に移動する。
「明日が危険だと、そういうことですか」
オールバックの男が難しい顔をしながら言う。
「そう。フィアナ様がモンフェルトの民に姿を見せ、お言葉をいただく。物騒な輩が動くとしたらこのタイミング以外に無いでしょう」
赤い髪の男は言うほど物騒には聞こえない軽いトーンで話す。
「しかし、今更中止には出来ませんぞ。国民にも触れを出していますし……」
「国民、ね。ええ、我々もこんな良い機会を来るかも分からない反帝国主義者共の為に潰す気は毛頭ありません」
赤い髪の男は口に何かくわえつつ話す。
「アーガイル殿。室内でのお煙草はご遠慮願いたい」
アーガイルというらしい赤い髪の男は、オールバックの言葉を聞いて渋々といった感じでくわえた煙草を再び懐にしまった。
「申し訳ない。こちらに来てからは忙しくて吸う時間が無くて。軽い禁断症状ってやつですかね」
アーガイルは軽く笑いながら言う。

「まっ、そんなことはおいといて……。マグノス事務官、ここからが本題……というかこちらからの一方的なお願いみたいなものなのですが」

アーガイルの目には真剣な光が宿っていた。

「なんでございましょう？」

オールバック、もといマグノス事務官は、アーガイルの雰囲気の変化に気付いたのか少し声を潜める。

「なに、難しい事じゃございません。明日の式典における警護を、我々に全て任せていただきたいのです」

「……なぜですか？」

マグノスは少し驚いた様子だったが、冷静に聞く。

「先程も申し上げた通り、反帝国主義者が仕掛けてくるとしたら明日が濃厚です。なので、フィアナ様及び要人に手の届く範囲での警護の人員はモンフェルトに縁の無い我々で固めます」

アーガイルは煙草をくるくると指の間で回しながら続ける。

「正直我々もどこまでを警戒対象とすべきか迷いましたがね。モンフェルトの者全てに疑いをかければあなただって疑わねばならない」

「……我々の中にスパイが潜んでる可能性がある。そう申される訳ですな」

マグノスの顔が苦々しいものへと変わる。

「あくまで可能性の話です。しかしそれが0ではない以上我々は警戒を解く訳にはいかないのですよ」

アーガイルは肩をすくめる。

「……分かりました。確かに何か事が起こってからでは遅いというのは確かです。我々としてもモンフェルトの名を汚す訳にはまいりませんからな」

「ご理解いただけて幸いです」

アーガイルが軽く頭を下げる。

コンコンッ。

「アーガイル様。ジェミニ様が参られました」

男の兵が顔を出し、そう告げていく。

「今、行く。あ、そうだマグノス事務官」

「なんですか？」

「外なら煙草を吸ってもいいんですよね？」

アーガイルは煙草をくわえる素振りを見せながら言う。

「どうぞ、ご自由に」

アーガイルはマグノスの返事に満足したように笑みを浮かべると、そのまま部屋を出ていった。

マグノスも続いて出ていく。

「……」

俺は誰もいなくなったのを確認すると、恐る恐る透明化を解き、物陰から出る。

「マグノス……ってことはもしかしなくてもあの人が少年の父親かな」

俺は手紙を確認しつつ呟く。

『恐らくそうでしょう。……それより、私はもう一人の方が気になって仕方なかったですが』

「もう一人？あのアーガイルとかいう煙草吸いたがり？」

『ひどい印象ですね。あれはアーガイル・ランドガルト。魔術兵団の師団長ですよ』

「師団長？あれが？なんかめっちゃ若く見えたけど？」

『以前出くわしたジェド・ナイアンも同じような年齢でしたよ。魔術兵団は特にそうなんですが、能力の高い者、家柄の優れた者が若くして地位を得られる場合が多いんです』

「それだけ聞くとあまりいいイメージはしないな」

『しかし、優れた家柄というのはイコール高い魔力と能力で功績を残した者が作り上げた血統でもあります』

「ふむふむ」

『魔力は遺伝に依存する部分が大きい才能ですから、自然と家柄イコール能力、に繋がってくるのです』

「つまり、あいつも力はすごいってこと？」

『その通りです。私も詳しくは分かりませんが』

ゆめじんはそう言って説明を締めくくった。

「じゃあこっからはドンパチ起こさないように慎重にいこう」

『毎回の事ですが、本当にそうしていただけると助かります』

「じゃあ透明化を必須にしつつ姫様を探すか」

俺は透明化をかけていざ姫様を探しに行こうと入り口に振り向く。

「……え」

するとそこには、亜麻色のロングヘアーが美しいメイド服の方が俺を凝視しながら立っていた。

ごめん、ゆめじん。さっそく無理っぽい。

［29］潜入！モンフェルト宮殿（後書き）

おでんのおいしい季節です。

でもまだ食べてない私。

だからなんだ。では。

［３０］強襲！メイド部隊（前書き）

本編は３０話です。節目です。

でも通算３３話目です。中途半端です。

悩ましい。３０話へゴー！

［30］強襲！メイド部隊

「……」

石のように、そう、石のように固まる俺。

メイドさんの方もこっちを見たまま微動だにしない。

やばい。この状況で声とかあげられたら最悪捕まらなくても騒ぎ確定じゃん。

どうする。なんとかする方法は無いか……。

俺が一瞬脳の思考に重心を時だった。

「……っ」

メイドさんが小さく何かを呟いた、とそちらに気をとられた俺。

ヒュッ、と空を切るような音と同時に、メイドさんの姿が視界から消えた。

「え……？」

理解が追い付かない俺。

その俺に追い打ちをかけるように足が払われ、そのままうつ伏せに倒れこむ。

「ぎゃふ！」

更にぐりんと腕をとられ間接を極められる。

「ぐわっ！いててて！痛いよ！」

「侵入者に手加減は出来ませんので今しばらく我慢してください」

背中から聞こえるメイドさんの声。

ていうかこの人本当にメイドさんか！？動きが有り得なかったぞ！

「侵入者あり。第一段階警報発令の上、応援を求む」

メイドさんがなにやら物騒な事を言っている。

応援なんか呼ばれたら逃げるのすらままならん。

「……恨むなよ」

「は？」

瞬間、俺は体から電撃を流した。出力は極力調整しつつ。

「きゃあ！」

メイドさんの体が反射的に離れる。

「うっし！」

俺は体を起こし、すぐに逃げるルートを探す。

「待ちなさい！」

しかし、メイドさんの放ったストレートの掌底が俺を捉える。

「うぉっ！」

間一髪でそれを避けた俺は、メイドさんから距離を取る。

「あなたは姫を探すと言っていました。あなたのような不審極まりない侵入者をフィアナ様の下に辿り着かせる訳にはいきません。今ここで私が捕らえます」

電撃のダメージなど皆無であったかのようにメイドさんは戦闘の構えを見せる。

「参ったなぁ、もう。事情話しても分かってくれないだろうしなぁ……」

『まぁ、無理でしょうね』

「だよねー」

メイドさんは鋭い目を更に鋭くさせて俺を睨む。

「アルバレオ帝国魔術兵団第十師団所属、帝室直轄使用人部隊副隊長、ハラキア・ロングボルト。参ります」

言うなりハラキアというらしいメイドさんはさっきと変わらぬスピ

ードで俺に迫る。

「うしっ！」

さっきは突然で油断したがその気になれば……。

俺は感覚を研ぎ澄ましてハラキアの動きに付いていく。

「なかなかやりますね」

「なんのこれしき！」

なんかライバル同士みたいな会話を交わしたが、思った以上にハラキアの攻撃は重く、まともにやりあうのは相手が女性ということもあって拳が鈍る。

「……って、んな甘っちょろい事言ってる場合じゃねえだろ俺」

「？、何を言っているのです。余計な事に神経を割くと……」

ハラキアの掌底が俺の顔面に……。

「死にますよ？」

俺の顔面に……。

「死なん！」

俺は脳がシェイクされんばかりのスピードで回避すると、そのまま拳に力を込める。

「ボディが留守なのは良くない……」

拳をハラキアの腹部に遠慮無しの一撃。

「ぜ！」

ズドンッ。という確かな手応えと共に、ハラキアの体が大きく後方に吹っ飛ぶ。

「が……っ！」

ハラキアが苦しそうに腹部を押さえて悶絶する。

「こっちも命懸かってるからな。じゃ、行かしてもらうぜ」

俺は窓から外へ脱出しようと手近な窓へダッシュする。

「……ん？」

そんな俺の視界に、何やら黒いボールのようなものか……。

「え？」

黒いボールは俺の目の前で弾けて、というか……。

「どぅわっはぁ！」

爆発した。なんか派手に。

「な、なんなんだよこれ！」

俺が立ち止まり戸惑いの声をあげると、背後に近づく人の気配。

「あんたが逃げないように決まってんじゃん。バカじゃないの」

「足止め成功、なんですよね？」

なんだかいきなりバカ呼ばわりされた。

振り向くと、金髪ツインテールにミニスカメイド服と、超小柄で薄紫のショートカットのメイド服、の二人が立っていた。

「クリシア、ルルチェル。申し訳ありませんが手を貸して下さい」

そこにさっきまで悶絶していたハラキアが加わる。

「あんたがそんな風になるなんてあいつに何されたのよ……ってまさか！」

ツインテールの方の顔がぼわっと赤くなる。

多分だけどあの子の考えてる事は何一つ起こってないと思う。

「ええ！は、破廉恥な事なんですか？」

ちっさい方も乗ってきたし。

「いえ、私の貞節に懸けてそんな馬鹿げた事は起きていません」

ハラキアは真面目に答える。ていうか真面目過ぎる。

「あ、よ、良かった……。もしそんなエロい奴だったら私生理的に戦えそうに無かったから」

ツインテールが心底安堵したような表情を見せる。

「でも、少なくとも私と対等以上に戦える力を持っています。……なにより奴の目的はフィアナ様との接触……」

「はぁ!?一番ヤバいパターンじゃん!」

「フィ、フィアナ様の身が危ないと解釈するのがた、正しいんですよね?」

ツインテールと小柄が驚きの声をあげる。

「ええ、ですからこの者は我々がこの場で捕らえます。逃がす事は許されないと思ってください」

ハラキアが重々しくそう言うと、ツインテールと小柄は俺に正対するように向き直る。

「言われなくてもそのつもりでーす」

「と、捕らえるのが最優先という事でいいんですよね?」

「ええ、では、我々の流儀に則りあなたを捕縛致します。ハラキア・ロングボルト」

ハラキアが構える。

「クリシア・リッチフォールド。おとなしくしてないと怪我じゃ済まないからねー」

と、ツインテール。

「ルルチェル・サンクヒル。に、逃げられるとは思わないでくださいね？」

と、小柄な方。

三対一。もしあの二人がハラキア並の戦闘力持ってたらやばいな。

「どうにか切り抜けてぇな」

俺はうまく逃げる為の方法を模索する。

が、眼前に現れたハラキアの姿がそれを遮る。

「うお！」

俺が驚きの声を上げたと同時くらいにハラキアの掌底がアッパーのように俺の体を打ち抜く。

「ぐぅっ！」

なんとか両腕でガードしたが、アッパーの勢いのまま俺の体は上空に投げ出される。

「さっすがハラキア。ジャストな位置とタイミング、ね！」

ツインテールのクリシアの声が聞こえた瞬間、背中に強烈な衝撃が走る。

「でぇぇ！？」

コンボ！？まさかのコンボかよ！？

俺は三人が連携している事に気付いたが、時既に遅し、だったようだ。

俺が全身を打ち付けられるであろう床には、さっき派手な爆発を披露してくれた黒いボールが俺を待ち構えていた。

「狙い通り、でいいんですよね？」

小柄なメイド、ルルチェルの声が聞こえたその次の瞬間……。

俺の体は爆発の熱と煙に包まれた。

「が……はっ……！」

俺の体は再度吹き飛び、壁に叩きつけられる。

壁には壺や皿などが並べられており、それらが衝撃と共に床に落ち、ガシャンパリンと音をたてる。

「あら、これって後で修理代とか請求されたりしないよね？」

クリシアが苦々しい口調で言う。

「だとしても安心しなさい。あなたの給金から天引きさせてもらうから」

ハラキアは淡々とした口調で言う。

「それが嫌だっつってんのよ！……全く、そうなったらこいつに請求してやろうかしら……」

クリシアは怒気を含んだ口調で言う。こいつとは恐らく俺だろう。

「……クリシア。犯罪者にたかる程お金無かったの？」

「ちっがーう！あんた話聞いてたの？」

ルルチェルの冷静な問いにクリシアが突っ込む。

「……日常コントぶちかましてんじゃねえよ……」

俺は倒れた態勢のまま苛立ちを隠さず言った。

「ん？何よ？」

「人ぶっ飛ばした直後にコントしてんじゃねぇって言ったんだよ！！」

俺は怒鳴りながら一気に立ち上がる。

「うっわ！まだ立てんの？面倒くさっ」

クリシアは本当に面倒くさそうな視線を向けてくる。

「やはり、まだ倒すには至らなかったようですね」

ハラキアは再び戦闘の構えをとる。

「ま、まだ戦うんですか？」

ルルチェルはなんだかオロオロしている。

「戦うさ。こんな訳の分からない場所でゲームオーバーになる気はないんでね」

俺は全身に力を込める。

「ただやっぱり一対三だと分が悪くてね……。こちらも味方を増やそうと思う」

俺はにっと口元に笑みを浮かべる。

「味方？まさか新たな侵入者が……」

ハラキアの声に焦りが混じる。

「ノンノンノン。そういう味方はいないんでね。もっと単純に味方を増やす」

俺は力を解放する。

「こうやってな！」

秘技！分身の術！

俺は二体のダミーを出現させる。

「ふ、増えた！？」

クリシアがいい感じに驚いたリアクションをしてくれる。ちょっと気持ちいい。

「惑わされてはダメ。何か魔術の類かもしれません」

ハラキアはクリシアを叱咤するように言う。

「魔術の類かどうか……」

俺達はぐっと加速の態勢に入る。

「直接確かめな！」
「直接確かめな！」
「直接確かめな！」

俺×3、夢のユニゾン。

俺達はそれぞれ各メイドに向かっていく。

「うざったいわね！」

クリシアは向かってきた俺に凄まじい速さで回し蹴りを入れる。

「残念」

蹴りが当たった瞬間俺の体はぼわんと煙と化して消えた。

「どちらかが本物ってわけね」

ハラキアは冷静に呟くと自分に向かってきた俺の繰り出したパンチを受け止め、そのまま一本背負いで投げ飛ばす。

「はいハズレ！」

俺はまたもや煙と化して消えた。

「く！ルルチェル！それが本物です！」

ハラキアは叫ぶようにルルチェルに伝えた。

「ええ！な、なんで私なんですか！？」

ルルチェルは戸惑いながらも黒いボールを取り出し、俺に向かって投げる。

飛んできたボールは俺の前で弾けて、中から更に小さな玉が無数に飛んでくる。

「くそ！」

俺は空中で防御の態勢に入る。

「……なんてね」

俺は、俺の体は黒い玉の爆竹のような連続した爆発に巻き込まれながら、煙になって消えた。

「な!?」

クリシアが声に出して驚く。

「え?え?本物はどこ行っちゃったのよ!」

分身を含めた三人共煙になって消えてしまった。では、本体は……。

「……しまった!」

ハラキアが何かに気付いたような顔。

俺はその顔を窓の外から見ていた。

分身を発生させた瞬間俺の体を透明化して、そのまま壁抜けで逃げる作戦成功。

このまま逃げるぞ!

と、俺は外に突き出した天井を一歩踏み出す。

パンッ。

「ん?」

足元から何かの破裂音が聞こえた。なんか踏んだか……？

と、俺が足元に目を向ける。

ブシュッ！

「ぶは！」

すると、足元から塗料みたいな物が吹き出し俺の体は真っ赤に染まる。

「な、なんだこりゃぁ！」

透明な体にべったり付いたので、正直気持ち悪い。

「そこですね！」

「！？」

背後からの声に俺はとっさに距離を取る。

俺がいたであろう場所に、ハラキアの掌底が叩き込まれていた。

「ま、万が一の為のペイント弾。役に立ったんですよね？」

ルルチェルはやはりオロオロしながら窓から出てくる。

「きもっ。ていうか透明に出来るとか本当卑怯っぽい技ばかり使うわね」

辛辣な言い方のクリシアも出てくる。

「……仕方ねぇなぁ」

俺は透明化を解き、三人に正対する。

「あら逃げないのですか？」

「気が変わった。お前ら倒して悠々と逃げる事にした」

俺は再び戦闘の構えをとる。今度は、倒すために。

［30］強襲！メイド部隊（後書き）

メイドの三人は書いてて楽しいです。

それだけです。

では次回。

［31］激闘！メイド部隊（前書き）

メイドはオタク文化的なイメージだけに留めず、その歴史にも目を向けたいなぁ、なんて。

ふと思いました。

31話じゃよ。

［31］激闘！メイド部隊

『ただでさえ数的に不利。しかも更に応援が来る可能性があるというリスクを承知であなたは逃げない、と？』

ゆめじんからの最終確認。

「ああ、こうまでされちゃあ俺としても退けないな」

俺は顔に付いた塗料をぬぐう。

『分かりました。手短に願います』

「言ってくれるな。ま、なんとかやってみるよ」

俺は構える。

「どうやら逃げる気は無い、と考えていいようですね」

と真剣な表情のハラキア。

「なんか返り血浴びたみたいで更に気持ち悪くなったわね」

と、嫌悪感たっぷりのクリシア。

「え、遠慮なく攻撃しちゃっていいんですよね？」

と、オロオロしているルルチェル。

「ああ、いくぜ！」

俺は瞬間加速で一気に三人との距離を詰める。

「っ！」

正面にきたハラキアが拳を繰り出してくる。

「そう何度も……！」

俺はそれをガードしつつ体から電撃を放出する。

「っぁぁ！」

電撃をくらったハラキアは大きく態勢を崩す。

「ハラキア！」

クリシアが叫ぶと同時に俺に向かって蹴りを繰り出す。

「うお！？」

クリシアの足から衝撃波が発生し、地面をえぐりながら向かってくる。

「くっ！」

俺はそれを間一髪避け、空中で態勢を整える。

「あたしの靴はあたしの魔力をそのままエネルギーに変換して今み

たいに撃ちだせるの……だからそんな風に空に逃げたって！」

クリシアは地面を蹴り俺に向かい飛んでくる。

「ほら、この通り、よ！」

クリシアのかかと落とし。俺はなんとか腕でガードを……。

「！！」

しようとしたがある物が目に入り間に合わずその一撃をまともに食らってしまう。

「がぁぁっ！」

俺の体が床に強烈に叩きつけられる。

『シンゴさん！なぜ防御しなかったんですか？』

ゆめじんからの質問。

「いや……見えちゃったから……」

『は？……はぁ！？なに言ってんですかあなたは！こんな時に』

「こんな時だろうとなんだろうとスカートの中見えちゃったんだから仕方ないだろ！……あ」

言ってから気付く。大声で叫んでた事に。

『……最っ低ですね』

ゆめじんからの最高級の軽蔑のお言葉。そして……。

「なっ……！？」

顔が真っ赤というレベルでは生ぬるい程に赤くなったクリシアさんが、驚愕と衝撃の表情を浮かべていた。

「……」

しかしやがてその表情は敵意と殺意に満ちた物へと変化していき、

「……殺す」

という言葉を以てその変化は達成された。

「あ、いや……えーと、これはですね」

言い訳してどうにかなる場面ではないだろうが俺はなんとか言葉を紡ごうとする。

「肉の欠片も残さず殺す」

物騒な事を呟いたクリシアさんは床を蹴り凄まじい速さで俺に向かってくる。

「なんでこうなった！」

『自業自得です』

バッサリです。

「くらえぇ！」

クリシアは身を翻しながら蹴りを繰り出してくる。

「後ろ回し蹴りって、うお！」

俺は紙一重でそれを避ける。

「ていうかその短さで蹴り技がメインってのが悪い！」

「口が減らないわね！」

クリシアは更に体を回転させもう一発蹴りを入れてくる。

「くそが！」

俺は今度はそれをガードすると、そのまま足を掴む。

「ちょ！？あんたなにやってんのよ！」

「真剣勝負の最中だ！異議は却下」

俺は掴んだ足を思い切りぶん回し、投げ飛ばす。

「なにすんのよぉぉぉ……」

虚空にこだまするクリシアの声。そのまま奴の体は落下していき、ドボンという大きな音をたてて堀に落下した。

「……はぁっ」

とりあえず奴が泳げる事を祈ろう。

「よし、次、ってうわぁ！」

俺が振り返るとそこに真っ黒いボールが。

「やばっ！」

と思った時にはもう遅く、黒いボールは弾けて中から煙が出てきた。

「ぶわっ！げぼっ、えほっ。……な、なんだこりゃ」

目が痛い、というか涙が止まらない。

「さ、催涙ガスなんですけど、そんなに効いてしまいましたか？」

ルルチェルのオロオロした声が今は逆に腹が立つ。

「効いたよ、こんちくしょう！」

俺は気合い一発催涙ガスを払う。が、涙はまだ止まらない。

「くそっ！視界が……」

ぼんやりと見える光景に、いくつもの黒い球体が。

「そういう事だよ、な！」

俺は飛び上がり、空中へ。だが……。

「！？」

目の前にはなぜかまた複数の黒ボールが。

「そ、そのくらいの動きは読んでいたんですよ？」

ルルチェルのオロオロ声が耳に入った時、俺の体は爆風に巻き込まれていた。

「が……ふっ……」

動き読まれてたってのかよ！

「ルルチェルは優れた頭脳を持ち戦術家としての一面も持ち合わせています」

いつの間にかハラキアが俺の頭上にまで飛び上がってきていた。

「空中で話もなんですから降りましょうか？」

ハラキアはそう言うと掌底を背中に叩き込んでくる。

「ぐほっ！」

俺は真っすぐに床に叩きつけられる。

「……連携ってのはきついな。一人減らしたけど」

愚痴る俺の前にハラキアが降りてくる。

「我々使用人部隊は日常所作の段階から連携して業務にあたっています。この程度の事は造作もございません」

ハラキアは淡々と言い放つ。

「マジかよ……。きっついなぁそりゃ」

俺はゆっくりと身を起こす。

「もう応援も到着する頃です。大人しく縛についていただけると助かるのですが」

「無理。ていうかヤダ」

俺ははっきりと言い放つ。

「……そうですか。では、戦闘を続行するまでです」

ハラキアは構える。

「させねぇよ！」

俺も大振りの一撃を構える。

「せいっ！」

俺は拳を虚空に振り抜こうとした瞬間、テレポートをした。

行き先は、もちろん……。

「なっ！？」

ハラキアの正面。

「全力御免！」

俺はフルパワーの拳をハラキアの腹部に叩き込む。

「がぁっ……！」

くの字に曲がったハラキアの体が放物線を描くように飛んでいく。

「わ、わたしは……」

オロオロしながらも新たな黒ボールを繰り出そうとしている。

「悪いけどさせないよ」

俺はルルチェルの額に手のひらを当てると、震動の一撃を加える。

「っ……ぁぅ……」

ルルチェルの体がぱたりと倒れる。

「よし、一丁あがり！」

俺はさて逃げようかとルートを模索しようとする。

「待ちなさい！」

響き渡る甲高い声。見ればハラキアが腹部を押さえながらも立ち上がりこちらを睨み付けていた。

「ま、まだやる気かよ！」

「当たり前です。あなたをフィアナ様の下へ向かわせる訳にはいきません」

ハラキアの表情は鬼気迫るものすら感じさせた。

「別姫様に会ったからって危害を加えようとかそんなつもりはさらさらないから……」

「黙りなさい！犯罪者に聞く耳など持ちません！……今ここで捕らえます……！」

ハラキアは構えて向かってくるが、そのスピードはさっきまでとは比較するまでもなく遅くなっていた。

「よっ！」

俺はハラキアの繰り出した拳をガードしそのまま腕を掴んでハラキアを投げ飛ばした。

「うっ……！」

ハラキアはなんとか受け身を取りつつ着地する。

「もういいだろう。俺はお前らを倒した。だから逃げる！恨むなら止められなかった自分達を恨めよな！」

俺はそう言い捨てると、ちゃっちゃと逃げようとする。

「待ちなさい」

「だから俺は逃げ……どぅわぁ！」

俺が再び振り返ると、いきなり炎の塊が俺に向かって飛んでくるのが視界に入った。

「どあっちぃ！危ねぇ！」

俺は炎の塊を紙一重で避けると、その炎の陽炎の先に立つ人影に気付く。

「あ、新手かよ……」

服装は今までの三人と同じくメイド服。しかしその上から赤い胸当てと肩当てを装着し、手には、紅の炎をまとった身長より長いであろう剣が握られていた。

「我が部下を大層可愛がっていただいたようで……まさかこのまま逃げられるとでもお思いで？」

赤いポニーテールを左右に揺らしながら、その端正な顔立ちの女性

は毅然とした態度で続ける。

「アルバレオ帝国軍銃騎兵団第十師団師団長、及び帝室直轄使用人部隊隊長、ジェミニ・ランドガルト。参ります」

そう言ってジェミニは燃え盛る剣の切っ先を俺に向ける。

「部下の痛みは我が痛みも同じ。この苦痛は貴様の苦痛で晴らすと致しましょう」

その目には、確かな俺への、尋常でない殺意が込められていた。

……この国のメイド、みんな怖すぎ。

［31］激闘！メイド部隊（後書き）

どのキャラにも背景や人生観がある。なにより生きている。

大事にしたいです、はい。

そしてバリバリ続きます。

［３２］炎の将（前書き）

熱いバトルです。

展開じゃなくて、

温度が。

……。

３２話ですいません。

［32］炎の将

「申し訳ございません、ジェミニ隊長……」

ハラキアは心底から申し訳なさそうに頭を下げる。

「いえ、よくぞ三人で持ちこたえてくれました」

ジェミニは穏やかな口調で言う。

「この者の相手は私が。ハラキア、あなたはルルチェルを連れてクリシアを救出に向かってください」

「……承知いたしました」

ハラキアはもう一度深く頭を下げると、倒れているルルチェルを連れて宮殿内へと戻っていく。

「さて……侵入者殿。あなたには聞きたい事がいくつもありますが、その前に」

ジェミニは両手で剣を持ち、構える。

「私と手合わせ願います」

ジェミニの持つ剣が激しく炎を吹き出す。

「えらいのが出てきたな……」

『ここはまともにやりあうよりも逃げる事を優先にしましょうそうしましょう』

ゆめじんは強い口調で訴えてくる。

「激しく同意だが、そううまくいくかねぇ……」

俺は構える。

「いざ、参ります」

ジェミニが言うと、あれだけ吹き出していた炎が剣に吸い込まれて消えていき、剣はその熱を吸ったかのように紅に染まっていく。

「はぁっ！」

ジェミニがこちらへ踏み込んでくる。

「くっ！」

俺はジェミニの上からの一振りを横に飛んで避ける。

「動きはなかなか……。では、これなら！」

ジェミニは剣を横に振りぬく。

すると剣から炎を斬撃の形に押し固めたような一撃がこちらに飛んでくる。

「うぉ！」

俺は上空へと逃れそれを避ける。

ジュオッ。

何かが焼けるような音。音のした方を見ると、宮殿の壁がさっきの斬撃の形で穴が空いていた。

溶けたか蒸発したか。どちらにしろとんでもない熱量だったのだろう。

「逃がしませんよ！」

下からのジェミニの声。そして凄まじい量の炎が飛んでくる。

「くそが！」

俺はとっさに衝撃波を撃って炎をかき消す。

「どんなもんじゃい！」

俺はジェミニに向かって言った。だが、ジェミニはさっきまでの場所にはいない。

「なるほど。さすがは我が隊の精鋭を倒しただけの事はありますね」

上から響く声。

「なっ！？」

見ればジェミニが大きく剣を振りかぶっていた。

「終わりですね」

ジェミニが振り下ろしてきた剣を、俺は根性で両手で挟んで止める。

リアル真剣白刃取り！

「って、熱っ！」

俺は剣をぶん投げるように離し、ジェミニから距離を取る。

「ぐおぉ……！なんなんだよあの剣は！」

俺は真っ赤になって所々火傷してる手のひらを見る。

「熱くて当然です。我が剣は火と契約を交わした魔剣『フレイム・ベル』。火を、熱を、まとえばまとう程に切れ味を増すのです」

ジェミニは淡々とその巨大な剣の説明をする。

「魔剣って……いよいよやばい武器が出てきやがった」

魔術兵団の師団長って聞いた時にはもっと大砲みたいに術を放ってくるのかと思ったが、少なくともジェミニは違うらしい。

「安心して下さい。あなたを殺しは致しません。ただ、動けぬようになるまでダメージを与える事に関しては事前に了承していただきたい」

「やだよ！そんな物騒な了承する訳無いだろうが！」

俺は怒鳴り声で拒否する。

「そうですか。では、失礼ですが、問答無用でいかせていただきます」

ジェミニは再び構える。

「どっちにしろかよこんちくしょう！」

「行きます」

ジェミニは俺の言葉など聞く耳持たずといった感じで突っ込んでくる。

「くそ！」

ジェミニの剣に対抗するのに、丸腰じゃ分が悪い。何か対抗出来るような武器が欲しい……。

俺はジェミニの怒涛の連続攻撃をなんとか避けつつ衝撃波で牽制し、距離を保つ。

何か……。

俺は考えるのに夢中で自分の足元への注意を怠っていた。

右足が崩れた壁の破片に引っ掛かり、態勢が崩れる。

「しまっ……！」

俺は眼前に迫る灼熱の剣に対し為す術もなく斬られ……なかった。

「……え？」

俺はジェミニの剣を止めていた。ギリギリの中無意識に編み出されたそれによって。

俺の手に握られた光を放つ、いや、光そのものというべきその……

……刀にしとこう、その方がなんかカッコいい。

俺はその光の刀でジェミニの剣を受け止めていた。

「光の……そんな武器を隠していたとは」

いや、今出そうと思ったら出せました。

とは言えないので、

「なかなか洒落た武器だろう？」

とカッコつけておく。

「ええ。ですが、戦場においては能力が伴わなければ骨董品と同じですよ？」

ジェミニの剣から火が吹き出してくる。

「熱っ！」

俺は後ろにステップしジェミニから距離を取る。

「なるほど能力ね……。だったら」

俺は光の刀の先をジェミニに向ける。

「せいっ！」

気合い一発、刀を如意棒の如く延ばす。

「なっ！？」

ジェミニは剣でそれを防御する。

「光に決まった形があると思ったか？」

俺は刀を縮めると同時にジェミニとの距離を詰める。

「どぅえりゃぁ！」

俺は体を勢い良く一回転させ、そのままの勢いで刀をジェミニにぶつける。

「ぐぅっ！」

ジェミニは剣で受けるが、俺の力に押され、少し態勢を崩す。

「もう一発！」

俺は刀を両手で掴むと、野球のバットよろしくフルスイングする。

ジェミニの体を無理矢理押し出し、そのまま吹っ飛ばす。
ジェミニは背中から思い切り壁に叩きつけられた。
「うっ……」
ジェミニは膝をつき唸るような声を上げる。
「見せ掛けだけじゃねぇって分かってもらえたかな？」
俺も乱れた息を整えつつ言う。
「……ここまでですね」
「は？」
ジェミニの口から予想外過ぎる言葉が出てくる。
「不本意ながら、私の役目は半分終わったと言っているのです」
ジェミニの顔には笑みすら浮かんでいた。
「一体何を……。ぐぁっ！」
俺は突然何かに上から押しつけられたかのようにうつ伏せに倒れる。
「なん、だこりゃぁ……！」
手足が動かない。何かで縛られてる……？

「遅くなってすまなかったな。ジェミニ」

聞こえてきたのは男の声。

「いえ、本来ならば私一人で対処すべきでしたが、申し訳ございません、兄様」

兄、様？

俺はなんとか首を回して男の姿を見る。

そこにいたのは、さっき少年の父親と話していた赤髪のタバコ吸いたがりがいた。

この二人、兄妹かよ！

「で、こいつが侵入者な訳ね。おい、お前の目的はなんだ？」

タバコ吸いたがり、いや、確かアーガイルという名前だったな。は雑な感じで聞いてくる。

「その者はフィアナ様に接触するのが目的だったようです」

ジェミニが俺に答える間を与えず答える。

「ほぅ……。接触して、どうする気だったんだい？」

アーガイルの問いに、俺はただ押し黙っていた。正直に言えば少年の手紙は確実に姫様には届かない。そう思ったから。

「黙りか……。よし、ジェミニ、こいつを牢へ入れとけ」

「は……。問い詰めなくてよろしいのですか？もし他に仲間が居たりしたら……」

「結界陣を敷いておけば下手な事は出来ないだろう。それに今はもっと優先すべき事項がある」

やばいな。このままじゃ牢にぶち込まれてしまう。なんとかならな……ん？

俺は自分を縛っている鎖に少し抵抗してみた。

「……」

「さて、兵を呼んでおいたからこいつはそっちに運ばせておくとして、我々は……」

「てぇいりゃぁー！」

突然叫んだ俺に驚いた二人を無視して、俺は鎖に思いっきり抵抗する。

バキバキッ！

鎖が歪な音と共に砕け散る。

「な、なんだと！」

アーガイルが驚愕の表情を見せる。

「よっしゃ脱出成功！」

俺は大きくガッツポーズ。

「『魔封鎖』を、腕力だけで破ったというのか！？」

アーガイルは驚きの声を続ける。

「魔力を使わずにこれだけの力を……」

と言うアーガイルに俺は手を振りつつ言う。

「いや、俺魔力無いから」

俺はさらりと言ったつもりだったが、二人にとっては衝撃の発言だったらしい。兄妹揃って驚いてる。

「で、では、先程の私との戦闘も、魔力を使わずに……」

「うん、無い物は使えないしね」

俺は当たり前の事を言ったつもりだったが、ジェミニはなおも信じられないと言った顔で俺を見てくる。

「……ふっ」

今までひたすら驚いていたアーガイルが、突然笑みをみせる。

「面白い！こんな奴がこの国にいたとはな！」

言いながらアーガイルは腕を振り上げる。

「私と手合わせ願おうか！」

アーガイルの足元に赤い魔法陣のようなものが浮かび上がってくる。

「え？なに、なんなの！」

アーガイルをその気にさせた以外何も分からない俺はただただ目の前の光景を見つめていた。

「我が名はアーガイル・ランドガルト。我が呼び掛けに応じ、その力を奮え！」

魔法陣から炎が吹き出し、竜巻のようになり、アーガイルを包んでゆく。

「炎獄の将、ファラケス！」

アーガイルの言葉に応じるように炎が消え、アーガイルの姿と、人の形をした炎が立っていた。

並の人の倍の大きさはあろうかという炎のそれは、アーガイルにつき従うようにその背後に立っていた。

「地獄の炎を……なんて言ったら大げさかな。君は、熱いのは苦手かな？」

「……人並み程度には」

アーガイルは俺の解答に満足そうに頷く。

「じゃあ、こういうのは苦手かな？」

アーガイルの言葉に応じたかのようにファラケスとかいう炎の塊は、巨体に似合わぬ俊敏な動きで俺に迫り、拳を振るってくる。

「うぉ！」

俺はその拳は避けた。だが、

「それで終わると思うなよ」

奴の拳から地を伝わるように炎がこちらに向かってくる。

「えぇ！」

その炎は俺の足元に到達すると、盛大に炎を吹き上げたのだった。

［32］炎の将（後書き）

シンゴ達の居る一角だけボロッボロです。

でも気にしない。

そう！

気にしたら負け！

［３３］姫と手紙。案ずるより産むが易しなパターン（前書き）

いい天気が続いてます。

が、寒い。

冬です。

３３話でござんす。

［33］姫と手紙。案ずるより産むが易しなパターン

「がっ……はっ……！」

吹き出す炎に押されるように俺の体は空中に放り投げられる。

熱いというレベルでは生ぬるささえ感じそうな熱量だ。

俺は朦朧とさえしてきた意識の中でそんな事を思った。

「逃がしはしません」

ジェミニが剣を今まさに振り下ろさんとする姿が視界に入る。

まずい。ガードを。

しかし、俺の体はうまく言う事を聞いてくれない。

「……っ！」

振り下ろされた剣。俺は辛うじて左腕でそれをガードしたが受け切れず、凄まじい速度で宮殿の堀へと落下した。

ドボンという音と共に体中が水に包まれる。視界も紗がかかったように見えなくなり、呼吸も……。

死ぬ！

俺は死に物狂いを地でいく激しい泳ぎで水面を目指す。

「ぶは……っ！」

俺は水から上がり息を整える。

「ぐっ……！」

左腕に激痛が走る。さっきの一撃をとっさにガードした時のダメージか。骨は大丈夫そうだが使える状態とは言い難かった。

「ジェミニの一撃を受けてまともに立てるとは……予想以上にタフな様だね」

アーガイル、そしてジェミニが俺の近くに降り立つ。ついでにファラケスとかいう炎の塊も。

「しかしダメージはしっかりと受けているね。よし、畳み掛けさせてもらうよ」

アーガイルはファラケスに指示を出し、俺に向かわせる。

「させるかよ！」

俺は凝縮衝撃波をファラケスに放つ。

「甘いね」

命中した衝撃波はファラケスの腹部をえぐり取ったが、すぐに再生されていく。

「ファラケスは炎のみで構成されている。術者たる私が健在である限りいくらでも炎を供給し再生する事が可能だ」

アーガイルは手の上に作り出した炎をファラケスに与えている。

「ま、マジかよ……」

アーガイルがいる限り無尽蔵に再生が可能な炎の化け物。そしてジェミニまでいるこの状況。

「……なぁ、ゆめじん」

『なんでしょう』

「三十六計逃げるに如かずという言葉は有りだと思うか？」

『……大有りだと思います』

「奇遇だな。俺も同意見だ。というわけで俺は無理矢理でもこの状況から逃げ出す事にした」

俺はゆめじんに向け早口でそう告げると、ちらりと背後の堀に目を向ける。

「何をこそこそとやっているか知らないが、こちらも時間は無くてね。ちゃっちゃと済まさせていただくよ！」

アーガイルの声と共にファラケスが勢い良く向かってくる。

「させねーよ！」

俺的念力発動。俺が大きく振りかぶった右腕の動きに合わせて、堀の水が津波の如くファラケスと奥の二人に襲い掛かる。

「な……っ！」

アーガイルは突然の光景に目を丸くしていた。

ジェミニも似たような感じ。

「水の力を思い知れ！」

俺は自分も巻き込まれない内に飛び立つと、とっととその場を後にした。

眼下では二人が水に巻き込まれている様子が見えた。

「くっ！……この屈辱、忘れはしない！」

水浸しのアーガイルが叫んでいた。

俺は透明化をかけると、そのまま宮殿の適当な回廊の上辺りに腰を下ろした。

「ふぃー。毎度ながら連戦はきつい。色んな意味で」

俺はばたりと横になる。ああ、青空がきれいだ。

『今回も見事に騒ぎになりましたね』

ゆめじんさらりと再登場。

「まぁな。にしても魔術兵団の偉い奴らってのは皆あんなに強いのか？だったら先が思いやられるな」

『魔術兵団は特殊な集団ですからね。その師団長二人相手と思えばシンゴさんは恐るべき善戦でしたよ』

「そりゃどーも。さて、これからどうしたものかね」

『情報が欲しいですね。どうやら明日の式典、特にフィアナ姫の演説がポイントになると思うので』

「情報か……よし、今度は常時ステルス全開で行くかね」

俺はそのままぬるんと宮殿内に侵入し、透明なまま宮殿内を歩く。

「しかし見れば見るほど豪勢な作りだな」

窓枠一つ、通路の床一つ取っても金と技術のかかり方が半端ではない事がうかがえる。これは職人の技だ。

俺が感心しながら歩いていると、誰かが話しながら近づいて来るのが見えた。

「おっと……」

俺は壁にぴたりと張りつく。

「よいか。フィアナ様のいる第四棟には決して侵入者を近付けては

ならんぞ！」

「はっ！」

魔術兵団の兵達であろう黒いローブの集団が早足で俺の前を過ぎていく。

「……」

俺はそれを聞き逃しはしなかった。

「ラッキー来たなこりゃ」

俺はさっそく第四棟を探す事にした。

そして、あっさりと見つかった。

軍の兵がたくさん居る場所を辿っていったら着いてしまった。

「よし、入るぞ」

俺は小声で呟く。

『お願いですから慎重に行動してくださいね』

「おーけー」

俺はぬるりと部屋に侵入した。

中は無駄に広いといった印象で、窓際にぽつんと置かれたテーブルと椅子がその印象を更に際立たせていた。

そして、椅子にはドレスの女の子がちょこんと座り、テーブルの傍には少し年配っぽいメイドが一人立っていた。

「ねぇ、モニカ」

女の子がモニカというらしいメイドに話し掛けている。

「なんでございましょう、フィアナ様」

モニカは丁寧な、しかし穏やかな口調で応える。

「モンフェルトは昔は独立した国家だったのよね？」

「ええ、我がアルバレオ帝国に屈する以前はモンフェルト共和国、と地図には記されておりました」

モニカは少しゆったりとした口調で喋る。

「戦争があったのよね？」

「……フィアナ様。我が国とモンフェルトが対立を続けた歴史はもはや過去のもの。それを明日、フィアナ様自身が証明なさるのです」

モニカは少し強い口調で言った。

「ええ……」

フィアナの顔色がなんとなく優れないように見える。何か不安でも

あるのかな？

「もうすぐジェド様もこちらに見えられるとのこと。そのように沈んだ顔では嫌われてしまいますよ」

モニカはやれやれといった感じで言い切った。

「え！？そ、それは嫌！どうすればいいの、モニカ」

フィアナが突然慌てだす。

ん？ていうかジェドって確か……。

『魔術兵団第一師団長のジェド・ナイアンの事ではないですか？』

マジかー！あのなんか融通きかなそうな顔してたあいつか！

『……そういう風に見てたんですね』

え？で、そのジェドに沈んだ顔を見られたくないってあの姫様もしかしなくても……。

『そういう事、ですかねぇ？』

……なんだろう、この人の恋愛事情を垣間見ちゃった時のこの変なドキドキ。

『とりあえずこの場ではしまっておくのがいいと思います』

そうしよう。

俺は高鳴る鼓動を平常心で落ち着かせつつ、二人の様子に再度目を向ける。

「落ち着いて下さい。まぁ、お茶でも飲んで……ってあら？お茶がきれてますね。新しいのを入れて参りますのでフィアナ様は決してこの部屋から動いてはいけませんよ」

そう言ってモニカはポットを持って部屋を出ていった。

……え？唐突に好機襲来？

『のようですがくれぐれもいきなり変な真似はしないで下さいね』

あいあいさー。

俺はそろそろと姫様のいるテーブルに近づく。

姫様はというとそわそわした感じで窓の外を眺めている。

カサッ。

そんな姫様の様子をうかがいつつ俺はテーブルの上に手紙を置いた。

「え？」

紙の音で気付いた姫様がテーブルの上に目を向け、そこにいつの間にか手紙があることに気付いたのか目を白黒させている。

「何、これは？手紙？」

姫様はひょいと手紙を持ち、表裏を確かめる。

「差出人、エイジ・マグノス……って誰？なんだかすごい稚拙な文字だけど」

姫様は丁寧に手紙の封を開けていく。

『な、なんでこんなにスムーズに事が進んでるんですか？』

ゆめじんが驚くのもまぁ無理はあるまい。いきなりあり得ない場所に手紙が出現したらきっと誰もが驚き、少なくともこんなにぽんぽん中身までは辿り着かないだろう。

でもこの姫様はもう中の便箋を取り出すところまでこぎつけている。単なる世間知らずか大物か、どっちかだな。

「なになに……」

姫様は便箋を広げ、興味深そうに、じっくりと読み進めていく。

「……」

そして、読み終えたであろう便箋をたたむ。

「……くす」

そして小さく笑いを漏らす。

「すごい小さい子が書いたんだろうけど……いいなぁ、この純粋さ。

私も分けてほしい」

姫様は穏やかな顔をしつつも、目だけはなぜか寂しげな色が浮かんでいるように見えた。

「……そういえば、なんで突然手紙が出てきたんだろう」

姫様はクイと小首を傾げる。

ていうか今ですか。まぁ、すんなり読んでいただいてこちらとしては好都合でしたがね。

「……そうだ」

姫は何を思ったか部屋の隅に走っていき、これまたぽつんと置かれた棚から、何かを取り出して戻ってきた。

見れば、その手には便箋とペンが握られていた。

「さて、と」

姫様は便箋をテーブルの上に広げると、さらさらと何かを書き始めた。

「うん、これでよし」

一分くらいで姫様はペンを置き、便箋をたたんで封筒に収めた。封筒にもなにやら書いている。

「お手紙を持ってきてくれた方！」

「！」

姫様がいきなり大きな声で言うので俺は驚いて声を出しそうになる。

「こんな素敵なお手紙を持ってきてくれてありがとうございます。お返事の手紙を書きましたのでここに置いておきます。もし聞いていたら手紙を書いたエイジ君に渡してあげてください」

そう言って姫様は手紙をテーブルの上に置いた。

俺は一瞬どうしようかと迷った。

しかし、気付いた時には手紙に触れ、手紙にも透明化をかけ、そのまま懐に収めた。

「あ……」

姫様は一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに穏やかな顔に戻る。

「世の中には不思議な方がいるんだなぁ……」

とポツリと呟いていた。

俺はその一言に苦笑しつつ、長居は無用とばかりに窓から部屋を出る。

『なんだか案外あっさり、しかも予想以上の成果ですね』

「ああ、一旦少年の元にこれを届けに行くが、異論は無いよな」

『まぁ、仕方ないですね。さっさと届けちゃいましょう』

「あいよ」

俺は街に向かって飛び立つ。

ちょうどその時だった。

空気を震わせるような振動と共に街の一角が爆発したのは。

「な、なんだぁ！」

俺は炎と黒煙が上がるその場所を見る。

「良くない予感しかしないな。よし、行って来る！」

『……もしかして、反帝国主義が……』

ゆめじんはぼそりと呟く。

「なんかちょっと前にもその単語聞いたな」

『モンフェルトの再独立を望む武装集団です』

「まさかそいつらが今の爆発を？」

『分かりません。が、可能性としては十分に考えられます』

「とにかく行ってみるか！」

俺は爆発の現場へと向かった。

［33］姫と手紙。案ずるより産むが易しなパターン（後書き）

毎回毎回あとがきに下らない事書いてるよなー。

って事をあとがきに書いてみました。

では次回。

［３４］レジスタンス（前書き）

年の瀬。

２０１０年もあとわずかですな。

あと何話更新出来ますやら。

３４話ですにゃー。

［３４］レジスタンス

爆発が起きたのは街の中心から少し外れた辺りだった。

『お金があまり無い方々が住む集合住宅などがある地域ですね』

「どんなに栄えた場所でもこういう場所はあるんだな」

俺はお世辞にも整っているとは言えないエリアを早足で進みながら呟く。

『帝国が抱える一つの問題ですね』

「問題？」

『富裕層と貧民層との格差です。モンフェルトのように大きな街ではそれがこのように顕著な形となって顕れていますね』

「どこの世界も同じような問題抱えてんだな」

俺は全く舗装されていない砂利道を進む。

爆発の現場は、大勢の人が囲んでいた。

「ちょいと失礼」

俺はその群衆をかき分けて前へと出る。

そこには、黒く煙を上げ、その大部分が崩壊しつつある家屋だった

物があった。

「うっわぁ、怪我人とか大丈夫だったのか？」

俺は感想を素直に漏らした。

その直後、背後から誰かに押される。

「ちょっ！今どくから！」

俺がそそくさと最前列から退散しようとする。

「いえ、動かないで下さい」

「え？」

俺にのみ聞こえるように囁かれる声。しかし、その声には確かな緊張感があった。

「そのままゆっくり人混みを抜けて下さい」

「……」

細い物が背中に押しつけられる感覚。

俺、脅されてるのか？

俺には力ずくでこの状況を打破するという選択肢もあった。

が、こんな事をする奴らの意図を知りたいと思った俺は素直に人混

みをゆっくり抜けた。

「……で、どうすりゃいいんだ?」

俺は背後にピタリと張りついている人物にわざとらしく次の指示を仰ぐ。

「右手に馬車が停まっていますので、乗って下さい」

背後の人物、声からして男だと思うが、その男の指示で俺は言われた通りの場所にあった馬車の荷台の客車に乗り込んだ。

俺が乗り込むとばたんと入り口が閉まり、やがてガタガタと馬車が動き出した。

「なるほどね……」

客車は小窓などは塞がれ外の様子は全く確認出来ないようになっていた。

「これは面白くなってきたかもな」

俺はそう呟くと、とにかく馬車が目的地に着くのを待った。

かれこれ20分くらいだろうか。馬車は止まり、外で誰かが話している声が聞こえてくる。

そして程なくして閉められていたドアが開かれる。

「お待たせいたしました。こちらへどうぞ」

俺は言われるがまま外に出る。

そこは馬車を丸ごと収められる車庫のような場所で、入り口も既に閉められ、ここがどこだか確認する術はやはりなかった。

「こちらへ。リーダーがお待ちです」

「リーダー？」

俺は訝しげにそう口にする。

すると案内してくれている男は、先に進みながら簡単な説明をしてくれた。

「我々は反帝国主義組織『レジスタンス』です。これからあなたにはリーダー、イーグル殿に会っていただきます」

「なんで俺なんだよ。やり方もなんだか秘密だらけだったし」

「我々はこの場所を信頼の置ける仲間以外には知られてはならないのです。手荒な手段を取らせていただいたことに関しては謝罪いたします」

男は小さく頭を下げ、更に先へと進む。

「……なんだかなぁ」

「着きました。どうぞ」

男がドアを開けて中に入るよう促す。

俺が入ると、中には年季の入ったテーブルと、それを挟むようにこちらも汚れが目立つ古いソファーが置かれていた。

そして、ソファーには長めの灰色の髪を背中で一本にまとめ、不精髭の目立つ顔にはいくつもの傷跡が残っている見るからに歴戦の勇士なおっさんが座っていた。

おっさんは俺の姿を見ると、すっと立ち上がりこちらへ歩み寄って来る。

「お待ちしておりました。この組織のリーダー、ということになっているイーグルと申します」

そう言ってイーグルさんは手を差し出してきた。

「え、ええと……どうも。桐原っていいます」

俺はイーグルさんのデカイ手に自分の手を重ねる。

いや、手だけじゃない。このおっさん、近くで見ると筋肉がすげぇ。鍛え上げられてるんだろうなぁ。

「キリハラさん、ですか。それにしても驚きました」

「な、何にです？」

「我々が思っていたよりも遥かに若い。そして体も華奢だ」

イーグルさんは俺の体を見ながら言う。

「帝国軍の基地を単独で潰した男、と聞いたときにはもっと化け物じみたものを持っているのかと……いや、失礼。我々が話すべきはこんな事ではないですな。まぁ、お座りください」

イーグルさんは俺をソファーへと促す。

俺が座ると、イーグルさんが向かいに座る。

「まず、手荒な手段を用いてあなたをここに連れてきてしまった事をお許し下さい」

イーグルさんは頭を下げる。

「サギルタにおけるあなたの活躍は我々の耳にも入っておりました。そして、ぜひお会いしたいと思っておりました」

イーグルさんは言いながら一枚の紙を取り出した。

「これは？」

「我々の間で流通している非公式の新聞です。サギルタの駐屯地壊滅に関する情報が載っています」

文字がびっしりと書かれたそれを見ると、

〔対帝国の救世主、現わる！〕

という見出しの下、俺のサギルタでの殴り込みに関する情報がある事ない事ビッチリ書かれていた。

「これを見た時我々は驚きと喜びに震えました。単独で帝国軍の基地を潰せるだけの人物が現れ、そして今我々の前にその方がいるというこの奇跡！」

イーグルさんの口調に熱が加わってくる。

「先程の魔術兵団師団長二人を相手にした戦闘も拝見させていただきました。その上でサギルタ襲撃はあなただと確信しました」

「……」

確かにサギルタで暴れたのは俺だ。しかしそれはシオンを助ける為であって潰すのは2番目の目的であった。

この人と俺との間には今は温度差がありすぎる。だが、話を聞くにはまたとないチャンスだ。

「一つ、聞いてもいいですか？」

「なんでしょうか？」

「なぜそこまで帝国を敵視するんですか？」

俺の質問は意外だったのだろうか。イーグルさんは少し熱が冷めたようになる。

「……キリハラさんは、ここモンフェルトの歴史をご存じですか？」

さっきとは打って変わって重々しい口調。

「いえ、知らないです」

「そうですか。……ここ、モンフェルトは昔は独立したモンフェルト共和国という名の国でした」

イーグルさんは更にこの街の歴史を語る。

「アルバレオとは友好関係を結んだ同盟国でした。領土の大きさには大きな差はありましたが海洋資源などの輸出による貿易により互いの需要と供給を満たせる関係を保ってました」

そしてその頃のアルバレオは独立国に寛大だった、とイーグルさんは哀しげに付け加える。

「しかし、アルバレオ内で軍が権力を掌握してくると、軍は周辺の独立国に対して圧力を掛けてくるようになりました」

イーグルさんの言葉は続く。

「軍には無理矢理にでも圧力をかける対象が欲しかったのです」

「なぜ、ですか？」

「銃を向ける相手を持たない軍隊はその存在意義を疑われる。もしアルバレオ全体でそんな動きが出てくれれば権力の掌握どころか軍の

存続に関わります」

「だからモンフェルトを仮想敵国に仕立てあげたっていうんですか？」

「その通りです。国の規模、軍隊の規模。どちらをとってもモンフェルトはアルバレオに太刀打ち出来ない。そう悟ったモンフェルトの議会はアルバレオの属州となり共和国の名を捨てたのです」

それが約１０年前の出来事。イーグルさんはそう付け加えた。

「アルバレオは大きな暴動を恐れてか分かりませんが今日に至るまでの約１０年。モンフェルトに対し腫物を扱うかのような対応を続けてまいりました。さすがの奴らも勝手を知らぬ土地の人間達に暴れられる訳にはいかなかったんでしょうね」

「また質問いいですか？イーグルさん」

「どうぞ。私の話に気を遣わずに聞きたいことはどんどん聞いてください。あと私の事は呼び捨てで構いませんよ」

「いえ、なんか呼び捨ては俺自身が許せそうにないんで……。で、あの、イーグルさんは、何者なんですか？ただ帝国に反発してる人には見えないんですが」

体つきや顔の傷。なにより話の内容が一般人とは思えなかった。

「……私は元はモンフェルト共和国軍に属していました。最終階級は少佐。……過去の話ですが」

イーグルさんは部屋の入り口にたっている男達に目を向ける。

「彼らもかつて私の部下だった者達です」

元軍属が集まったレジスタンス、か。だが、帝国軍の奴らが言うような物騒な事をしそうな人達には俺はどうしても思えなかった。

会ってすぐだし、彼らに都合のいい話ばかり聞かされてるのかもしれないけれど、なんだかこの人達……イーグルさんからは、強い覚悟を感じた。

だから、俺は自ら話を一歩進める事にした。

「で、俺が呼ばれたのはなんでですか？」

本題、と言うべき質問にイーグルさんは俺の顔をじっくり見据えた上で話し出す。

「明日、モンフェルト中央宮殿前広場において式典があるのはご存じですか？」

「ええ、帝国のお姫様が喋るっていう……」

「レジスタンス内では、その式典内でのフィアナ姫の暗殺計画が存在してました」

「えぇ！？」

イーグルさんがあっさりと口にしたその言葉に、俺は一瞬にして緊張と警戒を高める。

「存在はしていました。しかし、その方法があまりに人命を軽んじていたため、却下されたのです」

イーグルさんは、俺に確実に聞かせるように強く言う。

「人命を……って、暗殺計画が何を！」

「奴が提案したのは、会場に集まった一般人をも巻き込む計画だったからです」

「一般人を巻き込む……？」

「はい。式典の最中の広場を殺傷能力の高い爆弾で攻撃し、姫もろとも一般人を大量に巻き込む計画を」

「は、はぁ！？なんだよそのアホらしい計画！ってか奴って誰だよ！」

「だから却下されたのです。奴はレジスタンスの中でも過激な考えをもっていた男です」

「そいつは今どこに？」

「分かりません。自分の計画に組織の賛同が得られないと知ると、己に従う者達を連れて出ていってしまいました」

イーグルさんは悔しげに拳を握る。

「止めなかったのかよ！」

「止めました。しかし、奴は特殊な魔術を使って私達をこの場所に閉じ込め、その間に……」

どこぞへ逃げられた。そういう訳か。

「そいつの名前は？」

「コルディオ、少なくとも我々にはそう名乗っていました」

「本名じゃないのか？」

「分かりません。奴は突然レジスタンスに転がり込んできたんです」

「なんでそんなどこの誰とも分からない奴を……」

「奴は多額の資金を提供してくれた。資金不足に悩んでいた我々は愚かにも奴をすぐに引き入れてしまった」

イーグルさんは俺に真っすぐに目を向ける。

「あなたへのお願いというのは他でもない。奴を、コルディオを止めて欲しいのです」

イーグルさんは頭を下げる。

「……イーグルさん。一つだけ聞かせてくれ」

「……はい」

「もし、そのコルディオって野郎の計画が姫一人を確実に仕留める内容だったら……賛同したのか？」

この答え如何では俺はコルディオを見つける前に今この場所を潰さなくちゃならなくなる。

「……分かりません」

イーグルさんは絞るように一言そう口にした。

「今、モンフェルトはアルバレオと共栄共存の道を歩んでいる。となれば我々のしている事はモンフェルトの首を自らの手で絞めているのではないか、と」

「迷っているなら、何が正しいのか少しでも疑問の余地があるのなら、銃は下ろしてほしい。血を見る前に出来る事はいくらでもあるはずだ」

それは、俺のまだ短い人生のある教訓からの言葉。

「……その通りかもしれない。私達の戦いはまた別の局面に向かうべきなのかもしれない」

イーグルさんは言いながらぐっと、胸にさげたロケットを握る。

「それは？」

「私の未練です。本来忘れるべきもの」

「そうか……」

俺はイーグルさんの表情に少しそのロケットが気になったが、それよりも今はなすべき事があった。

「イーグルさん。あなた方を全面的に認める訳にはいかない。でも爆弾で多くの命を奪おうなんて馬鹿げた真似は何が何でも止めなきゃならない」

リミットは明日の式典。それまでにコルディオを見付け爆弾の場所を吐かせるしかない。

「どんな奴だ？コルディオってのは」

厳しい口調でイーグルさんに聞く。

時間との戦いが始まった瞬間であった。

［34］レジスタンス（後書き）

電車で隣の人がリズムを刻んでいます（リアルタイム）

でも音楽は聞いていない。

……脳内再生？

アディオス。また次回！

［35］炎獄、再び（前書き）

クリスマスが終わりました。

私の知らない間に。

なんという事でしょう。

35話でありんす。

［35］炎獄、再び

顔の右半分に大きく火傷の跡がある金髪の若い男。それがコルディオという男のざっくりとした特徴だという。

レジスタンスのアジトを飛び出した俺は真っ直ぐ宮殿に向かった。

「宮殿の広場か。そんな分かりやすい場所に爆弾を仕掛けるなんて現実問題出来るのか？」

『難しいと思います。しかし設置出来る場所は自ずと限られていますので、まずは宮殿を探しましょう』

「だな」

俺は厳重な警備が敷かれた宮殿に透明人間状態で再度侵入する。

広場、と一口に言ってもそれは数千人規模で人が収められるであろう広さだった。

「おいおいおい。ここのどこに爆弾仕掛けようってんだよ」

俺は広場をぐるりと見渡しながら言う。

『第一目標はフィアナ姫の筈ですから、宮殿側のバルコニーに近い場所ではないでしょうか？』

「なるほど。行ってみるか」

そうしてバルコニーに移動したあたりから日が大きく傾き夜の暗さが訪れてきた。

「暗くなったら不利だな。ちょっと急ぐか」

俺は誰もいないバルコニーにタンっと飛び乗る。

バンッ！

飛び乗った瞬間俺の足元で大きく破裂音が響き、体中に液体が付着する。

「え？」

一瞬何が起きたのか分からない俺。

「あそこだ！急げ！」

そんな俺の耳に、こちらに向かってくる足音と共に声が聞こえてくる。

「やば！ていうかなんでこんなとこにペイント弾仕込んでんだよ！」

『迂闊でした。軍がここを警備していないはずがなかったですね。……ごめんなさい』

「なんでゆめじんが謝るんだよ？」

俺は透明化を解き、顔のペイントを拭いながら聞く。

『私が気付いていたら騒ぎを起こさずには済んだはずです』

「……かもね。でも俺が不注意だった事も確かだ。ともかくなんとか切り抜けるしかないな」

俺は広場に降り立つと、逃げるルートを模索……出来なかった。

「炎闘陣！」

聞き覚えのある声が響き、俺とその周囲を大きく囲んで炎の円陣が出現した。

「まさかこんなに早くまた会えるとはね……。今度は逃がしはしないよ」

アーガイルが円陣の炎を割って姿を現す。

ご丁寧にファラケスとかいう人型の炎の塊も一緒だ。

「これ以上フィアナ様の周りを汚す訳には参りません。覚悟を」

アーガイルとは逆の方向。炎の大剣を携えたメイドさん、ジェミニも登場。

「いきなりかよ」

まがりなりにも長が付いているのなら部下も大勢いるだろうに。出しゃばりな連中だ。

俺はそう思い苦笑しながら構えた。

「お披露目は前回済ましたね。ファラケス、我が敵を焼き払え」

アーガイルの指示で、ファラケスは地を蹴り、俊敏な動きで俺に向かってくる。

「させねーよ！」

俺は両手を広げ、空気を集める事をイメージする。

「即席バリアー！」

別名空気の壁。強烈に圧縮したその壁で、ファラケスの一撃を防ぐ。

「防御術か」

アーガイルはそう言うと指輪から魔方陣を出現させて新たな魔術を繰り出そうとする。

「ただのバリアと思うなよ」

俺は両手で空気の壁を押す。すると壁はファラケスを相撲の押し出しよろしくぐいぐい押し込んでいく。

「なに！？」

アーガイルは押し戻されるファラケスに驚き、出そうとした魔術が止まる。

「どんなもんじゃい！」

フッ。

「え？……ってうぉう！」

背後に何かの気配。振り返ると大量の炎が……。

「私の事を忘れていただいては困りますね」

ジェミニの振るった剣から吹き出した炎。俺は手で払いながら炎を抜け出す。

「容赦ねえなちくしょう！」

「一日に二度も不法侵入を働いた男に言われたくはないですね」

ごもっとも。

じゃなくて、この二人を相手にしていると時間ばかり食ってしまう。勝てる保証も無いしな。

かと言って今爆弾の事言って戦うのを即やめてくれるとは到底思えない。

「……倒すのが一番手っ取り早い、のか？」

『勝てますか？』

ゆめじんのその問いは、俺の中に少しだけカチンときた。

「そこは自分で力与えた奴の事信じようぜ」

『信じてますよ。しかし今回は百戦錬磨の魔術兵団師団長が二人。簡単な戦いではないですよ』

ゆめじんの言葉は至極真面目だった。

だからこそ俺はにっと口元に笑みを浮かべ答える。

「逆境結構。ピンチはチャンスに変えてこそピンチってなもんだ」

俺は膝をつきクラウチングスタートの姿勢を取る。

「はい、ヨーイドン！」

俺は瞬間加速で飛び出すと、一気にジェミニの懐を目指す。

「な！？」

いきなり俺の姿が眼前に迫ってきた事に驚いた顔をしつつも、ジェミニはすぐに剣を構える。

「はぁっ！」

そして、迫ってきた俺を一刀の下に切り伏せる。

「残念！」

斬られた瞬間煙となって消える俺。

「えっ！？」

「本物はこっちだよん」

俺は分身をジェミニの正面に送り込み、自分はテレポートでジェミニの背後に回っていた。

「正っ拳！」

俺は腰を落とした衝撃波付きの正拳突きをジェミニの背中にぶち込む。

「っあぁ！」

ジェミニは前方に大きく吹っ飛ぶ。

「こっからはノンストップで終わらせるぞこんちくしょうが！」

「終わらせるがいい。出来るならな！」

アーガイルの声。こちらに向けファラケスを構えさせている。

「貴様の様な面白い奴との戦いは久しぶりだ。久々にあいつを呼ぶのもいいかもしれないな」

アーガイルは言うと、指輪から魔方陣を出現させる。

「また何か出す気かよ」

俺は阻止しようと踏み出すが、ファラケスが立ちはだかる。

「くそっ！邪魔すんな炎野郎」

俺は衝撃波でファラケスを吹っ飛ばそうとするが、当たった部分が少し炎が減る程度で吹っ飛ぶ気配すらない。

「厄介過ぎる！」

その間にもアーガイの周りの魔方陣は光を増し、ファラケスを出した時の様に炎がアーガイルを包んでいく。

「炎の息吹を司りし炎獄の門番よ。我が名の下にその力を奮いたまえ！」

アーガイルの高らかな声に合わせるが如く、アーガイルを包んでいた炎の渦は一点に集約され、形を成していった。

「おいおいおい……」

俺は徐々に全貌を現していく炎のそれに、俺は圧倒されるしかなかった。

「炎獄の門番、ベルドラゴン。本来は対複数の規模のでかい戦闘での召喚を目的としているが……貴様にはちょうどいい相手だろう」

アーガイルの背後に控える巨大な翼を広げた炎の竜。

アーガイルが竜の足元にちょこんと立っているだけのように見えるのは、間違いなくこの竜のでかさ故だろう。

「安心してくれ。私も一度に二体を操る事は出来ない。ファラケスはベルドラゴンに吸収させた」

アーガイルはそれがせめてもの救済措置だと言わんばかりの口調。

そんなもんは救済措置にもなんにもならない。人間大の大きさのファラケスすらまともに倒せなかったってのに、今度はその数十倍のでかさの竜って……。

「ふざけんなよ……」

俺は必死に打開策を考える。衝撃波か、電撃か、震動か。

いずれにしろあの巨体を一発で消滅させられるだけの一撃……。

もしくはアーガイルを倒すという方法もあるが。

「まったく……兄様、宮殿の敷地内でドラゴンを呼び出すとは……後でお叱りを受けても知りませんよ」

いつの間にダメージが回復したのか、ジェミニがアーガイルの隣に立っている。

「こんな面白い奴が相手だ。上からのお小言なんて二の次だ」

アーガイルは口元に笑みを浮かべる。

って！この状況でこの二人相手にしろってか！

「無茶言うなよ……」

周りは火の海。敵は火の竜含めて三。

さぁ、どう戦う？俺。

［35］炎獄、再び（後書き）

もーういーくつねーるーとー♪

正月ですよ！？

２０１０年過ぎ去るの早っ！

では次回。

［３６］国崩し（前書き）

２０１０年最後の更新です。

読んで下さった皆様方。

今年はありがとうございました。

来年も宜しくお願い致します。

では、３６話。どうぞ！

［36］国崩し

炎のリングに囲まれて逃げる事も出来ないこの状況。

敵は熱い剣を振り回す危険過ぎるメイドさんとそのお兄さんで炎で出来た生き物を操る危険極まりない魔術師。

どうする？どうすんの！俺！

てなわけで、俺はとにかく奴らのペースにはまったら危険だと考え、こちらから仕掛けるべく動く。

「その意気やよし！」

アーガイルは俺が動いたのに合わせるように竜に指示を与える。

「この灼熱の地獄に付いてこれる事を祈るよ」

竜の口が大きく開かれる。

「火を吹こうってか！ドラゴンお決まりの技だな！」

俺は空気バリアを張り、攻撃に備える。

そして竜の口から炎の……エネルギーが圧縮されたビームみたいなのが発射された。

「のおぉ！？」

俺はバリアを放棄して横っ飛びでビームを回避する。

ビームの通った後は焼け焦げ、一部の無駄なく石畳の地面をえぐっていた。

「ちっ。外したか。だが一発では終わらないよ」

竜は再び俺に向かい口を開く。

「させるかよ！」

俺は全力の衝撃波を竜の頭に放つ。

竜の頭は消し飛び、ビームは放たれずに消えた。

しかし、竜の頭はすぐに周りの炎を吸収して再生される。

「言っただろう。私が居るかぎり無尽蔵に復活すると」

「くそ！だったら……！」

俺は加速をつけて一気にアーガイルに迫る。

しかし、寸前の所でジェミニが間に立つ。

「弱点を教えた上でさらし続ける程私はお人好しではございませんので」

ジェミニは炎をまとった剣を大きく凪ぎ払い、俺を牽制する。

「熱っ！ちくしょう！隙がねぇな」

俺は再び二人から距離を取る。

「逃がしません」

しかしジェミニは俺との距離を一気に詰め、剣の先をこちらに向けてくる。

「はぁっ！」

ジェミニの気合いと共に、突きの一撃。俺はリンボーダンスよろしく体を後ろに反らして紙一重で避ける。

「馬鹿正直に斬るばかりが剣の使い方ではないのはご存じでしたか？」

ジェミニは言いながら怒涛の勢いで突きを連発してくる。

「うお！っくあ！」

突きの攻撃になった途端一撃の速さが段違いに上がりやがった。

「振り抜いての一撃は威力はありますがどうにもあなたにはそのスタイルは向かないようです。なので……！」

ジェミニは更に突きの速度を上げる。

「攻撃を当てる事を重視させていただきます！」

俺はジェミニの言葉を聞きつつも、その異常な連撃をギリギリで避ける事に全神経を集中させる。

なんとか反撃の糸口を……！

俺がテンパった頭の中でそう考えていた。

「……」

そんな俺の様子を見てかは分からないが、突然ジェミニは攻撃を止めて俺から距離を取る。

「え？」

突然過ぎる行動に驚く俺。しかし、次の瞬間俺の目には口を大きく開く竜の姿が入ってきた。

「しまっ……！」

しまった。その一言を言い切る前に、竜の口から放たれたビームが俺の体を後ろに大きく吹っ飛ばした。

そのまま炎の壁に突っ込み、燃え盛る炎に包まれる俺。

「おっと。少しやり過ぎたかな？」

アーガイルは言葉とは裏腹に満足そうに口を歪ませる。

「モンフェルト議会への言い訳、今から考えといて下さいね」

ジェミニはやれやれと短く息をつく。
燃え盛る炎に消えた俺の姿。戦いは二人の勝利で終わるはずだった。
「ん？」
「どうしました兄様？」
「今炎の中に……、いや気のせいだろう」
竜から放たれた超高エネルギーの熱線の直撃。そして防御も回復もままならないまま放り込まれた炎の海。
それは、有り得ないはずだった。
「……ぁぁぁぁっ」
揺らめく炎。その灼熱の中、その熱にも負けない程に煮えたぎった男が、ゆっくりと立ち上がった。
言うまでもないだろう。俺、桐原慎吾は立ち上がった。
「どあっちぃんだよ！焼けるわ！」
俺は怒りのままに全身から衝撃波を放ち、周りの炎を消し去る。
「なっ……！」
信じられないといいたげな顔でジェミニが俺を見る。

アーガイルは多少驚いたようだがその顔には冷たい鋭さがあった。
そんなに驚かれても、俺とてダメージが無いわけではない。
全身にじりじりと火傷の感覚があり、痛みだってそれ相応のものがある。
だが、それと引き替えにして俺はとんでもないものを手に入れた。
怒り。
爆弾の事など片隅に追いやられ、俺の頭はまさに反撃という二文字に支配された。
「とんでもないタフネス野郎。そう形容するのが正しいのかな？」
アーガイルは竜の頭を俺に向けつつ口の端だけ緩めながら言う。
「タフネス結構。そのタフネスが攻撃にも応用出来るって事今から教えてやるよ……！」
俺は二度目のクラウチングスタートの姿勢を取った。
「よーいどん！」
俺は瞬間加速と同時に右腕に全ての力を込める。
狙いはアーガイル。
「何度も！」

ジェミニが再び間に入る。

「残念それが狙いでした！」

俺は右の手の平を開き、ハラキアの様に掌底のスタイルを用意する。

アーガイルを狙えばジェミニが出てくる。それ一本狙いで飛び出した。

そして狙い通りジェミニが出てきた。俺はジェミニの一撃より早く、掌底の一撃をジェミニの頬にぶちこんだ。

「どぅありゃぁぁぁ！！」

全身全霊6倍拳。ジェミニの体は大きく吹っ飛んでいく。

「ジェミニ！貴様ぁ！」

アーガイルは竜の首をそのまま俺に向け突っ込んでくる。

「ぬぉぁ！」

俺はそれを避けると、大きく上に飛び上がる。

「逃がすか！」

竜の口が開かれ熱線が吐かれる。

「そぉい！」

紙一重もびっくりの距離感で熱線を避けた俺は、そのままある場所に目を向ける。

視界に捉えられりゃどうにかなるはず。

俺は本日二度目の念力発動。

「ふんごぁぁぁぁぁぁ！」

「何をする気だ……！？」

アーガイルは俺の不審な力みに竜をこちらに向けるがもう遅い。

俺の周りに少し離れたお堀から引っ張ってきた水がうねる龍の如く集まってくる。

「くそっ！水か！」

アーガイルは竜に熱線を放たせるが、その一撃は分厚い水の壁によって阻まれる。

「うぉぉぉ！俺に水分をー！」

俺は両腕を高らかとあげ、うねる水を一ヶ所に集める。

やがて出来上がる巨大な水の玉。その大きさは広場全てを水浸しにしてお釣りがくるような水量。アーガイルの竜など軽く飲み込んでしまうだろう。

というわけで、

「くらいやがれぇ！」

「なっ！」

アーガイルは圧倒的な水に対し竜を向けてくるが、その程度で止まりはしない！

名付けて！

【水砲『国崩し』！！】

水は時に地上を跡形もなく洗い流す程の威力を持つ。

俺の放った一撃もアーガイルを竜と共に水で押し潰す。

地上に衝突し形を失った水は、広場からお堀へ向かい大きな波を作りながら流れていく。

「はぁっ……はぁっ……」

俺は乱れた息を整えながら、フラフラと宮殿の高い場所に着陸する。

「あー……っ。神経使うなぁ、念力は」

俺はぐたっと仰向けに倒れこむ。

自然と空に向けられた視界に、真ん丸満月がドドンと入ってきた。

「……いい月だ」

『毎度毎度シンゴさんの力の使い方には驚かされます』

「そう？思いついたそばからやってるだけなんだけど」

『それがすごいんですけどね。……日も完全に落ちてしまいましたけど、これから爆弾を捜索するのは少し困難かもしれないですね』

「だな。ただでさえ暗いのに騒ぎになりまくりだしな」

俺は月を見ながらはぁとため息をつく。

「でも探さない事には見つからないしな。なんとか探してみようや」

そう言って立ち上がる。さて、探すための一歩目を踏み出そうとした時だった。

「……！？」

凄まじい悪寒が俺の全身を襲う。

「な、んだ……」

なんだろう。暗く底の見えない湖に投げ込まれたような底知れない不安。

俺は、向いてはいけない、そう思いつつも振り向きその先に目を向ける。

そこに立っていたその男、ジェド・ナイアン。

奴の放つ殺気こそが、俺の感じた底知れない不安の正体だった。

［36］国崩し（後書き）

あとやり残した事はそば食う事のみ。

では次回。というか来年会いましょう。

［37］黒き刃（前書き）

２０１１年一発目の更新です。

今年もどうぞ宜しくお願い致します。

という訳で３７話です。

［37］黒き刃

ジェド・ナイアン。魔術兵団の師団長。あと分かってる事があるとするならばすらりとした高身長と涼しげなイケメンフェイスであるということか。

俺は、ジェドの姿を見た瞬間、全身の細胞が「こいつはやばい」と言っているのを聞いた気がした。

奴はただ立っているだけ。なのに、凄まじい殺気がビシビシと伝わってくる。

ジェドは、サングラスを外し、その透き通った青い目で俺を真っ直ぐに睨む。

「私が今ここで貴様と相対した訳……今更問う迄もないな」

ジェドは黒いコートを風になびかせながら静かに話す。

「……」

ジェドがいる理由。身に覚えがありすぎる。

「……名を聞かせよ。侵入者」

「え？」

普通に驚いた。いきなり開戦だとばかりに思っていたから。

「名を名乗れと言っている。まさか名が無い訳ではないだろう」

ジェドが強く言う。どうやら本当に名前を聞きたいらしい。

「……桐原、慎吾だ」

「キリハラ……。珍しい名だな。ではキリハラ、続けて問おう。貴様がこの宮殿に侵入した目的はなんだ」

「えーっと……」

俺の中にいくつかの考えが浮かぶ。

ジェドは実際のところは分からないが、今は俺の名前をわざわざ聞くくらい冷静だ。

本当の事を言ってもいいんじゃないか？

でも、直前の行いが行いだし、ジェドの殺気は本物だと思うし……。

「どうした。私に知られてはならぬような目的ならば、今ここで斬る」

ジェドは腰に差した刀に手を伸ばす。

「わー！言う！言うよ！」

俺は慌ててジェドを制する。ここで本気の戦いになるのは俺にメリットが無さすぎる。

「えっと……爆弾を探してたんだよ」

「……何を言っている。爆弾？」

ジェドはあからさまに疑わしい視線を俺に向ける。

「明日の式典でこの広場を吹っ飛ばそうって考えてる危ない輩がいて、そいつが仕掛けてるかもしれない爆弾を探しに来たの！」

俺は一息にそう言った。ジェドはといえば黙って俺を睨み付けていた。

「爆弾を探していた人間がなぜアーガイルとジェミニを倒す必要があるんだ」

刀に添えられた離れる気配が無い。

「だって、いきなり爆弾てか言っても信じてもらえないだろうし、あっちが戦う気満々だったんだもん」

俺はいきなり炎の壁に囲まれた事を思い出す。

「では私に明かしたのはなぜだ？」

「いや、なんか冷静に名前から聞かれたから、もしかしたら聞き耳持ってくれるかなって……」

「そうか……。貴様はその爆弾の情報をどこから手に入れた？」

「えっと……」

どうしよう。ここでイーグルさんの事を話したらまた厄介な事になりそうだ。

「た、たまたまだよ。街の外れた場所歩いてたらそれらしい事聞いてさ。まさか本当だったらまずいと思って……」

く、苦しい。我ながら嘘が下手すぎる。そんな街角の噂話レベルで宮殿に命懸けで侵入とか理解不能すぎる。

「……」

俺が一人脳内で悶絶する中、ジェドは真面目な顔を崩さない。

「あ、あのー……」

俺が恐る恐るといった感じで話し掛けると、ジェドは再びこちらに目を向け、

「貴様は真実を語っていない」

と断言した。

「心に動揺が見える。貴様の話には偽りが混じっている」

「うっ……」

「どこまでが偽りなのかは分からぬが、全てが真実ではない以上こちらから聞き出すしかないな」

ジェドは刀に添えた手にぐっと力を入れる。

「そして、我が同胞を傷つけた罪を償っていただこう」

ジェドは抜刀し、その黒き刃の刀を月明かりにさらす。

「殺しはせぬ。しかし四肢が無事で終わるとは思わぬ事だ」

ジェドは刀の切っ先を俺に向け、構える。

「爆弾は探して欲しいけど……捕まる訳にはいかないんだよ」

俺も構える。相手が刀を使うなら、こちらも刀で対抗だ。

俺はジェミニとの初戦で思いついた光の刀を作り、握る。

この刀、名付けるならば、

【光刀無形（こうとうむけい）】

だな。荒唐無稽とかけて。

そんな下らない事を考えてる場合じゃない。俺は光刀無形を強く握り、構える。

「面白い武器を使うようだな」

ジェドは興味深そうに光刀無形を見る。

「魔術兵団第一師団長、ジェド・ナイアン。……いくぞ」

名乗りをあげたジェドはぐっと地面を蹴り正面から向かってくる。

「うお！」

俺は眼前に迫ったジェドの刀を受ける。

つばぜり合いの形となり、俺は押し切られまいと足に力を入れる。

「……」

ジェドは正面で力む俺の顔を見ている。

「くっ……！」

その顔がなんだか腹が立ち、ジェドを力ずくで押しやろうとするが、ジェドの体は動かない。

「……その程度か？」

「え？」

俺が素っ頓狂に聞き返した瞬間、俺の体は押し返された光刀無形と共に大きく後ろに吹っ飛んだ。

「うぉわっ！」

そのまま下へ落ちそうになった体を慌てて半重力で持ち上げ、そのまま空中で態勢を立て直す。

「どういうことだよ……！？」

無意識に飛び出した疑問。俺の頭は困惑していた。

小細工無しの押し合いで俺は簡単に弾かれた。

「呆けている暇は無いぞ」

「！？」

大きく飛び上がったジェドが鋭く突きを放ってくる。

俺はそれを力任せの瞬間加速で避けて、さらに距離を取る。

「逃がすことは出来ぬな」

ジェドは刀に黒いエネルギーの様なものをまとわせ、一振りと共にそれを俺に向けて放つ。

「うらぁ！」

俺は飛んできた黒い斬撃を光刀無形で斬り払おうとする。が、

「う、うわぁ……！」

光刀無形で払いきれなかった斬撃のエネルギーが絡み付くように俺の全身を傷つける。まるで斬撃自身が意志を持っているかのように。

俺は焼けるような痛みに襲われ、無意識に半重力が解かれ、宮殿の屋根へと落下する。

「ぐっ……はぁっ……」

俺は痛みを無理矢理抑えつけ、なんとか立ち上がろうとする。が、そんな俺の正面にジェドが降り立つ。

「貴様の力というのはそんなものか、キリハラ。それともアーガイル等との戦いで力を消耗していたか……」

確かに。アーガイル、ジェミニとの戦いでのダメージはある。

しかし、それだけでは説明できない『差』を俺は感じていた。

「私は戦いを楽しむという狂気じみた感覚は持ち合わせていない。だから、貴様の意識を削ぎ、終わらせるとしよう」

ジェドは俺のそばへとやってくると、俺にかざすように手を広げ、そこに黒い光を放つ魔方陣を出現させる。

「痛みはない。しかし衝撃によりお前の意識は失われる」

ジェドは淡々と告げる。

「そいつぁどうも……。ってなるとでも思ったかこの野郎！」

俺は素早く手を動かしがしっとジェドの足首を掴む。

「なっ！？」

驚くジェドだが、もう遅い。

「さぁ、ビリビリいこうぜ！」

全力放電。ジェドの体はびくんと震え、態勢を崩し膝をつく。

「あのくらいで俺が動けなくなるほどやられてたまるかっての！」

俺はまだ確実に残る痛みを我慢しながら立ち上がる。

「おのれ……侵入者風情が何を」

ジェドはゆっくりと立ち上がる。

俺はジェドから距離を取る。

一矢報いたとはいえ奴との実力の差が埋まった訳ではない。なんとかこの状況を脱しなくては。

「解せぬな……」

「え？」

ジェドが苦々しく呟いた一言。一体何が分からないというんだ？

「貴様には魔力とは力が備わっているようだ。そしてそれは帝国随一の実力者である魔術兵団の師団長と渡り合う程の力。……なぜ貴様は軍と敵対する」

自分を実力者と言うのは確かな実力に裏付けされた自尊心からの言葉だろう。ジェドにはそれだけの実力がある。

「……今回はこうやって戦うのは不本意だったけど……、軍の中には正しくない事をしている奴らがいる。俺はそれが許せない」

「正しくない……だと」

「軍の全部が悪いとは言わない。事実ちゃんとした奴だっているんだろうしな。でも、今も何にも悪くない人たちが虐げられてると思うと頭にきちゃんだよね」

「我々が人民を……」

ジェドの眉間にしわが集まる。

「そうだよ！実験のためだかなんだか知らないけどただ平和に暮らしたかった人達の日常を奪いやがって……！」

ギャラスの一件。あの時だって俺がいかなけりゃ村の人達はいまごろ……。

「実験……。貴様が言っているのは銃騎兵団の行っていた人体実験の事だな」

ジェドは冷静な声で言う。

「あれは銃騎兵団独自のやり方だ。我々魔術兵団は……」

「違うとか抜かすんじゃねえぞ」

俺はジェドを睨む。

「同じ国の軍隊だろうが。今更訳の分からない言い訳聞かすんじゃねえぞ」

「……確かに貴様の言う事も一理あるかもしれない。だが、貴様が軍にとって不利益な敵である以上、私は貴様を捕える」

「ああ、そうかい。まぁ、そっちははなからそのつもりだったんだろうがな」

俺は構える。なんとか奴の隙を突いて逃げる。

正面からやり合わなきゃいけるはずだ。

「これ以上時間を掛けるのは利点がない」

ジェドは刀を鞘に納める。

「は？」

言ってる事とやってる事が違う。俺はそう思った。

そして、次の瞬間俺の視界は鮮やかな赤に染まっていた。

自分の血によって。

「……っ！？」

あまりに突然過ぎて叫び声すら上げられない。

俺は前のめりに倒れ、そこで意識が途切れた。

［37］黒き刃（後書き）

正月はよく食べよく飲みよく太るという話がそこかしこから聞こえてきます。

正月くらいいいじゃないか！

……と、自分に言い聞かせております（泣）

では次回。

［３８］やがて始まるカウントダウン（前書き）

成人の日に投稿です。

……だからって別に何もないという淋しさ。

３８話だー。

［38］やがて始まるカウントダウン

ジェドは血を噴き出しながら倒れるシンゴを見つつ、カチリと刀を鞘に納める。

「……ぐっ……！」

ジェドは右腕を押さえる。その表情は痛みに耐えるかのように歪む。

「居合いとは速さ也……か」

ジェドがシンゴに放った技。それは、シンゴの目にすら捉えられない程の速さで放たれた居合い斬り。

ジェドの言う通りその速さこそが最大の武器だ。

しかし、その速さは同時にジェドの体に凄まじい負荷を与える。

ジェドはその痛みを押し殺しつつ、手の平に小さな魔方陣を出現させる。

「こちらジェド・ナイアン。至急救護班を廻してくれ」

“はっ！師団長、まさかお怪我を……！？”

魔方陣の先から響く声は慌てていた。

「いや、私は大した事はない。だが、侵入者の出血がひどい。このまま死なれては話も聞けない。急いでくれ」

“了解致しました！”

ジェドは魔方陣を消す。

「……」

ジェドはシンゴに近付き少し雑に体を返し仰向けにさせる。傷口からは今も新しい血が流れだし続けていた。

「不思議な男だった」

ジェドは傷の上で手を広げる。すると緑色の魔方陣が出現し、傷口に光が当たっていく。

「止血程度にしかならないが、応急の処置としては十分だろう」

ジェドが使ったのは傷口の血液の凝固を促進させる、止血の魔術である。

「己が斬った傷を己で塞ぐとはな……」

ジェドはその後到着した救護班に後を任せ、自らは宮殿の中に戻っていった。

……。

……。

ジェドは電撃で少し焼け焦げた服を着替え、身仕度を整えると、真っ直ぐにある部屋へと向かった。

メイドの案内で部屋の扉の前に立つジェド。

「フィアナ様。ジェド・ナイアン様がお越しでございます」

メイドが中に向かい告げると、扉が開かれ、ジェドは中に入っていく。

中にはフィアナと、その後ろに付き従うようにベテランメイド、モニカの姿があった。

ジェドはフィアナを前に跪く。

「ジェド・ナイアン。只今参上致しました。ご挨拶が遅れましたご無礼、お許し下さい」

ジェドは恭しく頭を下げる。

「いえ、先程まで宮殿に侵入せし者と戦っていたと聞きました。ご無事で何よりです」

フィアナはジェドの姿を見て安堵するような表情を浮かべる。

「もったいなきお言葉。私はフィアナ様を警護すべく参上いたした身。これよりフィアナ様が帝都にお戻りになるまで我が身命を賭してお守り致します」

ジェドは顔を上げ、フィアナの顔を見る。

フィアナもジェドの目をほんの少し恍惚とした表情で見つめる。

「……おほん」

フィアナの背後に控えるモニカが音量、タイミング共に絶妙としか言い様がない咳払いをする。

「フィアナ様、ナイアン殿は急ぎの旅路に加え先程の戦闘でお疲れのはずです」

モニカは堅苦しい口調で二人の間に入る。

「フィアナ様も明日は大事な式典が控えております。早めにお休みになったほうがお体の為です」

「そ、そうね……」

モニカの言葉にフィアナは残念そうな顔で渋々といった感じに頷く。

「……という訳で、ご挨拶はこの辺りで……あら？」

「モニカ？」

「お休みの前に温かい物をと思いましたがちょうど湯を切らしておりました」

モニカはどことなく用意された台詞を喋っているかのように続ける。

「私、お湯を足して参ります。ナイアン殿、フィアナ様の事、少しの間お願い致します」

「モニカ！？」

フィアナが驚いて声をあげると、モニカはフィアナにだけ見えるようにウィンクし、

「ほんの少しだけ、ですからね」

と、フィアナにだけ聞こえるように言って、部屋を出ていく。

モニカが入り口に待機していたメイドも連れて出ていったので必然的に部屋にはフィアナとジェドの二人きり。

「え、えーっと……」

フィアナは二人きりという事を意識してか突然ガッチガチに動きが堅くなる。

「フィアナ様？」

そんなガッチガチのフィアナにジェドの訝しげな視線が向けられる。

「え？……いえ、その……久しぶりね、ジェド」

フィアナは両手で左の胸を押さえながら絞りだすようにそう口にする。

「半年振りですね」

ジェドは淡々と返す。

「ジェドは任務で忙しく国内を転々としていたから……でもこうして元気な姿が見れて嬉しいです」

さっきの言葉が『皇帝の娘』としての言葉なら、今のは『一人の女性』としての言葉になるだろう。フィアナの顔が心なしか赤み掛かっているのも気のせいではあるまい。

「姫の周りにはジェミニをはじめ信の置ける精鋭達がおりますので、私も安心して中央を離れる事ができるのでございます」

ジェドの言葉はフィアナとの二人きりの時間を楽しみたいというニュアンスではなかった。あくまでも家来としての振る舞いと変わらなかった。

「そ、そうね……。そうだ！ねぇ、ジェド。これ覚えてる」

フィアナは部屋の隅に置かれた棚に駆け寄ると、ごそごそと何やら取り出す。

「これ！部屋を整理させていたら出て来たの」

「それは……」

フィアナが持ってきたのは手の平に納まるほどの大きさの銀色の鳥の彫刻であった。

「すっかり無くしたと思っていたら、この前偶然見つかったの……。

覚えてる？」

フィアナは思い出を語る一人の女の子として、無邪気に今まさに羽ばたこうとしている鳥の彫刻をジェドに差し出す。

しかし、ジェドはその彫刻を受け取ろうとはしなかった。

「……昔の話です」

そう一言だけ呟き、すっと立ち上がる。

「ジェド……？」

突然立ち上がったジェドにフィアナは少し驚き手を引く。

「私はまだ任務の最中でございますので……失礼致します」

ジェドは一礼すると足早に部屋を後にした。

入れ違いに入ってきたモニカは、出ていくジェドと部屋に立ち尽くすフィアナの様子を見て、小さく嘆息した。

ジェドはそのままフィアナとの一時などなかったかのように、宮殿内の医務室へと向かった。

「大丈夫か？ジェミニ」

中ではジェミニが腕や足に包帯を巻かれた状態で椅子に座っていた。

「ジェド師団長！今回は誠に申し訳ございませんでした」

ジェドの姿を見るなりジェミニは立ち上がり深々と頭を下げる。

「いや、頭を上げてくれ。ともかく大した怪我じゃなくてよかった」

ジェドは近くの椅子に腰掛ける。

「アーガイルは？奴は一緒ではないのか？」

「兄は水を浴びて体が冷えてしまったと言うことで浴場に向かわれました」

「そうか。出来れば二人一度に話したかったが、仕方ない」

ジェドは救護班の兵士に席を外してもらうと、更に窓やドアにある魔術をかける。

「『耳塞ぎ』……他の者に聞かれてはまずい事なのですか？」

あらゆる音声をその範囲より外へ漏らさないようにする魔術、通称『耳塞ぎ』。

それを使用すべきとジェドをして判断する話とは。ジェミニの表情に緊張の色が現れる。

「これから私が話すことは限りなく不確定な情報だ。それ故に他の人間に聞かれいらぬ騒ぎにはしたくない」

「……」

ジェミニは黙って頷くと、ジェドの話を待つ。

「お前達も交戦したあの侵入者の男、確かキリハラと名乗っていたな。キリハラが私との戦闘中に言ったことだ」

「あの男が、ですか？」

「奴がこの宮殿に侵入した目的について私が問い質したところ、奴はこう言った」

「目的……？」

ジェミニは疑わしげにその単語に疑問符をつける。

「この宮殿に爆弾が仕掛けられた可能性がある。奴はそう言った」

「なっ！？……」

ジェミニは勢い良く立ち上がる。

「爆弾……！？奴はフィアナ様との接触が目的だったはず……」

「そうなのか？」

「はい。ジェド師団長が到着される前に奴は一度宮殿へ侵入した際、フィアナ様との接触が目的だと……」

「……しかしフィアナ様は無事だ。特に侵入者と接触した形跡も見られない」

「それが今度は爆弾……。一体奴は何を考えて……」

ジェミニは理解出来ないといった風に顔を歪める。

「普段ならば捨て置いても問題の無い程度の話だろう。……が、奴の実力と明日が式典であるという事を考えると……」

「調査を行う必要がありますね」

「ああ。だが、最初に言った通り無用な騒ぎは避けたい。アーガイルには私から話す。お前もこの事は不必要に話が広がらないように気を付けてくれ」

「了解です」

「キリハラが意識を取り戻したら話も聞けるが、その暇も無いな。私はアーガイルの下に向かう」

「はい。私も部下と共にフィアナ様の身辺を固めつつ調査にあたります」

「頼んだぞ」

ジェドは椅子から立ち上がると、部屋に張り巡らせた『耳塞ぎ』を解除し、部屋を出ていく。

本来ならば部下を総動員して事の真偽を調べたい。しかし、この事態にもしモンフェルトの政府側の人間が関わっていたらと考えると下手な事は出来ない。

モンフェルトとの友好を確かな物にする為の式典の為にモンフェルトの人間を疑ってかからねばならない。

ジェドは大きくため息をついた。帝国の果てなき欲と余りある力が生み出したねじりきった関係の矯正。自分達は偉大な先人達の尻拭いをさせられている。そう感じていたから。

ジェドがアーガイルのいる浴場に向かおうとすると、その前方にまさにモンフェルト側の人物が歩いてきた。

「これは、マグノス殿」

ジェドはマグノスに対し軽く一礼する。

「ナイアン殿。先程の戦闘……大丈夫でしたか？」

この『大丈夫』にはいくつもの意味が含まれている事だろう。ジェドは軽く口元に笑みを浮かべ、

「この通り私は無事です。宮殿の損傷に関しても即刻修繕の費用と資材、必要なら人出も手配致します」

「ありがとうございます。宮殿の事に関しては追って話を詰めるとして、侵入してきた男というのは、一体どのような者だったのですか？」

「確かな動機はまだ判明しておりませんが、恐らくはこの機に乗じて何事か成さんとした下らぬ輩でしょう」

「そう……ですか」

ジェドの説明にマグノスは納得したのやら微妙な顔をする。

「ここだったのか、ホーク」

マグノスが来た通路から、白いスーツ姿で、なぜか不似合いな白いフードで顔の大半を隠した男が現れる。

「……ああ、リーガスか」

マグノスは振り返り、白いフードの男に声を掛ける。

「こちらは？」

ジェドが少しの警戒感と共にマグノスに尋ねる。

「私の友人で、リーガスという者です。式典などの祭事に心得があるので私が個人的に呼びました」

紹介されたリーガスはジェドに向かい丁寧に一礼する。

「どうも、リーガスと申します」

「帝国軍魔術兵団のジェド・ナイアン師団長です。失礼ですがその顔は……」

ジェドはほとんど素顔が窺えないリーガスに対しやはり警戒しつつ聞く。

「これですか……。実は私、先日こちらに来る道中獣に襲われまし

て、命は拾いましたが顔に醜い傷を残してしまいまして……」

リーガスはジェドの警戒にも不快感を示さずに説明する。

「そうでしたか。無用な詮索の無礼、お詫びいたします」

「いえ、こんな格好をしていれば、だれでも気になります。ただ、このような見苦しい物を皆様にお見せする訳にはいかない為、顔を隠させていただいている次第です」

リーガスはジェドに対しそうしてひとしきり説明すると、マグノスの肩に手を置き、

「さて、まだ明日の詰めが残っている。行こうか、マグノス」

「あ、ああ……。では、ナイアン殿、我々はこれで」

マグノスは軽く礼をすると、リーガスと共に通路の奥へと消えていった。

ジェドも再び浴場を目指し歩きだしたが、すぐに止まる。

「そこにいるのは誰だ?」

ジェドが声を掛けると、通路の角に隠れた人影がビクッと動き、やがて恐る恐るといった感じで本体が姿を現す。

「あ、あの、盗み聞きなどするつもりはなかったのですが、お気に障りましたか?」

オドオドした小柄なメイド、ルルチェルが怯えた顔でジェドを見る。

「使用人部隊か。そのような所でなにをしている？」

「い、いえ、私はただ通りかかっただけでこれからジェミニ師団長の下に向かうところです」

「そうか。別に咎めるつもりはないが誤解を招くような行動は慎むことだな」

「は、はい。……あ、あの、ジェド師団長はこれからどちらに？」

ルルチェルは子犬顔負けの怯えた目のまま尋ねる。

「ん？私はこれからアーガイルに会いに行くところだが……何かあったか？」

「い、いえ！な、なんでもないです。し、失礼致します」

ルルチェルはぺこりと一礼するとトタタタと小走りに去っていく。

「……よく分からない奴だ」

ジェドは首を傾げつつ浴場に向かう。

そして今度こそ浴場についたのだが、

「何？出掛けた？」

浴場にアーガイルの姿は無く、部下に尋ねたところ、書き置きを残してどこかへ行ってしまったのだという。

「どこに行くとも書かれていないのか？」

「そ、それが、『すぐに戻る』としか書かれてなくて……今宮殿の周辺を捜しているところです」

答えている兵士もアーガイルの行動の意味が分からず困惑している様子だった。

「この大事な時に……。もし見つかったら私の所に来るよう伝えてくれ」

「はっ」

アーガイルは思慮深き男、何か考えあっての行動かもしれない。

ジェドは兵士にそう伝えると、一旦自分にあてがわれた部屋に戻る事にした。

通路を行く途中、窓から見事な満月が見える。

「何も起こらなければいいが……」

明日は二つの都市を結ぶ大事な式典が控えている。

ジェドは、身を引き締めて部屋へと戻っていった。

［38］やがて始まるカウントダウン（後書き）

本編にも関わらず主人公が喋っていない。

なんか逆に気持ちいいわ。

では次回。

［39］ある牢屋の一コマ（前書き）

海沿いでビルに挟まれた道、そしてこの気温。

猛り狂う寒風に襲われました。

春よ来い。３９話じゃ。

［39］ある牢屋の一コマ

「んっ……あぁ……」

意識が混沌の中をゆらゆらと彷徨っている。

俺はジェドと戦って、そして突然出血して倒れて……で、どうした俺？

俺はその疑問の答えを見つけようとやたら重い目蓋をこじ開ける。

「……どこだ？」

俺は首を動かして辺りを見回す。

石の壁、鉄格子。そうか牢屋だ。

「捕まったのか……」

俺は起き上がろうとするが、腹部に強烈な違和感を覚え、うまく立ち上がれない。

「うぎゅ……なんだこりゃ？」

見れば俺の腹は包帯でこれでもかとぐっるぐるに巻かれていた。

「あいつに、やられたんだよな……」

俺は冷めた顔で刀を振りかざすジェドの姿を思い出す。

強かった。『力』を使った戦い方の創意工夫以前の問題だった。
土台の強さが今まで戦った奴とは格段に違っていた。
負けてしまった。その事実が俺を傷の重みとはまた別の重みとなった。

「あー、くそ。あの野郎、絶対にぶっ飛ばす」

「誰をぶっとばそうと言うのですか？」

「うぉあ！びっくりした！」

いつからそこにいたのか分からないが、メイド軍団の一人、ハラキアが鉄格子の外側に立っていた。

「驚かすつもりは毛頭ございませんでしたが、というかあれだけの力を持つ者がこの程度で驚くとは……」

ハラキアはフッ、と小さく鼻で笑う。

「るっさいなぁ。お前何しに来たんだよ！」

俺はそこまで言って初めてハラキアが持っているトレーに注目した。

「なに、それ？」

「食事です」

ハラキアは鉄格子の下の隙間からトレーを中に入れてくる。

「へぇ、俺みたいなんでも飯もらえんだ？」

トレーに乗ったパンと水。どえらいシンプルだが立派な食事。

「最低限の施しです」

「そいつぁどうも」

俺は、腹をかばいながら起き上がると、パンに手を伸ばす。

「では、私はこれで」

「あっ、ちょい待って！」

足早に立ち去ろうとしたハラキアを俺は呼び止めた。ハラキアは警戒心丸出しの表情で俺を睨む。

「……何か？」

「ちょっと話していかないか？」

『え？』

脳内で久々にあいつの声が聞こえた気がしたが、とりあえず無視。

「……何が目的か分かりませんが私は罪人と話す話題など持ち合わせていないとはっきり申し上げておきます」

「ごもっとも。でも一度拳で会話した仲じゃん。ちょっとくらいなら」

俺はびしっ、とパンチを繰り出す素振りをする。

「……私はあなたと話す話題はありません。しかし、あなたが私と話すべき有益な話題があるというのなら話は別ですが」

「ややこしいな……。まぁ、そうだな。そちら側にとって有益かどうかは分からないけど、一つ聞きたい事があるんだよね」

「聞きたい事、ですか……？」

俺がそう言うと、ハラキアは少し眉をひそめる。

「ハラキアってなんで軍に入ったの？」

「！？……まず、あなたに呼び捨てにされた事に納得が」

「ああ、じゃあそこすっ飛ばして、質問の答えだけちょうだい」

「そんなことを聞いてあなたはどうすると言うのですか？」

「どうする？……そうだな、お前らみたいな若い女がなんで軍隊なんて殺伐とした場所にいんのかなって、気になった」

「……」

「まぁ、お前らはバリバリの軍人って訳じゃなさそうだけど」

俺はハラキアの見事に着こなされたメイド服を見て一人納得する。

「……罪人に語れる話題ではないですね。残念ながら」

ハラキアは若干の沈黙を挟みそう答える。

「そうか。まぁそりゃそうだな」

「では逆にお尋ねしますが」

「え？」

「なぜあなたは帝国軍に対し反抗的な姿勢をとっているのですか？」

ハラキアの一切濁りの無い眼差しが真っ直ぐ俺に向けられる。

「聞けばあなたは以前にも帝国軍の駐屯基地を壊滅させた立派な武勇伝があるとか……」

確かな『興味』を持ったハラキアの言葉。

「うーん……。って、お前答えてないじゃん！なに質問で返してんのさ」

「強要はいたしません。答えるも答えないもあなたの自由です」

「自由、ねぇ……」

俺はぽつりぽつりと考える。軍と戦い始めたきっかけ。それはゆめじんから唆されたのがそもそもの始まりだったけど……。

「許せなかったから、かなぁ」

俺はぽつりと呟く。

「許せない？帝国軍がですか？」

「うむ。俺の出会った軍の連中はただ穏やかに暮らしていた人達に暴力振るったり理不尽な事したり……。そう考えると俺は守りたかったから戦ったともいえるな」

「……」

「俺が大切だと思った人を自分らの都合で銃口向けやがった奴らから」

「それが、あなたの戦う理由ですか……」

「うむ」

俺は深々と頷く。

「……」

ハラキアはそんな俺の様子をじっと見ている。

「もちろん軍だってそんな悪玉ばっかりだとは思っちゃいないさ。想いや信念を自分の正義に乗せて貫こうとしている奴らだって実際いるだろう。だがな、誰かを泣かせ笑顔を奪おうとしている奴らがいる限り、俺は戦う。そこには軍がどうのこうのなんてのは関係な

い」

俺は我ながらよく喋るなと心の中で苦笑する。

「お前らとは成り行き上戦う事になったが、でもお前らは自分の信念みたいなものをしっかり持ってるなー、みたいなのは感じてた」

「あなたは……」

「ん？」

「あなたは、誰かを守る為だけに力を行使していると言うのですか……？」

「それが理想だけど、必ずしもそういうパターンばかりとはいかないんだろうな。今回なんかは俺の方がもろにそっちのテリトリー侵した訳だしな」

たはは、と俺は苦笑する。

「……私も、この力は誰かを守る為の力であってほしい……」

「え？」

「な、なんでもありません！」

ハラキアはその呟きに反応されたのがお気に召さなかったのか、ぷいとそっぽを向いてしまう。

「私は仕事がありますので失礼させていただきますが、一人になっ

たからといって脱獄などを企むのは身の為ではないと忠告致します」

「う、うん……？」

「この牢にはアーガイル師団長直々に刻まれた迎撃用魔方陣が隙間無く設置されておりますので、牢を破ろうとした瞬間に消し炭です」

想像する。炎に巻かれる自分を。

「……ぶるっ」

恐怖で身震いした。

「なので下らぬ事は考えないようにと私はあなたに釘を刺しておきます」

「お、おーけー……。忠告痛み入りまする……」

「では、失礼致します」

ハラキアは今度こそ足早に牢屋の前から去ろうとして、

「別の形でお会いしたかった……」

と小さく呟いた。

「へ？」

めざとく聞き取る俺。

「な、なんでもありません！」

ハラキアはそう言い捨てて本当に今度こそ去っていった。

静まり返る牢のの中。

「さて、どうしたものかね？」

容易に脱獄が出来ないとなるととりあえずおとなしく捕まっといて様子を見るしかないかな？

『さて、これからどうするんですか？』

と、ここで先程の『え？』以来の登場、ゆめじんさんです。

「久しぶり！」

ぱちぱち、と俺は拍手をする。

『……なんだか分かんないんですが間違いなく馬鹿にされてますよね？』

「とんでもない！むしろ待ち侘びた瞬間だよ」

『……本当ですか？』

「本当本当。で、これからのことだよな？」

俺は素早く切り替える。

『……まぁ、いいでしょう。で、何か考えはあるんですか？』

「うーむ。脱獄が難しい以上とりあえず様子見するしかないんじゃないか？」

『そうですね。どうやら状況は若干ですが、シンゴさんに味方している様ですし』

「え？味方してるの？」

『師団長二人を倒したにも関わらず今無事な状態で捕まっているのはとんでもなく幸運な状態なんですよ？』

「そ、そういえばそうだよな。あの場でジェドに殺されててもおかしくないんだよな、よく考えたら」

『よく考えなくてもそうです。ですが、恐らくジェド・ナイアンと戦った際にシンゴさんが爆弾の事を言ったのが結果的にシンゴさんの身を救ったと言えるかもしれませんね』

「爆弾の事を言ったのが……。どういう事だよ？」

あの時はなんとか事態を打開しようと必死だっただけなのだが……。

『シンゴさん程の実力者が命懸けで宮殿に侵入し、爆弾があるかもしれない、と言いました』

「うん」

『相手も言ったのが謎だらけの、でもとにかく強い男。そして明日

には大事な式典がある。ただでさえ警戒を強めていた軍にとっては気にするなという方が無理ですね』

「なるほど。つまり俺は重要参考人みたいな立場って訳だ」

『そういうことです。情報を洗いざらい喋らせるまでは殺されるという事はないでしょう』

「うわぁ、ドラマみたいな展開」

『緊張感の無いコメントありがとうございます。……そして爆弾の事が軍にも伝わっている以上事態は今まさに動いているかもしれません』

「軍の奴らが爆弾を見つけてくれたらそれはそれで結果オーライなんだがなぁ……」

『そうですね。ですが、ここは中央から派遣された軍にとってはあくまでアウェー。それにコルディオという男の動向も気になります』

「そうだな。そいつを抑えないと本当の解決とは言えないからな」

『ですので、シンゴさんは今後訪れるであろう脱出の機会の為にしっかり回復しておくのが先決ですね』

「そうだな。よし、じゃあとりあえずこのパンを食べよう」

俺はパンに手を伸ばし、豪快にかじりつく。が、

「むんっ！」

『ど、どうしました？』

「か、硬い……」

『……』

牢屋に吹く風は、冷たかった。

［39］ある牢屋の一コマ（後書き）

フランスパンは硬いですね。

でもそれが彼のアイデンティティー。

では次回。

［４０］最後の希望（前書き）

本編が４０話に到達！

オーイェー！フゥー！

ってか外めっさ寒い。

４０話いってみるべしなのよ！

［40］最後の希望

朝日が昇る。

眠れぬ夜を過ごしたジェドは、自室を出ると会議室へと出向いた。

「おはようございます、ジェド師団長」

会議室にはジェドやアーガイルの側近ら数名が長机に置かれた地図と睨み合っていた。

「何かあったか？」

ジェドは近くにいた部下に尋ねた。

「いえ。ここ数時間は特に何も」

「そうか……」

ジェドは会議室の窓から外を見る。

そこからは今日式典が執り行われる広場がよく見えた。

「あの場所を血と炎に染めてはいけない……」

ジェドは小さく、しかし力強く呟く。

と、会議室の扉が開き、モニカが入ってくる。

「モニカ殿、こちらに来られて大丈夫ですか？」

「ジェミニらを付かせてますので大丈夫です。それより皆様お疲れでしょう。今疲労と寝不足によく効くお茶を入れて差し上げます」

モニカはポットに湯を入れる。辺りに茶葉独特の匂いが広がる。

「モニカ殿もお疲れでしょうに、申し訳ございません」

ジェドが言うと、モニカはジェドの方を向き、穏やかな笑みを浮かべる。

「いえいえ、半ば隠居で楽をさせてもらってる身ですから、このくらいの役には立たないと」

モニカは手際よくカップにお茶を注ぎ、テーブルに並べていく。

「それに今日はフィアナ様の晴舞台。なんだか年甲斐もなく興奮してしまって、何かやってないと落ち着かないんですよ」

「はは。そんな事を言っていてはジェミニ達に呆れられてしまいますよ？」

「ほっほ。あの子らはしっかりしてますからね。そして強い。私の代わりなんて勤めあげてお釣りが来ますよ」

「代わりなどと……、モニカ殿は我らが幼少の頃より最前線で戦ってこられた歴戦の勇士。その経験はなににも代えがたいですよ」

「ほっほ。幼少どころか出産から立ち合ってますからね。ジェド様

のおしめも私変えた事がございますからね。いやぁ、可愛かったですよ。あの頃は」

モニカがわざとらしく身振り手振りを加えながら喋ると、周りの部下達がクスクス笑いだす。

「も、モニカ殿！部下の前でその様な昔の話はお止めください！」

ジェドは慌ててモニカを制する。が、その行動が更に部下の笑いを誘う事になる。

「……まったく」

と、言いつつジェドの口には自然と笑みが浮かんでいた。

平和な一時。今日一日がそうであればいいとジェドは切に願っていた。

その後ジェドは部下に式典警護の内容の最終確認をしたり、モンフェルト側の人間と打ち合せをしたりと忙しく動き回っていた。

その合間で部下達に不審な人物や物の捜索の結果の報告を随時受けていたが、いずれも異常無しという結果であった。

シンゴの言っていた爆弾というのも引っ掛かっていたが、シンゴからそれ以上の情報は特に引き出せず、しかも忙殺されている現状がさらにシンゴに対する意識を薄くさせた。

それよりもジェドには気掛かりな事があった。

「アーガイルはまだ戻らないのか？」

昨夜からどこへ行くとも告げずに消えたアーガイル。式典の開始を間もなくに控えた時刻になっても姿を現さない事にジェドは言い知れぬ不安を覚えていた。

「どうしましょう？捜索をまだ続けますか？」

アーガイルの部下が不安そうな顔でジェドに尋ねる。

「……いや、こちらも人手が欲しい。捜索を止め、人員はこちらに回せ」

「は、はい……！」

部下はどこか腑に落ちないと言った顔でジェドの前から消える。

「はぁ……一体どこに行ったのだ」

ジェドの目は人が集まりだした広場へと向けられた。

今日の式典はモンフェルトの代表知事に対しフィアナがこれまでのモンフェルトの都市としての功績を称え、両者が民衆に対してそれぞれ言葉を述べるというのが大筋の流れとなっている。

が実際は、アルバレオの南方侵略とまで言われた悪しき歴史の払拭。それこそがアルバレオ、モンフェルト双方の最大の目標であった。

その目標を成し遂げる為には式典の滞りない進行と、広場に集まった民衆がそれを受け入れるという事が不可欠だとジェドは考えてい

た。

「ジェド・ナイアン師団長」

「なんだ？」

「フィアナ様の御支度が整いました」

「分かった」

ジェドは部下の言葉に頷くと、会議室を出てフィアナの待機する部屋へと向かった。

部屋では、フィアナが青を基調にして各所に装飾の施されたドレスに身を包み、窓から外を眺めていた。

「ジェド」

フィアナは振り返る。その姿は見るものを魂から魅了してしまうのではないかという程の美しさであった。

ジェドは一瞬息を呑むが、すぐに小さく頭を下げる。

「御支度が整ったとの報せを受けて参上致しました。……よくお似合いでございます」

ジェドは後半少し声が小さくなりつつもしっかりと言い切った。

「ふふっ。ありがとう」

フィアナは格好に似合わぬ悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「では、早速ですがバルコニーまでご案内致しますのでご移動願います」

ジェドが促すと、フィアナは頷いてドレスの裾に気を遣いつつゆっくりと歩きだす。

式典が行われるバルコニーには、アルバレオ、モンフェルト双方の人間が大勢待機していた。

ジェドはフィアナをジェミニに任せると、自分はモンフェルト側のマグノスに近付いていく。

「ナイアン殿！本日は未明から準備に尽力下さいましてありがとうございます」

マグノスは頭を下げる。

「いえ、これは我々にとっても大事な祭事ですので。式典は予定通りの開始ということでよろしいでしょうか？」

「ええ、こちらも準備は滞りなく終えております。……それより、師団長の方が行方知れずになったと聞いたのですが、大丈夫なのですか？」

「ええ……。ご心配おかけしまして申し訳ありません。ただ今部下に捜させていますので、直に見つかるかと」

「そうですか……」

マグノスの顔はアーガイルを心配しているように、少なくともジェドの目にはそう映った。

「いやはや、魔術兵団師団長ともあろう者が自分勝手に行方不明とは、由緒ある帝国軍の底が案じられますな」

突如響くあきらかにジェドを侮蔑する声。

フードを被った男、リーガスであった。

「何が仰りたいのですか……」

ジェドはリーガスに遠慮の無い睨みの目を向ける。

「その通りの意味です。この様に大事な式典を前にしてトップの一人がいないというのはいささか礼を逸するのではないか、と私は個人的に考えたのです」

リーガスは一息にそう述べる。最低限の気遣いだろうか、ジェドとマグノスにのみ聞こえる声で。

「リーガス！こんな時になんて事を言うんだ！」

マグノスも周りを気にしつつしかし、確かな怒気を込めリーガスを睨む。

「いえ、マグノス殿。これは確かにこちらの失態。甘んじて受けましょう」

ジェドはマグノスを制する。

「……失礼致しました」

マグノスはジェドに小さく一礼する。

「では、私は戻ります」

ジェドはリーガスからの冷たい視線を感じつつも、気に留めずにフィアナの下へ戻る。

すると、ジェミニがすかさず近付いてくる。

「何かございましたか？」

小声でそう聞いてくる。ジェドはジェミニに目を向ける事なく、

「いや、何でもない」

と言って更に歩を進める。

「……そうですか」

ジェミニは納得はしていないようだったが、その場は特に追及はしてこなかった。

やがて訪れる式典開始の時刻。それぞれの思惑が交錯する大舞台の幕が切って落とされる。

モンフェルト代表知事の言葉で始まる式典は、次いでフィアナが民

衆の前に姿を見せて、盾の授与へと進行していく。

なんの問題もない、順調そのものの進行。

広場に集まった民衆の反応も極めて友好的で、ジェドをはじめその場にいた者達は式典の成功を確信していた。

しかし、順調に連鎖した歯車はフィアナが言葉を述べるため登壇した時に、大きなズレを生むことになる。

「なんだ?」

ジェドは宮殿内がにわかに騒がしくなってる事に気付く。

「なにが……」

ジェドが近くの部下に様子を尋ねようとしたその時、『それ』は目に入った。

「アーガイル!?」

その目に飛び込んできたもの、それは、ボロボロの着衣と傷だらけの顔で現れたアーガイルの姿であった。

バルコニー周辺が一気に浮き足立つ。

「おい、アーガイル!何があった!」

「兄様!」

ジェドとジェミニはアーガイルに駆け寄り、フラフラと今にも倒れそうなアーガイルの体を支える。

「ハァハァ……。今すぐ式典を中止しフィアナ様を避難させるんだ！」

アーガイルは口内の傷から血が飛び出すのも構わずに叫ぶ。

「どういうことだ？なぜ式典を中止しなければならないんだ？」

ジェドはフィアナの方を見るが、今のところ特に異常はない。

「兄様。兄様も知っての通りバルコニー周辺には対物理、対魔術結界が張られています。事前に安全も入念に確認致しましたし今式典を中止するのは……」

「違う！あいつだ！あの男を今すぐに取り押さえろ！」

ジェミニの言葉を遮りアーガイルは叫ぶ。

「ホーク・マグノスを！！」

アーガイルの叫ぶ先、マグノスは平然とフィアナの言葉に耳を傾け

ていた。アーガイルの叫びなどまるで届いてないかのように、平然と。

「なん、だと……」

ジェドはなぜアーガイルがマグノスを捕らえろと言うのか分からなかった。

「……やれやれ」

当のマグノスは軽くため息をつきながらアーガイルに目を向ける。

「あれだけ痛め付けたというのに……よく脱出出来たものだ」

「マグノス、殿？」

「リーガス！」

マグノスはフードの男、リーガスの名を呼ぶ。

するとリーガスは素早い動きでバルコニーへと通じる扉を閉めてしまう。

「なにを……！？」

「なに、これから始まるショーにおける姫様の出番はまだまだなのでね、あちらでありがたいお言葉を述べ続けていただこうかと」

マグノスは愉快に口元を歪める。

「何をする気だ！」

ジェドは刀に手を伸ばそうとする。

「うっ……！？」

だが、次の瞬間に右腕に訪れた激痛により、その動きは頓挫する。

ジェドの右腕からは大量の血が溢れ出る。

「な……に、を……！」

「右腕の腱を切らせていただきました。あなたの実力は飽きる程聞き及んでおりますので、容赦無くいかせていただきます」

マグノスは冷たく言い放つ。

「ああ、もちろん皆様方も、少し痛いですが我慢してください」

マグノスの言葉が終わる。すると、

「ぐぁっ！」

「ぎゃぁ！」

「きゃぁっ！」

ジェドの周りにいる兵士やメイド達が一人残らず血を噴きだしながら倒れていく。

「な、何をした……！？」

ジェドは呆然とその阿鼻叫喚の絵図と化した部屋の中を見る。

「教えてさしあげたいのは山々ですが、一度刃を向けた敵に手の内を明かせるほど私はお人好しでは……ないんですよね」

「貴様ぁぁぁぁぁぁ！！」

アーガイルに寄り添っていたジェミニが叫びながら愛用の大剣を手にマグノスに迫る。

「部下をやられ、激昂する。いやはやあなたはいい上司だ」

ブシュッ。とジェミニの腹部から血が吹き出て、そのままごろごろと血を流しながら転がっていく。

「ぐっ……ぁっ……」

ジェミニは激痛に顔を歪める。

「よくも……」

アーガイルは腕を突きだし、魔方陣を出現させる。

「他人の振りみて我が振りを直すという言葉は知らないのかな君は？」

アーガイルの腹部と背中から血が噴き出す。

「がっ……」

「魔術兵団の師団長。期待を大きく下回る芸の無さだね」

マグノスは静寂に包まれた部屋をゆっくりと闊歩する。

「リーガス、貴様の復讐、済ますなら今の内だぞ」

「……はい。喜んで」

マグノスがそう言うと、リーガスは懐から短剣を取り出す。

「この日をどれだけ待ち侘びたか……」

そして、ある人物の下へと近付いていく。

カチャッ。

「!、誰だ!?」

通路に通じる扉から聞こえた物音。マグノスは扉に向かう。

マグノスが扉を蹴り開けて通路に目を向けると、通路を走っていく二人のメイド服の姿。

「ちぃっ!まだ近くに残っていたか!」

マグノスが叫んだ瞬間、メイド服の一人の足元から血飛沫があがり、メイドはもんどりうって倒れる。

もう一人のメイドは倒れた仲間に向かって叫ぶ。

「クリシア！」

「……っ！いいから！あんたは早く行きなさい！あんたまでやられたら誰が助けを呼ぶのよ！ハラキア！」

クリシアは血が溢れ続ける足を抑えつつ、ハラキアに怒鳴るように叫ぶ。

「ジェミニ師団長達がまるで相手にならなかった相手なのよ！早くしないとフィアナ様だって危ないわ！早く！」

クリシアはひたすらに叫んだ。そうこうしている内にマグノスもじわじわと迫る。

「早く！」

「……分かった！必ず助けに戻るわ！」

ハラキアはクリシアから離れ駆け出した。しかし、その直後、ハラキアの脇腹から血が噴き出す。

「ぐぁっ！」

「ハラキア！」

ハラキアは痛みに顔を歪ませる。しかし、踏み止まり決して倒れない。

「ちっ。突然動きだしては狙いがぶれる」

マグノスは苦々しくそう口にする。

「くっ……はぁ、はぁ」

ハラキアは脇腹を抑えながら通路の角を曲がり、ひたすらにマグノスから距離を取ろうとがむしゃらに走る。

「助けを……。でもどうやって……」

ハラキアの脳裏に様々な考えが浮かんでは消える。

中央からの応援など待ってる余裕は無い。しかし、師団長倒した相手に対抗出来る程の戦力など、この近辺にはいない。

「……！、いえ」

いた。一人だけ。師団長クラスの実力者。あの男ならば、確かな正義を持ったあの男ならば、きっと立ち上がってくれる。

ハラキアはたった一つ見いだしたその可能性に必死にすがるかの如く、地下の牢に向かった。

脇腹からは傷こそ浅いものの血が止まらなかった。しかし、ハラキアは足を止めず、そしてあの男、キリハラがいる牢の前に辿り着いた。

「あっ、ハラキア！いいところに来た。もう式典って始まっ……！ってえぇ!?お前めっちゃ血ぃ出てるぞ大丈夫か!?」

シンゴはハラキアの姿を見て驚愕の声を上げる。

「私の事は、いいんです。それよりも……」

「そ、それよりって……何があったんだよ？」

動揺しまくるシンゴの姿に、ハラキアは苦笑した。自分達を圧倒的な力で倒した男の態度ではないな、と。

「モンフェルトの政府側の人間が、突然我々に攻撃を……」

「こ、攻撃って……！ジェドとかいるだろう！あいつらはどうしたんだよ！」

「……やられました。あの男、ホーク・マグノスは師団長達すら一蹴する力をもっていたのです……」

ハラキアがそう言うと、シンゴは更に驚きの顔を見せる。

「ま、マグノス……だと」

「はい、奴は我々に一切手を触れる事無く３０人以上の兵を倒したのです……」

「……意味分かんねぇぞちくしょう」

シンゴはわなわなと体を震わせながら言う。

「くっそがぁ！」

シンゴは牢の扉に手を掛け、無理矢理にこじ開けようとする。

「駄目です！そんなことをしては迎撃術式が発動してしまいます！」

「じゃあ早くどうにかしてくれ！さっさと出たい！」

「き、協力してくれるんですか……？」

ハラキアは恐る恐るといった感じで尋ねる。

「協力とかそんなまどろっこしい事言ってる場合じゃないだろうが！目の前で血を流してる奴ほっとけるかってんだ！」

打算や嘘が全く無い真っすぐな目、シンゴはその目をハラキアに向ける。

「……あなたにその意志があるというのなら、お願いです！私達の仲間を！フィアナ様を！この国の未来を！助けてください！」

ハラキアの目には涙が浮かんでいた。

「……その願い、聞き入れた！ってわけでさっさと脱獄させてくれ」

「それが、この牢の鍵が全て壊されていて……」

「な、なにぃ！？」

「恐らく奴らがこの事態を見越して……」

奴らとはマグノスの事であろう。シンゴはギリギリと歯軋りをする。

「じゃあやっぱりこじ開けるしかねぇな！」

「駄目です！中からでは術式が機能してしまいます。だから、私が外から鍵を壊します」

ハラキアはシンゴに鉄格子から離れさせると、鍵に向かい、掌底の一撃を繰り出す。

「ぐっ……」

力を入れた瞬間傷口が痛む。しかし今はそんなこと気にしていられない。

「ぐぅっ……はぁっ！」

ハラキアは何度も何度も掌底を鍵にぶち当てる。しかし、鍵にもなんらかの術がかかっているのか、壊れそうにない。

「はぁ……はぁ……」

ハラキアは朦朧とさえしてきた意識の中で、尚も鍵を壊そうとする。床には傷から溢れた血が大量の跡を作っていた。

「だぁっ！見てられるか！」

「きゃっ！」

シンゴはハラキアを突き飛ばして鉄格子から離れさせると、自分の

拳を握り締め、構える。

「だ、だめです！そんなことをしたらあなたの体が！」

「でぇいやぁっ！」

シンゴの拳が鍵に命中した瞬間、牢の壁全体に赤い魔方陣が出現し、瞬く間に大量の炎が噴き出して、シンゴごと牢の中を炎で埋め尽くす。

「あ、あぁ……」

ハラキアはその光景を茫然と見ているしかなかった。

その炎に包まれた者は十を数える前に命を落とすと言われている迎撃術式。その炎に、最後の希望ともいうべきシンゴが襲われた。

もうダメなのか……。ハラキアがそう思ったその時、ハラキアの目に信じがたい光景が飛び込んできた。

牢の中で猛り狂う炎の嵐。その中に、立ち上がる影が一つ。

その影はゆっくりと鉄格子に近付くと、がしっと鉄格子を両の手で掴み、雄々しき叫びと共に鉄格子をぶち破る。

「熱ーーーーーい！！！！」

桐原慎吾、脱獄成功。

［４０］最後の希望（後書き）

次は目指せ５０話。

その頃には話はどう転んでるやら。

先は長い也。

では次回。

［４１］黒い太陽（前書き）

自動販売機で千円と小銭入れて飲み物買って、

お釣りが１００×９枚だった時、

お財布のパンパン感が半端無いです。

なんの話？４１話ですな。

［41］黒い太陽

「どぅわぁ！熱かったぁ！」

俺は洒落にならなかった熱さの牢屋から抜け出す。

「よし！だが、牢からは抜けれた。で、ハラキア……おい、ハラキア？」

俺はさてどこに向かえばいいのかとハラキアから指示を仰ごうとするが、当のハラキア壁にもたれかかるように座り込み、息遣いも荒かった。

「おい！大丈夫かよ！」

俺はしゃがんでハラキアの様子を見る。

「大丈夫です……」

「いやいやいや、大丈夫に見えないから全然！今どうにか応急でも処置を……」

俺は止血をする方法を考える。

「私の事はいいです！……っ……それよりも、一刻も早く皆の所へ……」

大きい声を出して傷に響いたのかハラキアの顔が少し歪む。

「処置の道具は持っていますし、方法も心得があります……。一人でも出来ます。だからあなたは……」

息も絶え絶えにハラキアは必死な眼差しを向けてくる。

「……分かった。全部丸く収めて帰ってくるから、お前も死ぬんじゃないぞ」

俺はハラキアを残し、地上を目指す。

「……」

残されたハラキアは、その様子を見送ると、ゆっくりと地面に吸い寄せられるように倒れていく。

「……処置の道具なんて持っていないのに……。でもああ言わなければあの人はすぐに行ってくれなかったでしょうね……」

ハラキアの口か一筋の血が流れ出る。

「……お願いします……お願い……します……」

ハラキアは眠るように意識を失った。

……。

……。

シンゴが脱獄を果たした頃、マグノスは負傷させた者達を一ヶ所にまとめていた。

「さっさとまとまれ！」

「うぁっ……！」

部屋に運ばれたクリシアはリーガスに蹴り転がされる。

「クリシア……」

ジェミニがクリシアを受け止め、リーガスを睨む。

「あぁ……。いいねぇ、いいですねぇ。あんたのそういう目を見るとゾクゾクくるよ」

リーガスは口元を不気味に歪ませながらジェミニに近付いていく。

「てめぇに復讐したくてしたくて仕方なかったからさぁ、笑いが止まらねぇんだよねぇ……」

「復讐……？」

ジェミニが訝しげに呟く。

「あれぇ？まだ気付いてもらえてないのかなぁ？……仕方ねぇなぁ」

リーガスはフードに手を掛けて一気にそれを取り去る。

「!?……貴様は……」

フードを取ったその姿にジェミニの表情は驚きに染まる。

「お久しぶりですなぁ、ジェミニ・ランドガルト」

「コルディオ・フォレンツィオ……!」

顔の半分に渡って火傷の跡が痛々しく残るその男、コルディオは、ヒューと口笛を吹く。

「まさかフルネームで覚えていていただけたとはなぁ。感激で泣いちゃいそうですよぉ」

コルディオは涙とは真逆な汚らしい雰囲気の笑みを浮かべる。

「貴様は監獄行きになったはずだ。なぜここに……」

「金だよカーネ。銃騎兵団の奴らにちょっと積んでやったらあっさり釈放だよ。ああ、貴族に生まれてよかった」

「愚かな……!金に目がくらみこんな悪党を野放しにするとは……」

「うっせぇ!」

ガッ、とリーガスの前蹴りがジェミニのアゴに命中する。

「ぐぁっ……!」

ジェミニは後ろに倒れる。

「はぁ……はぁ……。いいぜぇ。いい感触だなぁ……」

「今はその辺にしとけリーガス。いや、コルディオ」

マグノスが言うと、コルディオは渋々といった感じでジェミニから離れる。

「なぜだ……なぜあなたが……」

ジェドが血が流れる右腕をかばいながらマグノスを困惑の混じった目で睨む。

「ん？知りたいか、若造」

マグノスはジェドの前に立つ。

「これは貴様らアルバレオ帝国軍に対する復讐。その序章だ」

「復讐……」

「そうだ。１０年前に我々が受けた屈辱をいまこそ晴らす時なのだ」

１０年前。アルバレオがモンフェルトを圧倒的武力を背景に併合した、マグノスが言うのは間違いなくその事であろう。

「高圧的で傲慢な帝国の奴らが我が国に土足で踏み入り、無理矢理我が国から国としての権利を根こそぎ奪っていった」

マグノスは血走った目で続ける。

「貴様等に分かるか？武力を背中にちらつかせながら笑顔で『平等な話し合い』をとぬかす奴らに私達がどれだけの屈辱を味わったか！国民の為にと奴らに頭を下げ続けた我らの血反吐を吐くほどに虫酸が走った想いを！」

マグノスは一気に吐き捨てるようにそう言うと、思い出したかのように荒く呼吸をする。

「……貴様の目的はなんなんだ」

「ん？」

「貴様の目的はどこにあると聞いている」

ジェドの怒気を含んだ言葉に、マグノスは少し眉をしかめる。

「アルバレオ帝国を我らの前に跪かせる。我らが味わったよりも幾倍もの屈辱を味あわせてやる」

「そんな事はさせない。……そのような暴挙を我々が黙って見過ごすとでも」

ザシュッ。

「ぐぅっ……！」

ジェド脇腹に傷が生まれ、血が流れ出る。

「今の私には力がある。万余の兵に値すると言われる貴様ら魔術兵

団の師団長を軽くねじ伏せるだけの力がな」

マグノスは冷徹な目でジェドを見下す。

「頭さえ潰してしまえばどんなに屈強な組織も瓦解する。魔術兵団の師団長は総帥のマクスを含めても１１人。今その内３人が重傷を負っている。残り８人……造作もないわ」

「それは、どうかな……」

アーガイルが口元に笑みを浮かべながらマグノスを睨む。

「うちの師団長は全員強い上に曲者しかいない。お前のような力を信じ切っている奴には負けないさ……」

ドシュッ。

「がっ……！」

「黙れ。死にゆく者のそのような言葉、苛立ちしか覚えぬ」

新たな傷に悶えるアーガイルを一瞥し、マグノスは再びジェドに視線を戻す。

「さて、能書きはこの辺りにしようか。そろそろ式典も終わりだ」

バルコニーの方からは民衆の歓声が聞こえる。

「待て……。フィアナ様には手を出させる訳にはいかない……」

ジェドは立ち上がろうとする。

「無理はしない方が身の為だぞ」

「……！」

立ち上がりかけたジェドの体は何かに押さえ付けられるように地面に叩きつけられる。

「貴様はそこでおとなしく式典のフィナーレを見届けるがいいさ」

「なん、だと……」

次の瞬間、バルコニー側の窓に掛けられていたカーテンが一斉に開かれる。

「この広場は入り口が一ヶ所しかない上に周りは深い堀と鉄柵に囲まれている」

マグノスはゆっくりと歩きながら続ける。

「しかも門は堅く閉ざされてしまったら、中の人間達は袋の鼠状態だな」

「何、を……」

「今広場の真ん中で爆発でも起こったら誰も助からない、そうは思わないか？」

「!?……まさか!」

ジェドの驚愕に染まった表情をマグノスは満足そうに見る。

「だが、今日まで広場周辺やバルコニーは特に入念に調べた……。そんな爆弾などは……」

「誰が地上に爆弾を仕掛けたと言った?」

「……どういう、事だ……」

「コルディオ」

マグノスが声を掛けると、コルディオは部屋の入り口に向かっていく。

「爆弾という考えが真っ先に浮かんだのは誉めてやろう。私の力では上手く事を運べないからな」

「貴様……どこに爆弾を……」

「そう焦るな。今タネを明かしてやる」

マグノスがそう言うと、入り口からコルディオと、もう一人入ってきた。

「な……んで……!?」

そのもう一人の姿に、クリシアは驚愕する。

「我らが協力者、ルルチェル・サンクヒルだ」

メイド服姿の小柄な少女。ルルチェルは、張り付けたような堅い表情で部屋の入り口に立つ。

「ルルチェル……なんであんたが……。協力者って……」

クリシアは目の前に平然と立ち尽くす仲間の姿に、うまく言葉を紡げないでいた。

「彼女無しでは今回の計画は成り立たなかったであろう。コルディオ、ご苦労だった」

「いえいえ、簡単な仕事でしたよ。こいつが協力的なお陰で」

コルディオはルルチェルの肩を掴む。

「なんだってのよ……ルルチェル……！」

ルルチェルの様子をじっと見ていたクリシアは、堰を切ったかのように叫びだす。

「なんであんた平然としてられんのよ！皆血を流して倒れてるっていうのに！ねぇ！こっち見なさいよ！」

クリシアの叫びにも、ルルチェルは目を向けさえしない。

「……ふざけんじゃないわよ！あんた、私達を騙してたっていうの！1年も私達の近くで笑ったり泣いたり、辛い事も一緒に乗り越えて！……全部嘘だったっていうの……！」

クリシアの頬を涙が伝う。

しかし、ルルチェルは微動だにしない。

「うるせぇなぁ……！ああ！お友達に裏切られて悲しさのあまりに泣いちゃいましたってかぁ？そういう悲劇ぶってんの見てると虫酸が走るんだよ！」

コルディオはクリシアの顔面を蹴り付ける。

「がっ……はっ……！」

クリシアの口から血が吐き出される。しかし、そんな事はお構いなしだと言わんばかりにコルディオは何度もクリシアの頭や背中を踏み付ける。

「俺はお前らに全部奪われたんだよ！積み上げてきた全部をなぁ！悲劇だってんならよっぽど俺の方が悲劇だよ！」

「悪党の、悲劇なんて……喜劇にしかならないわよ……」

「あんだとこのクソ野郎がぁ！」

コルディオは更にクリシアに攻撃を加えようとする。

「その辺りにしておけ、コルディオ。まだ貴様のお楽しみには早い」

マグノスはそう言ってコルディオを制する。

「ちっ……！」

コルディオは渋々といった感じに持ち上げた足を下ろす。

「……さて、第十師団長ジェミニ・ランドガルト。ルルチェルの直属の上司たるあなたにお聞きします」

「……何を」

「私がルルチェルを協力者として今回の計画に組み込んだ訳が、分かりますかな？」

ジェミニはその問いに眉をしかめる。

「彼女は魔術兵団の中でも希少な能力を持っている。……ああ、これではヒントというよりほぼ正解になってしまいますな」

「ルルチェルの……能力？」

「あなたもよく知っているだろうが、彼女は『黒丸』を操る力を持っている」

マグノスは部屋の人間全員に伝えるような声量で続ける。

「『黒丸』。名は体を表すその黒い玉は、魔力によって制御される。魔力をエネルギーに変換し中に注ぐ事で同じ黒丸でも全く違う効果を生み出す事が出来るようになる」

マグノスは続ける。

「通常は魔力を火薬の様なエネルギーに変換しそのまま爆弾と同じ用途で使うというのが最もポピュラーらしいが、応用次第では、侵入者撃退用の罠という使い道もあるのだとか。まぁ、その辺りはあなた方の方が詳しいかな？」

「ルルチェルの黒丸を、どこに仕掛けたというのですか……！」

ジェミニはルルチェルとマグノス、その両方を睨みながら言う。

「まぁまぁ、せっかくのタネ明かしだそんなに急かすものではない」

マグノスはそう言った上で話を再開する。

「黒丸、この兵器の注目すべき点はあらゆる用途への汎用性にある。それは今挙げた中身の容易な互換性、そして魔力によって制御できるという点にある」

「……」

ジェミニ達はじっとマグノスの話を聞く。

「制御を行う術者さえ健在ならば黒丸を一日や二日空中に待機させておくことはそんなに難しい事ではないらしい」

そう言ってマグノスはバルコニー側の窓から空を眺める。

「今日は曇り空か。ちょうど宮殿の上の辺りに雲が集まっている」

「貴様……まさか……！」

「気付いたかな？いや、ここまで言って気付かない方がどうかしてるかな？そう、あの雲は黒丸で出現させたものだ。彼女には苦労をかけたよ、君達に気付かれない様にするためにね」

マグノスはルルチェルに目を向ける。

「ルルチェル、『アレ』を皆にお披露目といこう」

マグノスの言葉にルルチェルは小さく頷く。

すると、次の瞬間、上空の雲を破るように、巨大な『アレ』は姿を現した。

「あんなの落としたら……ルルチェル！！」

クリシアは叫ぶようにその名を呼ぶ。しかしルルチェルは反応しない。

「通常は手の平に収まるサイズだが、今回はその一万倍の物を用意した」

マグノスは目を見開き口元に歪んだ笑みを浮かべる。

「は、ははは！なんという素晴らしき光景だ！まるで黒い太陽ではないか！」

マグノスは声高らかに言う。

「マグノス……！あの大きさの物を落とせば我々はおろかモンフェルトの民衆すらただでは済まないぞ……！」

ジェドは叫ぶ。しかし、マグノスは歪んだ笑みを崩さない。

「それでいいのだよ。ジェド・ナイアン」

「何、だと……！」

「革命に犠牲は必須だ。いや、犠牲無しには革命は成り立たない！」

「何を……狂ったか、ホーク・マグノス！」

「ははははは！狂ってなどいない！よく考えてみろ、ジェド・ナイアン。黒丸とは帝国軍固有の技術だ。となればもしその黒丸で人々が殺されたとしたら、民衆の哀しみと怒りの矛先はどこを向けられると思う？」

広場では異変に気付き始めた民衆が騒ぎ始めていた。

「民衆の怒りは我らの力となる！革命を為すための血肉となるのだ！これ以上の名誉はあるまい！」

「名誉……だと」

ジェドは確かな怒りをもってその言葉を口にする。

「んん？」

「貴様のしようとしている事は自分の、自分自身が受けた傷に対する仕返しでしかない。そこには国と民衆も存在しない、あるのは貴様の勝手なエゴイズムに染まった腐り切った正義にも成り切れてい

ない正義だけだ！」

ジェドは刀を床に突き立て、ゆっくりと立ち上がる。

「その偽りで固められた正義、この一刀で断ち切ってくれる！」

ジェドは鞘から黒く光る刀身を抜き、マグノスに向ける。

「貴様……今の貴様は私に生かされているのだという事が分からないか？」

マグノスは不愉快そうに口の端を曲げながら言う。

「黙れ……！貴様にこれ以上仲間を、帝国を傷つけさせる訳にはいかない！」

ジェドはマグノスに向かって踏み込む。が、その勢いはジェドの背中からあがる血飛沫によりマグノスに届かぬまま体は床に倒れこむ。

「しぶとい奴め……！おい、コルディオ。移動するぞ。ここにいては我々も巻き込まれる」

「こいつら殺さなくていいのか？」

「ほっといてももう動ける者などいないだろう」

「分かったよ。おい、ルルチェル。行くぞ！」

コルディオはルルチェルを促す。

「……」

しかし、ルルチェルは無反応のまま動かない。

「あ？おい、ルルチェル。ふざけてんじゃねぇ、さっさと行くぞ！」

「……です」

「ああ？なんだって？」

ルルチェルの口から漏れるか細い声。

「イヤ……です……」

その一言は、ルルチェルの頬を伝う一縷の涙と共に吐き出された。

［41］黒い太陽（後書き）

連敗中です。

日曜夜18時30分の番組のエンディングのアレに。

では次回。

∞ルルチェル・サンクヒル前編（前書き）

まさかのルルチェル過去編。

しかも前編。

ヒァウィゴー！

∞ルルチェル・サンクヒル前編

私の名前はルルチェル・サンクヒル。

貧しい家に生まれた私は、１３の時に借金返済の為、ある貴族の家にメイドとして売り飛ばされた。

フォレンツィオ家。当主夫妻が旅先での不慮の事故で亡くなり、若い一人息子が跡を継いだばかり、というその家で、私は両親の為に必死に働いた。

もし逃げ出そうものならば両親に何をされるか分からない。脅迫観念にも似たそんな気持ちが私を支えていた。

この家の当主、コルディオ・フォレンツィオ様に呼ばれた時もそうでした。

「おい、ルルチェル！靴が磨けていないぞ！」

「も、申し訳ございません……！食器の後片付けに手間取りまして……」

玄関先で私を怒鳴り付けるように呼んだコルディオ様に私は必死に謝った。

「言い訳は聞きたくない！」

「は、はい……す、すぐにお磨き致します」

私はそう言って慌てて靴磨きを取りに行こうとしました。

「おい、どこに行く」

「く、靴磨きを取りに行って参ります」

「誰がそんなもの使っていいと言った？」

「……は」

私にはコルディオ様の言う言葉の意味が理解できませんでした。

「道具なんて取りに行ってる時間が惜しい。舐めろ」

「え……」

それは、さも当たり前と言わんばかりの命令でした。

「聞こえなかったか？お前の舌で舐め取れって言ったんだ」

「え……いえ、でも……」

「まさか出来ないとでも言うつもりか？主人の命令が……」

「い、いえ……！、やらせていただきます」

この人に逆らえば私ばかりか私の両親にまでその矛先は向いてくるだろう。それだけは避けなければならなかった。

「では早くしろ、時間が無いんだ」

コルディオ様の口の端が不気味に歪む。この人はこういう事を本当に楽しむ人だった。

私はコルディオ様の足元に跪き、そのわずかに汚れが付着した靴に、自分の下を触れる。

「うっ……」

苦い、気持ち悪い。すぐにでもやめたかった。しかし、やめればコルディオ様のお怒りが容赦なく下る。私は必死の思いで続けた。

およそ人の味覚から外れた味に、私は吐き気すら催したが、なんとか最後までやりきった。

「ふん。やらされたくなければ自分の仕事くらいちゃんと全うする事だな」

コルディオ様は私には一瞥もくれずに、出掛けていった。

それを見送った私は、腹の底から沸き上がってくる吐き気を我慢できず、外の水飲み場で吐いてしまった。

苦しかった。でも耐えるしかない。私は少しの間水飲み場で休んでいた。

が、そんな時間が私に与えられるはずもない。

バシャァッ。という音と共に私の頭から大量の水が掛けられる。

「っ……かはっ……えほ……っ」

私は顔にかかった水を飲んでしまい、むせてしまう。

「あら、ごめんなさい。気分が優れない様だったので良かれと思ってやったんですけど」

人を見下したような言い方。実際には面白半分で水を掛けたのだろう。

屋敷のメイド長、リズーリア様は持っていた桶を地面に乱暴に投げる。

「こんなところでサボってる暇なんかあなたには無いはずよ。あなたなんか人の倍働いてようやく与えられる給金に手が届くのだから」

こちらが本心だ。人としての私を心配する気など全くないのであろう。

「洗濯物を取り込んでアイロン掛けまでやっておきなさい。もし少しでも遅れたら減棒だからね」

メイド長は冷たく言い放つと、私の返事を待たずにズンズンと力強い足取りで屋敷へ戻っていく。

「……」

私は濡れた頭のまま屋敷には戻れないと、なにか手近で拭くものを探す。

すると、どこに隠れていたのか物陰から同じメイドのサトリナが手に大きめのハンカチを持って現れる。

「これ使って、ルルチェル」

サトリナは同情と心配の入り混じった複雑な笑みを浮かべながら、ハンカチを差し出してくる。

「……いいの？」

「いいの。そのままじゃ屋敷に戻れないでしょ。それに頭濡らしたままじゃ風邪ひいちゃうよ」

サトリナはずずいと私にハンカチを押しつけてくる。

「あ……ありがとう」

私は半ば強引に渡されたそれで、濡れた髪を拭いていく。

サトリナ・ビアン。私と同じように借金の埋め合わせで売り飛ばされてきた一人。でんなに辛くてもいつも笑顔で、弱音を吐くことは絶対に無い、強い子。

そんなサトリナが、急に申し訳なさそうに目を伏せる

「……いっつもごめんね。ルルチェル」

「え？な、なにが……？」

なんで謝られたのか分からない私は少し動揺する。

「いつもコルディオ様やリズーリア様にひどい目に合わされている時に助けてあげられなくてさ、ごめん」

「そんな……。サトリナだって……」

サトリナだってコルディオ様やリズーリア様に理不尽な暴力を受けているはず。私はそう言いたかった。

「お互い大変だけど頑張ろうね！」

サトリナは私の手をぎゅっと握り、屈託の無い笑顔を向けてくる。

「あ……うん！」

私はその笑顔が嬉しくて、気付けばサトリナの手を握り返していた。

「あ！私廊下の掃除まだやってなかった！じゃあね、ルルチェル！また後で！」

言うが早いかサトリナは吹き抜ける風の早さで屋敷へ戻っていった。

「私も戻ろう」

サトリナが渡してくれたハンカチを握り、少し元気になった私は屋敷へ戻っていった。

メイドとしての基本的な仕事は慣れればそう辛い物ではなかった。

ただ、私達はあくまで立場の弱いメイド。メイド長であるリズーリ

ア様は自分の立場の誇示の為に度々私達を利用した。

「ちょっとルルチェル！ここにほこりが残っているわよ！」

リズーリアは指に付着したわずかな汚れをさも自分だから見つけられたと言わんばかりに高々と見せ付けてくる。

「も、申し訳ありません……」

私は急いで向かい、その場所を掃除する。

「全く……。掃除も満足に出来ないの？お前は」

リズーリア様は私を完全に見下した口調で言う。

私が掃除が出来ないんじゃない。あなたがひたすら私達の仕事の粗探しを行っているからだというのは、思っても口に出すことは間違っても出来なかった。

私には、逆らう勇気は無かった。

学んだのだ。私には自分の意見など持つ資格すらない。

ひたすらに力のある人の考えを窺い続けて生きるしかない。

私は、そう生きる事しか選択出来なかった。

その後は、表面上は平和な日々が過ぎていきました。私の心の傷は増えていきましたが、サトリナのお陰で私は生きる事を放棄せずに済みました。

しかし、私がこの屋敷に来て2年が過ぎた頃、ある事件が起きました。

ある日の昼下がり、私は土砂降りが降り続く外を脇目に見ながら、廊下を掃除していました。

リズーリア様も現れず特に問題なく掃除を終えた。

「今日は外の掃除はできないかな?」

そう思って2階の窓から屋敷裏の庭を見たとき、その隅の方に『それ』を見つけました。

「……え?」

最初は大きなゴミかなにかだと思ったそれが何か分かった瞬間、私は無意識に駆け出していた。

私は雨に濡れる事も構わず外に飛び出し、『それ』に近付いた。

「サトリナ!?」

『それ』の正体、それは全身傷とアザだらけで力なく倒れていたサトリナの姿だった。

「サトリナ!サトリナ!どうしたの、何があったの!?」

私がサトリナの体を揺すると、サトリナはうっすらとまぶたを開い

た。

「ルル、チェル……？」

弱々しいその声にいつもの元気なサトリナはどこにもいなかった。

「大丈夫？とにかく中へ……」

私はサトリナを背負って屋敷の中へ行こうとしました。

「そいつは中に入れちゃ駄目だよ」

「リズーリア様……？」

屋敷の入り口にはリズーリア様が私達を睨み付けながら入り口を塞いでいた。

「ど、どうしてですか……？サトリナは怪我をしていてしかもこんな雨にうたれて……早く処置をしてあげないと……」

私はリズーリア様の睨みに少し怯みましたが、しかしサトリナには一刻も早く処置が必要だとこの一点だけは引けませんでした。

「これは罰なんだよ。そいつにとってのね」

リズーリア様は私の背中で今にも途切れそうな弱い呼吸を続けるサトリナを指して言う。

「罰、ですか……？」

「そう。そいつはね、コルディオ様の所有していた金貨を盗んだのさ」

「え……？」

「まったく。これだから貧相な家の出は困るんだよ。口ではきれいな事ぬかしといていざ金を目の前にすると肉を放られた猛禽類の如く醜く群がるんだからねぇ」

リズーリア様はそれこそ汚らしい物を見るかのように私達を睨む。

「そ、そんな……さ、サトリナがやったという証拠はあるんですか？」

気が付けば私はそう聞いていた。いつもならこんな反抗的な質問は絶対にしない。しかし数少ない友人の為に、私は聞いていた。

「は？なんだいあんた、こんなのを庇おうってのかい。貧相な奴は貧相な奴の味方なんだね。美しいこった」

「こ、答えて下さい……。本当にサトリナがやったんですか？」

「そうだよ。コルディオ様が自室を離れていた時間に、そいつだけが何をしていたのか誰も知らないんだからね」

「……」

「なんだいその反抗的な目は？なんならあんたら二人地下にぶちこんでやってもいいんだよ」

リズーリア様はそう言って私を脅す。しかし、私はどうしてもサトリナを守りたかった。

「ぬ、盗んだっていう金貨は出てきたんですか……？」

「まだ出てきてないがね。まぁそいつがどっかに隠したんだろうね。どうにも口は割らなかったがね」

やはりサトリナの傷は金貨を盗んだ疑いをかけられて拷問された際の傷なのだろう。

「とにかくそいつをこっから中に入れる訳にはいかないよ。入りたきゃ地下からでも入りな」

リズーリア様はそう言い放つと、屋敷の中に入り鍵を閉めてしまう。

「……なんで」

私達はこうなってしまうんだろう。そんなに生まれとは大事なんだろうか。お金のある家に生まれた人間と私達の間にはどれだけの差があるというのだろう。

私は暗い気持ちに包まれながら、とにかく地下でもいいから雨を凌げれば、と地下室の入り口を目指した。

地下室と言ってもそこは人が居住する為のスペースではなく、いらなくなった物や今は使わない物がある物置みたいな場所だった。

でも今の私達にはそれで十分だった。

私は平らなスペースに布を敷き、サトリナを寝かせる。
更に何枚か大きめの布を用意する。物置というのはこの場合非常に都合が良かった。

「サトリナ、ちょっとごめんね？」

私は手際よくサトリナのメイド服を脱がす。濡れた服のままでは病気になってしまう。

「っ！？」

肌着だけになったサトリナの体。そこにはメイド服の上からでは見えなかった無数の傷が姿を現した。

「……ごめんね」

なぜだか分からないが突然口をついて出た謝罪の言葉。私は涙が出るのを堪えて、サトリナの体に布を掛ける。

「ルルチェル……」

サトリナの目が開き、私の名を呼ぶ。

「サトリナ？大丈夫？」

「ごめんね……迷惑掛けちゃって……」

「サトリナ……一つだけ聞いてもいい？」

「何……？」

「本当にサトリナが盗んだの？」

私はサトリナを信頼している。しかし、その質問の答えを聞くのは少し怖い部分もあった。

「……私じゃない」

サトリナは私の目を見てはっきりそう答えてくれた。

「私は、あの時……リズーリア様に頼まれて、裏庭の掃除をしていたの……」

サトリナは苦しそうな呼吸の中でそれでも必死に自分の身に起こった出来事を話してくれた。

「雨避けの外套を付けて掃除してさ、あそこ滅多に人が寄り付かないから少し寂しかったりもしたんだけど……。そしたら突然リズーリア様が私の所に来たの。すごい怒ってた」

「うん、それで……？」

「で、言われるがまま屋敷に戻ったら、いきなり金貨を盗んだ犯人扱いされてさ……。こっぴどい目に逢っちゃった」

サトリナは参ったよと苦しそうに笑みを浮かべる。

「なんで……リズーリア様は何も言わなかったの？」

「……私に掃除なんか頼んだ覚えないってさ。私に味方はいないのよ」

「そんな……」

私は悔しかった。どうしてここまでうまくいかないのかと。人質同然の扱いで売り飛ばされて理不尽な労働に服している我々になぜ犯罪の濡れ衣が着せられねばならないのだ。

「……くしゅっ」

サトリナが寒そうに体を震わせる。

「サトリナ、大丈夫？……ってすごい熱」

サトリナは苦しそうに顔を歪める。

何か体を暖める物が欲しい。でもそんな物はこの地下室には無かった。

「……」

私は着ているメイド服を脱ぎ、肌着の状態になりサトリナに寄り添うように横になる。

「ルルチェル……」

「こうしていれば少しは違うはずだから」

私はサトリナの体をぎゅうと抱き締める。

「ルルチェルは……私の事信じてくれるの？」

「信じてる。私達友達でしょ？」

私は精一杯力強く笑った。

サトリナはボロボロと涙を流して泣き始めた。

私はただじっとその震える体を抱き締めていた。

その頃屋敷内では、あからさまに不機嫌なコルディオが苛立ちを隠そうとせずに辺りをウロウロしていた。

メイド長リズーリアは屋敷の入り口付近に立っていた。

「サトリナは怪我だらけの体。直に泣いて命乞いをしてくるに違いない」

それがリズーリアの考えだった。

「しかしまぁこんな簡単にばれるとはねぇ」

そう言ってリズーリアはメイド服のポケットに手を入れある物の存在を確かめる。

「おい、リズーリア！奴らはまだか！」

コルディオは怒鳴りながらリズーリアの元にやってくる。

「はっ、直に現れるかと」

「もう待ってられん！今すぐにあの娘をもう一度私の前に連れてこい！」

「よ、宜しいのですか？」

「私の金貨が誰かの手に渡るなど考えただけでも虫酸が走る。早くしろ！」

「はっ……」

リズーリアはサトリナを探しに行こうとする。

その時だった。

ドンドンと屋敷の扉が叩かれる。

「こんな時に……おい、余程大事な様でもないかぎりは即刻追い払え」

コルディオは入り口の近くにいたメイドに命じる。

「は、はい」

メイドは扉に手を掛け、少しだけ開ける。

すると、外にいたその人物達は、扉が開いたのをいいことにぞろぞろと屋敷内に侵入した。その数６人。

全員雨避けの外套を着込んでいる為、顔や服装は全く分からなかった。

「誰だ！ここをフィレンツィオ家の屋敷だと知っての行いか！」

コルディオが怒鳴ると、謎の集団の先頭に立っていた人物が頭の外套を取りながら、応える。

「これは失礼。まだご貴族様のお屋敷でしたね」

外套を取って顔と鮮やかな赤い髪を晒したその女性は、コルディオを睨みつけた。

∞ルルチェル・サンクヒル前編（後書き）

そして後半へと続く。

∞ルルチェル・サンクヒル後編（前書き）

後編です。

はいどうぞ！

∞ルルチェル・サンクヒル後編

赤い髪の女は着ていた外套を完全に脱ぎ捨て、メイド服姿になる。

「な、なんだ貴様は……！」

女の服装が意外だったのかコルディオは驚き混じりの声を出す。

「申し遅れました。私、アルバレオ帝国軍魔術兵団第十師団師団長補佐、兼帝室直轄使用人部隊副隊長、ジェミニ・ランドガルトと申します」

ジェミニは言いながらコルディオを睨み付ける。

「コルディオ・フィレンツィオ。婦女暴行、傷害、横領、脱税、就労管理法違反の容疑で拘束致します」

ジェミニが高々と宣言すると、外套をまとったままの後の5人もそれを脱ぎ、着こなされたメイド服姿を披露していく。

「クリシア、あなたは私と共にフィレンツィオの身柄を確保。ハラキアは3人を連れて屋敷内の人間を確保、もしくは保護」

「分かりました」

ハラキアは指示を受けるとすぐに他のメイド達と共に屋敷内へ散っていった。

「さて、行きますよクリシア」

「リョーカイでーす」

クリシアは軽快に返事をすると、トンとジャンプして、軽々と2階の高さに登る。

「なっ……！」

一気にガン前に迫られたコルディオは咄嗟に懐へ手を伸ばし、その手に拳銃を握る。

「くそ！」

コルディオは銃口をクリシアに向け引き金を引く。

放たれた弾丸はクリシアの顔のわずかに横に逸れたが、それによりクリシアはわずかに体のバランスを崩す。

コルディオはその隙を突いて逃げ出す。

「あ！待ちなさい！」

クリシアはコルディオを追う。

「クリシアなら取り逃がしはしないでしょう」

ジェミニは目の前に立ち尽くすリズーリアに近づく。

「さて、リズーリア・フォルティモシア」

「な、なんでございましょうか……？」

警戒するリズーリアの両腕に、ジェミニは素早く手錠をはめる。

「あなたも就労管理法違反で拘束致します」

「え！？な、なぜ私が！」

「それはあなた自身がよく知っておいでのはず。己が部下に与えた仕打ちの数々は」

「い、いや、私は……」

リズーリアはジェミニに抵抗するように暴れる。するとその拍子にリズーリアのメイド服のポケットからするりと何かが落ちる。

「ん？これは……」

ジェミニはそれを拾う。それはフィレンツィオの家紋が彫られた金貨だった。

「！？」

リズーリアの驚愕の表情を見て、ジェミニは眼光を鋭くする。

「これは、更に罪が加わるかもしれませんね」

そこへ、クリシアが戻ってくる。

「クリシア、コルディオは？」

「いえ、自分の部屋に入ったのまでは見たんですが、部屋の中から忽然と姿を消しちゃったんです」

「なんですって……」

……。

……。

その頃、地下室では、ルルチェルとサトリナが寄り添い体を暖めていた。

しかし、地下室はただでさえ気温が低く、人肌では限界なのか、さっきからサトリナの表情も段々と苦しげなものに変化していった。

「サトリナ……」

どうにか屋敷内へ入れてもらい、薬が欲しい。しかし頭を下げたところで入れてもらえるか。ルルチェルは考え続けていた。

いや、入れてもらうしかない。友人を助ける為に。

ルルチェルはそう決意すると、サトリナから離れる。

「ごめんね、サトリナ。すぐに戻ってくるから」

ルルチェルの言葉にサトリナはわずかに頷く。

ルルチェルはあまり乾いてはいないメイド服を取り、着替え始める。
その時、地下室の扉が何者かによって開け放たれる。
「え？」
そこにいたのはルルチェルにとってあまりに意外な人物だった。
「はぁ……はぁ……」
雨に濡れて髪も乱れた主人、コルディオ・フィレンツィオ。が拳銃を握り入り口に立っていた。
「こんな時の為に隠し通路を作っておいて良かった……。ん、お前らは……」
コルディオはルルチェルに目を向け、そして不気味に口元を歪ませる。
「こんなところにいたのかぁ……ちょうどいい。私と来てもらおうか」
狂気。その時のコルディオはルルチェルの目にそう映った。
コルディオは奥で横になっているサトリナに向かってゆく。
「や、やめてください！サトリナはひどい熱なんです！」
「あぁ！貧乏メイドが俺に盾突こうってのか……？いい度胸だ！」

コルディオは握った拳銃の銃身でルルチェルを殴る。

「ぐっ……！」

ルルチェルはその場に倒れそうになるが、踏みとどまりコルディオの前に立ちふさがる。

「おいおい……。お前本格的に死にたいのか？」

血走った目をこれでもかと開いてルルチェルを睨むコルディオ。

「サトリナは私の友達です。勝手な事はさせません」

「ともだちぃ～？……アーッハッハッハッハッハッ！奴隷同士の美しい友情ってかぁ！お前知ってるか、そういう悲劇ぶった主人公は大概なぁ……」

再び銃口がルルチェルに向けられる。

「物語の終わりに死んじまうんだよ！」

引き金に力が込められた瞬間、ルルチェルはずっと握っていた左手から埃混じりの砂をコルディオの顔目がけて投げ付ける。

「ぐぁっ！何しやがるこのクソチビがぁ！」

さっき倒れかけた時に咄嗟に握っといたのが役に立った、とルルチェルは怯んだコルディオの握られた拳銃に向かい飛び掛かる。

「くそ！離れろ！ぶっ殺すぞ！」

パンッ。と乾いた音が一発地下室に響き渡る。

銃声。しかしその一発は天井にのみ命中し、誰の体にも傷は付けなかった。

「っらぁ！」

コルディオは投げ飛ばすようにルルチェルの体を振り払う。

「っぅ……！」

地面に打ち付けられたルルチェルは小さく呻く。

「はぁ……はぁ……。てこずらせやがって……」

コルディオの銃はルルチェルの方を向いている。

もう避けられない。ルルチェルはじっと目を閉じる。

もう一発、乾いた発砲音が響いた瞬間、ルルチェルの体は何かに引き寄せられた。

「てめぇ……」

コルディオの苦々しい声。ルルチェルは自分の体に痛みが生じた部分が無いことを確認した上で、恐る恐る目を開く。

「え……？」

それはルルチェルにとって驚くしかない状況であった。

ルルチェルの体見知らぬ赤い髪の女性に委ねられ、その女性は腕から出血していた。

「そんなクズ庇って軍も落ちたなぁ、おい！」

「口を慎みなさい。コルディオ・フィレンツィオ」

赤い髪の女性は、鋭い眼でコルディオを睨む。

「幼く純粋な娘たちを己の権力の赴くままに弄び傷つけたその所業。許されると思わないことです」

「うるせぇ！ランドガルトのお嬢様が何を言う！今ここで死ねやぁ！」

コルディオが引き金に手を掛けた瞬間、コルディオの顔が炎に包まれ、ゆっくりと後ろに倒れていくのがルルチェルに見えた。

ルルチェルが不安そうにその様子を見ていると、女性はルルチェルを立たせながら、

「大丈夫。命までは取ってはいません」

と、どこか哀しげな表情で言った。

そしてそれは同時に全ての終わりを示していた。

フィレンツィオ家は実質無くなり、コルディオは裁判を行うため中央に連れていかれた。

これはルルチェルの辛いメイド生活の終わりを示していた。

しかし、同時に始まった事がある。

地下室でルルチェルを助けてくれた赤い髪の女性、ジェミニが、ルルチェルを使用人部隊に勧誘したのだ。

ルルチェルは使用人部隊への入隊を決意。メイドとして、軍人として新たな一歩を踏み出した。

「ジェミニ様は恩人です。我が家の借金を全て肩代わりしてくれた上、『返すのは出世払いでいい』と言って下さって、ジェミニ様はそれ以来借金に関しては一度も口にされてはおりません」

「入隊してから、友達、というより仲間、もできました。ハラキアやクリシア。皆いい人達です」

「訓練や仕事は大変ですが、でも充実した楽しい毎日を過ごしていました……」

「あの時までは……」

……。

……。

フィアナ様のお供としてモンフェルトに滞在して数日が経過したあ

る日の事でした。

あの奇妙な侵入者との戦いがあった日の夜でした。

私はジェミニ様の元へ急いでました。

そして、通路の角を曲がろうとさた瞬間、『それ』を見つけて私は心臓が止まりそうになりました。

『あの男だ』

私の中の危険を知らせる何かがそう告げた。

フードを被っていたがあの声と雰囲気は間違いなくあの男のものだ。

なぜ？なぜあの男がここにいる？

私の中をパニックになりそうな程多くの疑問符が飛び交う。

そして気付いた時にはあの男はどこかへ消えていた。私は心を静めて、改めてジェミニ様の元へと向かった。

「久しぶりだなぁ、ルルチェル」

背中を吹雪のような寒気が襲う。私はその場で固まってしまう。

「まさか忘れた訳じゃぁねぇよなぁ、俺の顔をよ。と言っても今はこんな顔だがな」

あの男、コルディオは私の頭をポンポンと叩きながら正面に回って

くる。

「地下室で殺しかけて以来だよな。ま、今となっちゃそれが役に立つわけだが」

「……なぜ、あなたがここに」

私は火傷にまみれたコルディオの顔を睨み付ける。

「俺の事なんかいいんだよ。それよりもルルチェル、第三地区の両親は元気か？」

その問いを聞いた瞬間、私は全身の血の気が引いた気がした。

私の両親は私の入隊と同時に東の村から帝都に居を移した。この男は既に獄中の身。知る手立てはどこにもないはず。

だが、奴は知っている。脅されていると気付くのに時間は掛からなかった。

「こんな遠くまで来ちゃったら心配だろ。なぁ、ルルチェル」

「何を、言いたいのですか……？」

「んー？お前の協力が欲しいんだよ。さる人からの命令でな」

「私の、協力……？」

「と言ってま素直にお前が協力してくれるとは限らないだろうからな。ってなわけでほい」

コルディオは軽い口調でそう言うと、私の額に何かを当ててくる。

「何を……っ……！」

振り払おうとしたが、体が思うように動かない。

「おほぅ！効果は抜群だな。親の事で脅されちゃ動揺もするってか」

そこで初めて私はコルディオが私に何をしたのかが分かった。

催眠術。両親の事を引き合いに出したのも術に掛かりやすくするためだろう。

魔法石に込められたエネルギーを直接流し込み私の自我を封じ、指示どおりに動くしかない、人形にされてしまった。

「さぁて、ルルチェル。動くのは明日だが、準備が必要だ。行こうか」

コルディオは私を促す。

「……」

私は小さく頷きコルディオの後に続く。

私はあの巨大な黒丸を作り出し、空に浮かべた。

そして、翌日、悲劇は起きたのです。

∞ルルチェル・サンクヒル後編（後書き）

次回本編に戻ります。

［４２］やれば出来る男と落ち行く太陽と（前書き）

買い物に行く。
←
帰ってくる。
←
こたつに入りブレイクタイムを決め込む。
←
決め込んだ瞬間買い忘れに気付く。
←
へこむ。

あるある。４２話でござんす。

［42］やれば出来る男と落ち行く太陽と

「イヤ……だと」

コルディオはルルチェルを睨む。

「私はここを絶対に動かない。そう、すればあなた達もここを動く訳にはいかなくなる……だから私は動かない」

ルルチェルは涙を流しながらそう言う。

「黒丸は私にしか制御できない。今落とせばあなた達だって無事じゃすまない……」

ルルチェルは体は微動だにしないが、はっきりと喋り続ける。

「おい！催眠はどうなってんだよ！普通に喋れてんじゃねぇか！動かねぇしよ」

コルディオはマグノスに向かって怒鳴る。

「貴様の導入が甘かったのだろう。体は抵抗しきれていない様だからそのまま運んでしまえばいい」

マグノスは冷静に言い放つ。

「運ぶって……誰が？」

「お前に決まっているだろう」

「……マジかよ」

コルディオは渋々といった感じでルルチェルに近付いていく。

「おら、てめぇらと心中なんてまっぴらだからな。おとなしく来い」

コルディオがルルチェルを掴もうとすると、ルルチェルは文字通り必死にそれに抗っていた。

「やめて！あなた達の思い通りにはさせない！」

「くそが！おとなしくしやがれ！」

「私は私の手で守りたいものを守る！だから、動かない！」

ルルチェルは叫ぶ。必死に、ただただ必死に。

「仕方ないな。ひとまず気絶させるか」

マグノスはコルディオと揉み合いになっているルルチェルに近づく。

その時だった。

「これは、どういうことですか……？」

バルコニー側の扉が開き、フィアナが驚愕と衝撃を一度に受けた顔をして立っていた。

「フィアナ様……」

ジェドは傷の痛みに顔を歪ませながらも、フィアナの方を見る。

「ジェド！一体これは……！？」

フィアナはジェドに駆け寄る。

「フィアナ様……ここは、危険です。……早く逃げて下さい」

ジェドは力を振り絞るようにそう言った。

「どうしてこんなことに……」

「やれやれ、まだあなたの出番ではないのだが……せっかちなお姫様だ」

マグノスは心底呆れ果てたといった表情でフィアナを見る。

「バルコニーでおとなしくしていただければこんな惨劇は見ずに済んだでしょうに」

マグノスはゆっくりと、しかし確実にフィアナに歩み寄る。

「あなたが……皆を傷つけたのですか？」

フィアナは真っすぐにその目をマグノスに向ける。

「その通りです。そしてあなたも同じ運命を辿ってもらいます」

「やめろ……！」

ジェドはフィアナを庇うように抱き寄せる。

「美しいですなぁ。では美しいついでにあなた方二人まとめて葬るとしましょうか」

マグノスの目に確かな殺意が宿る。

と同時に廊下側の扉が勢い良く蹴破られる。

「頼もう！」

焦げたジーパンとシャツに身を包んだ男、桐原慎吾の登場である。

……。

……。

俺はとりあえず勢い良く部屋に入った瞬間、その異様としか言い様の無い光景に息を呑んだ。

「なんだよこれ……」

部屋にいるほとんどの人間が血を流して倒れている。その中にはジェドやアーガイルの姿まであった。

「誰だ貴様は？」

その異様な光景の中で立ち尽くす二人の人物。一人は金髪に火傷、あれがコルディオって奴だろう。そしてもう一人、俺に問いを発したその人物、

「あんたが黒幕か……」

俺はマグノスを睨む。

「質問が聞こえなかったか？この場所に殴り込んできた貴様は何者だと聞いている」

マグノスは俺を睨み強い語気で言ってくる。

「俺の名は桐原慎吾。殴り込みとは随分な言い方だな。その通りだけどよ！」

『いや、そういう事は言わなくていいです』

「そうか、分かった」

ゆめじんのツッコミに俺は素直に頷く。

「何を言っているのだ……。にしても、そうか貴様がキリハラ、例の侵入者か」

マグノスは口の端を歪ませる。

「貴様が暴れてくれたお陰でこちらもずいぶんとやりやすくなった。それに関しては礼を言わねばならないな」

「うるせえ。てめえらが何をどうしようとしてるのか。そんな細かい事情は俺は知ったこっちゃない。だがな」

俺は部屋を改めて見回す。

「目の前に血を流して倒れてる人間がたくさんいるってのに、平気な顔して立ってるてめぇを俺は許す訳にはいかない」

「傷つき倒れていれば助けるべき善。それを見過ごせば憎むべき悪。とでも言いたいのか？」

「黙れ。てめぇの狂った正義の物差しを俺に押し付けてんじゃねぇよ」

俺は拳を強く握る。

「狂った、か……。ならばどうする。その狂いを目の前にして貴様に何が出来るというのだ？」

「てめぇらをぶっ飛ばす。で、全員助ける」

俺ははっきりと言い放つ。だが、マグノスは余裕の表情を崩さない。

「滑稽な願望だな。しかし、そんな若造の願望がまかり通る程……」

マグノスの目が見開かれる。

「私は甘くはない！」

瞬間、俺の体に鋭い衝撃が走り、体中が切り裂かれる。

「ふ。ハハハハハ！口程にも無いとはこのことか！」

マグノスは笑いながら傷だらけの俺の体を見る。

「……いつまで笑ってんだよ」

傷だらけの俺の体。しかしなぜか血は一滴も垂れてはこない。

「ど、どういう事だ！なぜ平気な顔をしていられる！？」

「教えて欲しいかい？そりゃ教えて欲しいよねー……」

次の瞬間俺の体は煙と化して消えた。

「なっ……！」

マグノスの顔が驚きに染まる。

「いっつぁイリュージョン。お楽しみ頂けたかな？」

煙が晴れると、その先から無傷の俺が堂々と現れる。

「一体どういうことだ……！？」

「てめぇが攻撃したのは俺の分身で俺の本体じゃありませんでした。はい、種明かし終了」

「分身……だと！」

「そう。てめぇがこの部屋の人間傷付けた張本人だってんなら無論てめぇ自身になにかしらの攻撃手段が備わっているはずだ。その攻撃手段を見定めさせてもらったぜ」

そう、俺は分身に喋らせながら、自分は透明化を施して後ろから見物していたわけですはい。

「私の攻撃を……だと」

マグノスの顔にさっきまでの余裕が消える。

「そう。あんたの攻撃めちゃくちゃ速かったけど、見極めたぜ」

今度は俺が不敵な笑みを浮かべながらマグノスに迫る。

「う、嘘をつけ。私の攻撃を見極める事など出来ない！そんなことは出来ないんだ！」

「これでも同じ事が言えるのかぁ！」

俺は全身に力を込めて体中から光を放つ。

「なん……だと！？」

「全身大発光。これでお前は俺に手も足も出せねぇはずだ」

俺は光り輝く体のままマグノスに迫る。

「てめぇの攻撃手段はズバリ『影』だ！」

俺はマグノスの足元の影をズビシと指差す。

「てめぇの攻撃見極める為だけに動体視力鋭くしたらさ、俺の分身の足元の影からにゅって黒いのが伸びてるのが見えたんだよ」

俺は全身を光らせたまま続ける。

「そしたらうちの偉大なアドバイザーが『あれは影を媒介とした攻撃魔術ですね』って言いやがったんだよ」

「……っ！」

「てめぇは速さで攻撃の源を誤魔化してこの部屋の奴らを片っ端から倒したんだ。どうだい、外れてるかい？」

俺は物理的に輝くスマイル。

「だからなんだと言うのだ……」

「ん？」

「私の攻撃方法が分かったところで貴様に何が出来る！」

マグノスは叫ぶ。

「俺の足元には実質影が無いも同然。どうやって攻撃するんだい？」

実際全身余すところなく光らせているから所々薄く小さい影しかない。

「こうするのだよ！」

マグノスが叫ぶと、奴の周りの影が炎のように揺らめき出す。

「なにも奇襲だけがこの魔術の使い方ではないわ！」

揺らめく影は槍の様な形になりその何本かが俺に向けて放たれる。

「くらえぃ！」

マグノスの鬼気迫る叫び。

向かってくる槍に対し俺は両手を前に突き出してその手の平に光を集中させる。

「かぁっ！」

人間には無害な光の大砲。しかし影の槍は次々に消滅していく。

「なん……だと！」

眩しさに目を細めながらマグノスは次の槍を用意する。

「何度やっても無駄だ！」

俺は放たれる度にそれを消滅させる。

「さて、万策尽きたと見ていいのかな？」

俺はいよいよマグノスに迫る。

「く、くそがぁ！」

マグノスは何を思ったか部屋を見回し、ある一点で目の動きを止める。

その先にいたのは、小柄なメイド。確かルルチェルとかいったはずだ。

「何を……！」

俺はマグノスを止めようとしたが、遅かった。

高速で突き出されたルルチェルの影が、その本体たる彼女の体を貫いたのだ。

「か、は……っ！」

大量の血を噴きだしながら、その小さな体は床に崩れるように倒れる。

「なにしてんだてめぇ！」

「フッフッ……。ハッハッハッハッハッハッハッ！お前はあの空に浮かぶ黒き太陽を見たか！あれはそこの小娘のみ制御できる代物だ！その制御者たる小娘が倒れればその制御は途切れ太陽は地に落ち全てを焼き尽くす！」

「なん、だとっ！」

俺は窓の外に目をやる。

確かに、空に浮かぶ黒い玉が徐々に落ちてきているようにも見える。

「ちょっ、ちょっと待て！そんなことしたら俺達まで……！」

部屋の隅で固まっていたコルディオが焦ってマグノスに言う。

「知らんな。私は影を操り逃げられる。貴様は好きにしろ」

「な、んだと……。てめぇ、騙しやがったのか！」

「騙す気など毛頭無い。ただ、少しばかり予定が変わったのだ。ほら、こうして話している間にも死の刻限は迫っているぞ」

マグノスはわざとらしくコルディオを煽る。

「く……くそっ」

コルディオは駆け出すと、部屋から飛び出す。

「くっ！厄介な事態にしやがって……」

「さぁ、どうする？貴様も逃げるか！それともここで皆と果てる道を選ぶひゅぁ！」

「てめぇの相手は後でたっぷりしてやる！」

俺は凝縮衝撃波でマグノスにとにかく一撃ぶちこむと、窓から外に飛び出し、そのまま飛び立った。

「くそ！あんなのどうやって止めろっつーんだよ！」

『というか実際どうやって止めるつもりなんですか！』

さすがにちょっと焦った感じのゆめじん。

「ちょいと応用を利かした正攻法でいく！」

『え、え？どういうことですか？』

「とりあえず見てろ。で、うまくいくよう祈っといてくれ！」

俺はちょうど黒い玉の真下に回り込むと、両手を天に向け広げる。

「かかってこい！」

『超正攻法！？』

巨大な黒い玉は徐々に落下のスピードを増していき、やがて俺の眼前に迫る。

下では逃げ場を失った人達がパニックを起こし騒いでいた。

『シンゴさん！私めちゃくちゃ不安なんですけど！』

「大丈夫だ！」

俺は力強く言い放つ。

「やれば出来る！」

やがて黒い玉は俺の視界を覆う程に迫る。

「いざ！勝負！」

俺は直接触れない為に手の平から先に空気のクッションを作る。気休めになるかも怪しいが。

「ぐ、ぐぉぉぉ！」

黒い玉の重みが俺の両手を容赦なく襲う。

「ぐ、ぐぎががぁぁぁ！」

俺の高度は徐々に、確実に落ちていく。

『し、シンゴさん！』

ゆめじんの叫びもすぐ下に迫った人々の叫びに混じって消える。

やれば出来る。俺はそうやって今まであり得ないくらいの死線を潜り抜けてきた。

「こんな黒い玉がなんぼのもんじゃぁぁあぁぁぁい！」

地面までわずかに数十センチ。そこで俺の降下は止まる。

「俺しかいないだろぉがよぉ……」

俺は全身の力を振り絞る。

「俺が守しかないだろうがよぉ！！！！！！！！！！」

押し上げる。ただそれだけ。俺は全身の筋肉があげる悲鳴をガン無視し、巨大なる黒い玉を上空へと押し上げる。

「どっせぇぇぇぇぇぇい！」

高度を増すにつれて上昇のスピードは増していく。

「ゆめじん！」

『は、はい！』

「大体でいい！どこまで上げれば爆発しても地上に被害は出ない？」

俺は歯を食い縛りながら叫ぶように聞く。

『……もう少しです！もう少しだけ上空へ！』

「了解！そこまで行ったら合図よろしく！」

『はい！』

俺はゆめじんの合図が来るまで必死で玉を持ち上げ続けた。

『シンゴさん！もう大丈夫です！』

「あいよ！では、ド派手な花火と参りますか！」

俺は空気のクッションを押し上げ、反動を付けて、少し自分の体と黒い玉に距離を離す。

『え……ていうかシンゴさん、どうやってそれを処理するおつもりですか！』

「そりゃ決まってるでしょ！」

俺は右の拳に力を溜める。

「爆破処理でいくぜ！」

右の拳から放たれる青い光の束。久々の【青の衝撃砲】である。

光の束は黒い玉を貫き、黒い玉はそれに呼応するかのように全体がひび割れていき、その間から光が漏れる。

「やべ、体に力が……」

大気を揺らす大爆発。俺の体はその凄まじい衝撃波で、凄まじいスピードで地面へと落下していく。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

そして俺はドボンという音と共に全身に冷たい感覚が巡ってくる。

これは水だな。ということはまた堀に落ちたのか。

俺は暗い水底に沈んでいく中で、その事だけを考えていた。

［42］やれば出来る男と落ち行く太陽と（後書き）

青の衝撃砲。

7話参照。

では次回。

［４３］その一撃、怒りと共に（前書き）

初！一日に二話投稿です。

なのでどういう訳かこの話は短めです。

さぁて、４３話と参りましょうか。

［43］その一撃、怒りと共に

「なっ……」

シンゴに昏倒させられていたマグノスは意識を取り戻し黒い太陽とシンゴのやり取りの一部始終を見ていた。

「なぜ落ちなかった……。なぜ黒い太陽は空で爆発したのだ……」

マグノスはうわごとのようにブツブツと呟く。

「どうやら貴様の計画は肝心な場所で頓挫させられたようだな」

傷だらけの体をフィアナに支えられながら、ジェドがその青く澄んだ目でマグノスを睨む。

「頓挫……だと？……私の計画が、失敗したとでも言うのか……？」

「失敗だ。貴様の私怨を晴らそうとした今回の目論みは大失敗だ」

ジェドはフィアナを己の後ろに下がるように促し、自分はゆっくりとしかししっかりとした足取りでマグノスに近付いていく。

「貴様は道を誤ったのだ。本当に国の為を思うならばなぜ国民を犠牲にする今回のような計画を実行に移した！もっと他に誰もが幸せとなれるような選択肢は無かったのか！」

ジェドは力の限り叫ぶ。そして必死に言葉で伝えようとした。それは、マグノスが今回の計画で実行時より放棄していた事だった。

「う、ウァァァァァァァァ！！！！」

マグノスは頭を抱え苦しみを吐き出すような唸り声をあげる。

「私は間違ってはいない！犠牲無くして真の改革は生まれないのだ！貴様のような若造に、否定されるいわれなでない！」

マグノスは上着の右腕の部分を掴むと、力任せにその部分を破く。

そして服の下からは、無数の魔法石がびっしりと取りついたマグノスの腕が出てきた。

「貴様……そんな事をしたら！」

「知っている。私の右腕はもう本来の姿は取り戻せない。もう後には引けないのだよ！」

マグノスが右腕を高らかに掲げると、大量の影がその周りに集まり、徐々に形を成していく。

「なんだこれは……！」

歪な人型の影。それがマグノスの背後に姿を現した。

「この影の魔人の力でお前達を一人残さず殺す！帝国の者は一人残さず消してくれる！」

「じゃあ、帝国の人間じゃない奴はどうなるんだ？」

バルコニーに颯爽と姿を現したびしょ濡れ野郎、桐原慎吾の登場である。

……。

……。

「貴様……あの衝撃を受けて生きていたのか……！」

マグノスの驚きの表情が俺に向けられる。

「体の頑丈さだけが売りなものでね。それに約束通りあんたの相手しに来たぜ」

「貴様らぁ……！尽く私の邪魔をしおって！殺す！殺してやる！」

マグノスの操る影の魔人が、俺に向かってくる。

「てめぇの歪んだ正義、ここで断ち切ってやるよ……！」

俺は光の刀『光刀無形』を出現させる。

「この一太刀で、てめぇの影をぶったぎる！」

俺は大きく上段に構えた光刀無形を縦に振り下ろす。

【光刃一閃！！】（こうじんいっせん）

輝く光の一太刀は、影の魔人の体を真っ二つに切り裂き、そしてその体を消滅させた。

「なんだと!?」

「次はてめぇだ!マグノス!」

俺は駆け出すと、マグノスの顔面めがけ一切の迷いなく全力の拳を打ち出す。

鉄拳制裁!マグノスの体は大きく吹っ飛び、壁に叩きつけられて、不様に床に倒れ落ちる。

「てめぇがどんだけ辛い過去背負ってんだか知らないがよ……」

俺は固めていた拳を緩める。

「それを盾にたくさんの人を傷つけようなんてのは、ダメだろ」

俺は気を失っているマグノスに、少しの哀しさすら感じていた。

「……あ」

『どうしました、シンゴさん?』

「コルディオ、忘れてた!」

俺は、大分前に部屋から逃げ出していたコルディオの事を唐突に思い出していた。

……。
……。

そのコルディオは、宮殿内を必死に逃げていた。

「黒丸は止められたみたいだが、もうあんな奴の計画に付き合う義理はねぇ。どうにかこの国を脱出しねぇと……」

コルディオは、もつれかかる足を持ち直しながら、通路の角を曲がる。

そして、その先に佇む人物を見て、足が止まる。

「て、てめぇは……」

腹部に血の跡が滲むメイド服を着た亜麻色の髪の美しいメイドがそこにいた。

「ハラキア・ロングボルトです。お久しぶりですね、コルディオ・フォレンツィオ」

ハラキアはそう言って丁寧に一礼する。

「私がなぜここにいてあなたと向き合っているか、お分りいただけますか？」

ハラキアは静かな怒りを奥底に燃やした表情をコルディオに向けつつ尋ねる。

「く、くそ……」

コルディオは足を擦るように後ずさる。

「詳しい事情は聞いていません。しかし、あなたが我々の仲間を無理矢理に計画に加担させたと伺っています」

ハラキアはじりじりとコルディオに迫る。

「だ、だからなんだっていうんだ！」

コルディオは次から次に吹き出す汗を撒き散らしながら裏返りかけた声で言う。

「ここまで言っても分かんないの？あんたバカなの？」

「！？」

コルディオの背後から軽快に響き渡る声。コルディオがゆっくりと振り向くと、そこには足を少し引きずりながらもしっかりと仁王立ちする金髪ツインテールのメイドが一人。

「クリシア・リッチフィールド。あたしを忘れたとは言わせないわよ」

二人に挟まれたコルディオは、前後に迫るメイドの姿を繰り返し見ながら、

「な、なんなんだお前らは！仲間一人に熱くなってんじゃんねーよ！」

と、叫んだ。

「……あなたは何も分かっていない」

ハラキアは静かに口を開く。

「かけがえのない仲間だからこそ、その身を案じ、こうして怒りに身を震わせる事が出来るのです」

「そうよ」

クリシアもゆっくりと言葉を紡ぐ。

「あの子は仲間。そして大切な親友。そんな親友が私達を守ろうと涙を流す姿を見せられちゃったら……あんたを逃がす理由はどこにも無くなっちゃうわね」

ハラキアとクリシアはそれぞれ戦闘の構えになる。

「ま、待て！俺じゃない！あいつが！マグノスの奴に乗せられて！」

「問答！」

「無用！」

ハラキアとクリシアはその言葉を合図に、コルディオの前面にハラ

キアの掌底が、背中にクリシアの蹴りが炸裂していた。

「……っ！」

前後からの攻撃を余すことなく受け切ったコルディオは、その場に崩れ落ちる。既に気絶しているようだった。

その姿を見下ろす二人はしばらくの間無言だったが、しばらくしてクリシアが、

「ザマーミロってのよ……」

と、どこか哀しげに呟いていた。

［４３］その一撃、怒りと共に（後書き）

４３話も書くと見返した時に多少の感慨を感じるようになりました。

次に目指すはとりあえず５０話。精進しましょう。

では次回。

［４４］もったいない。（前書き）

わーって叫んでみる。

ストレスが吹っ飛ぶ。

でも喉が痛くなる。

それがストレスになる。

４４話だじょ。

［44］もったいない。

マグノスが不恰好に床に倒れた瞬間、俺の中で何かがプツンと切れた。

あれだな、俗に言う緊張の糸ってやつ。

そして次の瞬間、俺の意識はブラックアウトした。

俺はなんだかぼんやりとした空間にいた。

水面に浮かんでいるような、どこかフワッとした感覚。

――――……。

ん？今何か聞こえたような気がしたぞ。

俺はまどろむ意識の中でその謎の声に耳を傾ける。

しかし、いくら耳を傾けても声は聞こえない。

なんなんだ一体。

――――……海。

！、今のははっきり聞こえた。けど海ってなんだ。

――――……雄々しき黒。

ちょっと長くなった。でもよく分からないのはそのまま。

俺は更に続きを聞こうとしたが、それ以上は何も聞けなかった。

そして、俺の視界に光が差してくる。

覚醒の合図だった。

俺はゆっくりとまぶたを開き、ぼんやりと目に映る光景を見る。

白い天井が見える。あと派手なシャンデリアの照明。

「ここは……」

俺が働かない頭で考えようとした時、ガチャッという音が響き誰かが俺の寝ている空間に入ってきた。

「あ、目が覚めましたか？具合はどうですか？」

明るく快活な声。俺が声のする方を見ると、見覚えのない短めの茶髪のメイドがたたたっと俺のそばに寄ってきた。

「突然倒れたって聞いてましたから心配しました」

「あ、あぁ……」

俺は徐々に本来の働きを取り戻してきた脳でこの状況について考える。

「……とりあえず、君は誰？」

「あ、はい。使用人部隊のサトリナ・ウェンと申します」

茶髪のメイド、サトリナはにっこりといい笑顔で答えてくれる。

「ここはどこ？」

「モンフェルト宮殿の一室です」

「なんで俺ここにいるの？」

「ですから、突然倒れてここに運ばれたんですよ」

俺は上半身を起こし、己の寝ている場所を確認する。

「なぜ普通にベッドで寝てるの？」

「……はい？」

「前回は牢にぶちこまれたってのに今回はその真逆とも言えるこの対応。逆に怖い」

「あの、何を仰っているのかはよく分かりませんが、これはジェド師団長直々のご命令であなたをここに運んだんですよ」

サトリナは笑顔で説明してくれる。

「ジェドの？どういうこと？」

「ジェド師団長は意識を無くされたあなたを私達に丁重に扱うように、付け加えた上で預けられたのです」

「ジェドが、ねぇ……」

なんなんだろう。マグノスをぶっ飛ばした礼のつもりなんだろうか。だとしたら案外人間味のある奴かもしれないな。

「じゃあ、俺はここにいていいんだね？」

「ええ、どうぞお好きなだけ」

「急に捕まえたりしない？」

「私が怒られてしまいます」

「彼氏いるの？」

「いません……って何答えさせてるんですか！」

「ごめん。なんか今なら聞ける気がしたんだ……」

『バカも大概にして他に聞くこと聞いてください』

そしてゆめじんはオブラートを知らない。

「そうだ。ハラキアは？あいつは無事なのか？」

俺は牢屋で別れた血まみれのハラキアの事を思い出してサトリナに聞く。

「ハラキア副隊長ですか？ええ、ひどい怪我でしたけど、無事ですよ」

「そうか……良かった」

俺は安堵で胸を撫で下ろす。

「私、見つけた時は脱獄したキリハラさんが副隊長を襲ったのかと思ってしまいました」

「がふっ！……なるほど、そう見え無くは無いか。というかそう見る方が自然か」

焼け焦げた牢と強引に破られた鉄格子。その前に傷を負って倒れるメイド。

それだけ見たら犯人は我ながら俺だな。うむ。

「でも後から話を聞いて、副隊長を傷付けた人をキリハラさんが倒してくれたって聞いた時には私もう恥ずかしいやら申し訳ないやらで……ごめんなさい！」

サトリナはぺこりと勢い良く頭を下げる。

「えぇ！？何もそんな謝らなくても……」

「いえ、一瞬とはいえ皆を助けようとしていた人を私は強姦者呼ば

わりしてしまいましたし」

「だから、あのシチュエーションじゃ仕方……無くないな、強姦者は流石に聞き捨ててはいけない気がする」

俺は心にそっとナチュラルなダメージを負ったのであった。

「……ていうか君がハラキアを見つけてくれたんだ？」

「あ、はい。キリハラさんにお食事をお持ちする当番が私だったので、その時に」

「なるほど」

「もう大変でした。傷の手当てどころか止血すら出来てなかったですし」

「え？」

「意識も無くて、後少し遅れてたら命すら危なかったかも……」

「ちょちょちょ！え？どういうこと？ハラキアは処置の道具を持っていたんじゃ……」

俺は記憶を遡りハラキアの発言を思い出す。

……うん。言ってる。ハラキアは自分は大丈夫だと言い張ったから、俺はハラキアを置いて牢を離れたんだ。

しかし、俺の言葉にサトリナは首を傾げる。

「いえ、副隊長はそんな物は一切持っていませんでした」

サトリナは嘘をついていないし、つくメリットは何もない。

だったら、ハラキアが嘘を……。だとしても何の為に？自分の命に関わる嘘までついて……。

「……！」

そこで俺はようやく気付く。ハラキアの嘘が俺を早く行かせる為のものだって事に。

「はぁぁぁぁぁぁ……」

俺は長ぁいため息をつく。

「ど、どうしたんですか？」

「怪我した連中はどうしてんの？」

「怪我をされた方々は医務室か各自の部屋で治療を受けています」

「そか」

ハラキアやジェド達に顔を合わせた方がいいかなと一瞬思ったが、俺は元は不法侵入で捕まっていた身。下手に動き回る訳にはいかないだろう。

コンコン。

俺が色々思案していると、部屋の扉がノックされる。

「はい」

サトリナが応えると、扉が開き、そして、

「おぉ？」

ジェドが姿を現した。

「気が付いたようだな」

涼しい仏頂面を引っ提げて、ジェドは俺に近づいてくる。

「では、私は外におりますので御用の際にはお呼び下さい」

何かを察したのかサトリナは俺とジェドに一礼して部屋を出ていく。

「すまないな」

ジェドも当たり前のようにサトリナにそう言う。

「で、二人になって何話そうっての？」

ベッド横の椅子に腰掛けるジェドに、俺はストレートに聞く。

「うむ……。まずは、礼を言いたい」

ジェドは少し言い辛そうにそう言うと、落ち着かせかけた腰を再び

起こし、俺に向かい深々と頭を下げる。

「え、えぇ？」

いきなりの事で俺は戸惑う。

「今回は国民の命を、更には仲間の命を守っていただいた。立場上このような形でしか感謝の意を伝えられないが、そこは容赦してくれ」

「や、やめてくれよ！俺は本来あんたらの敵なんだから、そういう事したら色々まずいだろ！」

俺はジェドに頭を上げるよう促す。

「それに感謝してるのは俺も同じだよ。こうやって部屋とベッドあてがってくれてさ、あんたの指示なんだろ？」

「アーガイルには甘いと言われたがな。気絶した敵を目の前にして討つことなく情けをかけるとはな、と」

アーガイル。あの赤毛野郎か。うん、なんか言いそうだ。言われてもいいくらいの事してる気がするし。

「だが、これは一時の情け、それだけは忘れるな。キリハラ」

ジェドの目に戦った時と同じ鋭さが宿る。

「……分かってるよ。俺はあんたの敵。それは変わらない、んだよねぇ」

俺はハァと一つため息をつく。

「勿体ないよな」

「勿体ない？何がだ？」

「俺達の関係だよ。確かに俺は何度も軍と戦ってる。お前とも戦ってる」

俺は今までの戦いを思い返す。

「でも今までは軍に何かしら許せないっていうか怒りの感情みたいなのがあったんだけどさ、今回はあんまり感じないんだよね」

ジェドやアーガイル、ジェミニ。あとハラキア達。

「そりゃ戦ってる時に突発的にカチンってくる時はあったよ。でもさ、それはそれ」

「では、貴様が怒りを感じたという軍の人間と我々と、何が違うというのだ？」

「うーん……。信念かな？」

俺はそれぞれの戦いと、それに対する姿勢を思い出す。

「お前らには守るべきものっていうかさ、揺るぎない正義みたいなものを感じたんだよ」

「守るべきもの……か。なるほど、貴様には我々にそれが備わっているように見えたか」

「うむ。だから勿体ない。軍にいるってだけで敵対の関係を築いちまうのがさ。……あくまで俺の個人的な気持ちだけどさ」

俺がそこまで言い切ると、ジェドはフッと、少しだけ表情を緩める。

「面白い男だな、貴様は」

「それは誉め言葉と受け取っとくよ」

「……さて、私はそろそろ行くか」

ジェドはそう言うと足早に扉に向かっていく。

「あれ？もう行くの？」

「私の目的は貴様に一言礼を述べる事のみ。むしろ長居をした方だろう」

「あ、さいですか」

ジェドの淡々とした言葉に俺は思わず苦笑する。

「……次に会ったときは」

「ん？」

「次に会ったときは再び敵だ。迷わず斬る」

ジェドはそう言って扉を開ける。

「分かってるよ」

俺は強敵の宣言に不敵な笑みで応える。

「だが……」

「ん？」

「今日は皆疲れている。夜は警備の兵を少なくし皆を休ませた方が良いかも知れんな」

ジェドは独り言なんかなんなのか分からない事を呟いて、部屋を出ていった。

「……」

俺は少しの間ジェドの呟いた言葉の意味を考えて、そして、

「そういうことか」

一つの結論に達した。

俺は犯罪者だから表立って解放する訳にはいかない。

しかし、手薄な警備の穴を突いて逃げられたとあっては仕方ない。

「あいつなりの気遣い……って事でいいのかな？」

とにもかくにも、俺がここを離れるタイミングは決まったようだ。

「よし！」

俺はベッドに横になる。

「じゃあそれまで寝る」

『えー……』

その選択は不評だった。

［44］もったいない。（後書き）

こたつでみかん。

をしない冬で終わりそうた今冬。

まずい！みかんを急ぎ買わねば！

では次回。

［45］罪。そして別れ。（前書き）

時計を見たら起きなきゃいけない時間をとうに過ぎていて、

「あ！やべ！」

と慌てる。

という夢を1年に1回は必ず見ます。

……恒例行事？

［45］罪。そして別れ。

そして、夜になりました。

俺はベッドから抜け出すと、窓の外を眺める。

町には明かりが灯り、ちょっとしたイルミネーションっぽく見えた。

『きれいですねぇ』

ゆめじんがしみじみと呟く。

「そうだなぁ。あの一つ一つに住んでる人がいると思うとなんか感激だな」

『感激なんですか？』

「うん。なんていうか、今回の戦いで俺が守れた人達があの中にもいると思うとさ」

『そう、ですね。ですが、本当の戦いはこれからかもしれませんね』

「これから？どういう事だよ」

マグノスとコルディオは捕まり、誰も死なずに万事丸く収まったんじゃないのか？

『モンフェルトの幹部がアルバレオの王族を国民もろとも殺そうとしていたなんて事が知れたらそれこそ国家レベルでの問題になって

しまいます』

「確かに。マグノスが軍の奴らを傷つけたのは事実だもんな」

『モンフェルトはこれから大きく変わるでしょうね。良くも悪くも』

「……で、その変化に俺は何もしてやれない、と」

『……そうですね、残念ながら。シンゴさんの活躍すべき場面は終わってしまいましたね』

「なんだか消化不良な感じだよ」

『仕方ありません。でも、シンゴさんの活躍で何千もの命が救われたのです。それは大いに誇るべきでしょう』

「はは、ありがとう」

俺は窓を開け、外に出ようとする。

「さて、そろそろおさらばバイバイかね」

『ええ、ジェド・ナイアンの情けを無下には出来ないですからね』

「だな」

俺は窓枠に足を掛ける。

「行かれるのですか？」

その瞬間背後から響く声。

「!?」

俺は慌てて窓から離れて、声の主を確かめる。

見ると、入り口付近にメイドの一人、ハラキアが立っていた。

「は、ハラキア……か」

俺は嫌な汗の感じを覚えながら言う。

「申し訳ありません。驚かせるつもりは毛頭無かったのですが」

「いや、こっちが勝手に驚いただけだから。……どうしたの?」

「はい……今回の件で、お礼とお詫びを」

「礼と、詫び?」

はて、何を謝られるのだろうか?

「まず、今回は私の身勝手な願いを聞き届けていただきましてありがとうございました」

ハラキアは深々と頭を下げる。

「あー、まぁ、皆助かって良かったよ。ていうか体もう大丈夫なの?」

俺は牢屋で別れた時の記憶とサトリナの話を思い出す。

「はい、この通り体は大丈夫です。……謝りたいのは、そのことなんです」

「ん？どゆこと？」

「私は牢の前で咄嗟にとはいえキリハラさんに嘘をついてしまいました。お許し下さい」

「あー。心配させられたよ全く。サトリナから聞いたときにはヒヤッとしたね」

「はい。キリハラさんに多少なりともご心配をおかけしたと聞きまして……」

ハラキアは申し訳なさそうに顔を俯ける。

「いやいや、とにかく無事なら良かったよ」

「はい、お陰さまで」

「……ていうかハラキアってさ」

俺はちょいと語気をひそめる。

「はい？」

「戦ってた時は分からなかったけど、実はかなり優しいよね？しかもマジメでキレイだし」

俺は感じた事を口に出しただけ。のつもりだったのだが、

「え……あ、その……」

なぜかドギマギし出すハラキア。

「え？俺なんか変な事言った？」

俺が恐る恐るそう言うと、ハラキアはブンブンと首を振り、

「ち、違うんです。……えと、男性からそのように褒めていただいた事があまりないもので……」

恥ずかしそうにそう言うハラキアを可愛いと思った俺を誰が責められよう。

「あまりないって……男と接触する機会くらいはあるんでしょう？」

「私の所属する使用人部隊は女性のみで構成される部隊なので、日常的にはあまり男性とは……」

そうなんだ。つまり使用人部隊っていうのはメイドさんの集まりなのね。

「あ、はは。ごめんね。突然変な事言っちゃって」

俺はなんとなく気恥ずかしくなり苦笑いで頬を掻く。

「い、いえ。私の方こそ失礼致しました」

言いながらもハラキアの視線はどことなく泳いでいる。

「……」

「……」

そして訪れる沈黙。

うぅ、気まずい。なんか喋らねば。

「ええっと……。あ！あの二人は大丈夫なの？」

俺は不自然な大声で言う。

「あの二人……とは？」

「えーと、クリシアとルルチェル、だっけ。あの二人も怪我してたよね」

「ご心配いただきましてありがとうございます。あの二人も治療中ではございますが命に別状無く無事でございます」

「そうなんだ……そいつは良かった」

俺は心からそう思ったが、なぜかハラキアの表情は優れない。

「ん？どうしたの？」

「……実は、ルルチェルは今、牢に入っているのです」

「……は？」

よく意味が分からなかった。なぜルルチェルが捕まってるんだ。

「ルルチェルは今回の件で少なからず敵の計画に加担していました。あの黒丸もルルチェル自身が用意したものです」

「いやいやいや！でもルルチェルは親人質に取られたり催眠術掛けられたりしてたんでしょ！」

「ですが、キリハラさんが来ていただけ無ければ何千という命が失われていたのは事実。多少の事情で覆せる罪ではございません」

ハラキアは言葉はルルチェルを突き放しているものの、その顔は友達を想う優しくも哀しい顔にしか見えなかった。

「……分かった」

「え？」

「俺がジェド達に直談判する。あれを実際に止めたのは俺だ。そういうことなら恩着せがましく情状酌量を要求してやる」

俺はずんずんと部屋の入り口に向かう。

「だ、駄目です！そんな事をしてはあなたの命を縮めるような結果になりかねません！」

「そんなの分からないでしょうが！やりゃあ出来るかもしれない！」

「お忘れにならないでください。あなたは罪人。今こうしていられる事すら特例中の特例なんです！」

ハラキアは両手を広げ俺を部屋から出さないようにする。

「だったらなんで話した」

「え？」

「お前自身がどうしようもないと思って諦めてる事をなんで俺に話した？」

「そ、それは……」

ハラキアは顔をそらす。

「それはお前自身がなんとかしたいって気持ちの表れだろう？……違うか？」

「……」

ハラキアは黙っている。

「ルルチェルの事を話すお前の顔はメイドでも軍人でもなんでもない。一人の女性が友達を想う表情だったぞ」

「……私だってなんとかしたいです。でも、私の力では何も出来ないんです」

ハラキアの言葉には悔しさが混じっていた。

「だとしても、何かしなきゃ！仲間が罪に問われようって時に……」

「誰が罪に問われるというんです？」

「そりゃルルチェルが……って、え？」

俺でもハラキアでもない、別の誰かの声が間に割って入ってくる。

すると、部屋の扉が開き、特徴的な赤いポニーテールのメイドが入ってきた。

「ジェミニ師団長……！」

「ハラキア、内部の事情を簡単に話してしまうのは感心しませんね」

ジェミニはたしなめるような口調で言いながら部屋に入ってくる。

「も、申し訳ありません……」

「まぁ、あなたとルルチェルの仲ならばこその想いと受け取りましょう」

ジェミニは優しく微笑む。

「は、はい……」

ハラキアが返事をしたのを確認し、ジェミニは俺の方を見る。

「さて、そしてあなたはハラキアの話を聞いて我々の元へ怒鳴り込まんかの如き言い方でしたが……」

「だってそうだろう！あいつば自分から進んで悪の片棒を担いだってんなら俺も反論出来ないさ。だが、あいつにゃどうしようもねぇ事情がいくつも……」

「それは我々も重々承知しております」

ジェミニは強い口調で俺の言葉を遮る。

「ルルチェルは今牢に身を置いています。が、それはあくまで形式上の措置なんです」

「は？形式上？」

「もちろんあらゆる事情を鑑みた上でも無罪という訳にはいかないでしょう。しかし、命に関わるような刑罰が課される事は無いはずです」

ジェミニは理路整然とそう言う。

「そう……なんだ」

つまり、ルルチェルはそこまでの罪を被らなくて済むのか？

「では、ジェミニ師団長。ルルチェルは……」

ハラキアは恐る恐るといった感じに口を開く。

「正式な裁きは中央に帰ってからになるでしょう。ですが……ハラキア、あなたが不安に思うような事にはなりませんし、私がさせません」

ジェミニの力強い言葉。そこには確かな自信が少し見えた気がした。

「ありがとうございます……」

ハラキアは心底安堵したといった表情で頭を下げる。

「こんなに仲間想いの部下を持ち私は幸せです」

ジェミニはハラキアの肩をにポンと手を置く。

うーむ。なんかいいなぁ、こういうの。

「まぁ、それもこれもあなたが事態を解決してくれた事に繋がってくるのですが……」

ジェミニがこちらを見る。

「だからといってあなたを敵という認識から改めるつもりはありませんのでそのつもりで」

ジェミニは鋭い目を向けてくる。

しかし、それは悪意と敵意によるものではなく……。

これはジェドも同じだが。

いうなれば、強敵と書いて何と読む、の感覚に近いものを感じた。

「望むところよ」

俺は武者震いに身が打ち震えるのを感じながら、ジェミニに応える。

「……では、私達はこれで」

ジェミニはハラキアを促し部屋を出ていこうとする。

「今夜は月の明かりが薄く視界が悪い。あなたの様な侵入者が入ってくるには絶好の夜かもしれませんね」
という言葉を残して出ていく。

入りやすいという事は逆もまた……。

ジェドと全く同じ事言われたな。

そしてハラキアはというと、

「また、どこかでお会いいたしましょう」

ストレートに別れの挨拶。

俺は統一感の無い二人に苦笑いしつつ、部屋の扉が閉まったのを確認して、窓際の方に歩いていく。

「さて、では皆さんのお気遣いを無駄にしないように、参りますか」

『なんかもう露骨に「出てくなら今夜！」って感じでしたね』

「はは。まぁ、はなから長居する気はなかったけどね」

俺は窓を開け、よいしょと足を掛ける。

「じゃ、行きますか」

『ええ』

俺はそのまま飛び立ち、宮殿を後にする。

「……今度会う時は敵か」

『仕方ありませんね。互いの立場を考えたら』

「でも昨日の敵は、て言葉もあるからな。俺は諦めないぞ！」

『諦めない……んですか？』

「うむ！敵でいるには勿体ない奴らばっかりだったからな」

俺は来て宮殿の方を振り返る。

「ただ軍の奴らだからって戦う事しかしなかったらそれこそ平和な世界なんて夢のまた夢だよ」

『……そう、ですね』

「だから俺は諦めない」

俺は自分に言い聞かせるようにそう言うと、モンフェルトの町の方に降りていく。

『え？どこ行くんですか？』

「ちょいと寄り道さ。約束を果たす」

［45］罪。そして別れ。（後書き）

人間、本気を出せば空を飛べるんじゃないかと思っていた時期がありました。

若さで片付けてやってください。

では次回。

［４６］動きだす思惑（前書き）

「お分りいただけただろうか？」

って言われるまでそれの位置が分からないときはなんか複雑な気分。

そういう写真の話。

冬なのに納涼。４６話ですか？

［46］動きだす思惑

朝日が昇る頃、俺はモンフェルトを後にした。
長いようであっという間だった気がするのは、体験した全てにパンパンに中身が詰まっていたからであろう。

『あんな形で良かったんですか？』

ゆめじんが最後の確認とばかりに聞いてくる。

「いいの。もう寝てたしな」

『……そういう理由？』

ゆめじんから何かがサァっと引いていく感じ。

「冗談だよ。渡す物は渡せたし、必要な事は済ませたはずだろ」

『まぁ、そうかもしれませんが……。シンゴさんって変なところで割り切ってますね』

「はは。まぁ、あの人と話せた時点で俺は満足だよ」

『あの人……。イーグル・マグノスですか？』

「そゆこと」

俺は少年に手紙を渡そうと町に降り立った。

すると、レジスタンスの人がやってきて、ぜひイーグルさんに会ってほしいと言ってきたのだ。

「まさかそういうことだったとはな」

俺はしみじみ思い返す。

イーグルさんの元に着いた俺は、まずイーグルさんをはじめとしたレジスタンスの皆さんにお礼を言われた。

「この国を救ってくれてありがとう」と。

俺はレジスタンスの人達の感謝を素直に受け、その上で、とある用があって急いでいると告げた。

『あそこで少年の名を言わなければ何も事態は動かなかったでしょうね』

「そうだな」

少年の名を出した俺にイーグルさんはえらく驚いた顔をしていた。

最初は何の事か教えてくれなかったが、少し追求したら割とあっさりと教えてくれた。

「エイジは私の息子である」と。

「さすがの俺も驚いた。しかも俺が倒したマグノスは兄貴だってんだからな」

『まぁ、名字がマグノスという時点でなんらかの繋がりはあると思いましたが、まさか親子とは』

イーグルさんはレジスタンスという立場上エイジとは離れて暮らし、自分の立場も偽ってエイジに伝えていたらしい。

「胸のロケットもエイジの写真だったしな」

『自分の信念と守るべき家族との板挟みですね』

俺はゆめじんの言葉にその通りだと頷く。

だが、今回の暗殺未遂事件を経て、レジスタンスとしての立場に疑問を抱いたイーグルさんは、レジスタンスの解散を決意。全てを捨てて息子の元に戻ることを決意した。

「結果的に手紙が背中を押した形になったな」

『そうですね。で、親子で暮らしていこうと決意して。これはこれでいい結末ですね』

「うんにゃ。これは結末じゃない。あの親子の再スタートだな」

『……なるほど。その通りですね』

俺は、イーグルさんとエイジにささやかなエールを送りつつ、モンフェルトを離れていった。

……。

……。

そんなシンゴの様子を物陰に隠れつつ見つめる影があった。

「こちらＤ２６。目標は海岸線沿いの道を東に進んでいます」

黒い装束に全身を包んだその姿。キバやジェドの前にも姿を現したあの離貞であった。

“分かった。慎重に後を追え”

離貞が身に付けている腕輪から声が響く。

「了解」

離貞は腕輪からの声に応えると、そのままシンゴの後を追っていった。

そして、離貞からの報告は、遠く帝都に届けられていた。

銃騎兵団の幹部が集う地下の会議室。そこでは、銃騎兵団の各師団長ら責任ある立場の人間たちが円卓を囲んでいた。

「実質モンフェルトに被害はなし。清々しい程に我らの当ては外れたな」

「強いて成果を挙げるとすれば……、これからの交渉に我らが有利な材料を得たという事か」

「だが、その交渉もこのままでは魔術兵団主導で行われてしまうぞ」

「姫の警護を奴らに一任したのが裏目に出たな」

それぞれがモンフェルトの一件について意見する。

「やはりあの様な得体の知れぬ男に任せたのが失敗だったのだ！」

「確かに……。だが、奴の存在無くばこの計画自体成立しなかったであろう」

「失敗は失敗。魔術兵団には一切の人的被害が無かったのだからな。怪我など一時のものに過ぎん」

「あやつはどうしたのだ？まさか逃げ出した訳ではあるまいな」

ガチャッ。

その言葉を待っていたかのように開かれる会議室の扉。

「やぁ、皆々様。お揃いの様ですな」

場の雰囲気にそぐわぬ明るい声。銃騎兵団の面々が先程から口にする、白いローブの男がそこにいた。

「ようやくお出ましか。ちょうどいい……。今、貴様の責任を追求していたところだ」

師団長の一人がローブの男を睨み付けながら語気を強めて言う。

「私の責任……。さて、思い当たる節がございませんね」

男はわざとらしく人差し指を頭に当てて考え込む。

「ふざけるのも大概にしろ。モンフェルトの一件において貴様の言っていた事は何一つとして成し遂げられていない！」

別の師団長が食って掛からんばかりの勢いで言う。

「……そうでしょうか？確かにモンフェルトには傷一つつかずに今回の一件は事態の収拾に向かっている。ですが、状況は限りなく我々に有利です」

男は諭すようにゆったりとした口調で言う。

「それがどうした。どれだけ交渉に有利な材料を得ようとも銃騎兵団が実質関わっていないだから我々に利を得る隙は無い」

「そう視野を狭めては得られる利も得られませんよ」

「なんだと……！」

会議室全体に緊迫した空気が流れる。

「落ち着け……！貴様、何が言いたい？」

その疑問を待ってましたと言わんばかりに男は口の端を吊り上げ歪んだ笑みを浮かべる。

「まだあなた方の耳には届いていませんか。ではこの場で報告させていただきましょう。ま、後程正式な通達があるはずだとは思いますが」

「勿体ぶらずに言ったらどうだ……」

男はまるでこの状況を楽しむかのように会議室全体を見回す。そしておもむろに口を開く。

「魔術兵団第六師団長ピャロット・ファニークラウン、同じく第七師団長シリュウの身柄を拘束。即刻、魔術兵団師団長としての権限を剥奪致しました」

衝撃。会議室全体がどよめきに包まれる。

「師団長二人を拘束……！？」

「い、一体どういうことだ！？」

師団長達は男に詰め寄らん勢いで聞いてくる。

「まぁ……そう焦らずに。詳しい罪状や経緯については後で各々の部下にでも聞いてください。ですが、これは事実です」

男は上機嫌な口調で言う。

「師団長二人を……まぁ、亡き者にというのは語弊が生じてしまいましたが、結果としてはご満足いただけると思います」

「貴様が拘束したとでも言うのか？」

師団長の一人が恐る恐ると言った感じで聞いてくる。

「私は補助をしたに過ぎません。確かな裏付け、私が行ったのはその程度の事です」

「一体何者なのだ……貴様は」

恐ろしさすら感じているのだろうか、師団長の一人が完全に食って掛かる勢いを殺された顔で聞く。

それに対し男は笑顔のまま、

「私は、確かな力を持った……謎の男です」

緊張感を感じさせない口調で言い放った。

……。

……。

その日の夜、魔術兵団の総帥であるマクス・ウェルデンは自室で頭を抱えていた。

手にはモンフェルトの一件の書類と師団長拘束に関する書類があった。

その二つを見ながら、マクスは低く唸るような声を出す。

コンコン。

と、部屋のドアがノックされる。

「総帥殿。ベリアル・ジュダ様がおいでになりました」

警護を担当する兵の声。

「通せ」

マクスは短く答える。

扉が開き、一人の男が入ってくる。

精悍な顔立ち。鮮やかな金髪を後ろで一本にくくったその姿は、掛けている縁無しの眼鏡と相まって理知的な雰囲気を醸し出していた。

「ベリアルか。様子はどうじゃった？」

マクスは金髪の男、ベリアルに尋ねる。

「はい、ピャロット殿とシリュウ殿は既にラグーナの裁判所に送られたとの事です」

ベリアルは低く通る声で淡々と報告をする。

「ピャロット殿は目立った抵抗もなく拘束を受け入れたそうですが、シリュウ殿はかなり抵抗をしたとのことで……」

「当たり前じゃ。いきなり身柄の拘束などと馬鹿げた暴走としか言い様が無いわ！」

「はい。しかし罪の裏付けに繋がる情報が両者とも大量に見つかっております」

「不必要な程にな。で、暴れるシリュウをどのようにして拘束したと言うのじゃ？」

マクスは不機嫌丸出しに尋ねる。

「はい。シリュウ殿の拘束には『白狼』が動いたと報告を受けています」

「『白狼』じゃと！奴らめ、本気でワシらを潰しにかかろうとでも言うのか……！」

マクスはドンと机を叩く。

「銃騎兵団も周到な様子。皇帝陛下のお許しを武器にやりたい放題ですな」

「とにかく情報が欲しい。ベリアル」

マクスが呼ぶと、ベリアルは軽く頭を下げ、

「了解しております」

全てを理解しているかのような一言だった。

「今は帝都には信の置ける人間が少ない。わしの補佐官としての働き、期待しておるぞ」

「勿体ないお言葉、このベリアル・ジュダ。魔術兵団総帥補佐官の名に恥じぬ働きを致します」

ベリアルは恭しく頭を下げると、マクスの部屋を出る。

そのままベリアルは部下達のいる会議室を目指す。

「……ん、あれは」

その途中、ベリアルはある人物を発見する。

「クロスザード・バラムか」

声を掛けた先、真っ白いマント、白い軍服に身を包み、白い肌と銀髪が特徴的な男、魔術兵団第三師団長クロスザード・バラムが立っていた。ベリアルに気付くと、小さく礼をする。

「ベリアル……補佐官」

か細い声でクロスはぽつりと言う。

「北から戻っていたのか」

「はい……ピャロット殿と……シリュウ殿……が捕まった……と聞きまして」

クロスはボソボソと言う。

「そうか。これからは情勢が不安定になる。クロスザード殿にも働いていただく必要が出てくるだろう。頼んだぞ」

「分かり……ました……」

クロスはまた小さく頭を下げる。

「では私は仕事があるのでな。これで失礼する」

ベリアルはクロスの肩をポンポンと叩き、再び会議室へと歩きだす。

その様子を見つめるクロス。

「ベリアル……ジュダ……か」

ぽつりと呟いたその一言は、誰に届く事無く虚空に消えたのであった。

［46］動きだす思惑（後書き）

ある女優さんの名前を思い出そうとして、思い出すまで2週間かかりました。

普通に調べりゃ良かった。

では次回。

［４７］桟橋で出会った少女（前書き）

魚は刺身とか寿司とか、

塩焼きとか味噌煮とか、

好きですねぇ。

新章突入。４７話と参りましょうかねぇ。

［47］桟橋で出会った少女

ぐぎゅるるるごぎゅぶるるんぐむろんばるどぎゃん。

「腹減った」

『お腹の音かよ』

そんな腹減りの俺は今、海を横目にひたすらに歩いていた。

ん？海？

「よし、この腹を満たす活動に移ります」

『はい？』

俺は進路を変更し、波打ち際の岩場に向かう。

『釣りでもするんですか？』

「いや、そんな悠長な真似はしない。こういう時こそ力の出番だ」

俺は全神経を研ぎ澄まし、海中に意識を向ける。

「……」

数瞬の静寂。波の音だけが辺りに響く。

「……そこだ！」

俺は叫ぶなり矢の如き勢いで海に飛び込む。

そして、

「ゲットじゃ～～～～い！」

その手に見事魚を掴み取りして帰還。

「人間超精密魚群探知機の勝利だな！」

俺はびしょびしょの体で魚を高々と掲げる。

『……なんでしょう。やってる事はすごいのに素直にそうは思えない……ギャップ？』

ゆめじんのフランクさ加減が最近尋常じゃない気がする。

「まぁ、とにかく食料確保っと。焼くなり煮るなりまずは場所が必要だな」

俺は岩場から離れて、作業の出来る場所を探す。

「お、あの桟橋の辺りなんかいいかもな……ん？」

俺が見つけた桟橋の上に、なにやら数人分の人影が。

「ってありゃぁ……軍の奴か！」

３人の体だけは屈強そうな男性軍人がいた。何かを囲んでるように

も見えるが……。

俺はそろりそろりと桟橋に近づく。

「近づかないでって言ってるでしょ！」

突如響き渡る甲高い声。

「おい、嬢ちゃん。そんな格好で俺らの前通り過ぎようとしといてそれは無いんじゃねぇか」

近付いてみてようやく状況が分かった。３人の軍服が１人の女の子を囲んでるんだ。

むむ、下らない悪事の予感。

「私はあんたらなんて顔も見たくないの。今すぐ私の視界から消えないとそのご立派な肉体を八つ裂きにしてやるわよ」

軍服に囲まれた女の子。赤茶けた髪を後ろで２本にまとめた髪を振り乱し、恐ろしい事を口にする。

太ももの辺りまで裾が切られたズボンとタンクトップという格好の上から、あれは軍の上着？なんであんなものを着てんだ？

「おっと嬢ちゃん……。あんまり俺達を怒らせない方が身の為だぜ」

「そうそう。嬢ちゃんの綺麗な体まだ汚したくはないだろう？」

女の子の挑発など全く気にも留めない様子で、軍服達は女の子に迫

っていく。

やばい。俺はそう思ってとっさに桟橋に飛び乗り、手頃な近さの軍服の後頭部を殴る。

「がふぉ！」

倒れる軍服。驚く皆さん。女の子も目を丸くしている。

「だ、誰だ貴様！？」

とかなんとか聞かれた気がしたが、その質問に答える間もなく彼は勢い良く海にダイブ。

残る一人はというと、拳銃を構え、こちらを睨んでいた。

「貴様……もしや、キリハラか！」

「あら？俺の名前って結構知れ渡ってんのね」

「奇怪な術を使い数々の帝国軍施設を壊滅させた大犯罪人。ここで倒してくれる！」

軍服の手に力がこもったのを見て俺は構える。

「ぎゃんっ！」

しかし、軍服の手からは拳銃が放たれる事は無く、その場で白目を剥いて倒れてしまう。

「こういうのを僥倖って言うのかしらね。まさかこんなところでこんな怪物に会えるなんて……」

軍服が倒れた先では女の子が不敵な笑みを浮かべて立っていた。

「久々に外に出てみたらいきなり帝国の下衆軍人が熱烈なアプローチをしてきてうんざりな気分だったけど……」

女の子は俺の方に近寄ってくる。

「ま、こんな奴ら私一人でもどうにかなったけどね」

女の子はわざと軍服を踏み付けながらこちらに来る。

「あなたがキリハラ?帝国軍をとにかく潰し回っている怪物」

「俺はどんだけ恐ろしい存在にされてるんだよ」

なんだか先が思いやられてため息をつく。

「あら、私だったら大歓迎だけど?あんな憎たらしい連中事も無げに倒せる力、うらやましいったらないわ」

なんだろう。この子の軍に対する刺は半端ではないな。

「でも……なんか話に聞くより随分地味ね。あなた本当にあのキリハラ?」

さらっと心にサクっとくる事を言われてしまった。

「残念ながら本物だよ。帝国軍とドンパチかましてる桐原慎吾です、はい」

「ふぅん。まぁでも口ではなんとでも言えるからね」

じゃあなんで確かめた！

「ねぇ、ちょっと私と戦ってくれない？」

「……は？なんで？」

「あなたが本物のキリハラなら奇怪な術を使えるはず。それを見せて欲しいの」

女の子は目の笑っていない笑顔で軽快に説明する。

「はぁ……。あのねぇ、俺の力は見せ物じゃないから、それに戦いなんて物騒な事会ったばかりと女の子と……」

「じゃあ言い方を変えるわ。私と戦いなさい」

女の子は笑顔から真顔に変化し、威圧するような視線を送ってくる。

「もしあなたにその気がないならそれはそれでどうぞご自由に。でも私はあなたを容赦なく攻撃するから。分かった？」

「なんだよそれ！大体俺と戦ってお前になんのメリットがあるんだよ」

「メリットは……あるけど言えない」

女の子の言い方に俺は段々と苛立ちが募っていく。

「……見極めたいのよ。あなたが本当に化け物じみた力を持っているのかどうかを、ね」

「はぁ？」

そんなもの見極めてどうしたいってんだよ？

「まだ名乗ってなかったわね。私はシンディ、年は１６。子供扱いしたら殺すからそのつもりで」

シンディはそう言って羽織った軍服のポケットからなにやら取り出す。

「ていうかお前なんでそれ羽織ってんだよ！それ軍の奴だろ？」

俺が聞くと、シンディは特に大きな反応も無く上着に目を向ける。

「ああ、これ？むかつく将校をぶっ飛ばした時に奪ってやったの。こういう改造施してね」

シンディがくるりと後ろを振り向くと、上着の背中に描かれた盾と剣、俺も何度か見た帝国の紋章、に大きくバツ印がついていた。

「嫌味ったらしさ抜群でしょ。おかげでさっきみたいのに絡まれるんだけどね」

シンディはくるりと再び前を向く。

「ま、そんなのはどうでもいいわ。そろそろ始めてよろしいかしら？」

シンディは軍服から取り出したそれ、黒い扇子を広げる。あれがあいつの武器なのだろうか。

「ふぅ……おい、ゆめじん」

『な、なんですか？』

「おれちょっとばっかし若者と拳の交流するから」

『え……』

「仕方ないだろ。理由は分からないがほっとけば確実に俺を殺しかねないからな」

やれやれ、と俺は肩をすくめる。と同時に戦闘の構えをとる。

「やる気になってくれたみたいね……。それじゃいくわよ」

シンディの顔にいくらかの緊張が見て取れる。

「訳も分からなく挑まれて、訳も分からなく倒される。そんなのはごめんなんでね」

俺も体を緊張させる。

桟橋が戦場へと変わろうとしていた。

「じゃあ、こっちからいかせてもらうわよ！」

シンディは扇子を空に向け掲げる。

すると、それに呼応するかのように海から数本の水柱が立つ。

「まずは小手調べよ！」

水柱は空中で形を変え、槍のように尖り、その鋭い切っ先は真っ直ぐに俺に向けられる。

「はぁぁ！」

シンディが扇子を力強く振り下ろす。それを合図に3本の水の槍が俺に向かってくる。

「くらうかよ！」

俺は壁を作るか如くの広範囲で衝撃波を撃ち、槍を消滅させる。

「うっし！……ってあれ？」

シンディがさっきまでの場所にいない！一体どこに……。

「こっちよ！」

背後からの声、と共に飛んでくるシンディの蹴り。

「んぐぉ！」

俺はそれをなんとか腕でガードする。

「こんな基本ともいえる戦術にひっ掛かるなんて、あなた素人？」

明らかにバカにする口調。シンディは俺から距離を取り、再び扇子を振りかざす。

再び水柱が何本もあがるが、今度は槍が現れない。

「？」

俺が次の攻撃に備えシンディから目を離さないでいると、

「そんなに見つめないでよ。……当たるわよ？」

シンディはクイと人差し指で上を指す。

「何が」と聞く暇も無くそれは頭上から襲い掛かってきた。

「ぬぁぁ！」

水の槍。俺の体をいくつかが掠めていく。

「同じ相手に同じ手は二度は使わない。こんなに簡単に引っ掛かれちゃぁ……」

シンディは呆れ気味にため息を一つ。

水の槍は作ってなかったんじゃない。上空で作って落としたんだ。

くそ！こんな簡単な戦術に、俺は……！

「もし、あなたが本物のキリハラだというのなら……興ざめね。こんな弱い男に軍は掻き乱されているっていうの？」

シンディは扇子を閉じておもむろに桟橋を離れようとする。

「おい……どこへ行く」

俺は頬の傷から滲み出る血を拭いながら言う。

「帰らせてもらうわ。あなたとの出会いは僥倖でもなんでもなかった。時間の無駄にしかならなそう」

グッ。と、俺の中で何かが込み上げてくる。

「勝手に終わらせてんじゃねぇよ……。今度はこっちの番といこうじゃねぇか」

俺は拳を握りシンディを睨む。

「あなたの力がいか程か……私なりに計ってみたけど、私の期待を大いに裏切ってくれたわ。悪い意味でね」

シンディの目は真剣だった。真剣だったからこそ、俺は退けなかった。

「あの程度で男の価値を定めるとは最近の女子はせっかちでいけないねぇ」

やれやれと、俺は肩をすくめる。

「は、はぁ？あんた何言ってんのよ。せっかちって、馬鹿にしてんの！」

シンディは俺に対する苛立ちを露にし、再び扇子を広げる。

「いいわよ……。とことんまで相手をしてやるわよ！」

水柱があがり、槍が出現する。その数はさっきまでの攻撃とは比較にならない数。何十本という槍が俺に向けられる。

「さぁ、どうするっていうのかしら……」

シンディは俺の出方を見るかのようになかなか槍を放ってこない。

「いいから撃ってこいや。そして教えてやるよ」

俺は仁王立ちで構える。

「俺の強さをな！」

「！……分かったわよ。お望み通りにしてあげるわ！」

扇子が振り下ろされ、数十本の槍が一斉に飛んでくる。

ズドォン、と轟音の如く水の槍が弾ける。

「……」

シンディは水煙が立ち上るその光景をただじっと睨んでいた。

「……何やってんのよあたしは」

シンディは唇を噛みしめ顔を俯ける。

「これじゃあ、あいつと変わらないじゃない……」

シンディは扇子を強く握り締める。

「……誰が誰と変わらないって？」

「え？」

水煙の中からゆらりと現れる一つの影。

「う、嘘……。なんで立てるの！？」

水煙が晴れ、現れたのはもちろん俺。

「俺の本気の体の堅さをなめんなよ」

「で、でも！鉄すら貫く事が出来る槍なのよ！」

「だったら俺が鉄より堅かったってだけの話さ」

俺は力強い足取りでシンディにゆっくりと近付いていく。

「さぁ、今度こそ俺の反撃といこうか」

［47］桟橋で出会った少女（後書き）

特に書く事がない。

でも書いちゃう。

では次回。

［４８］鬼狩りの男（前書き）

雪ですな、雪。

寒過ぎて傘が壊れました。

……。

寒さは関係ないか。

４８話ざんす。

［48］鬼狩りの男

「は、反撃……？」

「その通り。いきなり突っ掛かってきた悪い子にはお仕置きが必要だよなぁ」

俺はパキッポキッとわざとらしく手を鳴らす。

「あ、あんたがどんな手を使って槍を防いだかは知らないわ。でも、そんなトリックみたいな真似は二度は通用しないわよ！」

シンディは水の槍を正面から放ってくる。

「トリックゥ……？てめぇの言いてぇのは……」

俺は拳を強く握る。

「こういう事かぁ！」

ストレートパンチ一閃。拳と激突した槍はただの水となり霧散する。

「……！」

今度は疑う余地はあるまい。奴の放つ槍では俺の拳は潰せない。

「おっし、それじゃあ反撃と……」

「いいじゃない……」

「ん？」

シンディの口の端が吊り上がる。

「そうでなくっちゃね。いいわ！気に入った！」

「……は？」

言ってる意味がよく分からない。どういう過程を経て俺は気に入られたんだ？

「でももう少しだけ……私に付き合ってもらえるかしら……？」

シンディは扇子をしまう。

「付き合う？お前一体何言って……」

「海神の怒りを我が手に！」

俺の話など聞く耳持たずなシンディはいきなり叫ぶと、海の水を広げた手のひらの上に集約させる。

「怒りを以て我が力へ！海王槍！」

集約された海水は槍の形へと変わっていく。長い柄のの先に、船の錨の形の刃を付けて。

「これが私の本気……。いくわよ！」

シンディは己の身の丈の倍の長さはあろうかという槍を振るい、向かってくる。

「くそ！訳分かんねぇぞ！」

俺も構える。とりあえずよく分からないまま負けるのは御免だ。

と、場の緊張状態がＭＡＸに達した時だった。

「だめ～～～～～！」

場に似合わぬ甲高い、というより幼さすら感じさせる声が響く。

そして、俺とシンディの間に黒い物体が降り立つ。

「レン！モリナガ！どうして……」

シンディは槍を構えたまま驚きの表情で固まる。

「どうしたのはこっちの台詞だよ！こんな所でそんなもの出しちゃダメでしょ！」

黒い物体……はよく見れば熊で、その背に女の子が乗っていた。

１０歳くらいの、黒髪でツインテールの女の子、がシンディにぷんすか怒っている。

「軍の奴らに見られたらどうするつもりだったの？今はこんなことしてる場合じゃないでしょ！」

「い、いえ、レン。私はいたずらに海王槍を出した訳じゃないのよ……。あ、あの男と戦っていてね」

「あの男……？」

女の子が熊ごと振り向いてこちらを見る。

「……」

じーっと俺を見る女の子。

「……誰？」

ぼそっと一言。まぁ、そうなるわな。

「キリハラよ。あのキリハラ」

シンディはなぜかドヤ顔で呼び捨てる。

「え！この人があの非道で鬼畜で容赦なくて三度の飯より返り血が好きなキリハラ！？」

「そうよ」

「違う！」

俺のイメージってそんなにバイオレンスなの！これが噂話の一人歩きってやつ？怖っ！噂怖っ！

「でも、なんでそのキリハラとシンディが戦ってるの？」

女の子はまた熊ごと振り返りシンディに聞く。

「見極めてたのよ。本当に化け物じみた力を持っているのかってね」

「そこだよ。そもそもなんで見極められる必要があるんだよ」

俺は兼ねてからの疑問を口にする。

「ごめんね。シンディは人付き合いが致命的にへたくそだからこんなやり方しか出来なかったんだよ」

女の子が熊ごと振り返り熊ごと頭を下げる。この子は熊とセットっていう認識でいいのだろうか？

「今私達すごい困っててね。強い助っ人を探してたんだよ」

「困ってる？助っ人？……どういう事だよ？」

「それはねぇ……ここだと話し辛いかも。だから一緒に来て」

そう言って女の子は熊と一緒に手をぱたぱたさせて「おいで」のポーズ。

「ちょっ！レン！こいつを連れていく気！？」

「そうだよ。シンディがいきり失礼極まりない事したんだもん。お詫びしないとね」

なんか、この子言葉の端々に刺があるのは気のせいだろうか？

「それにこんな場所にいつまでもいたら軍の奴らに見つかっちゃうしね」

「う……確かに。でもいきなりあそこに連れていこうって言うの？」

シンディはあまり乗り気ではない様子。

「もしこの人に本気で助っ人してもらいたいならまず私達が本気だってことをおしえてあげないとね！」

女の子は力強く言い放つ。

「もし協力が得られなかったらどうするのよ？」

「その場で永遠に口を塞ぐ！」

「ひぃ！」

何その重すぎるリスク。

「……大丈夫。冗談だよ」

女の子は明るく言う。

「そ、そう……」

微妙な間があった事については触れない方がいいのかしら？

「じゃあ一緒に行こう！私達のアジトへ！」

「ちょ！レン、声が大きい！」

「だいじょーぶ。あんな場所簡単には入れないから」

「……」

俺はどこに連れていかれるのだろうか。

『ていうか行くんですか？シンゴさん』

何やら困っているようだしな。軍絡みかもしれないし話だけでも聞いておきたい。

『断ったら殺されるんですよ？』

そんなことにはならない……と思う。

『と、いいんですがね』

「は、はは……」

俺は渇いた笑みを浮かべつつ、二人に付いていく。

「ていうかこの辺って軍の基地でもあるのか？」

俺は斜め前を歩くシンディに尋ねる。

「いえ、近くには奴らの根城は無いわ。どうして？」

「いや、さっきの奴らどこから来たのかなーって」

近くに基地は無いとなるとさっきシンディに絡んでた連中は……。

「海よ」

「は？海？」

俺は水平線に目を向ける。どういうこと？母なる海はとかそういうの？

と、訳の分からない疑問が脳内に渦巻いたが、答えはすぐにシンディの口から告げられる。

「戦艦よ。この辺りの海はある艦隊が支配しているのよ。恐らくそこの奴らね」

「しつこいよねー。あの人も」

レンも話に加わる。

「あの人？」

俺が何気なく聞くと、シンディは敵意むき出しの顔になり、答えてくれた。

「帝国軍銃騎兵団大佐、アグル・ブラスト。通称“鬼狩りのブラスト”」

「鬼狩り……。そいつがその艦隊のボスなのか？」

「そう。自身の部隊を率いて私達を執拗に追い回す、因縁の相手ね」

「助っ人のキリハラさんにお願いしたい事情にも繋がってくる人ですね」

二人に付いていき岩場の洞窟に辿り着く。

「俺にお願いしたいこと？」

「私達“漆黒のユニコーン”の存亡に関わる問題なんです」

「本来は私達だけでやらなきゃいけないんだけどね」

「漆黒のユニコーン？……つまり、どういうこと？」

暗い洞窟を進みながら、俺はとにかく聞いた。

「私達は海賊なんです。“漆黒のユニコーン”とは私達の所属する海賊団の名前なんです」

レンは熊にしがみつきながら器用に後ろを向いて説明してくれる。

「ま、船長不在じゃ海賊団も何もないけどね」

シンディはため息。

「え？船長いないの？」

「捕まったのよ。そのアグル・ブラストにね」

忌々しげにシンディはその名を口にする。

「私達を助けるために船長は捕まった。だからこそ、私達が助けなきゃならない……！」

シンディの想いのこもった言葉を聞き俺は大体の事情を把握した。

「なるほどね」

そして、自分が招き入れられた理由も。

俺は何も言わず二人の後に付いていった。

……。

……。

沖には鈍い黒光りを放つ数隻の船が、中心の巨大な戦艦を守るように展開されていた。

中央の戦艦、そのデッキには陸を見つめる一人の男がいた。

眼帯で片目を隠したその男は、紫の髪を苛立たしげにかきあげる。

「おい、お前ら……」

口にはタバコをくわえ、軍服の上着は肩に掛けただけ。しかし、その姿は、周りの軍服達に重い威圧感を与えていた。上着の背中には赤く大きな字で“鬼”の文字。

「女に喧嘩ふっかけて負けて帰ってくるとはいい度胸してんじゃねぇか……ああ？」

男の前には3人の軍服がガタガタと震えながら立っていた。

3人の表情からその震えが恐怖からくるものであるということが容易に想像できた。

「情け無さすぎて反吐が出る。今この場で処刑だな」

男は冷たく低い声でそう言う。

「ひ！そ、それだけは！」

3人の一人が裏返った声で言う。

「あぁ？」

男はそれを鋭い目線で睨む。

「あ……ぇ……っ」

「てめぇらが勝手に外に出て勝手に恥さらしてきたんだよその恥はうちの隊の恥つまり俺の恥なんだよ分かってんのか？」

男は腰に提げたホルダーから拳銃を取り出し、3人に向ける。

「あばよ」

間髪入れずに一発の渇いた銃声が響き渡る。

「……っ」

3人の内の1人が倒れる。

が、血は流れていない。極度の緊張に耐え切れず気絶してしまったようだ。

男の放った弾丸は3人の誰にも当たらずに、真っ直ぐに海へと消えていった。

「……脆弱共が」

男は吐き捨てる呟くと、拳銃をしまい、その場を去っていく。

意識を保っている2人は、緊張から解放され、崩れるように膝を付く。

その様子を見ていた初老の軍服が、ふぅとため息をつく。

「まったく。ブラスト大佐は部下を脅すのが巧くて困る」

そう呟いて3人を艦内の牢に連れていったのであった。

場を離れた男、アグル・ブラストは、甲板で新しいタバコに火を点ける。

「相変わらず、不器用な叱り方ですこと」
戦艦には不似合いな上品な女性の声。
「ニールか。何の用だ」
「あら、つれない言い方ですのね。あなたの代わりに船長さんの様子を見てきて差し上げましたのに」
ニールと呼ばれた女性、ウェーブのかかった鮮やかな金髪をアップにまとめ、黒のドレスに身を包んだおよそ軍人には見えない格好であるその人が、アグルに並ぶ。
「船長さん。かなり参っていましたわね。汚らしいお口の方はまったく減ってはいませんでしたが」
「そいつぁ結構だ。で、船の場所は吐いたのか？」
アグルが聞くと、ニールは首を優雅に左右に振る。
「私を辱める言葉は尽きずとも、肝心のお話は引き出せませんでしたわ」
「そうか……まぁ、いい。奴がこちらの手の中にいれば残りの奴らも逃げ出しゃしねぇだろう」
アグルの口に歪んだ笑みが浮かぶ。
「……随分とこだわりますのね。その海賊に。上層部が快く思って

ないのはご承知でしょうに」

「爺共の戯れ言いちいち聞いてたらこっちが爺になっちまう。それに、あいつらだけは俺の手で始末しなけりゃ収まんねぇんだよ」

アグルは眼帯をグッと掴む。

「……あなたの隊の副隊長に就任してはや2年。あなたの事は大概知っているつもりですけど、その目についてだけはお話してはいただけませんのね」

ニールははぁと艶っぽくため息をつく。

「ニール・ファンフルゲン」

「……なんですの？」

いきなりフルネームを呼ばれたからかニールの目が少し訝しげにアグルに向く。

「軍人としての事情ならいくらでも話そう。だがこいつぁ俺の事情なんだ。もし納得いかなかったら艦を降りてもらっても構わないぜ」

「ご冗談を。私はブラスト隊副隊長ニール・ファンフルゲン。あなたに命を捧ぐ覚悟を持つ女ですの」

ニールはその豊満な胸を張り、迷いなく言ってのける。

「そうかよ……」

アグルはニールに目を向けずタバコをふかす。

「さぁ、早く取り返しに来い……漆黒のユニコーン！」

［４８］鬼狩りの男（後書き）

う～み～は～ひろい～な～♪

特に意味なし。

では次回。

［４９］漆黒のユニコーン（前書き）

大雪でした。久々にアスファルトに雪が積もったのを見ました。

思わず「なぜ？」って呟きました。

４９話で候。

［49］漆黒のユニコーン

シンディ達の後についてやたら入り組んだ洞窟を歩く。

「お前らよく迷わないよな？道覚えてるの？」

迷いなく進む2人と1頭に俺は感心していた。

「隠れ家使ってる連中が隠れ家への道覚えてなかったらバカみたいじゃない？」

シンディはちょっと誇らしげに言う。と思ったらフッと苦笑いを浮かべ、

「と言いたいところだけど私だけじゃこんなによどみ無く進む事は出来ないわね」

と付け加えた。

「え？どゆこと？」

「レンよ。あの子はこの洞窟の道を完璧に記憶している。迷いもしなけりゃ間違えた事もないのよ」

俺は熊の背中でご機嫌に鼻歌混じりで熊に進行方向を指示するレンに目を向ける。

「あの子は優秀よ。不自然なくらいにね……」

シンディはぼそっと呟く。

「ん？２人で何話してるの？」

レンが後ろを向いて聞いてくる。

「複雑な洞窟ねって話してたの。さっさと行きましょ」

「うん。そうだね」

レンはくるりと前を向き再びご機嫌モード。

シンディはなぜだか神妙な顔をしていた。

しばらく歩くと俺の身長の倍くらいの大きさの木製の扉のある場所に着いた。

「ちょっと待っててね」

レンは熊を降りて、テテテっと扉に近づく。

「えーっと……１１５７４２３９２！」

そしていきなり大声で数字を並べ立てる。

「な、なにしてんの？」

「暗号よ暗号。ちょっと黙ってて」

はい。と言って俺は口をつむぐ。

すると、扉の向こうから物音が聞こえてくる。

「雄々しきは……」

扉の向こうから響く声。その声にレンは間髪入れずに、

「黒き聖獣！」

と答える。

「……よし。開けるぞ」

ギギギッと、木がきしむ音と共に扉がゆっくりと開いていく。

中からスキンヘッドのおっさんが顔を出す。

「知らない顔がいるな。そいつは誰だ？」

おっさんからの訝しげな視線。

「キリハラよ。私達の味方としてお連れしたわ」

シンディはなぜかドヤ顔で答える。

「そいつがキリハラ……。なんか考えてたよりずいぶん地味な野郎だな」

サクッと傷つく感じ本日2回目。

「地味だけど本物よ。私が確認したわ」

「確認？」

おっさんは首をひねる。

「こいつと戦って、ね。レンに邪魔されちゃったけど」

「邪魔とは失礼だよ！話し合いもせずにいきなり攻撃する方がどうかと思う！」

レンは頬を膨らましてシンディに抗議する。

「まぁまぁ、こんな所で言い争っていても仕方あるまい。中に入ろうではないか」

場に妙に低くダンディーな声が響く。

「キリハラは客人である。入り口に立たせておくのは失礼ではないか」

俺の目と耳が正常であるならば……。

「では、キリハラ殿。汚い場所ではあるがどうぞ中へ」

目の前で俺を丁寧に中へ誘っているのは、レンが乗っていたあの熊。

熊が喋ってる！

「申し遅れました。我が輩、熊のモリナガと申すのであります。今更のご挨拶の無礼、ご容赦いただきたいのであります」

「え?.え?.何?.着ぐるみ?」

俺はペタペタとモリナガの顔を触る。

「着ぐるみ?……はっはっは我が輩は正真正銘の熊なのであります」

目の前で笑っている（ように見える）モリナガ。

「まぁ、初めてこいつが喋るところ見れば普通はこうなるわよね」

シンディは何を合点したのかうんうんと頷く。

「詳しい話は中で致しましょうぞ。どうぞどうぞ中へ」

俺は目の前の熊に未だ驚きを覚えつつも言われるがまま中に入る。

「お邪魔しま……うお!?」

そして中に入ってもう一度驚かされたのであった。

入り江のように海水が引き込まれたその巨大な空間に、一隻のの船が堂々と鎮座していたからだ。

黒き船体。立派にそびえるマスト。そしてなにより目を引くのが……。

「なんだよ、ありゃあ……」

船首に取り付けられた巨大な、真っ白の角。

「どう？私達の船は？」

シンディがやはりドヤ顔でふふんと鼻を鳴らしながら聞いてくる。

「これがお前達の船なのか……。なんというか、とにかくすげえな」

「すげえって……。もっとなんか、こう、ないの？」

シンディに若干呆れられてしまったが、目の前の光景にあまりに胸が高鳴り、それ以上の言葉が生まれなかった。

「まぁ、いいわ。でもこれで私達が“漆黒のユニコーン”を名乗ってる理由は分かってもらえたわよね」

「言われなくとも一発で分かるさ。あんなに立派なの付けられてちゃあな」

白く雄々しき角。それこそがあの船の象徴なのだろう。

「さて、じゃあ中に行きましょうか」

シンディはスタスタと船に向かっていく。

「お、おう……」

俺はシンディの後に付いていく。レンやモリナガも続く。

俺は帆船という物に乗った事が無い為内部の構造なんて知るわけが無かったが、でも、案内された船室は俺の想像の領域はあまり飛び

出さないごく普通の船室だった。

「なにキョロキョロしてんのよ」

先に席についたシンディがなかなか席につかない俺に言う。

「いや、なんか中は普通だなと思って」

「どんなのを想像してたのよ。船首にあんなの付けててもしょせんは船なんだから中は至って普通よ」

「そうか」

俺は納得して席につく。

「お隣失礼するであります」

と言って隣に座るモリナガ。本当になんなんだこいつは。

「じゃあ私シンディの隣ー」

レンも席につく。

「さて、じゃあ時間ももったいないし始めちゃいますか」

シンディは全員が席についたのを確認し、仕切り始める。

「始めるって何を？」

基本的なところの確認。

「あなたにここに来てもらった目的、それを詳しく説明させてもらうわ」

「長くなりそうであるな。ならば我が輩、茶でも用意しよう」

と言ってモリナガはどこぞへ消える。茶を入れる熊て。シュール過ぎる。

「まずは私達、“漆黒のユニコーン”についてね」

シンディはモリナガには構わず話を続ける。

「私達はこの近海を拠点にしている海賊団よ。狙うのは不正に私腹を肥やす貴族や腐った軍人共の船」

「額に汗して働く者達の船からは何も奪わない。我が海賊団の最も誇るべき美学でありますな」

モリナガは茶の入ったカップをトレーに載せて現れる。てか早っ！

「そう。それは船長自らが掲げた私達の誇り」

「そのお陰で国からも軍隊からも目を付けられてる有名人なんだよ、私達」

レンは危機感ゼロな感じで言う。

「でもさっき船長がどうとかって言ってたよな」

そしてそれが俺を連れてきた理由にも繋がるとも……。

「……つい数日前、私達の船長は奴に、アグル・ブラストに捕まったの」

「捕まった……。もちろんそこは踏み入って聞いていいんだよな？」

俺の問い掛けにシンディは静かに頷く。

「むしろこの事について話さなければ先には進めないわ」

「……そもそもなんで船長だけ捕まったんだよ？」

普通に考えて船長だけ捕まって他の何もかもが無事に見える今の状態は不自然としか言い様が無い。

「私達の乗るこの船は基本は他の船と何も変わらないの。でもただ一点、他の船とは異なる特徴がこの船にはあるの」

そう言われてすぐに船首の角に考えがいく。

「言わなくても分かるわよね。船首に取り付けられた“ユニコーンの角”。あれは飾りなんかじゃない。我らが漆黒のユニコーン最大の武器なの」

「最大の武器……。まさか突撃でもするってのか？」

俺は他の船にあの角が突き刺さる様子を想像する。

「その通り。敵船の脇腹を突いて橋頭堡を築いたり、または敵船そ

のものを粉砕する為の兵器よ！」

シンディの言葉に熱がこもる。握った拳が震えとる。

「でもその力を存分に使う為には、あるものが必要なの」

「ある物？」

「そう、魔法石」

魔法石。確か生け贄の村の偽祈祷師やマグノスが使ってたあれか。

「今まで使用していたものが限界を迎えてしまって新しい魔法石を探していたの。でも魔法石は軍が流通を厳しく規制しているから、そう簡単には手に入らなくて……」

「しかもこの船のはすっごくでかいのじゃないとダメなんだよ！」

「魔法石の輝きはいつ見ても素晴らしいのであります」

シンディの説明をレンが補足する。モリナガはとりあえずスルー。

「そんな時に、この近くの港に、魔法石を積んだ軍艦が寄港するって話が入ってきたの」

「それがアグルってやつの戦艦？」

シンディは小さく頷く。

「相手は小規模とはいえ艦隊。まともに立ち向かうのは愚策と船長

は考えたわ」

「もしかして……なんか読めてきたぞ」

「多分その通りよ。船長は危険を承知で1人で戦艦に潜入し、捕まった……」

「なんで船長さんは1人で乗り込んじゃったの？」

「部下に危険を冒させる訳にはいかない。その一点張りよ」

シンディは小さくため息をつく。

「辛い事や苦しい事はまず自分が背負っちゃう人だから……。まぁ、今回のは無謀もいいところだけどね」

「……それだけ聞くと船長さんは考えるより先に行動しちゃうタイプか？」

「かもね。海賊らしいっちゃらしいけどね」

そう言ってシンディは苦笑い。

「で、俺に船長さんを助けて欲しいとでも言うのか？」

「その通りだよ！ヴァルガくんを助けてほしいんだよ！」

「ヴ、ヴァルガくん？」

な、なんだか親しげな感じでレンの口から名前が飛び出したぞ。

「私達漆黒のユニコーンの船長、ヴァルガ・グレーギースのことよ。レン、くん付けはやめなさいってあれほど……」

「え？ヴァルガくんはヴァルガくんだよ」

きょとん首を傾げるレン。

なんなんだろう。この和やかな海賊団は。

「……とにかく、あなたには船長の奪還と魔法石の調達を依頼したいの。もちろん報酬は出すわ」

「……」

俺は考える。いや、この件に首を突っ込む気は満々なのだが、それとは別の事で。

「……報酬の先払いって訳じゃないんだが、一つ頼んでもいいか？」

「な、何？」

突然神妙な顔になった俺を見て、シンディの顔も真剣さが増す。

「……何か食わせてくれ」

「……」

静まり返った船室に、俺の腹の音とモリナガが茶をすする音だけが響いていた。

……。
……。

海上に停泊する軍艦『レヴィ・アント』。その艦内の一室で、ニールは部下から渡されたある写真をじっと見つめていた。

「その女、漆黒のユニコーンの船員に間違いありません」

部下は写真に写るその少女を示して言う。

「で、この女が浜辺で何者かと交戦していた。そういうことですのね」

「は。部下の目撃証言から相手はあのキリハラではないかと」

部下の言葉にニールの眉がピクリと動く。

「キリハラ……。それが本当ならなかなか大変な事になってしまいますわね」

「はい。今中央の情報と照合しておりますのでじきに確認がとれるかと」

「……いえ。それでは遅くなるかもしれませんわね」

ニールは眼光鋭く呟く。

「この事はアグル大佐には伝えましたの？」

「い、いえ。大佐は今お休みになられているのでまずは副隊長にと」

「そう……。私、ちょっと出掛けて参りますわ。隊長が目を覚ましたらよしなに誤魔化しておいていただけます？」

ニールはニコリと部下の肩に手を置く。

「は……お、お出かけ、とはど、どちらに？」

ニールのしなやかな指先に肩を撫でられ、目に見えてどぎまぎする部下。

「すぐに戻りますわ。……供を連れていきたいので、マシューを読んでいただけますかしら？」

「は、マシュー中尉でありますか？」

「そう、ちょっとしたお散歩に参りましょう、と」

「は、はい！すぐにお呼びしてまいります」

部下は大急ぎで部屋を出ていく。

「……さすがは男所帯で暮らす軍人さん。楽勝ですわね」

ニールはふんと鼻を鳴らし、再び写真に目を落とす。

「あの方の望みは私の望み。わずかに隙を見せたその尻尾、掴んで引きずりだしてあげますわ」

ニールはシンディの写った写真を握り潰す。

「漆黒のユニコーン……あの方の心を奪う罪深き者達の命、私が刈り取って差し上げますわ」

［４９］漆黒のユニコーン（後書き）

あとがきの有効活用について考える。

……（考え中）

思いついたら実行します。

では次回は５０話です。

［５０］夜の海とシンディ（前書き）

本編５０話到達。

次は６０話ですな！

きりがない！

５０話ですぜ。

［50］夜の海とシンディ

「うぷー、食った食った」

俺は食物で満たされた腹を太鼓の如くポンと叩く。

「良い食べっぷりでありました。我が輩も腕を振るった甲斐があったというものであります」

モリナガはふふんと胸を張る。

「ていうかモリナガが作ったんだ……」

「その通りであります。我が輩、この船のコックでもあります故」

ますますなんなんだこの熊！

「はいはーい！私も手伝ったんだよ！」

モリナガの背中からひょこっとレンが顔を出す。

「レンが塩を入れるタイミングがばっちりだったので、我が輩は大助かりだったのであります」

「は、ははは……。ありがとね」

俺の中の海賊のイメージがぐらりと崩れかける。

「さて、腹も満たされたし色々と詰めの話を……したいんだけどシ

ンディはどこ？」

俺は食堂を見渡すがそれらしき姿は見当たらない。

「シンディ？……多分外に行っちゃったんじゃないかな？」

「外？浜の方にか？」

レンはこくりと頷く。

「シンディ、よく一人で黄昏れるのが好きなんだよ。浜辺でボーッとしてるのがね」

「へぇ……」

「その前にキリハラ殿」

席を立とうとした俺をモリナガが止める。

「な、何？」

「食後の茶はいかがかな？」

「……いただきましょう」

俺は再び腰をおろした。

……。

……。

モリナガの茶をいただいてから、結構な時間シンディの帰りを待った。

が、なかなか帰ってこないので、捜しに俺も外に出てみることに。

「て、出てきたはいいんだが……」

俺は今洞窟のどこかにいる。

そう、どこかに……。

「普通に迷ったぞこんちくしょー！」

『だから待ってた方が良かったんですって』

「うるさい！こうなったら奥の手だ！」

『はい？奥の手？』

「忍法壁抜けまくり！」

俺は叫ぶと、壁に向かって突進する。

ぬるり、ぬるりと俺の体は洞窟の岩壁達をすり抜けて行く。

「よぉし！これならすぐ外に出られるはずだ！相変わらず感触は最悪だがな」

『ずるさ爆発ですね』

ゆめじん呆れてますな。

「いいんだよ！結果オーライで行こうぜ！」

そう言って勢い良く壁を抜けた瞬間、俺の目の前に真っ青な海が広がる。頭上には真ん丸なお月さま。

「……え？」

出た！と思った瞬間、俺は自分の足元がスカスカである事に気付く。

「……」

チラリと下を見る。そこには夜の闇を吸い込んだかのような深い青。そう海。

で、俺は重力に逆らわぬまま海へとダイブしましたとさ。

「がぶほぉっ！」

冷たっ！暗っ！

軽くパニくりつつも俺は水面目指してひたすら手足を動かす。

「ぶはぁっ！」

ようやく海面から顔を出した俺は近くの岩場に向かい泳ぐ。

「えらい目にあったわい……」

『自業自得ですね』

「今回に限っては返す言葉も無いわ」

俺は上がりやすそうな岩場に近付き手を掛けて上がろうとする。

「何の音かと思ったら……何してるの？」

すっと差し出される手。

ちょいと驚きつつその手の主の顔を見る。

「どうしたの？早く上がりなさいよ」

そこには何とも言えない、表情で俺の顔を見るシンディがいた。

「あ、ああ……」

俺はシンディの手を掴み、引き上げてもらう。その時のシンディの力が意外に強かったのが印象的だった。

「はぁ……ありがと。助かった」

はは、とびしょ濡れながらも乾いた笑みを浮かべる。

「こんな時間に水浴びなんて風邪引くわよ。ていうか本当に何してたの？」

シンディの疑うような目と口調。

「いや、お前と話をと思って待ってたんだがな。なかなか戻ってこないからこっちから来てみた」

「あたしに？い、一体何を話そうっての？」

なぜか少しどもるシンディ。しかし気にせずに俺は続ける。

「いやいや、船長さん奪還作戦の詳細を話し合おうと思ってたんだよ」

「あ、あ～……。そうね、そうよね。それは話し合っとかないとね」

なぜか俺から視線を外すシンディ。なんなんだ一体。

「というかお前はこんなところで一人で何してたんだよ？」

辺りは月明かりに照らされた浜辺か岩場しかない。

「私は……ちょっと考え事をね」

シンディは視線を水平線の向こうにやりながら言う。

「考え事？何を考えてたの？」

「残念ながらあなたには言えないわね」

「あら、そうかい」

「ていうか女が何かに悩んでる素振りを見せてもそうストレートに踏み込まないのが紳士ってものよ？」

諭されてしまった。

「すまん。なにぶん放浪生活が長いもんでね。紳士の振る舞いを学ぶ時間も無かったんだ」

俺は肩をすくめながら軽く苦笑いして言う。

「そう……」

シンディは再び視線を海の向こうに移す。

俺もなんとなく同じ方向を見る。

「……ねぇ」

「うん？」

シンディは視線をそのままに俺に話しかけてくる。

「あなたは帝国軍をどう思う？」

「え？」

いきなりな質問。俺はその質問の真意は図りかねたが、それでも俺なりに言葉を紡いで答える。

「良くも悪くも強い連中の集まり、って感じかな」

「強い……。じゃあその強さって何？」

「うん？……まぁ、単純に腕力の知力の強さや……はたまた精神力や芯の強さってやつかな。なにかしらの強さを皆が持ってる集団じゃねえかな？」

俺は自分自身で言葉の意味を咀嚼しながら口に出していく。

「そう……。強さ、か……」

シンディはそうぼそりと呟き、それから少しの間黙っていた。

「……」

俺はシンディの次の言葉を待った。なんとなく待たなきゃいけないような気がしたから。

「……私はね。帝国軍っていう組織が心の底から嫌いなの」

嫌いとは言うものの、言葉ほど敵意はその口調からは感じなかった。

「なにかと言えば権力をカサに着て自分より弱い奴らばかりを攻撃する。やってることはただのいじめっ子よ。だから私はあいつらが大嫌い」

「そうだな。そういう奴らとも何度か戦ったが……。でも、そんな奴らばかりじゃないのも確かだぞ。中には自分の信念に従って真っすぐに生きようとしてる奴らも……」

「でも人々を苦しめる奴らが幅を利かせている！」

突然シンディが声を荒げて俺の言葉を遮る。

「いい奴らがいるっていうのならなんでそいつらは腐った奴らを追い出そうとはしないの？自分の信念にのみ従って、それを貫ければそれで満足なの？」

自分の中に溜まった物を吐き出すかのようなシンディの言葉。

俺は黙ってシンディの言葉に耳を傾ける。

「そして権力を握るのはいつもどこかに悪を秘めた連中よ。誰かを苦しめてのしあがった連中なのよ！これは歴史が証明しているわ。そして、歴史が肯定し続けた事実はそう簡単には覆せない。善良な何人かが頑張っても、絶対にね……」

そこまで言ってシンディははっとなったような表情を見せる。

「ご、ごめんなさい……私、つい熱く……」

心底申し訳なさそうに視線を泳がせる。

「いや、素直な意見が聞けて良かったよ。シンディみたいに軍に少なからず良くない感情を抱く人がいる限り、それを変える為に戦わなくちゃいけないって……気持ちを再確認できた」

俺は自分でも驚く程自然に口元に笑みを浮かべる。

「キリハラ……」

シンディは驚いたような泣きそうになってるようななんかごちゃまぜな表情になっている。

「まぁ、まずは船長さん助けないとね。そこが第一歩だ」

「そう、ね。……なんだかあなたが凄く頼もしく見える。いや、実際頼もしくないと困るんだけどね」

「はっはっは。一宿一飯の恩義はちゃんと返す男だぜ、俺は」

ドン、と胸を叩いてみせる。

「そう。じゃあ今日は早めに休んだ方がいいわよ。明日は忙しくなるかもしれない」

「おう。では一緒に戻るか」

俺がそう言うと、シンディは小さく首を振る。

「私はもう少しだけ……浜の方を散歩してから戻るわ」

「そうか。女の肌に夜更かしは天敵だと聞いたことがある。お前こそ早く休めよ」

俺が何気なく言うと、シンディは苦笑いでため息を一つ。

「やっぱりあんたは紳士とは無縁ね」

そう言ってそそくさと浜辺の方に行ってしまった。

「紳士とは無縁？はて、何かまずい事でも言ったかな？」

俺は考えた。しかしいくら考えても答えは導きだせなかった。

「……戻って休むか」

俺は再び壁抜けまくりで洞窟を抜けようと試みる。

「よし、行くっ……！」

いざ突入しようとした瞬間、俺の頭部を強烈な衝撃が襲った。俺は前のめりに倒れる。

「がっ……！？」

敵襲か！？俺はぐらんぐらんする頭を庇いつつ襲ってきた奴に目を向けようとする。

「ぶほほ。まだ意識があるでふ。もう一発くらわせるでふ！」

気色の悪い声と共に、俺の視界は巨大な何かで真っ黒に覆われた。

……。

……。

その頃シンディは、一人とぼとぼと波打ち際を歩いていた。

「はぁ……なんであんなに熱くなっちゃったのかしら」

大きくため息。その表情は暗く沈んでいた。

「でも、キリハラならやってくれそうな気がする。ううん、やってもらうしかないわ。そうとなったら私もしっかりしなくちゃ」

シンディはパンパンと両手で頬を叩く。

「よし！帰ろう！で、お肌の為にも寝よう」

シンディは笑顔を浮かべ、くるりと方向転換をして、その次の瞬間、浮かんだばかりの笑顔は消え去ったのであった。

「ハ～イ、海賊のお嬢さん」

月光の如く金髪に夜の闇に染まったような黒いドレス。ニール・フアンフルゲンがそこに立っていた。

「夜はまだまだこれからですのよ。……私とお遊び、していきません？」

ニールは唇を舌で舐め、そのしなやかな手をシンディに差し出す。

「楽しい、お遊びを、ですわ」

［50］夜の海とシンディ（後書き）

ゆめじん
「今回からこのスペースではこの物語に登場する我々を登場させて小話的な物を色々載せていきたい！なんて思ってるらしいですよ」

シンゴ
「……」

ゆめじん
「あとがきってそういう使い方じゃないよねって意見が飛んできそうですけど飛んでくるまでは頑張りたい！だそうですよ」

シンゴ
「……」

ゆめじん
「シンゴさん？聞いてます？」

シンゴ
「聞いてるさ」

ゆめじん
「そうですか。では気になる点とかありますか？」

シンゴ
「ゆめじんが『』ではなくて「」で喋ってる。レアだ」

ゆめじん

「え～。細かいしぃ……。どうでもいいしぃ……」

シンゴ
「うむ、なんか新鮮だった」

ゆめじん
「……はぁ」

では次回。

［５１］軍の女ｖｓ海賊の女（前書き）

いよいよ冬の終わりが近づいています。

私がみかんを食べないまま……。

どうでもいいってか。

５１話でみかん。

［51］軍の女ｖｓ海賊の女

「あんた……アグル・ブラストの所の……」

シンディは膝を曲げ腰を落とし臨戦態勢に入る。

「ぴんぽーん。ブラスト隊副隊長、ニール・ファンフルゲン中佐ですわ。ま、肩書きなんてどうでもよろしいですわね。私があの方のお側にお仕えしている、その事実が重要なのですわ」

ニールはシンディとは対照的にリラックスした態勢で笑みすら浮かべている。

「で、その副隊長さんが私の前に現れて何の用かしら？」

「うふふ。そう構えないでいただきたいですの。せっかちな女に殿方はなびきませんことよ」

「あんたみたいなお上品にお高くとまった女が軍人でしかもあの男の副官。軍はいつから趣味の悪い個性派集団に様変わりしたのかしらね？」

シンディは声高にニールを挑発する。しかしニールは眉一つ動かさず静かに目を閉じてシンディの言葉に耳を傾けていた。

「……じゃあ戦いましょうか？」

「は？」

「戦って、私の強さを知っていただけたら、私を軍人だと認めていただけるかしら？」

ニールは静かに目を開く。その目には先程までなかった確かな鋭さが宿っていた。

「……！？」

シンディは一瞬で現れたニールの威圧するような迫力に少し押されつつも、踏み止まる。

「……ちょうどいいわ。あんたの首と引き替えにうちの船長返してもらうとするわ！」

シンディは扇子を取り出し、頭上に掲げる。

海水が唸りをあげシンディの頭上に集まっていく。

「先に戦いを口にしたのはあんたなんだからね」

「あらあら、戦る気満々って感じですのね」

シンディの頭上の水が槍の形を成していっても、ニールはまるで動こうとしない。

「あんた、死ぬわよ？」

シンディは不気味とも言えるニールの態度に困惑しつつも、槍をニールに照準を合わせる。

「殺れるもんならやってみなさい、ですわ」

「……はぁっ！」

シンディは頭上の扇子を振り下ろし、高速で槍を放つ。

「……」

槍はニールに命中した。水と砂の入り混じった霧が視界を遮る。

ニールが避けた様子はない。確実に当たった。しかし、シンディは恐ろしい程に手応えを感じていなかった。

段々と霧が晴れていく。

その先に、月光に照らされて動く影が一つ。

「ふぅ……。なかなかの速さと威力。でも……」

霧が完全に晴れた時、シンディの視界に、巨大なそれは入ってきた。

「私の『アナコンダ』を破るには少々力不足でしたわね」

ニールの体を守るように巻き付く銀色の大蛇。ニールはその体を撫でながら穏やかともとれる笑みを浮かべる。

「そんなの、どこに隠してたっていうのよ……」

槍を完全に防がれたシンディは動揺していた。しかし、それを表に出してはそのまま付け込まれる。シンディはそう考えていた。

「私の足元ですわ。この子は地中も問題なく移動出来てしまいますの。いささか常識外れのパワーとこの鋼の皮膚のおかげで」

「隠してたって訳ね。そんなの化け物を」

「ええ。もしあなたが戦いに渋るようでしたら直接あなたを攻撃させようと考えましたが、その必要も無くなってしまったので」

ニールは言いながらアナコンダ、蛇の顎を撫でる。

「改造生物ってわけね」

「改造っていうのは少し言葉が悪いですわね。これは我々がきっかけを与えし正当な進化ですの」

「進化……。軍の利己的な考えもここに極まったわね。呆れるしかないわ」

シンディは扇子を閉じ、その先端を地面に向ける。

「あらあら、あなたには理解していただけないみたいですのね。残念ですわ」

「心にも無いこと言ってんじゃないわよ。そんなに残念かりたいなら……」

シンディは扇子を地面の浜に突き刺す。

「こいつで残念になりなさい！」

「なにを……。っ！」

瞬間、浜から砂と共に水が吹き出してくる。辺りは一瞬で水と砂の煙に包まれる。

「あらあら、こんな目眩ましで私をどうにかしようとでも言うんですの？」

互いに視界が塞がれた状況だが、ニールは蛇を巻いたままのんびりと呟く。

「……その通りよ！」

響き渡るシンディの声。ニールは声のした方、自らの背後を向こうとする。

「はぁっ！」

だが、それよりも早く、シンディの勇ましい声と共に強烈な衝撃がニールの背中、正確には背中を守る蛇に襲い掛かる。

「くっ……ですが、この程度……」

ニールは後ろを向き、アナコンダをその方向に向かわせる。

「遠慮はいらないですわアナコンダ。あなたの力で締めあげてしまえばいいんですの」

アナコンダはニールを離れシンディがいるであろう方向に向かう。

「せいぜい捕まらないようにした方がいいですわよ。この子の力は人の体など造作なく潰す事が出来ますので」

「ご忠告どうも。でもその前に終わらせるわよ！」

シンディの声が響き、ニールの前にその姿を現す。

「蛇を離したのは愚策だったわね。あんたの大事な体が傷ついちゃうわよ」

シンディは勢いをつけてニールに向かっていく。

「私に傷を……？」

シンディの繰り出した拳はニールの顔面を正面から捉えた、ように見えた。

「え……？」

だが、シンディの拳はそのまま空を切り、体は飛び出した勢いのまま波打ち際で跳ね、海に落ちる。

「がっ……ぶはっ！」

「あらあら、夜の海は冷たいでしょう。早く出ないと風邪をひいてしまいますわよ？」

ニールはクスクスと笑いながらシンディを見下すように視線を向ける。

「はぁ……はぁ……なんで……」

シンディは立ち上がりながら感じた不自然を口にする。

「私の攻撃はあんたを捉えていたはず……なんで……」

「簡単な話ですわ」

ニールはにこりと笑みを浮かべる。

「あなたの私に向かってくる力をそのまま受け流させてもらった、ただそれだけの話ですわ」

「受け流す……？」

「ええ、その通りですわ。あなたの向かってくる力が強ければ強い程あなたは自分のダメージを大きくさせてしまいますのよ」

ニールはそこまで言ってから、穏やかに笑みの形になっていた唇を品の無い歪んだ笑みに変える。

「あなたみたいな素人の攻撃は私には児戯にしか見えないんですの」

「なんですって……」

びしょ濡れのシンディの心に泥をかけるようなニールの台詞。

「ふっざけんじゃないわよ……！じゃあその児戯であんたのその上品ぶったきれいなお顔に傷をつけてやるわよ！」

シンディは吠える。しかしニールは眉一つ動かさない。

「そうですわね。児戯は少し言い過ぎたかもしれませんわね。でも、あなたはアナコンダさえどうにかしてしまえば私に勝てると思っていた。違います？」

ニールのたしなめる様な口調。

「あなたは私を見た目で判断し接近戦ならばいけるとでも思ったのしれませんわね。でも、そういう考えで私に向かってくる事自体……」

怒りに満ちた鋭いニールの眼がシンディに向けられる。

「なめんじゃねぇぞガキが……てことなんですのよ」

シンディはその一言に込められた底知れぬ威圧感に思わず体を震わせる。

「私とてこんななりでも軍人。武器無しで戦う術くらい持ち合わせておりますわ」

ニールはシンディに見せ付ける様に拳を握る。

「アナコンダは確かに強力な兵器になる力を秘めておりますが、それだけで中佐の地位に落ち着ける程軍は薄っぺらな組織じゃございませんのよ……。そういえば」

「……？」

ニールはわざとらしく辺りをキョロキョロ見回す。

「そういえばアナコンダはどこに行ったのかしら？あなた、知りませんこと？」

「そんなこと……っ！まさか！」

シンディは直後に上がった背後からの水しぶきに咄嗟に反応しようとしたが、既に遅かった。

シンディの脇腹に、目にも止まらぬ程の早さで衝撃が襲う。

ゴリュ。という歪な音と共にシンディの体は大きく横に吹っ飛ぶ。

「ぐぁ……かっ……！」

激痛。口からは血が飛び出す。

「よくやりましたわアナコンダ」

ニールはアナコンダを呼び寄せ頭を撫でる。

「アナコンダの体はそれ自体が武器のようなものですわ。その体を振るえばそれは即ち超重量の鋼の鞭にもなりますわ」

「ぐっ……はぁ……！」

シンディはなんとか立ち上がろうと足に、腕に力を入れる。

「根性は一人前に備わっているみたいですわね。でも、この状況ではそれも見苦しいだけ……アナコンダ」

ニールの言葉で全てを理解したかのようにアナコンダは地を這いシンディに向かっていく。

「な、なにを……ぐっ……」

アナコンダはシンディの体に巻き付き、容赦なく締め上げていく。

「がっ……は……」

「いいですわねぇ。その顔……苦しみ悶えるその様。海賊にはお似合いの格好ですわ」

「……が……ぁ……あ、あん……たなん……かにぃ……！」

シンディはニールを必死に睨むが、そこに力は感じられない。

「まだまともに口が聞けるんですわね。もういいですわ。アナコンダ、殺ってしまいなさい」

「待てやこらぁ！！」

「……？」

突然場に響き渡る謎の声。ニールは辺りを見渡す。

「なに？誰かいるんですの？」

「……この……声……」

声のした方向。影が一つ、砂を引きずるような音を出しながら二人に近づいてくる。

「勝手に人の恩人殺そうとしてんじゃねえぞ」

月光が影を照らし、その姿が露になる。

「キリ……ハラ……」

シンディは弱々しくその名を口にする。

しかし、そこにいたのはシンゴだけではなかった。

「ま、マシュー！？」

シンゴは自分の倍以上の体格の巨漢を引っ張ってきていた。

巨漢は白目を剥いて気絶していた。よく見れば顔に真新しいアザがいくつかある。

……。

……。

いきなり変なデブにハンマーで叩かれた時には正直びびったが、その驚きはすぐに怒りに変わった。

奴の鈍重な攻撃をかわし、そのたぷんたぷんの顔面に全力の拳を叩き込み、勝負はあっけなく着いた。

そして俺は、そいつが何者かを調べる間もなく、浜辺に響く轟音を耳にする。

あっちにはシンディがいるはず。もしこいつの仲間とかだったらちょうどいい。こいつの身元を明らかにしたのち手荒にお引き取り願おう。

俺はそう考えて無駄に重い体を引っ張り浜にやってきた。

そしたらシンディが蛇に締め上げられているというピンチ極まりない状況。

俺は考えるより先に口に出していた。

「待てやこらぁ！！」

と。

［51］軍の女ｖｓ海賊の女（後書き）

《桐原慎吾の秘密?》

ゆめじん
『そういえばシンゴさん?』

シンゴ
「何?」

ゆめじん
『シンゴさんって最後にいつお風呂に入りました?あと洗濯も』

シンゴ
「……」

ゆめじん
『え?え?なんで黙るんですか……まさか!?』

シンゴ
「いや!してるよ!なんかこうすっ飛ばされがちなシーンの間とかで!そうだよな!?」

ゆめじん
『だ、誰に聞いてるんですか?』

シンゴ
「……それを言っては夢が壊れるというものだ」

ゆめじん
『はぁ？』

シンゴ
「ていうかゆめじんはずっと俺の様子見てるんだから分かるはずだろうが」

ゆめじん
『あ、気付いちゃいました？』

シンゴ
「当たり前じゃこらぁ！」
ゆめじん
『……てへ☆』

シンゴ
「いい加減にしろ！」

では次回。

［５２］由緒ある船に乗る者達（前書き）

わたし、猫を飼ってます。

で、今その猫が寝てます。

……。

それだけ。

５２話だにゃん。

［52］由緒ある船に乗る者達

「おらよっと！」

俺はドレスの女に向かい未だ気絶中のデブっちょを投げる。

「さあ、今すぐシンディを解放しろ。でないと今すぐお前の顔面に俺のパンチが飛ぶ事になるぞ」

ドレスの女は俺とデブっちょを交互に見て、ふぅと小さくため息をつく。

「マシューが完敗するような相手に挑むのは良策とは言えなさそうですわね……。アナコンダ」

ニールが呼び掛けると、シンディに巻き付いていた蛇がゆっくりとシンディの体を解放していく。

「ではご希望通り解放致しますわ」

ドレスの女がそう言うと、蛇はシンディの体を尾に近い部分で巻き付け、そのまま大きく上空へと投げ飛ばした。

「うぉ！？何しやがんだ！」

俺は慌てて宙を舞うシンディを追い掛ける。

「くそ！」

俺は落下地点に追い付き、シンディの体をしっかりと受け止める。

「……そういうやり方かよ」

シンディの無事を確認した俺がドレスの女達の方を見ると、そこにはもう誰もいなかった。

「っと、その前に早く連れてかないと」

俺は息も絶え絶えなシンディを抱え、漆黒のユニコーンの隠れ家へと戻っていった。

もちろん洞窟は壁を抜けまくって進みましたとも。

隠れ家に戻ると、すぐにシンディに治療が施された。意識もはっきりしていて特に心配しなくても大丈夫とのこと。俺は安堵で胸を撫で下ろした。

「ふぅ……」

俺は船の甲板に腰を下ろし、コキコキと首をならす。

「鞭打ちとかになってなきゃいいが……」

『逆にそのレベルで済むほうが異常ですけどね』

「成長ってのは恐ろしいな」

俺はもう自分の体の規格外振りには慣れていた。

俺は超人。もうそれでいい。そのお陰で今こうしていられる訳だしな。

「あ！いたよキリハラ！」

「む！ここでありましたかキリハラ殿！」

ひょこりとレンを背中に乗せたモリナガ登場。

「何、俺の事探してたの？」

「そうなんだよ！お礼言わなきゃって思ってね」

「礼？」

「左様。シンディを助けていただいたそうで、かたじけない」

そう言ってモリナガは頭を下げる。

「いや、とにかく無事な内に助けられたようでよかったよ」

「……やっぱりキリハラはいい人なんだね！」

「は？」

レンがいきなり俺をズビシと指差しながら笑顔で言う。

「ある意味シンディは見る目があるんだよ！強くていい人なんてなかなかいないもの」

レンは満面の笑みを俺に向けてくれる。

むぅ、照れるな。

「キリハラ殿がいて下さればあのアグル・ブラストが相手でもなんとかなりそうな気がしてくるのである」

「そうだ。そのアグル・ブラストって奴の事なんだけど」

俺はモリナガの言葉に急に思い出したようにそう口にする。

「一体どんな奴なんだよ？なんで一海賊であるお前らを追っかけてんだよ？」

俺は今回の戦いで明確になった疑問を二人にぶつける。

「……キリハラには離しとかないとね。私達の事、この船の事、あいつらの事、全部」

レンは確かめるような口調でそう言うと、一人頷いて、モリナガの背を下りて俺の横に腰を下ろす。

「まずは何から話そうかな。私達の事から話そうか？」

「頼む」

俺が短く答えると、レンはぽつりぽつりと思い出すように語りだす。

「漆黒のユニコーンはね、私達で二代目なんだよ」

「二代目？」

「うん。今捕まっちゃってる船長も二代目でね、初代の船長の息子なの」

「ヒュード・グレーギース殿であるな。偉大な方であったのである」

モリナガは腕を組んで大きくゆっくりと頷く。

「私とモリナガ……、ううん、今この船に乗っている乗組員はほとんどがヒュード船長に拾ってもらったんだよ」

「拾ってもらった？」

「私達は何らかの理由で普通の暮らしが出来ない体なんだよ。モリナガや私なんかは分かりやすい例だね」

「その通りであるな」

モリナガは喋る熊。なるほど何がどうなってその組み合わせで落ち着いたのかは分からないが、『人間』として暮らしていくにはいささか奇抜な見た目であることは否定出来ない。が、レンの方は特には変な部分は……。

「キリハラ、私いくつに見える？」

レンからの突然のクエスチョン。

「え？えっと……１４歳？」

俺はこのしっかりした感じを加味しつつちょい上乗せくらいで言った。

「だよねー。そう見えるよねー」

「で、正解は？」

「２４」

「……は？」

レンの口から出た数字に一瞬固まる俺。

「私こう見えても２４歳なんだよ」

レンはいつもの天真爛漫な感じで明るく言ってくる。

「い、いやいや！いくらなんでもそれは冗談でしょ！２４どころか１７の俺より上にすら……」

「だからだよ」

「……は？」

真面目な口調で俺の言葉を制するレン。

「私は体の成長が皆と比べても極端に遅いんだよ」

「……ま、マジで？」

「私の体の成長は１２歳の時にピタリと止まっちゃったんだ。それ以来ずっとこの姿なんだ」

レンの言葉は真剣そのもの。嘘を言うにはあまりに芝居が過ぎている。

「何年経っても全く見た目が変わらない幼なじみがいたら……キリハラだったらどうするかな？」

「……」

「しかも私は捨て子でね。教会のシスターさんに拾ってもらって育ててもらったんだ。最初は皆暖かかった。血の繋がりが無くても生きていけると思った。でも、私の見た目が全く変わらない事に気付いてからはその暖かさが嘘みたいに消えたんだよ」

レンの沈んだ口調が、何があったのか、それがレンに何をもたらしたのかを想像させた。

「教会で拾われた子だから、悪魔に取り憑かれたとか化け物とかね、人間て簡単に変われてしまうんだよ」

「レン。無理に不覚を話す必要はないのである。もしやめてもキリハラ殿は追いはしないだろう」

モリナガが俺の方を見る。

「ああ、人間てのは異端ってのを極端に嫌うからな。俺も似たような経験が無いことはないからな。少しは気持ちを分かってやれる」

それが俺の率直な気持ちだった。昔の事はあまり思い出したくないがな……。

「ありがとう。……なんだか話がそれちゃったね。この海賊団の話に戻そう！」

レンは明るく言う。

「ヒュード船長はそんな私達を何一つ事情を聞かずに船に乗せてくれたんだよ」

「大恩人であるのは間違いないのである」

「でもそれでお前らは二代目のメンバーなんだろ？初代のメンバーはどうしたんだよ？まだ乗ってるのか？」

船員全員と顔を合わせた訳ではないが、二人の話を聞くに今の船員は二代目？なんだろうか？

「初代の人達はね、もう大分前に解散して今は散々になっちゃったんだよ」

「そうなんだ」

「しかしその顔ぶれたるや初めて知った時には身が震える思いであったのであります」

ブルルッ、とモリナガは全身の毛を震わせる。

「へぇ。ちなみに誰？」

俺はある予想を胸に聞いてみる。

「ダイナ・アーバンティガとその一行と聞いてるのであります」

あぁ……。予想通りだ。

「あのユリア様とかも乗ってたんだってね。その時は正確には海賊ではなかったみたいだけど」

うん……。知らないな。全然。

「……キリハラ殿。なにやらピンときていないご様子だが……まさか」

「うん。分からなかった」

俺はなはは、と半笑いで言う。が、二人の表情は笑うどころか、絶句したまま固まっている。

「え？……っと、お二方？いかがした？」

あまりの硬直振りに俺は奇妙な聞き方をしてしまう。

「ダイナ様を……あの勇者様を知らないと言うのでありますか！？」

モリナガの毛むくじゃらの顔がずずいと迫る。

「うぉっ！ご、ごめんなさいその勇者様がどれだけ凄いか知らないけど俺そういうのに疎くて、さ」

「じゃ、じゃあ！あの聖母と呼ばれたあの絶世の美女と言われるユリア様も知らないの！？」

モリナガの背中から飛び出した可愛らしい顔もずずんと迫ってくる。

「お、俺ね！旅の途中でさ。この国に来たの最近だからそういうのあんまり知らないんだよね……」

俺は変な汗が噴き出すのを感じながら必死にそれらしい言い訳をする。

「どれだけ遠い国から来たというのだあなたは。あの勇者様を知らないとは……」

まだ言うか！そしてため息をつくな！なんか俺が無知でごめんみたいな流れになってるじゃないか！

『みたい、というかなってますよね、もう』

うるせぇ！お前もそういう話はちゃんとしといてくれないと困るだろうが。

『なるほど。今後気を付けます』

平面なマニュアル口調が無性に腹立つぞこんちくしょう。

「て、ていうかさ！その勇者様が……え？海賊してたっていうの？」

俺は無理矢理話を進める。

「さっきも言ったけどその時は正確には海賊じゃなかったんだよ。

この船も海賊船ではなかったらしいしね」

「勇者様はこの船に乗り込み世界を救う為の旅をしたと言われているのです」

「へぇ……」

勇者が乗り込み旅をした船、か。

勇者という単語に興味惹かれ詳しく話を聞こうとした俺だったが、そこでふと引っ掛かる。

「なんでそんなバリバリ由緒ある船が軍に狙われてる訳？」

という疑問である。

「簡単な話なのである。由緒ある船だから狙われているのである」

「んん？……ああ、そういうことか」

俺はある結論に行き着いた。

「勇者が使った貴重な船が今や海賊に好き勝手に使われてる……みたいな感じのが軍は嫌な訳か」

俺の言葉に二人は頷く。

「でもでも、それを加味してもあいつのしつこさは異常だよ」

「あいつ……アグル・ブラストって奴か」

「左様。奴は我々に対して異常なまでに敵意を見せているのであります」

「なんか因縁でもあるのか？」

俺が何気なく聞くと、モリナガは重苦しい口調でその答えを返してくれた。

「ありすぎるほどにあるのであります。何せアグルはヒュード船長を処刑台に送った張本人なのでありますから」

［52］由緒ある船に乗る者達（後書き）

《ゆめじんの遊び》

シンゴ
「そういえばゆめじんってさ」

ゆめじん
『はい？』

シンゴ
「俺の様子見る事以外には何かしてないの？」

ゆめじん
『何か、ですか？』

シンゴ
「うん、だって暇じゃないの？」

ゆめじん
『暇ですね。なので最近は暇つぶしにちょこちょこ手を出してます』

シンゴ
「え？何してんの？」

ゆめじん
『ええ、ナンプレを』

シンゴ

「……え？」

ゆめじん
『クロスワードもいいですけどあれなかなか単語が思い出せないんですよね』

シンゴ
「……おい」

ゆめじん
『そうだ。詰め将棋やってて最近腕が上がった気がするんで今度一局どうです？』

シンゴ
「世界観んーーーー！！！！！！」

では次回。

［５３］ユニコーンの歩み（前書き）

環境の変化というのは人のリズムを一時的に生活リズムを崩すものですな。

えらく間が空いてしまってすいません。

５３話です。

［53］ユニコーンの歩み

「処刑台送りって……。軍はそこまでしてこの船が欲しかったのかよ」

軍の執念のどす黒いベクトルに俺は少量の恐怖すら覚えた。

「軍は海における象徴が欲しかったんだよ。だから何をしてでもこの船が欲しかったんだよ」

「『勇者が乗った船』とでも銘打てば軍は民からの信頼を勝ち取れるとでも思ったのでありましょう」

モリナガの口調には呆れと怒りが少し滲んでいた。

「でも船は現にここにあるが……。それはどういう経緯なんだ？」

今俺が腰掛けている船が本物だと仮定するならば軍は肝心な目的を達成していない事になる。

「……こっからが私達二代目の話になるんだよ」

レンの言葉にモリナガも力強く頷く。

「軍はヒュード船長を捕まえた後、その身柄を盾に船を私達から奪おうとしたんだよ」

「今すぐ船を明け渡せば船長の命は助けてやる。あの時の軍の連中の顔は今でも覚えているのであります」

海賊から人質をとって船を要求する軍。普通逆ではないのか？と思ったがそれは口にはしなかった。

「でも私達はヒュード船長の言葉に従うことにしたんだよ」

「船長の言葉？」

レンは頷く。

「ヒュード船長は軍から狙われている事は分かっていたんだよ。だからいつ何が自分の身に起こってもいいようにヴァルガ船長に手紙を託していたんだよ」

ヴァルガ……ヒュード船長の息子か。

「そこにはねこう書かれていたんだ」

『ここからはお前達の時代だ』

「ってね」

「……え？たった一言？」

俺が思いっきり肩透かしを食らったような感じになった。シンプルにも程がないか？

「初めて聞いた人ならそうなっちゃうよね。でもいつもヒュード船長と一緒にいた私達にはその意味がすぐに分かったんだ」

レンは笑顔で言う。

レン曰く、ヒュード船長が捕まった直後は、船内は軽くパニック状態に陥ったという。

すぐにも船長を助けに行こうと息巻く者。

これは軍の罠だと慎重になる者。

一つの意見にまとまるはずもなく漆黒のユニコーンは分裂の危機すら迎えていた。

だが、そんな船員達の前に、ヒュード船長の息子、ヴァルガが父の手紙を掲げ叫んだのだという。

「ここからは俺達の時代だ。親父の言葉に納得出来ない奴は船を降りろ。追いもしなけりゃ責めもしない。俺達は俺達の道を行く！」

ヴァルガは父親の想いを最も理解していたのだとレンは言う。

ヒュード船長は老いてしまった己の命より、若い者達が背負う未来に漆黒のユニコーンを託したのだ、と。

その想いを理解した船員達は、新たな漆黒のユニコーンの船出を決意。ヴァルガを新たな船長として、出航したのだった。

しかし、取引を反古にされて軍が黙っているはずもなく、アグル率いる艦隊が漆黒のユニコーンを襲撃する。

ヴァルガ達は死にもの狂いで戦い、漆黒のユニコーンを守り通した。

軍は護衛艦二隻を撃沈され、指揮官であるアグルも負傷した。
漆黒のユニコーンはその船出を勝利で飾ったのだ。
そして、その直後ヒュード船長の処刑の執行がヴァルガ達に伝えられた。
命を失う直前、息子達の勝利を聞いたヒュードは、大声で笑い、
「それでいい！これからはお前達の時代だ！お前達の生きたいように生きろ！」
と叫び飛ばしたという。
それを聞いただけでもヒュードという男の大きさが分かる気がした。
「で、今に至るって訳か」
「そうなんだよ。今ヴァルガ船長が捕まっているのは船長の無謀なんだけどね」
レンはやれやれと肩をすくめる。
「豪快なのは父親譲りだが、若さ故に無謀が過ぎるのは考えものでありますがね……」
モリナガはふぅとため息をつく。
「ていうかさ」

俺はふとある事を考えた。

「今捕まってる船長が殺される可能性ってのはないのか？そんなに因縁ある奴なら危なくないのか？」

取引を蹴り、しかも自分に傷を与えた奴をおとなしく牢に放り込んだままにしておくだろうか？

「それなら心配ないわ」

船室の入り口から響く声。見ればシンディが扉に寄り掛かるように立っていた。

「シンディ！起きて大丈夫なの？」

レンが心配そうに言う。

「ん。別にどこかを折られたり潰されたりしたわけじゃないからね。……それに、なんか落ち着いて寝てられる気分じゃなくてね」

シンディは言いながら俺達の方に近づいてくる。

「なんか面白そうな話してるじゃない」

そして、俺達の輪に加わるように腰を下ろす。

「……つうか船長さんが殺されないってのは？」

俺は改めて疑問を口にする。

「奴にとって大事なのはヴァルガだけではないわ。ヴァルガを足掛かりにしてどうにかこの船も奪おうとしているのよ」

シンディはコンコンと船を叩く。

「ヴァルガはいわば人質。この状態を維持して私達がしびれを切らすのを待ってるんでしょうね」

「船長さんを奪い返しに来るのをか？」

シンディは軽く頷く。

「奴らはこの辺りに船があることはとっくに察知してる。でも正確な位置を掴めていないから手を出しづらいのよ」

確かに。何も知らずにあの迷路を抜けるのは至難の技だろう。

「だから奴らはこちらのリーダーという最も強力なカードを得て、待つという作戦に切り替えたのよ……。ま、一部待ちきれないのもいるみたいだけどね」

シンディは腕に巻かれた包帯をさする。あのお高くとまった蛇女のことだろうな。

「どっちにしろ状況はこちらに不利なのである」

モリナガ皆の顔を見ながらは続ける。

「奴らは人質を武器に我々を待っていればいいだけ。対して我々は全てに勝利するには敵の虚を突いて船長を取り返し、更に圧倒的な

戦力の敵艦隊の包囲網を抜けなければならないのであります」

「どちらにしろ船長さんの救出が要になってくるな」

「そう。そして救出の為のリミットは確実に迫っているわ」

俺の言葉にシンディが危機感を付け加える。

「私達が簡単には動かないと知れば奴らがどんな手に打って出るかなんて想像もつかないわ」

「じゃあちゃちゃっと助けに行くか」

俺はよっこらせと腰を上げながら言う。

「は?ちゃちゃっと?ってずいぶん簡単に言ってくれるわね」

「なんだか知らないが敵地に潜入する経験だけはそこそこあるんだよ」

『殴り込みって訂正するなら今ですよ』

うるさいゆめのじん。

「敵は軍艦。内部の構造もヴァルガの位置も掴めてない今、あなたに救出が可能なの?」

「要は敵に見つからなければいいんだろ?だったら……」

俺は体に透明化をかける。

「え……！？」

シンディ、レン、モリナガ、全員が全員いきなり俺が消えた事に驚きの顔になる。

「な？」

ドヤ顔な俺。まぁ見えないんですけどね。

「ど、どうなってるの……？」

「体を透明にして周りから見えなくしたんだよ。これなら誰にも見つからずに潜入なんて造作もない」

俺は言いながら透明化を解除する。

「ま、魔術……なのでありますか？」

「いや、魔術じゃない。俺に備わった力……、うん、特別な力の一端だな」

「特別な、力……」

シンディが惚けたように呟く。

「どうだい？俺に任せてみる気になったかい？」

俺はふんと鼻を鳴らす。

「……あなたが何者か。それはまだ私達には分からない」

シンディは俺の前に近づく。

「でも、もしあなたに力があってその力を私達の為に使ってくれるっていうんなら……」

シンディは右手を差し出してくる。

「お願い、してもいいかしら？」

その真っすぐな視線を受け止めた上で、俺はシンディの手を握る。

「一宿一飯の恩を返すぜ」

こうして次の殴りっ……潜入先が決まったのであった。

［53］ユニコーンの歩み（後書き）

《シンゴの反論》

シンゴ
「おい、ゆめじん！」

ゆめじん
『なんですか？』

シンゴ
「お前この前俺が風呂に入らなくて汚いみたいに言ってくれたよな！」

ゆめじん
『……言いましたっけ？』

シンゴ
「言ったんだよ！しれっと記憶の彼方に追いやろうとするな！」

ゆめじん
『で、そんな昔の事を今更なんですか？』

シンゴ
「くっ……！お、お前だって風呂とか洗濯とかしてんのかよ！」

ゆめじん
『してますけど』

シンゴ
「……え？」

ゆめじん
『してますよ。きっちんと、ね』

シンゴ
「……」

ゆめじん
『女の子は身だしなみが大切なんですよ』

シンゴ
「さいでっか……」

では次回。

［５４］レヴィ・アント号の上で（前書き）

暖かくなったかと思った途端に冷えだしたり。

逆も然り。

いい加減にしたまえ。ぷんぷん！

５４話じゃん。

［５４］レヴィ・アント号の上で

―帝国軍艦、レヴィ・アント号―

艦の一室、長机と巨大な周辺地図が用意された作戦会議室とも呼ぶべきその部屋に、いきり立つ一人の男が入ってくる。

「隊長！マシューがやられたというのは本当ですか！？」

屈強な体を黒紫の鎧に身を包んだその男は、入ってくるなり怒鳴るように言った。

「兄者。隊長に向かいそれはあまりに無礼ですぞ」

屈強な男に続き今度は同じ黒紫の鎧に身を包みつつも、その体が異常に縦に長い男が入ってきた。

「おお！そうだった。で、改めてマシューはどうなんですか？」

男は長机の先に座っているアグルに聞く。

「安心しろ。意識を失っているだけで命に別状はない。だから落ち着け、ライガ、オルティマ」

ライガと呼ばれて屈強な男が、オルティマと呼ばれて縦長な男がそれぞれ返事をする。

「しかし、マシュー一人とはいえ我らドムド三兄弟の一角を潰すとは一体どこのどいつが……」

「漆黒のユニコーンに近い者だ。間違いなくな」

アグルがどうでもいいといった風に言うと、ライガは目を見開き身を乗り出す。

「なんと！憎きあの漆黒のユニコーンが！？お、おのれ……」

ライガは額に青筋を何本も浮かしながらわなわなと震える。

「兄者。あまり頻繁に怒ると血圧が上がりますぞ」

と言って縦長なオルティマがまぁまぁとライガを落ち着かせる。

「う、うむ……すぅ……はぁ……よし、落ち着いたぞ」

ははは、とライガはオルティマの腰の辺りを叩く。

「……相変わらず面白い兄弟ですわね」

アグルの隣に座っていたニールはその様子を少し呆れ気味にみていた。

「して、反撃はいつですか？」

ライガはアグルに向き直ると待ちきれないとばかりにソワソワしながら聞く。

「すぐの反撃には出ない」

「は……？」

アグルの回答に間を置いて疑問符を浮かべるライガ。そしてその顔はやがて困惑のそれへと変化していく。

「な、なぜですか！マシューは隊にとっても貴重な戦力！それに加えてニール副隊長も攻撃を受けたと聞いています！なのになぜ」

「どんなにこちらに名分があろうとも、今はまだその時機ではない。それだけだ」

アグルは冷淡な口調でそう言い放つ。

「それに今回の一件はニールの独断だ。そうと知っていて共に出たマシューにも相応の責任があると思うが、どうだ？」

アグルは静かな口調で針の様に尖った視線をライガに向ける。

「うっ……ですが！」

「兄弟を傷つけられたお前の気持ちは多少なり理解しているつもりだ、ライガ。だがこれは子供の喧嘩じゃない、立派な戦争なんだ。……理解出来ねぇとは言わせねぇぞ、ライガ・ドムド大尉」

ライガはそのアグルの言葉に両肩に鉄の塊を乗せられたような重圧を感じた。

「……うっ」

その重圧でライガは言葉に詰まる。

「今は備える時期だ。新しい戦力もこちらに向かってるしな」

「……私あの連中の雰囲気は正直苦手ですわ」

ニールがはぁと浅くため息をつく。

「特務の連中なんざそんなもんさ。全員どこかしらに狂気じみた刃を隠し持ってんのさ」

「いえ、そういうなんとなく格好いいワードが出てくる様な理由ではなくて……」

ニールは言葉を濁す。

「？……まぁ、とにかくこちらからの攻撃は全ての支度が整ってからだ。分かったな」

「了解」

「了解ですぞ」

ライガとオルティマはアグルに対し敬礼する。

その直後、部屋の扉が叩かれる。

「ブラスト大佐。ただ今『紅鮫』が到着したとの連絡が入りました」

兵士の声。それを聞いたアグルはニヤリと口の端を歪ませる。

「よし、今行くと伝えろ」
「は！」
アグルはゆっくりと立ち上がる。
「そろそろあの男の処遇を検討しなければな……」
そう言いながらアグルはニール達と共に部屋を後にした。

……。
……。

「よっこいせっと」

どうも、桐原慎吾です。今、俺は体を透明にして敵さんの軍艦に潜入したところです。

「楽勝過ぎるな。さて、船長さんの居所を探すかね」

俺は甲板に上がると、キョロキョロと辺りを見回す。

「まぁ、普通に考えたら船の奥の方だよな。捕虜なんだし」

俺はさっそく船内に入る入り口を探すことにした。

だが、

「……ウウォォォオオオ！」

なんだか遠くの方から唸り声が近づいてくる。

「なんだなんだ？」

俺が声のする方、海上へと目を向けると、大量の赤い何かがこちらに近づいてきていた。

「なんだありゃ？」

俺が赤いのを見ていると、その赤いのは突然飛び上がり甲板に着地してきた。

着地してきた赤いそれは、人だった。頭から足の先まで燃えるような赤い甲冑に身を包んだ人間達が大量に現れた。

赤い軍団は甲板に上がると突然整列しだした。

「……整列よし！」

全員が整列したのを確認して、端の赤いのがそう叫ぶ。

すると、それを待っていたかのように再び海上から赤いのが一人、甲板に降り立つ。

「よっしゃぁぁ！野郎共！準備はいいかぁ！」

最後に甲板に上がってきた赤いのが列を見て怒鳴るように言う。

「オッケーです隊長！」

「よし！『紅鮫』隊久々の実戦任務だ！全員気合い入れろや分かったかぁ！」

「おおう！」

……なにあの体育会系のノリ。

『紅鮫』とか言ってたけど奴らも帝国軍の奴らなんだろうか？

「よぉぉし！じゃあ、まずはアグル・ブラスト大佐に挨拶だ！無礼な振る舞いしやがったらその場で海の藻屑だ分かったかコラァ！」

「分かりました！」

あ、返事が丁寧になった。

そんなギッラギラな熱気をまとった紅鮫とかいう連中の前に、こちらは普通の軍服だ、を着た連中が現れた。

「相変わらず威勢がいいな、紅鮫」

軍服の中心、右目の眼帯が特徴的な紫髪の軍服が現れざまに言う。

「は！我らアルバレオ帝国軍銃騎兵団第一師団所属第三特務小隊、ただ今戦艦レヴィ・アント、アグル・ブラスト大佐指揮下に入ります」

はち切れんばかりの気合いを押し殺すように紅鮫の隊長は居佇まい

を正す。

「うむ。無理を言って引っ張りだしてすまなかったな。話は聞いているな？」

「は！かの海賊『漆黒のユニコーン』の撃滅！その為に我ら粉骨砕身全身全霊の覚悟で戦う所存です」

「……はぁ」

なんだろう。アグルの斜め後ろに立っているドレスの女がすごく深いため息をついてる。

「うむ。ではさっそくだがこれからの事を話したい。中へ行こう」

そう言うとアグルは紅鮫の隊長を連れて艦の中へと引っ込んでいった。

残された連中も各々動きだす。

よし、俺も動くかね。

俺はささささっと周りを気にしつつ艦の中へと入る。

「船長さんが囚われてる場所……牢屋だからやっぱ艦の下の方なのかな？」

『恐らくは。脱獄の可能性なんかも鑑みてより奥の方でしょうね』

「おーけー。じゃあとにかく下の方に向かうか」

俺は艦内に入ると、下に下りる階段なりを探す。

「にしても、船長さんは本当に生きてるのかね？」

『既に処刑されてるのでは、という事ですか？』

「うん。だって捕まってから結構な時間経ってるんだろ。軍の奴らが痺れを切らした可能性だって……」

『多分ですがそれはないですね』

俺の言葉を遮ってゆめじんが断言する。

『もし本当に処刑する気があるならあえてシンディさん達に知られるようにしてから執行するはずです』

「……それもそうだな」

シンディ達に処刑を知らせて、焦って出てきたところを叩く。なかなかベターな作戦だ。

「だけどさ、船長がいつ殺されるかなんてあいつらには情報を掴み様がないんじゃないか？」

『そうですね。そういう意味では賭けですね』

「さらっと言ってくれるね」

俺は艦内を下へ下へ、奥へ奥へと進む。

「そういえば船長さんの特徴とか聞いてないな」

『あ。そういえばそうですね』

「……」

『……』

なんとなく沈黙。

「ま！見れば分かるだろう！」

『そ、そうですね』

俺はうんうんと頷きながら進む。

けたたましい警報音と共に通路が赤い光に包まれたのはその直後であった。

「な、なんだ！ば、ばれたのか！？」

俺は焦って思わず透明化を解いてしまう。

『い、いえ。それはないかと。透明状態のシンゴさんが見つかったとは……』

ズドンッ。

慌てる俺とゆめじんの前に、船室の扉と一緒に兵士が吹っ飛んでく

る。

「うお！」

俺は紙一重でそれを避けると、飛んできた方向に目を向ける。

「え……？」

俺の視線の先には、白と黒の縞模様の服に身を包んだ男が立っていた。

今のはあの男がやったのだろうか。ていうかあのいかにもな服装はもしかして……。

俺が考えを巡らしてると、男の剣の切っ先のような鋭い視線が俺に向けられる。

「おい、そこのお前！」

「は、はい！」

男は俺を指差し、

「お前、帝国軍か？」

そう聞いてきた。

「い、いえ、違います」

「そうか。なら何者だ。見たところ帝国軍じゃねえようだが」

じゃあ聞くなよ！

という突っ込みは置いておこう。

「えーっと。実はある人を助けて来るように頼まれまして……」

「ある人？そいつぁ誰の事だよ？」

男はコキコキ首を鳴らしながら聞いてくる。

「ヴァルガ・グレーギースって人なんですが……」

俺はある答えを予想してその名前を口に出した。のだが、

「……」

「……」

なんでだろう、変な間が空いてしまった。

「……おい」

「は、はい？」

「ヴァルガは俺だ」

予想以上のタイムラグを経て、予想通りの答えにたどり着いた。

「お、おおー。じゃ話は早い！漆黒のユニコーンの皆からあなたを

助けてくれと頼まれてたんですよ」

「なるほど、いきなり知らない人間に名前を出されたから何事かと思った」

そう言ってヴァルガはひとり頷く。

なんだろう。不思議な雰囲気を感じるな、この人から。

「で、お前は誰だ？」

うん、この人のペースは独特だ。

「俺は桐原慎吾っていう……、まぁ旅の者です。縁あってあなたを助けに来ました」

「そうか。では、キリハラ。さっそくだが逃げるか」

言いながらヴァルガは後ろを振り向く。

「どうやら敵さんも俺のお出かけに気付いちまったみたいだしな」

通路の奥から聞こえてくるのはいくつもの足音。

それが左右両方の通路から聞こえてくる。

「って両方から！？」

「こりゃあ挟まれたな」

言いながらヴァルガはにやりと不敵な笑みを浮かべる。

「ちょうどいい。長いこと体動かしてなくてなまってたところだ。いっちょやるか！」

「……なんで俺はいつもこうなっちゃうんだろう」

やれやれと頭をかきながらも俺も拳に力を込める。

「あくまで脱出優先でいきますよ、船長さん」

「分かったぜ」

その返事を合図に、俺とヴァルガは一気に駆け出した。

［５４］レヴィ・アント号の上で（後書き）

《ゆめじんは基本的に退屈なのです》

ゆめじん
『……うーん』

ゆめじん
『……ううーん』

ゆめじん
『……あ！』

ゆめじん
『そうか、ここか』

パチッ。

三七、歩。

ゆめじん
『ふぅー。やっと解けました！』

シンゴ
「詰め将棋かよ！」

では次回。

［５５］脱出、そして開戦へ（前書き）

眠い。現在進行形で。

……。

……え？知ったこっちゃない？

５５話なのです。

［55］脱出、そして開戦へ

「ドォリャァァァ！」

俺とヴァルガ船長の敵中突破による脱出は、勢いに任せて敵をなぎ倒していく方式で行われた。

「おっとキリハラ。ちょっと寄っていきたい場所があるんだ」

「この状況で！い、一体どこ!?」

「ここ」

ヴァルガはそう言ってちょうど差し掛かった部屋の扉を叩く。

「これやっとかねぇとなんの為に来たのか分からないからな」

「……とにかく用があるなら早めに済ましてしまおう」

「おう」

ヴァルガは扉をこじ開けると、中に入っていく。

俺も後に続いて中に入る。

「ここは?」

俺は部屋の中に置いてある巨大な金庫を見て言う。

「ある大事な物をしまってある部屋だ。っと、まずは開けないとな」

ヴァルガは金庫に近づくと金庫のダイヤルをじっと見る。

「……」

そして数瞬の間の後、素早い手つきでダイヤルを操作する。

「え？開け方分かるのか？」

俺はただならぬその手際の良さに驚く。

「ああ、一度開けてるところ見た事あるしな」

喋りながらもその手は止まらない。

「え？一回見ただけで、ってかそんな無茶」

カチャリ。

金属の小気味よい音が響き、続いて金庫の分厚い扉が重々しく開いていく。

「うし！」

ヴァルガはガッツポーズ。

「……メチャクチャだ！」

他人の事は言えた口では無いが、言わずにはいられなかった。

そんな俺の事など構わずに、ヴァルガは金庫の中に目を向ける。

「よーっし。これだよこれ」

ヴァルガは嬉々とした声をあげる。

「一体何が……」

俺も金庫の中に目を向ける。

中には、まばゆい光を放つ巨大な『石』が入っていた。

大きさは規格外だが、この光は最近何度か見たことがある。

「魔法石……？」

「そうだ。しかも天然物としては世界最大クラスの、な」

ヴァルガは誇らしげに言う。

「これを探してたのか？」

「おう。こいつが無けりゃ漆黒のユニコーンは真価を発揮出来ないからな」

言いながらヴァルガは近くにあったこの石を運ぶ為であろう布袋を持ち出し、その中に魔法石をしまいこむ。

「よっしゃ。じゃ、逃げるか」

ヴァルガは布袋を担ぐと、なんとも素敵な笑顔で言ってくる。

「……だね。逃げますか」

部屋には再び複数の足音が近づいてくる。

再び怒涛の逃走劇が幕を開けたのであった。

「おおう！久々のシャバだなおい！」

向かってくる兵士を蹴散らし、甲板に出た瞬間、ヴァルガはそう言って高らかに笑い声をあげた。

「さーて、ゴールまで今一歩。最後の奮起とまいりましょうか！」

つられてテンションの上がった俺もふんと鼻を鳴らす。

「そういやぁここからはどうやって逃げるんだ。船でも用意してるのか？」

ヴァルガがふと思いついたように聞いてくる。

「大丈夫。逃走手段は用意してる。ちょっと反則気味のな」

「反則？どういうことだ？」

「まぁ、体験してみりゃ分かる」

俺はぽんとヴァルガの肩に手を置く。そしてその反則気味な手段を

披露しようとしたその時であった。

「そこまでにしてもらおうか」

低くドスのきいた声が響き渡り、俺達の周囲に一斉に銃を構えた兵士達が現れる。

「ずいぶん暴れてくれたようだが、ここでチェックメイトだ、ヴァルガ・グレーギース」

姿を現したこの艦のボス、アグル・ブラスト。強く怒気のこもった目でこちらを睨んでくる。

「よう大佐殿。この艦の牢屋はずいぶんやわな出来だな。もっと頑丈に作り直した方がいいぜ」

この状況などまるで気にしてないかのようにヴァルガは軽口を叩く。

「貴様という男を少々見くびっていたようだ。だがそれもここまで、貴様はここで殺す」

アグルは片手を上げる。するとそれを合図に周りの兵士達は攻撃の体勢に入る。

「は！やれるもんならやってみな。この程度で俺をやれると言うならな」

ヴァルガはそう言ってアグルを挑発する。

「貴様は奴らに対し有効なカードに成り得ると考え生かしたが、そ

れもここまでだな」

アグルはスッ、と上げた手を振り下ろす。

瞬間、大量の銃弾が俺達の元に撃ち込まれる。

鉛の銃弾が恐ろしい速さで甲板を貫いていく。

が、その弾丸がそこに至る前に、俺達の姿は無くなっていた。

忽然と消えたその様子をただ呆然と眺めるアグル。

「消えた……のか？」

その問いに答えを返せる者は誰もいなかった。

ていうかいるはずがない。逆にいたら怖い。

なぜなら俺とヴァルガは銃弾が撃ち込まれる直前に、テレポートで浜辺まで一気に移動したのだ。

正直浜辺まで距離があったし切迫した状況だったからうまくいくかは賭けだったが、どうやらその賭けには勝ったらしい。

「……一体何が起こったんだ？」

いきなり艦の上から陸地に移動させられたヴァルガは目を見開きながら呟く。

「地味な移動をしている暇は無かったみたいなんでちょっとショー

トカットさせてもらいました」

俺は一息つこうと腰をおろす。

「お前、魔術師だったのか？」

ヴァルガは疑いを含んだ目で俺を見る。

「え？いやいや、今のは魔術じゃなくて、俺特有の超能力みたいなやつ」

「……超能力？いまいち分からないが魔術とは違うのか？」

「魔術とは違う。……えーとね、とにかく魔術とは違う不思議な力って思ってくれれば間違いないね。うん」

何にうんなのかは分からないが俺はそう説明した。これ以上のうまい説明は思い付かなかった。

「ふむ……」

ヴァルガは難しい顔で黙り込む。やはり今の説明では伝わらなかっただろうか？

「世の中には不思議な力があるんだな。さて、行くか」

「あ、ああ」

この船長さんはよくも悪くも大雑把なようだ。

俺とヴァルガは漆黒のユニコーンの面々が待つ洞窟へと向かった。

「一つ聞いていいか？」

「ん？なんだ？」

俺はヴァルガに問い掛ける。

「その魔法石を持ち帰って船を万全の状態にして、それからどうするつもりなんだ？」

俺のその質問に、またしてもヴァルガは不敵な笑みを浮かべる。

「知れた事だ。アグルの艦隊と一戦交える」

その表情はまるで玩具を目の前にした子供のようで、

だからこそだろうか、恐怖に似たような感情をこのヴァルガという男に覚えた。

いや、恐怖という言い方は正しくないかもしれない。

自らの生死に関わるような事すら楽しもうとしているその姿勢に少しだけ衝撃を受けたのかもしれない。

たった一言。たった一挙動。そう言われればそれまでだが、俺はそう感じた。

「どうした？さっさと戻るぞ」

急に足取りが鈍くなった俺をヴァルガは不思議そうな目で見ていた。

「あ、ああ。さっさと戻ろう」

俺はこの男に対する思考を一旦打ち切り、歩を進める事に専念した。

「ていうかさ、一戦交えるって簡単に言うけど……勝てるの？」

ぶっちゃけた質問。こちらは帆船が一隻。対してあちらは巨大な軍艦一隻にそれよりも小型だがこちらのと同サイズ程の船が五隻。

戦力差は明らかと言わざるを得ない。

だが、劣勢側であるはずのヴァルガはそんなことは百も承知と言わんばかりに自信満々の顔で、

「当たり前だ。俺は負け戦は嫌いなんでね」

と言ってのけた。

その後、洞窟奥のアジトへと戻った俺達は、主にヴァルガだが、シンディ達からの大歓声で迎えられた。

「ヴァルガ船長。よくぞご無事でありましたであります」

と言ってヴァルガの手をひしと己が手で握り締める熊のモリナガ。

表情の変化がほとんど分からないモリナガだが、きっとすごい喜んでいるはず。うん。

俺はヴァルガを中心とした輪から少し離れた場所に腰をおろし、その様子を眺める。

「まさかこうも見事にやってのけてくれちゃうとはね」

と、不意に降ってきた声の方に首を向けると、穏やかな表情のシンディがそこに立っていた。

「どんなもんだい。……と胸を張っていい場面なんだろうが、なんだかあの船長さんなら自力で脱出出来たんじゃないかと今なら思う」

「フフッ。あなたにそう言わせるなんて、うちの船長もなかなかね」

シンディは俺の隣に腰をおろす。

「……船長さんは帝国軍と一戦交える気らしいな」

「でしょうね。私達が生きて再び海に出るには奴らとの戦いは避けられない。もはや宿命みたいなものね」

「宿命、ね……」

俺はぽつりとその単語だけ反芻する。

「奴が帝国軍で先代を倒した男で、うちの船長は海賊で先代の息子で……戦う理由ばかり見つかるわね」

シンディは自嘲気味に笑う。

「……」

俺は黙ってシンディの言葉を聞いていた。

「今度の戦いはスタートの時点でかなりの差がついているのは百も承知よ。もちろんこちらが劣勢という意味でね」

シンディの言葉に熱がこもり始める。

「でも戦うしかない。戦ってこの船の『自由を守る』。私達はその為に命を懸ける覚悟は常に持っているつもりだわ」

「強いよなぁ……」

「え？」

俺は半ば無意識に呟いていた。

「自分より強いと分かってる敵に向かってく、その……覚悟っていうのか誇りっていうのか。すごいと思う」

「……ありがとう。でもあなたにだって自分の貫くべき覚悟はあるはずよ」

「なんでそう思う？」

「覚悟が無い人間にあれだけの力は備わらないわ」

シンディは真っすぐな目で俺を見ながらはっきりとそう言った。

「……買い被り過ぎだよ」

これは謙遜でもなんでも無かった。俺の持つ『力』は俺が努力して手に入れた力ではない。

たまたま授かった力なのだ。

今まではがむしゃらに戦っていて考える暇など無かったが、そう考えると俺の覚悟とはなんなんだろうかと思い始めてしまう。

「？」

俺の言葉に違和感を覚えたのかシンディが小首を傾げる。

「いや、俺は行き当たりばったりで戦ってきたからな。覚悟も何もあったもんじゃないよ」

俺は苦笑いしながらそう言った。

そう言いつつも、俺は自分の覚悟について考えざるを得なかった。

「二人とも何を話してるのかな？」

ひょこひょことレンが近づいてくる。そして何気無しに俺とシンディの顔を見比べて、

「……もしかしなくても男女のお話だった？だったら私は空気を読んで回れ右だけど？」

「いや違うからしてないからだから１８０度回転しなくていいから」

そして、なんとも言えない空気に包まれたのであった。

そんな中でも漆黒のユニコーンの出航の準備は着々と進められていた。

特にヴァルガが持ち帰った巨大魔法石の取り付けはかなり時間を要する作業らしく、丸一日要するとのことだった。

「そんなに時間が掛かるの？」

俺は作業に要する時間を聞いて驚きの疑問符。

「設置自体はすぐに済む。だが、出力の調整やらなにやら細かい作業があってな。明朝までに出来ればいい方だろう」

ヴァルガは緊張感を感じさせない声で答える。

「おいおい。その前に帝国軍の奴らが攻撃してきたらどうするつもりだよ……？」

「大丈夫だ。奴らはあくまで規律に縛られた軍隊だ。動くまでには結構な時間が必要なはずだ」

ヴァルガは自信に満ちた声で続ける。

「奴らは日の出日の入りが大好きだからな。どんなに早くとも攻撃は明日の朝だ」

「そ、そうなのか……」

その時点ではヴァルガの言う事に対して半信半疑な部分があった。

が、ヴァルガの言う通りその日の内は帝国軍からの攻撃は行われなかった。

ヴァルガはそれを知っていたからこそ追撃に関しては全く策を講じずに出航準備に全力を注いだのだろう。

だが、そうして夜通し作業は行われたが、太陽が再び昇るまでに終わらせる事はかなわず、船内に焦りの空気が見え始める。

「まだ終わらないのか？」

魔法石の調整なんて専門的な作業では俺は何も出来ないしどこまで進んでるのかも分からない。俺はシンディに進行具合を聞く。

「あとほんの少しの微調整ってところね。でもここで調整を外せば今までの苦労が全て水の泡」

シンディも焦っているのだろう。表情に若干の苛立ちが見られる。

それは実際に調整を行っているヴァルガとて同じだろう。もし今帝国軍に先手を打たれたら勝ち目は無い。

漆黒のユニコーンの出航準備完了。その一点の希望に全員の想いが注がれる。

だが、見張りの一言でその想いは一気に緊張へと変わる。

「帝国の艦隊が動き出した！」

走って飛んできた見張りが切らした息を整えるのも忘れて叫ぶ。

瞬間、船内がざわめきだす。

間に合わなかったのか。そんな想いが雰囲気となり伝わってくる。

「うろたえんじゃねぇ！」

魔法石を調整しながら、ヴァルガは一喝する。

「まだ負けた訳でも一発の銃弾を食らった訳でもねぇのに浮き足立ってんじゃねぇ！てめぇらそれでも漆黒のユニコーンの船員か！」

ヴァルガの喝は船内に、洞窟内に響き渡り、一瞬の静けさに包まれる。

「奴らは強い。今の状況を楽観は出来ねぇ。そんなもんは百も承知だ。だが、俺達はいつ、どんな戦いでも、己が覚悟を胸に生き残ると誓ったはずだ。違うか！」

ヴァルガの言葉は、果たして俺の心に突き刺さった。そこに本物の『覚悟』を見たから。

俺が憧れて止まない光を見たから。

だから、俺は一歩ヴァルガに近付き、こう言った。

「俺が時間を稼ぐ」

「え？」

シンディ達は俺が何を言いだしたのか分からないといった顔をする。
そんなのは気にせず俺は続ける。

「俺なら奴らの注意をひき時間を稼げる。その間にお前らは準備を整えろ」

「……自分が何を言っているのか分かってるのか？キリハラ」

ヴァルガは静かな口調で聞いてくる。

「分かってるさ。かなり無謀な事を言ってるってこともね。でも、俺なら出来る。だからやらせてくれ」

今の俺に本物の覚悟があるかは分からない。

だが、本物の覚悟を持った人間を助ける事くらいは俺にも出来るだろう。いや、それしかない。そう思った。

「……」

ヴァルガは静かに俺の目を真っすぐに見る。

その視線はまるで俺を試すかのように感じた。

だからこそ俺は、決して目を逸らさず、

「やらせてくれ」

自分でも驚くくらいに強い口調で言い放った。

そんな俺を見て、ヴァルガは一言だけ言った。

「死ぬなよ」

その言葉の意味するところなで考えるまでもない。

だからこそ俺は、

「分かってる」

と言ったあとに口の端に笑みを浮かべ、

「早く来ないと俺が敵を全滅させちまうからな」

と言ってやった。

ヴァルガは片方の眉を釣り上げ、俺を真似るかのように口の端に笑みを浮かべ、

「見せ場はやらん」

と言った。

俺はヴァルガらしいその一言に苦笑する。

「じゃ、ちょっと敵さんかき乱してくるよ」

そう言って俺は洞窟を後にする。

「……うし！」

桐原慎吾、いざ出撃！

［55］脱出、そして開戦へ（後書き）

―そしてメイドは悩み続ける―

クリシア
「キリハラは私達を救ってくれた敵ながら恩人と呼べる部分もある人物」

クリシア
「でもどさくさに紛れて私の下着を見たことは決して許せる事ではないわ」

ハラキア
「あれはどさくさと言っていいのかしら?」

クリシア
「でもあの短さじゃないと私の蹴りは全力を出せないのも事実」

クリシア
「かと言ってズボンをはいたメイドなんて聞いた事がないわ。うん」

ハラキア
「こんなに独り言言う子だったかしら?」

クリシア
「……どうしたらいいのかしら、ハラキア?」

ハラキア
「私の存在には気付いてたのね」

クリシア
「ねぇ、何か良いアイデアは無いかしら？」

ハラキア
「そう言われてもねぇ……」

クリシア
「それともあれかしら、見えるか見えないかのギリギリを研究するっていう結論にした方がいいのかしら」

ハラキア
「どうしてそう思うの？」

クリシア
「画的に」

ハラキア
「ん？」

クリシア
「ごめんなんでもないわ」

ハラキア
「そう……」

ルルチェル
「……」

ルルチェル

「……画ってなに？」

では次回。

［５６］やれば出来る男ｖｓ特務部隊『紅鮫』（前書き）

ゴレンジャー

炊飯ジャー

似てるなぁ。

５６話は忘れた頃にやってくる。

［５６］やれば出来る男ｖｓ特務部隊『紅鮫』

―帝国軍戦艦レヴィ・アント―

「動きはあったか？」

アグルは真っすぐに波打ち際の岩礁を刺すような目線で見つめる。

「いえ、特には」

部下は様々な計器や双眼鏡を忙しく確認しながら答える。

「……拍子抜けですわね。あの船長の事だから必ず先手を打ってくるものだと思ってましたけど」

ニールはドレスの裾を直しながらさも残念そうに言う。

「奴らが動かないというのなら我々はその動かぬ敵を討つ。ただそれだけだ」

視線は海に向けられたまま、アグルは言い放つ。

「……素直ではないですわね」

「何？」

「本当は満を持して出てきた漆黒のユニコーンを正面から潰したいのでしょう？」

「……」

その沈黙が肯定なのか否定なのかは表情からは全く分からない。

アグルはニールに一瞥もくれずただ前だけを見る。

が、やがておもむろに口を開く。

「俺は軍人だ。俺個人が何を願おうが行使する力が軍の物である以上、俺は軍人としてのやり方で奴らと戦う」

毅然とそう言うアグルを見て、ニールはフゥと鼻を鳴らす。

「……つまり本当は正々堂々叩き潰したい、と。ひねくれた言い回しですわね」

「それが俺だ。嫌ならさっさと別の部隊にでも行くんだな」

「ご冗談を。私この隊にいられないくらいなら軍を辞めますわ」

「……そうか。なら軍のやり方で奴らを潰すぞ」

「はい」

二人の会話はそこで途切れる。そこからは凪の訪れた海のような静けさが艦内を包み込む。

「……ん？」

が、その静けさは双眼鏡を覗く一人の兵により破られる。

「どうした？」

「はっ。前方より凄まじい早さで何かがこちらに迫ってきています」

アグルの問いに兵士は自信を持ち切れない曖昧な返答をする。

「何か、とはなんだ？正確に答えろ！」

「は、はい！……え、えー。……に、人間です！人間が一人、海上を滑るようにこちらに向かってきています！」

兵士のその報告に、その他の兵士達は驚きの顔を見せる。

「人間、だと……！？」

アグルは自らも双眼鏡を覗き、その『人間』の姿を確認する。

そして、双眼鏡を覗くアグルの視界には、確かに海上を進む一人の男の姿が入ってきた。

……。

……。

「よっしゃ行くぞ！」

俺は海面ギリギリの所を半重力を使いながら進む。

『向こうもさすがに気付いたでしょうね。気を付けて下さい』

「オーケー！」

ゆめじんの言葉通り軍艦やその周りの船が慌ただしく動き始める。

「だが小回りの良さなら負けん！」

俺は右手に力を込める。

「だっしゃぁぁぁぁぁ！」

先手必勝の青の衝撃砲。

この一撃は周りの船の中の一隻の側面に命中。派手に爆炎をあげる。

「よっし。どんどんいくぜ！」

俺は次の一撃を拳に込める。

しかし、直後に俺のすぐ横をよぎったそれが海面に命中し、その水飛沫で視界が覆われる。

「ぶぇっぷ！な、なんだぁ！？」

俺は高く舞い上がった水煙を抜け、それが飛んできた方向を見る。

俺に向かい狙いを済ますそれ、黒く長い砲塔をこちらに向ける軍艦の姿が見えた。

「いい狙いしてるなおい」

中心たる軍艦の動きに合わせるように周りの船も大砲をこちらに向けてくる。

「よーっし！的はすばしっこいからよぅく狙えよ！」

俺は瞬間加速で一気に移動する。

そんな俺の周辺に次々に水柱があがる。

「あーもう！海水が！目にしみる！」

砲弾は全然避けられるが、これぱかりは完全には避けられなかった。

「こうなれば！」

俺は勢い良く上昇し、その場、空中で静止する。

そんな俺を砲台の先端は追跡し、今が好機とばかりに破裂音と共に砲弾を撃ちこんでくる。

「今の俺が格好の的に見えたというのなら……」

無数の砲弾が俺に迫る。

「それは淡い幻だと教えてやる！」

俺は全身から衝撃波を放ち、迫りくる砲弾を跳ね返す。

一瞬で勢いを逆転された砲弾達は皆思い思いの軌道を描き、海に落ちたり船に直撃していった。

「どんなもんじゃい！」

とドヤ顔な俺の視界に、遅れて撃ち込まれた砲弾が一発迫りくるのが見えた。

「ばっちこーい！」

俺は野球の捕手よろしく空中ながらに腰を落として砲弾をナイスキャッチ。

「……と、いうことは？」

俺は砲弾を掴んだまま今度は投手よろしく大きく振りかぶる。

「ピッチャー第一球……投げましたーーよ！」

ゴゥンッ。周りの空気を凪ぎ払うかのような轟音と共に俺の手を離れた砲弾は行きよりも速く船に向かって飛んでいく。

やがて砲弾は自分が先程巣立った船の甲板をぶち抜きながら凱旋する。

「よし、ストライク！」

かどうかの判断基準は分からないが、俺は高らかにガッツポーズ。
そして高度を下げて再び海面近くに移動する。

「さて、次の攻撃をっ……！」

言い切るより前に、海から飛び出してきた鋭い何かが俺の頬をかすっていく。

「な、なんだ……！？」

海からの攻撃？敵はどこに……。

俺は周りの海を見回す。が、俺が見つけるよりも先にそいつらは高い水飛沫をあげながら登場した。

「とーーーぅ！」

次々と現れた全身を赤い鎧に身を包んだ集団がどういう仕組みか海面に立ちながら俺の前に整列する。

「ん？こいつら確か……」

と、俺が思い出すよりも先に、赤い集団のリーダーらしき男が俺をビシッと指差し、

「たった一人で戦いを挑むとは見上げた根性だなこの野郎。だが、これ以上の勝手は我ら『紅鮫』が許さん！そうだなお前ら！」

「おう！」

「という訳で我ら『紅鮫』、貴様に対し俺達の流儀で相手をさせてもらう！いくぞお前ら！」

「おう！」

俺の事は半ば無視で事態は進んでいく。

こいつら『銀蝿』と同じ類の連中なんだろうが、なんというかノリは全然違うな。

「あ！ていうかさっきの海からの攻撃は……」

俺が思い出したように口にすると、紅鮫の隊長は誇らしげに鼻を鳴らし、

「無論！我らの仕掛けたものだ！」

隊長は懐から先程飛んできた物と同じ鋭い刃の付いた武器を取り出す。

「これはあくまで序ノ口。我らの攻撃の真髄を貴様にとくと叩きこんでくれるわ！」

隊長は刃を持った手を勢い良く振り上げる。

「いくぞ！『回魚の陣』をとれ！」

「おう！」

隊長の叫びと同タイミングくらいで隊員達は海に飛び込んでいく。
鮫を名乗るだけありその遊泳能力は目を見張るものがあった。
「鮫に囲まれてるってのは良い気分じゃあないな……」
俺は自分の周りを回遊するかのごとく円で囲んでくる紅鮫に対し呟く。
「銀蝿みたいに奇襲を仕掛けてくるか……？」
俺は身構える。いつ奴らが仕掛けてきてもいいように。
しかし、海中でも分かるその赤い体は次々に海面から消えていく。
「なんだ……」
深く潜ったってことか？だとしてもなんで？やっぱり奇襲なのか？
俺の中にいくつもの疑問が渦巻く。
と、同時に俺の足元に小さな渦が出来ている事に気付いた。
「ん？」
そして、気付いた時には遅かった。
その小さな渦は瞬く間に巨大な渦潮となり、やがて、

「う、おぉぉ！？」

渦はスパイラルする形をそのままに天空を貫かんばかりの勢いで俺を巻き込み水柱を作りあげる。

「……っ！」

俺はそのままうねりだした水柱にのまれ、海中に叩き込まれる。

海中。重く冷たい水の感覚が全身を覆う。

やばい。いくらなんでも水中戦は不利すぎる。

俺はなんとか体勢を立て直して水面を目指そうとするが、その行く手を紅鮫が遮る。

「我らが最も得意とするフィールドへようこそおいでなすった！」

紅鮫の隊長の声が水中らしくくぐもって聞こえる。

「これより貴様には更なる鮫の恐怖を思い知らせてやるわ！」

言い切るよりも前に隊長は凄まじい速さで水中を縦横無尽に泳ぎだす。

「……」

周りも他の紅鮫隊員らに囲まれている。一体何を仕掛けて……。

ビュオンッ。

幅の広い剣を前面に構えた紅鮫が俺に向かい突進してくる。

「ぶぉっ！」

俺はそれをなんとか避ける。が、奴らの攻撃は当然それで終わりはしなかった。

無数の紅鮫が俺に向かい時間差で突っ込んでくる。

「……っ！」

俺はそれらを紙一重で避けながらもがくように水面を目指す。

「させぬ！」

そんな俺の正面に紅鮫隊長が現れ、その手に持った刃を俺に突き刺す。

「んぅ！？」

なんて真似はさせなかった。

俺は隊長の刃を刺さる寸前でガッチリ両手で挟んで止める。

「ぐぼばぁ！」

ガキンッ。水中に響く鋭い金属音。隊長の刃は俺の手により折れた。というより砕けた。

「な……っ！」

信じられないと言った感じの隊長。

俺はその場で両手を思い切り広げる。

こっちのターンと参りましょうか。

俺は両手を広げたまま回転する。ひたすら回転する。

やがてその速さは周りの海水を大いに巻き込み、更に紅鮫も一人残らず巻き込んでいく。

「な、なんだこれは……！？」

今更慌てても遅い。俺は巨大な渦潮と化した海流を、紅鮫がやったのと同じく水面へと押し出す。

やってることは同じだが、その規模は奴らの数倍はあるだろう。船舶すら平気で巻き込みかねない渦潮が天高く舞い上がる。紅鮫と共に。

ひとしきり渦潮を舞わせた後、水面まで浮上した俺は、最後の処理を始めた。

「さぁ、お前らの不得意なフィールドへようこそ」

おれはそう言うと、落ちてくる紅鮫に向かい『青の衝撃砲』を乱発する。

「うらららららららぁぁぁ！」

重力を無視した青き流星群は、その無数の輝きで次々に紅鮫共に強烈な一撃をぶち込んでいく。

紅鮫共はそれぞれがそれぞれに断末魔をあげながらボチャボチャと海に落ちていく。

「く、くそがぁ……！」

紅鮫の隊長は衝撃砲を食らいながらも海中に落下せずに海面に踏みとどまり、こちらに向かってくる。

「我らが海で負ける訳にはいかんのだぁ！」

鬼気迫る形相で迫る紅鮫隊長。

しかし、俺は怯まない。

思い切り拳を振りかぶる。そしてその一撃を放つ、

「知るかぁっ！！！！」

という叫びと共に。

「ぐぬぅおがぁぁ！」

俺のパンチをもろにボディーに食らった隊長は、そのまま海面を滑る様に吹っ飛んでいき、やがて船の側面に突っ込んでいく。

「よぉっし！さて、次はどうでる？」

俺はフンと鼻を鳴らしつつ戦艦に目を向ける。

ズドォン……！

向けたその瞬間だった。

戦艦から放たれた砲弾が弧を描きながらそこへ着弾したのは。

「え……！？」

着弾したその場所。そこは、俺がさっきまでいた場所。漆黒のユニコーンの船がある場所だ。

なんでこのタイミングで撃った……！？

俺が一瞬呆然としたその間に、次々に砲台から放たれた砲弾が何度も何度もその場所を直撃する。

「や、やめろぉぉぉ！」

俺は叫ぶ。止めなくては、あいつらがやられてしまう。

しかし、俺がそうやって一歩を踏み出した時には既に遅く、洞窟があるであろう岩場は無残に崩れ落ちようとしていた。

「……」

油断していた。奴らの目的はあくまでも船。そう考えていた俺は漆

黒のユニコーンへの直接攻撃など考えてはいなかった。

「……くそっ！」

俺は岩場へと向かおうとする。救わなければ、あいつらを死なす訳にはいかない。

だが、またしてもこの貴重なはずの一歩は一歩目で止まる事になる。

地を打ち鳴らすような轟音と震動。海はざわめくように波がうごめく。

果たしてそれは前兆だったのか。その中心、崩れ落ちる岩場が、爆発した。

正確に言うなれば、爆発したように見えた。

空中へと舞い上がる岩と砂煙。その中をかいくぐるように白いそれが姿を現した時、俺の全身は驚きと興奮に染まった。

岩を貫くように現れた白き雄々しき角。その角から流れ出るような白いベールに包まれた一隻の船から、その男の号令が聞こえたから。

「野郎共！海戦だぁ！」

先頭に立つヴァルガ・グレーギースの声。その後ろにはシンディやレン、モリナガら漆黒のユニコーンの精強な面々がずらり構えている。

それと時を同じくして戦艦からアグルが部下を引き連れて姿を現す。

「来たか……漆黒のユニコーン！」

どこか期待感にすら満ち溢れたアグルの声。

互いの心に眠る灼熱の火蓋は、今まさに切って落とされようとしていた。

［５６］やれば出来る男ｖｓ特務部隊『紅鮫』（後書き）

―憧れのヒーロー―

シンゴ
「うーむ」

ゆめじん
『突然うなってどうしたんですか？』

シンゴ
「いやね、俺って戦い方が地味ではないかと思ってね」

ゆめじん
『いやいやいや、十分派手に戦ってますよ』

シンゴ
「でも見た目がＴシャツとジーパンなんだよ？」

ゆめじん
『確かにギャップはすごいですね』

シンゴ
「もっとこう変身して戦うみたいな演出が欲しかったかもな」

ゆめじん
『仮面被って二輪車乗る人とか光ってる国から来た赤と銀の人みたいにですか？』

シンゴ
「君の使ってるオブラートは破れてるな。絶対分かっちゃうだろそれ」

ゆめじん
『だって一人じゃゴレンジャーは出来ないですよ』

シンゴ
「そこははっきり言っちゃうんだ！」

では次回。

［57］船上の戦い～瞬間の斬撃～（前書き）

ようやく暖かくなってきた今日この頃。

そろそろコタツもいらなくなるかな？

……。

……！

みかん結局食べてない！

57話がギッシリです？

［57］船上の戦い～瞬間の斬撃～

―レヴィ・アント号―

「総員船上での戦いに備えろ。奴らが船の上の戦いだけで満足するはずがねぇ」

「はっ！」

アグルの指示を受けた部下は足早に艦内に向かう。

「あれが漆黒のユニコーンの持つ『力』なのですわね」

ニールは周りを白いオーロラの様な物で撃ち込まれる砲弾をガードする漆黒のユニコーンの船を見つつ呟くように言う。

「ああ。あれこそが奴らの船が他の船の追随を許さぬ所以だ」

「砲弾も効かないとなれば、その言葉通り直接刃を交えるしかなくなってしまいますわね」

ニールはどこか嬉々とした口調で言う。

「誰か会いたい奴でもいるのか？」

「ええ。あなたと同じで叩き潰したい『敵』がいるんですの」

ニールは敵という言葉を強調する。しかしアグルはその事にはあまり反応を示さず、

「そうか」

とだけ言い、艦内に向かおうとする。

「俺は『支度』をしてくる。この場は任せたぞ」

「安心してお任せ下さい、ですわ」

アグルはその返事を聞くと、そのまま艦内に入っていった。

―漆黒のユニコーン・甲板―

船の上ではヴァルガが大振りの青龍刀を振りかざし、船員達に熱弁を振るっていた。

「いいか！数の上じゃあ奴らが圧倒的だ。だがそんな事はハナから承知してた事だ！むしろ好機と思え。この戦いに勝てば『漆黒のユニコーン』はまた一つ伝説を刻めるんだ！」

ヴァルガの言葉に船員達はこれ以上ない熱気を帯びた声で応える。

「まずは軍艦の周りを掃除する。俺、レン、モリナガの三人で隊を作ってそれぞれの船に乗り込むぞ！」

「ちょ、ちょっと待って！私は？」

シンディは自分の名前があがって無いことにヴァルガに訴える。

「お前は『槍』の力を使って船同士の連携を阻止しろ。各個撃破の態勢を常に作れるようにな」

「そういうことね。分かったわ」

納得したシンディはその場で一歩下がる。

「よし！始めるぞ！気ぃ引き締めていけぇ！」

アグルの号令の下、漆黒のユニコーンの船は真っすぐに軍の船へと向かっていく。

「ぶつけるぞ！衝撃に備えろよ！」

ヴァルガは言いながら舵を思い切り切る。船は唸りをあげながら軍の船へとぶつかる。

2と番号の描かれた軍船の上では、衝撃でよろめいた軍人達がそれでも踏みとどまって銃を構える。

そこへ、ユニコーン側から先陣きって飛び込んでくる影が一つ。

「はいはーい！お邪魔しちゃうんだよ！」

見た目は小柄な少女にしか見えないレンが降り立つ。背中に身の丈をはるかに凌駕する布袋を背負って。

軍人達は海賊のイメージからあまりに逸脱した姿に一様に困惑する。

「むむむ！見た目で判断しちゃいけないんだよ！って教わらなかったのかな！」

レンは不満気にプクーと頬を膨らます。

そんなレンの前に、紫の鎧に身を包み、度を越えた肥満体の男が現れる。

「ぶふぅ。そう、人は見た目で判断しちゃいけないのでふ。お前敵ながらいいこと言うでふね」

マシュー・ドムド。その手に巨大な鉄球が付いたメイスを携えて現れる。

「わっ。すごいおデブさんだ！」

「ぶふぉー！前言撤回でふ！お前よくもストレートに口に出しやがったでふね！」

マシューはズンズンと苛立ちを足踏みに込める。

「私はあなたの見かけを口に出しただけなんだよ。中身までは判断してはいないんだよ！」

レンは力強く反論する。

「ぶぉ？……ど、でちらにしろお前は敵でふ！ここで叩き潰してやるんでふ！」

マシューは携えた巨大なメイスをブンと振り回す。

「戦場にノコノコ現れた事を後悔させてやるでふ」

「それは……」

レンは背負っていた布袋を乱暴に開け放つ。

「こっちの台詞なんだよ！」

巨大な金砕棒がレンの手の中に納まる。

「この『鉄鬼斎』の力で思い知らせてあげる！」

レンは自身の大きさを遥かに超えるそれをブォンと振り回す。

異色の対決。マシューとレンが対峙しているその間にも、漆黒のユニコーンは別の船へと攻撃を仕掛ける。

それを受ける次なる帝国軍船には、４の数字が刻まれていた。

「攻撃の手を休めてはいけませんのですぞ！撃ちまくって奴らを寄せ付けぬようにするのですぞ！」

ドムド三兄弟の次男、オルティマが指揮するこの船に、今まさに漆黒のユニコーンは襲い掛かろうとしていた。

「しかし砲弾がまるで効かないとは卑怯な能力としかいえないんですぞ。正面から堂々と戦えと私は声高に要求するんですぞ！」

オルティマが叫ぶと、それに呼応するかのように漆黒のユニコーン

側から、一際デカイ黒い塊が飛んでくる。

「な、なんか来たんですぞ！」

黒い塊はドスンと軍船の甲板に降り立つ。

「……え？砲弾や爆弾ではない……のか？」

構えるオルティマの前で、黒い塊はノソノソと形を変えていき、それはやがてある動物の姿に……。

「……熊？」

「いかにも。我輩は漆黒のユニコーンが誇る熊、モリナガであります」

モリナガは、フフンと鼻を鳴らし胸を張る。

「熊が喋ってるんですぞ。これはある意味一大事なんですぞ」

オルティマはモリナガを物珍しそうに眺める。

「そちらこそ随分と稀に見るひょろ長人間でありますな」

モリナガはオルティマを見上げながら言う。

「ひょろ長とは失礼な物言いをする熊なのですぞ。しつけがなっていないんですぞ」

「しつけとは言い方が乱暴でありますな。このモリナガ、今日に至

るまでの立ち居振る舞いは独力で身に付けたものであります」

「聞けば聞く程不可思議な熊ですぞ」

「不可思議はそちらであります。……と、そんな事を言っている場合ではなかったのであります」

モリナガは後に続く漆黒のユニコーンの船員達が揃った事を確認すると、オルティマに向かい拳を突き出す。

「漆黒のユニコーンの名において、この船を沈めさせていただくのであります」

船員達も「おう！」とモリナガの言葉に呼応する。

「そうは問屋が卸さないんですぞ。我らが帝国軍の誇りにおいてお前達を返り討ちにするんですぞ！」

オルティマもその以上に長い腕をブンブンと振り回し、兵士達を鼓舞する。

「いざ、尋常に勝負であります！」

「いつでも掛かってこいなんですぞ！」

そうして４番の船で戦闘が繰り広げられようという頃、ユニコーンの船は更に敵の布陣をかき乱していた。

やがて今度は５と書かれた軍船に近づく。

「よぅし！次は俺の番だな！」

ヴァルガは船から今すぐ身を乗り出さんばかりの勢いで、というか実際身を乗り出していた。

「どんだけ出しゃばりなのよこの船長は」

シンディは水の槍で敵の砲弾を防ぎながら呆れ気味に言う。

「部下が優秀なもんでな。ついつい勢いでいっちまうんだよな」

「……それは褒め言葉と受け取っておくわ」

シンディはハァとため息をつく。

「さぁて、行くぞ野郎共！」

ヴァルガは言いながら軍船に突っ込む。

「まだ戦いは始まったばかりなんだから無理はしないでよね！」

「当たり前だ！アグルに会うまでは間違っても死ねねぇな」

ヴァルガは言いながら携えた青龍刀をブンと風を切るように振りかざす。

「さぁ！掛かってこい！」

ヴァルガの勢いに軍船の兵士達は銃を構えたまま動こうとしない。

「おいおい……いつから軍は腰抜けの集まりになったんだぁ！？」

ヴァルガは心底呆れたような表情で周りを見渡す。

「腰抜け、か。実に不愉快な単語を使われてしまったものだ」

兵士達の間を割るように現れた紫の鎧の男、ライガ・ドムド。その手に巨大な両刃の剣を携えて現れた。

「ヴァルガ・グレーギース。まさか敵の首級が向こうから飛び込んできてくれるとはな。実に幸運だ！」

「敵に会うなり幸運なんて抜かすとはお前もしかして変態か？」

ヴァルガの迷いない口調がライガに突き刺さる。

「へ、変態？この私が変態だと！？実に不愉快だ！この苛立ちは貴様を斬る事で晴らすとしよう！」

ライガは剣を両手で握り構える。

「……」

一方ヴァルガはろくに構えもせずにフラットに立っている。

「なぜ構えない？」

ライガはヴァルガの戦う気を感じさせない姿勢に苛立ちを見せる。

「俺も低く見られたもんだな」

「どういうことだ……！」

ヴァルガは青龍刀の切っ先をライガに向ける。

「てめぇ如き三下にそうまで言われるとはな」

「な、なんだと！貴様、私を愚弄する気か！」

「愚弄かどうかてめぇの剣で試してみろよ」

ライガは剣を振りかぶりヴァルガに驚く程の速さで迫る。

「受けてみろ！」

ライガの剣が振り下ろされたその瞬間、強烈な斬撃がその体に刻まれる。

ライガ・ドムドのその体に。

「な……んだ、と……！」

ライガの剣はヴァルガを捉えられぬまま甲板に突き刺さっていた。

「悪いな。てめぇの剣受けれなくてよ」

ヴァルガは、ライガの後方で、青龍刀を振り下ろした姿勢で止まっていた。

何が起こったのか分からない。軍船の兵士達は一人残らずそう思っ

ただろう。

しかし、確かな事実が二つある。

一つはライガが斬られた事。

もう一つは、ライガを斬ったヴァルガがめちゃくちゃ強いということ。

「さぁ、次はどいつだ？」

ヴァルガの口元に不敵な笑みが浮かぶ。

［57］船上の戦い～瞬間の斬撃～（後書き）

《今日も私は元気です》

シオン
「……」

クルク
「……」

シオン
「……ねぇ、クルク」

クルク
「何？シオン」

シオン
「私達、忘れられてないよね？」

クルク
「大丈夫だよ。少なくともシオンは」

シオン
「ありがとう。クルクも大丈夫だよ」

クルク
「シオンの家に2回押し掛けただけだけど大丈夫かな？」

シオン

「……大丈夫だよ」

クルク

「うん、ダメね」

では次回。

［５８］船上の戦い２～あの子と熊と鉄の鬼～（前書き）

一時間せっせと書き続け、

しかしたった一回の操作ミスで全部パーになる。

ちくしょー！

５８話だぜよ。

［58］船上の戦い2～あの子と熊と鉄の鬼～

―レヴィ・アント号―

その船首に近い甲板で、砲撃音が響き続ける戦場に不似合いなドレス姿の女、ニール・ファンフルゲンはじっと戦場を眺めていた。

「副隊長殿。ここは危険です。一旦艦内へ下がられた方がよろしいかと」

ニールの背後に控える兵士がそう告げる。

「あら、どうしてですの？」

ニールは兵士の方を見る事なくゆったりとした口調。

「で、ですからここは敵の攻撃がいつ届くかも分からない場所ですので……」

「そうですわね、でも私はある方を待っていますので、ここを離れる訳にはいかないんですの」

ニールは海に向けたまっすぐな視線を一切ずらさずに言う。

「待っている？一体誰を……」

「今に分かりますわ」

兵士は割り込んできたニールの強い言葉に口をつぐむ。

その直後、レヴィ・アントの船首のそのすぐ先の海上から、高い水柱があがる。

それを見てニールは口の端に笑みを浮かべる。

「ほぅら、来ましたわ」

水柱の直後、大量の水飛沫と共に、ニールの待ち人が甲板に降り立つ。

「またお会い出来ましたわね」

ニールの見つめる先、先端に船の錨を取り付けた槍を携えた赤茶色の髪の少女は、ニールの柔らかさすら感じる表情とは対照的に、敵意のみを込めた険しい表情でニールを睨む。

「これで最後になるからよぅく見ておくのね。自分を叩き潰す者の顔を」

その少女、シンディはその槍『海王槍』を構える。

「ふふ。いきなり随分な口の聞き方ですわね。よほど自分を小さく見せたいようにしか見えませんわよ」

「一回勝ってるからっていい気になってると痛い目にあうわよ？おばさん」

ピキッ……。

ニールの笑顔が瞬間冷凍の如く固まる。

「……小娘がいらぬ口ばかり叩きやがりますわね」

「あら理不尽。事実を言って悪態つかれるとは思わなかったわ」

シンディはわざとらしくにんまり笑顔。

「……アナコンダ」

ニールが呼ぶと銀色の大蛇がどこからともなくニールの元に現れる。

「あなたには痛みを以て教えるしかなさそうですわね」

「その教え、倍にして返してやるわよ」

シンディは海王槍を構える。

レヴィ・アント号の緊張状態は周囲の軍船にも伝わる。

レンの乗り込んだ2番の船では、怒れる巨漢マシューが今まさにレンに襲い掛かろうとしていた。

「ぶふぉ！子供だからと手加減はしないでふよ」

マシューは構えたメイスをレンに向け大きく振り下ろす。

「子供じゃないんだよ！立派なレディーなんだよ！」

レンは『鉄鬼斎』と呼んでいた巨大な金砕棒を振り上げ、マシュー

のメイスを受け止める。

「ぶへ！？」

マシューのメイスはそのまま後方へと弾かれる。

「なめないでほしいんだよ！」

レンはマシューに飛び掛かる様に飛び上がり、鉄鬼斎を振りかざす。

「させないんでふよ！」

マシューはとっさにメイスでガードする。

「ふんっ！」

レンの気合いと共にその重量感の塊のような一撃がマシューを襲う。

ズォンッ。大気を揺らすような衝撃が走る。

「ぶほぉ！？」

マシューの立っている甲板の床板が大きくへこみ、マシューはバランスを崩す。

「もう一撃なんだよ！」

レンは体ごと回転し、再度鉄鬼斎をマシューに振り下ろす。

「さ、させないんでふよ」

マシューは鎧から慌てて何かを取り出すと、レンに向けそれを投げ付ける。

「え……っ！えほっ！げほっ！」

粉末状のそれはレンを包む様に襲い掛かり、その粉を吸ったレンは突如咳込み、攻撃も中断してしまう。

「な……に、これ……っ！」

その目に涙を浮かべながら咳き込むレン。

その様子をマシューは満足気に眺める。

「ぶほほ。催涙弾に使用される粉末でふ。万が一にと持っていて正解だったのでふよ！」

マシューは態勢を建て直し、メイスを構えレンに迫る。

「さぁ、おとなしく死ぬでふよ！」

レンはなんとかその一撃を鉄鬼斎で防ぐが、マシューのメイスの力に負け、そのまま甲板を貫いて船の内部へ落下していく。

「ぶほ？やりすぎてしまったでふかね？でもまぁ、調子に乗ったガキを懲らしめるにはちょうどよかったでふね」

マシューはその巨体を揺らしながら高らかに笑う。

「さて、奴はどんな状態に……」

マシューは自らが作った穴を覗き込む。

グォンッ。

「ぶほ？」

覗き込んだ瞬間、マシューは穴から伸びてきた黒い何かの直撃を受ける。

「ぶふぉっ！……い、一体なんなんでふか！？」

マシューは鼻血を拭いながら自分に当たった黒く伸びたそれを見る。

「鉄鬼斎はただの金棒じゃあないんだよ」

静かに響くレンの声。

「き、貴様、一体何を……！」

黒いそれは穴の中に引っ込んでいき、代わりにレンが鉄鬼斎を持って飛び出してくる。

「これが鉄鬼斎のもう一つの『形』なんだよ！」

レンが鉄鬼斎を振るうと、長く重量感のあるその姿に、鎖で繋がれたいくつかの節に分けられた事によるアンバランスなしなやかさが備わっていた。

その姿はさながら鞭のよいであった。大きさは鞭と呼ぶにはいささか規格外ではあるが。

「わたしの反撃の時間なんだよ！」

言いながらレンは体を回転させ、鉄の鞭と化した鉄鬼斎を遠心力に任せ勢い良くマシューに向けて振り抜く。

「ぶふぉ！？」

鞭たる特性かレンの振り抜きよりワンテンポ遅れて訪れた鋼鉄のそれを、マシューはメイスでガードする。

「ぶふっ。なかなかの……だがこの程度」

「まだ終わりじゃないんだよ！」

「ぶへ？」

一撃を受け切ったマシューに、レンは振り抜いた腕を更に振りぬく。

「おぉりゃぁぁぁぁぁ！！！！」

「ぶへぽぉぉっ！」

しなやかさを得た鉄の鞭はレンの操作に従いマシューを巻き込みながら力の赴くままに薙ぎ倒す。

「ぶ、ぶぉ……海賊の小娘風情が、なんでこんな力を……」

転げながら全身をしたたかに打ち付けたマシューが、よろよろと立ち上がりながら言う。

「私達を他の海賊と同じにしてもらったら困るんだよ！」

レンは鉄鬼斎を元の棒状に戻していく。

「私達は伝説の海賊『漆黒のユニコーン』なんだよ！」

レンの言葉から滲み出るのは、純粋な『誇り』。

マシューの目にはそれがとにかく腹立たしいものに映ったのだろう。いきり立つように立ち上がる。

「ぶふぅ！海賊が偉そうな口を聞くな！海賊風情が！」

マシューは足元に落ちていた大砲の弾をガシと握り締めると、レンに向けて思い切り放る。

「そんなの！」

レンは高く飛び上がり砲弾を避ける。

レンの高度はマシューの頭上高くにまで達する。レンはその位置で鉄鬼斎を振りかぶる。

「あなたが海賊をどう思おうと私は何度だって言うよ！」

レンの握る鉄鬼斎に迷いは無かった。

「私達は誇り高き海賊『漆黒のユニコーン』なんだよ！」

振りぬきからの鉄の鞭。砲弾のように打ち出された鉄鬼斎が、甲板のマシューを直撃する。

「がぶほぉ！」

マシューの体は甲板にめりこみ、そのまま鉄鬼斎の勢いのまま船体を貫いていく。

「これが海賊の力なんだよ！」

レンが叫んだ瞬間、鉄鬼斎は船底まで突き破り、軍船は二つに割れる。

「……ちょ、ちょっとやり過ぎたんだよ」

レンは自らの手で沈めかけている船のマストに掴まりながら、なんというかアワアワしていた。

「おーい！こっちだ、レン！」

そんなレンの近くに漆黒のユニコーンの船が近づく。

「た、助かったんだよ！」

レンは急いで船へと乗り移る。

その直後、２番の軍船は海中へと没していった。

「一人で勝手に始めてあげく船まで潰すなんてお前どんだけ突っ走ってんだよ」

いつかのスキンヘッドのおっさんが呆れ気味に言う。

「……結果オーライってことにしてほしいんだよ」

レンは若干申し訳無さそうにそう言った。

こうしてレンが結果オーライ的な勝利を掴んでる間にも各船で戦いは続いていた。

「この私の拳が貴様みたいな熊に受け切れるかな？ですぞ！」

「熊の身体能力をなめたらいかんのであります！」

こちらは４番の軍船。ドムド三兄弟の次男オルティマ・ドムドと漆黒のユニコーンの喋る熊モリナガの戦い。

「ひょろ長いだけの貴様の攻撃など我輩には届かぬのであります」

モリナガはなめらかな腕の動きでオルティマの長い腕から繰り出されるパンチを巧みに受け流していた。

「熊にしてはなかなかこざかしい技術を持っているんですぞ。少し本気を出す必要があるかもしれないんですぞ」

「そう言った台詞は雑魚の台詞なのであります」

「ならば雑魚には出せない実力をお見せするんですぞ」

オルティマは思い切り両腕を後方に伸ばす。

「な、なにを……？」

モリナガは一瞬オルティマの様子を伺う為に隙を作ってしまう。

それが全てだった。

「超腕豪打！！ですぞ」

弾丸の如き速さで打ち出されたオルティマの両腕は、その勢いのままモリナガに直撃し、その真っ黒い体を吹き飛ばす。

「これで私が雑魚ではないとお分かりいただけたかな？」

オルティマはこきこきと腕を鳴らしながら誇らしげに言う。

「オ、オルティマ中尉！船を壊さないでください！」

漆黒のユニコーンの船員達と戦っている兵士の一人が無残に穴の空いた船室部分を指して言う。

「うむ？……ついうっかりなんですぞ」

オルティマはポリポリと頭を掻く。

「ついうっかりでこの威力……確かに雑魚ではなさそうでありますな」

船室から響く声。残骸を押し退けるようにしてモリナガが穴から姿を現す。

「ほぅ……その頑丈さ、さすがは熊と言ったところですぞ」

「黙るがいいのであります。それよりも貴様のその腕、なかなか奇妙な動きをしたでありますな」

全身の毛に付いた埃を落としながらモリナガがゆっくりと現れる。

「ほぅ。我が秘術の一端に気付くとはなかなかの熊ですぞ」

「熊熊言うのも大概にしやがれでありますぞこの紫アスパラガス野郎が」

威圧のつもりかモリナガは牙をむき出しにする。

「……紫アスパラガス。なんかただ腐ってるだけみたいな気がするんですぞ」

「性根が腐り切ったお前達にはお似合いでありますな」

ハハハ。とモリナガはほとんど表情の変わらない顔で笑う。

「口が減らない熊ですぞ。さっさと決着をつけないとこちらに要らぬストレスが降り掛かるんですぞ」

オルティマは長い腕を操り戦闘の構えをとる。

「そうでありますな。我輩の勝利でさっさと幕を閉じるのでありま

す」

モリナガも大股になり、右腕を下からすくい上げるような形に、左腕は上から覆いかぶせるような独特の構えをとる。

「奇妙な構えですぞ」

「これは我が師より賜りし構えであります」

「ほほう。では、その大事な構えで我が秘術を受けるんですぞ！」

オルティマはモリナガに向けて大きく一歩を踏み出し、その長い腕を振るいストレートを繰り出す。

「なんの！」

モリナガはオルティマから距離を取りそれを避けようとすり。

「！？」

だが、届かない距離にいるはずのモリナガの腹部に、オルティマの拳が叩き込まれる。

「ぐぅっ！」

モリナガはわざと殴られた勢いのままごろごろと転がる。

「はぁっ……！この違和感、やっぱりおかしいのであります」

モリナガの言葉には若干の焦りが混じっていた。

「師匠の構えで私を倒すのでなかったのかな？ですぞ」

オルティマはまるで勝ちを確信したかのように悠々とモリナガとの距離を詰めてくる。

「……奴の拳は間違いなく我輩には届いていなかった。我輩が目測を誤ったというのでありますか……？」

モリナガは困惑しながらも距離を詰めてくるオルティマに対し再び構えをとる。

「では畳み掛ける段階へステップアップですぞ！」

言いながらオルティマは両腕をまるで鞭を振るうかのようにブンブンと振り始める。

「超腕豪風。この嵐の如き攻撃から貴様は逃れることは出来ないんですぞ！」

オルティマは一気にモリナガとの距離を詰める。

「くっ……！」

モリナガはガードの態勢をとるが、オルティマの攻撃はそのガードを突き崩し、更に無防備となった体に数え切れぬ程の攻撃が叩き込まれる。

「……っ！！」

何十発の拳が当たったか。オルティマは乱雑に振り回していた腕の動きを止める。

「終わりですぞ」

オルティマは拳を鉄球の如く、腕はそれを繋ぐ鎖の様に体の回転の勢いに任せて大きく振りかぶる。

「ふん！！！！」

振るわれたその拳は凄まじい遠心力による『威力』を得て、モリナガに襲い掛かる。

ズンッ。

重く鈍い音が響き、モリナガの体は大きく横になぎ払われる。

「……」

モリナガはゴロンと力なく転がる。

「本当に終わってしまったんですぞ」

オルティマは振るった拳を労りながら、モリナガに近づく。

「油断せずに敵にとどめを刺す。基本ですぞ」

オルティマはそう言いながら近づく。

「……」

しかしモリナガは全く動かない。

オルティマはモリナガを射程圏内に収め、拳を振り上げる。

「さぁ、死ぬんですぞ！」

「死ぬのはお前であります！」

モリナガが、まるでこの瞬間を待っていたかの様に、動きだす。

「！？」

オルティマの眼前が突如真っ黒に染まる。

「そぉいやぁっ！！」

黒は即ちモリナガの体毛色。オルティマの顔面にモリナガの前蹴りが炸裂する。

「がふぉっ！……だ、騙しやがったんですぞ！」

オルティマは数歩後退し、顔面をおさえる。

「敵を欺くは戦術の基本であります。騙された方が悪いのであります！」

言いながらモリナガは姿勢を低くして、グッと足に力を込める。

「今度は我輩の出番であります、なっ！」

モリナガは言い切りと同じタイミングで甲板を蹴り、弾丸の様なスピードでオルティマに迫る。

「させないんですぞ！」

オルティマは真っ直ぐモリナガに向けて拳を繰り出す。

「見切ったぁ！」

モリナガは体を回転させてオルティマの一撃をその流れに載せて受け流す。

「からのであります！」

モリナガは伸び切ったオルティマの腕を脇に抱える様に掴むと、

「ふんぐ！」

そのまま大股に広げた足に力を込める。

「投っ！！」

モリナガは思い切りオルティマの腕を引き、その身体ごと空中を経て甲板へ叩きつける。

「ふぐぅっ……！な、なかなか効いたのですぞ」

オルティマは言いつつも素早く立ち上がる。

「だが、まだ終わりではないんですぞ！」

再び繰り出されるオルティマの拳。

「見切ったと言っているのであります！」

モリナガはその一撃を、自分に当たるそれより『前』に自分の拳で弾く。

「ぬぉっ！」

オルティマはその縦に長い顔を驚きに染め、その為か次の動きへの反応が遅れる。

次の動き。即ち、モリナガの全力の反撃。

「さぁ、奇妙な構えの本領発揮であります！」

モリナガは再び両手を上下に構える。

「はぁぁぁぁぁぁぁ……！」

モリナガは低くうなり、鋭い眼光でオルティマを捉える。

「くらうのであります！」

モリナガは上に構えた手を大きく振り、その勢いのまま身体を回転させつつオルティマの懐に飛び込み、逆の拳で裏拳を叩き込む。

「させぬですぞ！」

オルティマは裏拳を腕でガードしようとするが、モリナガの拳はその腕をすり抜ける。

「がぶふっ！」

腹部に裏拳の直撃を受けたオルティマの顔は驚愕に染まる。

「まだまだであります！」

モリナガはオルティマが腹部をかばいようにくの字に体が曲がったのを見るや、ぐっと足に力を込める。

「うおおおぉぉぉ！！であります！！」

モリナガは地面を蹴りあげるように飛び上がり、拳は高らかに上に突き上げる。

ジャンピングアッパーカット。

モリナガの拳はオルティマの顎を捉え、突き上げる様にその一撃を強烈に打ち込む。

「が……ふっ……！」

オルティマはゆっくりと弧を描きながら甲板に背中から落下する。

「これが熊の底力なのであります」

モリナガは天に吠えるが如く叫んだ。

［58］船上の戦い2～あの子と熊と鉄の鬼～（後書き）

―フォロータイム―

シンゴ
「……」

シンゴ
「……」

シンゴ
「……ん？」

ゆめじん
『どうしましたシンゴさん？』

シンゴ
「いや、なんで今俺がフューチャーされてるの？」

ゆめじん
『本編に出なかったからに決まってるじゃないですか』

シンゴ
「あー……なるほどお気遣いいただきましてどうも。ってかちくしょう！」

では次回。

［５９］船上の戦い３っていうか女の戦いラウンド２（前書き）

近頃は寒暖の差が激しいですな。

そろそろ風邪をひくかな？とおもっているのですがこれがなかなか……。

ていうか結構間が空いちゃいましたね。

５９話じぇす。

［59］船上の戦い3っていうか女の戦いラウンド2

「ぐっ……」

モリナガは痛みに耐えるように歯をきしませながら、片膝をつく。

「……少々きつい戦いだったのであります」

「少々、で片付けられると私が惨めです……ぞ」

甲板に仰向けで倒れているオルティマが乱れた呼吸の中で言う。

「まだ喋る元気があったのでありますか？」

「頭脳は回転し口は動くが……体は動きそうにないんですぞ」

オルティマはフゥとため息をつく。

「お前の勝ちですぞ」

「傷だらけはこちらも同じ。辛勝というやつであります」

『辛勝』という言葉にオルティマは苦笑いをこぼす。

「……一つ教えて欲しいんですぞ。私の秘技、いつ気付いたかを」

オルティマの問いにモリナガは一回ゆっくりと頷いた後に言葉を紡ぎだす。

「お前の拳、いや正確には拳の周りに形成される膜のような物に気付くのはそんなに難しいことではなかったであります」

あっさりとタネを明かすモリナガに対し、オルティマは特に驚く様子も無く続く言葉を待つ。

「その見えない拳の存在にさえ気付けてしまえば後はそれを計算して対処すればいいだけの話であります」

「敵ながら、見事であります。こうも簡単に破られるとは……まぁそんなに難しい仕掛けではないですが」

「一言余計であります。しかも語尾変わってるし」

なにはともあれ、モリナガは勝利を収めた。

じき4番の船の主導権はユニコーンに傾いていく。

2、4、5と各軍船の状況は漆黒のユニコーン有利で進んでいく。

そして、帝国軍側の本船であるレヴィ・アント号においても戦いは始まっていた。

軍艦の上にて対峙する二人の女。シンディとニール。

互いに出方を探るようにジリジリと距離を詰められずにいたが、その圧しかかるような重い空気に耐え切れなくなったのか、戦況が動く。

先に動いたのはシンディである。海王槍を構え、低い姿勢でニール

の懐に飛び込んでいく。

「アナコンダ！」

ニールの鋭い呼び声に答えるように銀色の蛇アナコンダは向かってくるシンディに対し勢いをつけて叩きつけるように尾を振ってくる。

「……っ！」

シンディは海王槍の柄でその強烈な一撃を防ぐが、だが、受け流しきれない衝撃が針で突いたかのような痺れとなって襲う。

「少しは学習された方がよろしいですわよ」

ニールは自身も大きく一歩踏み込むと、自らが一撃を与えるべく腕を伸ばす。

ニールにはシンディの持つ海王槍が距離感を錯覚させるように感じ、まず槍を奪おうと考えた。

しかし、伸ばされたニールの手は、何も掴む事はなかった。

なぜか？シンディはニールが海王槍に触れる瞬間、海王槍を自ら消したのだ。

「なにを……！？」

ニールは予想外の事態に驚きの声をあげる。

ニールの体は槍を掴み止まるはずだった為、ブレーキを失い前かが

みにバランスを崩す。

「学習すんのはあんたの方、よ！」

シンディはその瞬間を見逃さなかった。シンディは自ら飛び込んできたニールの腹部に、固く握り締めた拳を叩き込む。

「水流のおまけ付きよ。じっくり味わってね！！」

ギュルギュルという異常な程の水の回転音と共にニールの体が射出された弾丸のように真っすぐに吹き飛んでいく。

「女子三日会わざれば……ってね。あんたも女なら可能性を考慮すべきだったわね」

シンディはフゥと息をつきながら言う。

だが、そんなシンディに銀色の蛇、アナコンダが飛ばされた主の為にと牙を剥きシンディに襲い掛かる。

「あんたはあんたで厄介だけど……！」

シンディはアナコンダの牙を紙一重で避けながら、自身は海水を呼び寄せ槍を形成する。

「それも二度目の事！初めてでない以上遅れはとらないわ！」

シンディは作り出した一本の真っすぐな槍を更に圧縮させて鋭い針のような槍を作り出す。

「水の『硬さ』。甘く見ない方がいいわよ」

シンディはアナコンダに向けその槍を放つ。

トスッ。

アナコンダの腹部に刺さったその槍はその体内へ吸収されていく。

「ジ・エンドよ」

パシュンという水が弾ける音が響く。

「……」

そしてその直後、アナコンダの首が音もなく、刃物で切断したかのような切り口で、ボトリと甲板に落ちる。

その断面は蛇のそれではなく、その肉体に人為的に鉄などを用いて改造されていた。

「……こっちはかなり気合い入れてきたって言うのに、やけにあっさりしたリベンジになっちゃったわね？ニール・ファンフルゲン」

挑発的としかとれないシンディの台詞。それに呼応するかのように、体のあちこちに傷を作り、ドレスを汚したニールがゆっくりと姿を現す。

「……アナコンダは確かに私のパートナーですわ。多少なりあの子に戦闘に於いて依存していた部分はありますわ。それは素直に認めましょう」

ニールはどこから持ってきたのか黒い日傘を取り出して淀みない優雅な動作でそれを広げる。

「でもあなたの口ぶり、もう私に勝ったといわんばかりのそれに聞こえたのは私だけでしょうか？」

「あら、違うの？」

シンディは強気な口調を崩さず間髪入れずに言葉を返す。

「調子に乗るなよ小娘が……ですわ。私はあの方の副官。強くあらねばならないのです！」

ニールも負けじとシンディを威圧するかのような視線を送る。

「あの方……アグル・ブラストの事ね。全く恐ろしい惚れ込み様ね」

「あら？己が全てを一人の殿方に尽くし、捧げる。それが女としての最高の喜びではなくて？」

ニールはアグルの事を思ってか恍惚の色が混じった笑みを浮かべる。

「価値観の違いかしら？私にはあなたの言う喜びはあまり理解できないわね。残念だけど」

「あなたはまだ幼いのですわ。己を捧げるという言葉の尊さやその殿方への溢れる想いの切なさは、まだ理解には至れないのでしょうね」

ニールは本気なのか挑発なのかは分からないがシンディに対し大人の余裕と哀れみを混在させた視線をシンディに送る。

「そうね。私はまだ一人で自由にやりたいから、あなたの語る女性論にはまだ賛同出来そうにないわ」

シンディははっきりと言い放つ。

「そう、残念ですわ……」

「ええ、とっても残念……」

『残念』という言葉が二人にとって引き金となったのかは分からないが、甲板にピンと細い糸が張られたような緊張感が出現する。

シンディは再び海王槍を出現させる。

ニールは傘を閉じ、それをまるで刺突による攻撃を主とした細剣の如く振るう。

「さぁ、除幕の紐を切っていただけるかしら?」

その攻撃は傘から放たれているとは思えぬ程に俊敏に的確にシンディを捉える。

「かっこつけた言い方してんじゃないわよ!」

シンディは小刻みに海王槍を振ってニールの攻撃をかわす。

「私だってたまにはかっこつけてみたいですわ」

ニールは激しく攻め立てながら言う。

「あなただってそうでしょう？身の丈に合わぬ物をいくつも振りかざす気分はいかが？」

「な、何言ってんのよ！」

瞬間、海王槍のガードがぶれ、ニールの傘がシンディの頬をかすっていく。

「私には分かりますわ。あなたは本当はまだまだ幼い。しかし、置かれてる環境に早く順応しようとして必死にもがいてる。違いますかしら？」

ニールはシンディに問い掛ける。

「私はそんなんじゃない！」

シンディはそう叫び、海王槍に水を纏わせる。

「私は私のやり方で生きている！」

シンディは海王槍を大きく振りかぶる。

だが、振りかぶられたその槍が威力を発揮することはなかった。

「ぁ……っ……」

シンディの腹部に突き立てられた黒い傘。シンディから流れ出た血が傘を伝いニールの手に付着する。

「ね？あなたは幼いですわ。こんな挑発に乗ってしまうんですもの」

ニールはそう言って、シンディから傘を引き抜く。

「ぁぐ……っ！」

シンディの顔が苦痛に歪む。そして、そのまま力無く倒れていく。

「私を欺き一撃を加え、更にアナコンダを倒したあなたの力は十分に恐怖たらしめるものでしたわ」

ニールは傘の切っ先をシンディに向け、弓を引くようにその間に距離をとっていく。

「でもその恐怖もここまで。さよならの時間ですわ」

ニールの表情は勝者のそれではなく、死にゆく者を憐れんでいるように見えた。

「……っ」

シンディは、動けない。

そんなシンディに、ニールの持つ切っ先が鋭く放たれる。

「……」

果たしてその切っ先はシンディに刺さる事は無かった。

なぜか？

「ぎ、ギリギリセーフ……！」

この俺、桐原慎吾が寸前で止めたからである。

［59］船上の戦い3っていうか女の戦いラウンド2（後書き）

―モリナガの遊び―

モリナガ
「サングラスしてみたであります」

シンディ
「なんか無駄に真っ黒ね」

モリナガ
「海賊らしく黒い眼帯をしてみたであります」

シンディ
「うん。黒過ぎて分からないわ」

モリナガ
「視力検査をするであります」

シンディ
「えっと、どっちの目を隠してるの？」

モリナガ
「次は……」

シンディ
「もういい！なんだかお腹いっぱいだから！うん！」

パンダにサングラスもなかなかシュールな気がする。

では次回。

［６０］激情への引き金（前書き）

本編６０話到達です。

でも終わりはまったく見えないですよ。おっほっほ。

好きな物語を書いていられる事に感謝。

６０話れす。

［60］激情への引き金

「あら、あなたは……」

ニールは俺の方を見るなり不愉快そうに眉を潜める。

「いつかの海岸で会ったよな」

俺は握った傘の先をグッグッとシンディから逸らすと、そのまま二人の間に入る。

「キ、キリハラ……？」

「おう。なんとか間に合ったな。大丈夫か？」

俺の言葉に、シンディは苦しげに苦笑い。

「この状態で……大丈夫な訳ないでしょうが……」

ごもっとも。

「後は任せとけ。こいつは俺が相手をする」

「あら？女の戦いに割り込む気ですの？」

ニールの嘲るような挑発。

「私とこの子は互いの誇りを懸けて戦っていた。あなたはそれを邪魔するとおっしゃいますの？」

「うっせぇ！そんな事情こっちの耳には入ってないんだよ残念だったな！」

俺は動じない。

「誇りだかなんだか知らないが目の前で死にそうになってるの見て黙ってられないんだよ」

俺は真っ直ぐにニールを睨み付ける。

「……へぇ。なかなか面白いですわねあなた」

ニールは傘の持ち手に両手を添える。

「でも綺麗事ならよそで言ってくださいますかしら！」

ボンッという音が勢い良く鳴り響き、傘が開かれる。

「うぉ！」

俺はその衝撃で握っていた傘の切っ先を離してしまう。

「ただあなたはマシューと紅鮫を倒した実力者。戦うとあらばこちらも手を尽くさせてもらいますわ！」

ニールは傘を閉じるとその先端をこちらに向けてくる。

「また突いてくる気か？」

いや、にしては距離が離れすぎてる。何をする気だ？

「ドーン、ですわ」

ニールの気の抜けた声と共に傘の先端が弾丸の様に飛び出しこちらへ飛んでくる。

「飛び道具かよ！？」

俺はとっさにその弾丸を避ける。

「無駄ですわよ」

余裕に満ちたニールの声が引き金にだったのか。

俺の目の前に迫った黒いそれは、空中で弾け飛んだ。

「うぉ！」

弾けた弾丸から、何やら白い煙が広がる。

「なんだこりゃ……？」

ただの煙幕……にしては様子が変だ。煙の量が少なすぎて目くらましになってない。

だったら……。

「！？」

俺は急いで煙から離脱する。

「あら、なかなか勘が鋭いようですわね」

ニールがクスクスと笑いながら俺を見る。

「でも、ちょっとだけ手遅れでしたわね？」

「何を……」

ガクンッ。突然膝から下の力が抜け、俺は崩れるように甲板に膝をつく。

「っはぁ……どういう……？」

体にうまく力が入らない。もしかしなくてもこれはさっきの……。

「私特製の『毒』のお味はいかがです？」

「毒……」

俺の嫌な閃きはどうやら当たってしまったらしい。

「でもご安心を。致死性の毒ではなく身体の麻痺を目的とした毒ですから」

麻痺……。なるほど体に力が入らないのはそういう事か。ってそれって結構やばくないか？

俺はなんとか体勢を立て直そうとする。

「させませんわよ」

有言実行。ニールは俺との距離を一気に詰め、傘で俺の横顔を払う。

「ふぐぅっ！」

払うといってもその一撃はまるで鉄塊をぶち当てられたかのような衝撃で、俺の体は衝撃の向くままに吹っ飛ぶ。

力が入らない分俺は衝撃をもろに受ける。

「さて、あなたは少しそちらでお休み願いましょうか」

ニールはふいと俺から向きを変える。

「少し邪魔が入ってしまいましたが……。さて、終幕を再開させましょうか？」

その目の向く先には、未だ甲板に俯せているシンディがいる。

「や、めろ……」

俺は絞り出すように声をあげる。が、体の痺れがいよいよピークに達し、体が全く動かない。

「あなたはそこでよく見ているといいですわ。この戦いの結末を」

ニールは傘の先端にその切っ先を装填し、シンディに向け構える。

「くそがっ……痺れさえなければ……」

そうだ。それさえなければ俺は一瞬であいつをぶっ飛ばすのに……。

『シンゴさん！』

……ゆめじん？いきなりなんだよ！こっちは今えらく切迫した……。

『だから出てきたんですよ。シンゴさん、今すぐ体からその痺れを取りましょう！』

それが出来ないからピンチなんだよ！分かってますか？

『出来ますよ！シンゴさん、あなたの持つ力はどんな力なんですか！』

いや、無茶苦茶言いよるなこの御方は。

しかし今はその無茶苦茶に賭けるしかなさそうだ。

俺は集中して体から痺れを取る事に意識を向ける。

「よし！いくぞ！」

『いっちゃってください！』

俺は衝撃波を放つ時の要領で痺れを解き放とうとする。

その瞬間、俺の体に理解しがたい現象が起きた。

ブォン。という巨大なうちわでも振ったんじゃないかという空気の揺れる音。

しかしてその音は俺から放たれた空気の音。さてその空気はどこから出たか？

アンサー。お尻である。つまりおならである。

だがそれはただのおならではない。全身の痺れを一気に追い出すという気合いと共に放たれたそれは、さながらジェット噴射の如く俺の体を離陸させた。

「うぉぉぉぉ！！？？」

予想の範疇からかけ離れた現象に俺は衝撃を受けつつも、もうどうにでもなれという気持ちで、頭から突っ込んでいった。

ニールの懐へ。

「え、えぇぇぇ！？」

さっきまでの優雅な雰囲気はどこへやら、大口を開けて驚愕するニールのまさに懐へ、俺は勢いを全く殺さずに突撃した。

「うぅおぉりゃぁぁぁぁぁぁ！！！！」

腹部への頭突き。そしてそのままニールの体を大きく吹っ飛ばす。

「……う、うし！結果オーライだな！」

俺は未だ少し痺れる体でガッツポーズ。

「む、無茶苦茶ね」

シンディが呆れ気味に言う。

「心配するな自覚はある。ていうか大丈夫なのか？」

「なんとか自力で止血だけはしたわ。薬持ってて本当良かったわ」

そう言いながらシンディは体を起こす。

「それより今はアグルを倒す方が先決よ。急いだ方がいいわ」

「逞しいなお前。いや、その前にアグルはどこにいるんだよ？」

「恐らく艦内の、割と重要な場所にいるはずよ」

「なんか漠然とし過ぎてないか？」

俺は思う。こんなデカイ軍艦の内部を探すのは容易ではなかろうと。

「でもそうでもしなければ戦いは終わらないわ。奴を倒せれば戦いはすぐに終わる！」

「……よっしゃ。じゃあ敵のボスさんを探しに行くとしましょうか！」

「何勝手に私との戦いを終わらせてるんですの？」

低く響き渡る声。

ニールである。腹部をかばいつつ立ち上がったニールが敵意の目でこちらを睨む。

「おいおい。まだやる気かよ」

「当たり前ですわ。私はこの通り立ってますわ。そして戦う意志がある。十分ですわ」

ニールは傘を構える。

「……強情な女だな、おい」

俺はニールの気迫に思わず呟く。

「私はアグル・ブラストの副官。そしてこの場を任されているのです。命絶えるまで退くわけには参りませんわ」

ニールは言いながら何やら小瓶を取り出す。

「その任を全うする為に、文字通り『全力』であなた方を殲滅致します」

ニールは小瓶の蓋を開け、中の液体を一息に飲み干す。

「おい。それって……」

俺の記憶から検索されたそれと、今ニールが飲んだそれが、俺の中に同時に現れる。

ドクンッ。ニールの体がびくんと震え、そしてその体にみるみる変化が現れる。

目は血走り見開かれ、腕や顔に紫色の紋様が現れる。

ニールのその姿は、人でありながら人とは違う異質な物を纏っていた何かへと変貌していった。

「はぁぁぁぁ……」

ニールは長く長く息を吐く。

「悪くない気分ですわねぇ……」

ゆらり、ゆらりとニールは歯をむき出しにした不気味な笑みを浮かべる。

「さぁて……」

そしてその笑みは俺へと向けられる。

「戦いを再開しましょうか」

次の瞬間、ニールの周りの空気が大きく波を打つ。

「!?」

俺は瞬間、眼前に迫るニールに驚き、動きが止まる。そして、それが全てであった。

「イィヤァァ！」

空間を切り裂く様な甲高い叫びと共にニールの傘が俺の体を薙ぎ払う。

「ぐっ……！」

さっきまでの攻撃とはまるで比べ物にならない重く速い攻撃に俺は為す術無く吹き飛ばされる。

「はぁ……はぁ……。我ながら、凄まじい力ですわね……」

ニールはなぜか肩で息をしながら言葉を吐く。

額には脂汗が滲み出て、いつかの優雅な立ち居振る舞いとはまるで別物の如くゆらゆらと体を揺らしていた。

「くそがっ……」

俺は立ち上がりながら無意識にそう呟いていた。

ニールはあの薬で莫大な力を得たようだ。だが今の様子を見るにその力には代償が必要なのが分かった。

「人のトラウマほじくりやがって……」

魔獣ギャラスとの戦い。その時も一人の人間が怪物に成り果てた。

俺には今のニールの姿がその記憶に重なって仕方なかった。

「あら、あなた案外丈夫ですのねぇ……。まだ食らい足りないのかしらぁ？」

ニールは再び傘を構える。

「いや、残念ながら今のあんたの一撃は重すぎてな。出来ればもう遠慮したい」

俺も構える。奴を、ニールを止めるために。

奴は今は自我をしっかり保っているが苦しんでいるのは明らかだ。

「止めるぜ……」

「止められるのならどうぞぉ……！」

刹那、ニールが懐に飛び込んでくる。が、二度も同じ攻撃を食らう程、

「俺は甘くないんでね！」

6倍の力を込めた拳でもってニールが振り下ろす傘をぶっ壊す。

「そんなもんに頼ってんじゃねぇ！」

そのまま力を込めた拳を奴の顔面に叩き込む。

ニールの体はそのまま滑るように床を転がっていく。

「はぁっはぁっ……！」

俺はここで初めて自分がいつも以上に緊張していたことに気付く。

ニールがどんな薬を使ってあんな力を得たのかなんてのはあくまで俺の推測の域を出ない。

しかし、その推測に至るまでの記憶こそが、俺を緊張させた。

「……っ！？」

俺は力が抜けてその場にペタリと腰をおろしてしまった。

「……戦いはまだ終わっちゃいないってのにな」

俺は俺自身の未熟っぷりに小さくため息をつく。

「すごいものを見せてもらったわ」

いつの間にかシンディが近くまで来ていた。

「お前、歩いて平気なのか？」

「なんとかね。普段の自己鍛練の賜物ね」

スッ、とシンディは手を差し出してくる。

「え？」

一瞬呆気にとられた俺だが、すぐに意味を理解しその手を取る。

いや、正確には取ろうとした。

パァンッ。

その音が鳴り響いた次の瞬間、シンディの体がグラリと俺に体重を預けるように倒れてくる。

「え？シンディ……？」

俺はその華奢な体を受けとめつつしかし意味が分からず数瞬の間呆然とする。

「おい？どうした？いきなりなんだってんだよ？……おい！！」

シンディの体からじわりと伝わる赤い感覚。

それは、先程の発砲による弾丸がシンディの体を貫いた事を認識させるに十分な感覚だった。

そしてその弾丸が誰の手により放たれた物なのか。

「戦況は不利な様だな。……覆すには少々骨が折れそうだ」

アグル・ブラストの登場である。

［６０］激情への引き金（後書き）

―ゆめじんかく語り―

ゆめじん
「ズズー……」

ゆめじん
「あー、お茶がおいしい」

ゆめじん
「６０話なんですねー。早いようななんというか」

ゆめじん
「私がシンゴさんの夢に侵入したのが昨日の事のようです」

ゆめじん
「……」

ゆめじん
「シンゴさんも会ったときより随分強くなりました。私の助言はほとんどいらないかもですね」

ゆめじん
「……まぁ何が言いたいかって言うとですね？」

ゆめじん
「……」

ゆめじん
「オナラされるとは思わなかったってことです」
では次回。

［６１］海賊ｖｓ軍人。というか漢の戦い（前書き）

いい陽気の日が続いております。

ＧＷのお出かけには絶好ですな。

私はほとんど仕事ですが。

６１話ですちくしょう。

［６１］海賊ｖｓ軍人。というか漢の戦い

兵器。

俺の視界に奴が、アグル・ブラストが入った時に抱いた最初の印象である。

どこか機械感のある、しかし重々しい印象は受けない鎧に身を包み、右腕に６本の細い砲塔が円の形にまとめられた銃を、左腕には右とは対照的に巨大な、それこそ大砲という形容が一番相応しい武器を肩に乗せて構えている。

「てめぇ……！」

だが今の俺にとってはそんな事はどうでも良かった。

シンディを撃った張本人が目の前にいる。

俺の中にはその事実しかなかった。

「なぜシンディを撃った！？」

状況を考えれば甘っちょろい問いに聞こえてもおかしくはない。しかし俺は言わずにはいられなかった。

「愚問だなぁ。お前達を比較した時弱っていたのは女の方だ。だから女を撃った」

アグルは淡々と答えを告げる。

「っ！！」

俺は怒りに任せて衝撃波を放つ。

「遅いなぁ、おい」

だがその一撃はいともたやすくかわされてしまう。

「怒りに支配されては力は発揮出来ねぇ。よく覚えときな」

アグルは6連の砲塔をこちらに向ける。

「そしてそんな奴には死ぬしか道は無くなる、これも覚えときな」

砲塔が回転し、凄まじい速さで弾丸が撃ちだされる。

「っ！！」

俺は咄嗟にシンディを庇う。

余計な事には頭が回らなかった。ただシンディを守ることしか考えてなかった。

撃ちだされる弾丸は俺の背中に数えるのが馬鹿馬鹿しい程に命中する。

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

いくら体を強化していてもこれだけの弾丸を食らえば痛みはある。

ダメージもある。

しかし俺は容易にどくわけにはいかなかった。

テレポートをしようにも集中出来ない。もはや耐えるしかない。

「ぐぅぅ……っ！」

だが弾丸の嵐は止む気配がない。一体何発仕込んでんだよアイツ！

やばい……！意識が……。

俺は薄れゆく意識の中でなんとかシンディだけでも助けたかった。

だが、俺の意識はそこでブラックアウトした。

あ、死んだな俺。

「おい、生きてるか？」

暗い意識の中に響く聞き覚えのある声。

あれは……確か……。

「ついにお出ましか……」

次に聞こえてきたのは、俺をここまで追い込んだアグルの声。

「はっ！そんなごてごてした装備で俺と戦おうってのか大佐殿？」

挑発するように聞き覚えのある声は響く。

「俺には俺の戦い方があるんだよ……ヴァルガ・グレーギース！」

その名を聞いた瞬間、俺の意識は暗闇から覚醒へと這い出た。

「……ヴァルガ？」

ぼんやりとした視界に映る見覚えのあるシルエット。

「お！生きてたか！俺の仲間が死ぬ程世話になったみたいだな。恩に着るぜ！」

ヴァルガの言葉に俺は苦笑する。死ぬ程……うん、全くその通りだわ。

「モリナガ！キリハラとシンディを連れて船に戻れ！間違っても死なすんじゃねぇぞ」

「了解であります船長」

次の瞬間俺の体はモフッとしたモリナガの腕に抱かれる。

「ヴァルガ……！」

俺はアグルと対峙するヴァルガに何か言おうとするが、自分でも言葉がまとまらない。

「こっからは俺の喧嘩だ。安心して休んでな」

ヴァルガは振り向かずにそう言うと、青龍刀を構える。

「では行くでありますよキリハラ殿」

モリナガは言いながらレディ・アント号からその横にピッタリと付いているユニコーンに飛び移る。

「すぐに治療を始めるであります。今しばらくの辛抱でありますよ」

モリナガは船の医務室に駆け込みながら言う。

「俺は後回しでいい！シンディを先に診てやってくれ！」

俺はなりふり構わず叫ぶように言った。

「……分かったのであります」

モリナガは丁寧に俺の体をベッドに置く。

俺はそうしてようやく少し落ち着く事が出来た。

で、落ち着いたら落ち着いたで自分の体に蓄積したダメージに冷静に気付きだす。

「……ボロッボロだな」

俺は大きく息を吐く。

冷静さを欠いた結果がこれだ。アグルの言う様にここは戦場。いつ誰が倒れたとしてもどこかに冷静さを持ってないといけないのかも

しれない。

「俺がまだまだなのか……？」

俺は自分に問い掛ける。突然俺の身に反則気味な能力が宿って大分経つ。数々の危機的状況もこの力のおかげで乗り切ってきた。

俺の力ではない。俺が棚ぼた的に手に入れた力のおかげで。

俺自身は成長してないんじゃないか？そんな疑問がひょいと顔を出す。

『何を難しい顔をしてるんですか？』

「ゆめじんか。こうもボロボロにやられて安らかな顔してられるとでも思ったか？」

俺は投げ遣りに軽口を言う。

『まぁそれはそうですね。でもただ間抜けにやられた訳ではないんですからあんまり重々しくならなくていいんじゃないんですか？』

ゆめじんの口調は優しかった。だが今はその優しさが俺の後悔の念を後押しする。

『シンディさんの事は皆さんにお任せしましょう。シンゴさんが立派に守り抜いたんですからきっと大丈夫です』

「気安く言い切ってくれるじゃないの」

『言い切りますよ。今の自分に何も出来ないのなら、そうやって納得させるしかないじゃないですか』

ゆめじんは迷いのない口調で言い切る。

「なるほどな。一理ある」

『シンゴさんはいつも豪快なくせに妙なところで繊細ですからね』

「妙に反論出来ねぇな」

『過去にああしてれば、ではなく、これから何が出来るのか、を模索するのが建設的な生き方だと私は思いますよ』

「……全くその通りだな」

俺は自然に口元が綻ぶ。

ゆめじんには時々救われる。今も少しだけ気持ちが楽になった。

「じゃあとりあえず手当てを受けてリベンジだな！」

『さっそく豪快路線に切り替えましたね』

……。

……。

帝国軍艦レヴィ・アント号にて対峙する二人の男。

海賊『漆黒のユニコーン』船長、ヴァルガ・グレーギース。

アルバレオ帝国軍銃騎兵団大佐、アグル・ブラスト。

ヴァルガは巨大な刀を構え、アグルは巨大な砲塔の先をヴァルガに向け構える。

「もはや懐かしさすら感じるなぁ、おい」

アグルはヴァルガから視線を外す事無く言う。

「あぁ、俺がてめぇの目玉ぶち抜いて以来だもんなぁ」

ヴァルガはケラケラ笑いながら言う。

「あの時の俺は貴様の力を侮っていた。海賊の小僧にまさかあれだけの力があったとはな」

「あれ？まさか褒めてもらえてんのかな？」

「褒めてやるさ、いくらでも褒めてやる。それが俺からの最後の手向けだ！」

言い切ると同時にアグルの構えた大砲から砲弾が発射される。

「……ふん！」

ヴァルガは縦一閃に青龍刀を振り切り、砲弾を真っ二つに斬る。爆風はヴァルガを避ける様にして放射状に広がっていく。

「雑なゴングだなぁおい！」

ヴァルガはぐっと踏み込むと、アグルとの距離を一気に縮める。

「重そうなの両手に構えてんじゃねぇよ！」

ヴァルガは近距離から青龍刀をアグルに向け振りかざす。

「斬るぜ！」

「やれるものならな！」

ヴァルガの青龍刀はアグルの肩当てで受け止められる。

「腕が無ければ防御出来ないとでも思ったか！」

アグルはヴァルガの腹部に前蹴りを叩き込む。

「どぅふ……っ！」

ヴァルガは甲板の上をゴロゴロと転がっていく。

「……さすがだな。そう簡単にゃ首は取らせてもらえそうにねぇな」

ヴァルガはよいしょと立ち上がる。

「簡単に決着が着いたら興ざめというもんだ」

言いながらアグルは6連砲をヴァルガに向ける。

「だがそれは俺の負けの場合に限るがな」

6の砲塔から放たれる無数の弾丸。ヴァルガは横に飛ぶようにしてそれを避ける。

「右に同じだこの野郎！」

ヴァルガは懐からナイフを取り出すと、避ける動作の中でアグルに向け淀みなく投げる。

「……っ」

その一本のナイフはアグルの顔をかすめるように真っすぐに飛んでいく。

「こっちも簡単には負けてやれないんだよ」

アグルはヴァルガの言葉を聞いてか攻撃をやめる。

「そうでなくてはな……」

アグルの頬から一筋の血が流れ落ちる。

「親父と息子。血を繋いでまで俺に立ち向かった野郎には、華々し

く散ってもらわなきゃならねぇ」

「親父は親父だ。俺が今こうやって刃交えてんのは俺の意志だ。そこんとこ勘違いすんじゃねぇぞ」

ヴァルガは青龍刀をブンブン振り回しながら言う。

「分かっている。だが、あの船に乗り海賊を名乗っている以上俺にとってはさしたる違いは無ぇんだよ」

ヴァルガは両腕に搭載した武器をアグルに向け構える。

「それにな、そんな理屈どうこう並べる前に俺自身が戦いたくてうずうずしてんだよ……！」

「はっ！つくづく軍人には向いてねぇな」

「……そう思うか？」

「激しくな」

ヴァルガの間髪入れない回答に、アグルは口角を吊り上げる。

「じゃあテメェ倒したらあの船で海賊稼業でも始めるかぁ」

あの船。それは間違いなく漆黒のユニコーンの船であろう。

「船長目前にしてよく言うぜぇ。このクソ野郎が！」

「どうせ今から殺し合うんだ。文句は無ぇだろうよ！」

二人の間に再び緊張が張り詰める。
それは軍や海賊がどうこうではなく、ただ二人の男が己の何かを懸けて戦おうという緊張感であった。

……。
……。

その頃、レヴィ・アント号内のある部屋。

「はぁ……はぁ……」

一人の男が息を荒げながらその部屋に駆け込む。

「くそ……っ！海賊風情にこれ以上踏みにじられてたまるか……！」

男は部屋の中に設置されたレバーを操作する。

すると、重々しい音と共に部屋の奥にある鉄の扉がゆっくりと開いていく。

「隊長には悪いが、こんな力を今眠らせておく理由は無いからな」

男は不気味な笑みを浮かべながら鉄の扉の奥へと入っていった。

［61］海賊ｖｓ軍人。というか漢の戦い（後書き）

―それでも世界は回るのさ―

シンゴ
「（；￣Д￣）」

ゆめじん
『難しい顔してどうしたんですか？ていうか表現が新しすぎます』

シンゴ
「ゆめじんか。いや、早くもその時が来たんだなと思ってな」

ゆめじん
『その時？なんの事ですか？』

シンゴ
「このスペースのネタがなぁ……」

ゆめじん
『あー、なんかもう分かりましたね』

シンゴ
「分かったか」

ゆめじん
『ネタが無いんですよね？』

シンゴ

「君はオブラートという言葉を覚えるべきだな」

そして次回へ続く。

［６２］決着、後、鉄人。（前書き）

うひゃーー！！

ひぇーー！！

※最近の陽気の良さに対する感想です。

６２話でやんす。

［62］決着、後、鉄人。

レヴィ・アント号の船上において鳴り響く轟音。

アグルの放つ大砲が容赦なく火を吹き、ヴァルガへと襲い掛かる。

だがヴァルガはその攻撃を掻い潜りアグルへと迫る。

ヴァルガの青龍刀がアグルに向け振り下ろされる。

しかしアグルはその一刀を6連砲で受け止める。

「ぐっ……！」

アグルはヴァルガの勢いに一瞬押されるものの、しかし押し切られず踏みとどまる。

「この、程度なのかぁ！？」

アグルは6連砲で凪ぎ払う様にアグルの体を弾く。

ヴァルガは甲板を滑る様にアグルとの距離を取る。

「なかなか大胆な武器の使い方しやがるなぁ……えぇ、大佐殿？」

ヴァルガは挑発するような口調。

「銃をただ引き金を引く道具にしか考えられない程アホじゃないもんでね」

アグルは言いながら再び6連砲を構える。

「だが、ご希望とあらば本来の使い方もまだまだ見せてやれるぞ！」

回転する6本の砲塔から放たれる無数の弾丸。

「うざったい言い回ししやがんなぁ、おい！」

ヴァルガは回り込むように弾丸を避けていく。

「銃は撃つものだ。だが撃つことしか出来ない輩こそが戦場では死んでいくんだよ！」

「何が言いたい！」

「全ての物には『こうあるべき』ってやつがあるんだよ。『こうであってほしい』でもいいがな」

アグルは攻撃を休める事無く続ける。

「お前らの船だってそうだ。勇者が乗った船だから帝国の栄光の象徴であるべき、俺は上層部のお偉方にそう言われて貴様らを追い掛けた」

「はっ！軍ってのは勝手なもんだな」

ヴァルガはアグルの攻撃を避けつつ言う。

「そうだ！軍は自分達の正当性を高める為に勇者の名を利用してい

る。勇者が生きてた頃は助けるどころか見向きすらしなかったくせによ」

「お前もその中の一人だろうがよ！」

「そうだ！だが今の俺は違う。今の俺は帝国の栄光などどうでもいい！ただ貴様らとの決着のみを望んでいる！」

アグルは高らかに叫ぶように言う。

それと同時に大砲から放たれた砲弾が真っ直ぐにヴァルガを捉える。

「やっぱ向いてねぇよ！」

ヴァルガは青龍刀で砲弾を斬ると、そのままアグルに向かい大きく踏み込む。

「軍人にしとくにゃもったいないぜ！」

ヴァルガはアグルの懐に飛び込む。

「そう簡単には！」

アグルは大砲を棍棒のように振り下ろし、ヴァルガの頭に痛烈な一撃を加える。

「……かぁ」

「あぁ？」

ヴァルガの口から漏れる小さな声。それが始まりであり終わりであ

った。

「終わりかっつってんだよ！」

ヴァルガは額から血を流しつつ鬼の如き形相でアグルを睨む。

「……なっ！」

その威容にアグルはほんの一瞬だけ気圧される。

「なら今度はこっちの番だなぁ！」

その一瞬の隙。ヴァルガが握る刀が振り抜かれるには十分だった。

決着の刹那。アグルはゆっくりと前のめりに倒れていく。

「っ……はぁ……はぁ……」

ヴァルガは額を押さえながら呼吸を荒くする。

「さすがにしんどいぜちくしょう……」

ヴァルガは青龍刀を甲板に突き刺し、杖代わりにして体重を支える。

「も、もう行っても平気かな……？」

ソロリソロリと甲板に姿を現す影がチラホラ。

「あぁ？……お前らかぁ。見ての通りの完勝だぁ……くっはっはっ……」

バタン。ヴァルガは体を後ろに反らすように笑い、そのまま倒れてしまった。

「ちょっと！言ってる事とのギャップが凄まじいんだよ！」

レンは慌てて甲板に現れるとヴァルガに駆け寄る。

「あー……頭がグワングワンしやがる。訳分かんねぇ、な？」

「分かるよ！原因は一目瞭然だよ！」

レンは持っていた布でヴァルガの額の血を拭う。

「……他の船はどうだ？」

「私達の圧勝だよ」

レンは笑顔で言う。

「そうか」

ヴァルガは一言そう言うとむくりと起き上がる。

「……あんだけ因縁だなんだ言っといて終わる時は呆気ないもんだな」

その表情は、勝利の余韻に浸っているとかそういう物ではなくて、どこか寂しげなそれに見えた。

「でも勝ちは勝ちなんだよ。私達は胸を張っていいんだよ」

「そうだな」

「呆気ないなんて言われちゃこっちの立場が無くなっちまうなおい」

ガチャリ、と音がしてアグルの声が響く。

「お前……まだやる気か？」

ヴァルガは緊張の顔になる。

「……いや、どうやら大勢は決したようだ。今更俺が暴れても覆すことはできないだろう」

アグルはそう言いながら6連砲と大砲を腕から外していく。

「……というか俺はお前の事全力で斬ったつもりだったんだが」

「軍の技術なめんなよ。この繊維装甲ってやつのお陰で傷はそれほどでもねぇよ」

アグルはホレとその黒い繊維装甲という体に密着するように着用されている物を見せる。

「まぁ、傷は浅いが中身へのダメージはどうにもならないがな」

アグルは口の周りの血を手の甲で拭いながら言う。

「骨は確実にやられてるなこりゃ……いってぇ」

アグルは言いながら立ち上がる。

「って、なんなのでありますかこの終わり方は？」

いつの間にか現れたモリナガが不思議そうにその光景を見つめる。

「いいんだよモリナガ。奴は死んじゃいないがもう武器も捨て戦う意志もない。そんな奴と戦う気にはならねぇよ」

「し、しかし先代の仇をとあれだけ息まいていたのに……」

「……お前らは知らなかったか。親父はな、わざと軍に捕まったんだよ」

「え！？」

モリナガは驚きの声をあげる。

「親父は病気でな、先の長くない事を知っていた。でもってあの性格だからな、病床で静かに死ぬのは嫌だったんだろうよ。軍に捕まり海賊として果てる道を選んだんだよ」

ヴァルガはゆっくりと語る。レンとモリナガは驚きつつ話に耳を傾ける。

「真相を知っていたのは俺とごく少数の古株連中だけだったからな。しかも親父からは言うなと口止めされていた」

「そ、そうだったのでありますか……」

「……」

甲板に静寂が訪れる。

「俺が言う事じゃないかもしれないが、お前らの船長……先代のだが、敵ながら見事な男だった」

アグルはその腕の中に未だ気を失っているニールを抱き抱えながら言う。

「死ぬ事が怖くて仕方ないとあれだけ堂々と言う男は見たことが無かった。それでいて優れた戦術家の一面も持っていた。……羨ましいくらいだったな」

「生涯の強敵暫定一位にここまで言わせるンだから大した親父だよ」

ヴァルガはそう言って笑う。

「……なんなのかなこの空気は」

レンは血が飛び散っている甲板の上の会話に違和感を感じていた。

「これはあれだ、レン。メリハリってやつだよ」

「だとしたらすごく殺伐としたメリハリなんだよ」

軽く言ってのけるヴァルガにレンは呆れ顔。

「……さて、船長様の気が変わらない内に俺は行くとするかな」

アグルはヴァルガ達に背を向け立ち去ろうとする。

「おい、どこ行くんだよ。っていうかどういう意味だよ」

「やっぱ殺す、みたいな感じで斬られたらたまったもんじゃないからな……。ま、行くあてはないがな」

アグルは背を向けたまま肩をすくめる。

「今回の敗戦で俺は間違いなく軍上層部から叩かれる。元々奴らにとっちゃ俺は煙たい存在だったからな」

だから帰りづらくてかなわない、というか帰りたくない。とアグルはため息をつく。

「……お前らに話しても仕方なかったな。俺は行く」

アグルが力強く一歩を踏み出す。

グォン。

甲板が大きく揺れる。

「波か？……いや違う」

ヴァルガは海に目を向けるが、他の船が揺れていないのを見てそう呟く。

……ッ。

わずかに響くその音。それはヴァルガ達の真下からであった。

「お前ら！ここを離れろ！」

ヴァルガの怒号のような言葉。しかしレン達が離れる前に、『それ』は現れた。

「うぉおおぁぁぁぁ！」

地を震わすような雄叫びと共に甲板が破られ、そして巨大なそれは現れた。

「これは……『アイアンボルト』！なぜこいつが……！？」

アグルはその巨大な人型の鉄の塊に困惑の視線をぶつける。

「隊長ォ！こんなにあっさり負けてもらっちゃあ困るんですよぉ！」

アイアンボルト。その人型の頭の部分が開き、一人の男が顔を出す。

「ライガ！？貴様、何をしている！」

ライガ・ドムド。ヴァルガに早々に切り捨てられたはずの男。

「知れたこと！これは戦争なのだ、我々が負ける訳にはいかないのだ！こんな海賊風情にな！」

ライガはヴァルガ達を睨み付けながら怒鳴り散らす様に言う。

「この戦いは俺達の負けだ！勝手な振る舞いは許さねぇぞ！」

「は！鬼狩りのアグル・ブラストの台詞とは思えねぇな。だが安心しな。今から全部叩きつぶして終わりにしてやるぜ！」

ライガの言葉に従うようにアイアンボルトはその巨大で頑強な腕を振り上げる。

「く……っ！」

ヴァルガ達は避けるには時が足りず、防ぐにはあまりに相手が巨大である。

勝利ムードから一転して万事休す。

振り下ろされるアイアンボルトの腕は、ヴァルガ達を容赦なく叩きつぶす。

「とでも思ったか調子に乗んなよ鉄人野郎」

アイアンボルトのその巨大な一撃は、小さく細い二本の腕により防がれる。

俺はヴァルガ達に笑ってみせる。

「キリハラ……！」

「い～ぃタイミングだったようだな……！」

だが実際は先程のダメージが残っており正直体は止めた時点でギリ

ギリと軋んでいた。

だが俺は退く訳にはいかない。もうこれ以上誰も傷つけさせない為に。

「貴様がキリハラか……！憎たらしい真似を！」

アイアンボルトは俺に止められた反対の腕を振り上げる。

「貴様もここで潰してくれるわ！」

ライガの叫びと共に振り上げられた腕が横なぎに俺を襲う。

「食らうかよ！」

俺は直撃の直前にテレポートを行い、アイアンボルトの顔面に移動する。

「なっ……！？」

いきなり眼前に現れた俺を見てライガは驚きに顔を染めるが、その直後に慌ててアイアンボルトの頭部の装甲を戻そうとする。

「させねぇよ！」

俺は閉じようとする装甲を無理矢理に手で止める。

「く、クソがぁ！」

ライガは目と鼻の先に迫った俺に対し拳銃を構えようと

「させねぇっつってんだよ！」

ゴツンッ！！

俺の鋼鉄の頭突きがライガを額を正確に捉える。

「が……ふ……っ」

ライガは俺の頭突きの勢いで頭を後方に反らし、そのまま気絶する。

「はぁっ……はぁっ……。よ、よし終わった、な？」

俺は呼吸を整えつつ鉄人野郎との戦いの終わりに安堵の気持ちを抱く。

が、安堵した俺の耳にその音が響いてきたのはその直後であった。

カチッ、カチッ、という規則正しい機械音。時計の音かと思ったがそれはどうやら違うようだった。

「まずい！お前ら今すぐこいつから離れろ！」

突然アグルが血相をかえて叫ぶ。

「こいつに仕込まれてる自爆装置が起動してやがる！早くしねぇと船ごと灰になっちまうぞ！」

アグルの言葉。それは弛みかけた緊張が再び頂点へと引き戻された瞬間だった。

［62］決着、後、鉄人。（後書き）

―禁じたい遊び―

ルルチェル
「ねぇ、クリシア。新しい遊びが思い付いたんだけど一緒にやらない？」

クリシア
「ちょうど暇だしいいわよ。どんなゲーム？」

ルルチェル
「黒丸を使う遊びなんだけどね」

クリシア
「ふんふん」

ルルチェル
「その名も黒丸ロシアンルーレット」

クリシア
「うん？」

ルルチェル
「何個かの黒丸の中に一つだけ本気でヤバイ爆発が期待できる黒丸を混ぜるの」

クリシア
「ちょ……」

ルルチェル
「他にもからし入りとかわさび入りとかタバスコ入りとか用意するの」

クリシア
「何そのヒリヒリしそうなラインナップ！！いえ、爆発も大概ダメだけどね！？」

ルルチェル
「大丈夫。後はハチミツとかカスタードクリームとかだから」

クリシア
「今度は一転してベタベタするラインナップがきた！ていうかやる気を起こさせる要素が何も無いわ！」

ルルチェル
「……やろ？」

クリシア
「い、いやよ。ていうか黒丸を器用にお手玉しながら近づかないでなんか怖い」

ルルチェル
「あ、手が滑った」

ツルッ。ボンッ。ビチャッ。

クリシア
「あつぅい！何これ！」

ルルチェル
「ただの熱湯だよ。良かったねヒリヒリもベタベタもしなくて」

クリシア
「いいわけあるか！」

……。
……。

クリシア
「という夢を見たわ」

ルルチェル
「……」

では次回。

［６３］そして船上の夜は明ける（前書き）

道を歩いていると、ふと新たな展開を思いついたりします。

いい瞬間です。

その瞬間とは無関係な６３話です。

［63］そして船上の夜は明ける

「ば、爆発すんのかよ！？」

全てが丸く納まる勝利を勝利を目前にしての最悪のどんでん返し。

「とにかく逃げろ！今から爆弾を止めるのは無理だ！」

アグルは叫び、艦に残る人間に脱出を促す。

「お前も早く逃げろ！吹き飛びたいのか！」

アグルは俺に向かって叫ぶ。

「キリハラ！早く離れるんだよ！」

「キリハラ殿！ここで散っては無駄死にであります！」

レンやモリナガも必死に叫んでくれる。

「キリハラァ！聞こえねぇのかバカ野郎！」

ヴァルガの怒号にも似た叫びがしっかりと俺に届く。

だからこそ、俺は俺のとれる最良の選択肢を、未来を掴む事にした。

「ふんぬ！」

気絶してるライガを搭乗席から引き抜く。

「おらよっと！」

そして甲板に放り投げる。

「……さて」

これで正真正銘こいつの近くにいるのは俺だけだ。

俺は鉄人の腕を掴むと、そのまま半重力を使って艦から持ち上げる。

「な、何をする気だよ……！」

ヴァルガの言葉も今は聞いている余裕は無い。

俺は鉄人を掴んだまま上空へと舞い上がる。

「せっかくいい感じにまとまりかけたんだからよぉ……！」

グイッ、と鉄人の体を振りかぶる。

「ぶち壊そうとすんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

グォン、という風を押し上げる音と共に鉄人の体を力任せにぶん投げた。

鉄人は上空へと舞い上がり、そして……。

大気を震わせるような轟音と共に爆散した。

鉄人の欠片がとんでもない速さで周囲に散っていく。
その中の一つ、鉄人のツルッツルの頭部が俺に向かい真っすぐに飛んでくる。
「ちょっ！？」
眼前にそののっぺりとした顔面が迫った次の瞬間、俺の意識は強制ブラックアウトした。
すごく硬かった。それだけが俺の記憶に残った唯一の感想である。
……。
……。
意識のブラックアウトからどれだけの時が過ぎたのか。俺の意識は覚醒に向かっていた。
「……」
目が覚めた瞬間、木目をまず目にするのはもはや恒例行事な気がする。
しっかりとベッドに横になっている事を認識した俺はとりあえず自分が生きている事に安堵した。
「それはそれとして、ここはどこだ？」

俺は関節に鉄でも仕込んだんじゃないかというくらいにガチガチに固まっている体を無理矢理に動かして体を起こす。

これといって特別な物は何もない質素な部屋。ベッドに机にタンスがある。

「……船の中かな？」

時々揺れを感じる。

「……ちょっと出てみるか」

俺はベッドから出ると、ギシギシ言いよる足を不器用に動かしながら部屋を出る。

「……誰もいねぇな」

通路を見渡すが誰もいない。物音もしない。

だが、この部屋は見覚えがある。

「ユニコーンの船だな」

だとしたら俺はヴァルガ達に助けられたと見て間違いないだろう。

だとしたら礼を言わねばなるまい。よし、探そう。

『皆さんをお探しですか？』

「ゆめじん。そうなんだけどなんで誰もいないの？」

『そりゃそうですよ。今何時だと思ってるんですか？』

「ん？何時なの？」

『４時です。深夜、というか早朝のですね』

「マジか。道理で暗いと思った。皆寝てるわけね」

俺は静まり返った通路をスタスタと歩いていく。

『どこに行くんですか？』

「ん？気晴らしに外の空気でも吸ってこようと思って」

俺はうろ覚えながら船内の道を思い出しつつ甲板へ……。

「……」

甲板へ……。

「……」

『……回れ右して最初の角を左です』

ゆめじんからフォローいただきました。

「あざーっす」

そして俺は１８０度方向転換しましたとさ。

甲板にでるとさすが朝方の海の空気は冷たく感じた。

「もうすぐ夜明けってとこかな」

俺は白みだしている水平線を眺めながら呟く。

と、後ろから近づく足音。

「陽が昇るまであと１０分ってとこだな」

ヴァルガが言いながら俺の横に並ぶ。

「お前もう起きて平気なのか？」

「ん？まぁ、多少体に違和感はのこっちゃいるが実際動けてるから大丈夫だろ」

俺はコキコキと首を鳴らしながら言う。

「そうか」

「ていうか俺が寝てる間に全部終わっちまったみたいだな」

あの戦いの後だからこそ余計に感じる静けさ。

「お前のお陰で不要な犠牲は出さずに済んだからな。後はあっという間だったな」

「あっという間？」

「アグル達は白旗掲げながらボロボロの軍艦引っ張って去っていったんだよ。いやはやあれはいい光景だった」

ヴァルガはふふんと胸を張る。

「意外にあっさりした終わり方だな」

「人間の繋がりなんざ変わり目はいつもあっさりしてんだよ。どんな感情で繋がれようとな」

「そういうものか」

ヴァルガは俺の呟きみたいな一言に頷くと、その視線を水平線に向ける。

「そういえばシンディは大丈夫なのか？」

「ああ、傷自体はそれほどでもなかったからな。すぐに良くなるだろうよ」

「そうか。……良かった」

「あんたが命懸けで守ってくれたからな。礼を言う」

そう言ってヴァルガは頭を下げる。

「いや、あの時は無我夢中だったから。でも助かったならなにより

だ」

「シンディの事だけじゃねぇ。あんたには何回頭を下げても足りない位世話になっちまった」

ヴァルガは改めて、ともう一度頭を下げてくる。

「俺達が今こうして海の上に船を浮かべていられるのはよ、間違いなくあんたのお陰だからよ」

「俺だって中途半端な悪党みたいな海賊だったら絶対に手は貸さなかった。漆黒のユニコーンだから首突っ込みたくなっちゃったんだよ」

なんとなく苦笑い。そしてなんとなく照れ臭い。

「……真っ直ぐだな。あんた目を見張る程に真っ直ぐだよ」

ヴァルガは一人納得するようにうんうんと頷きながら言う。

「な、なんだよ？突然」

「あんたは自分の信念に嘘をつかずに生きている。そしてそれに見合う力を持っている。俺が女ならほっとかねぇな」

「……は？」

いい感じに誉められてたのに最後の一文はなんだかしっくりこなかったぞ？

「ていうかあんた旅してるって言うけどよ、女はいねぇのか？」

「え！？いや、何言ってんの！」

「いないのか？いないんだったら……」

フッ、と俺の脳裏をある人がよぎる。

「……い、いるよ！」

そして気付けばそう口にしていた。

「あら？いるのか。……さすが隅に置けないな！」

バンバンと肩を叩かれる。

何？このやりとり？

俺が果てしなく疑問を抱く中、視界が明けの白に染まっていく。

「いい夜明けだ。あんたもそう思うだろ？」

「……ああ」

直前の話題がなければね。

だが、そんな事を忘れさせるだけの美しさが、その輝きにはあった。

今日も無事に夜明けが迎えられる。ありがたい話だ。うむ。

俺はヴァルガに並び、金色に染まる海を眺めていた。

……。

……。

アルバレオ帝国軍。そのおよそ8割を占める銃騎兵団では、人体改造という非人道的な実験が頻繁に行われているという。

成果が上がればその被検者は軍の『兵器』として名を残す事になる。が、その数少ない成功の裏には多くの『失敗』が記録に残されぬまま紙くずを捨てるかの如く無感情に消し去られていくのだという。

俺はヴァルガからこの話を聞いた時、突然なんでこんな話を、と思った。

だが、その先を聞いて、俺はその話の向かう先を理解した。

「今この船に乗ってる奴らの大半はかつて改造実験の犠牲になった奴らなんだよ」

ヴァルガはどこか懐かしむような、しかしどこか哀しげな顔で続ける。

「レンやモリナガなんかもそうだ。好き勝手体いじくられた挙げ句使えないと分かったら記憶消されてポイ。ひでぇ話だよ」

「レン達はその事を知っているのか？」

「いや、こっちからは何も言ってない。だがあいつらはこういう事には聡いからな。とっくに気付いてんじゃねぇのかな？」

俺はレンやモリナガを思い出す。あの明るい表情の裏にそんな暗い物を抱えていたのか……。

「……みんな強いな」

俺は無意識にボソリと呟く。

「ああ、あいつらは強ぇよ。前を向いて生きようとする意志がな」

「ああ……」

「……さて、暗い話はここまでだ。すまねぇな、突然こんな話しちまって」

ヴァルガはふぅと大きく息を吐く。

「いや、ありがとう。話してくれて」

「あんたには話しときたくてな。なんてったって俺達の救世主様だからよ」

そう言ってヴァルガはニッカと笑った。

救世主……。そう呼ばれるのはもちろん悪い気はしない。しかし、

どこか引っ掛かるものがあるのも事実で。

しかしそれが何なのかは分からない。

「はは……」

だから俺は、なんとも言えない笑顔を浮かべる事にした。

その日は一日船でボーッとしていた。

途中レンやモリナガなんかと話をした気もするが、あまり内容は覚えていない。

まぁ、なんとなく無事で良かった的な事を話したと思う。

シンディとも話をした。

傷はもう既にだいぶ治ってる様で、元気な様子を見れて一安心した。

今日はこんな感じでゆっくりとした時間が流れ、明日はこの空気の流れのまま出発かな。

なんて俺は考えていた。

が、それは甘い考えだった。

夜になると、皆が甲板に集まり酒と食べ物を大量に用意し始めた。

そしてヴァルガの号令により、それは始まった。

「よっしゃぁ！！久しぶりの宴だぁ！全員存分に騒げぇ！」

「おぅ！」

それは、大宴会という名の混沌の極み。

なんというか、海賊ってすげぇ。

「キリハラァ！なに隅っこに一人でいんのよ！こっち来てぇ、飲みましょ？」

頬を盛大に紅色に染めたシンディが俺を見つけるなりグイグイと混沌の渦の中心へと引っ張り込んでいく。

「わわっ！っていうかシンディ酒飲んで良いの？」

「え？」

「……え？」

間。

「あっはっは！だいじょーぶだいじょーぶ！」

「あ、これはダメなパターンっぽいぞ。何がダメって多分色々ダメなパターンっぽいぞ！」

俺は半ば諦めに似た気持ちでシンディに引っ張られるがまま移動す

る。

「……」

「ん？どしたの？」

突然シンディが足を止め、俺の顔を穴を開けるぐらいの圧を以て見つめてくる。

「キリハラって……あれよね」

「どれだよ」

「あれよ。……いい男の顔してるわよね」

「は？」

シンディは顔は赤いまんまだが表情は真剣なまま続ける。

「そんでもって強いし頼りになるし……。なんなのあんた？」

ちょっと不機嫌に言われてしまった。

「なんなのって……。俺は俺だよ」

「……あんたに好かれた女は幸せ者ね」

ボソッと、聞き取れるかどうかというレベルでシンディが呟く。

「え？」

「な、なんでもないわよ！……ほ、ほら！あんたも飲みなさいよ！」

ググイと酒瓶を押しつけてくる。

「ぬぉ！俺は未成年だから酒は……ていうかシンディも未成年じゃん！飲んじゃダメじゃん！」

「は？ミセイネン？なにそれ、なんかの呪文？」

ここにきて大きなカルチャーギャップ発生。シンディは大きく首を傾げております。

「きゃはははー！あれれー？シンディとキリハラが仲良く二人なんだよー！」

「これはこれはキリハラ殿！これはあれですな、隅に置けないってやつでありますな！はっはぁ！」

うっざいテンションのレンとモリナガ襲来。もう私には収拾をつける自信がございません。

「おい！お前ら酔うのはいいが、キリハラ困らせてんじゃねぇぞ」

ヴァルガ！良かった。唯一収拾つけてくれそうな人が来てくれた。

「まずは普通に飲ませろ！普通にな！」

ドンッ、と置かれるでっかいでっかいお酒の瓶。

「さぁ！飲み明かすぞキリハラ！」

ヴァルガ、超いい笑顔。

こうして、俺も一夜限りの混沌の世界へ足を踏み入れたのでした。

めでたしめでたし。

『……え？なんですかこれ？』

［63］そして船上の夜は明ける（後書き）

―ロングホリデー―

ゆめじん
『シンゴさんシンゴさん』

シンゴ
「なに？」

ゆめじん
『今後シンゴさんに結構な休暇が与えられるそうですよ』

シンゴ
「は？休暇？……って俺別に働いてないけど？」

ゆめじん
『そういう意味ではなくて、この作品的な意味です』

シンゴ
「……そういうことか！」

どういうことなのか？

では次回。

［６４］海から陸へ、陸からメイドへ（前書き）

新章だす。

それ以下でもそれ以上でもナッシン！

６４話どーん！

［64］海から陸へ、陸からメイドへ

混沌という名の大宴会が終わり、夜も明けようという頃。

「……ふぅ」

俺は起きて出発の準備を進めていた。

まぁ準備といっても荷物は相変わらず無いので体の準備である。

「なんとか酒は飲まされずに済んだが……あ～眠っ」

俺は大きく欠伸をする。酒は飲まなかったものの宴会自体は最後まで参加したので寝る時間などはあるはずなかった。

「海賊ってのは豪快な連中だよまったく」

俺は気持ち良さそうに寝息をたてるレンとシンディ。そしてその二人に枕にされているモリナガに目を向ける。

「ん？そういえばヴァルガは……」

俺は姿の見えないヴァルガを探す。

「俺ならここだが？」

と、背後からの声。

「おわっと!?……い、いつの間に、ていうか起きてたんだ？」

「あの程度の酒じゃあ俺は潰れねぇ」

ふふんと誇らしげに鼻を鳴らすヴァルガ。

あれだけの酒飲んどいてあの程度ですか……。

「つうかお前こそどうしたんだ？」

「え？……ああ、もうそろそろ出ようと思ってね」

俺は陸のある方を指差しながら言う。

「そうか……こいつら起きてからじゃなくていいのか？」

「それも考えたけど、なんとなく別れが辛くなりそうでね……」

「そうか……。まぁこいつらには俺からうまいこと言っとくとするか」

ヴァルガは仕方ねぇなと言いつつ笑顔を浮かべる。

「ありがとう。……またいつか会おうぜ」

俺はヴァルガに向け手を差し出す。

「おう」

ヴァルガは差し出された手に自分の手を重ねる。

力強い握手。ヴァルガの手にこめられた力が俺の心にダイレクトに響く。

「……じゃあ、行くよ」

俺はスッと手を引くと、船の縁に足をかける。

「おう！俺達の力が必要な時はいつでも呼んでくれ！どこへなりとも駆け付けてやるぜ！」

「ああ……じゃ、また会おう！」

俺はそう言うと一気に力を開放して空へと飛び上がる。

ユニコーンの船はみるみる小さくなっていく。

「さて！次はどこに向かうかね？ゆめじん」

『はいはーい。今度こそ首都に向かいましょう。いいですか？首都ですからね』

「一度言われれば分かるわい。よし、じゃあ首都へレッツゴー！」

俺は一気に加速し、陸地を目指す。

……。

……。

ヴァルガはシンゴの飛び去った後もぼんやりと空を眺めていた。

「……行っちゃったのね」

ふと響く声。モリナガのふさふさの体から起きだしたシンディがヴァルガの隣に立つ。

「ああ、別れが辛くなるから挨拶は無しだってよ」

「……」

シンディはどこか不服そうな表情で俯く。

「お前あいつに惚れたろ？」

「な……っ！？」

ストレートの豪速球がヴァルガから放たれる。

「そんな……！私は別にキリハラなんか……」

なんとか言葉を紡ごうとしてしどろもどろなシンディ。

ヴァルガはそんなシンディの頭をポンポンと優しく叩く。

「別に悪い事でもないし恥じる事でもねぇ。ただな、なかなか茨の道だぞ」

「茨の……？」

「奴には既に心に決めた相手がいるらしい」

「え……っ。そ、そうなの……」

シンディの顔が途端に哀しみの色に染まる。

「……やっぱり惚れてるのか」

ヴァルガは確信を得たと言わんばかりの自信満々な笑みを浮かべる。

「え？……あっ……！」

シンディもそれに気付き、顔を真っ赤に染める。

「まぁあいつはいい男だからな……ってなんで海王槍を構えてんだお前は？」

「我らが船長殿には少し仕置きが必要な様ね……！！」

ユラリ、シンディの気迫からか周りの空気が陽炎のようにゆがむ。

「なぜこうなった？」

ヴァルガは疑問符を浮かべつつ脱兎の如く逃げ出す。

「待てぇ！！」

追うシンディ。

「……うにゅぅ、もう食べられないんだよん」

海王槍の轟音が鳴り響く中、レンの穏やかな寝言が聞こえるこの船は、

平和だった。

……多分。

……。

……。

そんな漆黒のユニコーンの船から遠く離れたある街に話は移る。

首都から南へ向かうターミナルにもなっているその街は今、かつてないほどの緊張に包まれていた。

「ふぁ～ぁ……」

その中心とも言える一人を除いて。

アルバレオ皇帝息女フィアナ姫の一行がこの街に一時的に滞在している為、街は軍を中心に警戒が強められている。

「ねぇ、いつになったら首都へ戻れるの？」

街一番の宿の一室で椅子に座りながら退屈そうに足をブラブラさせてフィアナは言う。

「現在首都は少々厄介な状態にあります。フィアナ様には今しばらくご辛抱いただく事になるかと」

フィアナの傍に立つメイド服の女性、魔術兵団師団長にして帝室直轄の使用人部隊の隊長である、ジェミニ・ランドガルトは燃えるような赤髪のポニーテールを少し揺らしながら頭を下げる。

「……そう」

フィアナは不満そうに、しかしそれ以上は何も言わずに窓の外に目を向ける。

「ジェド師団長が先に戻られたのがそんなに不満でしたか？」

「うぇっ！？……そ、そうではないわよ、ただ後どのくらいここにいればいいのかなって……」

フィアナは最初の動揺を押し隠す様に早口で言葉を紡ぐ。

「魔術兵団の師団長二人が銃騎兵団に一方的に拘束された事により今首都は緊張状態にあります。その事態を収拾すべくジェド師団長と兄……アーガイル師団長は先行して」

「分かってる。それはもう何度も聞いた」

フィアナは今度こそ不機嫌そうにジェミニの話を遮る。

「……失礼致しました。ですが、今回の事は今までの事案とは比べ物にならないレベルの物です。それだけはよくご理解願います」

ジェミニは母が娘を諭す様に優しくフィアナに言い聞かせる。

「分かってるわ。……私も大人気ない態度とってごめんなさい」

フィアナはばつが悪そうに謝る。

「いえ、悪いのは……我々ですから」

ジェミニは目に哀しげな色を浮かべていた。

その頃、使用人部隊が滞在している宿では、小柄な紫髪のルルチェルと、金髪ツインテールでミニスカートのクリシアの二人が洗濯をしていた。

「はぁ……勝手が違うとペースも落ちるから嫌よね」

クリシアはブツブツと文句を言いながら洗濯をしている。

「仕方ないよ。事情が事情なんだし、ね？」

ルルチェルも手は休めずにクリシアに言う。

「……あんた変わったよね」

「え？そ、そうかな？」

クリシアの言葉にルルチェルは今度は手が止まってしまう。

「なんていうかさ、前向きになったよね。あとオドオド感が減った」

「そ、そうかな？自分では分からないな」

ルルチェルは突然そんな事を言われて動揺したのかはたまたそれを隠す為か洗濯のスピードがあからさまにアップする。

「いいんじゃない？今の方が可愛いわよ」

クリシアはルルチェルの様子に苦笑しつつも穏やかな口調で言う。

「あ、あぅ……。と、突然どうしたの……クリシア？」

「あたしはいつも通り思った事を言っただけ。もっと自信持ちなさいって！」

「あ、ありがとう……」

ルルチェルは頬を赤く染めつつ嬉しそうに口元を緩める。

と、そこへ近づくメイド服が一人。

「ちょっとそこの二人、喋りながら洗濯とは素晴らしいわね。逆にね」

さらりと背中の中腹まで伸びた黒髪。眉の高さで切り揃えられた前髪に吊り目気味の瞳。シュッとした色白の顔の女性が不機嫌なような呆れてるような顔で立っていた。

「メイラン……。何？仕事はちゃんとやってるわよ？」

クリシアはそのメイランというメイドに対しあまり好意的ではない言葉を返す。

「ちゃんとはちゃんとであって最高の仕事ではないと思うのだけどいかがかしら？」

メイランも負けじと目は全く笑っていない笑顔で返す。

「はいはい。じゃあ喋らないでやるからそれで文句は無いわよね？」

ぶっきらぼうなクリシアの言葉。

「その態度もはや清々しいの域よ。逆にね」

「あんたも逆逆言ってないで仕事したら？逆にね」

「逆にね」の部分が嫌味ったらしく聞こえたのは気のせいではあるまい。

「何？あなた私に喧嘩売ってる？」

「あんたになんか逆に喧嘩吹っかける気が起きないわよ。逆にね」

クリシアは敵意を押し隠す事をせずに言い放つ。

「オーケー……。よほど私の愛銃の餌食になりたいみたいね、クリシア・リッチフォールド！」

「は！あんたこそ顔面蹴り砕かれないように鉄仮面でもしてきたら！メイラン・ショウ」

「何よ！」

「何が！」

バッツンバッツンと二人の間に熱き火花が散る。

「ふ、二人とも！や、やめようよ！こんな所で喧嘩なんか……あ」

ルルチェルはいち早く気付いたが、二人はそれにまだ気付かない。

「ルルチェルちょっとだまっ……！？」

「いだっ！？」

二人の頭部に拳骨の一撃が加えられる。

「いったた……って、隊長！？」

「ふ、副隊長も……？」

二人は頭をさすりながら自分達を殴った二人に目を向ける。

「あなた達、一体何をしているのですか？」

と厳しい口調のジェミニ。

「ここで騒ぎを起こす事は即ちこの宿にご迷惑を掛ける事になるんですよ」

亜麻色のロングヘアーが特徴的なメイドハラキアも二人をたしなめる。

「わ、私は二人が私語をしながら仕事をしていたから……」

「あ！あんた逃れようとしてんのよ！あんたが難癖つけてこなけりゃあたしだって！」

「いい加減にしなさい！」

ビシッと響くジェミニの声。心なしかこめかみが引きつっているように見える。

「あなた達は今から二人で広間の掃除をしてきなさい！分かりましたね？」

有無を言わさぬジェミニの口調。言われた二人は、

「……あんたが」

「……あんたこそ」

かなり不服なようだったが、ジェミニの気迫に押され、トボトボと広間へと向かっていった。

「……あれさえなければ優秀なのに。二人とも」

ジェミニはハァとため息をつく。

「心底から嫌い合ってはいないのでしょうけど……」

「ええ……ハラキア。私はフィアナ様の所へ戻りますのでこちらは任せましたよ」

ジェミニはそう言ってその場を後にした。

「……ルルチェルも大変だったわね？」

ハラキアはルルチェルの近くに腰を下ろすと、洗濯物に手を伸ばす。

「でも、メイランの言うこともっともだったので……」

ルルチェルは黙々と洗濯を続ける。

「私語は慎め。私も昔はよく言われる側だった」

ハラキアは昔を思い出してか小さく笑う。

「ハラキアがですか？」

「ええ、といってもいつもクリシアの悪ふざけに付き合わされて、だけど」

ああ、やっぱりか。ルルチェルの中をそんな言葉が駆け抜けたのは間違いあるまい。

「ハラキアとクリシアはいつからそんなに仲が良かったんですか？」

「そうね……あの子とは軍に入隊する前からの付き合いよ」

ハラキアは少し目を伏せて言う。

「へぇ。そういえばハラキア達は入隊前は何をしていたんですか？」

ルルチェルの何気ない質問。しかし、それを聞いた瞬間ハラキアの手が止まる。

「ハラキア……？」

ルルチェルはどうしたのだろうとハラキアの顔を覗き込む。

それに気付いたハラキアは絞りだした様な笑顔を浮かべる。

「ごめんなさい。昔の事は……また今度の機会に話すわ」

「ご、ごめんなさい。聞いてはいけなかったですか？」

ルルチェルは慌てて頭を下げて謝罪する。

「いいえ、私があまり喋りたくないだけだから」

ハラキアはそう言うと洗濯物の入った籠を持ち上げる。

「さ、仕事はまだまだあるわ。さっさと片付けてしまいましょう」

「……は、はい！」

ハラキアとルルチェルは並んで洗濯物を干し始める。

黙々と干していく中で、ふとハラキアの視界にルルチェルの手が入り込む。

「……」

ルルチェルの手首には他のメイドは身に付けていない腕輪が装着されていた。

ルルチェルのみが装着を命じられた、いわば罪人の証。

日常の生活にある程度の自由が保証される代わりに、もし逃走するなどという気をおこせばその瞬間装着者の命を刈り取るという代物である。

その灰色の腕輪がルルチェルの腕で鈍い光を放っていた。

モンフェルトの一件については、ジェミニやハラキアの働きで今のところは寛大とも言える処置を取れているが、それでも目に見える場所にそれがあるのは複雑な想いであった。

ルルチェルの事を快く思わない者が部隊内にいるのも事実であり、それもまたハラキアの考え事の種になっていた。

「どうしたんですかハラキア？」

ルルチェルは自分を見つめるハラキアに気付く。

「いえ、なんでもないわ……」

ハラキアはそれだけ言うと洗濯物を干す作業を再開する。

「……？」

それを見て少し首を傾げつつもルルチェルも干す作業を再開する。

……。

……。

大広間。クリシアとメイランの様子。

「じゃあこっからこっちが私、そっちはあんたね」

クリシアはモップで適当な感じ丸出しで広間の真ん中に線を引く。

「ちょっと待ちなさいよ！明らかに私の方が広くない！？」

メイランはモップを使いクリシアの線引きに抗議する。

「はぁ？ただでさえ面倒なんでいちゃもんとかやめてくれませんかぁ？……さ、始めよ」

クリシアは流れるような喋りと動きで掃除を開始する。

「なんで急に敬語!?逆にムカつくわよ!ていうか勝手に始めてんじゃないわよ!」

「なぁによ!文句あるなら掃除終わってからにしてよ!」

「その掃除に文句あるっつってんのよ!」

クリシアとメイランは互いのモップをぶつけ合い激しい領土争いを始める。

が、その領土争いは、

「もっと掃除がしたいのですかそういうことですか」

という怒りの笑みを浮かべたジェミニの一言によって終息する事になる。

［６４］海から陸へ、陸からメイドへ（後書き）

やっぱりメイド達書いてて楽しいっすね。

え？いつもの後書き？

……休業です。

では次回。

［６５］夜更けの二人（前書き）

暑ぅぅぅぅぅい！

と思っていた矢先、

寒ぅぅぅぅぅい！？

どないなっとんねん日本の気候は！

６５話だぞ。

［65］夜更けの二人

その夜、私は夢を見た。

灰色に染まった空から雨粒がシトシトと降り続く。

路地の一角の決して綺麗ではないその場所で、膝を抱えて身を縮める少女が一人。

長く雨に打たれ体は冷えきっているのだろう。体を小刻みに震わせながら生気のない瞳でじっと足元を見つめている。

希望の欠片もないワンシーン。

と、そんな少女に近づく人影。

―もう大丈夫だよ―

そう言って私をそっと包んでくれたその誰かの顔が、私には思い出せなかった。

「……」

そこで目が覚めた。枕元の時計に目を向ける。まだ日の出までは大分時間がある。

「……ふぅ」

私はベッドを出ると、水でも飲もうかと厨房へ向かう。

「あれ？ハラキア？」

廊下に出たところで誰かに呼ばれる。

声の方を向くと、質素な寝巻に身を包み髪をおろしたクリシアが立っていた。

「どうしたの、こんな時間に？」

「ちょっと喉が渇いちゃって……クリシアは？」

髪をおろしたクリシアはなんというかいつもより大人びて見える。

「変な夢見させられてね。お陰で目が覚めちゃったのよ」

クリシアはハァとため息をつく。

「夢？……どんな夢を見たの？」

私も今夜は珍しい夢を見た。

その好奇心から私はためらう事無く聞いていた。

「……昔の夢よ。まだあたしとあんたがこっちに来る前の頃の夢」

「え？……」

そして驚かされた。

なぜなら、私も昔の夢を見たから。遠い昔の夢を。

「どうしたの？ハラキア」

しかしクリシアには私の驚きの意味など伝わるはずもない。不思議そうな視線が向けられる。

「……私も昔の夢を見たの。クリシアと出会うよりもっと前の頃の夢」

こう言って始めて私の驚きの意味が分かったのであろうクリシアは、

「えぇ？本当に？」

と目を見開いた。

「ええ……」

「すごい偶然ね。……ていうか偶然じゃない気さえしてきて怖くなってくるわ」

クリシアは神妙な顔で握った手をあごにあてる。

「……ねぇ、少し外に出ない？」

「え？どうしたの突然？」

私の提案にクリシアはまだ暗い窓の外を見る。

「なんだか今のままじゃ寝付けそうになくて……。だから、落ち着

くまで少し話しに付き合ってくれない？」

「……いいわよ。私も中途半端に目が冴えちゃってね」

クリシアはそう言って苦笑い。

私とクリシアはそのまま宿内のバルコニーに出た。

深夜ともなれば街の灯りはほとんど消えている。

そして音もしない。そんな闇に包まれた静寂の空間。

「うっわ！綺麗な星空！ね、ハラキア見て御覧よ」

ささやかに静寂を切り裂くクリシアの言葉に従い、私は空を見る。

雲一つ無い空に広がる満天の星空。その美しい眺めに私たちはしばし言葉を忘れ見入っていた。

「ねぇ、ハラキア」

「何？」

止まったのかと思っていた時間はクリシアの一言で再び動き出す。

「ルルチェルの事なんだけどさ」

「ルルチェル……？」

「うん、ジェミニ隊長やハラキアが頑張ってくれたからさ、あの子

も必死にそれに報いようと頑張ってる」

クリシアの言葉はどこか力がこもっていた。

「でも、隊の中にはあの子を快く思ってない奴らが少なからずいるわ」

「そうね。あの一件で傷を負った子達は特にそうでしょうね」

「このまま放っといたらいずれ起きちゃいけない事が起こる。私にはそんな気がしてならないの」

クリシアの言葉は仲間を、隊を想う気持ちが伝わって余りあった。

「……そんな事は絶対に起こさせない」

私もその気持ちは一緒だった。

今は国内の、特に軍の情勢が不安定な状況である。そんな中で本来なら力を合わせるべき仲間に敵意の目を向けるようなことになれば……。

「起こさせはしない。そんな愚かなことは」

ハラキアはじっと星空を見る。

「愚か……か。そうよね、仲間を疑うなんて馬鹿馬鹿しいわよ」

クリシアも空を見ながら言う。

仲間。その単語は私達の間では特別な意味を持つ。

今、私がこうして生きていられるのもクリシアの、仲間のお陰。

だからこそ感謝したい。だからこそ容易に憎しみに走ってほしくない。

ただそれだけの思いである。

「そうね……だからクリシア？」

「ん？何？」

「仲間を信じる一環としてメイランともっと仲良くしていただけないかしら？」

神妙だったクリシアの顔が一変する。

例えるなら、こう……「げっ」みたいな顔に。

「ジェミニ師団長も嘆いてたわよ。二人のネックはそこだって」

「……だって、あいつがいっつも私の顔を見るなりあることないこと因縁つけてくんのよ？いわば私は被害者です、はい」

クリシアは不必要なまでに整然とした口調で言う。

「応えなきゃいいじゃない？応じるからメイランも熱くなっちゃうのよ」

「だって！あいつがあの狐みたいな吊り上がった目で見ながらさ、ねちっこ～く嫌味飛ばしてくるもんだからこっちはとにかく腹立つ訳よ！」

クリシアは言いながら想像でもしてるのだろうか。段々苛立った顔になってきてる。

「でもって無駄に上から目線なのよ！あいつと私は階級一緒なのよ！あいつが偉そうに私に説教垂れていい理由なんてないのよ！」

クリシアの迫力に少し押されつつも、もうこの二人はどうにもならないのかもしれないと、私は密やかに思うのだった。

「……ん？」

「どうしたの？」

ふと、どこかから視線を感じたような気がした。

「……いえ、なんでもないわ」

「そう……？」

気のせいだろう。今日は色々な事を考え過ぎた。

私はそうやって自分を納得させる。

「……さて、じゃあどうにかしてメイランと仲良くなる方法を考えてみましょう」

「え、えぇ～……」

そうして私達の夜は更けていく。

……。

……。

「……」

ハラキア達のいる宿から程近い建物の屋根。そこに、動く影が一つ。

「フヒッ……情報通り」

影はそう呟くと屋根の上を移動する。

「アジトへ戻る。……フヒッ」

その小さな影はピョンピョンと蛙のように屋根から屋根へと飛び移っていく。

そして、夜の街の闇に溶け込むようにして、その『アジト』へと入っていく。

「ただ今戻った。……フヒッ」

小さな影、黒いマントに身を包み頭に黒いターバンを巻いた小柄な男が跳ねるように物置のようなアジトの中へと進んでいく。

「よう、様子はどうだった？」

アジトの奥の方、元々は高級な物だったのであろうボロボロのソファーに仰け反るように座る筋肉質で体の大きな男が聞く。

「フヒッ……メイド達、間違いなくいた」

小柄な男は仰け反る男にヘコヘコしながら言う。

「そうか……トール、今回は褒めてやる。こいつは極上のネタだ」

仰け反る男はソファーの後ろに立つスラリとした長身の男にしかし振り向く事無く言う。

「そうですかー。ありがたく受け取っときますかー」

どこか間延びした喋り方をする長身の男。

「てめぇが裏切り者連れてきたって時は半信半疑だったがよ。クカカ、でけぇ仕事になるぞ」

「フヒッ……さらってくるか？」

「焦んなドッピオ。相手は天下の魔術兵団の精鋭だ。今回ばっかりは慎重にいく」

「フヒッ……分かった」

ドッピオという小柄な男はヘコヘコしながら一歩下がる。

「慎重だ……。難しい仕事だが当たればでかい。普通の奴隷の数倍の価値で取引ができる」

「その通りですねー。同業の中でも頭一つ抜きんでるというものですよー」

「フヒッ……名が売れてしまう」

トールは左右にゆらゆら揺れながら話し、ドッピオはヘコヘコしながら笑いを漏らす。

「このラグ・トルネード様の名がな。よし、トール！その辺のゴロツキ共でいい、数を集めとけ！」

ソファーの男、ラグはソファーから立ち上がりながら指示をする。

「いいですよー。でもそうしたら分け前が減ってしまいますよー？」

「フヒッ……それは困る」

「バーカ。誰がそんなバカな真似するかよ」

ラグはコキコキと首を鳴らしながら言う。

「人間が何か成す時には犠牲って奴がつきものなんだよ」

そう言ってラグは笑う。

ドッピオとトールはラグの言葉の意味に気付いたのか、納得した顔で頷く。

「さぁ、狩りの準備だ」

ラグはそのままアジトを出ていく。

ドッピオとトールも後に続く。

それは、もう夜が明けようかという頃の事だった。

［65］夜更けの二人（後書き）

なんてこったい。

後もう少しで、

今年も半分だ。

マジでなんてこったい。

では次回

［６６］そして報せは唐突に（前書き）

梅雨です。

湿気が半端ないっす。

洗濯物がはぁ……。

６６話っす。

［66］そして報せは唐突に

そして夜が明け、新しい一日が始まる。

「ふぁ～ぁ……」

クリシアは食器を洗いながら大きな大きな欠伸をする。

「クリシア、寝てないの？」

隣で皿を拭くルルチェルが尋ねる。

「え？いや、そういう訳じゃないんだけど……そう見える？」

「うん。さっきから欠伸ばっかりで、少しボーッとしてるようにも見えるし」

ルルチェルは手は休めずに淡々と言う。

「ごめんごめん。昨夜は変な時間に目が覚めちゃってね。そのせいかな？」

クリシアは苦笑いを浮かべながら言う。

「私はいいんだよ。でも……」

ルルチェルは視線を横にずらす。

「？……げっ」

クリシアはその視線を追い、その先を見てあからさまに嫌そうな顔をする。

「欠伸する余裕があるとは大したものよ……逆にね」

獲物を見つけた鷹の如き鋭い目に口元は笑みという表情で、メイランがそこに立っていた。

「……あんた他にすることないの？」

「言う前に微妙な間を置かないでよ。なんか気分害するから。……じゃなくて！」

メイランはツカツカクリシアに近づく。

「昨日はあんたのせいで必要以上に勤勉になれたわ。逆にね」

「あんた仕事しなさいよ」

「うるっさいわね！してるわよ！した上で見回ってるのよ！」

「へー。……あれよ、あんたいい姑になれるわよ。逆にね」

クリシアは欠伸をこらえ、涙目になりながらつらっと言う。

「誉められてないわよね？むしろ怒っていいわよね？ねぇ？」

メイランはこめかみに青筋立てながら言う。

「でもメイラン、クリシア以外にこんなに注意してるの見たことない」

ルルチェルはポツリと呟く。

「え……？そ、そうなの？」

クリシアは若干の驚きの表情で言う。

「そそそそんなことないわよ！たまたまいつもこいつが注意されるようなことしてるのよ！」

顔を紅くしてメイランが早口で言う。

「そうよ！こいつが……」

「朝から元気ね、メイラン？」

「え……？」

いつの間にかそこにいたのかメイランの後ろにハラキアの姿が。

「ふ、副隊長！い、いえ、これは……！」

「分かってるわよ。いつもの事よね」

「そ、そうなんです！……って、え？」

メイランは何かに気付きそうになるが、

「ジェミニ師団長がお呼びよ。早く行ってらっしゃい」

というハラキアの言葉で遮られる。

「は、はい！」

メイランはバタバタと走っていく。

「……はぁ」

その背中を見送りハラキアはため息を一つ。

「昨日の今日で……。本当よくやるわねあんた達は」

呆れ気味のハラキア。クリシアは少しバツが悪そうに視線をずらす。

「あは……。だって向こうが突っかかってくるのはもうどうしようもないわよ」

「肩を寄せ合って仲良くしろとまでは言わないけど、本当互いにどこかで譲歩してほしいわね」

諭すようなハラキアの言葉にクリシアは小鳥の様に口を尖らせる。

不服の意志の表れであろう。

「ふぅ……。じゃあ私は行くわね。メイランじゃないけど、仕事はしっかりね」

ハラキアはそう言ってその場を後にする。

「……」

その後ろ姿を口を尖らせたまま見つめるクリシア。

「……さ、お皿洗おう？」

ルルチェルの言葉は優しさに満ちていた。

と、そこへメイドが一人入ってくる。

「ルルチェル、ちょっといいかしら？」

「はい、今行きますね」

ルルチェルは皿拭きをやめてそのメイドの元に向かう。

「クリシア！ルルチェルちょっと借りるわね」

「わっと……！ク、クリシア！ちょっと行ってきます！」

メイドはそう言ってルルチェルの手を引いて去っていく。

「……え？」

ポツンと取り残されるクリシア。

「ちょっ！これ全部私一人でやれって言うの！」

クリシアは目の前にある大量の皿を前にして声を大にする。

「大体何が『借りてく』よ！こっちの仕事見ながら言いなさいってのよ！」

クリシアはブツブツと文句を言いながらも皿洗いを続ける。

「大体寝不足なのだってハラキアは事情知ってるはずじゃないの！分かってて注意するとかメリハリしっかりしてるわよ！逆にね」

「人の口癖パクらないでもらえる？」

不意に洗い場に現れた黒髪が美しいメイド、メイラン。

「な、なによ……。ていうか何しに来たのよ？」

クリシアは突然現れたメイランに戸惑いの様子を露にする。

「ジェミニ隊長からあんたを手伝えってさ。命令されちゃったのよね」

メイランは言いながら洗い終わった皿を手に取り拭き始める。

「……どんだけ私達気にしてんのよあの二人」

クリシアは呆れ気味に言う。

「使用人部隊内でも上位の実力者二人が不仲なんて格好つかないんじゃないの？」

メイランが作業の手を全く休める事無く言う。

「上位の実力者……。よくさらっとそんな事言えるわね」

「事実だもの。副隊長と私とあなたの三人で『使用人部隊の三強』なんて言われた事もあるし。迷惑極まりないけど。逆にね」

「ルルチェル助けた位からよね？変な通り名が付き始めたのって」

クリシアは眉間にシワを寄せ思案顔になる。

「ええ、ていうかシルビア様がそういうの大好きだったしね」

「シルビア様……。懐かしいなぁ。もう随分と会ってない気がする」

二人は少し前の険悪な雰囲気はどこへやらで穏やかに話を続ける。

「『豪熱拳のシルビア』だったっけ。自分で付けたっていうのが信じられないけど」

クリシアは笑みをこぼしながら言う。

「私が『黒彩の狩人』、副隊長が『破拳』、あなたが……なんだっけ？」

メイランはそこで初めてクリシアの方を見る。

「『迅脚』だったわね」

「そう。女性のセンスじゃないわよね。凄いと思うわ。逆に」

うんうん。二人は頷く。

「あ……」

ふと、クリシアがメイランを見ながら止まる。

「……な、何？」

その視線に耐えかねる様にわざとらしく顔を背けるメイラン。

「いや、こういう事でいいのかなって」

クリシアは一人納得したように呟く。

「え？どういうことよ」

「師団長やハラキアが私達に対してさ、仲良くしろしろうるさかったじゃん」

「うん」

「私正直無理言わないでって感じだったけどさ……。今なら出来る気がしないでもない、かな？」

クリシアはポツポツと喋る。

「……」

メイランはなぜだか居心地が悪そうに視線を泳がせる。

「まぁ、そんな簡単には行かないんだろうけどね」

あはは、とクリシアは皿洗いを再開する。

「……突然そんな事言うのは卑怯よ。逆に」

「は？なんか言った？」

メイランの小さな呟きはクリシアの耳には届かなかった。

そして、二人は黙々と作業を続ける。

そこへ現れるメイドが一人。

「うわ。本当にクリシアとメイランが一緒に作業している」

短めの茶髪が活発そうなイメージを感じさせるメイド、サトリナである。

「……サトリナ？何しに来たの？」

クリシアの問いにサトリナは驚きの表情のまま答える。

「二人が一緒に作業しているという噂が聞こえたものだから様子を見に来たの。それだけ」

「撃つわよ？」

メイランが間髪入れずに言う。

「嘘だよ。ルルチェル探してるんだけどどこに行ったか知らない？」

「ルルチェル？えっと……さっきメリアナがなんかやることあるって連れてってっちゃったけど」

クリシアは記憶を引っ張り出すように言う。

「そうなの？どこに行くとか聞いた？」

「そういえば聞いてなかったわ。どこに行ったのかしら……」

クリシアは先程メリアナというメイドがルルチェルを連れていく様子を思い出す。

「分かった！じゃあ探してみるよ。ありがとう！」

そう言うとサトリナはたたたっとその場から走って行ってしまう。

「……」

「どうしたのメイラン？」

神妙な顔でサトリナを見送るメイランの顔を少し覗き込むクリシア。

「ねぇ……おかしくない？」

「何が？」

メイランはクリシアの方に視線を移す。

「メリアナよ。あの子が理由も言わずにルルチェルを連れてくって」

「……まぁ珍しいわよね。二人ってそんなに仲いいイメージないし」

「それ以前の問題よ！メリアナはモンフェルトの時の被害者の一人よ。ルルチェルの事を良く思ってたら奇跡ね。逆に」

モンフェルトの。それを聞いてクリシアの表情が少し強ばる。

「……私ちょっと行ってくるわ」

メイランは拭いていた皿を置く。

「ちょっと待った。私が行くわ」

クリシアは洗っていた皿を置く。

「いえ、あなたはここにいなさい。逆に」

「今回こそ逆の意味が分からないわね。他ならないルルチェルの事だもの。私が行く」

クリシアは真剣眼差しをメイランに向ける。

「じゃあ……」

その眼差しをしっかりと受けとめたメイランの口元が動く。

「二人で行っちゃう？逆に」

それを聞いたクリシアの口元が緩む。

「初めてあんたの逆理論に賛同出来そうだわ」

よし！と二人は同時に頷くと、洗い場を後にする。

「でもどこを探せばいいわけ？」

「目撃情報を聞き込むしかないでしょ」

クリシアの問いにメイランが答える。

「にしても仕事投げ出すなんてあんたらしくないじゃない？確実に怒られるわよ？」

クリシアは少し悪戯っぽい笑みを浮かべつつ言う。

「大丈夫よ。あなたに唆されたって言うから」

「コラコラ！どっちかって言うと言い出しっぺはあんたでしょうが！」

クリシアは間髪入れずに突っ込むがメイランは気にせず先を急ぐ。

「って、気にしなさいよ！」

「何を気にするのかしら？」

「だから、さぼったのが私のせ、いに……」

メイランだと思った。そう、クリシアはその問いを発した主がメイランだと思ったのだ。だが、そこにいたのは……。

「は、ハラキア……」

「仕事はどうしたの？……って聞いてもまともな答えは返ってこなさそうね」

ハラキアは怒ってるような呆れてるようなごちゃ混ぜの表情でクリシアを睨む。

「いや、あの、これはね……」

クリシアは慌ててメイランを……。

「っていないし！」

いつの間にかメイランの姿は消えていた。

「……クリシア」

「……はい」

ハラキアは今度は少し哀しげな視線をクリシアに向ける。

「あなたが理由なく仕事を投げ出すなんて思わないわ。でもね、どんな理由があったとしても黙って投げ出すのは感心できないわ」

「う……ごめんなさい」

クリシアはそう言って頭を下げる。

「……で、どうして投げ出したの？それなりの理由があるんでしょ？」

「そ、そう……！実はね」

クリシアがいざ話そうとした瞬間、二人がいる廊下に、一羽の鳩が勢いよく侵入してくる。

「な、なに！？」

困惑する二人の前で鳩は、激しくはばたき続ける。

「ど、どうしたって言うのよこの鳩は……」

「……待って」

ハラキアは何かに気付いた様子で鳩に手を伸ばす。

すると鳩はそれを待ってたかのようにハラキアの手にぴたりと止まる。

「ど、どういうこと……？」

「これを見て」

ハラキアは鳩の足を示す。

「何が……え？これって……」

鳩の足には小さく折り畳まれた紙が結び付けられていた。

ハラキアはそれを取ると、広げて中を確認する。

「な、なんて書いてあるの？」

「……」

「ねぇ！」

クリシアの強い声。それに押されるかの様に、ハラキアは声を絞りだす。

「……ルルチェルが、人攫いに……」

口に出して、その言葉がハラキアの中で認識された時、彼女の中に封じられていた記憶が鮮明に蘇る。

忌まわしき、しかし忘れてはならない記憶が。

［66］そして報せは唐突に（後書き）

次回からは少々時を遡ります。

では次回。

∞ハラキア・ロングボルト（前書き）

ハラキアさんの過去に触れるお話です。

どぞどぞ。

∞ハラキア・ロングボルト

それは、今から１０年前の事。

私は東部の街に家族と暮らしていた。

両親と兄と私の四人での暮らし。

毎日を笑って過ごせる、幸せな暮らし。

まだ幼かった私はそんな幸せが永遠に続くと思っていた。

でも、幼い私は知ることになる。

物事には必ず終わりがあることを。

永遠など存在しないということを。

その日、私達家族は街から少し離れた湖に出かけた。

父と兄は桟橋で釣りを、私は母と二人のんびり湖の周りを散歩していた。

そんなのどかな時間。

しかし、それから天候が急変し、突然の大雨に見舞われてしまう。

私達家族は慌てて宿に戻る。

今思えばあの雨は何かを予見していたのかもしれない。

宿に戻ったのはいいが、暇を持て余してしまった私は兄と二人で二階の部屋で遊んでいた。

その時だった。一階から大きな物音と怒鳴るような声が聞こえたのは。

私は幼いながらに異変を察知した。

そしてそれは兄も同じだった。

兄は私にベッドの下に隠れているように言った。

「おまえはここにいろ。おれが様子を見てくる」

そう言って兄は私をベッドの下に押し込む。

私は「怖い」とか「大丈夫？」といった様な事を言ったと思う。

それに対し兄は、自信に満ちた笑顔で、

「大丈夫。おまえはおれが守る」

と言って不安がる私の頬を撫でてくれた。

しかし、その時の言葉が、笑顔が、手の感触が、全てが私と兄にとっての『最後の』になってしまった。

兄が一階に下りてから大分時間が経った頃、不安と恐怖に支配され

ていた。

ドアが開く音を聞いた時、私は思わず声をあげて飛び出そうとしたが、ベッドの下という限られた視界の中に飛び込んできた『それ』を見て、私は止まった。

足だ。しかし、ただの足ではない。血にまみれた靴を履いている。

そして、その血塗られた足の持ち主は、ゆっくりと部屋に足を踏み入れてくる。

私は込み上げてくる恐怖を必死に押し殺しながらその足をじっと見ていた。

足は何かを探すように部屋の中をぐるぐると動き回っていた。

その途中、ガタン、バタン、という乱雑な音と共に棚に置かれていた本や花瓶が次々に床に落ちていく。

「くそ……っ！何もありゃしねぇな」

足の主から放たれたであろう声。

男の声だ。少し苛立っているように聞こえる。

「おい、そっちはどうだ？」

今度は部屋の外から別の男の声がした。

「ダメだ。金になりそうな物は見当たらねぇ」

足は言いながらズカズカと無神経な足運びで部屋を出ていく。

「……」

行ってしまったのか？

私は少しだけ、ほんの少しだけベッドの下から顔を出す。

「え」

その次の瞬間だった。私の身を隠してくれていたベッドが跳ねるように飛んで行ってしまったのは。

いや、飛んだのではない。飛ばされたのだ。

あの、血塗られた足によって。

「見ぃつけた～」

獣。私が最初にその男を見て抱いたのはそんな印象だった。

汚らしい身なりに下卑た笑いを浮かべる野蛮さが滲み出た顔。

生理的な嫌悪すら覚えるその男の太い手が、私の腕を乱暴に掴む。

「クカカ。かくれんぼはお終いだぜぇお嬢ちゃん？」

「っ！！」

男は力任せに私の体を引っ張りあげる。

「こんなところにお宝が眠っていたとはなぁ……。おい！」

男は近くにいた男達を呼ぶ。

「ガキじゃねぇか。宝なんつぅからもっと上物の女かと思ったぜ」

やってきた男は私を睨みながらため息をつく。

「頭の狂った貴族共には逆にこの位の方がいい値が付くんだよ」

値。鼻息荒く力説する男の目に映るのは私ではない。私の先に映る金だ。

「なるほどなぁ。よし、生きてるのはそいつだけだ。足がつく前に逃げるぞ」

“生きてるのはそいつだけ”。何気ない雰囲気で放たれた男の言葉の意味を理解したその時、私の目の前は真っ暗になった。

いや、正確には真っ暗にはなっていない。

男に抱えられ宿を出る時、両親と兄の無残な死体をこの目で見たから。

涙すら出なかった。出したかったはずなのに。出なかった。

声を上げたかったはずなのに。出なかった。

私は、声を発する事が出来ない体になってしまったのだった。

そのまま麻袋に詰められた私は長い間運ばれた。

長い間、ただ何も感じる事が出来ない時間を過ごした。

次に袋から出たのは、暗い倉庫の様な場所でだった。

男は私に逃げようとしたら殺すと怒鳴るように脅してから倉庫を出ていった。

私はボーッと男が出ていった扉を見ていた。

「あんたもつれてこられたんだ？」

声がした。私がその方向を向くとそこには、金髪が鮮やかな女の子が座っていた。

∞ハラキア・ロングボルト（後書き）

次回はもう一人の少女のお話です。

では次回。

∞クリシア・リッチフォールド（前書き）

さてさてクリシアさんの過去話です。

いってみましょうか。

∞クリシア・リッチフォールド

普通ってなんなんだろうって何度も考えた。

幸せって本当にあるのって何度も問い掛けた。

毎日父親の暴力に曝され傷が増えていく生活の中で、あたしは何度もそんな事を考えていた。

母はあたしが物心ついた頃にはもういなかった。夫に愛想を尽かし、娘を捨てて出ていったのだ。

笑顔になる時間など微塵もない毎日。

あたしが家を出ていく事を躊躇う理由はどこにもなかった。

父にとってあたしは都合のいい暴力の捌け口。女として成長を果たした暁には体で金を稼がせようとすら考えていたようだ。

だからあたしは逃げ出した。どこでもいい。この男の手の届かない場所へ。

父が泥酔して眠り込んだ隙を狙い、あたしは家を出た。

そして一晩中走り続けた。

幼いあたしの心は不安と恐怖でいっぱいだった。

本当に逃げ切れるのか？

逃げ切れなかったらどうする?

逃げ切れたとして、その後はどうする?

あたしの頭にはそんな問いがこびり付いて離れなかった。

それを振り払うかのようにあたしは走り続けた。

そして街を抜け、朝日が昇った頃、あたしは初めて振り返った。

そこには何もなかった。

少なくともあたしを絶望に追い込むような物はなにも。

あたさは安堵した。するとどこに隠れていたのかと聞きたくなるほどの疲労感が襲ってきた。

あたしは倒れるように眠りに落ちた。

夢は見なかった。

だからだろうか、次に目覚めた時に、あまり時間の経過を感じなかった。

しかし目覚めたあたしの視界に入ってきた光景は、眠りに落ちる寸前のものとはかけ離れていた。

茶色い木目が見える。

周りには樽や木箱が置かれている。

小刻みに振動が伝わってくる。

……荷馬車？

私は一つの可能性に辿り着いた。そしてそれを確かめるべく立ち上がろうと……。

「あ、あれ？」

手足がうまく動かせない。

縛られていた。両手両足ががっちりと。

あたしは混乱した。なぜこんなことになっているのか分からない。

私は逃げ切ったはず。でも今捕まっている。誰に、何の為に？

「おぅ、嬢ちゃん目が覚めたか？」

男の声がした。体格のいい、しかし顔つきは悪党そのものな男が木箱に寄りかかって座っていた。

「……」

私は混乱が鎮まらないまま男を睨みつけた。

「女の子がそんなに恐い顔するもんじゃねぇよ。ま、したくなる理由はいくらでも思いつくがな」

男はクカカ、と変な笑い声をあげる。

この男が何者なのか？それは分からない。だけど、今のあたしの状況はこの男が関係してると考えて間違いないようだ。

「あたしをどうするつもり？」

小刻みに震えそうなのを必死に我慢しながらあたしは強い言葉を紡ぐ。

「すぐに分かる。それまでは大人しく寝てるんだな」

しかし男はまるで動じない。１２歳の小娘の言葉など歯牙にかけるまでもないようだ。

「お前ぱっと見ただけでも傷やら痣やらがあちこちにあるようだが、どういう生活してたんだ」

あっけらかんとした口調で聞いてくる。

だめだ、この男からは父と同じものを感じる。

そう考えた瞬間、男を嫌悪する感情が一気に吹き上がってきた。

「あんたの知った事ではないわ」

あたしは隙を見せたらダメだと自分に言い聞かせつつ、男を睨み続ける。

「……ま、さしずめ肉親の暴力か、俺達の同業の世話になってたかのどちらかってとこだな」

「ど、同業……？」

あたしはその単語を拾い、ぶつけた。

「ああ、人攫いってやつだな」

男はさらりと口にする。

人攫い。その意味は、すぐに理解できた。

そして、その渦中に自分がいるということも。

「道端で寝転がってやがってよぉ。クカカ、いい拾い物したぜ」

あたしは絶望した。せっかく父の暴力から逃げ切ったというのに、今度は人攫い？

笑えない。笑えなさすぎる。

これからあたしはどうなるっていうの？

馬のいななく声が聞こえ、馬車が止まる。

「おい、ラグ。着くぞ、準備しろ」

馬車の外からの声。この男の仲間だろうか？

「さて、嬢ちゃん。ちっとばっかし我慢の時間だぜ」

どういう事？と聞く前に、男は私に目隠しをして、口にも布を噛ませてくる。

「んんっ！？」

「さて、よっこいしょっと」

あたしの体は担ぎ上げられ、そのままどこぞへと運ばれる。

「おいラグ。そいつ道で拾ったって本当かよ？」

「ああ、どんな訳ありか知らねぇが道端に転がっててよ。いつもの貴族共が好みそうなタイプだぜ」

男達の会話が聞こえてくる。

「言いなりになる奴隷を自分達の手で育てたいってか、貴族ってのはなかなかイカレてやがるよな」

「しかも奴らにとっちゃ単なるお遊びの一環だってんだからな。目を付けられた方はたまったもんじゃないぜ」

言いながらもあたしの体は運ばれていく。

貴族？奴隷？一体あたしに何が起ころうっていうのよ？

「よし、とりあえず倉庫に入れとけ。明日は久々の仕事だからな」

「おう。ちんけな人さらいばっかじゃ体がなまっちまって仕方ねぇからな」

ギギィという木がきしむ音が聞こえる。

「よし、お前はここでおとなしくしてな」

目隠しと口の布が外される。

雑然と荷物が置かれた部屋。なるほどここは倉庫のようだ。

「逃げようなんて考えねぇことだな。もし変な気を起こしたら罰が待ってると思え」

男はそれだけ言うと倉庫を出ていく。ガチャガチャとしっかりと鍵を掛ける音が外から聞こえた。

途端に静寂に包まれる。

「……」

あたしはごろんと横になり、頬を床に付けたまま力なくため息をつく。

「これからどうなるって言うのよ……」

あたしは、考える事すら放棄したい位の気持ちになった。

ずっと倉庫にいては、時の流れなどは全く分からない。多分、丸一日くらい過ぎた頃だろうか。倉庫の鍵が開け放たれた。

「おら、入れ」

あのラグとかいう男に引っ張られ、一人の女の子が入ってきた。

あたしとおなじくらいの歳だろう亜麻色の髪のその子は、ぺたりと座り込む。

「あんたもつれてこられたんだ？」

あたしは声を掛ける。

その子はゆっくりとこちらを向く。

「……え」

あたしはその子の目を見て、思わず驚きの声を漏らした。

その子の目には、全く光が宿っていなかったから。

∞クリシア・リッチフォールド（後書き）

次回もまさかの過去話です。

では次回。

∞そして出会いは生まれる。（前書き）

前書きが思いつかない事は多々あります。

今回なんか正にそうです。

ではどうぞ。

∞そして出会いは生まれる。

クリシアは最初にその女の子を見た時、目の印象だけでなく、身にまとった雰囲気というか空気感にも違和感を感じていた。

「……」

ぼーっとこちらを見るその表情からは何も感じとれない。何も感じない人形と向かい合っているのではないかという印象すら受ける。

「……ね、ねぇ」

クリシアはその独特の雰囲気に気圧されながらも、声をかける。

「あ、あたしはクリシアっていうの。あなたは？」

クリシアは努めて明るく聞いた。が、目の前の女の子は、

「……」

何か言いたげに口を開き、しかしすぐに閉じてしまう、という行動を繰り返すだけであった。

「……え、えーと」

クリシアはいよいよ困っていた。状況が状況なだけにもし同じ境遇なら今の内に話をしておいて損はしないだろう、と考えていたがそれ以前の問題でつまづいていた。

頭を抱えるクリシアに対し女の子は縛られた両手両足を器用に動かしてクリシアに近づいてくる。

そして、クリシアの服の裾を引っ張りながら、何かを訴えるように口を動かす。

「……」

クリシアはいきなり近づいてきたのに驚きつつも、女の子の様子を見て、一つの可能性に行き着く。

「もしかして、口が聞けないの？」

クリシアはまさかと思った。しかし、女の子がはっきりと頷いた事で疑惑は確信へと変わる。

「ご、ごめんね。あたしそうとは知らずに……」

クリシアはそれまでの態度を謝ろうとするが、女の子はそれを手をかざして制する。

そして、床に散らばる木屑を器用に並べていく。クリシアにはそれが何を表すのかはすぐに分かった。

「ハラキア……。これはあなたの名前？」

クリシアが聞くと、女の子改めハラキアはまたはっきりと頷く。

「そっか。ハラキア、よろしくね」

クリシアは笑顔で言う。

ハラキアは先程よりは多少穏やかな表情で頷いた。

それから二人は、というかクリシアがハラキアに色々聞いたり話したりした。

「ハラキアって何歳なの？」

と聞くと、ハラキアは指で1と3を示す。

「え！じゃあハラキアの方が一つ年上なんだ」

ハラキアもクリシアの言葉を聞いて少し驚いた顔をする。

「……ねぇ、ハラキア」

数瞬の間を置いて、クリシアは神妙な顔で話し出す。

「私たちこのままじゃどっかに売り飛ばされちゃうんだよ。だから、どうにかして逃げよう」

周りに気を遣いつつ小声で、しかし強い意志を持って言葉にする。

ハラキアもその事を感じたのか、クリシアの目をしっかりと見て、頷く。

「お話だったらさ、こういう時にさ、かっこいい英雄が助けに来てくれるんだけどね」

クリシアはちょっと冗談っぽく言う。

ハラキアは「英雄？」とでも言いたげに首を傾げる。

「英雄だよ。悪い奴らが悪い事しようとするとさ、どこからともなくやってきて悪い奴らを倒して助けてくれるのよ」

ハラキアはそれを聞き、「おお！」と言った興味の顔になる。

「で、助けられた女の子とその英雄は恋に落ちちゃうわけ。でもね、英雄はまだやることが残ってるって言って静かに女の子の元をさるの。ねっ！かっこいいでしょ！」

コクコクと何度も頷くハラキア。

「……でもそれは物語の中だけ、今は私達だけで逃げる手段を探さないと」

言いながらクリシアは自分の両手足を見る。

「せめてこの縄だけでもどうにかできたら……」

二人の両手足を縛る縄はかなりきつく複雑に結ばれていた。

ハラキアはきょろきょろと辺りを見回す。

「どうしたの、ハラキア？」

ハラキアはクリシアの方を見つつ、部屋の隅の方を指差す。

「なに……？」

クリシアはその指差す方を見て、そして気付く。

「……なるほどね」

そこには、角の尖った木片がいくつも積まれていた。

……。

……。

二人が何やら行動を始めた同じ頃、二人が捕えられてる場所から少し離れた市街地。

そこに、ある皇族の公務の護衛の為、帝国軍のある部隊が駐屯していた。

しかしその部隊は、軍人と素直に呼ぶには違和感があった。

なぜなら、全員女性で、なおかつメイド服を着用していたからである。

帝室直轄使用人部隊。彼女らはその精鋭達であった。

「平和ねー。実に平和な旅路だわ」

ずずず。と紅茶を音を立てて飲む、燃えるような紅髪のメイド。

使用人部隊隊長。魔術兵団第十師団長、シルビア・ランドガルトである。

「ちょっとシルビア。はしたない飲み方しないの」

シルビアの隣で彼女とは対照的に音一つ出さずに紅茶を飲む黒髪をアップでまとめた浅黒い肌のメイド。

使用人部隊副隊長。魔術兵団第十師団師団長補佐。モニカ・ラングレー。

二人は皇族護衛の任が一段落してティーブレイクと洒落こんでいた。

「あなたも母親ならそういう行動は控えた方がいいわよ」

モニカはこうしなさいとばかりにティーカップを優雅に、そして静かにテーブルに置く。

「だって家だとやれ旦那が、やれアーガイルがジェミニが……ってな感じで休めないんだもの」

ぶぅ、とシルビアは不満げに頬を膨らませる。

「歳を考えなさい。歳を」

モニカは呆れ顔。

「歳の事は互いに言いっこなしよ。なんかイライラしてくるから」

「私はあなたにイライラさせられるわよ」

あっけらかんとしたシルビアに眉間を押さえるモニカ。対照的な画であった。

「……そういえばこの前ジェミニに会ったけど、少し見ない間にしっかりとした子に育ったわね。あなたに似ず」

「本当よね。ってバカ！最後の一文はいらないわよ！」

シルビアはわざとらしく声を荒げる。

「本当、アーガイルといいジェミニといい本当にあなたに似てないわよね……」

「ふん！……私、出かけてくるわ」

シルビアは残った紅茶をぐいと飲み干すと、席を立つ。

「ちょっと！どこへ行くの？」

「散歩よ散歩。すぐに戻るわよ」

シルビアはパタパタと手を振りながら部屋を出ていこうとする。

「はぁ……この辺りはあまり治安がよくないらしいから気を付けなさいよ」

モニカがそう言うと、シルビアはくるりと振り返り、

「私を誰だと思ってるの？『豪熱拳』のシルビアよ」

シルビアは誇らしげにそう言うと、部屋を出ていった。

「……ふぅ、さすが旦那と駆け落ちして結婚を無理矢理認めさせるだけはあるわ。うん」

モニカは一人頷いていた。

シルビアはメイド服の上にコートを羽織り、外へと出た。

「さて、どっちに行ったもんかしら」

シルビアはキョロキョロと辺りを見回す。

「よし、なんとなくこっち」

そして歩きだす。

それは、ある路地裏に続く方向であった。

……。
……。

「……よっ！」

クリシアは後ろ手に結ばれた縄に木片の鋭く尖った部分を擦りつける。

縄はジリジリと少しずつ切れていき、やがて……。

「やった！切れた！」

クリシアは縄を振りほどくと、自由になった両手で足の縄もほどく。

「ハラキアのも今ほどいてあげるね」

ハラキアはこくりと頷く。

クリシアは焦って震える手を必死に落ち着かせつつハラキアの縄もほどく。

「売り飛ばされてたまるかってのよ……！絶対逃げてやるんだから」

ハラキアの縄もほどかれ、二人はさて逃げるぞという段階に移行しようとしていた。

が、唯一の出入口である木の扉の鍵を開ける音が聞こえてきた事により、二人の緊張は一気に頂点に跳ね上がる。

「やば……！」

クリシアはハラキアの手を取り木箱の陰に隠れる。

「お～ぅ、大人しくしてっかぁ……ん？」

二人がいないことを確実に不審に思っている声は、カツカツと中に入るなり、

「マジかよ……。くそ！」

恐らく切れてる縄に気付いたのだろう。

クリシアはぐっと破を食い縛ると、木箱の陰から飛び出す。

「あ！てめぇなに逃げ出そうと」

「やぁ！」

カキーーーン！

「※♪☆仝々〆〇！？」

クリシアの放った蹴りは見事男の股間を直撃した。

もう一度言おう。直撃したのだ。

股間を押さえ、叫びにならない叫びを吐息と共に吐き出しながら、男は崩れるように倒れる。

「行くよハラキア！」

クリシアはハラキアの手を引き扉を抜ける。

また捕まったら今度こそ終わりだ。二人は襲い掛かる恐怖を押し殺しながら出口を目指す。

「逃がすかよ！」

背中から追い掛ける声。

クリシアは一瞬振り返りその姿を確認する。

「止まれ！ぶっ殺されてぇのか！」

クリシアをさらいハラキアの家族を手に掛けた男、ラグと呼ばれていたあの男が鬼の形相で二人を追い掛けてくる。

「止まる訳ないでしょ！バカー！」

クリシアは叫びながらも走り続ける。

入り組んだ通路の様な場所を抜け、二人は地上に出る。

「やった！ここまでくれば……」

出た先は暗い雰囲気の路地裏。

「さぁ、もう一息よ！あとちょっとで……」

逃げ切れる。そう言おうとして、クリシアは固まる。

どこに潜んでいたのかは分からない。二人は無数の粗暴な身なりの男達によって囲まれてしまう。

「逃がすかよぉ……」

そして、後方からはラグが迫る。

クリシアは悔しそうに唇を噛み、ハラキアは怯えながらクリシアの腕を掴む。

「さて、悪い子にはお仕置きをしないとなぁ」

ラグはゆっくりとした口調で言う。

周りの男達はそれに合わせるかのように二人への輪を狭めていく。

「ちょっ！やめてよ！どこ触ってんのよ！」

二人の体に乱暴に近づく無数の手。クリシアは力の限り暴れるが、男達の前では抵抗にすらならない。

「……っ……っ！」

声を出せないハラキアも、目にいっぱい涙を溜めながら、首を振っ

て拒絶する。

しかし、男達は止まらない。

「おい、お前らこんな子供とやる気かよ？」「げひゃひゃ、だったらてめぇは引っ込んでりゃいいだろうがよ」「貴族共に引き渡す前のちょっとしたお楽しみってやつだな」「おい、手足縛っとけ」

男達は二人に群がる。

「ちょっと……！やめなさ……むぐっ！？」

クリシアの口に布が乱暴に詰められる。

「ちっと黙ってな。なぁに、すぐにぶっ飛んじまうからよ。げひゃひゃ」

「まずはこいつからか？」

「ああ、お友達には見学しといてもらおうか」

ハラキアは押さえ付けられたまま、ぐいと顔をクリシアの方に向けられる。

「ほら、お友達の晴れ舞台だ。よく見ときな」

男は下品な笑みを浮かべながらハラキアの顔を持つ。

「……ゃ」

「あん？」

ハラキアの口から少し声が漏れたのか。男はハラキアの顔に耳を寄せる。

「イヤァァァァァァァァァァ！！！！！！！！」

天を切り裂かんばかりの叫び。ハラキアの付近の男達が吹き飛ぶ。

「なっ……」

クリシアに群がっていた男達は突然起こったあり得ない現象に、固まってしまう。

「離れて……」

ハラキアはその目にしっかりと光を宿し、そして男達を睨みつける。

「今すぐクリシアから離れてっ！！」

空気がビリビリと震える。声の大きさではない。そうではない力が働いていた。

「ハラキア、あなた声が……」

クリシアは口に詰まっていた布を吐き出し、凄まじい迫力を放つ目の前の少女を見つめる。

しかし、クリシアの言葉もハラキアは反応しない。

「離れてって言ってるのよ！」

ピキィィィ――……ッ！

超音波のような金切り音が響き、周囲の家々の窓が振動で割れ、地面にも僅かに亀裂が走る。

「ば、化け物……！」

男たちはハラキアの威容に慌ててクリシアから離れる。

「ハ、ハラキア……」

解放されたクリシアはハラキアに近付こうとする。

「……っ！」

が、苦悶の表情を浮かべ頭を抱えるハラキアの周りに渦巻く得体の知れない風の流れに、足を止める。

「ハラキア……！」

クリシアの声に、ハラキアは、

「たすけて、クリシア……」

と、涙を浮かべ怯える顔になる。

「もう大丈夫だって分かってるのに……真っ黒い気持ちが止まってくれないの！」

ハラキアの周囲に渦巻く空気がその言葉の通り、黒く染められていき、ハラキアの姿は見えなくなってしまった。

「ハラキア！」

クリシアは近付くにも近付けず、その名を叫ぶしか出来なかった。

この黒い竜巻の中で、ハラキアは無事なのか。

もし、何かあったら……。と、クリシアが最悪の不安を抱いた時だった。

「はぁっ！」

甲高い気合いの声と共に、黒い竜巻から真っ赤な炎が噴き出し、やがて竜巻を消し去る。

「えっ……？」

何が起こったのか。クリシアは呆然と目の前に現れた光景を見る。

「ふーっ。間一髪ってところかしらね」

炎の紅が移ったかのような髪をなびかせ、その人は立っていた。

その腕の中にハラキアを抱きながら。

「ハラ、キア……」

クリシアは絞りだすようにそう口にする。

ハラキアはその人の腕の中でぐったりとしている。

「ん？この子の事かな？大丈夫だよ。少し気を失ってるだけだから」

その人はクリシアに近づく。

「大変だろうけどあなたはこの子を連れて少し離れてなさい」

にこりと笑いながらハラキアをクリシアに預け、後ろに下がらせる。

「さて、と……」

そしてその人の目は、クリシア達に群がっていた男達に向けられる。

「あんた達は人さらいかもしくはそういう趣味に走っちゃったか…
…どちらにしろ許す訳にはいかないね」

その人は着ていたコートを脱ぎ捨て、メイド服姿になる。

「な、なんなんだよお前はよぉ！」

「ふ、ふざけた格好しやがって……！」

男達は突然現れた謎の女に戸惑いつつも、攻撃的な姿勢を緩めない。

「いや、待て……」

だが、男達の中の一人が、何かに気付きわなわなと震え出す。

「あの服装、あの髪の色……お、おい！やべぇって！」

「あん？お前一体どうしたんだよ？」

「馬鹿野郎！ありゃあ帝国軍の、魔術兵団の奴だよ！」

何かに気付いた男は周りに叫ぶように言う。

「ま、魔術兵団！？お、おいマジかよ……！」

男達の間に動揺が広がる。

「あら、よく知ってるじゃない？そうよ、魔術兵団のシルビア・ランドガルトと言ったら私の事よ」

シルビアは胸を張って言った。

「シルビアって……帝国軍最強の炎使いじゃねぇか！なんでこんなとこにいるんだよ！」

「散歩してたのよ」

「散歩！？」

平然と答えるシルビアに男達の戸惑いは頂点を迎える。

「だ、だが相手は一人だ。全員でかかればやれる！」

「やれるって……。こんな時までやらしい事考えてんじゃないわよ」

「そういう意味で言ったんじゃねーよ！」

「あら、そうなの？それはそれでなんとなくぼんやりと傷つくわ」

シルビアはハフンと息を吐く。

「で、傷ついちゃったからとっととケリつけましょうか？」

シルビアは拳を強く握る。

すると、その拳から炎が噴き出してくる。

「さあ、熱ぅいお仕置きのお時間ですよ」

シルビアが拳を振るうと、大量の炎が放たれ、男達に襲い掛かる。

「どぅえわぁ！」

燃え盛る炎に襲われ、逃げ惑う男達。

「逃がしはしないわよ！」

シルビアは炎を操り、男達の退路を奪っていく。

逃げ場を失った男達はその場に立ち尽くす。絶望の顔をして。

「さて、一丁あがりっと」

シルビアは手をポンポンと叩く。

「とりあえずモニカに信号送っとこ」

手の平に小さな光る玉を出現させ、それをそのまま空中へと投げる。

「これでよし。……さて、あなたたち、大丈夫？」

隅の方で固まっているハラキアとクリシアに笑顔で声を掛ける。

「悪い奴らはやっつけたからね。怪我とかしてない？」

シルビアはペタペタと二人の体を触る。

「……すごい」

惚けたようなハラキアの呟き。

「ん？」

「お姉さんって、英雄なの……？」

「英雄？」

シルビアはその単語を聞き少し考える様子を見せる。

「……英雄ではないね。そもそも私女だし」

と言って苦笑い。

「あなたは、なんで私を英雄だと思ったの？」

「だって、強いし格好いいし……」

ハラキアはシルビアを見つめながら言う。

「あはは、ありがと。でも仮に私が男でも英雄にはなれないよ。……私みたいな中途半端じゃね」

そう言ってシルビアはどこか影のある笑みを見せる。

「おっと、ここで話し込んでいても仕方ないね。二人をお家に帰してあげないとね」

ポンポンと二人の頭を優しく叩く。

「二人とも怖い思いしちゃったからね。早く家族の所に……ってなんだか二人して浮かない顔してるように見えるのは気のせいじゃないよね？」

「……いないんです」

ハラキアは、小さな声で言う。

「皆、もういないんです……」

ハラキアの目には、涙がたまっていた。

「そっか……。ごめんね、辛い事言わせちゃって」

シルビアはその涙でハラキアに降り掛かった不幸を察したのだろう。

優しく、震えるその体を抱き締める。

失った物を取り戻し、緊張からも解放されたその反動だろうか。シルビアの腕の中でハラキアは声を出して泣いた。そしてシルビアは何も言わずにハラキアの体を抱き締め続けた。

「あなたも、辛かったわよね？」

片方の手でクリシアの頭を撫でる。

「あたしは……この子みたいに失った訳じゃないし」

「うん」

「嫌になって自分から捨てて来ちゃっただけだから……」

「そう」

「だから、あたしは……」

シルビアは頭を撫でていた手でクリシアの頬を撫でる。

「辛かったんだよね？」

クリシアがはっとしたような顔でシルビアを見る。

シルビアは優しく微笑み返す。

それを見てクリシアの中に張り詰めていたものが静かに溶けていく。

「……ほら、おいで」

シルビアは半ば強引にクリシアも自分の腕の中に収める。

二人は、シルビアの腕の中で、その古い涙が尽きるまで、泣き続けた。

そして、二人が泣き止んだ頃、シルビアの部下である使用人部隊の数人が現れる。

「まったく、無茶苦茶するわね」

所々焼け焦げた路地裏を見て、モニカが呆れた様に言う。

「まぁまぁ、結果オーライってやつよ」

「何が結果オーライよ。なんて言って報告する気よ？」

「えーっと、人助け？」

シルビアは手を叩き答える。

「……それで上が納得すればいいけどね」

「厄介そうな顔するわね。……でも、それに見合うだけの『原石』を見つけたんだから良しとしましょうよ」

シルビアはちらりと、メイド達に保護させたハラキアとクリシアを見る。

「……しかも二人もね。あなたのこういう才能は、勇者様譲りかしらね？」

「ダイナは見つける才能じゃないわよ。あの人が持っていたのは人を惹き付ける才能よ」

「そう……。どちらにしろ身寄りも無しじゃあ一旦は預かるしかないわよね」

「そうね」

その時点で二人は、ハラキアとクリシアを使用人部隊で迎える事を半ば決めていた。

そうして不幸の連鎖によって生まれた出会い達は、いくつかの思惑と共に時代の歯車に組み込まれて行くのであった。

これは、ハラキア達がある英雄と出会う１０年前の話。

∞そして出会いは生まれる。（後書き）

次回より本編に戻ります。

［67］メイドｖｓメイド（前書き）

人生とはかくも切ない物なのか……！

……。

ＴＶの録画に失敗しました。

６７話でがんす。

［67］メイドｖｓメイド

街から外れた林道の一角に、人目を逃れるようにして小屋が建っていた。

その小屋に数人の影。

あのラグ・トルネードとひょろ長な男トール。そしてその二人に正対する形でメイド服の女が一人と、

「……」

鎖で手足を縛られ、口を塞がれたルルチェルがいた。

「クカカ、まさかこんな上等なメイドちゃんが手に入るとはな」

ラグはルルチェルを見て上機嫌に笑う。

「ねぇ、約束は守ってよね？」

ラグの笑う様子を冷たい目で見つめる、クリシア達がメリアナと読んでいたそのメイドが、強い口調でその疑問符を口にする。

「あ？あぁ、分かってるよ。この一件に関しちゃお前は被害者だって事にしろってんだろ？全く、妙な条件突き付けられたもんだぜ」

「お嬢さん？本当にお金はいらないんですかー？」

トールがゆらゆらと揺れながら聞く。

「いらないわ。私はこの子だけ始末出来れば後は何もいらないわ」

メリアナは躊躇いなくはっきりと口にする。

「かっ……こうも堂々と仲間を売るなんざ帝国軍も堕ちたな」

「さぁ、追っ手が来る前にこの子を連れていきなさい」

ラグの言葉など聞く気もないのか、メリアナはさっさとルルチェルをラグ達の方に押しやる。

ルルチェルは何かを訴える様にメリアナを見るが、メリアナはその様子を冷徹な目で見下し、

「あんたがいけないのよ。罪人でありながらジェミニ様の寵愛を受けようとするから……あんたさえいなくなればジェミニ様はあんたみたいな屑に気を揉む事もなくなるのよ。ふ……ふふ……」

メリアナは笑う。瞳に黒い物を宿しながら、静かに笑っていた。

「あんたの手足は魔封鎖で縛ってるから抵抗は無駄よ。ま、それでなくともあんたにはこれがあるけどね」

メリアナはルルチェルの手首に黒く光る『証』に目を向ける。

「罪人の証。魔力を使えばこいつがあんたを苦しめる。アハッ、あんた絶望的な状況ね！」

メリアナはそう言ってただ笑っていた。

「いやはや、女ってのは恐ろしいもんだな。って事でそろそろ行くか」

ラグはルルチェルの体を担ぎあげる。

「じゃあな、メイドの嬢ちゃんよ。会う事は無いだろうがな」

「ええ、互いにその方がいいわね」

ラグはルルチェルを担ぎあげたまま、小屋を後にする。

「さて……」

メリアナはその様子を満足そうに見送ると、自分の懐から鎖を取り出す。

「私は被害者にならなきゃね……」

メリアナは目を閉じる。

「にしても、こんなに簡単にいくなんてね。あいつ、ルルチェルには罰が下るべきっていう神からの配慮かしら？ふふ、ふふふ……」

「だとしたら神様は人間をもっと知るべきと思うわ。逆にね」

かんぬきをしてあった小屋の扉が衝撃音と共に破られる。

「どうしてあんたが……」

「言っとくけど到着はたった今よ……。と言ってもあなたが何をしたかは今の台詞で大体分かったけどね」

両手にそれぞれ紫に光る銃をを携え、メイランが小屋の中に入る。

「メイラン……。あなたなら分かるでしょう！罪人がのうのうと生きる事の愚かさが！これは必罰なのよ！ねぇ、メイラ」

メリアナの言葉は、その耳元をかすめた弾丸によって止められる。

「逆に、哀れみすら感じるわよ、メリアナ」

静かな怒りと悲しみとが入り混じった瞳でメイランはまっすぐにメリアナを見る。

「ルルチェルは確かに罪人よ。いくら事情があると言ったってそう簡単に許されるべきとは思わない。でもね……！」

銃を握る手に力が込められる。

「あなたが仲間を売っていい理由にはならないし私はあなたを許す事も理解する事もできない！」

メイランの強い言葉が小屋の中に響く。

「……そう」

メリアナの、冷たい冷たい一言。

「メリアナ。おとなしく私に捕まりなさい。そしてルルチェルがど

こに連れていかれたのかを言いなさい。そうすればまだ助かる道はあるわ……」

メイランが口にする、最後の情け。しかし、メリアナは突然笑いだし、

「助かる道……？私が思い違いをしてなければ、私の助かる道なんてのは、これしかないと思うんだけど……？」

クスクスと不気味に笑いながらメイランを睨む。

「何を言ってるの？メリアナ……」

「分からないの？じゃあ教えてあげるわよ！」

メリアナがそばに置いてあった樽に手をかざす。

「潰れろぉ！」

メリアナの手が勢い良く振りぬかれ、その動きに従うように樽はメイランへと飛んでいく。

「っ！」

メイランは引き金を引き、樽に向け数発の弾丸を放つ。

樽は四散し、中に入っていた赤ワインが辺りに飛び散る。

「アッハハァ！ここであんた殺しとけばあたしが疑われる事はないわよねぇ！ねぇ！」

メリアナはワインの赤を浴びながら言う。

「メリアナ！やめなさい！罪が重くなるだけよ！」

「うるっさいわねぇ。あんたいっつもうざいのよ。一言目にはメイドらしく、二言目には逆に逆にって、ていうかなんなのよ逆にってさぁ！」

メリアナは近くにある机や椅子も、その手の動きで持ち上げる。

「そうよ！あなたもジェミニ様に目を掛けられてるわよね！なんで！？なんであんたみたいな規則に縛られたつまらない女をジェミニ様は……」

メリアナの言葉を遮るように乾いた銃声が数発轟く。

メリアナの持ち上げた机と椅子が木っ端微塵に吹き飛ぶ。

「言いたい事は以上かしら。まぁ、まだあっても困るだけだけどね、逆に」

メイランは銃口をメリアナに向ける。

「なに……？私を撃つの。仲間を撃つっていうの！？」

「仲間……」

メイランはその言葉に、更に目を鋭くする。

「あなたに仲間を語る資格はない。使用人部隊の事もね」

メイランは引き金にかけた指に力を込める。

「や、やめてよ！撃ったらあなただって私とおな……！」

メリアナの右胸部に撃ち込まれた弾丸が、彼女の意識を刈り取る。

「……安心なさい。麻酔弾よ。」

メイランは銃口を下げる。

「ま、これからの裁きの事考えたらどっちが幸福かなんて分からないわね、逆に。……なんてね」

メイランは言いながらメリアナに近づく。

「さて、ルルチェルを追う前に……」

そう言って光る玉を取り出す。

だが、

「や、やめろぉ……」

意識が朦朧としているメリアナが、手を暴れるようにブンブンと振り回す。

すると、小屋全体が震えだす。

「メリアナ！？」

「アハッ……あたしだけなんてそんな淋しい終わりにはさせないわよ」

メリアナはガシッとメイランの足首を掴む。

「やめなさい！メリアナ！」

メイランはメリアナの手を引き剥がそうとするが、時既に遅し。

小屋の屋根が二人に襲い掛かり、その姿は見えなくなってしまった。

……。

……。

ハラキアとクリシアは、手紙を運んできた鳩を追い掛けて、町外れの道を走っていた。

「あれは間違いなくサトリナと『疎通』を交わした鳩ね。追い掛ければ彼女のいる場所まで飛んでってくれるはず」

「相変わらず便利な能力よね」

ハラキアの説明にクリシアが頷く。

サトリナは彼女固有の力として、動物と意思を通わせる力を持っていた。

その力は『疎通』と呼ばれ、いわば動物と人間同士並にコミュニケーションがとれるのだ。

「でも手紙のあの走り書き具合を見ると、あまり状況は良くなさそうよね……」

クリシアは思い出し握る拳に力が入る。

「そうね……。しかもこの方向って……」

二人の目に、ある木造の建物郡が映る。

「ここって……」

「古い倉庫街ね。もう使われていないようだけど」

「……で、ここにサトリナはいるってわけ？」

クリシアは自分達が追い掛けてきた鳩が倉庫の屋根にとまったのを見て言う。

「そのようね……。いくわよクリシア」

「オーケー、ハラキア。うちの隊員誘拐しようなんて奴らをとっちめてやらないとね」

二人は倉庫街へと入っていく。

その頃、その倉庫街に程近い位置に存在する小さな港を持つ町があり、その町唯一の酒場に多くの粗暴な輩が集まっていた。

「久々にデカイ仕事だっつーからよぉ、何かと思ったら軍人の誘拐ときたもんだよ！」

酔っているのか頬を紅く染めた男が上機嫌に言う。

「おめぇ声がでけぇよ。万が一外に漏れたらどうする気だよ？」

隣に座っている男が周りを見る。

「ガハハ！ここにいんのは同じ仕事で集まった奴ばっかりだから大丈夫だってんだ！」

「だからってよぉ……」

「にしてもあの使用人、部隊……だっけか？そこの奴をさらったんだろ？」

「ああ、しかもめちゃくちゃ上玉らしいぜ」

「くぅ～！たまんねぇな！その女むしろ俺に譲ってほしいぜ！」

上機嫌な男はバンバンとテーブルを叩く。

「そりゃないだろ。貴族に秘密裏に売られるって話だろ。こんな場末の酒場に集まるゴロツキにそんなチャンスは来ねぇよ」

「ガハハ！違いねぇ」

豪快に笑い飛ばす男。に近寄る影が一つ。

「おい、その話詳しく聞かせろ」

「あ？なんだお前？」

いつの間にか上機嫌な男の背後に、若い男が立っていた。

「軍人の、しかも使用人部隊が誘拐されるって話、聞かせろ」

若い男は有無を言わさぬ口調で男達に迫る。

「……おいおい兄ちゃんよぉ。これは俺らの仕事の話なんだよ。だからおとなしく家帰って寝てな」

男はしっしっ、と若い男を手で追い返すような仕草をする。

「てめぇらの仕事なんざ知らねぇよ」

若い男は自分を邪険にするその手を掴む。

「おい何しやがんだ、ふざけてっとィテテテテ！いてぇよ！」

掴まれた男の腕は乱暴に締めあげられる。

「はい生きてる証拠！ってわけでやめて欲しかったらはよ喋らんかい」

「分かった！喋る！喋るから！」

男はたまらず腕をタップ。１ラウンド２１秒テクニカルノックアウトです。

「て言っても俺らも詳しい事はあまり聞かされてねえんだよ。とにかく港に集まっていてくれって言われてよぉ……」

「本当か？」

若い男はギロリと睨み付ける。

「ほ、本当だよ！この港から運びだすって事と、後は太陽が昇り切った頃に潰れた桟橋に集まれって……」

「潰れた桟橋？」

「そういう場所があるんだよ。地元の連中しか知らない場所なんだけどよ」

「よし、それだけ分かれば十分だ。お前らはこれ以上痛い目にあいたくなかったら現地には向かわない事をすすめる」

そう言って若い男はにっこり笑顔。しかし目は全く笑っていなかった。

「う、ぐぅ……」

男達はその不気味な迫力に圧され、口をつぐむ。

「さ、てと……」

若い男は一目散に酒場の出口を目指す。

「ちょいと寄り道してくぞ。いいな、ゆめじん」

太陽はもうすぐ大空の頂点に達しようとしていた。

［67］メイドｖｓメイド（後書き）

メリアナは三つ編みヘアーです。

ここで言う事ではないか？

では次回。

［６８］ハラキアの決意（前書き）

暑いっすね。

熱くはないっす。

厚くもないっす。

６８話ですよ。

［68］ハラキアの決意

人が長い間触れなかった倉庫というのは日中といえど独特の不気味さがある。

ハラキアとクリシアは、あの鳩の止まった倉庫に侵入した。

「……うわっ。本当に使われてないのね。……埃っぽい」

クリシアはゴホゴホと咳き込む。

「でも、だからこそ悪党共にはいい隠れ家になるんでしょうけどね……」

ハラキアはそう言いつつ慎重な足取りで先に進む。

「サトリナぁー。いるのー？」

クリシアは呼び掛ける。が、返事は返ってこない。

「……ねぇハラキア？」

「なに？クリシア」

二人は同時に立ち止まる。

「そういえばさ、サトリナが無事に私達の到着を待ってるって確証ってあるんだっけ？」

「……無いわね」

ハラキアが呟くように答えた直後、ガタンッ、倉庫全体が揺れる。

「ハラキア！」

二人のそばに積み上げられていた木箱が雪崩をうって崩れ落ちてくる。

「この程度っ！」

ハラキアは腰を落とし、魔力を込めた掌底の一撃を木箱に打ち込む。

木箱の山は粉々に砕け散り弾かれるように吹き飛ぶ。

「……こうなっちゃう訳ね」

クリシアはやれやれと、周りを見渡す。

「どこにこんなに隠れてたんだか……」

二人を囲むように粗暴な輩がゾロゾロと現れる。

「へっへぇ！てめぇら二人ここで足止めするだけたぁ安い仕事だぜ」

ある者は剣を、ある者は銃を手に二人に迫る。

しかし二人は怯まないし焦らない。

「……ハラキア、あんた先に行きな」

クリシアはハラキアにのみ聞こえる声で言う。

「クリシア？」

「こいつらは時間稼ぎにしか過ぎない。その間にルルチェル運んで って寸法でしょ、どうせ。だったら、あんたは先に行って」

クリシアはいつになく真剣な顔をする。

「……分かったわ。無理はしないでね」

クリシアの胸中の覚悟を読み取ったかのように、ハラキア静かに頷く。

「あたしを誰だと思ってるの？『迅脚』のクリシアよ」

「ふふ……そうだったわね」

二人は少しの微笑みを浮かべた後、再び真剣な表情へと戻る。

「じゃあ、いくわよ、ハラキア！」

「ええ！」

クリシアは大きく飛び上がると、前方に一回転し脚を振りぬく。

彼女の脚から発生した陽炎のようなその魔力による一撃が、周囲のゴロツキ共を直撃する。

「今よ！早く！」

クリシアの声を待たずに、ハラキアは倉庫の出口へと駆け出していた。

「逃がすかよ！」

すがるようにゴロツキ達はハラキアの進路を塞ごうとするが、

「どきなさいっ！」

打ち出された掌底の衝撃波により一人残らず吹っ飛ばされる。

そして、ハラキアは倉庫の出口に辿り着くと、チラリとクリシアの方を振り向く。

「絶対助けてきなさいよ！」

クリシアは迫ってくるゴロツキ共を蹴り倒しながら叫ぶ。

「ええ……」

ハラキアは倉庫の外へと駆け出す。

クリシアはそれを見届ける事なく、さらに攻撃を続ける。

「ひ、怯むな！相手はたかだか女一人じゃねぇか！」

ゴロツキの一人が叫ぶが、それを聞いたクリシアは口の端に笑みを浮かべると、

「あたしをただの女だと思わない方が身の為よ！なんてったって私……」

背後から迫っていたゴロツキを回し蹴りで沈める。

「めちゃくちゃ強いからさ！」

クリシアは怒涛の連撃で次々にゴロツキを倒す。

その様子を倉庫の2階にあたる通路から見ている数人のゴロツキと一人の小柄な男がいた。

「フヒッ……予想以上に強い」

小柄な男、ラグの仲間ドッピオである。

「どうすんだよ、このままじゃあいつ一人に全滅だぜ」

ゴロツキの一人が心配そうに尋ねる。

「フヒッ……安心しろ。切り札を出す」

ドッピオはそう言って別のゴロツキに合図を出す。

すると、そのゴロツキは奥に置かれていた大きな麻袋から何かを取り出す。

「よし、おーい！こっちを見ろメイド！」

ゴロツキは取り出したそれをクリシアに見える様に持つ。

「は？ってあんな所にもい、た……の……」

クリシアはゴロツキが抱えているそれを見て固まる。

「サトリナ……！」

鳩を用いて彼女とハラキアを導いた使用人部隊の仲間、サトリナの姿がそこにあった。

「あんたら！サトリナに何してんのよ！？」

クリシアは怒声をあげる。

「フヒッ……今は動けない、喋れないようにしただけ。この後はお前の態度次第」

「私の態度……？」

ハラキアは訝しげに返す。

「これ以上我々を攻撃すると、等価交換、この女も傷つく……フヒッ」

ドッピオはヘコヘコしながら言う。

「フヒッ……最悪、命を保証しない」

クリシアはその言葉を聞き、脚を止める。

今の彼女の力ではサトリナを傷つけずに救う方法が思い付かなかった。

「フヒッ……物分かりがいいな」

「卑怯者には言われたくない台詞ね……」

クリシアは奥歯を噛み締める。

「フヒッ……。さぁお前ら、その女を、まぁ好きにしろ」

ドッピオが言うとゴロツキ共は形勢逆転とばかりにクリシアに迫る。

「くそ……」

クリシアは舌を打つ。が、現状はクリシアに対して圧倒的に不利だ。

何か、何か逆転の要素は無いかと頭を巡らせる。

しかしその間もゴロツキ達はクリシアに迫る。

「ぐっへへ……。さて、たっぷりお返しといこうか」

そう言ってゴロツキの手が乱暴にクリシアにのびる。

パンッ。

乾いた破裂音が響き、ゴロツキの手の平にポッカリと穴が空く。

「いっぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ゴロツキは手を押さえその場をのた打ち回る。

「え……？」

クリシアも目を丸くする状況の中、更に数発の破裂音が響き、次々にゴロツキ達が倒れこんでいく。

「フヒッ……！？だ、誰だ！」

ドッピオが慌てて周りを見回す中、サトリナを抱えていたゴロツキが、

「うぐっ……！」

と言って倒れてしまう。

同時にサトリナの体も地面に投げ出されそうになる。

しかし、颯爽と登場したその人物の手でサトリナの体はがっちりと支えられる。

「ちょうどいいタイミングだっかしら？逆にね」

「メイラン！」

メイランは二階から飛び降りると、銃を乱射して道を切り開く。

「あなた、よくここが分かったわね」

「ルルチェルが誘拐されたっていう情報は掴んでいたから、後は犯人が辿りそうなルートを来てみたのだけど、ビンゴだったようね」

メイランはサトリナを抱えたまま更に銃で攻撃し続ける。

「誘拐されたってどうやって知ったのよ？」

「……メリアナよ。あの子がルルチェルを売ったのよ」

メイランはあえてためらわずにそう告げた。

「そう……」

クリシアもそれは察したのだろう。それ以上のリアクションはしなかった。

「ちなみにメリアナは外で魔封鎖で縛った上で麻酔で眠らせてるから」

「なかなか寛大な処置するじゃない？あなたにしちゃ」

「いくら私でも仲間をためらいなく殺せるほど心を削った覚えはないわよ」

メイランは安全を確保した上でサトリナの体をそっと寝かせる。

「さて、と……」

メイランとクリシアはゴロツキ共に向き直る。

「これで等価交換は無し……。さて、存分にやりあえるわね、お互いに」

クリシアはかかとをカンカンと鳴らす。

「安心なさい。殺しはしないわ。ただそれ以上に辛い目に逢わせたらごめんなさい……逆に、ね」

メイランは二丁拳銃を構える。

数十人の男達対二人のうら若きメイドの、『対等』な戦いが始まろうとしていた。

……。

……。

ハラキアは走っていた。

手の届かぬ地へ連れ去られようとしている仲間の為に。

自分を信じ戦ってくれている仲間の為に。

そして、ハラキアは辿り着く。その場所へ。

港から少し外れた場所にある桟橋。周りは伸び放題の草木に囲まれ、桟橋自体ももはや壊れかけていた。

しかし、だからこそ、彼女の捜し求めているものはそこに全て揃っていた。

「ああん？誰だてめぇ？」

ぐったりとしたルルチェルを脇に抱え、周りより一回り体格の大きな男がルルチェルを睨む。

「その服装……あぁ、てめぇこいつの仲間か」

男は抱えたルルチェルに視線を落とす。

「今すぐその子を解放しなさい」

毅然とした言葉。しかし、男たちはヘラヘラと笑っている。

「おいおい、この状況でたった一人……。はいそうですかと返すと思うか？」

男は余裕すら感じさせる表情でハラキアをまとわりつくような視線で見る。

「ならば力ずくで奪い返すまでです！」

瞬間、男の視界からハラキアが消える。

「あ……っ！？」

そして驚く間もなく男の体が大きく後方に吹き飛ぶ。

「ラ、ラグの旦那！」

男の取り巻き達がその吹っ飛んだ男、ラグを見て驚きの声をあげる。

「女だからと侮らない方が身の為ですよ」

ハラキアはラグの脇から抜けたルルチェルの体をしっかりと受けとめる。

「て、てめぇ……」

ゴロツキ達は武器を手に取るが、先程の強烈な一撃を見てか皆腰が引けていた。

ハラキアはルルチェルを少し離れた場所に横にさせる。彼女の体をきつく縛り上げていた魔封鎖も外す。

「ごめんなさいね、ルルチェル。私がもっとしっかりしていれば……」

気を失っているルルチェルの頬を優しく撫でると、ハラキアは立ち上がり、男達に向かっていく。

「決して許されるとは思わないでいただきましょう」

ハラキアは掌底の一撃で次々に男達を倒していく。

もはやハラキアが男達を全滅させるのは時間の問題かと思われた。
が、

「グァハァァァァ！」

地を揺らすうなり声と共に、ハラキアに迫る影。

「！？」

気付いた時には遅かった。

ハラキアの脇腹にその拳はねじりこむように強烈に叩き込まれる。

「ぐぅ……っ！！？？」

何かが潰れるような、折れるような音と共にハラキアの体は受けた衝撃のままに吹き飛ぶ。

「かっ……は……っ……！」

口からは血が溢れ、ハラキアは殴られたその場所を押さえながら苦悶の表情を浮かべる。

「はぁ……はぁ……どうだぁ。効いたかよメイドの嬢ちゃんよぉ」

低く唸るような声。それはラグの声で間違いなかったが、ハラキアの視界に映ったのは、先程までのラグとはどこかが違った。

ただでさえ大きな体が更に一回り大きくなり、筋肉と血管が破裂せんばかりに膨れ上がった腕は模様のような痣が浮かんでいた。

とにかく、それは人が自然に生み出せるものではなかった。

「ぐ……っ！」

ハラキアは押さえていた腹部にちらりと目線をやる。

押さえていた部分からは赤く血が溢れ、服の上から染みだしていた。

「こんな時に……あの時の傷が開くなんて……」

あの時、それはつまりモンフェルトの一件においてホーク・マグノスに腹部を斬られたその時の傷であろう。

「それにしても……奴のこの変わり様は一体……」

ハラキアは腹部をかばいながらなんとか立ち上がる。

「おぅおぅ無理すんなよぉ。血がドバドバ出てんじゃねぇかよ」

ラグは血走った目で笑みを浮かべながら言う。

「……血がどれだけ溢れようが、どれだけ傷を負っても、私が負けを認めていない以上あなたには戦ってもらいます」

脂汗が滲み、痛みに歯を食い縛る。叶うならば今すぐに地面に倒れてしまいたい。

「私は負けられない……」

ハラキアはルルチェルを見る。

仲間を誘拐した不埒な輩に制裁を、そしてルルチェルと共に笑顔で送り出してくれた仲間の元に帰る。

ハラキアはその思いだけを胸に構える。

「ハラキア・ロングボルト……参ります！」

［68］ハラキアの決意（後書き）

メイド編が殊の外長くなってます。

ま、伸びるのはいつもの事か！

あっはっは！

では、次回！

［６９］メイドの意地。ある二人の場合。（前書き）

なついです。いよいよあつですね。

……。

なんかもうごめんなさい。

６９話じゃす。

［69］メイドの意地。ある二人の場合。

破竹の勢い。

もし、今この状況を一言で表すならばその言葉が適任であろう。

「でぇいりゃぁぁぁぁ！！！！」

クリシアが回し蹴りで敵を薙ぎ払い。

「うらららぁぁぁぁ！！！！」

メイランの放つ無数の弾丸が敵を貫いていく。

数の差などまるで問題にならない強さと勢いで二人はゴロツキ共をとんでもない早さで潰していった。

「はん！さっきまでの威勢はどこにいっちゃったのかしら、ね！」

クリシアはゴロツキにかかとの一撃を見舞いながら言う。

「そういう言い方をしては失礼よ、逆にね！」

負けじとメイランも近づいてくるゴロツキの顔面を銃身で殴り付ける。

そして、先程まで数えるのも面倒な位存在したゴロツキ共は、もはや立ってる連中の方が圧倒的に少なくなっていた。

「さて、さっさと終わらせてハラキア追っ掛けるわよ！」

クリシアは構え、一気に駆け出す。

「……！待ってクリシア！！」

「え？」

突然のメイランの呼び掛けにスピードを緩めるクリシア。

「……っ！？」

そのクリシアの頬に、スッと細く赤い線が入る。

「何よ、これ……？」

クリシアは突然現れた頬の切り傷に手をやる。

「糸よ……いつの間にか誰かが目に見えない糸を張っていたのよ」

メイランは冷静な口調で分析する。

「糸って……誰がそんな」

「私がやったのですよー。お嬢さん方ー」

突如響く間延びした声。二人の前に、真っ白なスーツに身を包んだ細身長身の男が現れる。

「しかしこうも早くばれるとは思いませんでしたー。あと少しだったんですがねー」

男はゆらゆらと首を揺らしながらクリシアを見る。

「あと少しでお嬢さんの首を落とせたんですがねー」

そう言ってケタケタと遊びに興じる子供の様な笑みを浮かべる男。

「……なんかやばそうなのが出てきたわね」

クリシアは背筋に走る寒気に苛立ちを覚えつつ、男を睨む。

「おっと、申し遅れましたねー。私は、ラグ・トルネード配下のトールという者ですよー」

そう言ってトールは優雅に頭を下げる。

「で、あそこにいるのが同じくドッピオという者です」

トールは二階にいる黒いローブに黒いターバンを身に付けた小柄な男、ドッピオに顔を向ける。

「フヒッ……頼んでもいないのに紹介された」

そう言いながらドッピオはピョンと二階から飛び降りてくる。

「というか黙ってればもっと奇襲出来たはずじゃないのか？……フヒッ」

「おー、そうかもしれませんねー。これは失敗でしたねー」

トールはトン、と自分の額を軽く叩く。

「なーんかまた訳の分からないのが出てきたわね」

クリシアは頬の血を拭いながら言う。

「何人出てこようとも、私は引き金を引くだけ。やることは変わらないわ」

メイランが目を妖しく光らせながら銃を構える。

「珍しく良い事言うじゃないの」

「あら？あなたが人の話を聞いていないだけで私は常に良い事しか言ってないわよ」

メイランはふふん、とクリシアを見下すような目線。

「カチン……いい感じでまとまりそうだったのに……」

クリシアははぁとため息をつく。

「そんなのいつもの事じゃない。私は逆にこっちの方が調子が出るわ」

「……残念ながら私もあんたとはこのくらいがちょうどいいようだわ」

クリシアとメイランは互いに目を合わせ、示し合わせるように笑みを浮かべる。

「さぁいくわよ！あたしに流れ弾ぶつけたら蹴り飛ばすからね！」

「あなたこそ私の攻撃の邪魔にならないように精々頑張ることね！」

「言われなくとも！」

クリシアは大きく体を回転させて、その勢いのままに足を振り抜く。

クリシアの足先から発生した白い烈風がトールとドッピオに向けて駆け抜ける。

その途中、ブチッブチッと何かが切れる音が混じる。

「おー。私が仕掛けたトラップ達が破られてしまいましたねー」

トールは間延びした声でそう言いつつ口調からは想像出来ない素早い動きで烈風を避ける。

「フヒッ……奴らもバカではないってことだな」

ドッピオもピョーンと跳ねて烈風を避ける。

「逃がしはしないわよ！」

飛び上がったドッピオの小柄な体をメイランの放った無数の弾丸が貫く。

「ちょっと！いきなりやりすぎじゃないの！」

クリシアはその様子を見て驚きの声をあげる。

「大丈夫、急所は外したわ。それともあなたは無駄に時間かける戦いの方が好みかしら?逆にね」

メイランは言いながら得意げに銃をクルクルと回す。

「フヒッ……油断大敵なり」

瞬間、空中で無残な姿になったドッピオの体が風船に針を刺したかのようにパンッと破裂して消えてしまう。

「え……っ?どういう……っ!?」

言い掛けたメイランの背中に、強烈な衝撃が走る。

「っ……かっ……!」

メイランは前のめりによろめく。

「フヒッ……だから言った、油断大敵だと」

メイランの後方、そこには鞭を構えた無傷のドッピオが立っていた。

「メイラン!」

クリシアはメイランに駆け寄ろうとするが、

「あなたは私が足止めさせてもらいますよー」

トールとトールの手から伸びる細い糸に阻まれる。

「でもどうしても行きたければどうぞー。到着する頃には五体がバラバラですけどねー」

「趣味の悪い戦い方するわね……！」

クリシアは苦々しく言う。

「ご安心をー。自覚しておりますからー」

トールはにっこりと笑う。

「だったら尚更始末が悪いわね！」

クリシアはトールの足元に蹴りを繰り出そうとするが、

「！？」

その足元に張り巡らされた糸が光に照らされるのを見てその動きを止める。

「あなたはどうやら近接戦が得意なようですので対策は打たせてもらってますよー」

トールはすっとクリシアに手を向ける。

「なにを……っ！？」

瞬間、クリシアの足から血が溢れだす。

「そして私は罠を仕掛けるだけではない男なのですよー」

ヒュンッ、とトールの指先で糸が踊るようにしなる。

「うざったいわね……あんた本当うざったいわ」

クリシアは痛みに表情を歪めつつも、鋭い眼でトールを睨む。

「きれいな女性に睨まれるとゾクゾクきますねー」

トールは言いながら両手で糸を操る。

「こうなるともっと傷つけたくなっちゃいますねー」

「させないわよ！」

クリシアは地面を蹴り飛び上がると、そのままトールから距離をとる。

「そういえばメイランは……？」

クリシアが戦っているはずの仲間の姿を探す。

「ハァ……ハァ……」

そのメイランは肩で息をしながら、その身にいくつもの傷を負いながらも銃を構え立っていた。

「フヒッ……お前しぶといな」

ドッピオは鞭をしならせながらヘコヘコと喋る。

「的が多すぎるのよ……逆に狙いにくいわ」

メイランは辺りを見渡す。周りにはドッピオが１０人以上いた。

「フヒッ……本物は一人だけ。早く当てなきゃ身が持たない」

ドッピオ達はメイランを撹乱するようにピョンピョンと跳ね回る。

「……」

メイランは俯き小刻みに体を震わせる。

「フヒッ……お手上げか？」

ドッピオ達は鞭を構えメイランに仕掛けようとする。

が、先に仕掛けたのは、

「……アァァァァ！！！！」

いきなり叫びだしたメイランであった。

「フヒッ……？」

いきなりの奇声に驚くドッピオ。

「あんたうざった過ぎるのよ！逆が逆になってもう怒ったわよ！」

もはや何を言っているのかはよく分からないがメイランは銃を構えると、体を回転させながら銃を乱射する。

「ちょっ！メイラン！？」

クリシアは流れ弾を食らわないように物陰に隠れる。

「フヒィッ！」

ドッピオ達はメイランの攻撃により次々に破裂して消えていく。

「……フヒッ。だが甘い」

残りの一体、本体であろうその一体はメイランの背後で鞭を構える。

「フヒッ……この距離なら」

ドッピオは鞭を振るう。

「甘いのあんたよ！」

メイランはドッピオとの距離を詰める。

「フヒッ！？」

「鞭は先端を当ててこそ十分な威力を得られる強力な武器。つまり……」

メイランは振るわれた鞭に銃を当て、銃身に鞭を巻き付ける。

「極端に近づけば十分な威力は得られない。知ってたかしら？」

「フヒッ……くっ！」

ドッピオは鞭を引っ張るが、まるで動かない。

「さて、さっさと終わらせましょうか」

メイランはドッピオにもう片方の銃を突き付ける。

「この銃は私の魔力を材料に弾が生成されるの。だから弾の性質も威力も自由自在……」

メイランは引き金に力を込めながら続ける。

「今仕込んでる弾は、射程距離度外視の威力最重要視の一発。逆にと言わずもはや暴発の域の一発ね」

「フヒッ！？」

ドッピオは慌てて鞭を手放す。

「遅いわよ！」

瞬間、メイランの銃口から『爆発』が噴き出し、ドッピオの体を焼き飛ばす。

「あたしにここまでさせるなんて逆にすごいわよ、逆にね」

メイランはフッ、と銃口を吹く。

「盛大にブチキレといて何言ってんだか……」

クリシアはメイランの様子を見ながらやれやれと肩をすくめる。

「よそ見とは余裕ですねー」

クリシアの背後からトールが糸を張りながら迫る。

「……馬鹿にしないでくれる？」

クリシアはトールには一切顔を向けずに、脚を振り抜き烈風の一撃を放つ。

「おっと！？……これはこれは危なかったですねー」

トールは寸前のところでそれを避ける。

「今のが危なかった？じゃあこれはなんて言うのかしら、ね！」

クリシアはもう一回脚を振りぬく。

「その技はもはや避けるのはかんたぶへふぉ！！？？」

避けようとしたトールの顔面に、烈風の一撃が当たる。

「な、なにが……あぐふぅっ！」

トールの手に足に胴体に、次々とクリシアの攻撃が当たる。

トールはよろめき膝をつく。

クリシアはその様子を鋭い眼で見下しながら、カンカンと踵を鳴らす。

「さて、あんたにはあたしの脚が何回動いたように見えた？」

クリシアは踵を鳴らしながら異様な迫力でトールに迫る。

「な、なにを……どう見ても一回しか……」

「残念、１２回よ」

クリシアは間髪入れずに答えると、『もう一度』脚を振りぬく。

「馬鹿な……！今ので１０回以上ふぶぅっ！」

無数の烈風が再びトールの全身を捉える。

「あたしやハラキアなんかはね、魔力を身体能力の強化に使うことに長けているタイプなの」

クリシアは何度も脚を振りぬく。

「魔力を使えば本来なら体が耐えきれない速度で動く事も出来るってわけ。お分りいただけたかしら」

クリシアの無数の烈風を受け、小綺麗な身なりをしていたはずのトールは、ボロボロになり肩で激しく息をしていた。

「なるほどぉ……メチャクチャなメカニズムですねぇ。しかし手の内を明かすのは関心出来ないですね！」

トールは無数の糸を周りに張り巡らし、更にクリシアに向け何本もの糸を放つ。

「さぁ！その素早く動く脚で私の攻撃を掻い潜れますかー！」

トールは叫ぶ。が、そんなトールとは対照的にクリシアは冷ややかにその様子を見る。

「もう一度だけ言うわ……」

クリシアはその脚を、

「馬鹿にしないでくれる！」

『一回だけ』振りぬいた。

「な、なんとぉぉぉぉ！！！！」

クリシアの脚から放たれた白き巨大な烈風はトールの糸を蹴散らし、トール自身を紙屑の様に吹き飛ばす。

「さぁ、一丁あがりっと……」

クリシアはそう言うとへたりとその場に腰を下ろす。

「あー……大分消耗してるわ」

頭をおさえ、息を荒くする。

「やっと片付いたみたいね」

メイランがクリシアに近づく。心なしかメイランの歩き方が少しフラフラしているようにも見える。

「……むしろあんなのに苦戦した自分が恥ずかしいわね」

クリシアはフゥとため息をつく。

「嫌味の一つも言いたいけど……。私も人の事は言えないわね」

メイランはクリシアの隣に崩れるように腰をおろす。

「調子に乗って撃ちすぎたわ」

「そう？でもお陰で大分楽に戦えたわ……ありがと」

「！？」

クリシアの言葉に驚きの表情を浮かべるメイラン。

「……何驚いてんのよ」

「だ、だって、あなたが素直にお礼を言うなんて……」

メイランがなおも驚きを引っ張りながら言うと、クリシアはがくりとうなだれる。

「あのねぇ……あたしだって礼くらい言えるわよ」

「そ、そうよね……ごめんなさい」

「!?」

今度はクリシアの表情が驚きに染まる。

「……何？」

「いや、あんたが素直に謝るなんて……」

「……あなたの中のあたしのイメージも大概みたいね」

メイランはため息をつく。

「……ねぇ、聞いていい？」

「何を？」

クリシアはメイランの方を向く。

「あんたどうしていつもあたし達を気遣ってくれるの？」

「え……っ」

余程意外な質問だったのだろう。メイランは言葉を止め固まってしまう。

「気付いてないとでも思った？あたしも、多分ルルチェルもとっくに気付いてるわよ。あんたがあたし達の為に色々動いてくれてたこと」

クリシアは淡々とした調子で喋る。

「あたしやルルチェルは高貴な家の出でもなんでもない。むしろ一般の水準よりも低いところから突然現れた。良く思ってない連中も結構いたわよね」

「……」

メイランは黙ってクリシアの話を聞く。

「見下してくる奴もいれば家の事を気にして必要以上の繋がりを持とうとしない奴だって結構いた。でも、そんな中であんたは誰とも違っていた」

クリシアは穏やかな顔でメイランを見る。

「対等だった。他の連中との接し方と微塵の差も感じない程に対等だった。……まぁ、時々私怨としか思えない恨み言ぶつけてくる時もあるけどね」

「……最後のは余計よ」

「あっはは……。でもあんたがそうやって他の連中との突破口を開いてくれたから、あたし達は今仲間と仲間でいられてる」

クリシアはふっ、とメイランに笑い掛ける。

「……最初は同情だったわ」

「え？」

メイランは突然静かに語りだした。

「あなたとハラキアに初めて会った時、他の人とは何か違うものを感じていたわ」

メイランは思い出しながらポツリポツリと言葉を紡ぐ。

「隊長達はあなた達の入隊の経緯を変に隠しはしないまでも進んで表に出そうとはしなかったわ。でもそれでもどこかから、僅かな隙間から情報は漏れていったわ」

どこから漏れたんだかね、とメイランは苦笑する。

「使用人部隊の反応は大きく二分したわね。同情派と反発派と。私は最初は前者だった」

「あんたが同情。あまり想像つかないわね」

「……話が進まないからとりあえず聞き流すわね。同情派はとにかくあなた達に気を遣い、反発派はとにかくあなた達を毛嫌いした。……でもね、私ある日気付いちゃったのよ。これってどちらも上からの見方よねって」

「まぁ、あまり気持ちのいい感じではなかったわね」

「一方は『あら可哀相な方々』、一方は『素性も知れぬ馬の骨が』だからね。要は自分達の生まれの良さを鼻に掛けたかったのよ。あなた達という比べやすい材料を天秤に掛けてね」

メイランは少しだけ苦々しい表情になる。

「だけどね、私も含めお高くとまった連中とあなた達を比べて確実に勝ってるのは『生まれ』だけ。いえ、それだって勝ち負けの概念で括るべきものでもないはず」

「……」

「それに私は悔しかった。いくら連中の考え方に憤ろうが、私自身が上からである以上私もその括りからは逃れられないと、ね」

「……そんなこと考えてたんだ」

「だから私は開き直る事にした。開き直ってあなた達と正面からぶつかることにしたの。生まれも何もかも関係ない、実力の勝負をしたかった」

「あんたもあれね。無駄に真面目な性格ね」

クリシアは呆れたような笑ってるような不思議な表情を浮かべる。

「そうかしら？」

「だって普通はわざわざ自分の誇りをかなぐり捨てるような真似はしないわよ。普通わね」

「普通を強調するのはやめて。……ま、私の独白はそんな感じよ」

「独白なんだ？」

「そうでも言わないと恥ずかしいじゃない」

メイランは今まさにそうなんだとばかりに口を尖らせる。

「いいじゃない。たまにはそういう感じも出した方がいいわよ。逆にね」

「逆に？」

「じゃないときっつい女枠で終わっちゃうわよ？」

「……方針を考え直した方がいいのかしら？」

メイランは頭を抱える。

「ま、そんな事よりさっさとハラキア追っかけますか……」

クリシアはゆっくりと腰をあげる。

「そうね……今はそれが最優先ね」

メイランもクリシアに倣い立ち上がろうとする。が、

「あら？あらら……？」

へたり、とその場に腰を落としてしまう。

「魔力の使い過ぎかしら。参ったわね……」

「……たくっ。ほら」

クリシアはすっ、とメイランに手を差し出す。

「……ありがと」

メイランはその手をしっかりと掴み、なんとか立ち上がる。

立ち上がったところで、クリシアは恥ずかしそうに笑顔を浮かべて、一言だけ口にしたという。

「どういたしまして」

と。

［６９］メイドの意地。ある二人の場合。（後書き）

熱中症に気をつけましょう。

まともな事を言ってみました。

では次回。

【70】ハラキア、力を振るう（前書き）

70ー！

話ー！

ですよー！

はいではどうぞ。

［70］ハラキア、力を振るう

謎の変化を遂げたラグと対峙するハラキア。

威勢よく宣戦をしたものの、状況はあまり芳しくなかった。

先程の一撃により傷は完全に開き、血は流れ更に痛みと熱を持っていた。

「さすがは帝国軍の精鋭ちゃんってかぁ……！だがこちとら時間がねぇんだよ。遊んでやってる暇はねぇんだよぉ！」

ラグは雄叫びをあげながらその巨体を揺らし、ハラキアに迫る。

「さぁ……勝つのよ、ハラキア・ロングボルト……！」

ハラキアは痛みを堪えつつ戦闘の構えをとる。

ラグはハンマーの様に腕を外から回すように振りかぶる。

「その綺麗な顔潰してやんよぉ！」

ラグは勢い良く腕を振りぬくが、果たしてその一撃はハラキアには当たらなかった。

「ご丁寧に狙いを宣言されといて当たってあげる程お人好しではないので！」

ラグの拳が振りぬかれる直前にその場にしゃがんでいたハラキアは、

その態勢から自らの掌底をラグの顎を目がけて振り上げる。

「がぶふぉ！」

クリーンヒット。ハラキアの一撃をまともに受けたラグの体は少し宙に浮く。

「ぐっ……！」

ハラキアは苦痛に顔を歪める。激しい動きは傷から激痛を引き出す。

「……っはぁ……今倒れる訳にはいかない」

ハラキアは歯を食い縛る。

「奇遇だなぁ！俺もだよ！」

顎を打ち抜かれ顔ごと真上を向いていたラグの首がガクンと戻る。

「なっ……！」

傷の事があるとはいえ、今のはほぼ全力の一撃。しかしラグは倒れないどころか口の端に笑みすら浮かべている。

「うっはぁ！すげぇなぁ、あれの効果はよぉ！」

ラグは高らかに笑いながらハラキアの脇腹に向け蹴りを放つ。

「あぁっ……！」

ハラキアは腹部に走る激痛に声をあげる。

「なんだか知んねぇがお前そこが弱点みたいだからな。遠慮なく攻めさせてもらうぜぇ……」

ラグは倒れたまま苦しむハラキアの腹部を踏みつける。

「おぐぉっ……！」

ハラキアの口から大量の血が吐き出される。

「クカカカカ！！いいね、いいねぇ！最高にゾクゾクさせられるなぁおい！」

ラグは狂ったようにハラキアを何度も何度も踏み付ける。

「おい！どうしたメイドの精鋭さんよぉ！お前仲間救いに来たんだろぉ？逆にやられちゃっていいんですかぁ？クカカカカ！」

ラグはハラキアの体を蹴り上げる。

ハラキアはそのまま放物線を描き、ゴロゴロと不様に地面に転がる。

「ク……クカカカカ！！これだけ血を見てるとあの時とかあの時とかよぉ」

ラグはゆっくりとハラキアに近寄りながら喋りだす。

「観光船を襲った時なんかよぉ。逃げ回る女子供を追い掛け回してよぉ。クカカ……子供だけは助けてって泣いて頼んでくるからよぉ

……慈悲深い俺はどうしてやったと思う？」

ラグはハラキアに問うているのかわざとらしく間を空ける。

「母親の目の前で子供の首掻き落としてやったんだよ！最っ高だったぜぇ！絶望する母親じわじわ殺すのも良かったがなぁ！」

ラグの目が楽しげにどす黒く光る。

「後はそうだなぁ……。大分前だが町外れの宿を襲った時もあったなぁ」

ラグは思い出すようにあごに手を添える。

「最初は外れだと思ったんだがよ。中にいた客も宿の主人も全員殺した頃によ。ガキが一人現れたんだよ。よほどショッキングな光景に映ったんだろうな、ガクガクブルブル震えてやがってよ」

ラグはその目に妖しい光を宿したまま笑う。

「どうやらそのガキの親を殺してたらしくてよ。そのガキだけ残すのは忍びねぇと思った俺はすぐに親の元に送ってやったのよ」

「……」

ハラキアは息も絶え絶えに、しかし意識をしっかりと保ちながらラグの言葉を聞く。

「殺し以外じゃなんの収穫も無いと思ったんだがよ、部屋にまだガキだがなかなか将来が見込めそうな奴が隠れててよ。そいつを手土

産に引き上げたんだよ」

ぴくっ。とハラキアの手が動く。

「ありゃあ売り飛ばせば高値で取引されたはずなんだがな……てめぇと同じメイド野郎に邪魔されたってわけだよ……なんつったかな、赤髪の……」

「シルビア・ランドガルト……」

ハラキアは淀みなくその名を口にする。

己の恩人の名を。

そして睨み付ける。家族を奪った敵を。

「あぁ？なんだ、有名な奴なのか、やっぱり」

ラグは余裕の構え。

「有名です。あの方はお前なんかが軽々しく口にしようとしてはいけない」

ハラキアは地面に倒れたままでもラグを睨み付け、しっかりと言葉を紡ぐ。

「そしてもう一つ教えてあげましょう……」

ハラキアは全身に力を込め、ゆっくりとしかし確実に立ち上がる。

「てめぇ、まだそんな力が……！」

「よく見ておくことです。１０年前、あなたに家族を奪われた者の姿を……！」

ハラキアは荒く息をしつつ、しかししっかりとラグと正対する。

「……マジかよ」

ハラキアの言葉の意味するところに気付いたのであろうラグの眼光が鋭くなる。

「軽々しく思い出話なんかするもんじゃねぇなぁ……そう思わねぇか？」

「いえ、その話を聞けたお陰で立ち上がらねばならない理由が一つ増えました。むしろ感謝いたします」

ハラキアは戦いの構えをとる。

「けっ。親兄弟の敵を前に熱くなるってか……俺の大嫌いな展開だな」

「ではむしろ倒れる訳には参りません」

ハラキアはいつもの掌底ではなく、両の拳をギュッと握り締める。

その時、ハラキアの中にとある過去がフラッシュバックしていた。

ハラキアに戦いを教えてくれたのは、命の恩人でもあるシルビア・

ランドガルト。

彼女はハラキアに事ある毎にある教えを説いていた。

「いい？ハラキア。拳っていうのはね、握ったり開たり、それだけで意味が生まれるのよ」

そう言ってシルビアは自身の拳をぐっと握る。

「拳は握れば力が宿る。握った拳はそのまま『力』の象徴になるのよ」

次にシルビアは拳をぱっと開く。

「逆に開いた拳は掌となり、自分の持つものを相手に曝け出すという意志になるの」

シルビアは握ったり開いたりを繰り返す。

「握ったまま、ただ力を振るうだけではダメ。かといって常に開いて自分の全てを見せようとすればその負荷に耐えられず瓦解する。……ま、何が言いたいかって言うとね、あなたには力だけではなく心ばかりが先走らない、そんな強い人になってほしいの」

そう言ってシルビアは微笑み、ワシワシとハラキアの頭を撫でる。

最後にその教えを受けてからどれくらいの時が経ったのか分からない。しかしハラキアは鮮明にシルビアの教えを思い出していた。

「シルビア様……あなたの教えは今もはっきりとこの心に刻まれて

おります」

ハラキアは拳を握り締めたまま、構える。

「今こそただ『力』を振るう時。私は『心』を捨てて目前の敵に挑みます」

ハラキアは腹部の傷から血が滴り落ちるのも気にせずにただ構えに集中する。

「何をごちゃごちゃと……しかし立ち上がるってんならちょうどいい。10年越しの恨みを堂々と晴らさせてもらうぜ！」

ラグは地を蹴りハラキアに迫る。

振り上げられる巨大な拳。その様子をハラキアはじっと見つめる。

「死ねぇ！」

ラグの拳が振り下ろされる。

ズォンッ。という大気を震わす轟音が鳴り響く。

次の瞬間、ラグの体は弾丸の如き速さで吹き飛び、近くの丸太小屋に突っ込む。

小屋はラグという巨大な弾丸により粉砕し、ラグ自身もその瓦礫の中に埋もれる。

ハラキアの『力』。その固く握られた拳の一撃がラグを捉えた。

ハラキアはラグの吹っ飛ぶ様を見届けると同時に、その場に崩れるように両膝を付く。

「はぁ……はぁ……くっ」

意識が朦朧としていた。目の前の景色が霞んで見える。いくら呼吸をしても息苦しさが拭えない。傷口も熱を持ち始めた。

ハラキアは己の体の限界に気付きつつも、しかし思考は助けるべき仲間、ルルチェルに向けられる。

「ルルチェル……」

ハラキアはルルチェルの方に行こうとするが、体は全く動かなかった。

戦いは終わった。なのに自分がこんな有様では助けるどころではない。

ハラキアは一縷の望みとしてクリシアが追い付いてくれる事を考えた。

となると後は時間との戦いか。とハラキアは考えた。

だからこそ、丸太小屋の瓦礫が崩れた時、そしてそこから倒したはずの敵が現れた時、ハラキアは驚愕の中に生まれる絶望を全身に感じた。

「ハァッハァッ……やってくれたなぁおい……」

立ち上がった敵、ラグは苦しげに息をしながらハラキアを睨み付ける。

「正直よぉ……意識ぶっ飛ぶかと思ったぜぇ……。だが残念だったなぁ」

ラグの顔が不気味に歪む。

「俺は立ってるぜぇ……」

ラグは懐を探ると、何やら小さな布袋を取り出す。

そしてそこから何粒かの錠剤のようなものを取り出す。

「こいつぁよぉ……。『狂気の薬』って呼ばれるもんでよぉ……。飲むだけでどんだけ貧弱な奴でも化け物並の力が得られるって代物なんだよぉ……」

ラグは手の平の『狂気の薬』を見つめる。

「俺はさっき一粒飲んだんだよぉ……。それだけでてめぇをここまで追い詰めたぁ……。てことはだ、今フラフラの俺でもよぉ……。こいつをまた飲めばよぉ……」

ラグは薬を一気に口に放り込む。

「……っ。てめぇを殺せちまうよなぁ！！」

ドクンッ。ラグの喉が薬の通過と共に上下する。

その様子を見ながら、ハラキアは思い出していた。

銃騎兵団内で行われているという怪しげな研究の噂を。

大いなる力を得るが、その代償に己の命を削るという悪魔の薬の存在を。

しかしハラキアの中には疑問が沸いてきて絶えなかった。

自分は魔術兵団内でも立場の高い方に位置する存在。

その自分が真偽の定かではない噂程度にしか情報を掴んでいない物を、一介の人さらいの賊がいくつも持っているなどという事があるのだろうか。

しかし目の前のラグ・トルネードという存在は、破裂せんばかりに体は膨れ上がり、人知を超えた何かを手にしようとしていた。

だが、ハラキアの目にはラグが何かを得ているというよりも、何か大事な物を失っているように見えた。

「ウゥッ……。ブッ殺ス……！」

ラグは焦点の定まらぬ目でハラキアを見ると、激しく音をたてて呼吸をしながらその鉄球のような拳を振り上げる。

ハラキアは力の入らぬ意識と体の中で、『死』を意識する。

動こうにも体は言う事を聞かない。意識も段々と薄れていっている。

ラグの拳が振り上げられる動作も、ハラキアの目にはスローモーションのように見える。

そしてハラキアの脳裏に今までの記憶がフラッシュバックする。

ああ、これが走馬灯という奴か、などとハラキアは考え、己の記憶が提供する映像に思いを馳せる。

家族との思い出。

帝国軍、使用人部隊での思い出。

そして、クリシアとの出会いの思い出も当然含まれていた。

ラグらに捕まっている時、クリシアは自分を元気づける為か、色々な話をしてくれた。

ラグの振り上げた拳が、力を最大限に発揮する為の最高点に達する。

『お話だったらさ、こういう時にさ、かっこいい英雄が助けに来てくれるんだけどね』

なんて、うっとり気味に話してくれた事もあった。

ラグの拳がハラキア目がけゆっくりと振り下ろされていく。

『英雄だよ。悪い奴らが悪い事しようとするとさ、どこからともなくやってきて悪い奴らを倒して助けてくれるのよ』

そんなものは夢物語だと思う。そんな都合のいい英雄は現実にはいるはずがない。そう思っていた。

ラグの拳は加速し、ハラキアの頭部を目指す。

でも願うなら、願ってもいいのなら、まだ見ぬ都合のいい英雄がいるのなら……。

ハラキアの目から一筋の涙が伝う。

助けて……ください……！

「大丈夫かハラキア！？」

それはある者にとっては不幸で、ある者にとっては奇跡なのだろう。

不幸とはハラキアを粉砕しようとした拳を止められたラグに当てはまり、

奇跡とは都合のいい英雄が現れ助けられたハラキアに当てはまる。

「キリ、ハラ……さん」

ハラキアは様々な感情が入り混じった震えた声でその名を呼ぶ。

「おぅ！遅くなってすまんかった」

呼ばれた男、桐原慎吾はハラキアに力強い笑顔を向けた。

［70］ハラキア、力を振るう（後書き）

キリハラさんがログインしました。

では次回。

［７１］音速の終止符（前書き）

暑くて眠れなくて、

でも寝ないと翌日辛くて、

という夏の事情は全く関係ない７１話でごんすよ。

［71］音速の終止符

「誰ダ、貴様……！」

俺に拳を止められてよほど不機嫌なのだろうか、男が青筋立てながら鬼気迫りそうな声で聞いてくる。

「てめぇが名乗ったら考えてやるよ」

俺がそう返すと、その答えでは不満なのか男はもう片方の腕を俺に向かい振り込んでくる。

「乱暴な挨拶だなおい！」

俺はその巨大なフックの一撃を、奴にならいもう一本の腕で防ぐ。

「ウグッ……！」

男はうなりながら力を増してくる。

「うぉっ……！まさに馬鹿力ってか……！」

俺を押し込もうとするその力に、ジリジリと追い詰められていく。

「だが負けん！」

俺は大きく息を吸い込むと、その空気を体内で圧縮する。

「……ブァッ！！！！」

圧縮された空気を一息に口から発射する。

【圧縮空気砲弾】

そのエコロジーな一発は、男の腹部に突き刺さるように命中し、そのまま男の体を吹っ飛ばす。

「ふぃ～、本当やれば出来るもんだ」

俺は奴との力比べでジンジンと痺れるように痛む両腕をプラプラと振る。

「キリハラ、さん……」

「おぅ、ハラキア大丈夫か……ってすげぇ血が出てるじゃねぇか！」

ハラキアの腹部は既に血にまみれ、更に傷口からは新しい血が溢れ出していた。

「キリハラさん……どうして……？」

ハラキアは自分の傷の事などスルーしての疑問符返し。

「どうしてって……。近くの酒場でお前らの誰かが誘拐されたって聞いてな、そいつは一大事と飛んで来たって訳よ」

途中で少し迷ったのは内緒だ。

『私がいなければ着いてたかも怪しいですね』

うるさいゆめじん。そして道案内ありがとう。

『ツンとデレの間尺が短くてびっくりしました。どういたしまして』

と、俺とゆめじんがいつも通りのやりとりをしていると、ハラキアがなぜか本格的に泣き出しているのが視界に入る。

「えっ？えっ？ど、どしたの？」

突然過ぎて混乱する俺。ハラキアは涙を拭いながら俺に真っすぐに目を向けてくる。

「どうして、どうして私達の誰かが誘拐されたと聞いて、あなたがやってくるんですか……？あなたにとって私達は」

「何言ってんだよ？」

「え？」

ハラキアが言い掛けた言葉。それが分かったから、俺はそれを遮る。

「ハラキア達との出会いは確かに敵対的なものだったが、今は違うだろ？」

そう、最初は確かに戦う理由がばっちり揃ってる敵同士だった。

だが、モンフェルトの一件を経て、少なくとも俺の中ではその認識は変化していた。

「俺達拳を交わした仲じゃん」

俺は握り拳を作り、ハラキアに向ける。

「そして俺が助けたいと思ってやってんだから有無は言わさねぇよ」

ヌハハ。と我ながら奇妙な笑い声をあげる。

「……なんなん、ですか……あなたは」

ハラキアは涙混じりにそう言う。

その体はフラフラでいつ倒れてもおかしくはなさそうな印象を受けた。

「……よし」

俺は手の中にエネルギーの玉を作ると、それを真っすぐ上空へと投げる。

玉は上空で制止し、破裂音と共に激しく光る。

「……よし、とりあえずの目印としちゃまずまずだろ」

俺はハラキアの仲間達がこの即席花火に気付いてやってくる事をとりあえず祈る。

「俺に医学の心得が多少でもあればな……」

俺の力ではハラキアの傷は治せない。だったら早く仲間に駆け付け

てもらうしかない。歯がゆいが今はそれしか出来ない。

「それと……」

俺は桟橋に転がっていた男の巨体がゆっくりと立ち上がるのを視界の端に捉える。

「ハラキア、もうちょっと我慢してくれよ……今助けが来るからな」

俺はハラキアにそう言うと、男に対し正対する。

「そんでもってあいつを一瞬でぶっ飛ばしてくるからよ」

男は息も荒く大きく見開いた目で俺を見ながらこちらに向かってくる。

「この俺を……このラグ・トルネードを、倒そうってかぁ……？」

「そうか、お前ラグっていうのか。そのつもりだけどなんか文句あるか？」

俺はラグとの距離を詰めながら挑発的な口調で言う。

「大有りだなぁ……。てめぇみたいなチビにやられっかよぉ！」

ラグはいきなり殴りかかってくる。

「なにをぅ！」

俺はその巨大な拳を掴むように受けとめる。

「ウァラァッ！」

ラグはもう一方の拳も飛ばしてくる。

「させねぇよ！」

こちらも手を広げ受けとめる。

「潰す！ここで潰してやるよぉ！」

ラグは唾を飛ばしながら叫ぶ。

「どの口がそんなことほざきやがるんだ、あぁ！」

凄まじい力で俺を押し込もうとするラグに対し、俺は今度は真っ向から力で対抗する。

「ふんぎごがぁっ！！！！！」

（注：俺の力む声）

俺は力にものを言わせた全力でラグの腕を捻り上げる。

「ガァッ！？」

ラグの顔が痛みに歪む。

「痛いか？だが残念だったな。こっからはもっと痛いぞ！」

俺は体ごと両腕をぐるんと回す。

「ウゴガッ！？」

自動的にラグの体も回転する形になる。

「大回転からのー！」

俺は宙に浮く程に回したラグの体を脳天から、

「大落下ーっ！」

させた。

大地が震えラグを中心に地面に亀裂が走る。

「参ったかこの変態マッチョが」

という悪口が良くなかったのかは分からないが、間違いなく脳天直下の一撃を食らったはずのラグの体がギシギシと油の足りないロボの様に動きだす。

「……こいつも常識外れのタフネス野郎ってか」

言う間にラグは地面から頭を引き抜き立ち上がる。

「グァフッ……ガハァッ……」

だがさすがにダメージは蓄積されてる様でラグの俺を遥かに凌駕する巨体は、グラッグラに揺れていた。

「貴様ッ……一体何者だ……っ！」

ラグはその不気味に見開かれた眼で俺を睨んでくる。

しかし俺は怯まない。大分悪党のそういう『恐さ』に免疫付いたんだろうな。

だけどまぁ、今はそれ以上に……

「通りすがりのやれば出来る男だ。覚えておかなくてもいいぞ」

ハラキアを傷つけたこの男に対する怒りが恐怖に勝っているからだけどね。

「ふ、フザケルナァッ！」

ラグは両手を広げ獣の様に襲い掛かってくる。

「ふざけちゃいないさ……。これで終わりにするからな！！」

パーンという破裂音が響く。

ラグの腹部に、俺の拳が叩き込まれる。

音速の壁を越えた奇跡の一撃が。

ラグの体は飛ぶように後方に放物線を描く。

地面に仰向けに落ちたその体の、腹には、俺の拳の跡がくっきりと残っていた。

「ふぃー……一丁あがり」

俺はパンパンと手を叩く。

ラグの体は時折ピクピクと小刻みに動くが、立ち上がる気配はない。

「よっしゃ、ハラキア？終わったよー……って、え？」

俺はハラキアの方を見ると、さっきまでフラフラでもなんとか体を起こしていたハラキアが、パタリと倒れていた。

「お、おい！ハラキア、しっかりしろ！」

呼び掛けても荒い呼吸が返ってくるだけで、返事はない。

「やばいやばい！おいどうすりゃいいんだよ！」

『落ち着いて下さいシンゴさん。まずはハラキアさんを仲間の元へ』

「だ、だな！……くそっ！なんでこういう時に何も出来ねぇんだよ」

『仕方ありません。シンゴさんの力はあくまで自分に対してしか使えません。直接他人に干渉は出来ないんです』

「本当いざって時に使い物にならない力だよ、こんちくしょう！」

俺は悪態をつきつつもハラキアを抱えあげる。

「ちょっとだけ辛抱してくれよ……」

俺は町へ向かって飛び立とうとする。

「ま、待ってください！」

背後から降り掛かる声。

「あん？……って、え！？」

俺が見たその先には、体を鎖で縛られた、メイドのルルチェルがいた。

「なにこれ？どういうこと？」

俺はいまいち状況を把握しかねたが、ルルチェルはそんな俺の顔色など伺わない。

「わ、私だったらハラキアの傷を治せます！だからこの鎖を……」

「お、おぅ！分かった」

俺はハラキアをひとまず降ろすと、ルルチェルを縛っているいつぞや俺も縛られた事のある鎖を両手で掴み、

「ふんっ！」

力任せにひきちぎった。

「あ、ありがとうございます」

ルルチェルは早速とばかりにどうやってしまってあるのか懐から色々と道具を出す。

「だ、大丈夫だよな？」

俺が見る限りハラキアの出血はかなりの量に見える。

「大丈夫です。私の為にここまで命を懸けてくれる仲間を見殺しにはしません」

ルルチェルは以前会ったときよりも格段にしっかりした口調で手際よく処置を施していく。

血を拭き取り消毒をし、傷に布をあてていく。

「……なんでなんでしょう」

「ん？」

ルルチェルが小さく呟く。

「なんで皆わたしなんかの為に……」

哀しげに響くその声はハラキアの今の苦しみはルルチェルの全責任と言わんばかりだった。

俺はルルチェルについて軽く話を聞いただけだが、彼女は決して恵まれた環境に生きてきた訳ではない。

そしてモンフェルトの一件ではもちろん本意っはないとはいえ仲間

を傷つける策謀の一端を担ってしまった。

そんな自分に命懸けで助けてもらう価値はあるのか、多分ルルチェルの心にはそんなネガティブな想いが渦巻いているのだろう。

「……えいっ」

「きゃっ！……え？」

俺は軽くルルチェルの頭をチョップする。

「な、なんですか？」

ルルチェルは突然の一発に困惑の表情を向けてくる。

「お前はあれか、ハラキア達をバカにしてるのか？」

「え？い、いえそんなつもりは……」

「お前の言葉はそういう事なんだよ」

俺はズビシッとルルチェルを指差しながら言葉を紡ぐ。

「ハラキアが命を懸けたのは誰の為だ？考える迄もなくお前の為だ。そしてそれはお前自身に魅力があり人として大いに価値があるからだ」

俺は更に言葉を繋げる。

「そしてハラキアにとってお前はたくさんの思い出を共にした仲間

だ。お前もさっきそう言っただろう」

「そう、ですね……」

「……もし逆の立場だったらお前は間違いなくハラキアをハラキアと同じ事言って助けるんじゃないか？」

「ええ、そうですね」

ルルチェルの表情に若干の明るさが混じる。

「よし、俺からの説教にもならない説教はおしまい。早くハラキア連れて仲間の所に行こうぜ」

俺はポンとルルチェルの頭に手を置く。

「……はい！」

ルルチェルの顔は屈託のない笑顔に染まっていた。

「71」音速の終止符（後書き）

そして寝不足です。

そして二日酔いでした。

辛いね♪キャハ☆

……すんませんでした。

では次回。

［72］そして英雄は去っていく（前書き）

世間は夏休みのようですな。

私も夏休みは遊びまくったものです。

で、宿題は最後の最後にやりました。

なんというお約束展開。

72話ですけどね！

［72］そして英雄は去っていく

「がぁっ……！」

「クリシア！」

クリシアは大きく弧を描いて倉庫内の荷物に突っ込んでいく。

「なんだっていうのよあんたらは……！」

肩で激しく息をしつつメイランが睨む目線の先には、二人が倒したはずのトールとドッピオが立っていた。

「フヒッヒ……！いい気味だ」

「そうですねー。気分がいいですねー」

二人はいきなり復活したかと思いきや、圧倒的な力でクリシアとメイランを攻撃した。

対するクリシアとメイランは既に体力も限界の状態。対等な勝負など望めない状態であった。

「変な薬飲んだかと思ったらいきなりパワーアップって……逆に意味が分からないわ」

メイランは吐き捨てるように言う。

「フヒッヒ……。意味なんて分からなくていい」

「そうですねー。これから死ぬ人に贈る言葉などないのですよー」

ドッピオは地を割らんばかりの強さと速さで鞭を振り、トールはさっきまでとは比べものにならない数の糸を自在に操っていた。

「やられないわよ……ここにきてやられるものですかぁ！」

メイランは銃を構える。が、握る力すら十分ではないのか銃がするりと手から落ちていく。

「しまっ……！」

迫る鞭と鋭利な糸。メイランは死すら覚悟した。

「メイラン！」

しかし、突然の自分の名前を呼ぶ声に、メイランはその発せられた方を向く。

「はぁぁぁっ！」

凛々しき声と共に振るわれる巨大な剣。その剣から放たれた炎がメイランとドッピオ達を分かつ。

「隊長！」

メイランの前に現れた人物。帝国軍魔術兵団師団長が一人にしてメイラン達の所属する使用人部隊隊長。

ジェミニ・ランドガルトであった。

「無茶をして……なぜ助けを呼ばなかったのですか！」

ジェミニは剣を構えながらメイランを叱責する。

「も、申し訳ございません。火急の事態と思い動転しておりました」

「全く……あの狼煙をあげたのはあなたたちなのですか？」

ジェミニの問いに、メイランはキョトンとする。

「の、狼煙？いえ、私はそのようなものは上げた覚えはありません……」

「……では一体誰が……？」

ジェミニが疑問を浮かべていると、炎の壁に隔たれていたトールとドッピオが炎の壁を破ってくる。

「師団長とはまさかの大物ですねー！」

「フヒッヒ……！仕留めれば名が上がる！」

それぞれに武器を構え、背を向けたジェミニに襲い掛かる。

「私を魔術兵団師団長と知って挑むのですか……」

ジェミニは静かに剣を握る手に力を込める。

「身の程を知りなさい」

一瞬の閃光。次の瞬間、トールとドッピオは炎に包まれていた。

攻防と呼ぶには至らない、制裁と呼ぶべきがふさわしき一撃。

「すごい……」

メイランはジェミニの鮮やかな攻撃に息を呑む。

ドッピオとトールは焼け焦げながら倒れていく。

「……メイラン、大丈夫ですか？」

ジェミニはフゥと一息ついてから、メイランに穏やかな表情を向ける。

「あ、は、はい！……あ、でもクリシアが」

「あたしなら大丈夫よ」

瓦礫を押し退けてクリシアが現れる。

「にしても隊長。よく私達がここにいるって分かりましたね？」

クリシアはパンパンと埃を払いながら聞く。

「強烈な光を放つ物がこの辺りで確認出来たからもしやと思い来たのだけれども……あなたたちではなかったのですね」

「もしかしたらハラキア達が……？」

メイランがそう口にすると、クリシアははっとする。

「そ、そうだよ！ハラキア達は大丈夫なのかな！？」

「……私が向かいます。あなた達は後から駆け付けてくる者達と共に来なさい」

「は、はい。……え？ていうか隊長、一人で来たんですか？」

クリシアはてっきりもっと仲間がいるもんだと思ってたと首を傾げる。

「……もしあなた達が危機に陥ってたらと考えた末の……結論です」

つまりはクリシア達が心配で仕方がなかったという訳でした。

「とにかく！私は向かいます！あなた達は体を休めつつ待機していなさい！」

強めの口調でジェミニはズビシッと二人に指示する。

「……それと、帰ったらたっぷり話がありますのでそのつもりで」

ジェミニはそう言うとずかずかと倉庫の出口へと向かう。

「うげ。お説教確定……」

「まぁ、そのくらいで済むならいいんじゃない。逆にね」

クリシアとメイランは顔を見合わせハァとため息をつく。

安堵のため息を。

その時、ジェミニが開こうとした倉庫の扉が開いた。

……。

……。

「よいせっとぉ」

「キリハラさん、大丈夫ですか？」

ハラキアを背負いながら倉庫の扉を開ける俺を見て、ルルチェルが心配そうに聞いてくる。

「大丈夫。ハラキア意外に軽いしね。っと、意外って付けたら失礼か」

俺はハラキアを背負い直しながら倉庫に入る。

「あ、あなたは……！」

倉庫に入ると、いきなり懐かしい顔に出会う。

「おぉ！ジェミニじゃないの。相変わらず、なんだ、赤いな」

「キリハラ……なぜあなたがここに？」

ジェミニは分かりやすく驚いている。まぁ、そりゃそうか。

「ちょいと偶然ピンチに駆け付けることが出来てね。ハラキアが怪我してるから早いとこちゃんとした所で治療したってくれ」

俺は背負ったハラキアを示しながら言う。

「は、ハラキア！？一体何が……！」

「ハラキアは私を救うために敵の首領と戦い、負傷したのです」

ルルチェルが整然とした口調で説明する。本当こいつ変わったよな。

「ルルチェルを救うために……。ハラキア、あなたという人は……！」

ジェミニは唇を噛み締める。

「私にも声を掛けてくれれば……！」

悔しそうに呟くジェミニ。

なんというか、本当部下想いだな、ジェミニって。

「とにかく治療を行わねばなりませんね。クリシア、メイラン」

ジェミニは二人を呼び寄せる。

「あなたたちも傷付いていることは重々承知の上で、お願いです。後から駆け付ける者達の為に目印をお願いします」

ジェミニは申し訳なさそうに二人に頼む。

「なに言ってるんですか」

クリシアは笑みを浮かべる。

「言われなくてもそのつもりでしたよ。ね？」

クリシアは隣のメイランというらしい黒髪のメイドに目配せする。

「ええ、珍しくあなたの意見に賛同だわ。珍しくね」

二人は同時に頷く。

「……二人とも、仲良くなったね？」

ルルチェルが驚いたような喜んでるような表情で二人を見つめる。

「まぁ、あれよ。はなからこちらさんがツンデレだったってだけだから」

クリシアはメイランを指差しながらやれやれといった感じに言う。

「ツン……！ち、違うわよ！ルルチェルを助けるためよ！全てはその為よ！」

メイランは頬を赤く染めて声を大にする。

「ね？」

クリシアはニヤニヤしながら俺達に向かい同意を求めてくる。

いや、俺に求められても困るし。こちらのメイドさんとは初対面だし。

「と、とにかく！早く行くわよ！後続が来ちゃうわ！」

メイランは言いながらズカズカと倉庫の出口へと向かっていく。

「はいはい。じゃあ行ってきます。……と、キリハラ」

「ん？」

クリシアの笑顔が俺に向けられる。

「ありがとね」

クリシアはそれだけ言ってタタタッとメイランに続いて倉庫を出ていく。

「……」

こういうの、なんかこしょばゆいな。いや、嬉しいんだけどさ。

「あなたもすっかり皆に好かれたようですね。ハラキアも含めて……」

ジェミニは用意していた治療道具で手際よくハラキアの傷に処置を施していく。

「そうかな？」

俺はわざとらしく首を傾げる。

「モンフェルトの時も今回も、あなたは本来敵同士であるはずの私達を助けてくれました」

ジェミニは手の動きを一切止めずに言葉を繋ぐ。流石だ。

「帝国軍は……特にモンフェルトの一件以前は軍全体としてあなたを敵視していました」

「まぁ、そりゃそうだろうな」

軍の基地潰すわ極秘実験台無しにするわ我ながらはちゃめちゃやったもんな。

「私は実際その姿を目にするまで、どんな怪物が現れたんだと恐怖すら覚えていました」

ジェミニはチラリとこちらに目を向ける。

「しかし実際に見たあなたは格好こそ異国の物でしたが、どこにで

もいそうな少年という印象しか受けませんでした」

「否定はすまい。うん」

「しかしその少年は私達を倒し、更にはその私達を殺そうとした敵を倒した……不思議な人としか言い様がないですね」

「……俺は俺の正義に従ったまで。後は首を突っ込みたがる性分がその不思議をもたらしたんだろうな」

俺はうむと一人頷く。

「あなたが最初から味方であればどれだけ心強かった事か……」

「いや、それはない」

俺はジェミニの言葉をきっぱり否定する。

「え？なぜですか？」

「だって俺軍隊の規律みたいなの絶対苦手だし。悪い見本になる自信しかないな」

自信満々にそう言われて、最初は呆気にとられていたジェミニだったが、フッと笑みをこぼす。

「それは残念です。あなた程の実力があれば師団長クラスになることも出来たでしょうに」

「俺責任とか背負いたくないからそれもパース」

「……そ、即答で拒否なんですね？」

ルルチェルは困惑の顔で言う。

「俺は自由に戦う。今回も俺の意思で戦ったしな」

ゆめじんは毎度の呆れた調子だったがな。

『そんな私を融通利かないみたいに言わないでください』

だそうです。皆様誤解なさらぬように。ゆめじんは柔軟な子です。

『……なんかムカつくのはなぜでしょう？』

といういつものやり取りを脳内で行っていると、倉庫の外がなにやら騒がしくなる。

「後続が到着したようですね」

ジェミニは倉庫の出入口を見ながら言う。

「……じゃあ俺はそろそろ行くかな」

このままここにいてはいらぬ混乱を招くだけだろう。

「キリハラさん……」

「ん？ってハラキア！気付いたのか？」

か細く俺を呼ぶ声はハラキアからだった。

「はい……今回は、その、本当にありがとうございました」

まだ苦しげな様子ながらハラキアは俺の目をじっと見て大事そうに言葉を紡いでくれた。

「……気にすんな。俺が勝手にやったことだ」

「でも……」

納得のいってない様子のハラキア。だから俺はハラキアの言葉を遮った。

「じゃあさ、ハラキアが元気になったら会いにくるからその時何か礼をしてくれよ」

「え……」

「楽しみにしてるからさ」

俺は自分なりに明るい笑顔を浮かべ、ハラキアにそう言った。

「……はい。私も楽しみにしています」

そうやってハラキアの顔に笑みが浮かんだのを確認した俺は、それを合図に倉庫の出口へと向かう。

「じゃな！また会おう！」

俺はシュタッと手を上げつつ、倉庫からフレームアウトする。

「さて、行こか。ゆめじん」

『ええ。今度こそ首都に向かいますよ』

「あいよ。いざ、首都へ！」

俺は軽い足取りでその一歩を踏み出した。

……。

……。

「行ってしまいましたね」

ジェミニはポソリと呟くように言う。

「な、なんだかいつも忙しない方ですね？」

ルルチェルはポカンとした顔で言う。

「あの人は……キリハラさんはそういう人なのよ」

ハラキアは優しい口調で言う。

そしてこう付け加えた。

「英雄……だもの」

それは誰にも聞こえない、ハラキアの独り言であった。

［72］そして英雄は去っていく（後書き）

夏は海だ！山だ！

やれば出来る英雄伝だ！

……ＣＭの真似なんかするもんじゃないですな。

ちょっとどころではなく強引の塊にしか感じませぬ。

では次回。

［７３］刺された男、踏む男（前書き）

……。

……。

あ、→の沈黙っぽいのは、

特に意味なし。

うふふ。７３話で新章突入也。

［73］刺された男、踏む男

「ハァッハァッ……！」

ラグ・トルネード。シンゴの一撃に敗れたこの男は、使用人部隊の目を盗み逃げ出した。

「くそ……っ！なんで俺がこんな目にっ！」

ラグはシンゴに一撃を入れられた腹部を抑えながらひたすらに港へ向かっていた。

港に着いて船が見つかればひとまず逃げ切れる。そう考えていた。

が、その願いは叶わなかった。

「やぁ」

ラグの前に、白いローブに身を包んだ男が現れる。

「て、てめぇっ！一体どこから……！？」

ラグは突然現れたローブの男に驚きを露にする。

「どっからでもいいじゃないか。問題はそこじゃないよ」

ローブの男は、ゆっくりとラグに近づく。

「ダメじゃないか。あれほど服用は一回一錠って言ったのに」

「し、仕方ないだろうが……！そうでもしなきゃ」

「そうでもしなきゃ、何かな？勝負にも負け目的も達成出来てない君に言い訳をする権利はないはずだよ」

ローブの男は頭に被ったフードから鋭い眼差しをラグに向ける。

「それに、損をするのは君だけだしね」

「な、なに……っ」

瞬間、ラグの口から一本の赤い筋が現れる。

血。ラグの口から血が出ていた。

「ぅ……っ！？な、なんだよこりゃあ」

ラグの体は痙攣し、口から大量の血が吹き出す。

「がっ！がぶっ……！」

「薬の大量服用による副作用。大変だ、このままじゃ君は苦しみながら死ぬ事になる」

ローブの男はあまり緊迫感を感じさせない口調で言う。

「だから、今すぐ君を助けてあげるよ」

フッ、とローブの男は腕を水平に振る。

ラグの首に横一線に赤い線が現れる。

そしてラグの首は自分の血に押し上げられるように上空へと吹っ飛ぶ。

「どうだい？楽に死ねただろう？……って聞こえてないか」

ローブの男はそう言ってクスクスと笑う。

「しかしいくら強化に成功したとしても、こうまで極端なリスクがあってはな……改善の余地アリだな」

ローブの男はくるりと身を翻し、血を噴きだし続けるラグの体と地面に落下した首にはまるで興味を示さずにその場を去る。

ラグの遺体が使用人部隊によって発見されるのは、それからまもなくの事となる。

ラグの死の報告、しかも他殺である事を聞いたジェミニは表情を曇らせる。

「これで犯行グループは全滅。奴らの情報を知るのは絶望的となってしまいました」

「あいつらはただの人さらいで間違いないとしても、奴らが服用した薬のような物が気になります」

メイランの言葉にハラキアとクリシアが頷く。

「あれ飲んだ瞬間それまでの倍くらいに強くなってたからね」

忌々しげにクリシア。

「しかもそれまでのダメージもある程度緩和しているように見えました。ただの劇薬にしては効果が強力過ぎるかと」

ハラキアも神妙な表情を浮かべる。

「で、効果が切れたと思ったら血を吐いて死んじゃって……一体なんだったの？」

「何か良くないものが動きだしている気もします。帝都に戻り事の真相を突き止めましょう」

クリシアの言葉に応えるようにジェミニは力強く言う。

「帝都に真相があるとお考えですか？」

「分からない。だけど私は最悪の可能性から潰しにかかります」

ジェミニの言う最悪の可能性。それはそこにいる皆が薄々感付いていた。

「銃騎兵団……奴らの不穏な動きが今回の事に結び付くとするならば……」

ジェミニは表情を険しくする。

ハラキア達の間にも緊迫した空気が流れる。

しかし、そんな状況につい先程まで身を置きながら緊張感の欠片も無い男が一人。

「ぶぇっくるしょいやぁっ！」

『汚いくしゃみですね……』

俺こと桐原慎吾はうっそうとした森の中の獣道を歩いていた。

「本当にこの道が近道なのかよ！獣道かどうかも怪しい茂り具合だぞ」

俺は背の高い草を掻き分けつつ先に進む。

「正規のルートは遠回りな上に軍の監視にバンバン引っ掛かっちゃうんですから仕方ないですよ」

「まぁ、確かにゴタゴタは避けたいがな」

言いながら俺は飛び掛かってきた山犬を衝撃波で吹き飛ばす。

「こうも野生動物にモテモテじゃあなぁ……」

ふと腕を見る。あ、虫刺され発見。

『軍にシンゴさんの動向がばれるよりはましです。さぁ、先を急ぎましょう』

「まぁ確かに軍の奴らに追い掛けられるのはあまり嬉しいイベントではないな」

言いながら俺は虫刺されをぽりぽり。

『あ、刺された所を掻いたら跡になりますよ』

「何ぃ。ゆめじんがお母さんみたいな事言いだしよった」

と言いつつぽりぽり。

『おかっ……！まだそんな年じゃありませんよ！』

「そこかよ」

ゆめじん的反論ポイントは。

「だってかゆいんだもん」

『もんじゃないですよ。というか私そんなに老けて見えます？』

「いや、見えないな。というか最近見てないからなんとも言えん」

というわけで久々にゆめじんの顔を思い出してみる。

……。

うーむ、実におぼろげだ。おぼろげにしか思い出せん。

『そ、そうですか。まぁ、私に年齢なんてあまり関係ないですけど……』

ゆめじんはぼそりと言う。後半特に。

「そういや、ゆめじんって何才なの？」

今更の疑問をぶつけてみる。

『え、えっと……教えません！ていうか何才でもいいじゃないですか！』

「ふむ。先に気にしだしたのはゆめじんの方だと思うが」

『うっ……！元はと言えばシンゴさんが不用意に虫さされを……！』

そうだった。虫刺されからよくここまで話題が広がったものだ。

「で、ついでに虫刺されのかゆみを思い出してしまったわけだ」

というわけで止まっていたぽりぽり再開。

『あー、もう……！』

ゆめじんは呆れ気味。

ていうかその言い方がお母さんっぽいんだが。

「じゃあまたかゆみを忘れるような話題でも提供してくれよ」

『わ、話題ですか……？というかそうでもしないとやめないんですか？』

「うむ、そんな気がする」

と言いながら俺はしつこいぐらいにぽりぽり。

そんなガキっぽい事をしていたからだろうか。

「ん？」

足に何か紐のような物が引っ掛かる感触。

そして地面を割ったかのような轟音。いや、実際割れてたな。

俺の視界は砂ぼこりと炎に包まれる。

そして俺は気付く。

あ、俺地雷踏んだんだな。

少々遠退いた意識の中で俺はそう気付いたのであった。

［７３］刺された男、踏む男（後書き）

『今話題のあの人に１００問１００答！』

みたいな見出しの雑誌を見つけました。

……きっとどう考えても下らない質問も混じってるんだろうなぁ。

では次回。

［７４］俺ではない（前書き）

暑い暑いと言うから暑いんだ。

そうだ、逆を言えばいいんだ。

あー、寒い寒い。

……。

……。

そういう問題ではなかったようです。

７４話でさぁ。

［７４］俺ではない

地雷の爆炎と煙が辺りを包む中、少し距離を取った茂みの中からガサガサと動く影が一つ。

「や、やったか？」

帝国軍の軍服に身を包んだまだかなり若いであろう金髪の男は、ゆっくりと茂みから姿を現す。

「か、確認しないとな……」

男はゆっくりと地雷の爆発地点に向かう。

「木っ端微塵って事は無いよ、な？だとしたら証拠が無くなって……」

「何の証拠が無くなるんだ、あぁ！！」

煙の中から伸びた『俺』の手が男の腕を掴む。

「ひぃ……っ！？」

煙のせいで黒ずんでいる俺の顔を見て、男は小さく悲鳴をあげる。

「その格好、帝国軍だなこの野郎。いきなり地雷食らわせるとはご挨拶じゃねぇか！」

俺は奴の周りの空気の流れを操作する。

「う、うわっ！」

宙に浮いた奴の体。それをそのまま背中から地面に叩きつける。

「がっ……はっ……！」

「俺にたった一人で挑むとは……っていうか本当に一人なのかおい」

俺は辺りを見渡すが、軍服の姿どころか人すらいないように見える。

「ぐっ……この！」

俺が目を離した隙を突いて男は懐から小さく丸い筒を取り出す。

「あ、何する気ぶわぁっ！」

俺は筒から勢い良く噴射された白煙に視界を奪われる。

「うごっ……！しかも催涙かよ！」

俺は目から溢れる涙を拭いつつなんとか奴の姿を……！

と、ぼやけた視界の中に、黒い物が映る。

ん？このパターンどっかで覚えが……。

思い出すより先に俺の目の前で黒い何か、手榴弾が爆発する。

俺はとっさに防御するが、この至近距離では完全には防ぎきれない。

「ぐぅっ……」

さっきの地雷とこれと、結構な衝撃だぞちくしょう！

俺は爆風に体を運ばれ、木の幹にしたたかに体を打ち付ける。

「がふっ……！」

俺はそのままゴロンと地面に転がる。

なんだかんだで俺も体が強くなってるからこういうダメージも『内側』には響かない痛みとしてなんとか処理出来るが……。

「でも痛いものは痛いぃ……」

背中をさすりつつ立ち上がろうとする俺の前で、スチャッ、という乾いた『装填』の音が響く。

「はぁっはぁっ……！あんた噂以上にタフだな」

地雷から始まり一連の攻撃を仕掛けてきた金髪の軍服。そいつが俺の頭に銃口を向けていた。

「……噂ってのは得てして真実の上か下なんだよ。今回は残念ながら上だったようだがな……！」

俺は奴の構えた銃に強く念を送る。本当なら手で操作した方が正確な気がするが今はそんな場合ではない。

「なっ……！？」

俺の念により俺に向けられた銃口はひん曲がりあらぬ方向を向く。

奴の気が俺から逸れた。そう判断し、俺は奴の腕を掴んだ。

「ちょこっと痛いが我慢しやがれよ！」

電撃。奴の体はびくんと震え、そのまま筋肉が弛緩するままに地面に倒れる。

「ふ、ふぃー……。か、勝ったぞ」

だが、戦闘が終わった瞬間から目の前に倒れる男に対する疑問がポンポン湧いてくる。

そもそもこいつは帝国軍なのか？

なぜ一人で俺を襲ったのか？

最初の地雷がピンポイント俺狙いだとしたらここを通るとなぜ分かった？

「どう思う？ゆめじん」

『そう、ですね……ここは本人に直接聞くしかないと思います』

「だな。おーい、生きてますかー？」

『お前が言うなってな感じですね』

まったくだ。

俺はそう相づちを打ちつつ男の体を揺らす。

「うっ……ぐっ……！」

男は呻き声を出しながら無理矢理に体を動かそうとする。

「いやいや、自分で言うのもなんだけど結構な威力で攻撃したから無理しない方がいいぞ」

「……しかないんだよっ」

男は強く絞りだすような声で言葉を繋ぐ。

「俺はあんたを殺すしかないんだよ……！」

殺気に満ちた眼差し。俺は少しその迫力に圧されるが、今はそんな場合ではない。

「え、えぇ……？確かに帝国軍の恨みは腐るほど買ってるけども……」

だが、にしても腑に落ちない点がある。

「お前さん、一人なのか？」

俺は念の為辺りを見渡すが特に人影は無い。

「そうだよ。俺一人だよ。俺一人であんたを殺しに来たんだよ！」

俺に対し強い恨みがある。それはまず間違いない。だが、見ず知らずの一帝国軍兵士の恨み……一体。

「はっ！その様子だとなんで俺が殺しに来たのかも分かってねぇみたいだな！」

男は吐き捨てるように言う。だがしかしその通りだ。

「俺はお前が殺した帝国軍将校の部下だ」

「俺が……殺した……？」

その言葉に俺は思考の迷宮へと陥る。俺が殺した？一体誰なんだ。

「思い出させてやるよ。……いや、そこらじゅうで暴れ回ってるっていうてめぇの事だ。覚えちゃいないかもしれないがな」

男は強く、ゆっくりと、言葉を続けた。

「リリアス・アリド。それが俺の上官だった人の名前だ」

「アリド……っ！」

その名前を聞いた時、俺の中にある記憶が蘇る。

魔獣ギャラス。奴との戦いとそるに至るまでのものが、鮮明に。

「ちょ、ちょっと待て！」

「なんだ、てめぇの罪を思い出したかこの野郎」

「違う！思い出しはしたがそういう事じゃない！」

俺は記憶の糸を、はっきりと伸びるその一本を手繰り寄せる。

「俺はそのリリアス・アリドと戦った。それは間違いない。だが殺しちゃいない！何を賭けてもいい。これは断言できる」

「何を今更言ってやがる！てめぇが大尉の命を奪ったんだよ！」

「がぁぁぁ！よく聞け！俺は戦った。だがその途中で奴が勝手に暴走して致命傷を負ったんだよ！で、その後魔獣が現れたから大尉さんは避難させて大尉さんが持っていた止血剤で腕の出血を止めた！はい、これが俺と大尉さんの一部始終！」

止血に関してはゆめじんのアドバイスありきだけどね。

「だ、だとしても……！なんで敵である大尉を助けるようなマネしたんだよ！説明付かねぇじゃねぇか！」

男は決して退かない。それどころか俺に迫る勢いを増してすらいる。

「そもそも俺の目的はそこに囚われてた人達の救出だったんだよ！だから大尉さんに死なれる必要は無かったの！」

「だからってなんで止血をした！まさかそれはそれで何か企みを……」

「うるせぇぇぇ
俺は無意識に衝撃波を含む程の怒気を孕んだ雄叫びをあげる。
「ぁ……っ！」
男は驚き目を見開く。
「はぁっ。はぁっ。……確かに大尉さん助けて俺にメリットはねぇよ。むしろ逆襲されるリスク考えたらデメリットしかねぇな」
俺は努めて平静に言葉を紡ぐ。
「だが俺は助けた。俺自身理屈で説明しろったって出来ねぇよ。そこに意図も企みもねぇ。お人好しの気紛れだ」
「……本当に、殺していないのか？」
男の言葉に明らかな迷いが生まれ始めている。俺の言葉を伝えるには今しかあるまい。
「ああ、だがその直後から別の敵との戦いが始まって大尉さんのそばは離れてそれっきりだがな」
俺は肩をすくめる。
「俺は殺してはいない。だが、それを証明は出来ない。だから判断は任せる。……俺の言い分は伝わった様だからな」

そう、残念ながら俺が殺していないという証明も大尉さんが今生きてるのかも俺には出来ないし分からない。

だから肝心の判断はこの男に……。

ちょい待て。

「おい、一つ いいか？」

「な、なんだ？」

「お前は大尉さんが俺に殺されたって情報はどうやって得たんだ？」

もしこの男が直接目撃していない限りは情報源が存在することになる。

「それは……教えてもらったんだ」

「誰に？」

「言えねえよ」

男は顔を逸らす。

「ふむ。まぁ誰から吹き込まれたのかはとりあえず置いておこう」

俺は一呼吸置いて次の言葉を紡ぐ。

「お前さん、俺がどの道を行くのかどうやら分かっていたみたいだが、それも教えてもらったのか？」

「そ、そうだ……」

男の返事を聞いて俺はかくんと首を傾げる。

「それがそもそも理解できん。俺の居場所分かってるならなんで軍の部隊とかそういう規模で攻撃してこないんだよ！」

自分で言うのもなんだがな。

「……じゃ、じゃあ、どういう事だって言うんだよ！俺が騙されたとでも言うのかよ！」

「分からん。なんとなく悪い事が動いてる予感はするが……うん、分からん」

『強調しなくていいですよ』

そうか。

「だから、お前に情報を吹き込んだ奴とそいつの居場所を教えろ」

「それを知ってどうする気だ……？」

まさか、と言わんばかりの男の顔。俺は予想通りであろう答えを返す。

「直接そいつの所行って問い詰める」

また一つ、殴り込みの経歴が増えそうな予感だった。

［74］俺ではない（後書き）

後書き。

後がき。

後が『き』。

……。

つまりきの前だから『か』の事を言ってるんですね！

はい、意味なし。

では次回。

［75］アルバレオ帝国最高の頭脳を持つ男（前書き）

今ちょうど電車が東京ドームの前を通り過ぎました。

……。

どうでもいいってね。

75話ばん。

［75］アルバレオ帝国最高の頭脳を持つ男

「ルター・サイエン……そいつがお前にいらんこと吹き込んだ張本人ってわけか」

俺は苦々しい顔でそう口にする。厄介な濡れ衣被せてきた奴に対する顔だ。

「ああ……。というか本当に乗り込む気なのか？」

男は不安げな表情を俺に向けてくる。

「おう。国立の研究所だっけ？乗り込んでそのルターって奴を締め上げたる」

俺はわきわきと指を鳴らす。

「……軍の基地に丸腰で乗り込み生きて勝利を掴む怪物。まさかとは思うがこのまま行くのか？」

「イエス！ザッツライト。こういうのは早いほうがいいんでね。……一緒に来るか？」

「え……？」

俺からのまさかの誘いに目を丸くする男。

「俺一人で確かめてきてもいいが、それじゃお前さんが納得出来ないだろ？」

「……ははっ。訳分かんねぇな。あんた噂以上に分かんねぇよ！」

男はひとしきり笑うと、真っすぐに俺を見る。

「いいぜ。行ってやるよ。で、どっちが正しいか見届けてやるよ」

「うし。じゃあ行くか。……えーと」

「クリスだ。クリス・タイタン。それが名前だ」

男、クリスは俺のどもりの正体に気付き自己紹介をしてくれる。

「クリスね。俺は、まぁ知ってると思うけど、桐原慎吾。よろしく」

こうして、奇妙な二人の真相究明の為の旅が始まった。

その様子を遠目に見つめる影が一つ。

「……」

その影は何かをしきりにぶつぶつと呟いている。

そしてその呟きはとある場所に届いていた。

アルバレオ帝国国立研究所。

帝国最高の研究機関のその一室。照明のほとんど点いていないその部屋には、液体に満たされ、恐らく生物の『何か』と思われる物が入った筒状の水槽や、それに繋がる無数の管が部屋のそこかしこに張り巡らされた空間。

その異様なる空間の奥、雑多に物が置かれた机を前に、先程の呟きに耳を傾ける研究者が一人。

異様なまでに底の厚いゴーグルの様な眼鏡、伸び放題の白髪と白衣が独特の雰囲気を持つ初老の男。

アルバレオ帝国の全研究者の実績、技術の双方において頂点に立つ男。

ルター・サイエンその人であった。

「……ゴ苦労。ではここからもキリハラ×クリス伍長＝奇妙なコンビ、の動きヲ逐一報せるように」

ルターはそう言って通信に使っていた光る玉を机に置く。

「なに？あいつらここに来るの？」

暗い部屋の奥から、女の声がルターに届く。

「その通りダヨ。まぁまさか奇妙な二人×戦闘中止＝仲良くやってくる、の展開はいささか予想していなかったガネ」

「なんだか余裕ね。相手はあのキリハラなんでしょ？」

女の声には若干の不安とどこか楽しげな雰囲気が混じっていた。

「……なんでワクワクしているのだね君は？」

「だぁってぇ……。なんかこう、あえて強敵を迎え討つ、みたいなのって……あぁ、すごくいいシチュエーションじゃない。興奮してきちゃうわ」

女の声に明らかに艶やかな感じが混じる。

「……ウム。この状況＋君の言葉、から察するに君は変態ダネ。私の中の数式が警告を発しているよ」

「警告って……別にあなたを襲ったりはしないわよ」

女はそれはそれはきっぱりとそう口にする。

「それは良かった。特務の力＋変態＝襲われたらこりゃもう駄目だ、だからネ」

ルターはそう言って肩をすくめる。

「特務って言ったってそんなに……まぁ、私に限ってはあなたのお陰で大分強いけど」

暗闇に浮かぶ女の姿。長い前髪を片側に寄せた銀色のショートカットに、灰色の、体のラインがくっきりと出る彼女の抜群のスタイル

を強調する服装に身を包んだ彼女の背中で、特徴的な『それ』が動いていた。

「特務部隊『灰蜘蛛』隊長ベラ・ルーシェ。ヤレヤレ、こんな変態だったとは予想だにしなかったヨ」

ルターはベラの背から伸びているその名の通りの蜘蛛の足を見つつ言う。

「そう変態変態言われるのは心外ね。私Mじゃないからそういうので興奮しないし。……ていうか言うほど変態じゃないしね」

「そもそもその発言が……。まぁいい、迫り来る敵×君の実力＝特務としての働き、のみを期待するとするヨ」

ルターの言葉にベラは妖しく微笑む。

「特務はこのところ『白狼』を除いていまいち評判が芳しくないからね。あのキリハラのお陰で。ここらで反撃を……あふん、本当たまらないわこの背水の陣的なシチュ……うふ」

「……とりあえず勝ってくれたらなんでもイイヨ。君一変態＝0、なんだろうネ、ウン」

ルターは何かを悟ったような表情で頷く。

「と、こんなやり取りをしてる場合ではなかっタ。『アレ』＋『アレ』＝奴らを迎え撃つ切り札、を用意しなくてはナ」

ルターはそう言って部屋を出ていこうとする。

「切り札？一つは分かるけど、その言い方だともう一つあるみたいね？」

ベラの問いにルターは歯をむき出しにして笑みをこぼし、

「ああ、あの二人には披露しない訳にはいかない代物がネ」

と、楽しげなニュアンスで言い放った。

「あの二人には？……あれね。今すごい悪い事考えてるでしょ？」

ベラが指摘すると、ルターは声を出して笑う。

「悪い事とは人聞きが悪いネ！私がこれからする事はネ、勝つ為の作戦だよ。君達軍人がいつも何食わぬ顔でやってる姑息なそれと変わらぬ、ネ」

「ひどい言い様ね。軍上層部が聞いたらお怒りまっしぐらよ」

ベラがたしなめる様に言うもルターはそれを更に笑い飛ばす。

「怒ったからなんダ？奴らは私には何も出来ないヨ。私と同じレベルに達している研究者＝０、だからネ！」

「そうね。圧倒的に優秀な頭脳を持ったあなたを軍が手放すとは思えないわ。ましてや殺すなんてね」

ベラも納得の表情で首を傾ける。

「そういうことだヨ。それに、軍は、銃騎兵団は私の力のお陰で今まさに力を手にしようとしているのだからネ！私の頭脳×銃騎兵団の物量＝圧倒的な力、を生み出すのだからネ！」

ルターは机の上から薬瓶の様なものを取り出す。

その瓶の中には、ハラキア達と戦ったラグ・トルネード達が口にしていたものと同じ錠剤が入っていた。

［75］アルバレオ帝国最高の頭脳を持つ男（後書き）

そう、丸ノ内線の後楽園駅ですよ。

……。

やっぱりどうでもいいってね。

では次回。

［７６］熊狼再び（前書き）

この話の後書きで全国の学生諸君に絶望を与えます。

ふふ。覚悟したもれ。

７６話だぞえ。

［76］熊狼再び

国立の研究所。それは森の中心部にドドンと存在していた。

「なぁ、ここって国立の研究所なんだよな？」

「ああ、そうだが？」

俺は研究所の様子を見渡せる高台からクリスに、ふと思った疑問を口にしてみた。

「なんでこんな場所にあんの？」

周りは森。街からも近くなさそうだし、こんな不便な場所になぜこんなにでかい研究所を建てたのだろうか？

「確か、この研究所は危険な薬品を扱う実験なんかもやってるから、もし事故が起こった時被害を最小限に食い止める為に実験棟同士の距離を取るため……だったかな？」

クリスは思い出しながらといった感じで説明してくれる。

「こういう所なら周りに街もないしな。そういう安全に配慮した感じの理由だったはず。……表向きはな」

「表向き？」

俺はクリスが気になる感じで口にした気になる単語をおうむ返しに聞き返す。

「ああ……。基本帝国軍お抱えの研究所なんてのはどこも多少なりやばい研究やってるからな。それを隠す為にわざわざこういう人里離れた所で研究やってんだよ」

「なるほど……なかなか理に適ったやり方だな。良くない意味で」

俺の台詞にクリスは苦笑する。

「中にはまともな研究やってる所もあるだろうが、大半はそんなもんだよ。軍なんてのはそんなもんなんだよ」

「なるほど、そんなもんか」

軍とは戦う為の機関。その研究ともなればこれが正しい姿なのかもな。

俺には理解出来ないがな。

「さて、ではいつ乗り込むかね？」

俺は目の前の巨大施設を睨みながら言う。

「……乗り込む、か」

「んむ？どうした？」

俺はクリスの低い呟きを聞き逃さなかった。

「いや、俺だったらそんな判断は出来なかっただろうなって」

そしてクリスはハァとため息をつく。

「軍が束になろうが、一騎当千の魔術兵団師団長が相手だろうが一歩も退かず戦い抜く。一体どうしたらそんな力が手に入るっつー話だよ」

それは、羨ましいという気持ちなのか、それとも……。

「なぁ、ちょっと聞きたいんだけど」

「なんだ？」

俺は事情を知った時から気になっていた疑問をぶつける。

「お前は、上官である大尉さんが俺に殺されたと、そのルターとかいう奴に聞かされたんだよな？」

「ああ、さっき言った通りだよ」

クリスは何を今更とばかりに大きく頷く。

「お前以外に聞かされた奴は？」

「えっと……その時は俺一人だったが？」

俺の質問の意図が見えないのかクリスは語尾に疑問符をつける。

「じゃあ聞かされたのがお前一人だとして……なんでお前だったの？」

「んん？」

「だってさ、大尉さんの部下だっつったらお前一人な訳はないだろう？なのになんでお前一人なんだよ？」

こいつ一人にこんな復讐まがいの事をさせる理由が分からない。他の部下も集めてより俺を倒せる確率を上げるべきでは……。

と、俺は考えたが、クリスはそんな俺の考えを知ってか知らずか沈痛な面持ちになる。

「……俺しかいないんだよ」

「え？」

「大尉の部下はもう俺しかいないんだよ」

クリスの言葉。その意味はやがてすぐに理解に至った。

もうクリスしかいない。それはつまり……。

「死んじまったんだよ。全員、あのドートボンでな」

ドートボン。それは、俺が大尉やギャラスと戦った場所。

「死んだ……？ぜ、全員がか？」

俺はクリスの話す真実に衝撃を受けつつもふつと浮かんだ疑問を口にする。

「……知らないのか？ドートボンはあんたが大暴れした後大規模な地震で遺跡自体が崩落して、基地も人も全部丸潰れになったんだよ」

「ま、丸潰れって……。しかも大規模な地震ってなんのこっちゃ……」

俺はあの戦いの後しばらく近くのあの村に滞在していた。しかし地震などは知らないし起きていないはずだ。

俺が去った後に起きた？

いや、そうだとしても地震が起こる前に誰かが助けに来るはずだろう。猶予は何日もあったわけだから。

と、いうことはだ。

「クリスはその時どこにいたんだよ？」

「基地にいたさ。だけど途中でなぜだか意識を無くしてな。気付いたらあの研究所にいたのさ」

クリスの答えに俺は更に疑惑を募らせる。

「状況がごちゃごちゃし過ぎてるな。まぁどちらにしろ言える事は……」

俺は改めて目の前にだだっ広く広がる研究所を睨む。

「あそこが究極に怪しいってことだな」

「確かに、あのマッドサイエンティストが素直に俺を助けたとは思えないな」

クリスは頷く。

「ってわけでさぁ突撃と洒落こみますか……！」

俺達は足取りも軽く研究所を目指す。

それは疑惑に満ちた場所への殴り込み。

何も起こらないまますんなり行けるとは思わなかった。

しかし、

「いきなり過ぎやしねぇかおい」

「で、でけぇ……！」

俺達の目の前に姿を現した巨大な熊、確か顔が狼でベアウルフって言ったっけか。の俺の記憶よりスケールアップを果たした個体。

「規格外とはこのことだな」

言いながら構える俺に対しクリスは、

「間違いない、こいつは……」

と苦々しく呟く。

「こいつは……？知ってるのか？」

「ああ、こいつは帝国軍銃騎兵団の暗部、生体改造兵器の一種だ」

生体改造兵器。だからこの規格外って訳か。

「なんで分かる？」

「俺も少しばかり暗部に足突っ込んだ事があるんでね……分かっちまうのさ」

クリスは拳銃を構える。

「そうか……。まぁ改造兵器だかなんだか分からないが……、立ちはだかるなら潰すまでだ！」

俺の闘争の意志に気付いたのかベアウルフが大きくうなり声をあげて襲い掛かってくる。

「かかってこいやこの熊野郎！」

ベアウルフとの生涯二度目の戦いが今始まった。

ベアウルフの巨大な鉤爪が俺目がけて振るわれる。

しかし俺は瞬間加速でそれを避けると、一気にベアウルフの鼻先まで飛ぶ。

「おぉりゃぁぁ！！」

力を込めた一撃をベアウルフの鼻に叩き込む。

「グゥフッ！」

手応えあり。ベアウルフの体が大きく揺れる。

「もういっちょ！」

俺は更に奴の側頭部へ回り込み、これまた全力の拳を叩き込む。

ベアウルフの体はその一撃の衝撃に押されるように地面に倒れる。

あっけない幕切れ。改造兵器というからにはどれ程のものかと思ったが、大した事はなかったな。

俺はゆっくりと地面に降り立つ。

「……」

それを呆然と眺めるクリス。

「……俺、なんつう奴に勝負挑んでたんだよ」

クリスは倒れるベアウルフを見て、一言そう言った。

［７６］熊狼再び（後書き）

お待たせしたな、学生諸君。

夏休みはもう終わり間近だぜ！

へっへっへ！

よーし、とりあえず文句は受け付けません。

では次回。

［77］無地からの脱却（前書き）

件名：なし
本文：なし

一年に一通くらいそんなメールを送ってしまいます。
あるある。77話はゾロ目でありんす。

［7］無地からの脱却

「つうかこんな物騒なの野放しにしとくなって話だな」

俺はぐでんと気絶しているベアウルフを見てやれやれと呟く。

「いや、あえて野放しにしてるんだろう。研究所の防衛の為に」

クリスは拳銃をしまいながら言う。

「防衛……。なるほど、俺らみたいな不穏な輩を中に入れない為ってか」

「そういう事だろうな。多分まだこんな感じのがうようよいるはずだ」

こんなのがうようよ……。この国はどこに向かってんだか。

「だったら急いで研究所に行っちまった方が良さそうだな。こんなのいちいち相手にしてたらキリがない」

俺は歩を先に進めようとする。

「……だな。いくらあんたが強くても戦闘はなるべく避けるべきだな」

クリスは何気なく言ったのであろう呟きが俺には少し気になった。

「なぁ、ちょいといいか？」

俺は進めようとした歩を止める。

「なんだ？」

「なんかさっきからやたら俺の強さが、とか言ってくるけど……どして？」

曖昧な疑問。しかし、クリスにとっては十分な疑問になったらしい。その眼差しに真剣な色が加わる。

「誰だって思う事だよ。強さへの憧れっていうか、それだけ強ければ自分の守りたいものをいくらでも守れるだろ？」

「じゃあ聞くがお前には守りたいものがあるのか？」

俺は間髪入れずに聞く。クリスが強さを求める理由、それを知りたくて。

「……あったさ。是が非でも守りたかったものがな」

過去形。つまり今となっては守りたくても守れない。そういう事なのだろうか。

「……それって大尉さんの事？」

「んなっ！？な、なんで分かった」

いや、分からないとでも思ったか。今までの話を思い出すにそうとしか思えない。

「え?って事はつまり……クリスって大尉さんの……」

「ち、違うっ!確かに好きだったが恋人とかじゃなかったぞ!」

あ～、こいつテンパると勝手に情報言っちゃうタイプだわ。

そうか、こいつは大尉さんの事が……。

「だから、大尉さんを殺したっていう俺を襲ってきた訳か」

納得。全てに納得。

「……そうだよ。あんたを襲ったのは俺のどうしようもない私怨だよ」

クリスは吐き捨てるように言う。

「本当にそう思うのか?」

「違うとでも言うのか?」

クリスは俺を睨む。

「うん」

だが、そんなの気にせずあっさり頷く俺。

「じゃあどう違うって言うんだよ?」

「どうって……。まぁ武力に訴えたという手段は議論の余地があるにしてもだ」

俺は一呼吸置いてすっとクリスの目を見る。

「お前は俺が強いと知ってて挑んだ。負けるかもしれないのに挑んだ。それはなぜだ」

「いや、それは……」

「大尉さんに対する想いの表れだと思うのだがいかがだろう？」

そしてその想いの量が中途半端ではないからこそこうして行動に起こした。

好意を寄せていた者の死。それがどれだけの辛さを伴うものか、おれだってクリスの何分の一かは理解出来る。

「……かもな」

クリスは特に誤魔化そうとせずに言葉を繋ぐ。

「あんたがアリド大尉を殺したって聞かされた時には俺は悪魔の存在を信じたね」

「……えっと、悪魔って俺？」

俺が自分で自分を指差すとクリスははっきりと頷く。

「そこからあんたの大体の居場所と進路を聞かされて、その時は奴

らがなぜそんな事を知っているのかなんて事は全く考えなかったね」

「あんたに教えたのは未だ最大の疑問だが、まぁ後でその博士締め上げりゃいいやな」

俺の言葉にクリスは苦笑する。

「帝国の頭脳を締め上げるとは頼もしい限りだな」

「それに地震が起こったってのもにわかに信じがたいしな」

「なぜだ？」

俺は先程掘り返した記憶を再度プレイバック。

「俺は恐らくその地震があった時遺跡の近くにいたが、そんなもの体感した覚えがないからな」

「……じゃあ、奴らが嘘をついているって事か」

「あくまで俺の記憶によると、だがな」

と言いつつも、クリスを包む雰囲気がいよいよ疑惑に満たされてきたのを俺はひしひしと感じていた。

クリスの知らないところで何かがクリスを欺き動いている。

一体何が？何の目的があって？

それら謎は俺達だけでは解決は望めそうにない。

「行くっきゃないな」

俺はクリスを促すように歩を進める。

「ああ」

クリスも俺に続く。

「さっさと研究所に行って疑問を晴らしちまおうぜってうぇ！」

俺はいきなり顔に引っ掛かったある物によって前進を止められる。

「どうした？」

クリスが俺の近くに駆け寄る。そして、

「うぉ……！」

俺と同じ物に引っ掛かる。

「これ……蜘蛛の巣？」

俺達を阻んだのは蜘蛛の巣であった。

「これからって時に……やになるね全く」

俺は顔に付いた蜘蛛の巣を払いながら言う。

「確かに、蜘蛛はあまり好きではないな」

クリスもあからさまに嫌な顔をしている。

「……というかよく見ればこの辺り蜘蛛の巣だらけじゃねぇかよ！なにこの嫌がらせみたいなエリア！」

右を向いても左を向いても蜘蛛の巣だらけ。

不自然な程の数のそれこそ、その前兆であった。

「蜘蛛でも大量発生してっ……えっ？」

クリスは言葉を不自然な箇所で切り、視線はある一点を見つめていた。

「なに？どしたの？」

クリスの視線の先を俺も追い掛ける。

「ん？なにあれ？」

暗い森の先に、赤く光るいくつかの物体。

その並び方、形状に俺はなんとなく覚えがあった。

しかしそれは俺の記憶のそれより遥かに、

「ビッグスパイダーってか……」

巨大だった。

森を覆わんがばかりの大きさの蜘蛛が、悠然と足を動かしながらその姿を現した。

「俺、虫ってあまり得意じゃないんだ……って告白は今はしない方がいいかねぇ？」

俺はその細部まで生々しく蜘蛛蜘蛛しいそいつを見上げながら呟くように言う。

「いや、多分言おうが言うまいがこっからの展開は変わらないだろうよ」

クリスの言葉に俺は「確かに」と頷く。

蜘蛛はその巨大な目でギョロリと俺達を見ると、尻の先を持ち上げるようにこちらに向けてくる。

「蜘蛛の尻？……ってまさか！」

俺は気付くがそれよりも早く蜘蛛が俺の予想通りの行動に移る。

バシュッ、と勢い良く蜘蛛の尻から大量の白い糸が噴射される。かなり広範囲に。

「うぉっ！」

俺は予想外に範囲の広い糸をまともに食らってしまう。

それ即ち気持ち悪さＭＡＸである。

「あ、あぶなっ！」

クリスはというと、周りの木々や背の高い草を上手く利用してなんとか糸から逃れていた。

「と、とにかく脱出だ！」

俺は力ずくで糸を取り除こうとするが、なかなかうまくいかない。

強い粘着力。高い伸縮性。この2つの要素が相まって俺は気付けば糸でがんじがらめになっていた。

「お、おい！大丈夫かよ！」

クリスが身を隠しながら言ってくる。

「大丈夫ではない！だけどなんとかする！なんとかしてみせる！」

決意表明はしたもののしかしどうしたらいいものか。

と、考えていると、蜘蛛がなぜか向きを俺からぐるんと変える。

「俺かよ！！」

蜘蛛はクリスの方を向き再び糸を噴射しようとする。

クリスは糸から逃れようと蜘蛛から距離を取ろうとして、

「くっ……！ってうぉわ！」

ストン、といきなり姿を消した。

「……え、えぇぇ！？」

消えた、という表現がまさしくお似合いなクリスの途中退場により、蜘蛛の標的は再び俺へと切り替わる。

「普通にピンチな上に敵が気持ち悪い輩ってのはなかなかくるな…精神的に」

しかしまぁどうにかしてこの状況を打破しないと話にならないな。

何か、策は……。

蜘蛛の糸ってのは何に弱いんだ？そもそも蜘蛛って何に弱いんだ。

これだけでかくとも所詮は虫。そこに弱点はあるはずだ。

虫……。

俺は考えるが咄嗟には策が思いつかない。

そうこうしている内に巨大蜘蛛が眼前に迫る。

「やばっ……！」

蜘蛛は足を一本持ち上げると、その先端の鋭い爪を俺に向け、振り下ろす。

糸に絡まったままの俺は爪に叩き潰され、地面に押しつけられる。

「ぐ、ぐぉっ……！」

痛い。全身に痛みが走るが、それ以上に……。

「くそったれがぁ……」

怒っていた。なんで蜘蛛畜生如きに足蹴にされにゃあいかんのだ。

俺は燃え上がらんがばかりの勢いで怒っていた。

……ん？燃える？

……。

その手があったか！

俺は閃くと同時に、それを実行に移す。

移そうとした瞬間いつかのタバコ吸いたがりと真面目で危険なメイドの兄妹が脳裏をよぎったが、気にしない気にしない。

「発火！」

威勢のいい掛け声と共に俺は体から炎を発生させる。

すると、あれだけ俺の体をがんじがらめにしていた糸が溶けるように燃え散っていく。

「お、おぉ……！脱・出・成・功！」

俺は立ち上がると、発火したままの危険な体で蜘蛛に正対する。

蜘蛛はと言うと、やはり火は苦手なのかジリジリと後退している。

「逃がすかよっ！」

俺は全身の炎のエネルギーを胴体に集中させる。

すると、俺のトレードマーク、白の無地Tシャツに浮かび上がる『火』の文字。

「新技だこの野郎！」

浮かび上がった火の文字から噴き出すは絶大な炎の渦。

俺はその渦を蜘蛛畜生へとぶっ放す。

名付けて！

【豪・風・火！】

読みは【ごうふうか】でよろしく。

暴れ狂う火の渦は、蜘蛛を巻き込みそしてその巨大な体を焼き尽くす。

後に残るは黒く焦げた炎の暴れた証のみ。蜘蛛は完全に消滅した。

「……あの二人に見せたらなんて言うかね」

俺はそんな事を考えながら、さてクリスを探さねばと気持ちと体を冷やす。

実は終始熱かったの内緒だ。

『……熱かったんですね』

［7 7］無地からの脱却（後書き）

で、送った後は少し焦る。

あるある。では次回。

∞クリス・タイタン［前編］（前書き）

ともすれば歴史の裏に埋もれていたかもしれない若者の物語。

開幕。

∞クリス・タイタン［前編］

どうも、帝国軍銃騎兵団のクリス・タイタンです。階級は伍長。
そんな特にこれといって特筆すべき物のない俺が今どういう状態にあるかというと……。

「うぅ……っ」

なんかゴミにまみれています。略してゴミまみれ。
あの蜘蛛から逃れようとした俺はどうやら研究所の古いダストシュートみたいな所に落下したらしい。
で、見事にゴミ置場にシュートされて今に至る訳だ。

「くっせぇ……」

当たり前だ。ゴミ置場なのだから。しかも軍の研究施設のとなればその芳しさは格別だ。

「……一応侵入は成功、なのか？」

ここはゴミ置場とはいえ研究所の中には違いない。

「もっとスタイリッシュに入りたかったものだがな」

俺はゴミを踏み潰しながら手近な出口を目指す。

「……待てよ。真新しいゴミがあるってことはここは現役って事だよな……」

俺はゴミ達を見ながら恐ろしい予感に身を震わせる。

「いや、まさかそんなタイミング良く……」

ふっ、と見上げるといきなり視界に入る黒い何かの塊。

それが当たったのかどうなのか。俺の意識はここで途切れた。

ということは当たったんだろうな。で、俺は気絶した、と。

……。

……。

夢を見た。昔の夢。遠い昔と言う程でもないがそれなりに昔の夢。

俺はガキの頃は街でも指折りの札付きであった。

仲間でつるんでは盗みや喧嘩に明け暮れる毎日。

空っぽな日々を必死に生きていた。

そんな不良まっしぐらの俺がなぜ軍に入ったか？

理由は単純明快。合法的に暴れられるから。

しかしそんな歪んだやる気に満ちあふれた俺を待っていたのは、軍の訓練漬けの毎日とがんじがらめの規律であった。

訓練はともかくとして、体力だけが自慢の街の不良坊主が規律なんて見ず知らずの重石に耐えられるはずもなく、俺は程なく暴れた。

別に何か打算があった訳ではないが、暴れてみた事により俺には不思議な転機が訪れた。

「転属？」

いきなり上官に呼び出された俺はてっきり辞めさせられるのかと思ったが、話は全く違うものだった。

「うむ。お前は体力と武器を扱う能力に長けているがいかんせんこの隊ではその力を持て余しているようだからな。とっておきの転属先を用意した」

上官はそれらしく偉そうに言うが、前半はお世辞で、後半は言葉を変えた厄介払い、という事に気付かない程俺は馬鹿じゃなかった。

「で、そんな俺にどこに行けと？」

俺は敬意のけの字も無い感じの態度で上官に聞く。

「う、うむ……。その前に、これは軍の機密に関わる任務になる。軽率に口外は絶対にしてはいけない」

「は？そんなシークレットな場所に俺は行かされるんすか？」

上官の態度は決して俺を脅そうとかそういう類ではない。とすると俺はマジでヤバイ場所に行かされるのか？

「西の地方にある『ドートボン』という遺跡を知っているか？」

「知らない訳はないっすね、あんだけ有名な遺跡。確か最近軍の管理区域に入ったんでしたっけ？」

俺の言葉に上官は頷き、言葉を繋げる。

「今、その管理区域の中で軍のある研究が行われている。お前にはその研究施設に向かってもらう」

「え？それってつまり……研究所の防衛とかそういうことっすか？」

俺は不服を顕にしつつの疑問符。

だってそんな地味な任務、絶対暴れられないだろ。

「平たく言えばその通りだ。だが、殊この任務に関しては他の研究施設の防衛とはその重要度が格段に違ってくる」

上官は俺の不服をかわすように言う。

「……一体なんの研究してるんすか？」

「それは今私の口からは言えない。現地の者に直接説明を受けろ、としか言えないな」

上官はそう言って言葉を濁す。

……なぁんかやばそうな感じしかしねぇな。

だがまぁ、上からの命令だし、やばいって言うのならそれがどのくらいやばいのか興味もある。

俺は特に拒む事なくその辞令を受けた。

極秘の任務とはよく言ったもので、いざ遺跡に出向くっていう時は地味に、とにかく目立たぬ地味さを保ったまま向かった。

山の中をどれくらい進んだか、いよいよアルバレオ帝国が誇るドートボン遺跡が見えたところで、俺は凄まじい違和感に襲われた。

原因は分かってる。あの遺跡に張りつくように建てられた真っ白な研究所だ。

真っ白な粘土細工かと思わんばかりの外観に、俺をはじめその場の全員が一時呆然とした。

「さぁ、中に入るぞ」

俺達を引率してきた上官は何やら壁にペタペタ手を触れている。

何を……。と思っていたら、突然壁の一部が変形し、研究所の入り

口が出現した。

「行くぞ」

上官は平然とそこから中に入っていく。

……なんなんだよこの建物は。

中に入ると、というか中は割と地味だったから安心したが、中央官制室に連れてこられた。

ここでこの研究所の防衛任務の隊長さんとご対面らしい。

さてさて、一体どんなのが飛び出してくるやら。

あれかな？建物がこんなんだから、結構頭のネジが外れてらっしゃる方が出てくるんだろうか？

と、俺が勝手に失礼な事を考えていると、中央官制室に入ってくる影が一つ。

見たところ普通の軍人っぽいおっさんが出てきて、それらしく中央で立ち止まったところで、おっさんは横を見る。

「……あれ？」

おっさんは困惑の表情を浮かべると、慌てて部屋の外に出ていく。

え？何、あのおっさんが隊長なんでないの？ていうかあのおっさん何してんの？

俺が考えを巡らしていると、先程のおっさんが、再び入ってきた。

そして、その後に続くようにもう一人、

「……おう」

思わず声が漏れてしまった。

「どうも、リリアス・アリド大尉です。よろしく」

女、しかも目を見張る程の美女がそこにいた。

え？この人が隊長？見たところ年も俺と変わらなそうだけど？

俺をはじめ全員が意外な隊長の登場に驚くが、当のアリド大尉はなんだか終始気だるそうにしていた。

「……大尉。もしかしてあれで終わりとか言いませんよね？」

横に立つおっさんが、小さく言う。するとアリド大尉はきょとんとした顔で、

「え？終わりだけど」

と平然と答えた。

カクッと肩を落とすおっさん。

「いやいやいや。大尉、これはこの隊の防衛の責任者としての、彼

らにとっては最初に賜る言葉になるんですよ！もっとこう、言うべき事があると思いますが！」

おっさんは傍から聞いていても分かるくらい声がイライラしていた。

「……じゃあ、２つくらい大事な事言います」

アリド大尉はおっさんの言葉にうんと頷いてその２つの事とやらを言い始める。

「まず、この基地は魔術兵団の方々には存在自体が内緒なので知り合いに魔術兵団の方がいても絶対に言わないで下さい」

「え？」

おっさん以下俺ら全員とりあえず驚いてみた。

というかこの人しれっととんでもないこと言わなかったか？

「ちょっ……大尉！なんでよりにもよって最初に言うことがそれなんですか！」

おっさんが慌ててる。やはり言ってはいけないことだったらしい。

「……じゃあ２つ目です」

まさかの無視。大尉殿はおっさんを無視しました。

「私の着替え覗こうとしたりしたら討ち首ですので気を付けてください」

そして気だるそうな顔のまま恐ろしい事を行ってきたよこの人は！

……だが、ちょっと残念がってる自分がいる時点で俺の負けな気はする。

「以上です。困った事とかあったらこちらのダミアス中尉に全部押し付っ……。聞いてください」

「今押し付けてって言おうとしましたよね？大尉、あなたこういう時適当過ぎますよ！もっと帝国軍将校としての自覚を……！」

おっさん、もといダミアス中尉は募っているであろうイライラを隠そうとせずにアリド大尉にぶつける。

「……確かに、あれで大尉ってどういう事だよ」

俺は思わずぼそりと呟く。

「あれ？お前知らないのか？」

すると俺の隣に立っていたオールバックが反応してきた。

「知らないっって、何を？」

「アリド大尉の武勇伝だよ」

俺達はボソボソと小声で喋る。

「お前、１年前の北の反乱は知ってるよな？」

「ああ、軍による反抗勢力の一斉排除に繋がったあれだろ？それがどうした？」

北方で起こった戦い。それにより反抗勢力は実質壊滅したと聞いている。

「その時軍の最前線に立って戦果をあげたのがアリド大尉なんだよ」

「えっ！女が最前線に？」

「まぁそう思うよな。だがな、アリド大尉はただの軍人じゃない。最前線に立つだけの理由があったんだよ」

オールバックは射抜くような目でアリド大尉を見ながら言葉を続ける。

「人体改造。アリド大尉は特務の隊長にも引けをとらない『人間兵器』なんだよ」

「人間、兵器……」

「ああ、でもってアリド大尉は北の戦いで押し寄せる数千人の反乱軍をたった3人で全滅させたっていう伝説を持ってるんだよ」

「えぇ……！？」

俺は驚き、思わずアリド大尉の方を見る。あんなやる気の無さそうな感じで一体どれだけの力を秘めてるって言うんだよ。

「つうかあと2人ってのも気になるな」

「あとの2人か？『灰蜘蛛』のベラ・ルーシェと『白狼』のチョウ・サムスンだったかな。女3人が戦場を席巻する様は圧巻だったらしいぞ」

『灰蜘蛛』に『白狼』。どちらも特務か。特に『白狼』と言えば特務最強中の最強と呼ばれる部隊じゃねぇか。

「でもってその一人が直の上司ってか。下手な真似出来ねぇなぁこりゃ」

俺はやはりやる気なさげ立っているアリド大尉を見て、いい知れぬ緊張に襲われる。

ここから、俺の物語は急速に加速する。

∞クリス・タイタン【前編】（後書き）

アリド大尉はやはり書いてて楽しいです。

頑張れ中尉。

では次回。

∞クリス・タイタン［中編］（前書き）

きましたね。

十数話に一度あるという。

前書きが思い付かない状況が！

……はい本編どうぞ。

∞クリス・タイタン［中編］

ここ、ドートボンで行われている研究、実験は極秘。特に魔術兵団には口外するな。

アリド大尉がぽつりと言った『大事な事』は、俺達に波紋を広げていた。

「……こりゃ予想以上にやばい場所に来ちまったのかな？」

俺は部屋で休みつつそんなことを考える。

任務自体はいわゆる施設の警護だからそこまで大変というわけではない。誰かが殴り込んだりして来ない限りはな。

「……タバコ吸ってこよ」

俺は交代時間を気にしつつ、基地の中の喫煙室に向かう。

「にしても奇妙な基地だよ全く」

外観は趣味の悪い窓無しの白塗り、しかし中は他の基地程度には娯楽の施設なんかもちゃんと用意されてるってんだからな。なんというアンバランスって感じだな。

そんな事を考えながら喫煙室に入ると、既に先客がいた。

白衣を身にまとったボサボサの髪と無精髭の男。

この基地、研究所の主任研究員バルドー・ヴィルスラム……だったはず。

「あ、ども」

俺はバルドーさんに軽く会釈し、自分のタバコに火をつける。

バルドーさんは俺を見て小さく頷くと、それ以上は特に何もなくタバコをふかしつづけていた。

……まぁ、研究者ってのはこんなもんだよな。個性的というかなんというか。

なんせトップがアレだからな。頭いいけどアレじゃあなぁ。

と、俺は失礼な事を考えつつタバコを吸っていた。

バルドーさんは相変わらず虚空を睨みながらタバコをふかしている。

「……」

この基地で行われている研究。その詳細を下っぱの俺達は教えられていない。

何か生物学的な何か、くらいの認識が精一杯ってんだから警護任務も思わず首を傾げるってなもんだ。

しかも魔術兵団に知られたくないってことは、まず間違いなく魔術兵団に対して良からぬ何かって事になる。

ドートボンの『穴』が関係してんのかも知れないが俺が知ることはないだろうな。

なんせ下っぱだから。

「……」

と、お気楽ぶってタバコ吸ってたらいつの間にかバルドーさんが思いっきりこちらを見ていた。

「……な、何か？」

俺は地味な驚きを隠しつつ引きつった笑みで聞く。

「いや、あまり見ない顔だと思ってね」

バルドーさんは表情を一分も崩さない。

「あ、はい。最近ここに転属になったんで……」

「なるほど。そういうことか」

バルドーさんは納得したのか視線を俺から真正面にずらす。

「こんな所に来させられるとは君もついていないな」

バルドーさんはタバコをぷかぷかふかしながら言う。

「え？」

と、俺が思わず聞き返すと、バルドーさんは無機質な表情のまま、

「ここはまともな者の寄り付く場所じゃない。腰を落ち着ける前によそに行く事をおすすめするな」

自分が主任を務める研究所に対してなんたる言い方。

え？ってかそんなヤバイ研究してるってこと？当の研究者がこう言ってんだからそういう事じゃないの？

俺が思考を巡らしていると、喫煙室に若い研究者が入ってきた。

「主任！こちらでしたか。ダミアス中尉がお呼びです」

若い研究者がそう言うと、バルドーさんは「分かった」と言ってタバコを灰皿に押し付け、部屋を出ていく。

残される俺。

「……よそに行け、か」

俺はバルドーさんの言葉が妙に心に引っ掛かっていた。

そんななんとなくもやっとした気持ちで2本目のタバコに手を出そうとした時だった。

喫煙室に入ってくる人影が一つ。

今度は誰だ。と思いつつ来訪者を見ると、

「……」

アリド大尉だった。い、意外な来訪者だな、こりゃ。

「……あなただけ？」

大尉は俺を見ながら小首を傾げつつ聞いてくる。

「は、はい……」

俺がそう答えると、アリド大尉はつかつかと喫煙室に入り込み、あろうことか俺の隣に来た。

「え、えっと……」

いきなりの大尉の行動に俺は困惑する。しかし当の大尉はそんなの全く気にもしない様子で虚空を眺めてる。

「タバコってさ」

と思ったら突然喋りだす大尉。

俺は驚いた拍子に煙でむせてしまう。

「えほっ……！げほっ！」

「大丈夫？」

さすさす。と、大尉が俺の背中を優しくさすってくれる。

い、一体何がどうなってんだこりゃ……！？

俺はなんとか咳を抑えつつ大尉に顔を向ける。

「だ、大丈夫です。もう大丈夫なんでっ……！」

近かった。

何がってか？大尉の顔だよ。

俺は思わず身体ごと大尉から距離を取る。

「……？」

大尉は不思議そうに俺を見てくる。

さっきからそうなのだが……この人、ただでさえ見た目が綺麗な上に仕草がいちいち可愛らしかったりして……。

やばっ。すげぇ鼓動が高鳴ってるのが分かる。顔に出てなきゃいいが。

「顔真っ赤だけど。本当に大丈夫？」

出てました。

「いや、これは、えと、その……」

俺はしどろもどろになりながらも火をつけたばかりのタバコを灰皿に押しつけ、

「し、失礼します！」

と言って喫煙室を後にした。

あのままあそこにいたらどうにかなってしまう気がしたから。

俺はしかし間近で見た大尉の顔がなかなか網膜から離れず、訓練でミスってダミアス中尉、もといおっさんに怒られる事になる。

「だぁーー！あんなに口うるさく言うことないだろうがってんだよ！」

俺は部屋に戻るなり愚痴る。

「にしても今日のお前は心ここにあらずだったよな。なんかあったのか？」

同部屋のオールバックが、俺の様子を見かねてといった感じで聞いてくる。

「ん？……あー」

ここで思い当たる節があるのが残念だ。

「何かあるんだな。どれどれこの俺様に相談してみろよ」

オールバックはよしと膝を叩いて勝手に話を聞く体勢になる。

「はぁ……実はな」

このオールバックを全面的に信頼したわけではないが、しかしこのまま内に溜め込んでいても仕方ない気がしてかくかくしかじかと俺の身に起こった事を話してみる。

「……」

話し切った時、オールバックはなんだかすごい驚愕って感じの顔をしていた。

「え……なにそれ？ファンタジー？」

そして意味の分からない事を言い出した。

「ていうかなんで大尉が喫煙室に？あの人タバコ吸わないっしょ？」

オールバックは疑問符を重ねる。

「だよな……。毎度あんな感じだったらおちおちタバコも吸ってらんねーよ」

俺がやれやれとそう言うと、オールバックは考えるように首を傾げる。

「どした？」

「いやな、そもそもアリド大尉が喫煙室に入ったって事自体が珍しい気がしてな」

オールバックはそう言って自分の記憶に照らし合わせたのかうんと

一つ頷く。

「え？そうなの？」

「少なくとも俺はな。そもそも吸わないのに入る理由がないだろ？」

もっともな意見だ。だとしたら大尉はなんであの時……。

「もしかしてお前大尉に気に入られたんじゃね？」

「は？」

「いや、可能性としては考えられるだろ。まぁなんでお前なのかは大尉のみぞ知るだがな」

オールバックは至って真面目な顔で言う。

だが、奴の推測は俺にとって突拍子も無い意見にしか聞こえなかった。

「ないって。それはない！」

俺は首を振ってそれを否定する。

が、その行動とは逆行するかのように、俺の脳内では喫煙室でのアリド大尉とのやり取りその他が鮮明に再生される。

「上官とはいえあんな美人に気に入られるんだったら俺は大歓迎だがな」

オールバックは何を考えてるのか分からないが口の端を緩めながらそんなことを言う。

うぬぅ……。もし、もしもだがな！本当に大尉が俺になんらかの関心があるとしたら……。

……嬉しい、のかねぇ。いや、嬉しいんだろうな。

俺は今まで女の気配など微塵も感じさせない人生を送ってきた。

軍に入ってそれは更に加速するかと思ったら、ここに来てこの強烈な出会い。

経験値の圧倒的に足りないカテゴリーのイベントに、俺は戸惑っていた。

今のままでは答えが出せそうにない。

だから俺は、足を運んだ。

全ての発端である喫煙室に。再び。

「……まっ、そんなもんだよな」

俺は吸い切った2本目のタバコを灰皿に押しつける。

この前のは大尉の気紛れだな。うん、なんかタイミングが良かったんだな俺。

「何をそんなに頷いてるの？」

「いや、やっぱり大尉が喫煙室ぅーーー！！？？」

声を掛けられた方を向くと、いました大尉が。

もはや瞬間移動でもされたかのような感覚。

ていうか今の今まで気配を感じなかった。

お、恐ろしい……。

「私が喫煙室で……何？」

大尉はくいと首を傾げる。

ぐぅ……。高鳴るな俺の心臓。相手は上官なんだから！見た目こんなでも実際は鬼の様に強いと噂のリリアス・アリド大尉なんだから。

「い、いやぁ……。大尉ってタバコは吸わないんすよね？」

「ええ……。吸わないわね」

アリド大尉は即答する。

「ではなんで喫煙室に来てるんですか？私の知るだけで2回目……ですね」

俺はなんとなく視線が合わせられなくて視界を泳がせながら言う。

「……」

すると大尉はそこでぱたりと黙ってしまう。

やばっ。何かまずい事言っちまったかな。

俺はとりあえず謝った方がいいかなと思い大尉の方を向く。

「あなたは……」

いざ頭を下げようかと思ったら、大尉はゆっくりと言葉を紡ぎだす。

「あなたには、生きる目的ってある？」

突然の問い。俺はその真意が分からずアリド大尉の顔を見る。

アリド大尉の顔は心なしかいつもの無表情よりも少しだけ真剣味を帯びているように見えた。

俺の、生きる目的？

そんなこと考えた事もなかった。

街で悪ぶってた頃は毎日生きるのに必死で。

軍に入ってからも訓練やらで忙しくて。

そんな事考える余裕は無かった。

だからだろうか。俺は気付けば、

「アリド大尉にはあるんですか？生きる目的」

という質問を発していた。

俺の問いに対しアリド大尉は少し、ほんの少しだけ考えるような仕草を見せたあと、

「あるわ」

と言葉を繋げた。

「でも私の場合は、生きる目的って言うよりも、死なない為の理由って言うのかな？」

「死なない、為……？」

大尉の口から出た不穏な言葉。俺のおうむ返しに大尉は頷く。

「私は生きる支えをとうの昔に失っているの。だから本当はいつ死にたくなってもおかしくないの」

本当は……。という事は今の大尉には死のうとする自分を引き止める何かがあるという事なのだろうか？

俺はそんな疑問を抱くが、それを口に出す間もなく大尉は、

「って、こんな事話されても困っちゃうよね」

と言って力なく微笑む。

その笑顔にまた胸が高鳴ってしまうって言うんだから俺は単純というか空気が読めないというか……。

「さて……私はそろそろ行かないと」

大尉はそう言って部屋の出入口に向かう。

「……そうだ」

だが、扉に手を掛けたところでくるりと振り返る。

「今話した事は、皆には内緒、ね？」

人差し指を口元に当てぱちんとウィンク。

「……はひ」

俺は辛うじてそう答えた。

大尉は俺の返事を確認すると、部屋を出ていく。

「……」

俺は、なんかもう色々と頭がこんがらがっていた。

アリド大尉って一体……。

俺は限りなく彼女に対する興味が湧いていた。

「……あ、訓練」

で、考えにふけっていたら、訓練に遅れた。

うむ、自業自得なり。

∞クリス・タイタン［中編］（後書き）

……。

喫煙室の話でした。

まだまだ『彼』の話は続きます。

では次回。

∞クリス・タイタン［後編］（前書き）

……。

今回の前書きを考えるのに、

リアルに１０分くらい考えました。

でも思い付かない。

そんな切なげな話。

とは全く関係ないクリスさんの話後編です。どぞ。

∞クリス・タイタン［後編］

それからというもの、俺は事ある毎に喫煙室に足を運んだ。

それはもちろんアリド大尉目当てなのだがって言わせんな恥ずかしい。

まぁ大尉も毎回毎回いるわけじゃないし、他の奴がいる時だってある。

だけど、大尉が喫煙室を訪れるのは俺がいる時だけという統計（俺調べ）が明らかになってから、俺のテンションは俄然上がっていた。

……上がっていた、という事はつまり俺は大尉に対し……。

「はっきり考えようとすると恥ずかしいな」

俺は基地内の廊下を歩きながら思う。

例によって訓練終わりに喫煙室へ、と考えたが、今日はどうやらアリド大尉は来ないようだ。

なぜなら、

「あー……。ただでさえ面倒な相手との面倒な会議に面倒な事案が加わって……死にたくなる？」

「聞かないでください。そしてちゃんと歩いて下さい」

ダミアス中尉がふらふらしているアリド大尉の背中を押していた。
その様子をたまたま見ていた俺は上がってたテンションを急落下させる。
会議か……。じゃあ大尉は来ないだろうな。
「銀蝿のギオ隊長はただでさえ気が短いと聞きます。急いだ方がよろしいかと」
「えー……むしろ行く気無くすわその情報。というか逃げ出した民間人更に逃がしたのはあっちなんだから怒るの筋違いよね？」
大尉らはそんなことを話しつつ進んでいく。
「……ん？」
逃げ出した民間人？ってなんだ。そもそもこの基地に民間人っていたの？
俺の中に生まれる疑問符。
ふと俺は考える。この研究所で行われている事は軍の側にはアリド大尉ら少数の人間にしか詳細は知らされていない。
精々が新兵器の研究開発、それもある生物を用いてって事しか俺らは知らない。
「……」

俺は自分の中の好奇心に従い、大尉達の後をつけた。

大尉達の入った先は中央官制室。ここにその銀蝿の隊長もいるのか？

俺はそろそろと扉に近づくが、中の声は聞こえない。

うむぅ……そう簡単にはいかないか。

というかこればれたらまずいよな。間違いなくまずい。

仕方ない。おとなしくそして一人寂しくタバコ吸いに行きますか。

俺は喫煙室に向かう。

その道中の事。

ズドンッ！

という何かが吹っ飛ぶような音が耳に飛び込んでくる。

「な、なんだ？」

音の方向、それは俺がさっきまでいた場所……。

「なにが……っ！」

俺は中央官制室の方に引き返す。

一体何が起きたのか、大尉は無事なのか。俺は走った。

そして中央官制室への最後の角を曲がった時だった。

「がべふっ！！」

いきなり俺の体は弾き飛ばされた。

「な、なんなんだよ……」

そのまま壁に叩きつけられる俺。ていうか何にぶつかったんだ俺は？

強烈に背中を打ち付けたせいでうまく立てない。

そんな俺の目の前を、

「……」

アリド大尉が駆け抜けていく。

「た、大尉……？」

あの大尉が走ってる？一体どれだけの緊急事態だってんだ？

俺はギチギチいってる体を無理矢理起こす。

「あっちは……保管室、か？」

俺はゆっくりとだがそっちに向かい歩きだす。

さっきの衝撃音といいアリド大尉といい何が起こってるっていうんだ？

まさか、なんか実験が失敗したとかそんなやつか！

だとしたらこんなことしてる場合じゃないだろ。極秘のやばい実験だってのに。

俺はそんな事を考えながら先を急ぐ。

「ん？」

ちょい先の通路を通る影が一つ。あの白衣姿は見覚えがある。

「バルドー……さん？」

一瞬だったが間違いない。あのボサボサ頭の白衣はバルドーさんだ。

でも待てよ。バルドーさんって軍規の違反で牢に入れられたって……。

「……」

俺はやばい雰囲気を感じた。そして、その場では声を掛けず後をつけるみたいな形をとって良かったと思う事になる。

フラフラと歩くバルドーさんの目の前に巡回中の兵士が現れる。

「貴様！牢に入れられたはずだろう！」

兵士は肩に掛けた銃に手を掛ける。

「……」

しかしバルドーさんは何も言わない。

「なんとか言え！さもなくば……」

兵士はあくまで脅しのつもりだろうが、銃口をバルドーさんに向ける。

「……やめておけ」

バルドーさんは無機質な声で言う。

その瞬間、俺の背中にゾクッとした悪寒が走る。

なんだ、なんだか分からないが今すぐこの場を離れた方がいい気がする。

バルドーさんと相対した兵士もそれを感じたのだろう。表情に不安が生まれ体に少し力が入り硬直したのが見て取れる。

「な、何を言う！貴様、自分の立場が分かってないのか！」

兵士はそんな不安を打ち消すかのように声を張り上げる。

「……それで撃っても私は死なないだろう。なんなら試してくれてもいい」

バルドーさんは無機質な口調のままとんでもないことを口にする。

「貴様っ！ふざけるのもいい加減に」

パァンッ！

瞬間、乾いた音が一発、辺りに響き渡る。

「ぁ……っ！」

兵士はほぼ無意識の内に引き金を引いてしまったらしい。銃口からは細く白煙があがっている。

対するバルドーさんは、弾丸の命中した腹部をかばうように両手を添え、体をくの字に曲げる。

だが、一瞬間を置いて添えられた手はだらんと力なく伸びる。

「……残酷なものだ」

先程と声のトーンなどまるで変わらぬ、果たしてそれがバルドーさんの声なのか疑った。

だが現実はそこにある。

弾丸が体を貫き白衣を自らの血に染めつつも平然と立つバルドー・ヴィルスラムその人の姿を。

「な……っ……！？」

兵士はもはや目の前に広がる光景にただただ混乱していた。

「……ぐぁっ……！」

かと思いきや、突然バルドーさんは頭を押さえ込む。

「っ……今すぐ私から離れろ！」

そして声を荒げる。先程とはまるで別人の様に。

だが兵士は足が張りついてしまったかのようにその場を動かない。

「なぜ逃げないんだ！……っ……！」

一瞬、何が起こったのか分からなかった。

バルドーさんが動いたと思った次の瞬間、

バルドーさんの手が、

兵士の体を貫いていた。

真っ赤に染まったその手には、

兵士の内蔵が握られていた。

「がっ……！」

兵士は痛みなのか驚きなのかはたまた全く別の感情なのか、口を開き小刻みに震えていた。

バルドーさんは何も言わず手を引き抜く。その手に内蔵を握り締め

まま。

兵士は口から血を吐き出しつつ、その場に倒れる。

兵士は絶命した。俺は目の前で繰り広げられたおぞましき光景に、恐怖した。

俺だって軍人の端くれ、人が傷つくのに何も思わない訳じゃないが、それなりに耐性はついているつもりだった。

だが、これはそんな『覚悟』とは比較にすらならない。

理解できる範囲を越えている。

俺の中で『逃げろ』という命令が発せられる。

俺はそれに従うべく後ろに一歩踏み出す。

カチャッ。

その乾いた音は俺の足元から鳴り響く。

何気なく手を動かした時、腰に留めてあったナイフの止め具を外してしまったらしい。

「誰か……いるのか？」

無機質な声。もはやバルドー・ヴィルスラムと呼ぶ事すら躊躇われるその男がゆらりとこちらを向く。

「……っ！！」

俺は瞬間、走りだしていた。

それは生存本能に近い逃走であった。

背後からは乾いた足音が鳴る。それが更に俺を恐怖させた。

一体何がどうなってああなった？

もはやまともな思考すら浮かばない。

あの爆発音といい、走り抜けていったアリド大尉といい、そしてバルドーさんのあの変貌……。

何が起こってんだってんだよ！？

俺は走りながら後ろを確認する。

バルドーさんは完全に狙いを俺に絞っている。

捕まればさっきの兵士みたいに……っ！

「くそっ！」

俺は装備していた手榴弾を引き抜くと、背後の床に向かい思い切り投げる。

だがこれは爆発する物ではなく、目眩ましの為の白煙を発する物だ。

たちまち俺の後ろは煙に包まれる。

その煙にバルドーさんが巻き込まれた事を確認した俺は、通路の角を曲がり、その先の部屋に逃げ込んだ。

「はぁ……はぁ……」

俺は音を立てぬ様に扉に張りつき外の音に集中する。

「……どこへ？」

近い。恐らく扉のすぐ外に、奴はいる。

「……」

俺は息を殺しじっと耐える。

軍に入って初めてかもなこんな緊張感はな、こんちくしょうが。

心の中で悪態をついてる俺のいる部屋のすぐ外にあった気配は、段々と遠退いていく。

「行った……のか？」

俺は恐る恐る扉を開ける。

静まり返った空間。真っ白な内装がそれを際立たせる。

誰もいない事を確認した俺は、部屋を出る。

「よし……」

俺は一気に部屋を出る。

右を見て、左を見て……。

「そこか……」

驚きで体が跳ねた。

気配も何も感じなかった。奴はいなくなったはず。

だが、奴は確かに俺の目の前にいた。

「しまっ……！」

瞬間。バルドーさんの体が沈み、追い掛けるように脇腹に鋭く焼けるような痛みが走る。

「がっ……！？」

速すぎるっ。反応もくそもなかった。

だが、不幸中の幸いか。俺が無意識の内にわずかに動いたからか奴の攻撃は俺の内臓を傷付けるには至らなかった。

「外したか……」

奴の声が、腹立つくらい冷静な声が聞こえる。

俺はなんとか踏み留まると、常備しているナイフに手を伸ばす。

「今度はこっちのターンだってなぁ！！」

俺はナイフを足元に向かい思い切り放る。

「っ！？……何を」

ナイフは真っすぐに奴の足の甲に突き刺さる。

「逃げる為に決まってんだろうがよ！」

さっきの兵士がやられた時、弾丸が効かないのは分かっていた。ならばナイフだって効果はあまり期待できないだろう。

「うおぉぉぉ！！！！」

俺は一気に奴の脇を走り抜ける。

弾丸は効かなかった。しかし確かに隙は生まれていた。

だったナイフでもそのくらいの効果は期待出来るだろう。

だがその効果も一瞬だろう。

俺は手榴弾、今度は殺傷能力のある、つまり爆発するのを引き抜く。

「こいつでさよならだ！！」

俺は通路の角を曲がる瞬間手榴弾を奴に向けて投げる。

同時に俺は耳を塞ぎながら飛び込む様にジャンプする。

ズォンッ。と地響きの様な衝撃と共に大量の砂埃が舞う。

「はぁっはぁっ……！」

全身に衝撃が走り、脳が揺れている。

俺はゆっくりと立ち上がる。

「……っ！！」

瞬間脇腹に鈍い痛みが襲う。

見れば傷からはじんわりと血が溢れ続けていた。

「……はぁっ！」

俺は意識をしっかりと保とうと息を吐く。

「死んでたまるかってんだ……」

俺はよろよろと粉塵が舞う手榴弾の爆心地を覗く。

天井や脇の壁が崩れ、土砂で通路は完全に塞がっていた。

奴がこの中でどうなったのは分からないが、とりあえずどうにかはなったらしい。

俺はそれを確認すると、再び角を曲がり通路をゆっくりと進む。

「とにかく……逃げるしかないな」

俺は基地の出口を目指す。が、そこでふと考える。

アリド大尉は大丈夫なのか？

この基地で今何かが起こっている。何なのかは分からないが、今の今まで体験していた事から察するにまず何かが起きているのは間違いない。

アリド大尉もどこかへ向かった。しかも珍しく急いで。

そしてさっきのバルドー・ヴィルスラムの変貌。何も無いと考える方がおかしかろう。

俺は迷った。基地を出るか、否か。

アリド大尉は強いから俺の手助けなどいらないかもしれない。

しかも俺は手負いの身。何か出来るどころか足手まといにしかならないだろう。

「……」

程なくして、俺はその思考の結論とも言うべき場所にいた。

基地の、外。

俺は逃げた。アリド大尉や、その他あらゆるものから。

それが正しかったのか、そんなものは分からなかった。

分からなかった。

「……っ」

やばいな。血を流し過ぎてる。意識がかなり朦朧としてきた。

俺は膝をつく。ほぼ、無意識のうちに。

「はぁ……はぁ……」

そして、俺の意識はそこで途切れた。

次に目が覚めた時、俺はベッドの上にいた。

ここはどこだろうか。そう思っていた俺に近付く影が一つ。

「うむ、爽やかな目覚めカネ？」

どこか機械的な喋り方に感じるその、見た目もかなり特徴的な研究

者風の男、ルター・サイエンはふむふむと俺の体を見てくる。

「俺は……？」

どうやら助かったのは間違いない。しかしそれが良かったのかどうか。この男の評判を知る俺としとは疑ってしまった。

「失血多量で倒れていた君＋後続の部隊がたまたま発見＝今に至る訳だヨ。全く君は運がイイネ」

ルター博士は独特の喋り方で続ける。

「そして君はあの研究所の唯一の生き残りだ。誇り給え」

「……は？」

一瞬、目の前の男が何を言っているのか分からなかった。

「俺が、唯一って……」

「言葉通りの意味だよ。あの研究所は、直後の地震＋地盤の崩落＝つまり『穴』ごと潰れてしまったのだよ」

ルター博士は淡々と俺に絶望を突き付けてくる。

「そんな……」

「研究所の責任者たるリリアス・アリド大尉以下全兵全研究者が犠牲になってしまった。なんとも痛ましい事ダヨ」

「アリド大尉も……」

その名だけは、この話題の中では聞きたくはなかった。あの大尉が？そんな馬鹿な……。

「もっとも、アリド大尉はヤツに殺されたのだがね」

博士はぼそりと呟く。

「やつ？奴って誰ですか！？」

俺は博士に詰め寄るように聞く。

「君も聞いたことがあるだろう？たった一人で帝国軍の基地を壊滅＋ドートボンの研究所にも殴り込んできた＝キリハラという男を」

「キリハラ……」

確かに噂程度には聞いた事がある。

２００人規模の銃騎兵団管轄の基地を単身しかも丸腰で正面から襲撃。司令のデイク大尉や基地の兵を基地ごと壊滅状態に追いこんだっていう……。

最初聞いた時は誰かの与太話だと思ったが、本当にそんな怪物がしかもドートボンに来てたって言うのか！？

「アリド大尉は侵入してきたキリハラを迎え討ったが返り討ちにされ、そのまま殺されたのダヨ」

「そんな……」

俺は絶望すると同時にキリハラに対し憎悪の感情を覚えていた。

「憎いかネ？キリハラが」

まるで心を見透かされたかのような博士の言葉に俺は思わず博士を睨み付ける。

「そんな顔をしなくてもいいじゃないか。君の気持ち＝我々の目的、は合致するのだよ。どうだい？我々に協力する気はないかい？」

「協力……？」

それに、博士達の目的って……。

「そう、協力だ。我々はキリハラを手中に収めたい。研究者として、一軍人としてネ。そして君は一個人としてキリハラを倒したい。違うかネ？」

博士は金歯の垣間見える笑顔でそう言ってくる。

底知れぬ恐ろしさってのはこういう時こういう人間に対して使うんだろうな。

なぜだか知らないが俺の考えてる事は筒抜け。向こうはそれを見越して提案してきている。

下手に高圧的な命令より質が悪いな、こりゃ。

「我々はキリハラの位置を知る術を持っている。君が協力するというならこちらの情報を教えよう」

博士の言葉、そこに裏があるのは明白だった。それが分からない程俺は馬鹿ではない。

だが、そうと分かっていても、俺は心に残る『あの人』への想いを捨てることは出来なかった。

「分かった。協力しよう」

こうして俺は新たな『戦い』に身を投じる事になった。

それは、キリハラが俺の仕掛けた地雷にかかる、少し前の話。

∞クリス・タイタン［後編］（後書き）

次回より本編に戻ります。

［７８］戦いの予感。研究所にて（前書き）

仕事を終え帰宅。

風呂に入る。

冷やしておいたビールを飲む。

全てが報われる瞬間です。

７８話っていうね。

［78］戦いの予感。研究所にて

「……うごっ……」

うごめくゴミ山。やがてその中から、一人の人間が現れる。

「ぶっはぁ……、そして臭ぁっ……！」

クリスは体のあちこちに細かいゴミを付着させつつ、モソモソと動きだす。

「変な所で変な夢見ちまったよ……くそっ」

クリスは言いつつ辺りを見渡す。

「……あそこから出られるかな？」

クリスはゴミ山の中をズブズブ歩きながら、壁に設けられた鉄格子の網目に手を掛ける。

「これくらいなら……」

クリスはそう呟くと、ナイフを取り出し、鉄格子を留めるネジに引っ掛けていく。

バキンッ。

ナイフを滑り込ませネジを全て外し、鉄格子を外す。

「……どこに通じているかは知らないが、行くっきゃないな」

クリスはその穴の中に体を潜り込ませていく。

……。

……。

そしてどれくらい進んだか。クリスはひたすらにほふく前進っぽい感じで進み続けていた。

「一体どこに繋がってるっつーんだよ……」

若干の疲れを感じさせるその言葉を吐き出した次の瞬間だった。

「ん？あれは……」

クリスの視線の先に、今までとは形の違う、なんというか扉みたいになっている部分を発見した。

「さてさて、どこに繋がってるやら……」

クリスはよいしょ、とその場所を開く。

「うわっ……。結構高いな……」

と、クリスが身を乗り出して下の光景を見ていると、

ガコンッ。

「え？」

いきなりクリスの視界が傾く。

というよりもクリスのいる場所が傾いている。

そう、クリスの頭が下に、足が上にいく形で……。

「やばいやばい洒落にならないってえぇぇぇぇ！！」

クリスは重力に従い頭から部屋の中へと落ちていった。

「ごべふっ！」

そして何にも邪魔される事なく床に盛大に落下する。

「あたた……」

クリスはぶつけた所をさすりながら周りを確かめようとする。

「……んだよ、ここ。なんだか無駄に殺風景で広い部屋だな」

クリスがぶつぶつ呟きながら見回していると、

「来たわね！さぁ、私が相手よ！」

いきなり響き渡る女の声。

「この『灰蜘蛛』隊長、ベラ・ルーシェがね！」

ババンッ。とベラは銀色の髪をたなびかせつつ登場する。

「……」

クリスはその様子をポカンと眺める。

「……」

そして、この時点でようやくクリスの姿をちゃんとみたベラの動きも止まる。

「……え、誰？」

ベラはそう言ってゆっくり首を傾げる。

「……あなた、キリハラ？」

首を傾げつつクリスを指差しながら尋ねる。

「いえ、違います」

クリスはなぜか敬語で答えつつ首を振る。

「……じゃああなた誰？ここの兵士……は違うわね。この部屋には一般の兵士は近付けないはずだから」

言いながらベラはクリスに対し警戒心を露にする。

「……素直に名乗ってもいいことはなさそうだな？」

クリスもベラの様子に緊張を感じつつ言う。

「そうね、でもあんたが名乗ろうが名乗るまいが結果は変わらないけどね」

ベラは不機嫌丸出しに繋げる。

「せっかくキリハラと極限ギリギリ刺激だらけの戦いが出来ると思ったのにぃ……！」

ベラはギリリ、と歯ぎしり。

「……は？」

クリスは一瞬『こいつ何言い出すんだろう』と思った。思ってしまった。

「キリハラよ！あのキリハラ！銀蝿と紅鮫倒したっていう、あの！」

「あ、はい」

ベラの熱い言葉がクリスに降り掛かれば降り掛かる程、なぜかクリスは逆に冷めていった。

「そのキリハラと戦えるかもしれないと思って、わざわざ部下を別の場所に待機させて一対一の状況をわざわざ作り出したっていうのに……」

「……」

クリスは『わざわざって言葉が二回出てくるこの女はキリハラとタイマン張りたかったんだろうな』と思ったという。

「侵入者ありって言うから勇んで来てみたら……はぁ。外れの方じゃないの」

ベラは肩を落として大きくため息。

「外れって……」

とクリスは苦い顔でぼそり。

「だってそうでしょう？こんなチャラチャラした雑兵一人……」

スッ。と、ベラの言葉が途切れた時、クリスの頬に傷が生まれ、赤い線が横にそして溢れ縦に伸びる。

「一瞬で殺せちゃうじゃないの……」

ベラのその顔は特務の、人を殺める事を厭わぬ者達のそれに変わっていた。

……。
……。

その頃シンゴはと言えば、並み居る改造生物を薙ぎ倒し、研究所の壁に辿り着いていた。

「よーし、入るか」

そう宣言して俺は両手を合わせて忍法的ドロン的のポーズ。

『またあれですか？』

「その通りです。あれです」

そして俺は壁に手をあてる。やがて手はニュルンと粘っこい液体に吸い込まれるように入り込んでいく。

「うぅ……相変わらず妙な感触ぅ」

『でも多用してるシンゴさんなのでした』

どこで覚えたのかゆめじんがナレーション口調で繋ぐ。

「そして体は透明に……」

スーッと消えてく俺の体。

『もう侵入の鉄板コンボですね』

「見えない聞こえないが一番だよ。侵入の時にはね」

俺は言いつつ自分の入った場所を見渡す。

「……廊下だな」

『……廊下ですね』

国立の研究所なんつうから一体どんな鬼畜じみた場所なんだと思ったが、廊下は普通の廊下だった。

『ていうか、まぁ研究所であって普通の研究者も通りますしね』

「だな。普通で当たり前か」

言いつつ俺は進む。

「さて、どこに行けばそのルターなんとかには会えるんだ？」

『そりゃもうこの研究所の責任者ですからね。それ相応の場所にいると考えるべきかと』

「相応の場所……か。とりあえずここの見取り図みたいなのないか

な?地味に場所が分からない」

俺は辺りを見回す。

さっきまでは誰もいなかったはずの廊下。

しかし、いつ、どうやって現れたのか……俺の背後数メートルの地点に、一人の白衣の男が立っていた。

ぼさぼさの白髪、ゴーグルみたいな眼鏡を掛けたその老人の姿が、俺には不気味にしか映らなかった。

「キリハラだね」

老人は言う。目は真っすぐに俺を捉えている。

「っ!?」

俺は思わず構える。なんだ、こいつも俺の姿が……?

「キミの姿が肉眼では捉えられない＝私には見えていない、という訳では無いという事ダヨ」

老人はダラリとした、余裕?を感じさせる立ち方で、しかし俺をじっと見てくる。

「……」

俺はどう出るべきか考える。こいつをとにかく倒して切り抜ける…

…いや、リスクが高すぎる。現時点では目の前の老人は未知数すぎ

る。

「私はこの研究所の所長、ルター・サイエン。こうして君の前に現れたのには訳があるんだよ」

「訳……？」

というかこいつがルターって奴かよ。クリスはタイミング悪く姿消しちまったもんだ。

「私は研究対象としてキミに見せたいモノがあるのだよ」

「その前になんで俺が見えてるかのメカニズムを教えて欲しいんだがな」

俺がそう言うと、ルターは首を横に振る。

「それは出来ないネ。敵に手札を明かす＋私より明らかに強い敵＝少なくともいい結果は待ち受けていない、というわけだヨ」

ルターは言いながら俺に背を向けてスタスタと通路を進んで行く。

「それに、私はキミにとって有益な情報を持っている。……例えば、クリス・タイタンの事とかね」

「！……お前、もしかしてあいつの居場所を」

俺が言うと、ルターは足を止め、くるりこちらへ振り向く。

「今頃蜘蛛と遊んでる頃カナ？」

それだけ言って再び歩き始める。

「え？……ちょっと待て！そりゃどういうことだよ！？」

俺は声を張り上げるが、ルターは立ち止まる様子すら見せない。

『どうします？シンゴさん』

「……行くっきゃないだろ。あいつの要望通りな」

ゆめじんの問いに軽くそう答えると、俺は開き直りとばかりに透明化を解き、黙ってルターの後を追った。

それからどのくらい歩いたか。ルターの後ろを歩き続けて着いたのは、白くそして広い空間だった。

「なんだよここは……？」

俺が辺りをキョロキョロと見回していると、

「ここでキミにある人物……と言っていいのかは分からないが、会ってもらいたいのダヨ」

ルターはそう言うと、右手を軽くあげた。

「一体なにとっ……！？」

瞬間。背後に感じた強烈な殺気。

俺は反射的にその場から飛び退いて離れた。

そして、俺の居た位置には、白いマントで全身を隠した何者かが、拳を突き出しながら立っていた。

あのままあそこにいたら間違いなくあの拳の餌食になっていただろう。

「会わせたい奴ってこいつのことか……！」

俺は不意打ちされたストレスをそのままルターへの言葉に乗せる。

「その通りダヨ。これこそ才能＋才能＝究極たる者、そのお披露目サ。キミには真っ先に見せたくてネ」

ルターは声高らかになんとも楽しげに言う。

「才能と才能……？なんのこっちゃ」

俺にはルターの言う事と目の前の白マントが結び付かなかった。

「さぁ、『スカル』ヨ！マントを取りその姿を見せヨ！」

ルターが言うと、そのスカルとやらはマントを取る。

「……なんだよこいつ」

そして姿を現したのは、全身を白く機械的に、しかしどこかスマートにコーティングされた、人形の様なそれが立っていた。

「これは我が技術力＋キミの持つ類い稀な才能と実績＝オリジナルであるキミを超えた半生体兵器『スカル』ダ！」

「俺の才能と実績……？」

「キミがこれまでに軍を相手にした戦いのあらゆるデータが奴には備わっているのダヨ。もちろんそれを存分に発揮する為の力もネ」

スカルは構える。どこかで見たような構えだ。

『シンゴさんをコピーした兵器、ってところですかね』

ゆめじんの分かりやすく的を射た呟きに俺は心の中で同意する。

「俺も知らない間に有名人ってか？参っちゃうねまったく」

俺は言いながら構える。

『軽口言ってるとやられちゃいますよ。“自分”に』

「もしそうなったら笑えないな。……じゃあ無駄口はこの辺りにして」

俺は拳に力を込める。

「俺のコピーの出来栄えを確認と参りますか！」

［78］戦いの予感。研究所にて（後書き）

ベラさんが案外書き手を楽しませるキャラであることが判明しました。

これからの活躍に期待です。

では次回。

［７９］最新版・力の使い方（前書き）

タイトルが雑誌の名前みたいになってもうた。

ま、いいか。

７９話。次は節目でござんす。

［79］最新版・力の使い方

「にしても変な気分だよな……」

俺の目の前にいる全身ホワイトの生体兵器とやらが自分のコピー品と言われても正直ピンとこない。

そのスカルは、顔はマスクの様な物を被っている為表情（があるのかは分からないが）は窺い知れない。

「では、私は高みの見物＝安全な場所から見物、と決め込むとするヨ」

ルターは上機嫌な様子で部屋を出ていく。

「……追わないのか？」

「へ？」

喋った。いきなりスカル君が言葉を発した。

「聞こえないのか？私は貴様に疑問を投げ掛けたつもりなのだが」

整然とした低いトーンの声。間違いない、スカルが喋っている。

「……お前が見過ごしてくれるなら追い掛けるけど？」

「それは無理だ。私は貴様を見過ごしはしない」

スカルは微動だにせず言葉だけ発する。静止画見てるみたいだな。

「私にとってはやっと巡ってきたこの機会。みすみす逃すなど愚行は犯さぬ」

「やっと……？」

今まで微動だにしなかったスカルの体に若干力が入った、ように見えた。

「私の戦闘能力は貴様の能力を土台としている。それを知った日より私は貴様に興味を抱いた。当然の感情だ」

スカルは言葉を繋げる。

「私は日々の訓練と実験により己が体に宿った力の強さを実感していた。そして単なる興味は徐々に形を成していった。こうして戦う機会が欲しいという風にな。一種の欲求だ」

「随分饒舌に喋ってくれてるが、要するに俺と戦いたくて仕方ないんだろ？」

スカルから感じるただならぬ、執念にも似た雰囲気に、俺はほんの少し困惑していた。

「私は貴様の劣化型の模造品ではない事を、今これから貴様を倒し証明する。それが最大級の説得力となる」

「どーでもいいが凄まじい気持ちの一方通行だなおい。俺の意志は聞く気ないのね？」

「無論だ。私の最大の願望の前にはいかな他人の意志も壁にはならぬ。当然の判断だ」

オリジナルを倒したいという願いの前にはオリジナルの言葉も無意味ってか。

「……とにかく戦うしか無いのかね、こりゃ」

『ええ。言葉通り、見逃してくれるとは到底思えませんね』

俺を倒す事に執念を燃やす俺の力のコピー兵器。複雑な気分にさせられるな全く。

「話はこれくらいでいいだろう。私が貴様と対峙する理由は十二分に理解してもらえたと考える。至極当然の解釈だ」

スカルはそう言ってジリジリと俺との距離を縮めてくる。

「なんつーか本当人の話聞かないなこいつ……。ま、やるしかないのは分かってたけどよ」

『そういう所ちょっとシンゴさんに似てますよね。』

「は？俺が人の話聞かないって言いたいのか？」

ちょいとカチンときた。

『あれ、身に覚えないですか？』

「……あるな」

そして自己嫌悪。

とかやってる場合じゃないな。そうこうしてる間にも奴との距離は縮まっている。

「はぁっ！」

スカルから雄々しき掛け声。と同時に奴の姿が視界から消える。

「……っ！？」

俺は一瞬困惑するが、しかし次の瞬間背後から迫る奴の拳を裏拳の要領で弾く。

「いきなりご挨拶だなおい！」

スカルはヒット&アウェイのつもりか一旦俺から距離をとる。

「貴様もよくやる戦法であろう。防いだのはさすがというべきだな」

「上から物言ってんじゃねーぞごらぁ！」

俺は拳に乗せた衝撃波を奴めがけてストレートに放つ。

「その程度では……！」

スカルは横に跳んで衝撃波をかわす。

「まだ終わってねぇよ！」

俺は瞬間加速でスカルの目前に迫る。

「そういうことか！」

スカルは両腕を交差し防御の姿勢。

「そういうこと、だっ！」

俺は防御の上から全力の拳をぶち込む。

スカッ。

ぶち込んだつもりだったが、俺の拳はスカルに当たらずただ空間に放たれるだけの形になる。

「ただ当てる受けるの繰り返しではつまらないからな」

横からささやかれるスカルの声。

「少々小細工を弄させてもらった……ふん！」

「がっ！」

瞬間、背中に強烈な衝撃が走る。

俺の体は床をバウンドしながらゴロゴロと勢いのままに転がる。

「ぐぅっ……！」

「小細工と言っても難しい事はしていない。貴様の攻撃を流させてもらっただけなのだが。予想外の効果だ」

スカルはゆっくりと俺に近付きながら言う。

ていうか攻撃を流す？あれか相手の力を利用するっていう合気道みたいなのやられたのか？

ちくしょう。俺らしくないことしやがるじゃねぇか……。

「いつも力任せに戦う貴様には少々難度の高い戦い方だったかもしれないな」

「てめぇの力の大元に対して随分な物の言い方だなこの野郎……！」

俺は立ち上がりスカルを睨む。

「だがそうだろう。貴様は絶大な力を持ち合わせている。だがいつもその力を子供の遊びのように振り回す事しか出来ない。なんとも滑稽な事だ」

「何を……っ！」

「だから私は戦う術を身に付けた。力は貴様のそれをそのままに、貴様にはない技術を会得した。だから私は貴様に負けはしない」

スカルは大きくこちらへ踏み込んでくる。

「っ！！」

俺は咄嗟に拳を繰り出しスカルの攻撃を防ぐ。

「まともな打ち合い、力比べならば私には利はあるまい。だがそこに一滴の技術を加えれば」

スカルが俺の腕を掴む。そして次の瞬間俺の視界はぐりんと回転した。

「ぇ……！？」

状況を理解する間もなく俺の体は床に叩きつけられる。

「派手な戦いに慣れた貴様にとっては耐えられぬ地味な戦いかもしれないな。しかしそれでいい。私は貴様の力を受け継ぎつつしかし貴様に出来ぬ戦いで勝つ」

それは執念、気迫、そんな言葉が似合う口調。

俺は完全にスカルのペースにはめられていた。

全身に走る痛みに悶えつつ俺は焦りを感じていた。

……ん？

こいつのペース？

ってつまりあれだよな。合気道まがいの技を中心にしてくる戦いだよな。

こいつは地力じゃ俺に勝てないからそんな戦い方してるんだよな。

まぁ、その他諸々プライドとかもあるんだろうけども……。

瞬間。俺の脳に閃き来訪。というかなぜこんな簡単な事に気付かなんだ。

こいつは俺の力を力をと言うが、俺の力の何を使ったかといえば精々が戦い方やいわゆる衝撃波っぽいやつだけ。

他の、いわゆる応用的な力は無いんじゃないか？

俺は今までの戦いで様々な、それこそ自然の摂理を無視したような力を乱発してきた。

奴にはそれが出来ないんじゃないか？

もしそうならば、付け入る隙はいくらでもある。

「どうした？まさかもう終いとでも言うのか？」

スカルの、どこか勢いめいた余裕を感じる言葉。

「まさか……まだ、俺の『力』を全然見せれてないしな」

「何を……」

瞬間、俺はテレポートで奴の背後に回り、奴の体を掴む。

「例えばこういうのとかな！」

バチバチと弾ける青白い光が俺からスカルへと繋がり渡っていく。

「っがぁ……！？」

それ即ち電撃なり。もちろん手加減なんて言葉は知らない。

「ぐっ……なにを……！」

スカルは体を振り回し俺を振りほどく。

「言ったろう。俺の力を見せるってよな！」

「……そういうことか。貴様、魔術の様な技を使うと聞いてはいたが、これがそうか」

「そゆこと。ま、魔術とは全く別物だけどね」

言いながら俺は次の攻撃の準備に入る。

「そして今回は特別にその最新版とも言うべき技をお見せしましょう」

「最新……だと……？」

スカルから訝しげな声。その間も俺は力を溜める。

第二回、無地からの脱却。

俺の体は吹き出す炎に包まれる。

「ふんがぁぁぁぁ！」

やがて炎はあるものへと収束していく。

Tシャツに刻まれるは「炎」の一文字。

「充填完了だこの野郎」

「な、何だそれは……そんなものは知らない！」

目に見えて、と言っても表情は分からぬが、困惑している様子のスカル。

「そりゃそうだ。こいつはついさっき編み出したんだからな」

思い付き万歳。

「でもってこいつの可能性は俺もまだ計りきれてないから……お気を付け遊ばせってな！」

俺はスカルへ大きく一歩を踏み込む。

「っ！……どんな力を使おうが戦い方が一緒ならば！」

「一緒じゃねぇさ」

俺とスカルの距離が縮まった瞬間、噴き出す炎がスカルを襲う。

「なっ……！」

「力押しだけが『俺』じゃねぇって事を教えてやるよ！」

噴き出す炎はスカルを囲むように広がっていく。

「この程度……っ！」

スカルは勢い良く地を蹴り空中へと跳び上がる。

「この程度じゃねぇさ！」

俺は広がった炎を再び収束させつつ、スカルを追って空中へ。

「うぉっしゃぁ！」

俺はスカルの正面に回り、両腕を掴む。

「何を……！？」

スカルは脱出を試みようとするが、そうは問屋が卸さない。

「さぁ、ジ・エンドだスカル！」

刻まれた炎の一文字がフラッシュをたいたかのように閃光を放つ。

「……これが俺の力だ！」

全ての炎エネルギーが凝縮され形成された『炎の拳』。

俺の胸部から放たれたその一撃は、スカルに命中するやその体を吹き飛ばし、床面へと激突した。

「がっ……！」

スカルの胸には拳の形に残る焦げ跡。

「なぜ、だ……！」

スカルは俺へと手を伸ばす。が、その手はやがて力なく落ちていった。

恐らく気を失ったのだろう。

とにかく勝った。今回はひたすら力に救われたとしか言い様がないな。

「改善の余地あり……ってか」

俺はゆっくりと降りながら呟く。

色々と考えるべき事は出来たが、今はそれどころではない。

「クリス探さないとな」

俺は部屋を後にした。

「79」最新版・力の使い方（後書き）

次回は８０話。

ウルトラマン８０です。

言ってみたかっただけですが何か？

では次回。

［８０］雑兵と小麦粉（前書き）

８０！

八十！

エイティ！

……！

ウルトラマン８０！

はい、８０話です。

［80］雑兵と小麦粉

クリス・タイタンは逃げていた。

「はぁっ……！」

息を切らしながら、もつれそうになる足を踏張って、ひたすら入り組んだ通路を追ってくるたった一人から逃げていた。

「逃げるわねー。でも追い掛けるのってあんまり趣味じゃないのよねー。なんかこう、最初はいいんだけど段々イラってくるのよね」

クリスを追う者『灰蜘蛛』ベラ・ルーシェは、息を乱さず滑るような身のこなしで追跡を続ける。

「で、今まさにイラってきてるのよ。つまんないったらないから早く死んでよ」

ベラはクリスに向けた指をちょんと弾く。

「っ！！」

クリスの頬に真新しい傷が出現する。

「くそっ！」

どういう原理の何で攻撃されてるのかまるで分からない。クリスはただでさえ逃げ続けで働かない頭をフル回転させるが、まるで答えには至らなかった。

「とにかく逃げるっきゃないってなぁ！」

クリスは懐から手榴弾を取り出すと、迷わず床に叩きつける。

瞬間、手榴弾から飛び出す煙が視界を覆う。

「よし、今の内に……！」

「今の内に、どうするのかしら？」

ザクッ。とまるで肉塊を勢い任せに切った様な音。

クリスは一瞬何から発せられた音なのか分からなかった。

しかし、次の瞬間背中を襲う強烈な、焼いた鉄を押しつけられられた様な痛み。

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？？」

クリスは前のめりに転がる様に倒れる。

「ふぅ。なんか追いかけっこも本格的に飽きたからもうあんた死になさい」

ベラの背中から伸びる蜘蛛の脚。その一本から白く光刃が見える。

「はっ……ぐぁ……！」

クリスは今すぐ痛みに体を任せて床を転げ回りたいのを必死に耐えて、壁に手を付きながら立ち上がる。

「あらら、なかなかしぶといのね。今のは結構容赦なくいったつもりだったんだけど」

ベラは言いながら蜘蛛の脚を、その先端の刃と共に振りかぶる。

「調子に乗んなよ蜘蛛女……！」

クリスは壁に付いていた手を離すと、耳を塞ぎながら走りだそうとする。

「何をっ」

ベラがその背中を刃で捉える前に、その視界は真っ白に染まる。

ベラはそれがクリスが仕掛けた物だとすぐに気付くが、目と耳をやられ動くに動けない。

「でえぃりゃぁ！」

直後、クリスの渾身の蹴りがベラの腹部を直撃する。

「がっ……！」

ベラは体を前かがみに曲げ、腹部を抑える。

「じゃあな！」

クリスは自身の一撃が多少でもベラにダメージがあったことを確認すると、そのまま通路を走り、ひたすらにベラから距離を離す。

「あんなので倒れる訳がない……。何か、何かないか……！」

クリスはなるべく多くの角を曲がり少しでもベラに追い付かれまいとする。

ベラはといえば、先程までの余裕に満ちた表情からは一変。

憎悪に顔を歪ませ、怒りに身を震わせていた。

「あんな雑魚に……許さない！八つ裂きにしてやるわ、原形なんて無くなるくらいぐちゃぐちゃにしてやる！」

ベラは蜘蛛の脚で壁を突く。

そこには何かが炸裂した跡と、その周りに粘土の様な物が付着していた。

「こんな小細工に……！」

クリスはベラに襲われた際、咄嗟に閃光弾を壁に取り付ける際に使用する粘着性の物質に付けて壁に叩きつけたのだ。

それによりベラは目線の高さで閃光弾の強烈な光を浴びる事になり、多少なり隙が生まれた。

「もしそこまで考えてやったって言うのなら……雑魚と言えど少しは認識を改めるべきかしらね……」

ベラは壁を突いた脚を更に壁が砕ける程に押しつける。

「まぁ……結果は変わらないんだけどね！」

ベラが追ってくる。

その気配に気付いたクリスは焦っていた。

手持ちの爆弾や閃光弾などは既に使い果たし、他の武器、拳銃も数える程しか弾は残されていない。

「絵に描いたようなピンチってか……」

クリスの脳裏に、ふとシンゴの姿が浮かぶ。

巨大蜘蛛との戦いの最中にクリスは思いがけずその場を離れる事になってしまったが、あいつは無事だろうか、と。

「いや、あいつなら……」

爆弾をものともせず、自分達よりはるかに巨大な獣をぶっ飛ばしたあの男なら、あんな蜘蛛程度なんてことはないだろう。

「羨ましい……のかね、俺は」

あの男程の力があれば、全てを変える事が出来たかもしれない。

リリアス・アリド大尉だって救えたかもしれない。少なくとも救おうとする事くらいは出来たはずだ。

だが、俺は出来なかった。

力が無かったから？違う、それは言い訳に過ぎない。

俺には何も出来ないだろうと決め付けて、それを盾にして逃げたのだ。

当然後悔はした。飽きる程に。

だから、俺は今こうしてその時の過ちを取り返そうと戦っている。

「そうだよ……。うじうじやってる時間は終わりだろうが……クリス・タイタン！」

クリスは頬をパンッと叩く。

敵は、ベラ・ルーシェは強い。正面から戦ったら俺など障害にもならないだろう。

だが、現実の俺はどうだ。そのベラ・ルーシェ相手に瞬殺されるどころか不意を突いての一撃すら見舞っている。

そう、頭を使え。奴らは強いが逆に言えばその圧倒的な強さが弱点だ。

「……ん？」

考えを巡らせる俺の視界に、ある部屋への扉が現れる。

「……これだ！」

クリスはそう言って部屋の中に駆け込む。ドアがわずかに開いたままなのも、気にはしなかった。

「どこに逃げたって言うのよ……！どこに逃げても無駄なのよぉ。ここから外に出る道は完全に封鎖されてるもの……。だからおとなしく出てきなさい！」

ベラは目に入る部屋のドアを脚を使って、まるで紙切れの様に次々に破って中を確認していく。

そして、ベラの視界はやがて不自然に開いたその扉を発見する。

「おっやぁ～……」

ベラは扉に脚を掛けると、一気に引きちぎる様に破る。

「食糧倉庫……。これまた変な場所を死に場所に選んだものね」

ベラは言いながら、倉庫の奥にいる、クリスを睨む。

「ああ、確かにな。……特務の隊長さんの死に場所には物足りないかもな」

クリスは額に大粒の汗を流しながら、しかし口元に笑みを浮かべながら言う。

「……本当口が減らないわね。雑兵が調子に乗るんじゃないわよ」

ベラは背中の脚の先端を一斉にクリスに向ける。

「調子に乗るなはこっちの台詞だぜ、蜘蛛女……！」

クリスは食糧の詰まった麻袋が積まれた棚に隠れる様に移動する。

「あらぁ？偉そうに啖呵切ってもやることは一緒？さすが雑兵、やる事に芸が無いわね！」

ベラは脚から『糸』を繰り出し、クリスのいるであろう辺りを狙い撃つ。

糸は袋にも当たり、白い粉の様な物が舞う。

「ほらほら、勿体ない事させないでよ！」

ベラは高らかに笑いながら次々に糸を放っていく。

クリスはその糸を避けながら、棚の隙間から拳銃を一発、ベラに向かい撃つ。

弾丸はベラの顔の近くを通過したが、ベラ自身は全く動じない。それどころか笑みすら浮かべている。

「これまた勿体ないわねぇ。知ってるのよ、あなたもうほとんど爆弾も弾もないんでしょ？なのにその貴重な一発無駄にしちゃったわねぇ？」

ベラは倉庫に響く大きな声で言う。しかしクリスからは何のリアクションもない。

「……本当につまらないわね。まぁいいわ。じっとしてては私こそ芸が無いってものね。今そっちに行ってあげるから待ってなさい！」

ベラは倉庫の入り口に無数の糸で『封』をすると、ゆっくりと倉庫の奥へ歩いていく。

「こんな所にわざわざ逃げ込んで……。何かうまく逃げる為の策でもあるんだろうけど」

ベラは脚をバラバラの方向に向ける。

「全部無駄にしてやるわ」

脚から放たれる鋭い糸。それは棚に積まれた袋を破り、白い粉を撒き散らしながらありとあらゆる場所を攻撃する。

「さぁ、どこにいるのかしら？私こういう絶望を与える側ってのも嫌いじゃないけど、でもやっぱりつまらないから早く出て来て死んでちょうだい！」

ベラの叫びと共に糸の攻撃は激しさを増し、辺りは舞い上がる粉で白く染まる。

「……いい加減に出てきたらどうなの？」

ベラはため息と共にそう口にした。

その瞬間だった。

ガタンッ。という音と共に棚が崩れ、隣接する棚を巻き込みながらベラに覆い被さっていく。

棚に積まれていた袋は先程までのベラの攻撃で多くが破れており、倉庫の中は真っ白。視界も完全にふさがりホワイトアウトの様相を呈する。

「えほっ……げほっ……！なんだっていうのよ……派手な目眩ましでも仕掛けたつもり……！？」

ベラは倉庫の入り口に目を向ける。しかしそこはベラが『封』をしたままの状態であった。

「てめぇの弱点を教えてやろうか？」

舞い上がる粉塵の中に浮かび上がる影。それは確かにクリスの声だった。

「弱点～？今の小細工で調子に乗ったのかしら？私の目を誤魔化したくらいでいい気にならない方がいいわよ」

ベラは影の方に脚を向ける。

「それだよ、てめぇの弱点は……！」

クリスの影は、手に持った長く太い何かを床に叩きつける。

舞い上がる粉塵。視界は更に白に染まる。

「この期に及んでまだ俺の行動を『逃げる為の目眩まし』だと決め付けている」

影は、もう一つ手に持ったそれを掲げる。

「おれが『どんな反撃』に出るかなんて考えずにむやみやたらに攻撃をした。てめぇは強いからな、そんなごり押しでもどうにかなるだけの力があるんだろうよ……だがな、力だけじゃどうにもならない時もあるんだぜ！」

手に持ったそれは、カチャリ、と軽快な金属音を奏でる。

「これが俺の最後の『爆弾』だ」

ジュッ。という音。

それはクリスの持っているライターが発火した音。

そしてクリスはそのライターを粉塵の中に投げ込む。

粉塵爆発。

舞い上がる小麦粉の霧は一瞬にして強烈な爆薬と化す。
爆破の範囲は倉庫全体。
その中心にいたベラは、為す術なくその巨大な爆発に巻き込まれる。
だが、彼女は倒れない。体中を火傷に覆われようが、倒れない。
「はぁっ……はぁっ……！」
それは一種の執念か、プライドか。
苦しげな呼吸の中で、彼女は鋭く血走った目を光らせる。
「雑魚が……！あんなのにやられはしない！私は……この程度では倒れなっ」
ベラの言葉を遮る様に、乾いた破裂音が焼け焦げた倉庫に響き渡る。
「な……んで……」
ベラの目が一瞬虚ろになり、その体は力なく倒れる。
「……あの爆発でてめぇを倒せないかもしれない。その可能性は俺だって考えたさ」
先端から細く白煙をあげる銃をしまいながら、クリスは言葉を繋ぐ。
「だから俺はこの一発に賭けた。泣いても笑っても最後の一発……言ってみればあの爆発はこいつを当てる為の盛大な『目眩まし』っ

ところだな」

クリスは言いながら足元に目を向ける。

クリスの足元の床は一部分だけが外され、地下に通じる梯子が伸びていた。

「地下の貯水槽へ通じる梯子……。強さでどうにかなったてめぇにはこんな場所……知る訳ないか」

クリスは自身が内部に入り爆発の衝撃を回避する為に開いたその床をぱたんと閉じる。

「さて……」

クリスは倒れているベラを横目に見ながら、倉庫の入り口へ向かう。

「……これからは、雑兵にも敬意を払うこったな」

クリスが気を失って倒れたのはその三歩先のことである。

［８０］雑兵と小麦粉（後書き）

次はめざせ９０話ですね。

その頃にはどんな物語になってる事やら。

楽しみですね。

前書きは気にしないで下さい。ええ。

では次回。

［81］軍医ジョン・カーペン（前書き）

31アイスクリームがあります。

でも81アイスクリームはありません。なぜ？

……。

そんなに味作れないってな。

Q，何の話

A，とりあえず81話です。

［81］軍医ジョン・カーペン

どうも、キリハラシンゴでございます。

いつの間にか姿を消したルターこの野郎とクリスを探していたところ、突然凄まじい爆発音が聞こえた為現場急行なう。

「焦げ臭っ！なんかこう、パンかなんか焦がした臭いがする」

その現場に近づけば近づく程その鼻にこびり付くような臭いは増していく。

そして、俺は程なくしてその発生源であろう場所にたどり着く。

そして俺がそこで目にしたのは……。

「クリスっ！」

ボロボロのクリスと、それに群がる奇妙な格好の……多分帝国軍の奴ら。

これを見た瞬間俺の中の『あいつが危ないセンサー（初登場）』が一気に針を振り切り、俺に行動を促す。

「貴様、誰でゅはぁ！」

先制のストレートパンチで一人をぶっ飛ばす。

「くっ……！」

その一瞬の出来事で俺にただならぬ何かを感じたのだろう。もう一人は華麗なバックステップで俺から距離を取る。

「侵入者を拘束する！」

兵士はそう言うやいなや、手の甲から白い糸を噴射してくる。

「なんじゃこりゃ……！」

糸は散弾銃の様に縦横に広がり、俺に襲い掛かる。

体のあちこちに付着した糸はねちっこく動きの自由を奪ってくる。

「よし、侵入者の排除を実行する！」

兵士は手首に仕込んであった鋭い針を俺に突き立てる。

「ふんぬっ！」

だがその針は俺の鋼のボディの前には意味を為さず、金属音と共に弾き返す。

「なっ……！」

兵士は驚いた様子だが、しかし怯んだのは一瞬。すぐにさっきまでの糸攻撃に切り替える。

「排除から捕獲へ、遂行目標を変更！」

無数に放たれる糸は俺の体から自由どころか俺かどうかパッと見分からない糸の塊にしてしまう。

「捕獲完了！」

兵士はさっきよりちょいテンション高めの声で宣言。

視界が糸で真っ白になってしまったが多分いい顔してるに違いない。

『シンゴさん、捕獲されちゃったんですか？』

余裕しか感じないゆめじんの問い。

「まさか。俺を捕獲したいと言うなら……」

瞬間、俺という名の繭は炎に包まれる。

その燃える繭を割って出るは炎の一文字Tシャツが目印シンゴ君です。

「まずは耐熱耐火の加工をしとかないとな」

そんな俺の様子に目に見えて慌てる兵士。

「き、貴様炎使いか！」

「ノンノンノン……」

俺は人差し指をくいっと曲げる。

『うざいですねー』

とりあえず無視。

「俺はそんな括りにゃはまらねぇ」

曲げていた人差し指を兵士に向ける。

「なんでも使えるからな」

ビリッと轟く青白い閃光。

俺から奴への電撃ビームである。

「ほげっ……！」

兵士は奇妙な断末魔をあげて倒れる。

さて、これで当面の敵は片付いたかな……。

俺はそう思ってクリスを抱えあげる。

「まずはこいつどうにかしないとな……」

クリスは意識を失っており息も絶え絶え。とにかく処置を、と思ったが……。

「そうはいかねぇってか……」

通路に響き渡る無数の足音。後続が来ちまったか。

倒すだけならまるで問題ないがこいつ守りつつしかも時間は掛けてられない。

かと言ってテレポートしようにも俺自身がこのこの建物をよく理解してないからどこにどう飛べばいいか分からないし……。

悩む。しかしそんな時間はない。

「こっちだ！」

「え？」

突然背後から響く声。

「こっちに来るんだ！早くしろ」

振り向くと、いつからそこにいたのか白衣の男が立っていた。

「奴らはもうそこまで来てる！さぁ、早く」

俺は一瞬迷ったが、ここにいても敵に見つかるだけ。一か八か謎の白衣の男に賭けてみる事にした。

「なんだかよく分からないが……逃がしてくれるのか？」

「ああ、とにかく安全な場所へ案内する」

白衣の男はとにかく来いと手招きする。

「……よし」

俺は白衣の男の後についていった。

男が案内したのは通路の一角にあるごく普通の部屋だった。

「その奥に隠れていろ。早く！」

言われるがまま俺はクリスを抱えたまま部屋の奥に隠れる。

「……」

しばらくは部屋の周辺をドタドタと慌ただしい足音が往復していたが、やがてそれも遠ざかっていく。

「……行ったか。おい、出てきていいぞ」

男の声、を合図に俺は奥から顔を出す。

実は罠で敵が待ち伏せ。なんて展開も考えたが、部屋には男しかいなかった。

「奴らもまさか現役軍医の部屋にかくまったとは思いもしなかったんだろうな」

男は言いながらベッドの上から物をどかしていく。

「さ、すぐにそいつの治療に入る。ここにうつ伏せに寝かせてくれ」

「あ、ああ……」

俺は言われるがままクリスを寝かせる。

「幸い炎症はまだ起こしていないが危ない状態に違いはない」

言いながら手際よく処置を施していく。

「あんた、一体……？」

誰なんだ。そう言う前に、

「俺はここの専属の軍医でな。こいつ、クリスとはちっとばかし縁があるんだ」

「縁？」

「ああ、俺が以前いた基地でこいつとは一緒の部屋だったんだ。短い間だったけどな」

喋りながらも手は止めない。見事なもんだ。

「よし、とりあえずこれでいいだろう」

男はふうと大きめに息を吐く。

「命の危機はどうにか脱するはずだ。後はこいつ次第だ」

男はオールバックの髪を更にかきあげながら言う。

クリスはと言えばここに到着した時よりは若干表情が柔らかくなっ

ている気がする。

「そういえばまだ名乗りはしていなかったな。俺はジョン・カーペン。さっき言った通り軍医をやっている」

「俺もそれらしい情報は何も言ってなかったな。俺は桐原慎吾。旅の男みたいなカテゴリーにでも括っといてくれ」

俺が名乗ると、ジョンは一回頷いて、

「そうか。よろしく」

とだけ言った。

「……ってあれ？それだけ？」

最近会う軍の奴らは俺の名前を聞いただけで結構なリアクションをしたのだが……。自意識過剰？

「これでも軍人のはしくれだからね。君の話はいくらでも聞いた事があるよ。多分それで驚く連中にばかり会ってきたんだろうね」

ジョンはすらすらと俺の考える事を当てる。

「俺も実際会うまではどんな奴かと思ったが、恐怖以上に単純な興味があってね」

「興味？俺に？」

「あの馬鹿げた実験を止めてくれた命知らずがどんな奴なのかと思

ってね」

ジョンは言いながら微笑む。

「馬鹿げた……そんなこと言っていいの？」

目の前のこの人は現在進行形でその組織にいるはずなんだけど……。

「確かに。上に聞かれたら首が刎ね飛ぶだろうね。しかしね、内情を知る立場だからこそその愚かさも分かるんだよ」

ジョンはそう言って話を続ける。

「俺もそんなに詳しく内容を知っていた訳ではないし、途中であの基地を離れたからとやかく言えないかもしれない。だがあの怪物をどうにかして自分達の懐刀にしようとした上の奴らは狂っていたとしか言い様がない」

「なんで基地を離れたんだ？」

「少し体調を崩してね。専門の医療機関でないとどうにもならないからって事で特例で一時的に離れたんだ。この基地で見たことは決して口外しない事を約束させられた上でね」

情けない軍医だよ。とジョンは自虐的な笑み。

「で、俺が離れてる間に基地は地図から姿を消したのさ。君の活躍はその辺りだね」

「で、今に至るってこと？」

ジョンは頷く。

「あの基地の事を深く知る下っ端はクリスと俺だけだ。クリスはともかく俺は監視の意味も含めてこの研究所に配置したんだろうな」

「ジョンはあの実験……ギャラスの事を知ってるのか？」

俺の問いにジョンはもう一度頷く。

「この研究所に来てから命懸けで調べたよ。そして、俺は恐ろしい事を知ってしまった」

「恐ろしい事？」

ジョンは俺の問いを待っていたかのように再び頷き、言葉を紡ぐ。

「元々孵化に成功したギャラスは双子、つまり2体存在した」

「ああ、それは知ってる」

バルドーさんが言っていた事だ。

「内1体は君が撃破した。さて、残るもう1体だが……」

ここまでのジョンの言葉を聞いて俺はまるでいい予感がしなかった。

そしてその予感は……。

「この研究所にいる。大事に大事に培養液のカプセルの中に収めら

れてるよ」

的中した。

俺の脳裏にかつて戦った化け物の姿が浮かぶ。

人間の本能的な恐怖の感情を揺さ振るあの化け物が、ここに……。

「あれは生かしておいてはいけない。軍が実験の為にと生かしておけばいずれ必ずその軍に対し牙をむく」

「……どこにいるんだ？」

気付けば俺は聞いていた。

「俺がブッ潰す。だからあの化け物の居場所を教えてくれ」

「……正直、君がそう言ってくれるのは願ってもない事だ。だがこれはリスクの高い仕事になる。命懸けの、な」

ジョンは俺の覚悟を確認する、といった感じで言ってくる。

「……今更だよ。俺は一度あいつと戦ってる訳だし。あいつ放っといたら危ない事は身を以て知ってるしな」

俺は腹を撫でる。

「……第2研究棟だ。そこに奴はいる」

「分かった。じゃあちょいと軍の危ない実験潰してくる」

俺は早速部屋を出る。

「さって、ゆめじん。その研究棟までのナビよろしく」

『はいはい。まずは右手を真っ直ぐですね』

「はいよ。いざ化け物退治と参りますか」

［81］軍医ジョン・カーペン（後書き）

「びっくりしたなぁ！」

という言葉に驚かされた事があります。

で？っていう感じっすね。さーせん。

では次回。

［82］第2研究棟にて（前書き）

冬の歌うたいます。

いーぬはよろこび庭駆け回りー♪

ねーこはこたつを丸くするー♪

……。

82話だにゃー。

［８２］第２研究棟にて

俺は研究所の通路を進む。

「透明化マジ便利」

基本姿見えないし。

「反重力マジ便利」

何も無い天井付近を安全に移動できるし。

『まぁ確かに便利ですね反重力』

「そう。便利なんだよ反重力！」

『……ちょいとあからさま過ぎやしませんかね』

「かもな。この辺にしておこう」

これ以上はなんとなく気まずい気がしたのでここからは黙って進みます。

「第二研究棟。案外近かったな」

俺は既にそのエリアに入り、目標がある部屋に向かっている。

「さて、さっさとギャラスをぶっ飛ばしてジエンドと洒落こみますか……ん？」

『どうかしましたか？』

軽く軽口を叩いていた俺の鼻腔に今まで感知しなかった臭いが届く。

「いや、なんか変な臭いが……」

俺が感じた臭い。それは明らかに俺が目指す部屋から流れ出ていた。

「おいおい……。ここにきて洒落にならないのはやめてくれよ……」

この臭いには覚えがあった。生物を腐らせた様な、異臭。

「なんでこう嫌な予感を彷彿とさせる事しか起こらねえんだよ……」

俺は扉の前に立つ。両開きの背の高い扉。

俺は扉に手を掛ける。

「……」

だが掛けた手がなかなか動かない。

『シンゴさん、大丈夫ですか？』

「大丈夫……。ちょいと嫌な事思い出してただけだから」

俺は力を込めその扉を勢い良く開く。

そして、

「……っ！！」

その先に広がる光景に絶望した。

倒れているのは数人の研究者。

辺りに飛び散るは彼らのであろう赤い、血。

部屋の中央には円柱のカプセルがあるが、割られていて中に何があったのかは分からない。

「なんでだよ……」

あのカプセルにギャラスが？とか頭の端で考えた気もしたが、今の俺はそれどころではなかった。

「また人が死んでる……」

目眩を感じた。足から力が抜けそうになるが、近くの壁に手をついて踏張る。

『シンゴさん！大丈夫ですか？』

ゆめじんの心配そうな声。いつもなら冗談混じりに返すところだが今は出来そうになかった。

「……慣れねぇよなぁ。いつまでたってもさ」

『……まともな人なら皆そうなります。つまりシンゴさんがまだま

ともな人間である証拠ですから安心してください』

「……なるほどね」

ゆめじんのフォローが少しは気を楽にしてくれたのか、俺は落ち着いて部屋の中を見渡せるまでに回復する。

「で、こりゃどういう事だろうな」

よく見れば部屋の中の他の機材みたいなのもちょいちょい壊れてる。

『何かがここで暴れた。そう考えるのが妥当でしょうね』

「問題はその何かだな。カプセルの中のギャラスが飛び出してきたとか？」

俺は割られたカプセルを眺めながら言う。

『しかし通路はほぼ無事な状態でした。扉もきちんと閉まってましたし、奴が単独で暴れたとは少し考えにくいと思います』

確かに。室内は荒れてるが、壁をぶち抜いた穴なんかも無いしな。

「となるとますます分からん。一体誰がこんな事を……」

『生きてる器材を探してみましょう。何か手掛かりが残ってるかもしれません』

なるほど。と俺はゆめじんの指示通り機械の画面をチェックしていくが、はたと気付く。

「もし見つけても俺操作出来ないぞ？」

『……だーいじょうぶです。なんとか、なりますよ』

「最初の間はなんだ？あと変な所で区切るな不安になる」

『まぁ、なんとかなりますよ。私もいますし』

ね？とゆめじんは俺をなだめすかしに入る。

「……ま、やるだけやってみっか」

と言って探してはみるが、どの機械も見事に壊れていて使い物にならなかった。

「もはや狙って暴れたと考えたくなるな……ん？」

諦めかけたその時、俺の視界の端に小さく点滅する機械の姿が。

「なんか見つけた」

片手に収まるサイズの長方形の機械を手に取る。

『なんでしょう？電源が生きているという事はこれ自体で何かの機械って事ですかね？』

「かもな。だが一体なんの機械なのか……」

俺は両手でくるくる回しながら機械の全体像を見る。

カチッ。

「ん？」

気付かない内にどこかのスイッチを押したのか。機械がブウゥゥンという音を発しだす。

「なんか動きだしたぞ！」

“……ザッ……！……ッ……”

「そしてなんか聞こえてきた」

ラジオのチューニングを行っている時の様なノイズがしばらく続く。

“……”

「……黙っちまったな」

俺は音を聞き逃すまいと機械に耳を近付け

“やめろっ！！”

たことをすぐに後悔した。

突如響いてきた声。切羽詰まった様子の男の声だ。

『もしかして、録音装置を搭載しているのかも……』

「ボイスレコーダーみたいなものか」

『ええ、とにかく聞いてみましょう』

俺は頷くと、機械の発する声に耳を傾けた。

“ザッ……貴様、自分が何をしているのか分かっているのか……ッ”

若干ノイズが残る中、なにやら不穏な台詞が聞こえてくる。

“……ッ……ザッ……！”

距離が遠いのか相手の声はほとんど聞こえない。

“立場を弁えろ！貴様は我々が生かしているのだぞ。恩を仇で返そうというのか！”

この声の主はもしかして部屋の中の遺体の中にいるかもしれない。

声に若干怯えが混じっているのも恐らくは襲撃してきた奴が自分よりも強いからだろう。

だが、生かしてる？ってのかどういう事だろうか。

“や、やめろ……っ！ここの人間を手に掛けるという事は己の首を絞めるということだぞ！”

男の声以外にも周りで何かが壊れる音や、人の悲鳴の様な声が聞こえる。

“なぜだ……！なぜそうまでしてギャラスにこだわるんだ！……ぐ

ぅっ！
”

男の苦しげな声と共に、ここでガチャリと大きな音がする。

この時こいつを落としたのかもしれないな。

“……ッ……めろっ……ッ！
”

落として距離が開いたのだろうか。一気に声が聞こえ辛くなる。

“……には……ッ……必要……だから……ッ……
”

ここで初めて襲撃者の物と思われる声が聞こえる。

俺は聞き逃すまいと機械に耳を寄せる。

誰だ？一体どいつがギャラスを持ち出した？

ひどいノイズに混じる声を聴覚を鋭く聞き取ろうとする。

だが、直後に部屋の外から響いてきた足音に、俺は思わず機械から耳を離す。

この無意識の動作は図らずも俺自身を救う事になる。

目に飛び込む少量の光。何だと考える間もなくその光に吹き飛ばされる手の中の機械。

一瞬だった。吹き飛んだ機械は中身の部品を撒き散らしながら床に散乱する。

閉まっている扉には光が通り抜けたであろう小さい穴が空き、少量の煙が漏れていた。

何だ？攻撃、なんだよな？

俺は身構える。だが攻撃を放った主はなかなか姿を現さない。その代わりに、

「……あれ？外しちゃったようですね」

という若干間延びした、女性の声。

そしてゆっくりと開く扉。

聞き覚えのある声、だった。しかしそれは有り得ないとも思った。

しかし目の前の現実は、その『有り得ない』を見事に否定していた。

「お久しぶりですね。泥棒鼠さん？」

改造の女軍人、リリアス・アリド。

有り得ない筈の、再会の時が訪れた。

［82］第2研究棟にて（後書き）

でん

を丁寧にして

おでん

まずでんって何?っていうね。

では次回

［８３］再戦！リリアス・アリド（前書き）

なんかピカピカしてます。

そんな

８３話

です。

改行意味無し。

［８３］再戦！リリアス・アリド

「リリアス・アリド……」

こうして再び生きて会うことになった。それ自体も十分に驚きだが……。

「あら？私の名前覚えてくれてたんですね。ちょっと感激です」

目の前の女性は、かちゃかちゃと人の物とは思えぬ形の左腕を動かしている。

それは異常に長く、いくつもの関節により動きを制御していた。

手と呼ぶべきその部分は、まるで鳥の足の様に細く長く、２本と１本で対の形になり物を掴める様になっていた。

「あ、気付いちゃいました？というか、気付かない方がおかしいですよね。そんな奴は死んだ方がマシです」

クスクスと台詞とは対照的な穏やかな笑みを浮かべる。

「私も気が付いたらこうなっていたんです。今じゃすっかり体の一部って感じですよ」

こいつの左腕は俺との戦いの最中にこいつ自身の能力の暴走で失っている。

そこへどっかの研究者辺りがあんな趣味の悪い代用品を付けたって

ところか。

だが、今はそんな事は二の次だ。その前に確かめる事がある。

「これをやったのはお前か……？」

これ。研究者達が死に倒れギャラスがいなくなったこの状況。

「んー？いえ、違いますよ」

ケロッとした顔で答えられてしまった。

「私には研究者の皆さんを殺してもメリット無いですし、むしろデメリットしかないですし」

つまりこの状況はデメリットなはずなのだが、そんな様子を微塵も感じないのはなぜだろう。

「……そんなことよりー」

ニヤリと不敵な笑顔。

「再会を祝して……一戦交えませんか？」

忘れかけていた、この背中を虫が這い回る様なゾッとする感じ。

「もっと祝い方あるだろうによ……」

だが、以前に感じた物とは何かが違った。

明確に言葉に出来ない、しかし確実に違う何か。

「私達は敵同士なんですよ？私の知る限りこれ以外のやり方はないはずですが？」

カチャカチャと左腕が、まるでそれ自体が生き物かのように動く。

あれのせいか？あの異様な左腕がこの違和感を生み出しているのか？

「おい……」

「？……なんでしょうか？」

俺はその違和感を突き詰めたくて、

「クリス・タイタンって知ってるか？」

その名を口にした。

奴はこの女の為に俺に挑んできた。奴はこの女の為に命を懸けたのだ。

奴が余程変態的に一方通行な想いを持っていない限りは、こっちも反応しない訳が無い。

「……」

と思っていた。

だが、目立った反応は無い。それどころか首を傾げ、

「クリスがどうかしましたか？」

ときた。

「知らないはずはないだろう。あんたの元部下。ここに来てるんだぞ！」

俺はいよいよ極まってきた違和感に、焦りすら覚える。

「そうですか。ではあなたを殺してからゆるりと会うとしましょう」

リリアス・アリド。彼女の左腕は真っ直ぐ俺に向けられる。

「こんな場所にずっといると退屈で仕方ないんです。だがら……」

そして左腕に集まっていく光。

「相手、してくださいよ」

「！？」

その判断が一瞬でも遅れたら、俺は上半身と下半身がグッバイしていただろう。

大尉の腕から放たれた光。それは真っ直ぐに俺の体を貫くコースだった。

瞬間的に横に避けていなければ……ぞっとするね。

「容赦は無し……か」

まぁそりゃそうか。俺と大尉の間には戦う理由こそあっても……って感じだしな。

「やっぱり真っ直ぐだと避けられちゃいますねー」

大尉はならば、と左腕を大きく横に振りかぶる。

「なにを……っ！」

光をまとった大尉の腕が横一閃に薙払わる。

俺は地を蹴って空中へ。

「なんだよありゃぁ……」

下を見れば、大尉の放った光の『跡』が、大きく長く刻まれていた。

「上かー。その手がありましたね」

左腕はいまだに光をまとっている。

あの左腕は単なる義手としての役割以上のものを持っていると確信した。

以前より明らかに光の威力と速さは増し、その上さっきの薙払いの様に汎用性も増している。

でもってあの好戦的な性格で存分に能力が発揮されている。……ま

いったねこりゃ。

「まだまだいきますよ！」

大尉の言葉は即ち攻撃の合図。

放たれる光は縦横無尽に俺を狙ってくる。

時に突き刺さる矢の如く。時に切り裂く刃の如く。

どちらも光の、という特性が加わったお陰で驚く程の柔軟性を発揮し襲い掛かってくる。

そりゃそうだ。光に決まった形はないもんな。

「ぐぅっ！？」

色々考えていたのがいけなかったのか。俺の肩を光がかすめていく。

かすっただけだというのに、傷口は熱した鉄で刺されたかのような激痛が走る。

「まともに食らったらやばいな……」

不定形の光の攻撃。威力は尋常でなし。

……電報みたいになってしまった。

ん？ちょい待て。光に決まった形はない……？

その時、俺のやれば出来るレパートリーの一つが俺っちにアピールを開始。

「そうだったな……」

俺は光を避け、着地しながらその閃きににやり。

「ブツブツ言ってると死んじゃいますよ?」

大尉は俺の着地を狙ったのか、溜めの一撃が放たれる。

「さよならですね……」

大尉の無感情な別れの言葉。

「そいつはどうかな……?」

俺は両手を前へ。そして展開する。

「光はそっちの専売特許じゃねぇってな!」

光の盾を。

同じ性質の壁にぶち当たった刃はそのまま行き場を無くし四方八方へ飛んでいく。

「……あなたも光が使えるんですね?」

無傷でその場に立つ俺を見る、大尉の鋭い視線。

「なんでもかんでもやれば出来るもんでね。とにかくあんたの攻撃はもう効かないぜ」

俺はゆっくりと盾を消滅させる。

「その様ですね。この攻撃は、もう通用しない様ですね」

「この……？」

俺が問うよりも早く、大尉の体は空を斬って俺の隣へ。

「こういう攻撃もありますよ？」

大尉の左腕は光をまとい、しなるように回転しその遠心力に勢いを得て、

超威力の鞭と化して俺を襲う。

「……っ！」

俺は光の盾でガードするものの、弾き切れずに体ごと吹っ飛ばされる。

「……弓矢もそう。銃もそう。遠くを狙える武器は、しかし対象が遠ければ遠いほど威力が落ちてしまう。常識ですね」

大尉は腕をぶるんと振るいながら淡々と言葉を繋ぐ。

「それは私の光も同様。遠くを狙えば威力も精度も落ちてしまう。でも零の距離からなら……」

振るった腕に再び光が宿る。

「１％も威力を失わずに攻撃が出来るのです」

つまりこれがほぼ１００％の力って訳だ。

俺は未だビリビリと痺れが残る腕をもう片方の腕で抑える。

「しかしまだピンピンしている敵に手の内明かしていいのかい？」

「いい。これはあなたに対する挑戦だから」

「挑戦？」

大尉はにこりと笑みを浮かべる。

「私は自分の攻撃のメカニズムを明かしました。その上であなたがどんな策を弄するのか……。楽しみですね」

笑顔のまま吐かれる台詞に、俺は寒気に似た感じを覚える。

こいつ、楽しんでやがる。

あえて自分を不利な状況に追い込みその緊張感を楽しむってか……。

「趣味悪いな畜生が」

「さぁ、思考の時間はそんなに与えられませんからね。そろそろ第二波が飛んでいきますよ！」

大尉は言うが早いか地を蹴り迫ってくる。

「くっそ！」

俺はその『鞭』が振られる瞬間にテレポートで大尉の背後に移動する。

だが咄嗟のテレポートでは俺自身も位置の把握に一瞬の時間を要する。

「後ろですか？」

そして大尉にとってはその一瞬さえあれば全てが十分であった。

大尉はギャラスのレーダー機能も有している。例え視界の外であっても物体の位置を正確に捉えられる。

更に振りぬかれた鞭が、俺めがけて迫る。

「ぐっ！うおぉ！」

俺は光の盾を斜めに構える。

光を宿した鞭は盾の上を滑る。

咄嗟の手段ながら鞭を回避出来た。となれば次は、

「え……っ！？」

鞭を振り抜いた事で大尉の正面ががら空きになる。

「でぇいっ！」

俺は大尉の腹部に衝撃波を乗せた掌底の一撃を叩き込む。

「ごぁ……っ！」

くの字に曲がった大尉の体は大きく後ろに吹き飛ぶ。

床をゴロゴロと転がり、やがて勢いを無くし力なく止まる。

左腕からは光も消える。

「はぁっはぁっ……。どうだ、俺の策は？」

正直今の一連の流れを策と呼んでいいのかは疑問の余地があるが。

「ぅ……うぅ……っ」

大尉は呻く様な声を出しながらゆっくりと立ち上がる。

「効きましたよぉ……。えぇ、なかなかでしたよぉ」

大尉は腹部を抑えながら息も荒く言う。

だが、左腕には新たな光が宿ろうとしていた。

「でもまだ終わりじゃありませんよぉ……！」

来る。俺はそう思い構える。

しかし、次の瞬間俺に、俺達に襲い掛かってきたのは、意外な物だった。

「え……っ？」

天井が落ちてきた。

［８３］再戦！リリアス・アリド（後書き）

ピカピカしてました。

では次回。

［８４］真実の理由（前書き）

「あー、ケーキをホールで食べたい」

電車で、隣に座った若い女性の唐突な一言。いきなり何を、と思っていたら、

「あー、分かるかも」

連れと思われる女性が間髪入れずに同調。分かるんかい。

脈絡がなんぼのもんじゃい。

８４話デース。

［84］真実の理由

第2実験棟。シンゴ達のいた部屋の崩落。

その様子の一部始終を目撃していた者が一人。

「キリハラを倒すチャンス＋ギャラスのいない部屋＝潰すに躊躇う理由など無いネ」

不気味に笑みを浮かべるルター・サイエンは、その『スイッチ』から手を離す。彼の目前には部屋の様子が映っていたであろうモニターが一つ。

「さて、念には念を入れて毒ガスも放り込んでおくかネ」

ルターはまた別のスイッチを押す。

「（わずかな隙間＋限られた空気）×毒ガス＝生存は絶望的、ダネ」

ルターはうんうんと満足気に頷くと、別のモニターのチェックを始める。

「……うん？これは……」

ルターはとある通路の一角を映した画面で何かを見つける。

「ほう……」

ルターは画面に映るそれを確認しながら、机の端に置かれた通信機

を手にする。

「私だ。今すぐ私が言う様にしてくれ……少しばかり面白い事が出来そうデネ」

ルターはそう言って楽しそうに笑うのであった。

そのルターが確認したモニターに映っていた『それ』。通路を慎重に進むクリスがいた。

クリスは拳銃を構えながら進んでいた。

「さすがに警戒は厳重だな……」

クリスはそこかしこにいる兵士達を物陰などでやり過ごしていた。

「……なんとしても核心に触れなくちゃな……くっ！」

クリスは背中の傷から発せられる痛みに顔を歪める。

ジョンの制止を振り切っての強行軍。

シンゴが示してくれたかすかな『可能性』。その真意を知りたい。

だからこそクリスは基地の中心へと向かっていた。

「……ここに来て警戒が薄くなった、か？」

クリスは辺りの様子を見ながら呟く。

警戒は確かに敷かれている。しかしどう考えても必要最低限といった感じだった。

「何かあったのか？」

クリスとて軍人。これを単なるラッキーで切り抜ける程その視野は狭くはなかった。

ここは国家が管理する施設。その中心ともなれば外には持ち出せない秘密がいくらでもあるだろう。

それを守る警備が手薄。おかしい。クリスはより一層慎重になる。

「焦るなよ……」

しかし基地の中心、ルター・サイエンの部屋は目と鼻の先の距離。

クリスは緊張していた。

「何があったんだ？……まさかっ！」

クリスには一つ思い当たる事、人物がいた。

シンゴである。あの男が一足先に暴れているのではないだろうか？

だとしたら警戒が薄いのも納得がいく。

「とにかく後退する道無し。俺には進むしか無いってな」

クリスは力強く歩を進める。

そして辿り着いた中央監視室（仮）。

「……仮ってなんだよ」

そんな疑問を抱いたりしたクリスだったが、今はそれどころではない。

扉に背をつけ耳を寄せる。

しかし、何か機械が動く細かい音が時折聞こえる程度。この時点で人の気配はない。

「……いくか」

クリスはゆっくりと扉を開く。

開いた隙間から中を覗く。

やけに暗い室内には、監視室の名の通り、研究所内のあらゆる場所を映したモニターがそこかしこにあった。

それを制御する者が座るのであろう机と椅子も。

そしてそこに、座っている男がいた。

椅子に座り後頭部しか見えないが、ぼさぼさの白髪頭は見間違えようはなかった。

「ルター・サイエン……」

「フルネームで言われると何だかこそばゆいものダネ。クリス・タイタン」

ルターはクリスの方を向く事無く応える。

「てめえには聞きたい事が山程ある」

クリスは威嚇するように拳銃を音をたてて構える。

「そうかネ。だが私は君に聞きたい事など一つもナイ。ギブ&テイクは不成立ダネ」

パァンッ！

銃声が轟き、ルターの足元に弾痕が生まれる。

「これは取引じゃねぇ。一方的な脅しだ」

クリスは冷徹な目でルターを見据え、再び銃口をルターに向ける。

「……ヤレヤレ。まだ死にたくはないからネ。何が知りたい？」

ルターは危機感の無い声で聞いてくる。

「俺に隠してる事を全部言え」

クリスの間髪入れない言葉。そこで数瞬の間が生まれる。

「……キリハラ×君、の化学反応はやはり失敗だったようだネ」

先程よりも冷たさを含んだ声。

「確かにワタシは君に真実＋嘘、そんなどっちつかずの話をしたヨ」

「……どこまでが真実だ。どこからが嘘だ……！」

クリスはグッと銃を握る手に力を込める。

「ワタシは戦いの感覚というものには疎いつもりだが……君から発せられる殺気はビシビシと感じるネ」

ルターはそこで一旦言葉を切ると、一呼吸おいて言葉を繋げる。

「君が知りたいのは大方あの被検体の事であろうネ」

「被検体……？」

「リリアス・アリドだヨ」

その名前を耳にした時、クリスの顔に驚きと緊張が走る。

「今の君には過程より結果だけを伝えた方が効率がよさそうダ。だから言おう。リリアス・アリドはあの時点ではまだ生きていたのだヨ」

「な……っ！？」

「生命自体がかなり不安定な状態だったがネ。しかしあの女軍人はこの研究所で生き長らえていタ」

クリスが絶句する様子など見るまでもないのかは分からないが、ルターは淡々と続ける。

「なぜ君に生存の事実を伝えなかったカ。あそこでキリハラに殺された事にしておけば君は復讐心から必ずや行動を起こすとかんがえたのだヨ。……生きてる事を伝えて内部を荒らされるのが嫌でもあったしネ」

「ちょっと待て！ドートボンは地震で壊滅したんだろう？なんで大尉だけ生き残ってんだよ？」

クリスの絞りだすような声での疑問。しかしルターの淡々とした口調は変わらない。

「ああ、あそこで地震など起きてはいないヨ」

「……は」

「あの基地は用済みになったからネ。リリアス・アリドを回収させた上で爆弾で爆破したのだヨ」

「……おい！じゃあ残りの連中は……！？」

「あらかじめ特務に掃除させたのだよ。君は基地の外だったから命

を拾ったがネ」

その瞬間クリスに怒りを覚えさせたのは、ルターの言葉か。それとも事実を事もなげに告げたルターそのものか。

恐らくは、そのどちらもであろう。

「この野郎……っ！」

確実にその一発を当てる為、クリスは拳銃を両手で構える。

「……さて、知りたい事は以上かネ？」

「まだだ！大尉は……今どこにいる！？」

ルターの淡々とした口調。クリスの叫ぶような口調。およそ同じ話題による会話には聞こえなかった。

「キミは話をよく聞くべきだネ。リリアス・アリドはあの時点では確かに生きていたとワタシは言ったヨ」

その言葉の意味。そんなものは、少し考えれば分かった。

「先程ある部屋で侵入者と一人の軍人の激しい戦闘があってネ。侵入者か勝つと厄介だからネ、部屋ごとつぶしたのだヨ。念には念を入れて毒ガスも撒いたネ」

「それって……」

「そう。キリハラとリリアス・アリドだヨ。……だから言っただろ

ウ？あの時点では、とネ」

ここで、ルターは椅子をくるりと回し、初めてクリスと向き合う。

「さて、ワタシはキミに大分秘密を喋ってしまったネ。なぜ喋ったと思うかネ？」

ルターは金歯の混じる歯を見せながらニカッと笑う。

「……っ！」

クリスは気付いた。しかし、遅かった。

「キミはまもなく死ぬからだヨ」

ルターは椅子に取り付けられたスイッチを押し込む。

ガコンッ。という音。クリスはその瞬間足場を失い、下へと落下していった。

「くそ……っ！」

クリスは後悔していた。

基地が手薄なのも、そんな中ルターが一人でいたのも、ルターが真実をあっさり語ったのも、全てこの為だったのだ。

分からない罠ではなかったはずだった。

しかし、ルターと対峙した緊張と、語られる真実の衝撃に、全てが

乱された。

「ぐぁ……っ！」

クリスの体が落下した床にしたたかに打ち付ける。

クリスが落とされたのはとても広い、しかしほとんど何も無い殺風景な場所だった。

「さぁ、お楽しみはこれからだヨ」

ルターはクリスの様子をモニタリングしながら嬉々とした表情で機械を操作する。

「恐怖×恐怖＝絶望、の中でもがく様を見せてくれたまエ」

クリスのいる空間。そこにはいくつもの巨大な扉、の様なものが設置されていた。

そしてその扉がルターの操作により重苦しくきしむ音をたてながら開いていく。

「……くそったれがっ！」

クリスは吐き捨てる様に言う。

それはルターに向けてなのか、それとも……。

扉から現れた巨大な『獣』達に対してなのか。

改造生物。いくつもの獰猛な眼がクリスを捉える。

「ここに来てやられてたまるかよ……っ！」

クリスは全身が痛みで悲鳴をあげるのを無視して、ホルダーから拳銃を引き抜く。

いざとなればジョンの所から持ってきた爆弾で、とクリスは軍服の内側に隠してあるその一撃を確認する。

「グォォ……ッ！」

改造生物の群れの一体。ベアウルフが鋭い爪をむき出しにして、クリスに迫る。

「うぁぁぁぁぁぁ！！」

クリスはその巨体に向け引き金を

「さーせるかぁー！」

引く前にベアウルフがなんか吹っ飛んだ。

何が起こったのか分からずポカンなクリス。

しかしそんなクリスを更に置き去りにして、事態は急速に進む。

「オーラオラオラオラァ！！！！」

ドガンバキンと派手な音をたてながら改造生物達が次々に倒れていく。

「……もしかし、なくても」

クリスの脳裏をよぎる可能性。

直後に彼の前に降り立った人物は、その正解を示していた。

「なんぼのもんじゃい！」

それはやはりと言うか、キリハラシンゴの登場であった。

［８４］真実の理由（後書き）

ちなみにショートケーキがいいそうです。

では次回。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5524k/

やれば出来る英雄伝

2011年11月20日19時13分発行